となしたものである。巻の一には、芭蕉の新畫像開（本集巻の二に掲ける畫像）の會の百韻（桃隣・其角・嵐雪・沾德等）、岩城の露沾公亭での歌仙（桃隣・露沾・助叟・沾德等で、沾德の捌いたもの）、元祿六年三月十八日の桃隣亭の人麿講の歌仙（枳風・仙化・其角・桃隣等）、芭蕉の四季の發句百句、諸家の春の發句百二十九句、巻の二には、江戸での夜雨吟歌仙（嵐雪・桃隣・神叔・冬市四吟）、表六句（翁和・東江等）、仙臺杉山氏興行百韻（桃隣・流和・助叟・千調等）、桑折の不碩亭に於ける歌仙（桃隣・不碩・助叟・馬耳等）、餞別吟を贈られた宗匠知友十八人の畫像（調和・立志・山夕・擧白・秀和・不角・無倫・二蜂・露言・素狄・艷士・常陽・盤谷・立嘯・介我・神叔・嵐雪・其角）及び芭蕉・桃隣の畫像、六玉川の歌、諸家の夏の發句百三十八句、巻の三には、芭蕉行脚の際の那須黒羽の黎桃亭に於ける歌仙（芭蕉・翠桃・曾良・翅輪四吟）、那須滯留中の歌仙（桃賀・桃隣・翅輪・助叟等）、介我・桃隣・東潮三吟歌仙、鋤立・桃隣兩吟歌仙、元祿六年仲秋、芭蕉庵の留守中に入つての其角・桃隣・介我三吟歌仙、貞享五年九月十日素堂亭殘菊の宴の芭蕉等諸家の發句、同年の芭蕉庵十三夜の會の素堂等諸家の發句、千里の入道偈、諸家の秋の發句、以上凡て百四十八句、巻の四には、元祿九年十月十二日翁三回忌の百韻（桃隣・嵐雪・素堂・神叔等）、桃隣の芭蕉翁三回追悼獨唫百韻、鳥居氏興行歌仙（湖松・桃明・桃舟・桃隣等）、須ケ川の等躬亭に於ける桃隣・等躬・助叟三ツ物三章、鋤立上京餞別歌仙（桃隣・鋤立・碓水等）、奥州石川丹内氏興行半歌仙（桃隣・等秀・助叟等）、風調・五粒・介我三吟歌仙、諸家の冬の發句七十六句、巻の五には、前文を附した桃隣の奥羽行脚の旅行記（中に、桃隣の發句九十四句、呂丸追悼の連句表六句）を收めてゐる。集の巻首に自序、巻尾には素堂の跋がある。

【價値】一集の主眼をなす五の巻の旅行記は、その前文に、「紀行の文は奥の細道といへる物に憚り、唯名所古跡の順路をしるし侍る」と云つてゐるやうに、案内記風の明細書きになつてゐるので、文としては見るに足りないが、併しまた可なり詳細に記載されてゐるので、「奥の細道」（別項）の研究的資料としては貴重なものである。一集の編次に雜駁な所があるが、師を思ふの念から努めて多きを望んだもので、全體を通じて師恩を感ずる情が能く受取られる。巻の二に載せた諸家の肖像は眞寫式のものと思はれるので、肖像畫として依憑すべきものであり、芭蕉の肖像の如きも信憑すべきものの一である。又巻の一に載せてゐる芭蕉の百句は、桃隣の見た芭蕉の佳句といふ意味に於て注意されるものであるが、これは必ずしも當的を得てゐるとは思はれず、寧ろ桃隣自身の作風及び選句眼の高からざるを思はしめる。現に集中に多い桃隣自身の作句を見ると、理智に墮する傾向があり、句境淺く技倆の乏しきを感ぜしめる。畢竟本集は、資料の豐富さに於て價値があり、人としての桃隣を尊ばしめるものであるが、作家としての桃隣を大ならしめるものではない。なほ本集の其角の肖像の上に、「餞別」と題して記す「饅頭で人を尋よやまざくら」の句について、許六が「誹諧問答」同門評判の中に、桃隣がこれを餞別句と心得たのは間違ひであると云つてゐるが、許六の「韻塞」にこの句を「東叡山吟行」の句とし、其角の「五元集」に「花中尋人」の題になつてゐる所から考へると、許六の云ふ所がやはり事實であるらしい。【志田・萩原】

六浦（むつ）「草木精魂物の謠曲」を見よ。

陸奥話記（むつわき）

戰記物語　一卷　【作者】本書の巻尾に、「今抄二國解之文於一衆口之話一註三之一巻。但少生千里之外、定多二紕謬一、知レ實者正レ之而已」とあるから、本書の作者は官邊の人らしく思はれるけれども、何人かわからない。【名稱】「みちのくばなし」と讀むこともある。又「陸奥物語（むつのかたり）」ともいふ。「奥羽軍記」といふ名稱は、普通には「奥州後三年記」（別項）の別名として用ひられてゐるが、また本書の別名として用ひられてゐることもある。【成立】上に擧げた巻尾の附記から察すると、康平五年九月、前九年の戰役が終つてから、あまり年月を經ない頃に書かれたものと思はれる。【諸本】本書の古い傳本としては、内閣文庫・帝國圖書館をはじめ、古寫本が諸方に傳はつてゐる。整版としては寛文二年版が世に知られてゐるから、これも整版又は活字版として普及してゐる。

【梗概】陸奥の豪族安倍賴時が、六郡に横行して人民を劫掠し、賦貢を齎さず、徭役を勤めないけれども、代々の國司がこれを制することができなかつた。永承中、國司藤原登任が陸奥の兵を率ゐて賴時を討つたけれども、却つて破られた。その事が京師に聞えたので、朝廷では源賴義を陸奥守鎭守府將軍として賴時を討たしめられた。依つて賴義はその子義家・義綱等を具して陸奥に下つた。たま〳〵大赦があつて賴時の罪を赦されたので、賴時は大に喜んで歸服したのであつた。その後、數年間は國境が靜謐であつたが、賴義の任期が滿ちて歸らうとするに際し、賴時はまた衣川に據つて反した。朝廷は賴義の任期が滿ちてゐるので、新に國司を補したが、賴時謀叛の事を聞いて赴任しないので、賴義を重任して賴時征伐の事に從はしめられた。天喜五年九月、賴義は賴時を攻めて遂にこれを殺した。賴時の子貞任は父に代つて軍を督し、勢ひが相變らず盛んである。賴義の軍は糧食が乏しく、人馬共に疲れて苦しんだ。十一月、賴義は貞任を川崎柵に討つたが、貞任は精兵を率ゐて出で、鳥海に戰ひ、賴義の軍を破つた。賴義は清原武則の來援を請ひ、兵を合せて小松柵に貞任の弟宗任の軍を破つた。次いで貞任が來り襲うたので、賴義はそれを迎へ討つて破り、衣川柵を燒き、鳥海柵を拔いた。貞任等は退いて厨川柵に據つたが、賴義は火を放つてそれを攻めたので、貞任は戰死し、宗任・家任等は降り、餘黨も亦悉く平いだ。

【解說】本書は、前九年の役の顚末を記したもので、記述の體裁は、大體「將門記」（別項）と同じく、和臭を帶びた漢文を以て記してある。叙事は素より合戰の次第を叙するのが主體となつてゐるが、事件が割合に變化に富み、且つその表現にも故事出典を引擧するとか、對照法や比喩法を用ひるとかいふやうな戰記物語（別項）に特有な修辭過程を運用してあるので、質實簡素な裡に一種の生彩があり、說話の筋もよく纏まつてゐる。これは「將門記」と共に、漢文戰記の先行作品であり、戰記物語の先驅として、相當な歷史的の價値を具へてゐる。併し「將門記」に比すれば、成立が少し後れてゐるし、記事も幾分單調なるを免れず、その價値も、同書よりは、やゝ低下してゐる嫌ひがある。

【影響】本書は、戰記物語の先驅として、「將門記」と共に、後代文學に少からざる影響を及ぼしてゐるが、漢文で書かれてゐて、叙寫も

桃隣・介我三吟歌仙、貞享五年九月十日素堂亭殘菊の宴の芭蕉等諸家の發句、同年の芭蕉庵十三夜の會の素堂等諸家の發句、千里の入道偈、諸家の秋の發句、以上凡て百四十八句、卷の四には、元祿九年十月十二日翁三回忌の百韻(桃隣・嵐雪・素堂・神叔等)、桃隣の芭蕉翁三回追悼獨唫百韻、鳥居氏興行歌仙(湖松・桃明・桃舟・桃隣等)、須ケ川の等躬亭に於ける桃隣・等躬・助叟三ツ物三章、鋤立上京餞別歌仙(桃隣・鋤立・硯水等)、奥州石川丹內氏興行半歌仙(桃隣・等秀・助叟等)、風調・五粒・介我三吟歌仙、諸家の冬の發句七十六句、卷の五には、前文を附した桃隣の奥羽行脚の旅行記(中に、桃隣の發句九十四句、呂丸追悼の連句表六句)を收めてゐる。

を見ると、理智に墮する傾向があり、句境淺く技倆の乏しきを感ぜしめる。畢竟本集は、資料の豐富さに於て價値があり、人としての桃隣を尊ばしめるものであるが、作家としての桃隣を大ならしめるものではない。なほ本集の其角の肖像の上に、「餞別」と題して記す「饅頭で人を尋よやまざくら」の句について、許六が「誹諧問答」同門評判の中に、桃隣がこれを餞別句と心得たのは間違ひであると云つてゐるが、許六の「韻塞」にこの句を「東叡山吟行」の句とし、其角の「五元集」に「花中尋ㇾ人」の題になつてゐる所から考へると、許六の云ふ所がやはり事實であるらしい。〔志田・萩原〕

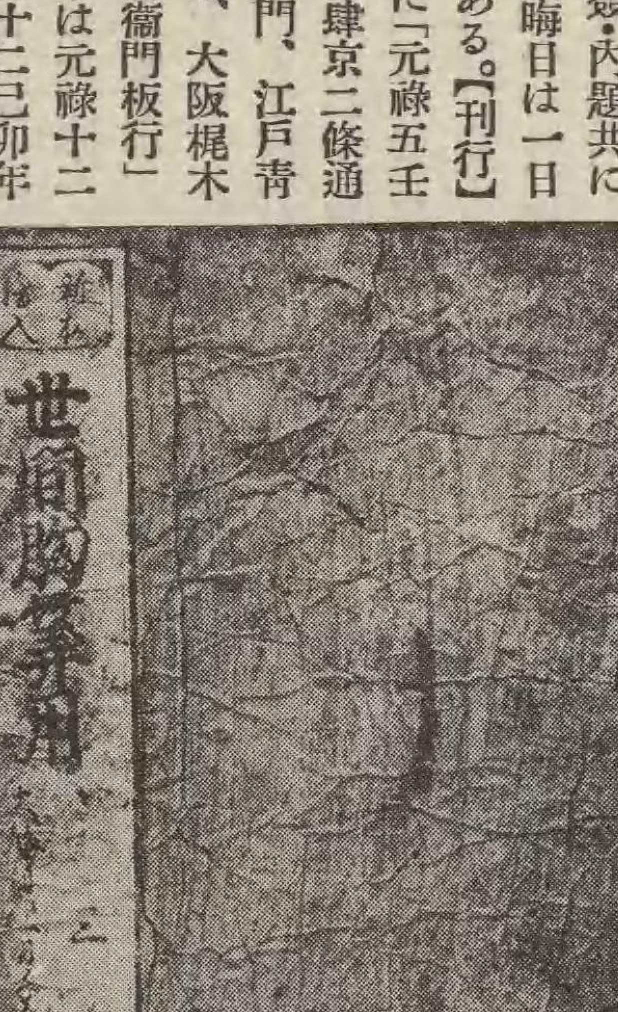
六浦 むつら 「草木精魂物の謠曲」を見よ。

て人民を劫掠し、賦貢を齎さず、徭役を勤めないけれども、代々の國司がこれを制することができなかつた。永承中、國司藤原登任が陸奥の兵を率ゐて賴時を討つたけれども、却つて破られた。その事が京師に聞えたので、朝廷では源賴義を陸奥守鎭守府將軍として賴時を討たしめられた。依つて賴義はその子義家・義綱等を具して陸奥に下つた。たまたま大赦があつて賴時の罪を赦されたので、賴時は大に喜んで歸服したのであつた。その後、數年間は國境が靜謐であつたが、賴義の任期が滿ちて歸らうとするに際し、賴時はまた衣川に據つて反した。朝廷は賴義の任期が滿ちてゐるので、新に國司を補したが、賴時謀叛の

つその表現にも故事出典を引擧するとか、對照法や比喩法を用ひるとかいふやうな戰記物語(別項)に特有な修辭過程を運用してあるので、質實簡素な裡に一種の生彩があり、說話の筋もよく纏まつてゐる。これは「將門記」と共に、漢文戰記の先行作品であり、戰記物語の先驅として、相當な歷史的の價値を具へてゐる。併し「將門記」に比すれば、成立が少し後れてゐるし、記事も幾分單調なるを免れず、その價値も、同書よりは、やゝ低下してゐる嫌ひがある。【影響】本書は、戰記物語の先驅として、「將門記」と共に、後代文學に少からざる影響を及ぼしてゐるが、漢文で書かれてゐて、叙寫も

簡單素朴であり、近古時代に出た戰記物語のやうに、廣く普及しなかつた。從つて、その影響の如きも餘り著しくなく、「義家一代記」(黑本)「前九年奥州軍記」(黃表紙)「賴義義家二代記」「傾城奥州前九年後三年手管」(以上合卷)「前九年記」(軍記實錄)「奥州安達原」(淨瑠璃)等が散見するくらゐに過ぎない。〔高木(武)〕

胸算用 むねざんよう 浮世草子 五册 【作者】西鶴、序に署名があり、松壽の印もある。【名稱】題簽には、「繪入世間胸算用」とあり、題簽・內題共に書名の下に、「大晦日は一日千金」と書してある。【刊行】元祿五年、奥附に「元祿五壬申年初陽吉日書肆京二條通堺町上村平左衞門、江戸青物町萬屋清兵衞、大阪梶木町伊丹屋太郎右衞門板行」とある。再板本は元祿十二年、奥附に「元祿十二己卯年八月吉旦 大阪本町一丁目萬屋彥太郎板」とある。【諸本】初板、再板本の外に、西鶴全集(舊新帝國文庫)・西鶴文集(有朋堂文庫)・西鶴名作集(日本名著全集)・日本古典集等所收【解說】各卷四話、都合二十話より成る。何れも大晦日を背景とした町人の經濟生活に關する說話であるが、中には一章の中心點の明瞭でないものもある。當時は大節季勘定の慣例の世であつたから、町人は大晦日の一日で資產の伸縮も起れば、一家の浮沈も起つた。かくも大晦日は、町人に取つて重大な一日であつたから、彼がこの日を「一日千金」と稱し、この一日を背景にして、町人の經濟生活の樣々を描かうとしたのは、實に意義あり、興味多い着眼であつた。本書が彼の町人物中の白眉であり、彼の全作中の傑作の一に數へられるのも偶然でない。說話は色々であるが、貧窮の哀れと、それから起る惡に關する話が最も多い。卷一の第二話「長刀はむかしの鞘」は、小質屋の店頭に見ゆる貧の樣々を書き、終りに貧故に武士浪人の妻の脅嚇を働くことを書き、卷三の第三話「小判は寢姿の夢」は、貧故に一人の兒を夫に託して、妻が乳母奉公に出る憐むべき樣を書き、卷四の第二話「奈良の庭竈」は、數人の浪人が貧故に協同して大晦日の夜に追剝をして失敗したことを書いてゐるの類である。なほかゝる說話は卷三の第四話「神さへ御目違ひ」、卷五の第一話「つまりての夜市」、同卷の第三話「平太郎殿」等にも見られる。これ等と反對なる富者の樣を誇張を交へて書いたものに、卷四の第一話「闇の夜のわる口」があり、都市の繁榮を書いたものに、卷五の第四話「長久の江戸店」がある。當時の取引の慣習を見せたものに卷一の第一話「問屋の寛濶女」の手形のことがあり、卷二の第一話「銀一匁の講中」の金貸が借主の財產調べのことがあり、卷四の第二話「奈良の庭竈」の奈良の取引の習慣がある。なほ掛金の取り方(卷二の第四話)、その逃げ道(卷二の第二話)などに關する話もある。とりどりなる說話の中に、町人生活の有りの儘の相を見せつつ、突込んで人間性を描いてゐる所に、本作の價値がある。町人物中の優秀なるものとして注意すべきものである。【參考】校註世間胸算用 潁原退藏〇西鶴町人物研究 片岡良一(日本文學講座)〇西鶴名作集解題 山口剛(日本名著全集)〔藤村〕



胸算用表紙

同上目次

宗清 むねきよ 所作事 淨瑠璃物 【別名】「雪の常磐」「伏見常磐」「妹が宿」とも。【本名題】操の常磐こ夢にしら雪恩愛瞔關守(おんあいひとめのせきもり)【別名題】妹舍瞔關守(いもがやどひとめのせきもり)【初演】文政十一年十一月九日初日、江戸市村座「貢玉雪源氏鼎」第一番目三立目〔作詞〕奈河本助〔曲節〕常磐津節〔太夫〕三代常磐津小文字太夫(四代文字太夫)〔作曲〕五代岸澤式佐〔振附〕四代西川扇藏・松本五郎市【傳來】曲・振ともに傳存。但し振はその後改訂、添削を經たものである。【讀本】常磐津節正本。日本歌謠集成卷十・舞踊劇集(日本戯曲全集)所收。【題材】常磐御前親子が伏見の木幡の關で宗清に救はれた事は、早く山本土佐掾の古淨瑠璃「源氏烏帽子折」に脚色され、次いで竹本義太夫の淨瑠璃「源氏烏帽子折」(別項)に改作された。この義太夫の淨瑠璃の第二段目(常磐御前道行より宗清館の段)を飜案したのが、一中節の「妹が宿」であり、本曲でもある。更に富本節の「雪解松操鑑」(ゆきげのまつみさをのかゞみ)(弘化二年正月、中村座。作者藤本吉兵衞、後の三代瀨川如皐)や「新曲妹が宿」(明治七年四月、中村座。作者同上)ともなつたのである。【内容】源氏の殘黨詮議のため、伏見木幡の里には新關が設けられ、彌平兵衞宗清(三代坂東三津五郎)が守つてゐる。常磐御前(二代岩井粂三郎)は懷に牛若、兩手に今若(荻野藤十郎)・乙若(岩井粲子松)の三兒を伴ひ、雪の夜道を關所にかゝると、これを宗清が捕へたが、制札の「松を手折つて松を助く」の意を諭す。常磐は三兒の命にかへられず、遂に清盛の館へ宗清に伴はれる。本曲は實は鞍馬山に劍道修業の牛若丸(岩井粂三郎)が一睡の夢で、覺めて後、高野聖覺淨(坂東三津五郎)・惡源太義平(坂東養助、後の四代三津五郎)と三人のだんまりになる趣向であつた。曲は化政度の代表的な名作であるが、近代的な所が今に迎へられる理由である。【備考】二度目の安政三年十一月市村座でも初演の趣向を踏襲し、居所變りで長唄の「鞍馬山」になつたので、後に今日の如く獨立した。【參考】「雪の常磐」の沿革 秋葉芳美(人間と舞踊一ノ一二)〇花江都歌舞妓年代記續編(石塚豐芥子(新群書類從第四)〔秋葉〕

宗貞 むねさだ 「遍昭」を見よ。

宗武（むねたけ）　國學者【姓名】田安氏。本姓德川。幼名小次郎【諡號】悠然【生歿】正德五年十二月二十七日江戸赤坂紀州侯の藩邸に生れ、明和八年（二四三一）六月四日田安邸に歿す。享年五十七【墓所】東叡山凌雲院【閱歷】八代將軍德川吉宗の次男に生れ、享保十四年（十五歲）九月元服して宗武と名乘り、從三位に敍せられ、左近衞權中將兼右衞門督に任ぜられた。享保十六年正月、邸を田安門内に賜はり、徙り住む。享保十九年（二十歲）六月近衞准后家久公の女を娶る。延享二年（三十一歲）參議に轉じ、翌三年九月、吉宗辭職し、世子家重立つに及び、攝津・和泉・播磨・甲斐・武藏・下總等四十萬石を采邑として與へられた。明和五年（五十四歲）五月權中納言に遷り、同八年に歿した。【著作】國歌八論餘言一卷○歌體約言一卷○服飾管見十四卷（各別項）○同別錄一卷○玉函叢說四卷・附錄三卷（別項）○樂曲考十卷・同附錄四十卷○服飾漫語一卷○冠服類聚愚抄一卷○玉函祕抄一卷○采雅三十卷○古事記頭書○天降言一卷（別項）○草結。【學風】早くから國學に志し、初め荷田在滿に學んだ。元文三年十一月、櫻町天皇の大嘗會に際し、在滿が幕命に依つて著はした「大嘗會具釋」「大嘗會便蒙」に九重の祕事を記し、殊に「大嘗會便蒙」を刊行した理由によつて閉門を命ぜられた時など、これを庇護してゐる。然るに寬保二年の在滿の「國歌八論」（別項）につき異見を樹て、「國歌八論餘言」（別項）を著はしてこれを反駁し、在滿また自說を守つて讓らず、遂に致仕した。その後延享三年眞淵を登庸し、古學及び和歌に就き意見を徵したところ、殊に歌論に於て深く契合する所があつて重くこれを遇し、寶曆十年致仕するに及んで更にその養嗣定雄を登庸してゐる。詠歌は眞淵の勸めによつて「萬葉集」を宗とし、「天降言」（別項）に見らるゝ如き勁健・淸新な秀歌を遺した。又有職故實等にも深い嗜みを有し、眞淵の「祝詞解」「古器考」の如きは、宗武の命によつて撰進したもので、自ら「服飾管見」「樂曲考」等を著はし、その起原・變遷・樣式に亙つて證を古文獻に徵し、煩冗を避け、要核を得た論考をしてゐる。又催馬樂・神樂歌・朗詠を好み、天下の樂書を集め、中古斷絶の舞樂を行ひ、當時の式樂たる能樂の詞章を訂正し、自らも新作を試みるなど、趣味は廣汎にわたつてゐる。〔以上西尾〕

田安宗武（德川達孝伯藏）

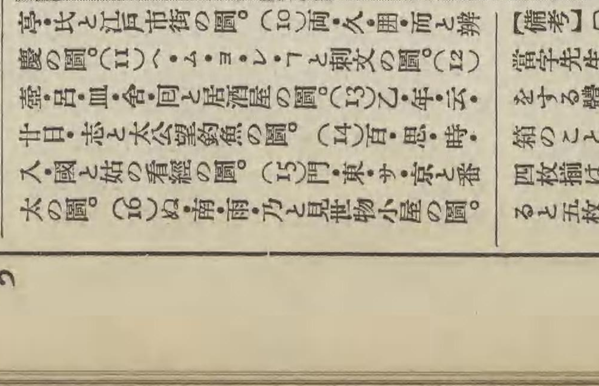
【國語學上の業績】語學に關する著作は少いが、宗武は假名遣に關して獨自の見を示してゐる。卽ち古來の假名遣は、實際發音上の區別によるものでないから拘泥するに足らぬ。假名は音のまゝに書き、文字のまゝに讀むのが本義であると說いて、假名遣は發音によるのを原則とすべき事を主張してゐる（玉函叢說による）。その論證には誤謬も少くないが、その主張には道理があるのであつて、後に上田秋成は、この宗武の說に基づいて、假名遣はただ例に過ぎないもので、新法或は古法と拘泥すべきでないことを主張するに至つた。宗武はまた草結を作つて（この書を狛諸成の著とするのは誤りである）、女房詞の考證をなしてゐるが、これもこの方面の研究としては珍しいものである。〔以上橋本〕

【歌風】眞淵の古學思想の影響は、最も歌の上に見ることが出來る。眞淵は「萬葉集」を尊重したが、己れは遂に萬葉調の歌を詠むことが出來なかつた。宗武はよく萬葉調を理解し、眞淵の到り得なかつた境に到つてゐる。藝術的氣稟の上で豐かな天分に惠まれたものと言はねばならない。併しその宗武も初期の間は新古今風の纖麗な歌をつくつてゐたやうである。形式的ではあるが直線的で、題詠風ではあるが一種の力を持つてゐる。然るに眞淵に接近し、その感化を受くるに及び、歌は漸次「萬葉」の蒼古な調子を持つやうになつた。宗武の思想は神道に通ふ所があつて、その取材に淸白なものを選んだ。彼の歌が豐かにおほらかであると共に、氣品に犯すべからざるものを示してゐるのは、そのためである。「天降言」（別項）には題詠の歌が少くないが、同時にその題詠の歌が、所謂題詠臭を少しも帶びてゐない。彼の歌が、題詠の典型から脱して獨自の風格を有するのは、「萬葉」をよく味到して、何處までも實情實感に重きをおいたがためである。智的な素材にも新しき生命を吹き入れ、藝術的に優れた味ひのあるものとなした事は、彼の秀拔と共に彼の重厚な性格とその信念とを思ふべきであらう。〔以上窪田〕

【參考】悠然公略傳（續日本歌學全書第一）○譚海卷三 津村淙菴 ○歌話 正岡子規（子規全集第五）○田安宗武の歌と僧良寬の歌 伊藤左千夫（左千夫歌論集二）○天降言抄 岡麓（アララギ一九ノ三）○國學者傳記集成 大川茂雄 ○國學全史 野村八良

宗忠（むねただ）「作文大體」を見よ。

宗直（むねなほ）　有職家【姓名】高橋氏。本姓紀氏【諡】文敬先生【號】圖南【生歿】元祿十四年生れ、天明五年（二四四五）正月二十四日歿す。享年八十五。【墓所】京都東山眞如堂【閱歷】父宗恒は野宮定基の門人で、有職の學に精しきを以て著はれたが、宗直よくその敎を承け、又漢學を伊藤東涯に學んだ。諸家の記錄に通達して抄物數百卷に及び、同好の士のその門に入つて學ぶもの頗る多かつた。又家職を襲ぎ、御厨子所預として庖丁に巧みであつた。寶曆十三年後櫻町天皇卽位の日、白馬の瑞祥に關する勘文を奉り、その賞として從四位下を授けられた。又和歌を好んで小澤蘆菴・僧澄月等と交つたが、諸士推稱して老先生と言つたとのことである。【著書】大嘗會神饌調度之圖一卷（大嘗會に使用せられる調度・器具二十餘箇を着色して圖し、略說を加へたもの。卷尾に「御厨子所預從五位上行采女正紀朝臣宗直、元文四年五月書之、禁他見者也」とある）○寶石類書百卷（有職故實に關した記事を、諸家の記錄から、



宗于（むねゆき）　歌人（三十六歌仙の一）　【姓】源　【殁年】天慶二年　【閲歴】寛平六年従四位下に敍して臣下に下り、諸國の權守を經て承平三年右京大夫に任じ、天慶二年正四位下に叙した。　【作品】勅撰集に入る歌は、古今六、後撰三、その他凡そ六首。○宗于朝臣集一巻、群書類從二四八所載本は歌數三十九首、勅撰集にて他人の歌又は讀人不知であるものが凡そ二十五首、或は宗于の歌の次にある他人の歌の如きものもある。歌仙歌集本は二十八首で十一首少いが既下であらう。貫之との贈答歌六首（貫之集四首）、女が陸奥に下る時の歌等があり、その歌は概念的な所と詠歎的な所とが殊に目立つてゐる。

【參考】歌仙傳○百人一首一夕話　（西下）

无筆節用似字盡（にひたひつせつようじじづくし）　黃表紙　三冊　十五丁十八圖　【作者】曲亭馬琴　【畫工】北尾重政畫風　【名稱】文盲の節用集の意を二小野篁歌字盡（おのゝたかむらのうたもじづくし）に擬してある。　【刊行】寛政九年。天保十年に繪を歌川國芳にかへて「龜に相その案文（あんもん）當字（あてじ）捌（さばき）」（後出）と共に鶴屋より再版。

【梗概】（一）參議小野篁の肖像。上部に傳記を二无筆節用似字盡の由來記の體裁におどけて記し、又无筆節用書法傳授之巻として、京の無筆と江戸の無筆の間に往復された手紙の話がある。（二）樣（やう）へ・か（か）し（し）く（く）と・文（ふみ）・候（さふらふ）等の文字と、「歳は痘瘡のつばみはかしなり文は實（みの）候（る）は鳥のあしの歌、ゐセ・吉三の圖。（三）只・苗・月・申・田口と料理の圖。（四）人・早・内・丁・叶と花魁道中の圖。（五）丁・内・十・中・二と土ほじりの圖。（六）長・品・田・目・目と縫箔屋の圖。（七）下・山・口・山下と河岸夜鷹の圖。（八）右・辺・込・双と舟饅頭の圖。（九）谷・寶・屋の圖。（十）石・辺・込・双と舟饅頭の圖。（九）谷・寶・

亭・氏と江戸市街の圖。（十一）向・久・開・而と辨慶の圖。（十二）へ・ム・ヨ・レ・フと剃刀の圖。（十三）乙・年・云・霊・呂・血・各・同と居酒屋の圖。（十四）百・思・時・廿日・志と太公望釣魚の圖。（十五）門・東・ヶ・京と番入・國と姑の看經の圖。（十六）ぬ・南・雨・乃と見世物小屋の圖。

【備考】（一）（鼈相案文當字捌）（寛政十年、曲亭馬琴）は類似の作品である。

无筆節用似字盡（にひたひつせつようじじづくし）　黃表紙　三冊　十五丁十八圖　【作者】曲亭馬琴　【畫工】北尾重政畫風　【名稱】文盲の節用集の意を二小野篁歌字盡（おのゝたかむらのうたもじづくし）に擬してある。　【刊行】寛政九年。天保十年に繪を歌川國芳にかへて「龜に相その案文（あんもん）當字（あてじ）捌（さばき）」（後出）と共に鶴屋より再版。

【梗概】（一）參議小野篁の肖像。上部に傳記を二无筆節用似字盡の由來記の體裁におどけて記し、又无筆節用書法傳授之巻として、京の無筆と江戸の無筆の間に往復された手紙の話がある。（二）樣（やう）へ・か（か）し（し）く（く）と・文（ふみ）・候（さふらふ）等の文字と、「歳は痘瘡のつばみはかしなり文は實（みの）候（る）は鳥のあしの歌、ゐセ・吉三の圖。（三）只・苗・月・申・田口と料理の圖。（四）人・早・内・丁・叶と花魁道中の圖。（五）丁・内・十・中・二と土ほじりの圖。（六）長・品・田・目・目と縫箔屋の圖。（七）下・山・口・山下と河岸夜鷹の圖。（八）右・辺・込・双と舟饅頭の圖。（九）谷・寶・

亭・氏と江戸市街の圖。（十一）向・久・開・而と辨慶の圖。（十二）へ・ム・ヨ・レ・フと剃刀の圖。（十三）乙・年・云・霊・呂・血・各・同と居酒屋の圖。（十四）百・思・時・廿日・志と太公望釣魚の圖。（十五）門・東・ヶ・京と番入・國と姑の看經の圖。（十六）ぬ・南・雨・乃と見世物小屋の圖。

【備考】（一）（鼈相案文當字捌）（寛政十年、曲亭馬琴）は類似の作品である。

无筆節用似字盡（にひたひつせつようじじづくし）　黃表紙　三冊　十五丁十八圖　【作者】曲亭馬琴　【畫工】北尾重政畫風　【名稱】文盲の節用集の意を二小野篁歌字盡（おのゝたかむらのうたもじづくし）に擬してある。　【刊行】寛政九年。天保十年に繪を歌川國芳にかへて「龜に相その案文（あんもん）當字（あてじ）捌（さばき）」（後出）と共に鶴屋より再版。

【梗概】（一）參議小野篁の肖像。上部に傳記を二无筆節用似字盡の由來記の體裁におどけて記し、又无筆節用書法傳授之巻として、京の無筆と江戸の無筆の間に往復された手紙の話がある。（二）樣（やう）へ・か（か）し（し）く（く）と・文（ふみ）・候（さふらふ）等の文字と、「歳は痘瘡のつばみはかしなり文は實（みの）候（る）は鳥のあしの歌、ゐセ・吉三の圖。（三）只・苗・月・申・田口と料理の圖。（四）人・早・内・丁・叶と花魁道中の圖。（五）丁・内・十・中・二と土ほじりの圖。（六）長・品・田・目・目と縫箔屋の圖。（七）下・山・口・山下と河岸夜鷹の圖。（八）右・辺・込・双と舟饅頭の圖。（九）谷・寶・

亭・氏と江戸市街の圖。（十一）向・久・開・而と辨慶の圖。（十二）へ・ム・ヨ・レ・フと剃刀の圖。（十三）乙・年・云・霊・呂・血・各・同と居酒屋の圖。（十四）百・思・時・廿日・志と太公望釣魚の圖。（十五）門・東・ヶ・京と番入・國と姑の看經の圖。（十六）ぬ・南・雨・乃と見世物小屋の圖。

【備考】（一）（鼈相案文當字捌）（寛政十年、曲亭馬琴）は類似の作品である。

彼の師俊惠が匡房の歌を評した詞、「秀句もなく飾れる言葉もなけれど、姿うるはしくきよげにいひくだして、たけ高く遠しろきなり。たとへば白き色の異るにほひもなけれどもろもろの色に勝れたるが如し」とある。これ等によりて彼の所期した理想の歌體を知る事が出來る。書中「千載」の名が見えて「新古今」の事を言はないのは、恐らく兩歌集編纂の十八年間の著、少くも「新古今」の出た元久二年以前の言を集めたことが推察出來る。ともあれ當時の新舊混亂の渦中にあつて、よく時流を洞察し、兩派の長短を辨へ、中古體の「昔を諛ひ」て「卑しく碎け」、「珍しき言葉もなく目に止る節もな」く、「五七五をよみて七々の句は空におしは(か)らるゝやう」なのにも與せず、又新體につきて、風情足らぬ者の「化粧をばすべき事を知りてあやしの賤の女等が心に任せてものなど塗りつけたらむやう」なのや「念もなきことくせを僅かにまね」び、或は「覺束なく心こもりてよまんとする程に、果は自らも心得ずたがはぬ無心所著になり」たるものを採らず、穩健公平の立場に立てる彼の透徹した批判力を覗ふ事が出來るが、この見識は一面彼の師俊惠に負ふ所多かつた事は俊惠定歌體事、その他諸章に引けるその詞によりて知られる。この自著の傳はらない俊惠を初めとして、基俊・俊賴・俊成等諸歌人の言行記錄は、歌壇研究の好資料をなしてゐる。　〔中島〕

無名草子（むみやうざうし）　一卷　【作者】俊成說、俊成の女說の二つがある。【名稱】「岷江入楚」に、鴨長明の「無名抄」として本書の記事を引いてゐる。されば早くからかく呼ばれたとも思はれるが、作者が謙遜してか或は匿名の故にかく名附けたのか、又後人が假に名附けたのか、どちらであるか解らない。【諸本】群書類從に收められたものを原本として明治以後、國文大觀・日本文學大系等に收められてゐる。群書類從本の奥書に、「以水野爲長本校合了」とあるが、現在はこの本は傳はつてゐない。藤井乙男博士藏本は德川初期の寫本で善いところが少くない。【成立】山岸德平氏は大體正治二年頃かと云ひ、杉山敬一郎氏は「明月記」の建仁二年五月十日の記事と、本書の文の「五月十日宵の程、日頃降りつる五月雨の霽間を待ち出で、夕日きはらかにさし出で給ふも珍し云々」とあるのが符合するので、建仁二年五月十日頃から書き始めたのではないかと云つてゐるが明かでない。先づ建久七年の事が見えるから、それから定家が中將になつた建仁二年迄の間約五年間の作と見て差支ないであらう。

【梗概】「大鏡」「增鏡」等と同樣に、今は八十三歲になり、若い頃は宮仕へした老尼が、五月雨の頃最勝光院へ參り、その傍の家に請ぜられるまゝに讀經などして宿ることになり、その家の女房達の物語を記した體にしてある。先づ初めは、「各此世に第一に捨て難き節あるもの」を言へとて、月・文章・夢・涙・阿彌陀佛・法華經等のことを述べ、「源氏」に法華經の文句が一つもないと云ふ事から「源氏」の批評に轉じ、第一には面白い卷は、次には女の好惡、次に男、次に構想等を評す。かくて「狹衣」「ねざめ」「みつの濱松」(各別項)「たまも」「とりかへばや」(別項)「かくれみの」「今とりかへばや」「心高き」「あさくら」「かはぎり」「岩打つ浪」「あまのかるも」(別項)「末葉の露」「露の宿り」「みかはにさける」「うぢの河波」「こふむかへ」「おたえの沼」「はつ雪」「うきなみ」「松浦の宮」(別項)「有明のわかれ」「夢がたり」「なみぢの姫君」「あさぢがはらの內侍のかみ」「伊勢物語」(別項)「大和物語」(別項)等の人物・構想等について、比較や批評を加へる。次いで「古今集」「萬葉集」から「千載集」に及んで批評する。「女ばかり口惜しきものなし」と云つては、名ある女の批評に移り、小野小町・清少納言・小式部內侍・和泉式部・宮の宣旨・赤染衞門・伊勢大夫・伊勢の御息所・兵衞の內侍・紫式部等の事を記し、又皇后宮(定子)・上東門院(彰子)・枇杷殿の皇太后(妍子)・大齋院(選子)・皇太后宮(獻子)等の御方々の噂に及ぶ。終りに近く「「さのみ女の沙汰にてのみ夜を明かさせ給ふ事の、むげに男の混らざらむこそ人わろけれ」といへば、「げに昔も今もそれはいと聞き所あり云云」」とあれば、この後になほ男子に關する批評があつたらしく思はれる。

【價値】本書は、現存する物語批評の最も古いものである。この書に「はつ雪」には色々物語のことを書いてゐると述べてゐるが、今は傳はつてゐない。「源氏」以後多くの物語が出來たが、散佚して傳はらず、現在傳はるものは古書に名の見えてゐる數の一割位にしか當らない。この點から見て、本書は「風葉集」「色葉集」等と共に、これ等の散佚物語の面影を見る上に於て重要なものである。

【參考】國文學研究史野村八良〇源氏物語研究の初期山岸德平(國語と國文學二ノ一〇)〇無名草子考　杉山敬一郎(國語國文の研究三五ノ三六・三八)　〔大野木〕

無名祕抄　「無名抄」を見よ。

無々道人　小說家　【本名】寬　【生歿】文久三年十二月、三河豐橋の儒者の家に生れ、昭和二年七月三十日、相州平塚の別宅に歿す。享年六十五。【閱歷】慶應元年、五歲の時、家人に伴はれて江戸に出で、明治二年、小學校に入つた。同七年外國語學校露語科に學び、貧苦と戰ひながら非常に勉強したので、健康を損ね、中途退學した。それは明治十年頃のことである。爾來小新聞の校正係となり、或は銀行員となり、或は煙草の行商などして具さに辛苦を嘗めた。同十八年、志を立てて渡米、サンフランシスコ、オークランドなどに遊學し、母危篤の報に接して歸朝した。翌年、矢野龍溪(別項)の知遇を得て報知新聞社の客員となり、傍ら東京專門學校に通つた。同二十三年、初めて報知新聞に處女作「小說家」を連載して文壇に認められ、次いで同紙に「小猫」(明治二十九年二月)を發表するに及び、確實な地步を新聞小說の上に占めた。當時編輯局で彼と机を列べた人々には村上浪六・遲塚麗水(各別項)などがゐた。同二十八年報知新聞編輯長となり、社務を刷新して紙數の增加に努めた。この間「日の出島」(別項)を報知新聞に載せたが、非常な歡迎を受け、連續實に千二百回に及んだ。同三十三年、夫人として尾崎多嘉子を迎へ、小田原に閑居して報知新聞に「食道樂」を揭ぐる等、依然として大衆的な作品に主力を注いだ。同三十九年、「婦人世界」の編輯顧問となり、料理法・醫療法等の方面で獨自の研究を發表した。

【作品・作風】代表作としては、「日の出島」(別項)「衣笠城」「櫻の御所」「沖の小島」「食道樂」(別項)「酒道樂」「女道樂」等がある。藝術的香氣に乏しかつた爲め、當時の評論家より常に嘲罵を受けたが、興味本位の作なので、いづれも大衆に迎へられ、發行部數に於て常に他の小說を壓倒してゐた。

村井長庵（むらゐちやうあん）　「勸善懲惡覗機關」を見よ。

村岡幸次（むらをかかうじ）　脚本作者　【本名】未詳【別名】幸治とも記す。俳名、龜玉。【生歿】未詳【閱歷】五代松本幸四郎の甥と傳へる。初代櫻田治助門として天明年代から享和年代にかけて活躍した江戸の作者である。櫻

説を厭倒してゐた。〔高須〕

村井長庵 むらゐちやうあん 「勸善懲惡覗機關」を見よ。

村岡幸次 むらをかかうじ 脚本作者 【本名】未詳 【別名】幸治とも記す。俳名、龜玉。【生歿】未詳 【閲歴】五代松本幸四郎の甥と傳へる。初代櫻田治助門として天明年代から享和年代にかけて活躍した江戸の作者である。櫻田治助が幸四郎に負ふ所もあつたので、幸次と治助との交渉には、特殊な關係も考へられる。入門は何年か不明であるが、二枚目に昇進したのは、天明八年十一月中村座に於てであつて、立作者となつたのは、寛政七年十一月河原崎座であらうと思ふ。これ等の背景として、常に幸四郎のゐたことはいふ迄もない。立作者としても、寛政度ではまだ治助の監督下にあつたらしいが、やがて獨立した。後には近松門喬に對して彼はスケの位置に坐つてゐる。二枚目の合作者の中には、玉卷久次・福森久助・河竹文次等が算へられる。幸四郎は、讐句などに有名であるから、殆ど幸四郎のために綴つてゐた彼の作には、その臺詞などに幸四郎の案も相當吸收するところがあつたであらう。また所謂櫻田風なる名題や小書の風情をも繼いでゐて、その作文には注目されるものもある。但し「八百八町瓢簞簪」が、流行のビイドロ簪の當て込みで好評を得た時、治助は「ひさごのさしもの」とした方がよいといつたとの挿話がある。立作者時代の作には十數種が算へられる。

【作品・作風】好評を得た作を擧げると左の如くである。「けいせい水滸傳」(玉卷久次との合作。寛政八年五月、河原崎座。巖流島)、「會稽櫓錦木」(寛政九年十一月、中村座。奥州攻と一つ家)、以上二作は幸四郎のために書いたもので、時代で敵役にはまつた作柄と見られる。又「若駒醋曾我」(寛政十年正月、同座。三勝半七)、「本町育浮名花聟」(同年六月、同座。小糸佐七、半時九郎兵衞)、「花三升芳野深雪」(寛政十年十一月、中村座。楠)、「大三浦達壽」(福森久助との合作。寛政十一年二月、中村座。伊達)等は大體六代團十郎のために書いてゐるので、華美な作柄である。「八百八町瓢簞簪」(河竹文次との合作。寛政十一年十一月、森田座。太閤記)は、市川八百藏のために書いたもので、時代物の大柄な作である。享和年間に入つてから近松門喬との合作がある。かくて立作者としての活躍期は割に短いやうであるが、時代物と世話物とを問はず、敵役物と立役物とを問はず、相當廣い範圍の作柄と作風とを示してゐる。〔守隨〕

村上浪六 むらかみなみろく 小説家 【本名】信 まこと。幼名龜太郎 【別號】ちぬの浦浪六・眠獅庵・無名氏 【閲歴】慶應元年十一月泉州堺に生る。慶應三年、父兼松又助を失ひ、母清の手に人となる。このために生來の負けじ魂を刺戟さるる所が多かつたといふ。明治六年堺の錦小路小學校に入る。別に錨圓意に漢學を學ぶ。餓鬼大將として喧嘩や惡戯が甚しかつたので、諸方の小學校を轉々し、辛うじて卒業。故あつて幼少より堺縣令税所篤の愛するところとなり、その豪傑的感化を受けた。明治十四年税所氏に隨伴して上京、この後、岡山縣や農商務省の官吏となり、或は政治家たらんとし、又實業家を夢み、或は投機に成功し、孤島に遊び、或は折花攀柳の蕩児を眞似たが、落魄して十九年三度上京、農商務省字生となる。幾ばくもなく病んで歸郷し、病癒えて大阪に出で、同志と共に苦學讀書すること一年(當世五人男參照)、同志の食糧を得るため區役所の雇となつたのは、この間のことである。その後再び貨殖の奇道を志し、又朝鮮に渡らうとしたが、共に遂げず、四度上京、具さに人生の困苦を嘗めた。二十三年十月、報知新聞社に職を求めたが、編輯長森田思軒は彼を奇とし、校正掛に採用した。翌年春「報知叢話」の發刊に當り、思軒の勸めによつて始めて浪六の名をもつて小説の筆を執る。處女作「三日月」(別項)がこれである。この一作によつて文名俄かに揚り、世の歡迎甚だしく、無名の青年が一躍紅葉・露伴と併稱される文壇の花形となつた。二十五年朝日新聞に入り、二十九年まで在社、三十二年自ら社長となつて太平新聞を發刊、一時萬朝報と全盛を競つた。一年足らずで同紙廢刊後、大阪に移り、又も一攫萬金を夢みたが失敗上京した。數年間雌伏して專心小説を執筆。日露戰爭後より國民新聞に關係し、同社をして一時的悲境から脱せしめた。爾後文士としての表面生活三十年、今日に及んでゐるが、裏面の投機的乃至企業的野心は依然彼の痼疾となつてゐる。大衆作家としては今日舊中の舊派に屬してゐるがその人氣は矢張り相當にある。文筆生活者として生命の長き、稀に見るところである。【作品】三日月(別項)○井筒女之助○奴の小萬(別項)○鬼奴○破太鼓○深見草○髯の自休○安田作兵衞○たそや行燈(別項)○後の三日月○魚屋助左衞門○當世五人男(別項)○海賊○原田甲斐○毒婦○金剛盤○石田三成○大惡魔○仍如件○元祿女○八軒長屋○煩悶病院○稻田一作○馬鹿野郎○豐太閤○日蓮○時代相○妙法院勘八等。外に隨筆・雜著・史傳が數種ある。

【批評】浪六は、小説家乃至文壇人を以て任ぜず、文壇でも亦彼の作物は眞面目に相手にしない。彼は到底孤行獨往の作家である。この點で露伴に似てゐる。初め遊俠小説を以て賣り出すや、文壇正統派は故意に彼の作風作物を斥け、撥鬢小説と稱した。併し彼の作物が時代の喝采を博したのは、何等か彼以外の時代の文學が滿たし得ぬものを滿たしたからである。彼の小説には背景は殆どなく、自然描寫も見えず、全く人物と會話だけで進む。その人物の性格は必ず作者浪六の分身であり、その會話は浪六流の機智諷刺や人生哲學やの懸け合ひである。往々作者肚裏の智慧を見せたがる餘り、不必要に人物や事件を玩弄し工夫し、遂に持て餘して困却する場合も少くない。だが、その成功した場合には、男性的意氣と道義的情熱が、巧みに讀者の心をとらへて作者胸中の磊塊を吐く。從つて時代に反抗し、逆行する人物に同情し、その口を藉りて時代を諷刺し、罵倒し、矯正せんとするのは、彼の最も得意とするところであつて、それだけ大衆への見せ場ではあるが、同時にまた彼のマンネリズムたる誇張的衒氣の出る所以でもある。〔柳田(泉)〕

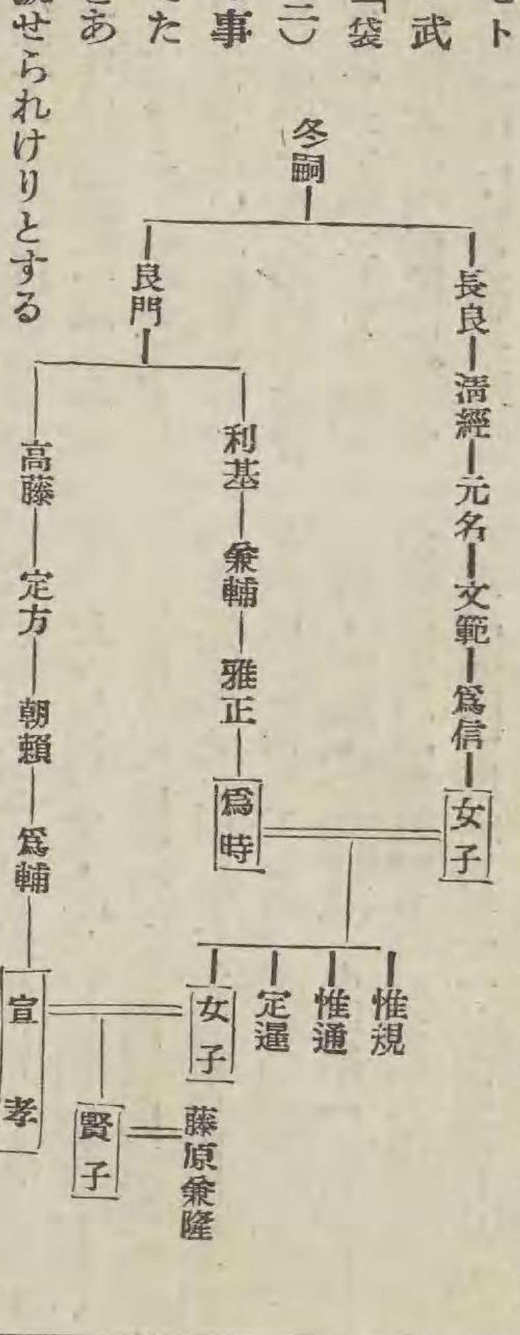
紫 むらさき 詩歌集 【作者】與謝野鐵幹 【刊行】明治三十四年四月、東京新詩社。【解説】詩歌文集「鐵幹子」が發行された翌月この集が刊行された。作者の第四集である。「情すぎて戀みなもろく才あまりて歌みな奇なり我をあはれめ」外三百餘首の短歌と、「春思」外九篇の長詩とを收めたものである。作者自身は、ここでは短歌を短詩とよんでゐる。そこにも歌といふ傳統のみに累せられず、廣義の詩への進出を意識してゐるものがある。語系が整理されて、第一・第二集の雜然とした語彙をとりあつめてゐる時代とは、全く別個のものとな

つてゐる。またその醇化されたことばのかげに、事實の特異さと事件の複雜さとを示してゐる技巧に於て、新しい效果を收めてゐるものがある。

紫式部(むらさきしきぶ)　文學者　〔北原〕

【姓】藤原【本名】未詳【別名】初めは藤式部と稱せられた(「榮華物語」及び「本朝通鑑」長保十年十二月の條)。その藤は藤原の姓から、式部は父爲時の官位式部丞(「小右記」永觀二年十一月十四日の條及び同二年十二月八日の條等)、又は兄惟規のそれ(「尊卑分脈」「紫式部日記」)から來たものであらう。後に紫式部と稱せられた。この藤式部が紫式部になつたに就いては古來多くの說があるが、(一)此物語紫巻作甚深之故得此名とする說(「袋草紙」巻四に引く)、(二)一條院御乳母之子也。而上東門院令奉トテ吾ニユカリノ物ナリ、アハレト思食セト令申給故有此名武藏野義也とする說(「袋草紙」巻四に引く)、(三)一部の中に紫の上の事をすぐれて書き出でたる故に藤式部の名をあらためて紫式部と號せられけりとする說(「河海抄」巻一料簡)、(四)藤式部の名幽玄ならずとて後に藤の花のゆかりに紫の字にあらためらるゝと云(淸輔朝臣の說也)といふ說(「河海抄」巻一料簡に、淸輔朝臣の說也と引くも「河海抄」の著者の誤であらう)の四說に大體盡きる。なほ近來に至つて、(五)紫式部は、紫野雲林院の境内のほとりに住んだゆゑの名なるべし(紫式部傳)とする櫻井秀氏の說がある。それぞれ理由はあるが、現在の研究範圍では、第三說(「河海抄」說、「源注拾遺」「源氏物語評釋」)、總論は「河海抄」說を敷衍してゐる)が有力に行はれてゐる。

【綽名】日本紀の局。これは『うちの上の源氏の物語人に讀ませ給ひつゝ聞し召しけるに、「この人は、日本紀をこそ讀み給ふべけれ。誠に才あるべし」との給はせけるを、ふと推し量りに「いみじうなん才ある」と殿上人などの云ひ散らして』つけたものである(「紫式部日記」寛弘六年正月の條)。しかしこれは、淸少納言の齊信との問答から出來た「草の庵」及びその奇才から生れた「この君」の綽名(枕草子)と同じく、弘く通じたものではなく、全く一時的のものであつたであらう。【生歿】未詳。圓融天皇天元元年に生れたのであらうとする說(「紫家七論」の說に基く)及び同天皇天延三年とする說(「大日本史本朝烈女傳」の說に基ける逆算による)がある。しかし式部には兄と姉があつた(「紫式部歌集」)ことは確かであるから、今はそれ等と父爲時の年齡關係とから前說が有力らしい。歿年に關しては、長元四年に歿したとする說(「紫家七論」「大日本史」)、萬壽三年より長元四年までとする說(「國文學全史」平安朝篇)及び長和五年とする說(「紫式部新考」)等があるが、最後の說が比較的有力である。享年未詳。五十七歳とする說(「大日本史本朝烈女傳」)もあるが、「生歿」に於ける「紫家七論」に基づいた推測と、與謝野晶子氏の「紫式部新考」の說とを參酌すれば三十九歳となる。未だ定說と見るべきものはないが、今暫く三十九歳の推定に從ふ。【墓所】山城國葛野郡雲林院村在、雲林院白毫院南(「河海抄」巻一料簡及び同書に引ける「宇治寶藏日記」)。



天皇	年號	年齡	事項
圓融天皇	天元元年	一	式部生る(紫家七論の說に基づいての逆算による)
一條天皇	長德二年	一九	父爲時越前守に任ぜられ、式部又父に伴はれてその年の秋頃任國へ旅した(本朝通鑑長德二年春正月の條、同三年春正月の條、權記長德元年十月六日の條、長德二年春正月の條、及び紫式部集による推定)
	同三年	二〇	秋頃父爲時に先だつて、越前國より都に歸る(歌集による推定)
	同四年	二一	夏頃藤原宣孝(當時四十七歳位)と戀愛關係に入る(歌集による推定)
	長保元年	二二	宣孝との間接近し、結婚生活に入る(歌集による推定)十一月に宣孝は勅使となつて宇佐へ行く(日本紀略長保元年十一月廿七日の條)
	長保二年	二三	宣孝京都に歸る(御堂關白記長保二年二月三日の條、小右記長保二年二月十一日の條による推定)四月、宣孝平野臨時祭の使となる(權記、御堂關白記長保二年四月一日の條)宣孝との間に、女子賢子(後の後冷泉天皇御乳母、越後の辨)を生む
	長保三年	二四	四月廿五日、夫宣孝に死別す(本朝通鑑同年同月の條、本朝通鑑提要長保三年十二月の條、及び尊卑分脈)父爲時任みちて、長保二年秋頃若くは同三年の春頃、越前國より京都に歸る(權記長保三年冬十月七日の條による推定)
	自長保四年至寛弘三年	自二五至二九	この寡居の間に源氏物語の或る部分が著作せられる(式部日記寛弘五年霜月の條、六年正月の條等による推定、及び河海抄・紫家七論、五の小櫛)又この間、道長邸に仕へたこともあるらしい(河海抄巻一料簡、本朝通鑑長保三年十二月の條)
	寛弘四年	三〇	十二月二十九日初めて上東門院彰子に出で仕へる(日記寛弘五年の條、及び紫式部宮仕年代考)
	寛弘五年	三一	夏上東門院へ白氏文集の樂譜を進講しまつる(日記)「日本紀の局」と綽名さる(日記)上東門院御懷姙五月で御父君左大臣道長の土御門殿に出御あり、中宮に從つて三十講に列席する(日記、歌集)紫式部日記は、七月頃から始まつてゐる(日記)上東門院に從つて土御門殿に在る(日記)九月十一日後一條天皇土御門殿にて御降誕遊ばさる(日記)九月十五日道長の御產養の日、式部祝の歌をよむ十一月若宮(後一條天皇)の御五十日の祝儀が行はれる。この日の宴に醉つた左衞門督公任から「あなかしこ、此のわたりに若紫やさぶらふ」と戲を受く(日記)。この頃、既に「源氏物語」はその或る部分が流布して少くとも若紫の巻は世に知られてゐた(日記)十一月十七日夜、上東門院內裏に入御、式部も朋輩とこれに從つた(日記)十二月二十九日去年始めて宮仕に出た時のことを追想する(日記)
	寛弘六年	三二	正月十一日上東門院御堂への行啓に御供する。道長が式部の局の戶をほとほと叩いたのは、この夜である(日記)
	寛弘七年	三三	一月十五日二宮(後朱雀天皇)の御五十日の祝儀がある。現存の紫式部日記は、こゝまでしか書かれてゐない(日記)
	寛弘八年	三四	六月二十二日一條天皇崩御遊ばさる(榮華物語岩蔭の卷、寛弘八年の條) 御忌果てゝ後、上東門院は枇杷殿へ渡らせられる。式部もこれに從つた。この時の哀傷歌と榮華物語は、藤式部の名で載せてゐる(榮華物語、岩蔭の卷) 四月父爲時は、越後守に任ぜられ(辨官補任寛弘八年の條)、同年四月頃任國へ赴任する(御堂關白記寛弘八年二月二十三日の條及び權記寛弘八年の條より推定)

三條天皇		
長和元年	三五	二月十四日中宮彰子御年二十五歳で皇后宮に上らせられる（榮華物語、日かげのかづら）秋頃兄惟規、父爲時の任國越後へ父を訪れる（歌集・今昔物語・十訓抄）
長和三年頃	三七	宮廷生活を通じて式部と最も親交のあつた小少將の君が、寛弘八年より長和三年までの間に歿してゐるらしい（歌集による推定）兄惟規、父爲時の任國越後で歿する（歌集・今昔物語・十訓抄）秋頃父爲時國司の任期の未だ滿たざる中に辭任し（小右記、長和三年六月十七日の條による推定）、秋頃惟規の遺骨を携へて京都に歸る。（歌集による推定）
長和五年	三九	春頃父爲時に先だつて歿する（小右記長和五年五月一日の條、及び御堂關白記寛仁二年一月廿一日の條等より推定）

【家系】紫式部の家は、閑院左大臣冬嗣六男の良門を遠祖とする名門であつた。同門の中には文人歌人として名ある者が少くなかつた。曾祖父兼輔は堤中納言と稱せられ、延喜時代に歌人として令名あり、家集一卷を殘してゐる。祖父の雅正、その弟清正、叔父の爲頼、皆優れた歌人で、その歌は「拾遺」以下の勅撰集に載せられてゐる。父爲時は歌人としてよりは寧ろ詩文に長じ、又儒學の造詣が深く、當時の碩學文章博士菅原文時に學んで、文名一世に高く、その作詩は「本朝麗藻集」に數十首載せられてゐる。また兄惟規も歌人として有名で、現在宮内省圖書寮に藏されてゐる「惟規集」は、彼の歌を集錄したものらしい。母は右馬頭藤原爲信の女で、冬嗣の一男長良を遠祖とする名家であり、式部の家系とは遠くその祖を同じくしてゐる。同胞は「尊卑分脈」及び「紫式部歌集」を綜合するに、兄三人と少くとも一人の姉があつたらしい。而してこの長兄と次兄とは官に仕へ、三兄は出家して阿闍梨となつた。

【閲歷】その幼少より聰明であつたことは、書に心入れたる親が「口惜しう、男子にてもたらぬこそ幸福なかりけれ」と常に歎いたといふ日記の記事を見ても知ることが出來る。家庭に於て相當早くから教養をつけたことも、同時にこの記事から推測される。漢籍に對する素養も亦十分で、家集及び日記によれば、箏の傳授を求められたり、中宮に「白氏文集」の樂府を進講し奉つたり、文學以外に音樂の道にも秀でた才能を有つてゐた。なほ佛典の方面にも詳しかつたが、これは兄の阿闍梨定暹の影響に負ふところが多かつたであらう。かうした遺傳と環境とが、彼女の愼ましい精進と相俟つて、他日「源氏物語」の大作を生む動因を既に孕んでゐたのである。式部は幼時何れかの宮か公家へ仕へたであらうとされてゐる（紫式部新考）。又父爲時には泉州玉井に別莊があり、爲時はその地に度々遊んだ（本朝麗藻集）ことがある。從つて式部も亦、河内・和泉の邊に旅したことがあつたに相違ない。長德二年十九歳の時には越前守として赴任して行く父に伴はれて、その秋旅に出たらしい（家集）。肥前に向つた友達と歌の贈答をしてゐるのもこの頃である（家集）。越前への旅は、餘り樂しいものではなかつたらしい。道中の難儀に苦しみ、ひたすら都を戀ひ慕つてゐた（家集）。此處に滯在すること凡そ一ヶ年であつたが、さして親しい友も出來ず、鄕愁に沈んでゐた（家集）、彼女にとつて唯一の喜びは肥前の友との文通であつた（家集）。長德三年の秋頃には、父爲時の任滿つるのを待ち兼ねて一人都へ歸つてゐる（家集）。この都へ歸るといふ少女心の樂みが、同じ道中にも苦難を感じさせなかつたものか、浮々した心持を幾多の歌に殘してゐる（家集）。都に歸つて間もなく、四年の春頃からであらうか、後に夫となつた藤原宣孝との戀愛關係が始められた（家集）。式部は、初めのうちは宣孝の熱烈な求愛にも拘はらず、容易にそれを受け納れようとはしなかつた（家集）。これには種々の理由があらう。性格の相違、年齡の差、又宣孝に他に三四人の妾妻のあつた事などが數へ擧げ得られよう（尊卑分脈・家集）。その年の秋頃迄は、どちらともつかない關係が續けられて來たが（家集）、長保元年に至つては大分その仲が接近し、秋には結婚するに至つた。この頃宣孝は四十八歳位、式部は二十二歳位であつた。妻としての式部は、時としては宣孝の夜がれを歎つ夜もあつたが、概して極めて平靜な睦じい生活を樂しんだやうである。宣孝歿後に於ける式部の追想及び哀愁（家集）は、それを證して餘りがある。長保二年のことであらう。二人の間には女賢子が生れた。この賢子は後冷泉天皇の御乳母越後の辨とある人で、後に正三位太宰大貳高階成章に嫁してから大貳三位と改めた。式部の結婚生活は、しかしあまりにも果敢ないものであつた。結婚の翌々年、長保三年四月二十五日には、最早夫宣孝に死別しなければならなかつた（尊卑分脈・本朝通鑑・本朝鑑提要）。その結婚生活が幸福であつただけに、その淋しさはまた深く切なるものがあつた（家集）。一度は、出家遁世せんとまで世の無常を果敢なむ心にもなつた。しかし幼い賢子をかゝへた現實を振り返つては、また其處に如何ともし難い自己を發見するのであつた。この生活の懊惱と亡き夫へのはかない追慕とが、畢生の大作「源氏物語」製作の大きな動機の一つとなつてゐることは看過出來ない。爾後五六年宮仕へまでの寡居生活に於て、「源氏物語」の一部は染筆せられ、寛弘五年頃には、少くともその或る部分は世に流布してゐた（「日記」寛弘五年の條より推定）。式部はまた上東門院に仕へる前に、鷹司殿へ出で仕へたといふ傳説がある（「河海抄」卷一料簡、「本朝通鑑」長保三年十二月の條）。遽かにその當否は定め難いが、「源氏物語」に於ける宮廷生活の描寫及びそれ等と日記中の記事の相似などから一概には否定も出來まい。寛弘四年十二月二十九日に年三十歳で、初めて上東門院に出で仕へた（日記・紫式部宮仕年代考）。宮仕へ後の式部は、一條天皇・中宮彰子及び道長夫妻等からは、かなり愛され、又同輩・殿上人からは、崇敬の念を以て眺められ（日記）。勿論自尊と權謀とに滿ちた當時の宮廷であつたから、同輩の嫉妬や敵愾心が相當式部を惱ましたことも事實である。宮廷に於ける理想生活の中にも、自らの境遇の拙なさを知る式部は、常に住み憂き世界を持つた（日記・家集）。しかし、この常に憂き生活にあつて、心から式部を喜ばすものは、朋輩小少將の君との交情であつたらしい（歌集・日記）。寛弘五年四月十三日中宮彰子は、御懷姙御修法のために土御門殿へ出御される。式部もこれに隨つて土御門殿に出で、三十講に列席した（歌集・日記）。「紫式部日記」（別項）は、この頃のことから書かれてある。中宮の御産が近づくに從つて、人々はその準備に忙殺された。この頃の式部は、まだ新參者であつた（日記）。九月十一日に後一條天皇がお生れになり、九月十五日道長の御産養の日には、式部は祝歌を詠んでゐる（家集・日記）。十月十六日の行幸に次いで、十一月一日には若宮（後一條天皇）の御五十日の祝儀が行はれた。その日の宴に醉つた藤原公任が

「あなかしこ、此わたりに若紫やさぶらふ」と、式部に戯れかけた話は有名である(日記)。十一月十七日には内裏に歸られる中宮に從つて宮廷に移つた。十二月二十九日には、去年始めて宮仕へに出た時のことを回想して現在に思ひ及んでゐる(「日記」寛弘五年の條)。寛弘六年正月三日若宮の御戴餅の事があつた。その頃のことであらう、式部は「源氏物語」がお前にあるのを見て歌ひ挑んで來た道長と歌の贈答をしてゐる(日記・家集)。この年の夏、御堂殿で、式部が渡殿に寢た夜、ほと〳〵と局の戸を叩く者があつた。恐ろしさに返事もなくてゐたところ、翌朝道長から歌があつた。しかし「たゞならずとばかりたゝく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし」と式部は、それに從はなかつた(日記)。寛弘七年正月十五日には、二宮後朱雀帝の御五十日の祝儀があつた。現存の「紫式部日記」はこの日の記事で終つてゐる。寛弘八年二月一日父爲時は越後守に任ぜられ(「辨官補任」寛弘八年の條)、四月頃赴任した。同年六月二十二日には一條天皇が崩御あらせられた。一條院の法事の過ぎた後、枇杷殿に移られる中宮に式部も隨つたが、この時に詠んだ哀傷の歌が、「榮華物語」岩蔭の巻に載つてゐる。長和元年二月十四日には、中宮彰子は御歳二十五にて皇后宮に上らせられ(「榮華物語」「日かげのかづら」)、式部は續いてこれに出で仕へた。とは言へ、寛弘八年の春には父爲時をその任國越後に送り、一條院崩御以來、哀愁に沈める元の中宮彰子に仕へてゐた式部は、長和二年には更に父を訪れる兄惟規を越後國へ遣るなどで(家集・今昔物語・十訓抄)、まことに空虚な淋しい日々を過してゐた。而も長和三年には兄惟規は越後で歿して遺骨となり(今昔物語・十訓抄)、任期に滿たないうちに官を辭した(「小右記」長和三年六月十七日の條より推定)、父爲時に連れられて都に歸つて來たのであつた(家集)。式部は、さうした悲歎のうちに、更に年來の友小少將の君の死に會はなければならなかつた(家集)。近親の人々の上に起つた悲しいことの數々に、式部は自らの生命の衰へと、前途に對する何かしら暗い影を感じたことであらう。悲歎と寂寥とが積り積つた爲めであらうか、長和三年頃の式部には、しみ〴〵と思ふことの多い病氣勝ちの日が續いた(家集)。人生の諸相の無常さに、今更に悲しく、やるせない思ひを抱いてゐた式部は、それから間もなく、彼の不朽の功績と偉大なる名聲とに儚くも負いて、長和五年三十九歳を最後として、この世を去つたのである。

【作品】源氏物語五十四帖 ○紫式部日記一卷 ○紫式部家集一卷(各別項) ○日記歌一卷寫本(内閣文庫のは、内容は全然同一なるも、紫式部日記歌と外題がある。この本は傳來の全く不明な本で、奥書も書入もない。成立の事情も從つて未詳。「異本赤染衞門集」の前に、「紫式部日記」の歌を抄出して加へたものである。その終りに、已上百十六首内、他人歌十八首歟とあり、その次の部分は、入撰集不見此册歌として、式部の歌の撰集に入つたものを集めてゐる)。その他彼女の歌で撰集に入つたものは、「後拾遺」春上二賀一、「千載」秋上一冬二別一賀一哀二別一旅一戀四一雜上三、「新勅撰」冬一賀一戀五一雜一、「續後撰」秋中二冬二雜上一、「續古今」戀三一戀五二哀一雜中二賀一、「續拾遺」戀四一戀五一雜上一、「玉葉」春上一秋上二冬二戀三一雜二一、「續千載」雜中一物一、「續後拾遺」夏一、「風雅」秋上一、「新千載」釋一戀二一戀五一哀一、「新拾遺」雜中一

【人物】式部の性格と作品との間には、極めて緊密な連關がある。式部の偉大なる文學上への貢獻は、その生得的な性格の必然の所産であつたと言へる。内面的生活に於ける朗かな自照的な傾向、それこそ式部の性格の最も著しい點である。從つて對象に對する式部の態度は常に靜止的であり、思念的であつて、夫宣孝歿後の衝激と相俟つて、やゝもすれば遁世的でさへあつた。感動が常に大きな角度をなしつつ自己の内部へ集注して來るといつた傾向で、いはば自己の中へ事象が滲入して來るのであつた。自然に對する晴朗な無垢な態度については、「式部日記」開卷第一の秋の土御門殿の情趣を述べた一節、人生に對する純眞な清澄な態度については、若宮御生誕後につづく記事及び御五十日の祝儀の夜に於ける道長の言動を記した箇所など、それ等のよき例である。また中宮彰子が、後一條帝を生み奉る折なぞに、女房達があさましくくれまどふを見て「ましていかなりけん」と、その事實から自己を遠ざけて自己を客觀し、月明るき夜、中宮に參る時、髴裁もかまはず騒ぎ立てて車に乘り込む女房達の無作法を目にしては、「我うしろを見る人はづかしくも思ひ知られ」と直ちに移して自己を顧みるのであつた。自照的であることは、常に冷徹であることではない。その心の背裡に烈々火の如き情熱を藏してゐる者のみが、よく事象の實相を把握し得る。五節の舞姫の上る日の記事は、深くも澄んだ、式部の詩人としての愛の心の反映である。日記消息文にある同輩を誹謗したものと解せられてゐる部分なども、眞實には自己の姿を他人の上に眺めた心の表現であり、身自らを鞭たんとする式部の眞摯な教養的精神の所産でなくてはならない。自己を批判するに峻嚴であつた反面、式部はまた多少のユーモアをも持つてゐた。辨の宰相の晝寢してゐるのを『「繪にかきたるものゝ姫君の心地すれば口覆を引きやりて」物語の女の心地もし給へるかな』(「日記」寛弘五年八月二十六日の條)と書いてゐるあたり、華かではないが、どこか涙ぐましくなるやうな愼ましやかな「うかれ」がある。しかし表面優しい式部にも、自尊心を守らんとする反抗的精神のあつたことは否まれない。「人の中にまじりては、いはまほしきことも侍れど、いでやとおもほえ心うまじき人には、いひてやくなかるべし。物もどきうちし、我はと思へる人の前にては、うるさければ、ものいふことも物憂く侍る」など、言はんとする自己を持ちながら、相手を輕視してゐる傾きがある。要するに飽くまで内省的性格の故に、表面は靜かに振舞つたが、また感受性の人一倍強くあつたことと相俟つて、内面的には絶えず峻烈な自己批判に苦惱し、かなり複雑な心の生涯を生きたのであつた。

【參考】尊卑分脈○本朝通鑑○本朝鑑提要○小右記○辨官補任○權記○御堂關白記○榮華物語○作者部類○本朝烈女傳○伊勢大輔集○中古歌仙傳○和歌色葉集○袋草紙○河海抄○紫家七論○玉の小櫛○源氏物語評釋○日本紀御局考○紫式部日記○紫式部家集○清少納言と紫式部 梅澤和軒 ○國文學全史平安朝篇 藤岡作太郎 ○源氏物語の新研究 手塚昇 ○紫式部傳 櫻井秀(わか竹一〇ノ三・四・六・七・八・九・一〇) ○紫式部の傳説 與謝野晶子(同上、一〇ノ一・二) ○紫式部新考 同上(太陽、昭和三ノ一・二) ○紫式部略傳 文同人(文、三ノ一一)

○紫式部略傳に付て歌文の話 野尻則行（文、四ノ三）○日本紀の御局（紫式部逸事）（文、四ノ七）○日本紀の御局拾遺（文、四ノ八）○源語及日記より見たる紫式部 手塚昇（國語と國文學二ノ四）○紫式部 關谷眞可禰（わか竹、四ノ四・五）○紫式部の人生觀 梅澤和軒（帝國文學、五ノ五・六・七）○紫式部と清少納言に就いて 三上參次（日本大家論集、二ノ四）○紫式部宮仕年代考 今小路覺瑞（國語國文の研究、三〇・三一）○紫式部の人としての生涯 河岡新兵衞（國語と國文學、六ノ六）○紫式部の觀照と思索 西片但二（國語と國文學六ノ六） 〔池田〕

紫式部集 むらさきしきぶしふ　歌集　一卷二冊

【著者】紫式部　【諸本】群書類從二七四所載本、元祿九年刊本二冊がある。【別本】日記歌　【解説】類從本は歌數百二十三首、元祿刊本は同系統であるが、四首餘の脱落があり、兩本とも詞書があつて歌の缺けたところが二つある。部類はないが多少集團的である。「紫式部日記」（別項）中に見える和歌は十八首にて、内十三首は本集にある。勅撰集に入る式部の歌は、「後拾遺集」以下凡そ六十二首にて、贈答歌を合せると七十二首、内五十六首は本集に見え、差引十八首の内二首は「紫式部日記」に、四首は「伊勢大輔集」（一首は榮華物語か）に一首、「里の名を」（新拾遺）は「源氏物語」に見える。【内容】「紫式部日記」に見える歌には、同樣の意味の詞書がある。當時の文化を記すやうな詞書に、「曆に初雪ふると書きたる日」「かみを冠にて博士だちたる法師」「文の上に朱をづぶ〳〵とそそぎかけて涙の色をとかきたる人」「卒都婆の年へたるがまろびたふれつつ人にふまるる」「物の怪つきたる女のうしろに鬼になりたるもとの女を小法師のしばりたるかたかきたる繪」「海士の鹽やくかたをかきたる歌繪」等の如きものがあり、式部の傳記を暗示するやうな詞書もある。【批評】生活に溺れるやうな情緒を歌によむ事は當時の一般的傾向であるが、式部の歌には「なげやり」のところが少しもなく、生活を愛し美にあこがれる「ねばり」が見える。歌の調子も堅い感じがするが、中にはユーモアを籠めたものもある。例へば前記法師の歌は、「はらへとの神の飾のみてぐらにうたてもまがふ耳はさみかな」とあり、卒都婆の歌は「心あてにあなかたじけな苔むせる佛の御顏そとはみえねど」とある。

【日記歌紫式部】歌の數九十三首、初め十二首の内十一首は、「紫式部日記」又は「紫式部集」に見え、十三首目以下は異本「赤染衞門集」（別項）の三十七首目から百十六首目まで、即ち四季歌の終りまでと全く一致し、日記歌の奧に、「本云以上百十六首内他人哥十八首歟校合了」とあるのも、「衞門集」に就いて云ふものと考へられる。而してこの部分の歌は、類從本「赤染衞門集」にも大部分見られる。かく本書は大部分が「赤染衞門集」であるが、なほ紫式部の歌集と信じられたものの如く、別に「入撰集不入家集哥」として、勅撰集中から紫式部の歌及びその贈答歌六十三首を書き拔いて附加してゐる。

【參考】紫式部日記と日記歌 池田龜鑑（宮廷女流日記文學）○紫式部の人としての生活 河岡新兵衞（國語と國文學、昭和四ノ一〇） 〔西下〕

紫式部日記 むらさきしきぶにつき　日記

【著者】紫式部　【名稱】「紫式部が日記」（無名抄）と、「が」又は「の」を附してよむのが正しいかも知れない。「紫式部日記」の名は、「本朝書籍目錄」にも、「明月記」にも見えてゐる。又「明月記」には、別に「紫日記」ともあり、さういふ題簽を附した古寫本もある。また單に「紫式部」とのみよんだ例もあつたらしい（類聚名物考）。【卷冊】普通二卷二冊、「本朝書籍目錄」にも三卷となつてゐる。今の諸本は完本でなく、もとは今少し内容が大きかつたのであつたらう。中根香亭氏の説には、元來この「日記」は數十卷あつたものを、式部がその中から數節を抄出して別に消息文を添へ、他によせたものであらうといひ、明治三十二年の刊行にかゝる木村正三郎氏の「紫女手簡」には、「日記」は抄錄にあらずして脱漏であらうと云つてゐる。關根正直氏は、その著「紫式部日記精解」に於て、もと大部のものにあらず、短篇零冊に過ぎざるべしと云つてゐる。いづれが正しいか、今のところ確かな證據はないが、少くとも現存の本は、この「日記」の原形そのものではない。「榮華物語」の作者は、式部の女大貳三位などから「日記」を借りたのではないかと思はれる。即ち「榮華」の成立する頃には、「紫式部日記」の完本があつたと見てよからうと思ふ。この「日記」は鎌倉初期、又はその以前に於て一度散佚したのを、更に後人がまとめたものであらうと思はれる。宮内省圖書寮その他に「日記歌紫式部」、又は「紫式部日記歌」と題する寫本がある。日記中にあるべき筈の歌でありながら、現存の「日記」中に見えないものがあり、また「紫式部繪卷」の中にも、今の「日記」中に見えない記事がある點より推して、もと「日記」は今の諸本よりも、多少大きな内容をもつものであつたと想像される。【成立】この「日記」は、寛弘五年の秋にはじまり、六年・七年正月までの事が記されてゐる。日記とは云ふけれども、日次を逐うて記錄して行つたものではなく、後から記憶をたどつて追記したものではないかと思ふ。しかし中には精密な服飾の描寫などもあるから、さういふ部分は當時折にふれて書きとゞめておいたのを、後から取り纏めたのではないかと思はれる。【諸本】この「日記」には傳本が甚だ少い。凡て伏見殿邦高親王自筆本の系統に屬する本である。群書類從所收の本は、奧に「右以伏見殿邦高親王御筆之本書寫 一校畢」とあり、更に「右紫式部日記以屋代弘賢本書寫以流布印本及扶桑拾葉集校正畢」とある（邦高親王は、康正二年に御生誕、享祿五年三月薨ず。享年七十七）。現存諸本中、舊南葵文庫・神宮文庫・彰考館等所藏の本は、いづれもこの系統の本である。邦高親王自筆本以前の本の形態を示すものとしては、わづかに「紫式部日記繪卷」の詞書があるのみである。なほ刊本としては、壺井義知の「紫式部日記傍註」があり、清水宣昭の「紫式部日記釋」がある。又別に「扶桑拾葉集」所收の本もある。日本文學全書・國文叢書・有朋堂文庫・日本文學大系等所收。

【内容】二つの部分から成立してゐる。その第一は純粹な日記文であり、その第二は消息文である。消息文の混入については、初め「紫女手簡」の著者木村架空氏によつて論證せられ、後、「紫式部日記精解」の著者關根正直博士によつて更に考證確定された。日記の部分と書簡の部分とは、もと別々のものであつたであらう。それを式部の女大貳の三位か誰かが、この日記を授けられた時、書簡をも一まとめにして綴ぢたのかも知れない。しかし消息文の中に、齊信のことを記したる條に大納言殿とあり、これによりて考へると、齊信が權大

納言となつた寛弘七年以後のものである筈である。その書簡の部分が、六年正月三日と十一日との間に混入してゐるのはをかしい(一説にこの日記全體が他人に與へるために書かれたものであるとの説もある)。或は、この日記が一度散佚した後に、後人によつて、かく粗雑に綴ぢ合はされてしまつたのかも知れない。さて日記の部分は、寛弘五年七月、秋の土御門殿の情趣に筆を起し、當時の道長邸の様を記し、次に中宮御産の模様、御産後の儀式等についてのべ、更に交友のこと、道長のこと、五節その他の公事のことなどを記し、翌六年正月の御戴餅のこと、翌七年正月のこと、三宮御五十日の公事などが細かに記されてゐる。所謂消息の部分は、同僚宮女を批評し、齋宮の中將・和泉式部・赤染衞門・清少納言・左衞門内侍等の上に及び、處世又は藝術の諸問題について、教訓をのべたものである。

【史的地位】紫式部日記は、御産次第・公事・風俗・信仰等の文明史、又は風俗史の資料として重要であるのみならず、紫式部の閲歴・言行・性格等の研究資料としても貴重なる文獻である。文學作品として見れば、宮廷女流に於ける浪漫的精神が、和泉式部の「戀愛」から、「人間愛」に深まつた姿を示すのである。「紫式部日記」に於ける理想主義的傾向は、やがて「源氏物語」に於ける幻想的傾向と共通するものである。「更級日記」の夢幻に至る過程としてこの日記の文學史上の價値は尠少なものではない。

【參考】紫式部日記傍註壺井義知○紫式部日記釋清水宣昭○紫式部日記解足立稻直(國文註釋全書)○紫式部日記分段(松井簡治氏藏)○紫式部日記標目(帝國圖書館藏)○校正省書紫式部日記鈴木弘恭○紫式部日記講義長田致孝○紫式部日記講義三木五百枝○新譯紫式部日記與謝野晶子○紫式部日記精解關根正直 *Diaries of Court Ladies of Old Japan*, (Translated by Amrie Shepley Omori and Kochi Doi.)

紫式部日記繪巻 むらさきしきぶにつきえまき

[池田]

【解説】現存四巻、蜂須賀侯爵・大阪藤田男爵・名古屋森川家・久松伯爵の四家に分藏されてをり、これを日記の本文によつて順序づけると、今多少の錯簡はあるが、大體蜂須賀本から順次久松本に至るのであつて、寛弘五年九月十三日皇子御産養の段から、この日記の末尾寛弘七年正月十五日公卿達の饗宴奏樂の段まで斷續してゐる。四巻合せて詞二十三段、繪二十四段を存し、その續き具合から察すれば、もと相當巻數の多かつたものかと思ふ。繪はすべて濃厚なつくり繪様式のもので、その衣裳や調度の細緻巧麗な描寫には、「源氏物語繪巻」(別項)にも雁行すべき纖美な趣が見られ、人物の姿態表現にも「紫式部日記」が仔細に記してゐる貴族生活のもの靜かな氣分が流露してゐる。ただその描寫は「源氏繪巻」に比し、色彩も感情も纖細に傾くと共に、人物の姿なども大きく豊かな調子を失ひ、畫因に於てもやゝ散文的になつて行く傾向が見られ、これ等描寫表現上の諸點から推察して、「源氏繪巻」よりも下る鎌倉初葉の製作と認められる。詞後京極良經筆、繪は藤原信實筆と傳へられてゐる。「明月記」貞永二年三月二十日の條によれば、「月次物語繪」の中に「蜻蛉日記」や「更級日記」と相並べて「紫日記」の名が出てをり、これを今本に該當せしむるは困難であるが、當時この種の物語繪が貴族の間に多數製作賞玩され、知名の人々も筆を染めてゐたことであり、この日記の如きも、年代としてはその前後と見て大過ないであらう。而して藤原信實は當時大和繪の名家として知られた人であり、その作風から推察して、この繪巻を當代の貴紳作家に歸すべくば、これを信實に擬するは蓋し當れるに近い。詞の字體は腰の強い筆路にまがふかたなき後京極様式の典型が見られ、これを良經筆とする所傳の如きも亦當れるに近しと云ふべきか。[田中(一)]

紫式部日記釋 むらさきしきぶにつきしゃく

【著者】清水宣昭【成立】巻一の巻頭に、文政十三年九月四日の自叙がある。その前に、著者の師藤井高尚が、天保四年の春によせた序があり、巻四の終りに、癸巳(四年)冬鈴木朖の漢文の跋がある。これ等によつて成立の年月及び事情が明かである。翌五年の刊行。又のち「紫式部日記註釋」と題簽を改めて大阪鹿田書店の再刊したものもある。

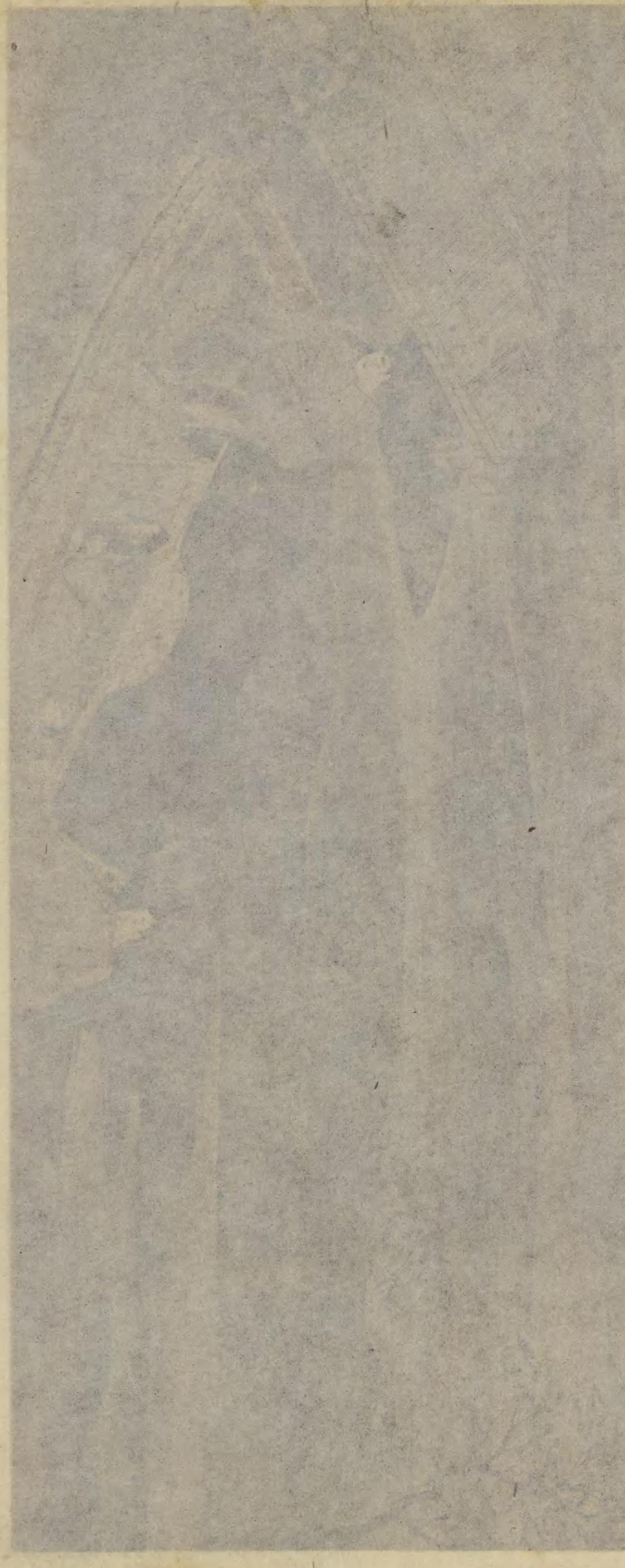
【内容】巻一の巻首に、凡例として諸本(傍註本・群書類從本・植松茂岳が持てる寫本)のこと、解釋は俗語にあてて、よく通ずるものは片假名にて書きたること、官のみあげたる傍に人名をあつる際は、主として傍註によりたれど、類從本と違へる所、もしくはあやまれりと思はるるところとは、その場所に斷れること、傍註本にて意通ずるものは、これに從ひ、官位につきては傍註本の巻末に載せたものによれる事、傍註所載の系圖は安藤爲章の「紫家七論」のまゝなれば、今取らず、紫式部が事につきては、「源氏物語」の諸抄を見るべきこと、裝束のことは專門家にあらざるが故に詳しからず、有職家につきて聞くべきこと、送假名の必要なるものは、原本になけれど附したる事、この書の草稿を高尚に示したるに所々補訂せられたれば、その由を附記してあげたること等、本書著述上の用意につきてのべてゐる。本文は先づ日記の文章を小節に分ち、これを前に揭げ、そのあとに一字づつ下げて註を加へ、註の終りには諸本との考異を示してゐる。國史や「榮華物語」等を合せしらべ、廣く古書を閲して考證してゐる。但し有職故實に關係したものは、多くこれを省いてゐる。

【價値】この書は、「紫式部日記」の註として第二に出たもの。語釋は相當に詳密で、また穩健である。俗語を以て解釋したことは、鈴木朖の「雅言譯解」(文政四年刊)などの影響であらう。註釋史上に新しい傾向を示したものである。ただこの書の缺點と見るべきは、第一、異本の探索の足らないこと、第二、有職故實に關する考證を避けたことの二點である。説としては、高尚・朖・正明・嘉基等の影響が最も多く、奇拔な新説もない代りに、牽強附會の説もない。一般に啓蒙的ではあるが、傍註にて事の足りる部分をば、悉く省いて載せなかつた爲め、兩者併せ見なければ事足らぬ不便が生じた。しかし「紫式部日記」の註釋書としては、足立稻直の「紫式部日記解」と共に、重要な著述である。研究者の必ず一讀すべきものである。

[池田]

紫式部日記傍註 むらさきしきぶにつきばうちゅう

【著者】壺井義知【成立】上巻の初めに、享保己酉の年、藤原隆英の漢文の序があり、下巻の終りに、著者の漢文の跋がある。その一節に、「難解者略標記傍註以便看讀、門人谷村光義更撮取言語五節舞姫之事者、以附後而與本書相發遂附之剞劂、以與于門下之士云爾」とあり、更に谷村光義の



紫式部日記繪卷（前田家藏）

重要であるのみならず、紫式部の閲歴・言行・性格等の研究資料としても貴重なる文獻である。文學作品として見れば、宮廷女流に於ける浪漫的精神が、和泉式部の「戀愛」から、「人間愛」に深まつた姿を示すのである。「紫式部日記」に於ける理想主義的傾向は、やがて「源氏物語」に於ける幻想的傾向と共通するものである。「更級日記」の夢幻に至る過程としてこの日記の文學史上の價値は尠少なものではない。

【參考】紫式部日記傍註（壺井義知）○紫式部日記釋（清水宣昭）○紫式部日記解（足立稻直（國文註釋全書））○紫式部日記分段（松井簡治氏藏）○紫式部日記標目（帝國圖書館藏）○校正首書紫式

れ、人物の姿態表現にも「紫式部日記」が仔細に記してゐる貴族生活のもの靜かな氣分が流露してゐる。ただその描寫は「源氏繪卷」に比し、色彩も感情も纖細に傾くと共に、人物の姿なども大きく豐かな調子を失ひ、晝因に於てもやゝ散文的になつて行く傾向が見られ、これ等描寫表現上の諸點から推察して、「源氏繪卷」よりも下る鎌倉初葉の製作と認められる。詞後京極良經筆、繪は藤原信實筆と傳へられてゐる。「明月記」貞永二年三月二十日の條によれば、「月次物語繪」の中に「蜻蛉日記」や「更級日記」と相並べて「紫日記」の名が出てをり、これを今本に該當せしむるは困難であるが、當時この種の物語繪が貴族の間に多數

本・群書類從本・植松茂岳が持てる寫本）のこと、解釋は俗語にあてて、よく通ずるものは片假名にて書きたること、官のみあげたる傍に人名をあつる際は、主として傍註によりたれど、類從本と違へる所、もしくはあやまれりと思はるるところとは、その場所に斷れること、傍註本にて意通ずるものは、これに從ひ、官位につきては傍註本の卷末に載せたものによれる事、傍註所載の系圖は安藤爲章の「紫家七論」のまゝなれば、今取らず、紫式部が事につきては、「源氏物語」の諸抄を見るべきこと、裝束のことは專門家にあらざるが故に詳しからず、有職家につきて聞くべきこと、送假名の必要なるものは、原本になけれど附したる

て事の足りる部分をば、悉く省いて載せなかつた爲め、兩者併せ見なければ事足らぬ不便が生じた。しかし「紫式部日記」の註釋書としては、足立稻直の「紫式部日記解」と共に、重要な著述である。研究者の必ず一讀すべきものである。〔池田〕

紫式部日記傍註（むらさきしきぶにつきばうちゆう）

註釋書　二卷二册【著者】壺井義知【成立】上卷の初めに、享保己酉の年、藤原隆英の漢文の序があり、下卷の終りに、著者の漢文の跋がある。その一節に、「難ㇾ解者略標記傍註以便ニ看讀一門人谷村光義更撮ニ取言ニ五節舞姫之事一者上以附ㇾ後而與ニ本書一相發遂附ニ之剞劂一以與ニ于門下之士一云爾」とあり、更に谷村光義の

納言となつた寛弘七年以後のものである筈である。その書簡の部分が、六年正月三日と十一日との間に混入してゐるのはをかしい(一説にこの日記全體が他人に與へるために書かれたものであるとの説もある)。或は、この日記が一度散佚した後に、後人によつて、かく粗雑に綴ぢ合はされてしまつたのかも知れない。さて日記の部分は、寛弘五年七月、秋の土御門殿の情趣に筆を起し、[illegible]の道長邸の様を記し、次に中宮御産の[illegible]、御産後の儀式等についてのべ、更に交友のこと、道長のこと、五節その他の公事のことなどを記し、翌六年正月の御戴餅のこと、翌七年正月のこと、三宮御五十日の公事などが細かに記されてゐる。所謂消息の部分は、同僚官女を批評し、齋宮の中將・和泉式部・赤染衛門・清少納言・左衛門内侍等の上に及び、處世又は藝術の諸問題について、教訓をのべたものである。

【史的地位】紫式部日記は、御産次第・公事・風俗・信仰等の文明史、又は風俗史の資料として重要であるのみならず、紫式部の閲歴・言行・性格等の研究資料としても貴重なる文獻である。文學作品として見れば、宮廷女流に於ける浪漫的精神が、和泉式部の「戀愛」から、「人間愛」に深まつた姿を示すのである。「紫式部日記」に於ける理想主義的傾向は、やがて「源[illegible]

[illegible]部日記 鈴木弘恭○紫式部日記[illegible]○紫式部日記講義 三木五百枝 ○新譯紫式部日記 與謝野晶子 ○紫式部日記精解[illegible]＝Diaries of Court Ladies of Old Japan, (Translated by Annie Shepley Omori and Kochi Doi.)　〔池田〕

紫式部日記繪巻 むらさきしきぶにっきゑまき 繪巻

【解説】現存四巻、蜂須賀侯爵・大阪藤田男爵・名古屋森川家・久松伯爵の四家に分藏されてをり、これを日記の本文によつて順序づけると、今多少の錯簡はあるが、大體蜂須賀本から順次久松本に至るのであつて、寛弘五年九月十三日皇子御産養の段から、この日記の末尾寛弘七年正月十五日公卿達の饗宴奏樂の段まで斷續してゐる。四巻合せて詞二十三段、繪二十四段を存し、その續き具合から察すれば、もと相當巻數の多かつたものかと思ふ。繪はすべて濃厚なつくり繪様式のもので、その衣裳や調度の細緻巧麗な描寫には、「源氏物語繪巻」(別項)にも厖行すべき纖美な趣が見られ、人物の姿態表現にも「紫式部日記」が仔細に記してゐる貴族生活のもの靜かな氣分が流露してゐる。ただその描寫は「源氏繪巻」に比し、色彩も感情も纖細に傾くと共に、人物の姿なども大きく豐かな調子を失ひ、畫因に於てもやゝ散文的になつて行く傾向が見られ、[illegible]

[illegible]賞玩され、知名の人々も筆を染めてゐ[illegible]ことであり、この日記の如きも、年代としてはその前後と見て大過ないであらう。而して藤原信實は當時大和繪の名家として知られた人であり、その作風から推察して、この繪巻を當代の宮紳作家に歸すべくば、これを信實に擬するは蓋し當れるに近い。詞の字體は朧の[illegible]い筆路にまがふかたなき後京極様式の典型が見られ、これを良經筆とする所傳の如きも亦當れるに近しと云ふべきか。(田中(一))

紫式部日記釋 むらさきしきぶにっきしやく 註釋書

四巻【著者】清水宣昭【成立】巻一の巻頭に、文政十三年九月四日の自叙がある。その前に、著者の師藤井高尙が、天保四年の春によせた序があり、巻四の終りに、癸巳(四年)冬鈴木朖の漢文の跋がある。これ等によつて成立の年月及び事情が明かである。翌五年の刊行。又のち「紫式部日記註釋」と題簽を改めて大阪鹿田書店の再刊したものもある。

【内容】巻一の巻首に、凡例として諸本(傍註本・群書類從本・植松茂岳が持てる寫本)のこと、解釋は俗語にあてて、よく通ずるものは片假名にて書きたること、官のみあげたる傍に人名をあつる際は、主として傍註によりたれど、類從本と違へる所、もしくはあやまれりと思はるるところとは、その場所に斷れること、[illegible]にて[illegible]するものは、これに從ひ、官[illegible]、この書の[illegible]を高尙に示したるに所々補[illegible]せられたれば、その由を附記してあげたる[illegible]。本書著述上の用意につきてのべてゐる。本文は先づ日記の文章を小節に分ち、これを前に擧げ、そのあとに一字づつ下げて註を加へ、註の[illegible]本との考異を示してゐる。國史や「榮華物語」等を[illegible]しらべ、廣く古書を調して考證してゐる。但し有職故實に關係したものは、多くこれを省いてゐる。

【價値】この書は、「紫式部日記」の註として第二に出たもの。語釋は相當に詳密で、また穏健である。俗語を以て解釋したことは、鈴木朖の「雅言譯解」(文政四年刊)などの影響であらう。註釋史上に新しい傾向を示したものである。ただこの書の缺點と見るべきは、第一、異本の探索の足らないこと、第二、有職故實に關する考證を避けたことの二點である。説としては、高尙・朖・正明・嘉甚等の影響が最も多く、奇拔な新説もない代りに、牽強附會の説もない。一般に啓蒙的ではあるが、傍註にて事の足りる部分をば、悉く省いて載せなかつた爲め、兩者併せ見なければ事足らぬ不便が生じた。しかし「紫式部日記」の註釋書としては、足立稻直の「紫式部日記解」と共に、重要な著述である。研究者の必ず一讀すべきものである。〔池田〕

紫式部日記傍註 むらさきしきぶにっきばうちゅう 註釋書

[illegible]

紫式部日記繪巻（藤田男爵家藏）

奥書を添へてゐる。各享保己酉（十四年）に記するところである。文政四年十二月補刻、大阪河内屋儀助刊行。【内容】本書は先づ巻頭に、紫女系譜と題して紫式部の系圖を載せ（安藤爲章の「紫家七論」中のもの）、「紫式部日記」「後拾遺」「河海抄」「榮華物語」等を引いて閲歴年代等を考證し、本文は「日記」の全文を多く假名にて書き下し、その右の傍に漢字をあて、

き書の一つである。

紫式部の巻（むらさきしきぶのまき）

〔池田〕

【作者】不明【成立】室町期か。冒頭の一節が同じく御伽草子の「小式部」（別項）の冒頭と殆ど同文である。何れかが他から借り用ひた事は明白であるけれども、その先後の斷定は出來ない。澄憲の小傳は「平家物語」（巻二）「源平盛衰記」（巻五）の座主流しの條、特に「盛衰記」

連歌部所收。【解説】その賦物（別項）は何路・何木・何船・何物・何人・手何・山何・片何・何目・唐何等で、賦物何屋の二十句の一巻が「平野法樂」として附せられてゐる。各百韻の發句は凡て夏季で、追加の何屋の發句も夏季である所から考へると、紫野で興行した千句を平野社の法樂としたか、或は千句だけを紫野で興行したかではあるまいかと考へられる。いづ

東京帝國大學大野本には、「東野州より古今傳授し侍りし頃、子息竹一丸みだり風に心地煩ひ侍りしかば、彼明神に祈る發句一をして立願し侍りしに、則ち忽り侍りき。報賽に三日あまりの程に仕りし千句也云々」とある。その祈つた發句といふのは、千句第一の何路の發句「なべて世の風ををさめよ神の春」であらうか。

奥書を添へてゐる。各享保己酉（十四年）に記するところである。文政四年十二月補刻、大阪河内屋儀助刊行。【内容】本書は先づ巻頭に、紫女系譜と題して紫式部の系圖を載せ（安藤爲章の「紫家七論」中のもの）、「紫式部日記」「後拾遺」「河海抄」「榮華物語」等を引いて閲歴年代等を考證し、本文は「日記」の全文を多く假名にて書き下し、その右の傍に漢字をあて、或は片假名を以て訓み方を示し、註を要するものは、その語の右に「注ヽ上」と略記して頭註を加へ、異本と校合して異なる場所には右傍に異本の本文を掲げ、イと略號を附して居り、假名にあてた漢字は失當のものもある。片假名のよみ方は、女官（ニョウクハン）・伴僧（バンゾウ）など、初學者のために便利である。又頭註は有職故實等考證に關するものが主である。校合は所々試み、「脫字アルカ」など疑ひを存してゐる所もある。又段落を示すために「御産氣ノ一」「御誕生ノ一、九月十一日」等標記した所もある。巻末に附した後補は、五節の舞に關して「本朝令」「續日本紀」「本朝文粹」「雲圖抄裏書」等を引いて考證し、日蔭蘿に關して、「類從雜要抄」「古事記」上巻「延喜式」「和名抄」等を引いて繪圖を示し、私考を加へたもので、これは著者の門人谷村光義（石清水社士）の錄したものである。なほ上巻の巻末に、寛弘五年、下巻の巻末に寛弘七年の公卿の補任を抄出列記してゐる。【價値】この書は「紫式部日記」研究の最初のもので、本文には明かな證據はないが、たしかに邦高親王本を用ひたらしい。註釋は殆どないけれども、有職故實に關しては、信ずべき頭註が加へてあり、傍に施した漢字も、時に失當なものもあるが、語意を解釋するのに便利であつて、參考すべき書の一つである。【池田】

紫式部の巻（むらさきしきぶのまき）　御伽草子　一巻

【作者】不明【成立】室町期か。冒頭の一節が同じく御伽草子の「小式部」（別項）の冒頭と殆ど同文である。何れかが他から借り用ひた事は明白であるけれども、その先後の斷定は出來ない。澄憲の小傳は「平家物語」（巻二）「源平盛衰記」（巻五）の座主流しの條、特に「盛衰記」の文に基いたかと思はれる。謠曲文と直接の關係はないやうである。【諸本】古板本は明曆四年板（藤井五兵衞）。御伽草紙（有朋堂文庫）所收。【解說】紫式部が賢女で和歌に達してゐた事、石山の觀音を信仰してゐた事、大齋院からの所望により上東門院の命を受けて、石山に籠つて「源氏物語」五十四帖を書いた事を初めに記し、通憲入道信西の末子安居院の法印澄憲僧都が、狂言綺語の罪で墮獄してゐる紫式部の苦患を救ふため、石山寺で源氏供養をして表白を述べることを主にして綴つてある。謠曲の「源氏供養」、古淨瑠璃の「源氏供養」（別項）と同材。聖覺法印（澄憲の子）の「源氏表白」に據つて作つたものである。作者を父と混同してあるが、表白の文は「湖月抄」に附する所のもの、及び吉野の吉水神社所藏の「源氏供養願文」（これは女惠法印の作としてある）と大同少異である。紫女の墮獄說は「寶物集」巻第四（不妄語戒沙汰の事）、「今鏡」第十、「今物語」等にも見えてゐる。【島津】

紫ノ色主（むらさきのいろぬし）　連歌　一巻　【作者】不明【成立】何木・何船・何物・何人・手何・山何・片何・何目・唐何等で、賦物何屋の二十句の一巻が「平野法樂」として附せられてゐる。各百韻の發句は凡て夏季で、追加の何屋の發句も夏季である所から考へると、紫野で興行した千句を平野社の法樂としたか、或は千句だけを紫野で興行したかではあるまいかと考へられる。いづれにしてもこの千句は、平野社の法樂としたものであらう。

【附記】そのうち、主なる千句を擧げる。

【文安千句】文安二年八月十五夜の月千句で、作者は、宗砌・專順・日晟・生阿・在阿等。續群書類從連歌部所收。

【寶德千句】寶德四年三月十二日の千句で、作者は、宗砌・賢盛・專順・忍誓等。續群書類從連歌部所收。

【河越千句】文明元年河越の大田道眞の館で興行したもの。作者は心敬・道眞・宗祇等。續群書類從連歌部所收。

【熊野法樂千句】作者は細川勝元・心敬・專順・行助・宗祇等。續群書類從連歌部所收。

【太神宮法樂伊與千句】天文十二年五月二十二日、伊豫の今城肥前守平能親發起の千句で、作者は、宗牧・周桂・永閑・壽慶・能阿等。續群書類從連歌部所收。

【石山千句】石山世尊院で興行したもの。作者は、紹巴・仍景・心前等。永祿七年の興行か。續群書類從連歌部所收。

【出陣千句】永正元年十二月二十五日、豆州三島社頭に於ける今川氏親の獨吟。續群書類從連歌部所收。

【三島法樂宗祇獨吟千句】文明三年正月、宗祇が東野州の息子のために祈請を籠めた千句。東京帝國大學大野本には、「東野州より古今傳授し侍りし頃、子息竹一丸みだり風に心地煩ひ侍りしかば、彼明神に祈る發句一をして立願し侍りしに、則ち怠り侍りき。報賽に三日あまりの程に仕りし千句也云々」とある。その祈つた發句といふのは、千句第一の何路の發句「なべて世の風ををさめよ神の春」であらうか。

【十花千句】永正十三年三月十一日、聽雪（三條西實隆）公を初め、肖柏・宗碩・宗長・玄清・壽慶等の賦したもの。十百韻皆發句に花を賦してある。

【太神宮法樂兩吟千句】一名を伊勢千句とも、高國法樂千句とも、宗長・宗碩兩吟千句ともいふ。大永四年八月四日、伊勢二頭太夫館で、細川高國の武運を祈るために兩人の興行したもの。聽雪公の加點がある。後、加註の書も出來た。

【名所千句】宗祇が山城・大和より壹岐・對馬に至る全國の名所を國分にして賦したもの。巻末に宗祇の奥書がある。

【紹巴父追善千句】紹巴が父の追善のために、天文二十四年三月二十六日より晦日までに賦したもの。大和塔尾で賦したので、塔尾千句ともいふ。

【稱名院殿追善獨吟千句】稱名院實隆二七日追善のため、紹巴が永祿六年十二月十日より十八日までに賦し、自ら註を加へて毛利元康・成田泰親等に與へた自筆本がある。

【西國出陣千句】天正六年五月十八・十九の兩日、豐臣秀吉西國出陣に當つて興行した。作者は照光院宮道晃法親王・秀吉・紹巴・昌叱等。

【毛利千句】一名を嚴島千句とも、又紹巴昌叱兩吟千句ともいふ。文祿三年安藝宰相毛利輝

元が、祖父の供養のため萬句執行を企てた時、兩人が五日間に賦したもので、同年五月兩人が註を加へた自筆本が毛利公爵家にある。

〔荏柄法樂千句〕一に鎌倉千句ともいふ。猪苗代兼如の獨吟で、慶長十三年十月、伊達政宗の張行に係り、荏柄天神に奉納したもの。

〔伊達綱村千句〕寶永三年六月より十一月までに、仙臺侯伊達綱村が觀世音奉納のため、十普門を千句に賦したもの。自筆本十卷が伊達伯爵家にある。

〔福井〕

むら竹（むらたけ）　小說集　二十卷　【本題】小說むら竹　【著者】饗庭篁村　【刊行】明治二十二年七月より同二十三年十一月に亙る。【內容】明治十七年頃より同二十三年までの間に、著者が讀賣新聞・新小說・朝日新聞等に揭載した小說・傳記・紀行・隨筆等を集收したもの。篁村著作全集の觀がある。目次を左に揭げる。

〔一〕玉簾・窓の月・下宿屋。〔二〕走馬燈・摑まへ所・他山の石・松の雨。〔三〕婿撰み・深山木（飜譯小說）・涼み臺。〔四〕薮椿・三筋町の通人・人の噂。〔五〕水の流れ・義理の柵・目鏡（飜譯小說）・驅落の驅落。〔六〕今年竹・俳諧氣違・藝が身の毒。〔七〕魂膽・病の原因・舊恩に酬ふ・雪の下崩。〔八〕影法師・チャールスヂツケンス傳（傳記）・ムヅカシヤ・軒の垂氷。〔九〕跡取息子・時の用・振分道・人の行末。〔十〕閻の梅・文の間違・大阪の話し・權妻の果・近眼の失策。〔十一〕面目玉・俳優氣質・夜の錦・つり堀・中よし。〔十二〕擬博多・畔雨の舍り・兒手柏・廻り車。〔十三〕煩惱の月・腹の子・大石眞虎の傳（傳記）・當世寫眞鏡上（小語集）。〔十四〕暗の鳥・緣の絲・メカシ損・當世寫眞鏡中（小語集）。〔十五〕孝女の幸ひ・作り菊・絲の亂れ・當世寫眞鏡下（小語集）。〔十六〕苦樂。〔十七〕蓮葉娘。〔十八〕對扇・紅葉・小町頌。〔十九〕川ぞひ柳・新殺生石・驅めぐりの記（紀行）。〔二十〕鹽原入浴の記・秩父小記・房州一見の記・木曾道中記（以上紀行）・もしほ草（隨筆）。

【批評】この集が二十二年に出て、饗庭篁村の名は一般讀書界に廣く知られるに至つた。「むら竹」は、大體十七年以降の小說を主として集めたもので、作家としての篁村は春廼屋よりも先輩であり、明治二十年前後に於ては文壇的には既に大家の地位を占めてゐた。更に又「むら竹」が文學史上興味ある研究對象となるのは、新聞小說（別項）の先驅たるいはゆる續き物から新聞小說への過渡期を示してゐる點である。卽ち創作意識が全く稀薄で、舊戲作者の筆に成る讀物そつくりな小說と創作意識のやゝ強い小說らしい小說とが收まつてゐて、混沌たる變遷の跡が明瞭に看取される。集中の小說そのものに就いていへば、叙述の輕妙と獨特のユーモアと、世故・人情の穿ちから成る一種の藝術境とをもつてはゐるが、何れも單純なストオリイで、人物の描寫にも筋の運びにも根深いところはなく、有りふれた市井の一瑣事をただ輕妙な文辭で描いたといふだけのものが多い。その雰圍氣は根本に於て舊戲作者の世界のそれであり、新時代の意識は格別感じられない。敎訓・勸懲の意志は、ほのかに見えてゐるが、さればとて人生指導の大理想を揭げるのでもない。ただ敎養が該博であり、言辭が洒脫輕妙を極めてゐるので、尋常のお談義とは倫を異にしてゐる。〔柳田（泉）〕

村山松根（むらやままつね）　歌人　【家號】清遠樓　【生歿】文政五年九月薩摩に生れ、明治十五年一月四日、京都に歿す。享年六十一。【墓所】京都紫野聚光院　【閱歷】父は薩摩藩士樺山資滿、松根はその第三子で、幼名三之助、十八歲で木村氏を嗣ぎ仲之丞と改めた。嘉永二年同志と共に藩政を革新しようとしたが、事露れて首謀者は自殺を命ぜられ、松根も幽閉數年に及んだ。後、脫走して筑前に行き、黑田侯の庇護により辛うじて難を免れた。かくて彼は北條右門と變名し、京都に赴いて勤王諸士と交り、盛んに王事に奔走したが、西鄕隆盛が大島に流された際、彼も姬島に流された。召還された後は、村山齊助と改名し、京都留守居副役となり、後、中川宮御附・近衞家奧用人となり、更に宮內省に仕へ、又梨本宮家令となつた。晚年には京都華族歌道師範となつた。家集は「忘貝」といひ、外に「書島の波」の著がある。【歌風】知紀の流れを承けて花鳥風月を詠じた作が多く、知紀の溫雅流麗に纖細な趣の加はつてゐるのをその特色とする。「瀧めぐりする人ならで誰か見むきさの小川の山吹の花」など、その一例に擧げることが出來る。また情を抒ぶる場合にも、「秋はてゝ今も梢にありの實のありやなしやととふ人もなし」（筑前にさすらへをりける）の如く、打ちつけに現はさないで餘情を含ましめてゐる。〔相原・金子〕

室生犀星（むろふさいせい）　小說家・詩人　【本名】照道　【別號】魚眠洞　【出生】明治二十二年八月一日金澤市裏千日町に生れた。【閱歷】父は山畠彌左衞門、世祿二百石を領した。初め赤井姓を、後、室生姓を繼いだ。父に就いて經典を修めた以外には、これといふ學歷はない。十七歲の時「新聲」に詩を投書して兒玉花外に選ばれ、初めてその作が揭載された。後、「朱欒」誌上に一家として紹介されて詩壇に進出し、二十九歲、自費を以て處女詩集「愛の詩集」を上梓した。詩友としては、萩原朔太郎と最も古くから誼を結んでゐる。曾て雜誌「卓上噴水」を發刊し、後に故山村暮鳥・萩原朔太郎等と共に詩雜誌「感情」を發行し、次第に詩人として重きをなしたが、大正中期に至り小說家として轉身し、爾來今日に及んでゐる。

【著作】〔小說集〕性に眼覺める頃○美しき氷河○結婚者の手記○香爐を盜む○毒草園○走馬燈○鯉○室生犀星集○青い猿。〔詩集〕愛の詩集○抒情小曲集○第二愛の詩集○忘春詩集○室生犀星詩集○鶴等。

【作風】初期の小說は、「文章世界」の「泥濘の街裏にて」を初め、主に作家の窮乏時代を材料としたものが多く、陰慘と汚濁に滿ちた世界を、怪奇な形容法と重苦しい雰圍氣で表現した特異な作家として注目され、「幼年時代」（大正八年八月、中央公論）が最も世評を喚んだ。昭和期に入つても、時代文壇の傾向から獨立して自己の特色を保つことに變りはないが、ただ次第に一家の風格を完成し、戀愛の心理交錯を分析した現實主義や獨自の趣味から人生を眺めるやうな多角な題材を捉へると共に、文體に於ても、詩人的な淸澄な點に成功しつつある。更に詩の方面を見れば、初めは寧ろ素朴と情熱との野生兒として天眞の抒情詩を書き、次いでドストエフスキーに深く傾倒し、その詩にも敎養と人道とを思ふに至つたが、その後、詩風は又轉じて、自ら東洋枯淡の裡に生々の氣を潛むるに至つた。〔千葉・北原〕

室君（むろきみ）　「神事物の謠曲」を見よ。

室伏高信（むろぶしたかのぶ）　評論家　【閱歷】明治二十三年、神奈川縣足柄郡土肥村に生れた。順天中學校を卒へて明治大學に入學、半途にして退き、大正三年、時事新報記者となり、同五年、轉じて東京朝日の政治部記者となつた。その後、新聞記者生活を離れ、大正八年、雜誌「批評」を創刊し、社會主義に關する研究・

評論等を發表、傍ら「改造」その他に寄稿した。同九年、改造社海外特派員として歐米を歷遊、時々その通信文を「改造」誌上に載せた。歸朝後、漸く思想上に變化を生じ、「靈の王國」等を上梓したが、アジア主義乃至東方主義に傾くに及び、「文明の沒落」「土に還る」等を刊行した。更にその傾向が日本主義的となるに及び「日本論」を公にし、又「日本はどうなる」と題するが如く、自然があらゆる善惡を包容するが如く、人間の自然を認めようとしてゐる態度が推知される。これは古來大藝術家が、最後に到達した神の如き態度である。相せめぎ相爭ふ人間同士の平野から飛躍して、神の世界に攀ぢ登つた時、人間はすべて憐むべき生物に見える。作者自らは、則天去私を標語としてこの悲壯なる最後の到達を說明しようとしてゐる。

すれつからしがお延にたきつけ、お延は津田の過去に對して疑惑を懷くやうになつた。お延は津田の妹のお秀から聞き出さうとしたが成功しなかつた。事件は津田が手術のため入院してゐる頃から持ち上り、お延の疑惑は解けないまゝで津田は退院し、靜養の名義で津田は或る溫泉場へ轉地した。其處には淸子がひとりで湯治に行つてゐた。そのことを津田

纂掛では、蒐集した二十六種中から祕閣本・同補寫本・野宮家本・冷泉家本・柳原家本・黑川氏本・阜稻田大學圖書館藏本の七種を、特に善本として校合した。國書刊行會本はこの史料編纂掛校合本を底本としたものである。【解說】國書刊行會本によれば、治承四年から嘉禎元年に至る五十六年間の日記で、卷一は、治承四年（一一三〇・夏・七・九・冬）・五年（春・夏・八・九・十一・

涼み臺。【四】薮椿・三筋町の通人・人の噂。【五】水の流れ・義理の柵・目鏡(飜譯小說)・驅落の驅落。【六】今年竹・俳諧氣違・藝が身の毒。【七】魂膽・病の原因・恙恩に酬ふ・雪の下崩。【八】影法師・チャールスデツケンス傳(傳記)・ムヅカシヤ・軒の垂氷。【九】跡取息子・時の用・振分道・人の行末。【十】闇の梅・文の間違・大阪の話し・權妻の果・近眼の失策。【十一】面目玉・俳優氣質・夜の錦・つり堀・中よし。【十二】擬博多・時雨の舍り・兒手柏・廻り車。【十三】煩惱の月・腹の子・大石眞虎の傳(傳記)・當世寫眞鏡上(小語集)。【十四】暗の鳥・緣の絲・メカシ損・當世寫眞鏡中(小語集)。【十五】孝女の幸ひ・作り菊・絲の亂れ・當世寫眞鏡下(小語集)。【十六】苦樂。【十七】蓮葉娘。【十八】對扇・紅葉・小町娘。【十九】川ぞひ柳・新發生石・腦めぐりの記(紀行)。【二十】鹽原入浴の記・狹久小記・房州一見の記・木

の一瑣事をただ輕妙な文辭で描いたといふだけのものが多い。その雰圍氣は根本に於て舊戯作者の世界のそれであり、新時代の意識は格別感じられない。教訓・勸懲の意志は、ほのかに見えてゐるが、さればとて人生指導の大理想を揭げるのでもない。ただ教養が該博であり、言辭が洒脫輕妙を極めてゐるので、尋常のお談義とは倫を異にしてゐる。〔柳田(泉)〕

村山松根(むらやままつね)　歌人　【家號】清遠樓　【生歿】文政五年九月薩摩に生れ、明治十五年一月四日、京都に歿す。享年六十一。【墓所】京都紫野聚光院　【閱歷】父は薩摩藩士樺山資滿、松根はその第三子で、幼名三之助、十八歲で木村氏を嗣ぎ仲之丞と改めた。嘉永二年同志と共に藩政を革新しようとしたが、事

さすらへをりける)の如く、打ちつけに現はさないで餘情を含ましめてゐる。〔相原・金子〕

室生犀星(むろふさいせい)　小說家・詩人　【本名】照道　【別號】魚眠洞　【出生】明治二十二年八月一日金澤市裏千日町に生れた。【閱歷】父は山畠獺左衞門、世祿二百石を領した。初め赤井姓を、後、室生姓を繼いだ。父に就いて經典を修めた以外には、これといふ學歷はない。十七歲の時「新聲」に詩を投書して兒玉花外に選ばれ、初めてその作が揭載された。後、「朱欒」誌上に一家として紹介されて詩壇に進出し、二十九歲、自費を以て處女詩集「愛の詩集」を上梓した。詩友としては、萩原朔太郎と最も古くから誼を結んでゐる。曾て雜誌「卓上噴水」を發刊し、後に故山村暮鳥・萩原朔太

評論等を發表、傍ら「改造」その他に寄稿した。同九年、改造社海外特派員として歐米を歷遊、時々その通信文を「改造」誌上に載せた。歸朝後、漸く思想上に變化を生じ、「靈の王國」等を上梓したが、アジア主義乃至東方主義に傾くに及び、「文明の沒落」「土に還る」等を刊行した。更にその傾向が日本主義的となるに及び「日本論」を公にし、又「日本はどうなる」と題する長篇論文を公にして、日本文化の優越について闡明した。最近には「中外日報」に三澤村移住後の身邊雜記「三澤村日記」を連載し、省察的な讀物として讀書界に愛讀された。近時は讀賣新聞に執筆しつつある。著書頗る多く「アメリカ、其經濟と文明」「新英雄傳」「室伏高信集」「支那は起上る」等の近著の外「ギルド社會主義」「社會主義批判」等がある。〔高須〕

室町文學(むろまちぶんがく)　「鎌倉室町時代文學」を見よ

め

明暗(めいあん)　小說　【作者】夏目漱石　【發表】大正五年五月二十六日から東京大阪兩朝日新聞に連載し、百八十八回まで書いて作者は胃潰瘍のため斃れ、未完成のまゝ遺された。【刊行】翌年一月、岩波書店。漱石全集第七卷・同普及版第十卷所收。

【梗概】津田由雄はお延と結婚する前に清子を愛してゐた。吉川夫人が二人をつなぎ合せたのであつた。二人は結婚するものと思はれてゐた。ところが突然清子は關の所へかたづいてしまつた。そのことをお延は結婚して後まで知らなかつた。津田の舊友で小林といふ

すれつからしがお延にたきつけ、お延は津田の過去に對して疑惑を懷くやうになつた。お延は津田の妹のお秀から聞き出さうとしたが成功しなかつた。事件は津田が手術のため入院してゐる頃から持ち上り、お延の疑惑は解けないまゝで津田は退院し、靜養の名義で津田は或る溫泉場へ轉地した。其處には清子がひとりで湯治に行つてゐた。そのことを津田は吉川夫人に聞き、同夫人に勸められて出かけて行つたのである。二人は秋のなごやかな陽光に圍まれた溫泉宿の一室で對坐した。

【批評】これまでの作者のすべての作品は、この一篇の大成の準備として用意されたものであつたと云つた人があるが、考へ方に依つては、それが必ずしも誇張した言葉にも響かない。それほど集大成的な企畫的な野心的な作品である。もはや單なる浪漫的なものでもなく、また單なる寫實的なものでもなく、深大な批判的思想の基礎の上に立つて自由な想像力を働かせ、鋭い觀察と精確な描寫を以て、驚くべき大タペストリを織り上げようと計畫してゐたことは、菊判七百四十五頁の大册が、恐らく全機構の半ばを過ぎたに過ぎないものではあるまいかと思はれるに依つても推察される。形の上から見てこの作品はかくの如く未完成ではあるが、併し「心」(別項)に於て自我主義の本質を解剖して人間ぎらひの思想に正當な理由を與へ、次の「道草」(別項)に於て再び自我主義を取り扱つて運命の如何ともする能はざる偉力に對する絕望を示した作者は、「明暗」に於て今一度自我主義を問題とはしたけれども、もはや作者は徒らに人間の罪を責めず、必ずしも世間の陋を怒らず、より廣き寬容の心を以て、天がすべての賢愚を一視するが如く、人間の自然があらゆる善惡を包容するが如く、人間の自然を認めようとしてゐる態度が推知される。これは古來大藝術家が、最後に到達した神の如き態度である。相せめぎ相爭ふ人間同士の平野から飛躍して、神の世界に攀ぢ登つた時、人間はすべて憐むべき生物に見える。作者自らは、則天去私を標語としてこの悲壯なる最後の到達を說明しようとした。それが藝術的製作として遂に實現されないで死のために中斷されたのは、實に惜しみても餘りあることである。〔野上〕

名家隨筆集(めいかずいひつしふ)　隨筆　二册　【校訂者】武笠三　【刊行】大正三年、有朋堂文庫第一輯の一部として刊行。【內容】江戶期名家の著名なる隨筆九種を選んだもので、目次は左の如くである。

〔上卷〕　駿臺雜話・獨語・梧窓漫筆　〔下卷〕　たはれぐさ・梅園拾葉・筆のすさび・雲萍雜志・春波樓筆記・梅園叢書。

名家漫筆集(めいかまんぴつしふ)　隨筆　一册　【編者】博文館　【刊行】明治三十六年、續帝國文庫第五十編として刊行。【內容】編者が校訂の意味で、原本に多少の加筆した所のあるのはこの文庫の通弊である。所收九種、目次は左の如くである。

雲萍雜志・假名世說・孝經樓漫筆・蜘蛛の絲卷・愚雜俎・理齋隨筆・瓦礫雜考・翁草・玄同放言。〔和田〕

明月記(めいつき)　日記　三卷　【著者】藤原定家　【名稱】「定家卿消息」(每月抄)に「去元久比住吉參籠の時、汝月明らかなりと冥の靈夢を感じ侍りしによりて、家風に備へんために明月記を草しをきて侍事、身には過分のわざとぞ思給る」とある。「照光記」とも云つた。

【諸本】傳本頗る多く數十種に及ぶが、史料編纂掛では、蒐集した二十六種中から祕閣本・同補寫本・野宮家本・冷泉家本・柳原家本・黑川氏本・早稻田大學圖書館藏本の七種を、特に善本として校合した。國書刊行會本はこの史料編纂掛校合本を底本としたものである。【解說】國書刊行會本によれば、治承四年から嘉禎元年に至る五十六年間の日記で、卷一は、治承四年(二・三・夏・七・九・冬)・五年(春・夏・八・九・十一・十二)・文治四年(四・九)・建久二年(八・十二・閏十二)・三年(三・四・五)・七年(二・三・夏・七)・八年(八・十二)・九年(正・二・十二)・正治元年(春・夏・秋・十二)・二年(春・四・秋・冬)・建仁元年(三・四・六・秋・冬)・二年(春・夏・秋・十・十一)・三年・元久元年・二年・建永二年(五・六・秋・冬)。補遺、建久元年(十二)・五年(十二)・六年(十二)。卷二は、承元元年・二年・建曆元年(秋・冬)・二年(正・二・夏・秋・冬)・建保元年(正・二・夏・秋・冬)・二年(春・八・十・十二)・三年(正・八・九・冬)・四年(正・五・七・十一・十二)・五年(春・四・六・七)・六年(正・七・八・十二)。承久元年(閏二)・嘉祿元年(春・夏・冬)・二年。卷三は、安貞元年(春・四・秋・冬)・二年(三・夏・秋・冬)・寬喜二年・三年(春・秋)・貞永元年(六・十)・二年・文曆元年(二・三・五・六・秋)・嘉禎元年(春・夏・冬)。補遺、建仁二年(十二)・建保二年(八)を載せてある。「後鳥羽院熊野御幸記」一卷はこの記の一部で、「明月記略」(明月記附錄)一卷も亦この記の中の歌道に關したことの抄錄なので、共に日次に從つて編入してある。また祕閣本幷に野宮本に「明月記補遺」二卷あるが、その中、日次の推定出來るのは本書中に編入し、その他は卷末に補遺として載せてある。

【價值】定家の業績・周圍、和歌・歌學に關する事蹟、朝廷に於ける政權爭奪の事情、公武間の關係等、鎌倉時代の文學・政治等を考へる上

文體に於ても、詩人的な清澄な點に成功しつつある。更に詩の方面を見れば、初めは寧ろ素朴と情熱との野生兒として天眞の抒情詩を書き、次いでドストエフスキーに深く傾倒し、その詩にも敎養と人道とを思ふに至つたが、その後、詩風は又轉じて、自ら東洋枯淡の裡に生々の氣を潛むるに至つた。〔千葉・北原〕

室君(むろきみ)　「神事物の諧曲」を見よ。

室伏高信(むろぶせたかのぶ)　評論家　【閱歷】明治二十三年、神奈川縣足柄郡土肥村に生れた。順天中學校を卒へて明治大學に入學、半途にして退き、大正三年、時事新報記者となり、同五年、轉じて東京朝日の政治部記者となつた。その後、新聞記者生活を離れ、大正八年、雜誌「批評」を創刊し、社會主義に關する研究・

に重要な資料の一である。　〔石村〕

名月八幡祭（めいげつはちまんまつり）　脚本　世話物

【作者】池田大伍【發表】大正七年雜誌「新時代」。【刊行】池田大伍集現代戲曲全集所收。【初演】大正七年八月、東京歌舞伎座。

〔役割〕縮屋新助（市川左團次）、船頭三次（市川壽美藏）、旗本藤岡慶十郎（市川三升）、幇間壽鶴（市川鶴藏）、魚惣（中村歌六）、魚惣女房お竹（中村雀右衞門）、松本の女房おつた（市川松蔦）、母およし（市川左升）、藝者美代吉（澤村源之助）。

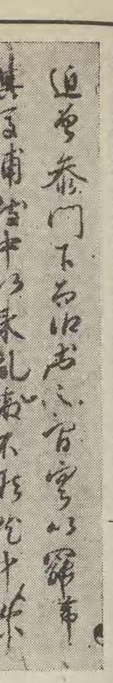
【題材】河竹默阿彌作「八幡祭小望月賑」（縮屋新助）の改作である。

【梗概】〔序幕〕（深川八幡二軒茶屋松本）祭禮も程近い殘暑の日。大身の旗本藤岡慶十郎に聘ばれて、松本に來てゐる深川仲町の藝者美代吉は、派手な氣性から今は金に詰つてゐる。情夫の船頭三次が無心に來て、越後の縮屋新助の事で嫌味を言ふので、癇癪を起すが、結局辯を渡してやる。藤岡は金子を惠んで、意氣を命の深川藝者、しかし三次だけは止せと言ふ粹な言葉。が美代吉は今夜も例の船宿で出會ふために出掛けて行く。松本の女房と幇間壽鶴が、藤岡樣の心にほだされないやうでは、仲町藝者の張も本當でない、江戸も末だと嘆息する。（魚惣の隅田川に面した裏座敷）新調の祭衣裝に喜ぶ本卦がへりの魚惣の親爺。商賣と歸國の挨拶に來た縮屋の新助へ、祭禮前に歸國されては江戸の恥だと語り、新助も魚惣方に逗留し、見物して行く事にする。鐵砲洲の船宿で、三次と出會つた美代吉が、緣下の隅田川を通りながら新助へ色氣のある言葉を投げて行く。魚惣から美代吉に係り合ふなと意見されるが、新助は鐵砲洲の夜景を凝視して動かない。〔二幕〕（仲町美代吉住居）祭禮の二三日前、借金に惱む美代吉は自暴酒（やけ）である。母親は新助に金の算段を賴めと言ふが、仲町藝者の估券にかゝはると取合はない。訪問した新助を口輕く田舍の人にしては程がよいと褒めるので、初心な新助は喜ぶ。三次が無心に來る。そして拒絕する美代吉と新助との關係を邪推し、返報するとて走り去る。美代吉から苦しい世帶話を打明けられ、新助は百兩を調達する故三次と手を切り、自分の願ひをいれてくれと、突きつめた心を打明ける。一時借用する積りで據なく承諾すれば、新助は金の算段に行く。其處へ幇間壽鶴が、藤岡樣がこの度役附きのため、手切金といふ意味で金百兩を置いて行かれたと屆けに來る。暮六つの鐘、出來て見りや乙な音だねえと喜ぶ美代吉。三次が意趣晴しに來るが、押さへられて兩人酒宴となる。新助が漸く金の工面が出來て歸つて來る。好意は受けて金を返す美代吉へ「今更拒絕されては立つ瀨がない、愚弄するにも程があるとて立腹する。美代吉も癇癪を起し、縮屋を情夫にすれば、仲町藝者の恥だと痰呵を切る。魚惣が仲裁に入つて連れ歸らうとするが、家藏、田畑を捨賣りにして持參した金、新助には歸るに家鄕がない。悄然たる後姿、美代吉も一寸氣の毒になるが、すぐ酒に紛らす浮薄な江戸の女であつた。〔大切〕（深川仲町裏）祭の雜沓より遠ざかつた裏町、魚惣の若い者は、祭の混雜にまぎれて家出した新助を探してゐる。上氣した新助は往來の人々へ、田舍者でも口惜しい、俺は美代吉を殺害するのだと口走り、捕へようとする魚惣の若い者に、百兩の小判を撒いて哄笑する。そして田舍侍の刀を素早く抜き取つて走り去る。（仲町屋花屋前）仲町藝者の伊勢音頭、後見は美代吉である。永代橋が墜落した急報に祭りの若い者は皆救助に駈け參ずる。人は老少不定何時死ぬか分らぬと美代吉の述懷。新助が現はれて遂に殺害して了ふ。日が暮れかかる。（元の仲町裏）十五夜の月、新助は若い者に捕縛され、胴上にして連れて行かれるが、擔がれながらも、手拍子打つての高笑ひ。

【解說】この脚本の上演された大正七年頃は、古劇の研究、默阿彌物の再吟味、新歌舞伎劇の樹立等が提唱された時であつた。作者の意圖も恐らくは其處にあつて、「默阿彌風の世話物は、現代にては如何に書くべきか」に對しての答案を、この脚本を以て挺身實踐されたものらしい。周圍の事情に依つて刻々に變轉して行く、水商賣の女らしい輕佻浮薄な美代吉の心理過程と、正直で重厚で執拗な新助の一本氣な性格との對照が、同時に又江戸ッ子と田舍者との差異に對する描寫が、サラツと面白く表現されてゐて佳作である。殊に二幕目の美代吉住居の場に於ける人物の心の動き方には注目すべきものがある。が、上演に際して美代吉には、歌舞伎劇の老優澤村源之助が扮した爲めに、この纖細な心理過程に對し、認識不足な演技に終始して不評であつた。ただこの脚本全體の難を言へば、新助が逆上放心してからが、幾分氣障に生硬に感じられる事である。

【參考】棧敷から書齋へ　伊原青々園　○歌舞伎細見　飯塚友一郎　〔尾澤〕

明衡往來（めいがうわうらい）　往來物　【作者】藤原明衡【名稱】「雲州消息」「雲州往來」とも。出雲守藤原明衡の消息文集の義である。【成立】明衡が出雲守であつた時代の作かと思はれるが、その年代は確かでない。【諸本】大體二卷本・三卷本の二種に分れる。二卷本には唐橋家舊藏本（寫本二冊）がある。寬永十九年刊本と流布刊本（傳尊圓親王筆擬刻、寫文以前刊か）は四卷に分れてゐるが、もと上下二卷であつた形跡が明かであつて、二卷本の系統に屬する。三卷本には內閣文庫本（寫本三冊）がある。神宮文庫本（寫本三冊）、靜嘉堂文庫本（寫本三冊）、群書類從本（刊本二冊）は、共に上中下の三卷が各本末に分れてゐる。三卷本は二卷本に比して內容多く體裁も整つてゐる。この方が原形に近く、二卷本はこれから拔萃したものであらう。古寫本としては法隆寺所藏「悉曇字記」の紙背に書寫したもの（平安朝末期書寫）があるが前後完備せず、拔抄したもののやうである。【內容】男子用の書簡文を集めたもので、每卷一月より月を追つて進狀とこれに對する返狀とを並べ擧げてゐる。終りには、日附のないものもある。內容は延臣の生活に關するもので、恒例臨時の儀式・行事から、遊覽・興會その他日常の雜事に亙つてゐる。文は當時この種の文に用ひられた變體の漢文で、故事成語など典據あるもの多く、童蒙のこの種の文を學び、日常生活に必要な諸般の事物の名目や文字を習ふための教科書として編せられたもののやうである。【價値】この書に現はれたものは日常の宮廷生活であるから、平安朝文學の背景を研究するには逸すべからざるものである。又中には祭禮見物の記事などに庶民の生活を寫したものもあつて、民間の藝能や信仰などの研究にも參考になる。【影響】この書は平安朝にはじまり江戸時代に至るまで、普通敎育の敎科書として盛んに作られ用ひられた往來物（別項）の根源をなすものである。往復の書簡を並べ擧げたのは、「社家立成」の



如き支那の書儀の書から示唆を受けたものかも知れないが、我が國に於て、はじめてかやうな體を創めて、後世に多大の影響を及ぼした功は極めて著しい。この書自身も、後に幾多の同種の書が現はれたに拘はらず、江戸時

歌右衞門）。

【諸本】複本虎彥集（世話狂言傑作集）所收。

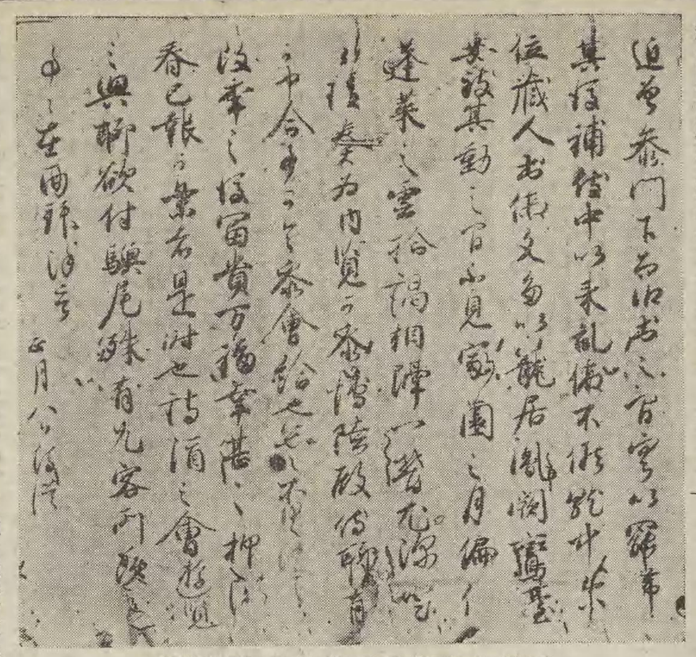
【題材】肥前伊萬里有田に遊んだ作者は、親しく柿右衞門の作る陶器の精巧さに一驚した。後、飜讀した外國小說より暗示を得て、飜案したものであると言ふ。但し明治初年、佐橋富三郎（別項）の作のある事を注意すべき

より取出す金銀五色に輝いた皿。それを見た柿右衞門は、十年この方、夢に見た赤繪が出來たと嬉し涙にくれる。それは又娘お通の敵を打つた事でもあつた。

【批評】書卸し以來、片岡仁左衞門に依つてのみ上演されてゐる。それは名利の念に薄い意地強い名人柿右衞門の性格が、仁左衞門の性格と完全に符合してゐるために、舞臺面に一

【種類】國文法では、名詞の分類をする必要はない。ただ固有名詞と普通名詞の別は知つておく方が便である。前者は地名・人名など、或る個體の名であり、後者は多くの個體に通じて用ひられる名である。【特徵】國語の名詞は、形態の上に特別なる文法的約束を發達させてゐない。西洋諸國に於ては、名詞に男性・女性・中性を區別し、單數・複數を區別し、又主

氣を命の深川藝者、しかし三次だけは止せと言ふ粋な言葉。が美代吉は今夜も例の船宿で出會ふために出掛けて行く。松本の女房と幇間壽鶴が、藤岡様の心にほだされないやうでは、仲町藝者の張も本當でない、江戸も末だと嘆息する。(魚惣の隅田川に面した裏座敷)新調の祭衣裳に喜ぶ本卦がへりの魚惣の親爺。商賣と歸國の挨拶に來た縮屋の新助へ、祭禮前に歸國されては江戸の恥だと語り、新助も魚惣方に逗留し、見物して行く事にする。鐵砲洲の船宿で、三次と出會つた美代吉が、緣下の隅田川を通りながら新助へ色氣のある言葉を投げて行く。魚惣から美代吉に係り合ふなと意見されるが、新助は鐵砲洲の夜景を凝視して動かない。〔二幕〕(仲町美代吉住居)祭



悉皿学記紙背明衛往來 (法隆寺藏)

如き支那の書儀の書から示唆を受けたものかも知れないが、我が國に於て、はじめてかやうな體を創めて、後世に多大の影響を及ぼした功は極めて著しい。この書自身も、後に幾多の同種の書が現はれたに拘はらず、江戸時代までも引續いて、習字手本として用ひられたのであつて、後世の言語文章の上に直接に影響するところがあつたと思はれる。(往來物參照)

〔山岸・橋本〕

名工柿右衛門 めいこうかきえもん

脚本　三幕

三場　世話物　【作者】榎本虎彦　【興行】大正元年十一月三日、歌舞伎座初演。

【役割】酒井田柿右衛門(片岡仁左衛門)、弟子栗作(市村羽左衛門)、有田屋五兵衛(市川八百藏)、倅平三郎(片岡市藏)、中里兵太夫(市川段四郎)、柿右衛門の姉娘お通(市川門之助)、妹娘お種(中村歌右衛門)。

【諸本】榎本虎彦集(世話狂言傑作集)所收。

【題材】肥前伊萬里有田に遊んだ作者は、親しく柿右衛門の作る陶器の精巧さに一驚した。後、飜讀した外國小説より暗示を得て、飜案したものであると言ふ。但し明治初年、佐橋富三郎(別項)の作のある事を注意すべきである。

【梗概】〔序幕〕(肥前伊萬里有田屋)寛文元年九月、陶器問屋有田屋五兵衛は、陶工柿右衛門の製作する陶器を賣つて富有となつたので、倅平三郎へは、系圖正しき中里兵太夫の娘を嫁に貰ふことに定めて、許嫁の柿右衛門娘お通と別れさせた。〔二幕〕(柿右衛門住居)序幕の翌日。柿右衛門はこの十五年以來、明朝の萬曆赤繪の陶器を日本に於て創造せんと苦心中である。お通は書置して死を急ぐ。豫ねて五兵衛に娘の祝言を賴んでゐた柿右衛門は、自分の腕一本で有田屋の身代を潰して見せると憤慨する。妹娘のお種とそれに思ひを掛けてゐる弟子栗作は、前途を案ずる。〔大詰〕(有田皿山丸窯)同年十月二十日の夜。丸窯の前に默然たる柿右衛門、最早薪が不足勝ちだ。五兵衛が成就後販賣の權利讓渡を條件に、金子を融通しようと申出たが拒絶する。と、伊萬里の大火で有田屋は燒失、系圖も灰燼となり、平三郎は燒死した。五兵衛は茫然自失の體。栗作が丸窯より取出す金銀五色に輝いた皿。それを見た柿右衛門は、十年この方、夢に見た赤繪が出來たと嬉し涙にくれる。それは又娘お通の敵を打つた事でもあつた。

【批評】書卸し以來、片岡仁左衛門に依つてのみ上演されてゐる。それは名利の念に薄い意地強い名人柿右衛門の性格が、仁左衛門の性格と完全に符合してゐるために、舞臺面に一種の眞實性が表現されて、觀客の賞讃を得たからである。柿右衛門の名人氣質と五兵衛の商人氣質、姉妹二人の氣質の相異、弟子栗作の素朴な戀と平三郎の弱氣な戀など、あまりに器用に纏まり過ぎた感じで、詩趣に缺けてゐる。ただ其處を救ふのが、片岡仁左衛門の性格であり、藝風である。【史的地位】當時、時代物に於ては、團十郎と櫻痴とによる詩趣に乏しい活歷物(別項)が追々過去のものとなり、世話物に於ては、菊五郎と默阿彌との組合せによる千篇一律な情趣が殆ど喜ばれなくなつた。この時に當つて、今まで東都劇壇に餘り出現しなかつた脚本の一分野、世話物の名人物が、而も近代劇的な性格描寫に於て脚色されて現はれたのである。其處にこの作の劃期的な意義がある。

【附記】大正六年一月、東京明治座に於て再度上演に際し、序幕有田屋の場を伊萬里海岸の場と改修した。榎本虎彦門弟堀美雄の筆と思ふ。以後はその脚本に依つてゐる。

【參考】演藝書報(大正六ノ一二)　〔尾澤〕

名詞 めいし

國語學　【名稱】西洋文典から出たもので、和蘭文典に中野柳圃が始めてこれを用ひた。【解說】すべて事物の名稱として用ひられる體言(別項)。但し、事物とは極めて廣い意味に於て、事及び物の一切を指す。

【種類】國文法では、名詞の分類をする必要はない。ただ固有名詞と普通名詞の別は知つておく方が便である。前者は地名・人名など、或る個體の名であり、後者は多くの個體に通じて用ひられる名である。【特徵】國語の名詞は、形態の上に特別なる文法的約束を發達させてゐない。西洋諸國に於ては、名詞に男性・女性・中性を區別し、單數・複數を區別し、又主格・目的格等諸種の格を區別するために、語形上の變化をなすが、我が國では全くその種の語法上の形式を持つてゐない。まゝ「を」「め」等の接頭語・接尾語を用ひて、男女・雌雄の區別を現はすこともあるが、名詞一般に通ずる法則ではない。印度歐羅巴語に於て、すべての名詞の上に、それ〴〵性の區別があつて(それは自然の性とは關係なきものもあり、國語によつては同じものに、相反する性を賦與してゐるものがある)、これが延いて代名詞と交渉し、又これに冠する冠詞・形容詞に語法上の關係を及ぼしてゐるのと趣が違ふ。數の區別も歐羅巴語では、名詞語形上に一定の變化として現はれ、英語では述語の形にも交渉を持ち、獨逸語では述語のみならず冠詞や形容詞にも關係を及ぼしてゐるが、我が國語では複數を現はすに、往々疊語(別項)の形式を用ひたり、「ども」「がた」などの接尾語を附けることがあるだけである。格を現はすことも、名詞それ自身には何等語法上の形式を持つてゐない。「花さく」といへば、花は主格、「花を見る」と云へば、花は目的格といふやうに、語序もしくは助詞によつて格が現はされ、印度歐羅巴語では、英語に三種、獨逸語に四種、古く遡れば、梵語に八囀聲といつて實に八種の格があり、名詞そのものの變化によつて、そ

の區別が示されてゐるのと、面目を異にしてゐる。

明治劇壇五十年史（めいぢげきだんごじふねんし）【小林】演劇書　一册【著者】關根默庵【名稱】明治の二字は小書になつてゐる。【刊行】大正七年六月【解說】明治初年より大正六年末に至る劇壇の大勢・變遷・興行の次第などを記述したもの。序言の外「過渡の時代」「芝居全盛時代」「劇壇の新機運」「新派劇の勃興」「舊劇不振の時代」「渾沌時代」の六章に分ち、各章を數項に分つ。口繪及び挿繪がかなり豐富である。單なる年表式記述の域を脫し、目錄のみを見ても分るやうに、當代劇壇の全體としての動きに注目してゐるから興味も深く、又劇壇の裏面にも觸れてゐるのは有益である。殊に明治初年の劇界の大勢を說き、或は興行經營者の方面にも力を入れてゐる。記述には全く誤なしとは言へぬが、纏まつた明治演劇史としては唯一のものであらう。【增田】

明治時代の漢詩漢文（めいぢじだいのかんしかんぶん）【解說】明治に入つてからは、西洋文明の輸入が盛んになり、漢學を顧みる者が漸く少くなつたが、初年に於てはなほ從來の勢力を維持し、更に幾分の進境を示した。漢文方面には、安井息軒・鹽谷宕陰（各別項）を初めとして重野成齋・三島中洲・中村正直（各別項）・川田甕江等が輩出して益々進歩したが、漢學の衰微するに隨つて漢文を作る者も少くなり、鹽谷青山・日下勺水等の歿後は益々寥々たる有樣になつた。又詩壇に於て當時覇權を握つてゐた者は大沼枕山（別項）であつたが、森春濤（別項）が東京に移住してから、卽ち明治の八九年から二十年頃までは春濤が代つて牛耳を執つた。この頃向山黃村（別項）は晩翠吟社を、岡本黃石は麴坊吟社を立てて別に旗幟を飜した。明治二十二三年頃から三十年前後までは春濤の息槐南（別項）が星社（別項）を創立して詩壇の中心となつたが、三十二年頃に瓦解した。當時はいづれの新聞紙にも皆文苑欄が設けてあつて漢詩を載せた。槐南は日日新聞には菊如澹人の名で、國民新聞には說詩軒主人の名で詩評を擔當し、日本新聞には國分青厓・本田種竹が時事評論の詩筆を揮つて好評を博した。こゝらが明治時代漢詩の絕頂で、その後は作者も少くなり、新聞雜誌にも漢詩を揭げるものが少くなつて、纔かに餘喘を保つに過ぎない狀態になつた。枕山の奇、湖山の正、松塘の法、春濤の才、これが何と言つても明治詩壇の珍で、槐南を殿とし、その他は餘子碌々と言つてよからう。【佐久】

明治時代文學（めいぢじだいぶんがく）【名義】明治時代四十五年間の文學を指していふ。【性質】明治時代は、維新以後漸次に整へられて行つた新しい社會組織を反映して、舊き傳統の國文學が衰へ、新しき國文學が擡頭した時代である。併し新時代的思想形態の確立と醇化とは、維新革命よりもずつと遲れ、從つてその新しい國文學といふものの樹立も遲れて、それが確實に成就されたのは、寧ろ明治も末年に近い三十年代末から四十年代初頭にかけての事であつた。それ迄のほぼ四十年間は、この新文學確立のための搖蕩に過ごされたのである。卽ち明治時代の大部分は、謂はば新文學樹立のための準備時代乃至新舊文學隆替の搖蕩時代として過ごされたといふ事が出來る。故にこれを全體として見渡す場合、そこには新しい思想內容と舊い傳統的な觀念形態、新しい表現技巧と慣習的な修辭技巧、新しい語彙と慣用的な語句とが、粗密樣々な程度に交錯してゐるところに、最も著しい特徵が觀られる。時に見出されるその兩要素の渾熟した作品にあつては、むしろ傳統的國文學の美しさから完全にきりはなされた後の大正期文學にも見られない特殊多彩な美しさと、複雜な感觸香味とが味ははれたけれども、概して云へばさうした渾熟の趣を有つたものが少く、中途半端な、破格粗雜な、生硬不熟な未成品といふ感じのものが多い。而もその兩要素の渾熟した美しさを有つたものが、森鷗外（別項）の作品や上田敏（別項）の譯詩など、一二例外的なものはあつても、概して進歩的ならざる思想態度の人々の側に多く、進歩的な人々の多くは、想・形ともに未成品としての域に止まつてゐる場合が多かつた。これは時流に遲れまいとすればするほど、推移に忙しくて形式的完成に留意する餘裕がなく、無論或る特定の思想段階に徹到する沈潛を有ち得なかつたことによるものである。而して又、其處には常に破壞と成長とへの銳い意欲が貫き流れてゐた。故に昨日は國粹主義・國家主義を唱へてゐたものが、今日はもう超人道德・個人主義を提唱するといふやうな、成長の早さと流動搖蕩の目まぐるしさがある。從つて新しい主義主張、作家・雜誌等の誕生發展と舊きそれ等のものの落伍と衰滅とのあわただしさなども、また其處に見られる著しい特徵の一つをなしてゐた。それは云ふ迄もなく、この時代に於ける社會的變動のあわただしさを反映するものであるが、さうした銳い反映を有つたといふところに、またこの時代の文學が、比較的多くの社會的關心を有つたものであつたといふことが考へられる。又それだけ傾向的な問題文學的なものが多かつたことも云はれるわけである。而も明治時代が、新しい社會組織の建設を第一義とし、諸般の物質的革新を當面の急務とした時代であつただけに、さうした問題文學的傾向が、多く物質的・外面的な方向に向けられてゐて、人間內面の問題は極めて不十分にしか檢討されてゐなかつたところにも、時代文學の一つの特徵は見出されると思ふ。それ等數項の特質に於ては、それは後の大正期文學の唯心的・內面的・非社會問題的な特質と對蹠的な性質の上に立つものと云ふことが出來る。大正期文學は云ふ迄もなく明治時代文學の直接の延長線上に現はれたものであり、且つその當然の歸結でもあつたのであるから、さうした大正期文學的特質への方向は、明治文學の中にも無論相當にあつた譯であり、さういふ方向がありながら、それが明瞭に把握されてゐなかつたところに、上記の如き混亂と不徹底とが見られることになつたのである。さういふ點から考へれば、明治文學には方向があつて而も各部面には共通した特徵がなかつたとも言へる。その他、さういふ新しい方向への拍車として常に外國文學が非常に力強い働きかけを明治時代文學一般に對して有つてをり、從つて飜譯文學（別項）に屢々創作作品よりも優れ、當然時代の關心を湧き立たせた作品が出たこと、それにも拘らず、この時代末期のことは別として、全體的には外國文學攝取の態度に、必ずしも自主的なものが失はれきる迄には至つてゐなかつたこと、外國文學形式に示唆されて新體詩その他從來の國文學には見られなかつた新しい形式のものが產み出されたこと、矢張り同じ外國文學からの影響からと同時に時代的必然もてその他には所謂活歷物（別項）の新しき寫實主義的精神を舊き題材と思想とに從屬させた過渡的作品が跳梁を逞うしてゐるだけであつた。藤田鳴鶴・尾崎庸夫共譯の「繫思談」（別項）以來飜譯文學も從來の西洋紹介のための內容主義から多少の藝術主義的傾向への轉向を示しはじめ、漣山人の「黃金丸」（別項）以來新しき

あつて、所謂言文一致の表現が兎にも角にも確立されるやうになつたこと、文學一般が新しい寫實主義と、所謂人生に觸れようとする方向とに傾いて行つたことなども、亦この時代文學の著しい特質に考へられなければならない。【區分】大體明治二十六七年頃を境として全體を前後の二期に分け、更にその前期を第一期（明治初年より十年頃まで）、第二期（十年

學の萌芽と目せらるべきものが現はれ出た時代で、新政治に快く思はなかつた反動保守者流が第一期十年の間に殆ど掃滅し盡された結果、新社會組織の確立が急がれた爲めに、極端な進歩主義、言ひかへれば歐化主義の風潮が橫溢し、ルソオが盛んに唱道されて自由民權思想が時代を風靡した。さういふ時代を反映して多く泰西事情の紹介を目的とした政治

就中西鶴の形式的復活、かなのくわいの成立等に、反新時代的思潮の强化が認められ、その兩者の或る程度までの融合と、さういふうちにも、やゝ後者が前者を壓倒するやうな强力さを示したのみならず、新社會組織の一通りの安定と物質的改革の一段落とに結果した藝術主義が、相當强く現はれて來た。「國民之友」「日本人」「新小說」「しがらみ草紙」「早稻田

明治時代の漢詩漢文（めいじじだいのかんしかんぶん）

【解說】明治に入つてからは、西洋文明の輸入が盛んになり、漢學を顧みる者が漸く少くなつたが、初年に於てはなほ從來の勢力を維持し、更に幾分の進境を示した。漢文方面には、安井息軒・鹽谷宕陰（各別項）を初めとして重野成齋・三島中洲・中村正直（各別項）・川田甕江等が輩出して益々進歩したが、漢學の衰微するに隨つて漢文を作る者も少くなり、鹽谷青山・日下勺水等の歿後は益々寥々たる有樣になつた。又詩壇に於て當時覇權を握つてゐた者は大沼枕山（別項）であつたが、森春濤（別項）が東京に移住してから、卽ち明治の八九年から二十年頃までは春濤が代つて牛耳を執つた。この頃向山黃村（別項）は晩翠吟社を、岡本黃石は

あつて、所謂言文一致の表現が兎にも角にも確立されるやうになつたこと、文學一般が新しい寫實主義と、所謂人生に觸れようとする方向とに傾いて行つたことなども、亦この時代文學の著しい特質に考へられなければならない。【區分】大體明治二十六七年頃を境として全體を前後の二期に分け、更にその前期を第一期（明治初年より十年頃まで）、第二期（十年頃より十八九年頃まで）、第三期（十八九年頃より二十六七年頃まで）の三つに、後期を第一期（二十八九年頃より三十五六年頃まで）、第二期（三十六七年頃より四十二三年頃まで）の二つに分けることが出來る。但しその後期はその第二期で終つてゐるのではなく、明治四十二三年以後大正九・十年頃までに及ぶ第三期をもこめて、その周期を完成するものである。（大正文學參照）

【沿革】〔前期〕（第一期）維新後の社會が大體新しき時代精神への方向に動きながら、なほ保守反動者流の勢力も大きく、それがため國內隨所に內亂一揆などが蜂起した時代で、一方には英國流の功利思想やキリスト教思想の新しき流入もあり、それ等の新思想と新聞（別項）・雜誌の發刊などに刺戟されて文章改革の機運も興り、唱歌（別項）の誕生、飜譯文學（別項）の濫觴から、一部にはローマ字採用論などさへ見られたのであつたが、新文學の萌芽といふべき程のものはまだ乏しく、舊江戸時代文學の殘映が僅かに文藝界の乏しい彩りとなつてゐた。小說壇には戲作系統の滑稽文學や讀本・合卷物、歌壇には桂園派末流の堂上風和歌、俳壇には天保流風の俗調、劇壇には歌舞伎劇乃至默阿彌物の舊套があるだけで、新樣新彩といふべきものはまだ殆ど認められなかつた。（第二期）第一期の低迷を打破して新文學の萌芽と目せらるべきものが現はれ出た時代で、新政治に快く思はなかつた反動保守者流が第一期十年の間に殆ど掃滅し盡された結果、新社會組織の確立が急がれた爲めに、極端な進歩主義、言ひかへれば歐化主義の風潮が橫溢し、ルソオが盛んに唱道されて自由民權思想が時代を風靡した。さういふ時代を反映して多く泰西事情の紹介を目的とした政治小說（別項）・科學小說その他の飜譯が相踵いで起り、引いては明治新文學の第一聲たる創作政治小說の流行を見た。詩歌壇にも舊き和歌や俳諧をすてて新詩形を樹立しようとする新體詩（別項）運動が起り、劇壇にも形式は古いながら坪內逍遙による沙翁物の飜譯などが見られた。併しこの期に於ける國民の新時代精神への把握は、未だ正しい個人的自覺を伴つたものでなく、一種國民的集團的な昂奮乃至陶醉に過ぎないものであつた爲めに、正しい意味の抒情詩その他の新文學は未だ確立されず、一種叙事文學的な性質を有つた政治小說及び飜譯文學が壓倒的な勢力を占めてゐた。併しそれ等のものの表現にも、さまで新しいものが認められなかつた。（第三期）新しい社會制度組織の漸く一通り整へられた後の小康時代で、前時代の國民的昂奮が漸く落ちつくにつれて、國民一般の氣持が著しく反省的思索的になつて來た。從つて一方には前々期以來の新時代精神攝取の方向にも漸次的な深化と沈潛とが認められるやうになり、逍遙の「小說神髓」（別項）による新寫實主義提唱以來の新文學の流れ、演劇改良會、ローマ字會の成立等の注意すべき現象も見られた。併し他方には前代以來の急進的歐化主義に對する反動たる國粹主義思潮の擡頭著しく、古典の研究、就中西鶴の形式的復活、かなのくわいの成立等に、反新時代的思潮の强化が認められ、その兩者の或る程度までの融合と、さういふうちにも、やゝ後者が前者を壓倒するやうな强力さを示したのみならず、新社會組織の一通りの安定と物質的改革の一段落とに結果した藝術主義が、相當强く現はれて來た。「國民之友」「日本人」「新小說」「しがらみ草紙」「早稻田文學」（各別項）などの發刊を見たのも、この期である。併しなほ新時代精神の眞の覺醒には達してゐなかつた時代で、新しき抒情精神の昂揚はなほ足らず、小說が最も一般的な作品形態であるかの觀を示し、逍遙の新しき主張に示唆された二葉亭四迷（別項）の進出があり、別に森鷗外（別項）の抒情的浪漫主義の作品などが見られた。併しそれさへ、後者の場合には著しく擬古的な古典主義的色彩が著しかつた上に、舊き戲作者氣質の多量をのこしてゐた尾崎紅葉（別項）の率ゆる硯友社派（別項）及び舊き藝術至上主義に生きた幸田露伴（別項）等が、創作壇の最前線に立つて所謂紅露の對立時代を現出させてをり、次いで所謂擬寫小說の低調浪漫主義全盛を見なければならなかつた。新體詩壇にも新詩形の工夫發展はありながら、それがまだ多く知的な工夫以上に出でず、鷗外等の譯詩その他に若干の新調はありながら、一般的には此處にも矢張り擬古的古典主義の勢力が著しかつた。歌壇の大勢もほぼこれに準じ、俳壇にも亦紅葉一派の檀林調復活乃至子規（別項）の古蕉風、天明調への復歸が新勢力となり始めた。劇壇にはこの期末葉に坪內逍遙の「新史劇論」及びその所論に準じた作品なども出たが、それさへ舊い歌舞伎劇へのかなりの妥協を含んだものであり、況してその他には所謂沽券物（別項）の新しき寫實主義的精神を舊き題材と思想とに從屬させた過渡的作品が跳梁を逞しうしてゐるだけであつた。藤田鳴鶴・尾崎紅葉夫共譯の「繫思談」（別項）以來飜譯文學も從來の西洋紹介のための內容主義から多少の藝術主義的傾向への轉向を示しはじめ、漣山人の「黃金丸」（別項）以來新しき少年文學（別項）も樹立されたけれども、それも內容的・思想的には、さまで新時代的なものとは云はれなかつた。第一期初頭以來動きつつあつた文章改革の機運も、この期の初め以來愈々濃厚になつて來て、新文章の誕生も見られたが、まだ〳〵容易に舊殼を脫しきるところまでは行かなかつた。要するに前期は、これを通じて、新時代的自由主義・人權思想に時代思潮が傾いて行きながら、それに正しい個人的自覺が伴ふまでに至らなかつた爲めに、舊く傳統的なものの克服に不十分で、却つて時にさうしたものの支配さへ見られた時代である。この期の末には雜誌「文學界」（別項）が生れ、島崎藤村・北村透谷（各別項）等の新人が生れ、殊に自由主義思想のために身を殺した透谷の苦悶などから、より進んだ次の時代が開けはじめることになつた。

【後期】（第一期）前期以來進展して來た新時代精神把握の過程が、一步進んで著しく自覺的になつて來た時代で、一方前期の第三期に於ける中和的小康に對する反動の時期であつたとも見られる。新舊思想の扞格搖蕩殊に著しく、そのため屢々颶風時代の名を以てさへ呼ばれてゐる。二十七八年、日淸戰爭といふ大事件のあつたことが、一方には國家的危機乃至國威發揚の機會として、傳統的乃至國家主義的思想の昂揚を促し、他方には新しき資

た新しい社會組織を反映して、舊き傳統の國文學が衰へ、新しき國文學が擡頭した時代である。併し新時代的思想形態の確立と醇化とは、維新革命よりもずつと遲れ、從つてその新しい國文學といふものの樹立も遲れて、それが確實に成就されたのは、寧ろ明治も末年に近い三十年代末から四十年代初頭にかけての事であつた。それ迄のほぼ四十年間は、この新文學確立のための搖蕩に過ごされたのである。卽ち明治時代の大部分は、謂はば新文學樹立のための準備時代乃至新舊文學隆替の搖蕩時代として過ごされたといふ事が出來る。故にこれを全體として見渡す場合、そこには新しい思想內容と舊い傳統的な觀念形態、新しい表現技巧と慣習的な修辭技巧、新しい語

とによるものである。而して又、其處には常に破壞と成長とへの鋭い意欲が貫き流れてゐた。故に昨日は國粹主義・國家主義を唱へてゐたものが、今日はもう超人道德・個人主義を提唱するといふやうな、成長の早さと流動搖蕩の目まぐるしさがある。從つて新しい主義主張、作家・雜誌等の誕生發展と舊きそれ等のものの落伍と衰滅とのあわただしさなども、また其處に見られる著しい特徵の一つをなしてゐた。それは云ふ迄もなく、この時代に於ける社會的變動のあわただしさを反映するものであるが、さうした鋭い反映を有つたといふところに、またこの時代の文學が、比較的多くの社會的關心を有つたものであつたといふことが考へられる。又それだけ傾向的な問題

のである。さういふ點から考へれば、明治文學には方向があつて而も各部面には共通した特徵がなかつたとも言へる。その他、さういふ新しい方向への拍車として常に外國文學が非常に力强い働きかけを明治時代文學一般に對して有つてをり、從つて飜譯文學（別項）に屢々創作作品よりも優れ、當然時代の關心を湧き立たせた作品が出たこと、それにも拘らず、この時代末期のことは別として、全體的には外國文學攝取の態度に、必ずしも自主的なものが失はれきる迄には至つてゐなかつたこと、外國文學形式に示唆されて新體詩その他從來の國文學には見られなかつた新しい形式のものが產み出されたこと、矢張り同じ外國文學からの影響からと同時に時代的必然も

本主義的社會組織の發達を促進させて、必然的に新時代的思想形態確立の契機を與へることになつたのが、時代の新舊精神搖蕩激化の一因となつたのであることは、素より云ふ迄もない。高山樗牛(別項)その他によつて紹介提唱されたニイチエイズム(別項)を初めとして、自由人權主義、キリスト敎思想、より廣義の宗敎主義、獨逸流の國家主義思想、國粹主義、封建道德及び資本主義的社會組織の結成と共に芽生えて、漸次に成長して來つつあつた社會主義思想など、樣々なものが錯綜し融合し反撥して、殆ど底止するところを知らないやうな混亂が繰り擴げられた。その間には舊く傳統的なものの力も非常な根强さを示し、それが新時代的刺戟を攝取して或る渾熟を示して、例へば樋口一葉(別項)などの如きにさういふ方面の代表的作家を示したりした。しかし新時代精神たる個人主義的自由主義思想が壓倒的な勢力を示して來た。新しき抒情精神の昂揚は特に著しく、或る意味で其處に新しき抒情詩時代が現出されたとも考へられる。誕生以來搖蕩と彷徨とを續けて來た新體詩運動も、島崎藤村(別項)の出現によつて劃期的な飛躍を遂げ、歌壇にも淺香社(別項)中新人等の擡頭以來、新風競ひ起つて所謂明治短歌の確立が見られ、俳壇にも子規の革新運動の成熟と同時に虛子・碧梧桐(各別項)等の自由主義思潮攝取が漸く顯著になり始めた。劇壇にも新風潮の漸次的な浸潤が見られる一方、所謂壯士芝居・新派劇(別項)の擡頭躍進があり、この期末葉、團・菊・左三名優の他界相踵いだためもあつて、傳統歌舞伎の世界に著しい衰運が影さした。小說壇にはなほ硯友社系及びその時代の作家達が比較的鞏固な地位を占めてゐたけれども、それも前期の如く時代を支配する力を失ひ、却つて時代の風潮に曳き摺られるやうな形となり、結果として硯友社中の作風などにも著しい變化が現はれ、觀念小說(別項)・深刻小說・悲慘小說等の一系列から心中物の流行などを招來した。他方、逍遙の率ゆる早稻田派(別項)よりは新寫實主義を標榜する心理小說が提示され、その他キリスト敎主義の理想派小說、一種の傾向文學であつた社會小說(別項)・社會主義的物語など雜多なものが輩出し、その間に前記一葉などの如き作家も介在して、如何にも時代の混亂をいふに相應しい亂軍狀態を呈してゐた。新しき表現手段たる言文一致の文章も、この期の搖蕩に磨かれて、漸く一通り完成される迄になつて來た。が、流石にまだ必ずしも精神革命の達成されたとは云へない時代であつただけに、其處にもまだ踏み越しきれない最後の一線が殘されてゐた。舊い文章意識や形式への關心が、未だ必ずしも克服されきつてはゐなかつた。つまりこの時代は想形共に急激に新時代的方向に進まうとしてゐながら、なほ十分には脫却しきれない舊きものの抵抗に苦しめられてゐた時代といふことが出來る。(第二期)第一期の搖蕩の間に破壞し殘されて來た舊く傳統的なものの一切を破壞し盡して、其處に想形ともに完全に新しくされた文學がはじめて確立された時代である。三十七八年の日露戰爭といふ國家的重大事に直面したことと、その戰爭の結果國民一般の眼光が世界的になつたこと、及び資本主義的社會組織が漸く完成されるに至つたこととが、この精神革命成就、從つて表現形式革新達成の最も大きな動機であつた。前期以來の思索的傾向が愈々顯著になつて來るにつれて、抒情的精神はやゝ稀薄となり、抒情詩時代が去つて、散文小說時代が現出させられ、且つ前代の浪漫主義乃至個人主義思潮に對しても、一種の批判的態度として現はれた科學的實證主義が時代を風靡する思想傾向となり、傳統的なものの權威の殆ど一切が破壞された。所謂前期自然主義を經て自然主義文學の確立された時代で、田山花袋(別項)・島崎藤村以下の自然派小說家が、やがて時代文藝界の代表的存在であつた。一方には社會主義思想がその飛躍的な昂騰につれ、文藝にも第一期とは異つてやゝ銳くその表現を求めるやうになり、舊き藝術主義思想の殘存も多少はあつたけれども、いづれも前者のために壓倒され盡すかの觀を示した。詩歌は漸く時代潮流の中心を遠ざかつて神祕主義・象徵主義の方向に趨ると同時に、其處にも自然主義的精神の浸潤があつて、詩壇には口語詩(別項)の運動が起り、歌壇にも口語歌(別項)の主張と、少し遲れて四十二三年頃より漸く顯著になつた自然主義短歌の擡頭とが起り、俳壇にも所謂新傾向(別項)句派の個性主義的形式破壞運動が愈々熾烈になりはじめた。劇壇にも新しき社會劇の誕生が見られ、新劇運動が勃興した(新劇參照)。言文一致的表現も、精神革命の成就とともに、前代まで殘されてゐた舊殼の殘滓を完全に擺脫して、全然新しい面貌を有つたものとして樹立された。が、それ等諸現象の基調となつた精神革命が、我が國社會組織の特殊性を超越した。やゝ空想的な、それだけ急進的に過ぎたものであつた爲めであらうか、革新後の新文學は、限られた一部の知識階級的讀者層に主として屬するものとなり、從つて文藝の世界に從來からあつた高級物と通俗物との區別が殊に顯著になつて、飛躍的な精神革命に取り殘された舊作家等の多くが、その通俗物の世界に彼等の進路を求め、ために新文學の領域が餘計に狹められて行くやうな形もあつた。又この期に樹立された新文學は、舊きものの破壞と蟬脫とに主要な努力が注がれた直後のものとして、當然その技術的・裝飾的方面に多くの加工が積まれてゐなかつた。生れたばかりのものの不洗練さを多く有つてゐた。その不洗練さに慊りない氣持が生れた時、前代より殘存せる藝術主義と合流發展した新しい藝術主義が擡頭し、所謂新浪漫派運動の勃興となつて、それが大正期に連つて新文學の建設期培養期から圓熟期を形造つて行つた。故に明治の新文學はこの後期の第二期にまで來てもまだ渾成されるところまでには至らない。僅かに確立されるに至つたに過ぎなかつたといふことになる。(明治時代の漢詩漢文參照)

【參考】明治文學史大和田建樹○明治文學史岩城準太郎○明治大正の國文學同上○明治文學十二講宮島新三郎○日本現代文學十二講高須芳次郎○明治文學史抄鹽田良平○明治文學展望木村毅○明治文學襍考日夏耿之介○明治文學史概說藤村作・久松潛一○明治全小說戲曲大觀高木文○現代日本文學大年表(現代日本文學全集別卷)○現代文學考察(國語と國文學昭和四ノ四)○明治文豪論(國語と國文學昭和七ノ四)○明治文學研究號(大正一四、早稻田文學)○明治大正文藝運動大觀(大正一五、新小說春季增刊)○明治大正の文化(昭和二ノ六、太陽臨時增刊)○日本文學講座(明治時代三册)○明治文藝研究資料展覽會目錄(愛書趣味二ノ二附錄)○近代の小說田山花袋○日本近代

詩の發達湯地孝○日本新詩史福井久藏○明治大正詩史二册日夏耿之介○詩壇年表・詩書一覽詩話會編(明治大正詩選附錄)○明治歌壇概史尾山篤二郎○明治大正短歌史概說齋藤茂吉(現代日本文學全集第三十八卷附錄)○明治大正俳諧史概觀高濱虛子(現代日本文學全集第三十八卷附錄)○私の見た明治文壇野崎左文○自己中心明治文學史江見水蔭 〔片岡〕

明治時文 めいぢ… 漢詩文雜誌【解說】…

太郎(葉舟)・福田正夫・佐藤惣之助・生田春月・室生犀星・千家元麿・萩原朔太郎・堀口大學・加藤一夫・西條八十・野口雨情・武者小路實篤・正富汪洋・佐藤春夫・野口米次郎・秋田雨雀・佐藤清・霜田史光・藤森秀夫・多田不二・前田春聲・井上康文・平戸廉吉・澤ゆき子・深尾須磨子・北村初雄・大藤治郎・尾崎喜八・金子光晴の五十詩人の作を收錄してゐる。その排列おのづか…

…發行所等を年次的に表出してゐる。〔川路〕

明治大正の國文學 めいぢたいしやうのこくぶんがく 文學史 一册【著者】岩城準太郎【刊行】大正十四年七月、成象堂。【內容】「新文學建設の主張」以下「人間味の文學」に至る十六章と、それぞれ序跋にかへられた「少年の日」「開拓者の悲劇」の二章とから成つてゐる。著者が中學生時代以來親しんで來た明治大正時代の…

…從つてその由つて來るところへの考察などに若干の不十分さを殘してゐるやうだ。又大正期新理想主義の文學の時代以後への考察は、餘りに大まかであり過ぎたと思ふ。姉妹篇に「明治文學史」(別項)がある。〔片岡〕

明治天皇 めいぢてんわう 歌人【御名】睦仁 むつひと【生歿】嘉永五年九月二十二日(太陽曆に換算すれば十一月三日)御降誕。明治四十五年七月三…

精神の昂揚は特に著しく、或る意味で其處に新しき抒情詩時代が現出されたとも考へられる。誕生以來搖蕩と彷徨とを續けて來た新體詩運動も、島崎藤村（別項）の出現によつて劃期的な飛躍を遂げ、歌壇にも淺香社（別項）中新人等の擡頭以來、新風競ひ起つて所謂明治短歌の確立が見られ、俳壇にも子規の革新運動の成熟と同時に虚子・碧梧桐（各別項）等の自由主義思潮攝取が漸く顯著になり始めた。劇壇にも新風潮の漸次的な浸潤が見られる一方、所謂壯士芝居・新派劇（別項）の擡頭躍進があり、この期末葉、團・菊・左三名優の他界相踵いだためもあつて、傳統歌舞伎の世界に著しい衰運が影さした。小説壇にはなほ硯友社系及びその時代の作家達が比較的鞏固な地位を占め

詩の發達過程考〇日本新詩史（福井久藏）〇明治大正詩史二冊（日夏耿之介）〇詩壇年表・詩書一覽（詩話會編）（明治大正詩選附錄）〇明治歌壇概史（尾山篤二郎）〇明治大正短歌史概說（齋藤茂吉）（現代日本文學全集第三十八卷附錄）〇明治大正俳諧史概觀（高濱虚子）（現代日本文學全集第三十八卷附錄）〇私の見た明治文壇（野崎左文）〇自己中心明治文學史（江見水蔭）

明治詩文（めいちしぶん）　漢詩文雜誌　【解說】佐田白茅の主宰したもの。白茅は征韓論の首唱者で、維新後太政官に召されて外交事務を管掌したが、晩年は官を辭し、文墨を以て樂みとなし、明治四十年歿した。享年七十六。大正五年四月正五位を贈られた。（佐久）

明治大正詩選（めいたいしやうしせん）　詩集　一冊　【編者】詩話會。編纂委員は川路柳虹・白鳥省吾・福田正夫。【刊行】大正十四年二月、新潮社。【内容】明治大正の詞華集で、採錄の詩人八十四名、所收の詩は通算二百九十三篇。明治篇と大正篇との二つに分ち、明治篇には、湯淺半月・北村透谷・國木田獨歩・中西梅花・松岡國男・田山花袋・宮崎湖處子・太田玉茗・大町桂月・鹽井雨江・武島羽衣・正岡子規・森鷗外・與謝野寛・島崎藤村・土井晩翠・高安月郊・馬場孤蝶・山本露葉・小山内薫・河井酔茗・横瀬夜雨・吉野臥城・平木白星・伊良子清白・前田林外・兒玉花外・與謝野晶子・上田敏・薄田泣菫・蒲原有明・岩野泡鳴・石川啄木・相馬御風の三十四詩人の作を收錄し、大正篇には、北原白秋より始まつて、木下杢太郎・三木露風・茅野蕭々・高村光太郎・川路柳虹・人見東明・加藤介春・三富朽葉・福田夕咲・森川葵村・服部嘉香・今井白楊・山村暮鳥・福士幸次郎・竹友藻風・白鳥省吾・柳澤健・富田碎花・日夏耿之介・百田宗治・永野盈太郎（苗舟）・福田正夫・佐藤惣之助・生田春月・室生犀星・千家元麿・萩原朔太郎・堀口大學・加藤一夫・西條八十・野口雨情・武者小路實篤・正富汪洋・佐藤春夫・野口米次郎・秋田雨雀・佐藤清・霜田史光・藤森秀夫・多田不二・前田春聲・井上康文・平戸廉吉・澤ゆき子・深尾須磨子・北村初雄・大藤治郎・尾崎喜八・金子光晴の五十詩人の作を收錄してゐる。その排列おのづから詩史的に展開し來る詩人の登場を示し、明治に活躍した詩人と大正に活動した詩人とを截然分つ方法に出てゐる。編輯方針については、その序文に、「一言にしていふと、吾々は單なる史的事實を尊重するといふ記錄的態度を重んずるよりも、むしろその詩作の藝術としての價値如何を先にして、その批判の眼から選擇したといふことである」と云ひ、所謂新體詩創設の第一集たる「新體詩抄」（別項）の作家を收めてをらぬことに關しては「新體詩抄」が新しき西洋風のポエトリーに發足しようとしてゐながら、その實、單に新樣の韻文を形式的に示したのみで、「抒情詩の範圍に入れ得るには何人も躊躇するであらうことを信じる」と云つてゐる。而して眞個の明治の抒情詩は「詩人内心の感情から發足して、その本然のリズムに任したものでなくては抒情詩とは言へない」といふ理由によつて、新しき詩の發足を島崎藤村の「若菜集」（別項）にありと見てゐる。本集の編纂方針はこれによつて明瞭である。卷末に附錄として「明治大正詩壇年表」「明治大正詩書一覽」を附してゐる。年表は、明治二年の福澤諭吉の「世界國づくし」の記錄から始まつて大正十三年十二月迄の詩壇の主なる事項の記載につとめ、後者は明治大正を通じて詩集・詩論並に詩に關する一切の書籍の書名・發行所等を年次的に表出してゐる。（川路）

明治大正の國文學（めいたいしやうのこくぶんがく）　【著者】岩城準太郎　【刊行】大正十四年七月、成象堂。【内容】「新文學建設の主張」以下「人間味の文學」に至る十六章と、それ〴〵序跋にかへられた「少年の日」「開拓者の悲劇」の二章とから成つてゐる。著者が中學生時代以來親しんで來た明治大正時代の國文學のいろ〳〵な斷面を、半ば追憶的に、而も大體は系統的組織的に記述論評したもので、北村透谷（別項）や「文學界」（別項）の人々及び坪内逍遙・二葉亭（各別項）等の業績から筆を起し、詩歌の革新、小説の進展から所謂狂飈時代を經て自然主義文學の確立に及び、次いで口語體文章の創始發達と劇文學の展開とを述べ、轉じて明治末期即ち自然主義時代以後大正期中頃までにかけての新主觀主義文學に觸れてゐる。つまり明治大正文學に於ける舊きものの殘映はすてて、ただ新しいものの誕生とその生長とだけを、それ〴〵の項目の下に纏めて解説論述したものである。卷末に安政六年より大正十二年に至る「明治大正文學略年表」が添へてある。【價値】普通の文學史のやうに同年代の文學一般に關する記述を並べるといふのでなく、詩歌なら詩歌、口語文なら口語文といふやうな項目によつて纏めてあるところに、特徴と面白味と便利さとがある。半ば追憶的に書かれたとはいひながら、決して杜撰不穿鑿な隨筆的記錄ではなく、研究書としても無論十分な正確さ周到さを具へてゐる。口語文の創始發達に關する研究などは、かういふ種類のものの最も早く纏められたものの一つとして殊に注意されていゝものだが、觀察をやゝ純文學作品にのみ限り過ぎ、從つてその由つて來るところへの考察などに若干の不十分さを殘してゐるやうだ。又大正期新理想主義の文學の時代以後への考察は、餘りに大まかであり過ぎたと思ふ。姉妹篇に「明治文學史」（別項）がある。

明治天皇（めいぢてんわう）　歌人　【御名】睦仁（むつひと）【片岡】　【生歿】嘉永五年九月二十二日（太陽暦に換算すれば十一月三日）御降誕。明治四十五年七月三十日崩御。寶算六十一。同八月二十七日明治天皇と追號す。【御陵】京都府伏見桃山。【御閲歴】孝明天皇の第二皇子にましまし、御生母は從一位大納言中山忠能の女。從一位慶子で、御幼時は祐宮（さちのみや）と稱し奉り、中山忠能・同慶子が御養育申し上げた。萬延元年九月親王宣下、御名を睦仁と稱し給うた。慶應二年十二月二十五日孝明天皇崩御。因つて同三年正月九日御十六歳にして御踐祚あらせられた。【歌人として】記錄に殘る最初のものは、安政四年、御六歳の時の御作で、その後折々父天皇が御添削遊ばされた。又典侍廣橋靜子が歌の御相手を申し上げた。御踐祚の後、有栖川宮幟仁親王に御製拜見の勅命があり、次いで侍從三條西季知に仰付けられた。三條西季知の歿後は、高崎正風が引續き奉仕した。天皇は明治維新の大業以來、日清・日露の兩戰役を初めとし、百事多難の創業期に際して、畏くも實踐躬行以て範を萬民に垂れ給うた。而して多端なる御政務の餘暇を利し給ひて、敬神・崇祖・治國・撫民、その他萬象に就きての御感想を、崇高にして雄大なる歌調を以て詠み出で給うたのである。なほ天皇は、「いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道」と御製遊ばされたやうに、歌道御奬勵の思召深く、明治七年より宮中歌御會始に、一

【參考】明治文學史（大和田建樹）〇明治文學史（岩城準太郎）〇明治大正の國文學（同上）〇明治文學十二講（宮島新三郎）〇日本現代文學十二講（高須芳次郎）〇明治文學史抄（鹽田良平）〇明治文學展望（木村毅）〇明治文學様考（日夏耿之介）〇明治文學史概説（藤村作・久松潜一）〇明治全小説戯曲大觀（高木文）〇現代日本文學大年表（現代日本文學全集別卷）〇現代文學考察（國語と國文學昭和四ノ四）〇明治文豪論（國語と國文學昭和七ノ四）〇明治文學研究號（大正一四、早稻田文學）〇明治大正文藝運動大觀（大正一五、新小説春季增刊）〇明治大正の文化（昭和二ノ六、太陽臨時增刊）〇日本文學講座（明治時代三冊）〇明治文藝研究資料展覽會目錄（愛書趣味二ノ二附錄）〇近代の小説（田山花袋）〇日本近代

般臣民の詠進の道を開かせられた。天皇の御製の數は實に十萬首に近く、數の上からもまことに古今未曾有の御事である。今數首を左に抄出する。

わが國は神のすゑなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ

いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのがをさむる國はいかにと

こらは皆軍のにはにいでゝはてゝ翁やひとり山田もるらむ

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり

軍人みなひきあひてひとごころのどかなる世の春たちにけり

この朝けひとむらさめや降りつらむ樅のわかばに露のたまれる

えびかづら色づきそめぬ山梨の里の秋かぜ寒くなるらし

大空の星のはやしも動くかと思ふばかりにこがらしの吹く

なほ大正五年十月大正天皇の勅旨を奉じ、臨時編纂部に於て「明治天皇御集」三巻を編成、大正八年十二月奏上した。【入江】

【參考】明治天皇御製集（宮内省藏版、文部省發行）○明治天皇御集（宮内省藏版、文部省發行）○明治天皇御集研究三井甲之謹解佐佐木信綱○明治天皇御集研究三井甲之

明治の俳風（めいぢのはいふう）　俳書【著者】中村樂天【刊行】明治四十年九月【内容】明治の代表作家たる紅葉・知十・小波・松宇・黄雨・愚佛・鳴雪・烏黒・醉月・殘花・無黄・竹冷・五丈原・盧子・碧梧桐・紅緑・四方太・青々・漱石・子規の二十家に就いて、その作風を論じたものである。【水原】

明治俳句（めいぢはいく）　句集【編者】竹村秋竹【刊行】明治三十四年二月【内容】秋竹が各種の新聞雜誌及び句會記事等から拔萃して七千餘句を輯めたもので、子規晩年頃の日派（別項）の作風を窺ひ得るものの一つである。ただ選擇やゝ寬に過ぎて聊か玉石同架の感あるを憾みとするが、併し一方からは、その點が又當時の日本派の作句の巧拙の程度を窺ふに便ずる所もある。【水原】

明治文學史（めいぢぶんがくし）　「明治時代文學」を見よ。

明治文學史（めいぢぶんがくし）　文學史　一册【著者】岩城準太郎【刊行】明治三十六年、井上哲次郎・坪井九馬三・芳賀矢一等の計畫した明治歷史全集の第一編として、三十九年十二月育英舍より出版。昭和二年六月、修文館より增補改訂出版。【内容】明治初年の文學界境時代より三十六七年の交、所謂前期自然派擡頭の時代に至る迄の明治文學發展の跡を迚つたもので、これを第一期（明治元年—十八・九年）、第一章前代繼承の文學、第二章新文學の先驅。第二期（二十年—二十七年）、第三章新文學思想、第四章新興文學の勃興其一。第二期（二十八年—三十七年）、第五章新文學の勃興其二、第六章文學の轉進、第七章最近文學の概觀の三期七章に分ち、更にその各章をそれぞれ數節に分つて時代の思潮・詩歌・小說・戲曲・飜譯文學の各項目を相當詳論してゐる。改訂版はその初版本の全部に訂正を加へ、特に第七章最近文學の概觀は、全然これを書き改めて表題も「文學一轉の期」と改め、更に第四期（三十八年—四十一年）、第八章新興文學の由來、第九章新興の文學の二章を加へて自然主義全盛期新浪漫派文學の萌芽にまで筆をのばし、且つ卷末に、明治四十年末に至るまでの「明治文學年表」を添へてある。【價値】錯綜した明治四十年間の時代思潮の流動展開の跡をよく整理し跡づけて文藝諸流派隆替の背景を判然させると共に、可及的多くの各時期各流派に於ける代表的作家と、その代表的作品とに觸れて說明を具體的にしてゐる。丁寧周到である上に所論も概ね穩健妥當、優れた研究業績といふことが出來る。殊にこの書が明治文學全般に亙つての體系的研究書としては、最初に現はれたものであつた事を思へば、特にその歷史的價値の大きさが考へられなければならない。ただ材料の取捨選擇、時代思潮の由來の考察などに、やゝ不十分不徹底なものが感じられることや、所論各作品の說明解說は周到懇切でありながら、作品それ自身の例示は比較的少いことなどが缺點である。姉妹篇に「明治大正の國文學」（別項）がある。【片岡】

明治文化全集（めいぢぶんくわぜんしう）　二十四册【編者】吉野作造【刊行】昭和二年より同五年まで、日本評論社。【解說】大正末期に近づく頃から明治時代再檢討の思想は、漸く力を得た唯物論的思想の澎湃たる勢力の必然的結果、若しくは並行的所產物として、學藝・政治經濟・外交・宗教等の諸分野に現はれ、殊に明治維新の再認識がやかましく論議されるに至つたが、本全集は正にこの時代思潮に浮び出た最も有力な資料の集成である。主なる編輯同人は吉野作造・神代種亮・齋藤昌三・柳田泉・石川巖・尾佐竹猛・宮武外骨等諸氏の明治文化研究會の人々で、明治時代探究に就いては既に定評を有した學者であり、その研究を體系的に且つ最も良心的な共同作品として世に出したのが本全集である。各卷に收載した作品又は資料は約二百有餘に上り、その各々に關して、「性質・公刊の趣意・時代に及せる影響並に著譯者の經歷等」を、專門家の詳細な解題として添へ、原本の俤は可及的に傳へる方針で、挿繪の如きは洩れなく複製されてをり、各種年表、各卷の見返しに用ひたその內容に關聯する錦繪、又は餘白を利用した資料などは、叢書として稀に見る周到さである。年代は憲法發布以前を標準とし、例外として日淸役前後に及ぶものがある。この叢書の與へた影響は甚大と云ふべく、明治時代研究に一つの指針を與へ、少くとも資料の整理に一體系を示唆した功は否定出來ない。

【内容】第一卷皇室篇、第二・三卷正史篇、第四卷憲政篇、第五卷自由民權篇、第六卷外交篇、第七卷政治篇、第八卷法律篇、第九卷經濟篇、第十卷教育篇、第十一卷宗教篇、第十二卷文學藝術篇、第十三卷時事小說篇（附續飜譯文藝篇）、第十四卷飜譯文藝篇、第十五卷思想篇、第十六卷外國文化篇、第十七卷新聞篇、第十八卷雜誌篇、第十九卷風俗篇、第二十卷文明開化篇、第廿一卷社會篇、第廿二卷雜史篇、第廿三卷軍事・交通篇、第廿四卷科學篇。【土井】

迷所一覽（めいしよいちらん）　「善惡迷所一覽」を見よ。

名所記（めいしよき）　地誌【名義】その名の示す如く名所の記述で、廣義の地誌であるが、まだ科學的知識の幼稚な時代の產物であるから、地誌としては組織に缺くる所あり、その編纂は著者思ひ〳〵の好事に支配されて散漫ではあるが、それだけ文學的趣味に富む特色がある。【地誌及び紀行文との關係】地誌として古いものでは「風土記」（別項）があるが、今は殆ど散佚して、傳はつてゐるものは一二の殘缺に過ぎず、その後地誌は久しく行はれなかつたが、德川四代將軍の頃、地誌編纂が企てられ、幕府をはじめ諸藩に於て若干の撰定を見たが、併しこの種の官撰地誌は多く漢文を以て綴り、官府に祕藏して刊行するに至らなかつたから、一般讀書子とは殆ど沒交涉であつたが、同じて名所記は、その以前既に刊行されたものもあるから、官撰地誌の影響を受けたものとは思はれないが、併し地誌編纂の機運は、當時上下の間に瀰漫してゐたので、學者文士は逸早くこれを捉へ、各自の經驗を基礎として諸國巡り、名所見物、案內書等、種々の地誌的著述を公にした。中にも名所記は最も早

「德永家久日記」及び「色音論」（別項）一名「吾妻めぐり」がある。文品の上では、稱すべき價値は殆どないが、江戸の町々、神佛名所の記述としては、名所記の學ぶところがあり、その他、烏丸光廣の「竹齋」（別項）の如く、全く別種のものではあるが、京內參り、東海道の狂歌行は、

山城四季物語　六　卷　坂田直鎭（延寶二年）
澤分船　六　卷　一無軒道治（同　三年）
南都名所集　十五卷　太田資親　村井道弘（同　年）
住吉相生物語　六　卷　一無軒道治（同　三年）
江戸雀　十二卷　菱川師宣（同　五年）
出來齋京土產　七　卷　不明（同　六年）
奈良名所八重櫻　十二卷　大久保秀興　本林伊舶（同　年）
河內名所鑑　六　卷　三田浄久（同　七年）

なほ大正五年十月大正天皇の勅旨を奉じ、臨時編纂部に於て「明治天皇御集」三巻を編成、大正八年十二月奏上した。【入江】

【参考】明治天皇御製集（宮内省藏版、文部省發行）○明治天皇御製集千蔦嵐明　○明治天皇御集謹解佐佐木信綱　○明治天皇御集研究三井甲之

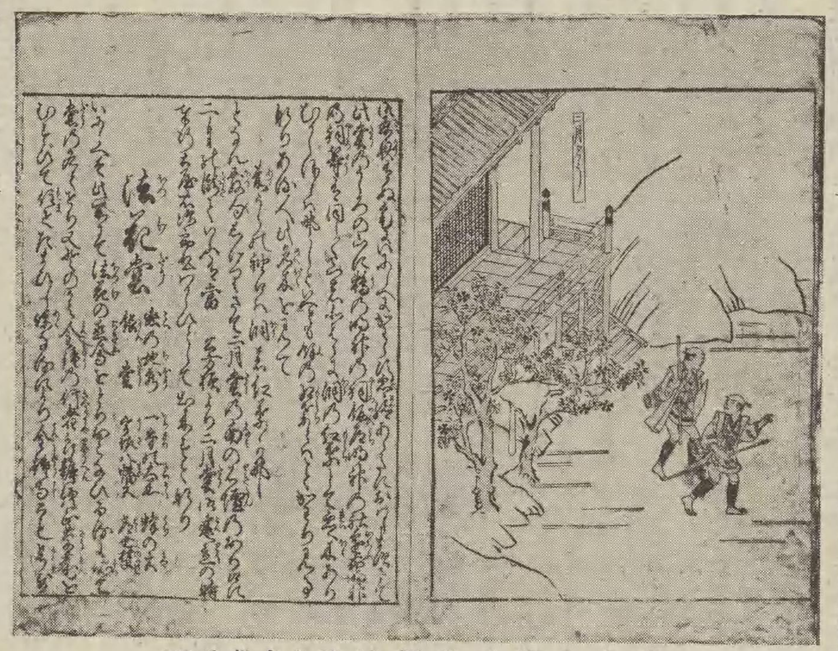
明治の俳風（めいぢのはいふう）　俳書　【著者】中村樂天　【刊行】明治四十年九月　【内容】明治の代表作家たる紅葉・知十・小波・松宇・黄雨・愚佛・鳴雪・烏黒・醉月・殘花・無黄・竹冷・五丈原・虚子・碧梧桐・紅緑・四方太・青々・漱石・子規の二十家に就いて、その作風を論じたものである。【水原】

明治俳句（めいぢはいく）　句集　【編者】竹村秋竹　【刊行】明治三十四年二月　【内容】秋竹が各種の新聞雜誌及び句會記事等から抜萃して

學思想、第四章新興文學の勃興其二（二十八年―三十七年）、第五章新文學の勃興其二、第六章文學の轉進、第七章最近文學の概觀の三期七章に分ち、更にその各章をそれぞれ數節に分つて時代の思潮・詩歌・小説・戯曲・飜譯文學の各項目を相當詳論してゐる。改訂版はその初版本の全部に訂正を加へ、特に第七章最近文學の概觀は、全然これを書き改めて表題も「文學一轉の期」と改め、更に第四期（三十八年―四十一年）、第八章新興文學の由來、第九章新興の文學の二章を加へて自然主義全盛期新浪漫派文學の萌芽にまで筆をのばし、且つ巻末に、明治四十年末に至るまでの「明治文學年表」を添へてある。【價値】錯綜した明治四十年間の時代思潮の流動展開の跡をよく整理し跡づけて文藝諸流派隆替の背景を判然果、若しくは並行的所産物として、學藝・政治經濟・外交・宗教等の諸分野に現はれ、殊に明治維新の再認識がやかましく論議されるに至つたが、本全集は正にこの時代思潮に浮び出た最も有力な資料の集成である。主なる編輯同人は吉野作造・神代種亮・齋藤昌三・柳田泉・石川巖・尾佐竹猛・宮武外骨等諸氏の明治文化研究會の人々で、明治時代探究に就いては既に定評を有した學者であり、その研究を體系的に且つ最も良心的な共同作品として世に出したのが本全集である。各巻に收載した作品又は資料は約二百有餘に上り、その各々に關して、「性質・公刊の趣意・時代に及せる影響並に業譯者の經歷等」を、專門家の詳細な解題として添へ、原本の俤は可及的に傳へる方針で、

めいしよ

であつた。而して名所記は、その以前既に刊行されたものもあるから、官撰地誌の影響を受けたものとは思はれないが、併し地誌編纂の機運は、當時上下の間に瀰漫してゐたので、學者文士は逸早くこれを捉へ、各自の經驗を基礎として諸國巡り、名所見物、案内書等、種々の地誌的著述を公にした。中にも名所記は最も早く刊行されたものの一であつた。素より民衆的のものであるから、すべて單純に出來、俗耳に入り易きために、記事はむしろ概略を旨とし、その趣を圖畫に現はして説明を省き、讀者の眼を悦ばし、神佛の緣起・口碑傳説等の興味的記事は長きを厭はず、時に諧謔舞文、人の題を解くことすらあり、殊に名所記の文中、和歌・俳句・狂歌を織り込む習慣は、他の假名草子（別項）にもあり、むしろ一般的で、別に異とするに足らぬが、併しこの習慣は、全く紀行文學（別項）の脈を繼承したもので、紀行文は實に名所記の濫觴であつた。これ等紀行文の目的は、旅中の風景に言寄せて自家の吟懐を抒ぶるにあつて、沿道の地理・風物・人情の描寫はその背景といふべきであるが、後世から見ると、その背景が私撰地誌となつて、名所記に好模範を與へたことになる。德川期に入つては、やはりこの文脈を辿つたものに



奈良名所八重櫻（小田久太郎氏藏）

これ又その一例を示したもので、共に名所記の陳腐となつた。かくの如く名所記は紀行文の搖籃に育まれ、それを換骨奪胎して名所記文を形成したものと云つて差支へない。

【年代と種別】名所記の最も早く刊行されたのは、中川喜雲の「京童」（別項）（明暦四年七月刊記）である。これに次ぐものは山本泰順の「洛陽名所集」で、萬治元年仲秋即ち八月の刊行である。二書、年號は變つてゐるが同年で、ただ一月の差があるのみ。即ち「京童」は「名所集」よりも、出版に於ては一月先であるが、「京童」のとかく散漫に失して遊戯氣分に充ちてゐるに對し、「名所集」の緊張して地誌的内容の比較的充實してゐる點から「名所集」は出版は後れても、その撰述着手は早かつたに相違ないといふ説（高木利太著「家藏日本地誌目錄」序論）は肯綮を得たものと思はれる。兎に角この二書が名所記の先驅となり、これに次ぐものが淺井了意の「東海道名所記」（別項）である。以上明暦から萬治にかけて三種の名所記が殆ど同時に刊行され、爰に私撰地誌の端緒が開かれたが、時恰も幕府の元老たる保科正之が、古の「風土記」の撰述に倣ひ、「會津風土記」を撰し、又諸侯に向つて藩誌編纂を慫慂した事實と相俟つて、愈々名所記の流行を來し、寛文より延寶にかけて、この種地誌的著作の刊行が頗る多數に上つた。爰には名所記として著名なもののみを擧げる。

京　童　六　巻　中川喜雲　（明暦四年）
洛陽名所集　十二巻　山本泰順　（萬治元年）
鎌倉名所記　五　巻　中川喜雲　（同　二年）
澤庵和尚鎌倉記　二　巻　不明　（同　年）
東海道名所記　六　巻　淺井了意　（同　年頃）
武藏あぶみ　二　巻　同　（同　四年）
江戸名所記　七　巻　同　（寛文二年）
かなめ石　三　巻　同　（同　三年）
京　雀　七　巻　同　（同　五年）
京童跡追　六　巻　中川喜雲　（同　七年）
本朝寺社物語　九　巻　不明　（同　年）
吉野山獨案内　六　巻　謠春庵周可（同　十年）
有馬私雨　五　巻　平子政長　（同十二年）
山城四季物語　六　巻　坂田直顧　（延寶二年）
澤分船　六　巻　一無軒道治（同　三年）
南都名所集　十五巻　太田冥親　村井道弘　（同　年）
住吉相生物語　六　巻　一無軒道治（同　三年）
江戸雀　十二巻　菱川師宣　（同　五年）
出來齋京土産　七　巻　不明　（同　六年）
奈良名所八重櫻　十二巻　大久保秀興　本林伊酔　（同　年）
河内名所鑑　六　巻　三田淨久　（同　七年）
難波鑑　六　巻　一無軒道治（同　八年）

なほこれに洩れたものもあらうし、又林宗甫の「和州舊跡幽考」二十巻（延寶九年）、黒川道祐の「雍州府志」十巻（貞享三年）の如き、地誌的價値はあるが、挿繪はなくやゝ硬いもの、又「京羽二重」「難波雀」「江戸鹿子」等の節用式地誌及び貞享以後の刊本は、硬軟を問はず、すべて省いたが、併し名所記の流行は延寶を高潮期として漸次衰退したから、流行期間は萬治以後約三十年間であつた。而して名所記の發達は、京都を中心として山城を最とし、昔の京の奈良・大和・江戸・大阪といふ順序であるが、名所記にも種々區別があり、全國的のもの又は一國・一都會に限られたもの、「東海道名所記」の如きは前者に屬し、「洛陽名所集」「摂分船」の如きは後者に屬する。特異の種類には「山城四季物語」「難波鑑」の如き、民間の年中行事、社寺祭禮法會等に、特に力を注いだものもあれば、「京雀」の如く、「京町鑑」「職人盡」式の町名・商工店舗等の所在を圖畫と相俟つて詳述したものもある。「住吉相生物語」は、ただ住吉神社に限られた編述であり、「武藏あぶみ」の明暦大火記であることは、誰も知るところであるが、「かなめ石」の寛文二年、京都に於ける大地震の光景を細叙したものである事は、まだ餘り多く知る人がない。中には「有馬時雨」の如き、單に温泉案内に過ぎない

迷所一覽

名所記（めいしよき）　地誌　【名義】その名の示す如く名所の記述で、廣義の地誌であるが、まだ科學的知識の幼稚な時代の産物であるから、地誌としては組織に缺くる所あり、その編纂は著者思ひ〳〵の好事に支配されて散漫ではあるが、それだけ文學的趣味に富む特色がある。【地誌及び紀行文との關係】地誌として古いものでは「風土記」（別項）があるが、今は殆ど散佚して、傳はつてゐるものは一二の殘缺に過ぎず、その後地誌は久しく行はれなかつたが、德川四代將軍の頃、地誌編纂が企てられ、幕府をはじめ諸藩に於て若干の撰定を見たが、併しこの種の官撰地誌は多く漢文を以て綴り、官府に祕藏して刊行するに至らなかつたから、一般讀書子とは殆ど没交渉

ものもある。地誌的のものもあれば、災異記もあり、神佛の靈驗緣起を記したもの、有用無用は姑く措いて皆それ〴〵に期待を有ち、假名草子と並行し、趣味の讀本として一般讀書子に歡迎せられたものである。その撰者としては淺井了意（別項）が最も聞え、又勝れた作を多く殘してゐるが、併し地誌的のものが少く、特異の價値を有するものが多い。【影響】名所記が、その後の江戸文學に及ぼした影響は決して少くない。最も著明な影響としては、秋里籬島が安永九年に刊行した「都名所圖會」をはじめ、今世上に流布する名所圖會（別項）に及ぼしたものである。この名所圖會のうち、特殊のものを除き、他は概ぬ前記名所記の更生に外ならぬ。

【參考】古版地誌解題和田萬吉〇家藏日本地誌目錄　高木利太　〔水谷〕

名所小鏡（めいしよこかがみ）　句集　中本四册

【編者】五升庵蝶夢【本名】俳諧名所小鏡【刊行】寛政七年十月、京井筒屋庄兵衞等刊。【解說】五畿七道に亙り、諸國の名所を詠じた古今俳人の句を、國別・名所別に類聚したもので、一陽井素外の「誹諧名所方角集」（安永四年刊）の體裁に倣つてゐる。併し素外の著よりも名所の數は遙かに多く擧げられ、且つ採收した句も努めて「方角集」と重複したものを避けて居り、徒らに前人の跡を踏襲したとは認められない。古來名所の句を案ずるに當り、その參考書として俳人から最も重寶視されて來たものである。　〔瀧原〕

名所圖會（めいしよづゑ）　地誌　【解說】安永九年、秋里舜福（籬島、又は湘夕）が「都名所圖會」（別項）を著はし、京都の神社佛閣よりはじめて山川丘陵まで、苟くも名所と名のつく場所の

書名	卷數（册數）	著者	畫工	刊行年代
都名所圖會	六（十一）	秋里舜福	春朝齋竹原信繁	安永九
同　拾遺	五（五）	同	同	天明七
大和名所圖會	六（七）	同	岡田玉山	寛政三
住吉名勝圖會	五（五）	岡	同	寛政七序
和泉名所圖會	四（四）	秋里舜福	春朝齋竹原信繁	寛政八
伊勢參宮名所圖會	六（八）	蔀關月	蔀關月	寛政九
東海道名所圖會	六（六）	秋里舜福	三都名家	同
攝津名所圖會	九（十二）	同	春朝齋竹原信繁	寛政十
都林泉名勝圖會	五（六）	同	佐久間草僊・西村中和	寛政十一自跋
河内名所圖會	六（六）	同	奥文鳴・源貞章	享和元
二十四輩順拜圖會	（十）	僧　了貞	丹羽桃溪	享和三
播州名所巡覽圖會	（五）	秦　石田	西村中和	文化元
木曾路名所圖會	六（七）	秋里舜福	岡田玉山・岡熊岳・大原東野	文化二
唐土名勝圖會	六（六）	岡田玉山	蔀關月	文化八
阿波名所圖會	（一）	探古室墨海	西村中和	文化十一
近江名所圖會	四（四）	秋里舜福	蔀關月	文政六
鹿島名所圖會	（一）	北條時鄰	西村中和	天保七
江戸名所圖會	七（十二）	齋藤幸雄	西村中和	天保八
紀伊國名所圖會	（十七）	同幸孝刪補	西村中和	天保十三
嚴島圖會	十（十）	高市志友	小田切春江	清啓
尾張名所圖會	十二（十三）	岡田清啓	小田切春江	前篇天保十五後篇明治十三
金比羅參詣名所圖會	（六）	岡野口道直	小田切春江	弘化四
善光寺道名所圖會	（五）	曉鐘成	松川半山	嘉永二
西國三十三所名所圖會	（十）	豐田利忠	松川半山	嘉永六
讃岐名所圖會	（五）	曉鐘成	浦川公左	嘉永七
成田名所圖會	（五）	松岡信正	松川半山・四方春翠・樣川東居	安政五
花洛名勝圖會	（八）	中路定得・木村明啓・川喜多眞彥		文久二

親王と定家、周防の内侍、和泉式部の貴船參籠、鳥羽院の后、源渡の妻、牛王姫。（四）横笛、小宰相、あふひの前、小督、今出川公顯の女、勾當内侍。（五）大磯の虎、六條の吉野、八千代、大坂の雲井、夕霧、江戸の濃紫、島原の吉野。

これまで「本朝女鑑」「日本名女咄」など、忠孝貞節、道義的女性を題材にしたものはあつても、まだ愛、即ち本書の所謂なさけのために一生を捧げた女性を扱つたものは、餘りなかつた上に、五之卷の「遊女情くらべ」には、七人の遊女を擧げ、而もその多數が當代の名妓で、夕霧の如きは延寶六年に歿し、まだ極めて新しい題材を扱つてをる事等、假名草子には珍しいことである。こゝに一例を擧げる。

大坂の雲井心中の事

雲井は大坂新町の傾國なり、阿波やのなにがしが男（むすこ）、ふかまの中となりけれは、日々に彼の町へかよひつゝ、金銀を風前のちりとなしけれは、かくては家の滅亡なりとて、彼おやむすこを追いたしければ、せんかたなくてたち出しが、せめて今一度はあふて、別（わかれ）の名殘を惜まんと思ひ、彼所に行て雲井にかくとかたりけれは、雲井いふやう誠につたなきつとめのみこそならめ、我故にかくおちこちのたつきもしらぬ身とならせ給へは、いかなる野のすゑ山かづの、くさはの露の玉の緒をかぎりに、したひ行度思へども、さすが身をうりし事なれは、心にかなはず、とかくいひかはせし情のかはらぬしるしには、さにもいかにも成べきと思ひさふらふと、誠におもひこふたるけしきほかにあらはれ、なみだとともにかきくどきければ、彼もしづくにつまりて、こはたゞひなき心底かな、よしさらは此世のえんはかくつたなくとも、ひとつはちすのえんとならんといひけり、雲井世にうれしげにいさみつゝ、心しづかにかきをきなんどしたゝめ、二人もろともはかなくなりけり、誠に君がためをしからじと、命をともに思ひかはせし心中は、いつた事にはあらず、其頃此心中をあはれみて、世上にうたひける歌、柴垣の唱歌に

水にうつろふ雲井の月も、波の阿波やと浴た物

假名草子（別項）は、大體教訓主義を基礎としてゐるので、これまで好色本（別項）はあつても、

名女情競（めいぢよなさけくらべ）　假名草子　五卷五册

【作者】洛落堂好色軒（傳未詳）【名稱】卷一より卷四まで「名女情競」、卷五「遊女情競」、情くらべは、戀に浮名を流した女性列傳の意である。【刊行】延寶八年作、翌九年春刊行。洛陽書林瀨尾源兵衞・本田次兵衞開版。【解說】卷一から卷四までは、王朝以來著名な女性の戀愛譚。卷五は遊女を話題としてある。即ち

（一）衣通姫、小野小町、小町が姉采女、眞野の長者の娘と用明天皇、京極の御息所、志賀寺の上人。（二）二條后と業平、武藏の女と業平、齋宮と業平、紀有常の女、紫式部と高明、右近の君、儀同三司の母、赤染衞門の妹。（三）式子内

れた結果は、秋里舜福をして更に他國の名所圖會に指を染めしめたばかりでなく、これに倣つて同類の著作を試むるものが續出することとなり、いつしか名所圖會類とも名づくべき大衆的讀み本の一群が出來た。今主要なるものを擧げると右表の如くである。　〔石村〕

遊女の事などを題材に扱つたものは殆どなかつた。作者も主に學者であつたから、遊女などを筆するを屑としなかつたにも由るが、兎に角遊女關係の記事は、名所記（別項）の中に若干あり、評判記（別項）・細見の外、見なかつたのであるが、この書に由りて初めて記載された。上方における傾城ものの嚆矢は、天和二年刊西鶴の「好色一代男」（別項）であること

正された。

名人長次（めいじんちやうじ）　「指物師名人長次」を見よ。　〔和田〕

鳴雪（めいせつ）　俳人【本名】内藤素行【別號】南塘・老梅居等。【流派】日本派【生歿】弘化四年四月十五日、江戸松山藩邸内に生れ、大正十五年二月二十日、東京市麹町笄町の自邸に病歿す。享年八十。【墓所】青山墓地【閲歷】幼にして讀書を好み、漢學を修め、長じて京

た。一面また新知識に對する知識慾を有し、哲學・美學等を研究して、一家の文學觀を有してゐた。俳句に關する著述の多かつた事も、上來述べ來つたところに關聯する。なほ鳴雪といふ號は本名素行（なゆき）より出づ。【著作】句集には「鳴雪句集」「鳴雪俳句鈔」「鳴雪俳句集」（別項）があり、作法書には「俳句作法」「俳句獨習」があり、俳話俳論には「鳴雪俳話」「老梅居

叢書の一として、いろ〳〵の特徴を持つて生れた。即ちその内容が悉く袖珍型の僅々二百餘頁に收まるやうな短篇である事、編輯者が各々專門的立場から材料を選んだ事、從つて近世文學が主體となつて古典が少い事、校訂者が即ち責任者であつた事などは、本叢書の價値を重からしめた原因であつて、而も小說・脚本・隨筆・史傳・詩歌・俳諧・雜論等からの取

【解說】五畿七道に亙り、諸國の名所を詠じた古今俳人の句を、國別・名所別に類聚したもので、一陽井素外の「誹諧名所方角集」（安永四年刊）の體裁に倣つてゐる。併し素外の著よりも名所の數は遙かに多く擧げられ、且つ採收した句も努めて「方角集」と重複したものを避けて居り、徒らに前人の跡を踏襲したとは認められない。古來名所の句を案ずるに當り、その參考書として俳人から最も重寶視されて來たものである。【頴原】

名所圖會（めいしょづえ）　地誌　【解說】安永九年、秋里舜福（攝島、又は湘夕）が「都名所圖會」（別項）を著はし、京都の神社佛閣よりはじめて山川丘陵まで、苟くも名所と名のつく場所の遊女の事などを題材に扱つたものは殆どなかつた。作者も主に畧者であつたから、遊女などを筆するを屑としなかつたにも由るが、兎に角遊女關係の記事は、名所記（別項）の中に若干あり、評判記（別項）・細見の外、見なかつたのであるが、この書に由りて初めて記載された。上方における傾城ものの嚆矢は、天和二年刊西鶴の「好色一代男」（別項）であること勿論であるが、併しそれより二年以前、既にこの「情くらべ」に、僅か一卷にもせよ、遊女のことを載せてゐるのは、頗る珍とせねばならぬ。恐らくこれが傾城ものの濫觴であらう。併し何人の作であるかは明かでない。好色軒といふは、勿論假名に相違ないが、餘程の通人で、而も相當に文學的素養のあつた人であることは、その文に由つて窺はれる。併し餘り行はれなかつたものと見えて、傳本が稀れである。【水谷】

【參考】新撰列傳體小說史（前編）水谷不倒

名人忌辰錄（めいじんきしんろく）　傳記　【著者】關根只誠編・關根正直訂。【刊行】明治二十七年初版（半紙和裝二卷二冊）、大正十四年訂正改版（洋裝一冊）。【解說】江戸時代から明治時代初期に亙つて各階級各職業の有名な人、殊に文學・藝術方面の人々の略傳・歿年・葬所を記したもので、日本全國と云ふ中にも江戸にゐた人を多く採つてある。排列は人名のイロハ順によつてゐる。卷尾に「俳優忌辰錄」が添へてある。なほ改版には「情死錄」「刑死錄」を添へてある。この改訂版には書名に「訂正改版」の角書がある。明治二十七年小中村清矩の舊本序と、大正十二年訂正者の小跋「忌辰錄の改版に際して」がある。舊版には往々生歿・年記等に誤謬が存したが、この新版に於て大分訂正された。

内藤鳴雪

名人長次（めいじんちょうじ）　「指物師名人長次」を見よ。【和田】

鳴雪（めいせつ）　俳人　【本名】内藤素行　【別號】南塘・老梅居等。【流派】日本派　【生歿】弘化四年四月十五日、江戸松山藩邸内に生れ、大正十五年二月二十日、東京市麻布笄町の自邸に病歿す。享年八十。【墓所】青山墓地　【閲歷】幼にして讀書を好み、漢學を修め、長じて京都・東京に遊學した。松山權少參事となり、學務官として各地に歷任し、明治二十三年、文部省參事官となつたが、翌年官を辭し、後專ら常磐會寄宿舍の舍生を監督した（常磐會寄宿舍は、藩の寄宿舍で本郷眞砂町にあつた。その監督の職に就いたのは明治二十二年であつた）。舍生の中に正岡子規があり、その感化によつて明治二十五年春、四十六歳で始めて俳道に入り、「猿蓑」を精讀して句境大に進み、一歳を出でずして、既に一家の風格を具へるに至つた。二十八九年の頃は、その作に見るべきものが多く、舊藩以來の年長者であるのと同派中の學者でもある等の點から、古典的な傾きがあり、又平快率易を喜ぶ風があつて頗る平明な調子をなした。從つて初學者の指導者として迎へられる傾きがあつた。併しその脫俗飄逸な人格と和漢佛の造詣ある長者であるとのために、日本派の中に重きをなし、翁或は先生を以て稱せられた。以上の關係から、多くの新聞や數十種の雜誌の選者として迎へられ、又俳書類の題句を乞ふものが頗る多かつた。一面また新知識に對する知識慾を有し、哲學・美學等を研究して、一家の文學觀を有してゐた。俳句に關する著述の多かつた事も、上來述べ來つたところに關聯する。なほ鳴雪といふ號は本名素行（なおゆき）より出づ。【著作】句集には「鳴雪句集」「鳴雪俳句鈔」「鳴雪俳句集」（別項）があり、作法書には「俳句作法」「俳句獨習」があり、俳話俳論には「鳴雪俳話」「老梅居俳句問答」「老梅居雜著」等があり、評釋類には「芭蕉俳句評釋」「燕村七部集俳句評釋」「太祇俳句評釋」「元祿廿家俳句講義」等がある。外に「文學論」や「鳴雪自叙傳」がある。

【參考】鳴雪自叙傳　【志田・石井】

鳴雪俳句集（めいせつはいくしふ）　句集　【編者】松浦爲王　【刊行】大正十五年六月　【解說】明治二十五年から大正十四年に至る三十四年間に於ける鳴雪の作句集で、その原本は、編者の凡例によれば、自筆の稿本「老梅居吟」四卷、「老梅居舊吟」一卷、「古々路覺え」一卷、「鳴雪發句集」二卷、「近稿」一卷及び六百九十八枚の未定稿であるといふ。句作は年代順に據らず、春・夏・秋・冬・新年の季別によつて編成されてゐる。收むるところの句數は約二千で、卷頭には翁の肖像を掲げ、碧梧桐・虛子等の鳴雪に關する文が掲げられてゐる。鳴雪の句集には、先に「鳴雪句集」「鳴雪俳句鈔」があるが、これはそれ等よりも大部で、翁の句の集大成されたものと云つてもよいであらう。【石井】

名著文庫（めいちょぶんこ）　叢書　五十册　【本稱】袖珍名著文庫　【編輯・校訂者】饗庭篁村・尾崎紅葉・藤岡作太郎・幸田露伴・上田萬年・宮崎三昧・芳賀矢一・關根正直　【刊行】明治三十六年、富山房（上製・並製の二種あり）。【解說】國文學研究の勃興の潮流に乘じて現はれた國文叢書の一として、いろ〳〵の特徴を持つて生れた。即ちその内容が悉く袖珍型の僅々二百餘頁に收まるやうな短篇である事、編輯者が各々專門的立場から材料を選んだ事、從つて近世文學が主體となつて古典が少い事、校訂者が即ち責任者であつた事などは、本叢書の價値を重からしめた原因であつて、而も小說・脚本・隨筆・史傳・詩歌・俳諧・雜論等からの取材が、かなり趣味的に偏してゐるにも拘はらず、讀者層に歡迎されて、大正期にまで數版を重ねた。

【附記】新型名著文庫二十五册（第一期未完）。前名著文庫の中から取材したものもあるが、校訂者に上田・關根・芳賀・幸田諸氏の外に齋藤茂吉・尾上八郎・藤村作・高野辰之・佐佐木信綱の五氏を加へて、大正十五年以降同書店から出版されてゐるが、前文庫が近世文學中心であつた色彩を弱めて、和歌・歌謠の量を多くしてある。【土井】

冥途の飛脚（めいどのひきゃく）　淨瑠璃　三段　世話物　【作者】近松門左衞門　【角書】忠兵衞梅川　【初演】寶永八年三月五日より竹本座（明和板「外題年鑑」）　【諸本】七行五十四丁本、山本九兵衞板。七行六十丁本、菱屋治兵衞板。八・九行三十三丁本、正本屋仁兵衞板。九行二十六丁本、山本九兵衞板。諸種の近松淨瑠璃集所收。【題材】寶永七年九月板の浮世草子「御入部伽羅女」に梅川が寶永七年の春に赦されて新町の廓に返り咲きして人氣を湧かせ、それより京都に歸つた事が記されて居り、又寶永八年正月京都萬太夫座の二の替り狂言「けいせい九品淨土」に、梅川が廓を抜け出るため、忠兵衞といふ安敵を色仕掛で瞞し、駈落の手引をさせて途中でまくといふ仕組がある。而してこの狂言事なれば、心にかなはず、さかくいひかはせし情のかはらぬしるしには、さにもいかにも成べきと思ひさふらふと、誠におもひこふたるけしきほかにあらはれ、なみだごともにかきくどきければ、彼もしごくにつまりて、こはたぐひなき心底かな、よしさらば此世のえんはかくつたなくとも、ひとつはちすのえんとならんといひけり、雲井世にうれしけにいさみつゝ、心しづかにかきをきなんどしたゝめ、二人もろともはかなくなりけり、誠に君がためをしからじと、命をさもに思ひかはせし心中は、いつた事にはあらず、其頃此心中をあはれみて、世上にうたひける歌、柴垣の唱歌に

水にうつろふ雲井の月も、波の阿漕やと滑た物

假名草子（別項）は、大體教訓主義を基礎としてゐるので、これまで好色本（別項）はあつても、

は同二月に、事件の地元なる大阪榊山座の二の替りにその儘演ぜられてゐる。これ等から想像すると、當時梅川は相當なしたゝか者であつたが、その美貌の故に評判されたのに對し、忠兵衞は單なる拐帶犯人に過ぎぬため同情がなかつたものではあるまいか。正德二年の序がある浮世草子「好色入子枕」の記する所は、殆ど本作と一致してゐるが、これは寧ろ本作に基いて潤色したと見るべきであらう。

【梗概】〔上之卷〕大阪淡路町の飛脚宿龜屋の養子忠兵衞は新町槌屋の抱へ梅川に馴染んだ揚句金に窮して、友達の丹波屋八右衞門に屆くべき江戸よりの爲替金五十兩を費ひ込み、強硬な督促を受ける。途方に暮れた忠兵衞は一切の事情を明かして苦衷を訴へたので、八右衞門は一時融通することとし、且つ忠兵衞の養母妙閑の手前を無事につくろつてやる。〔中之卷〕新町越後屋の下座敷で、八右衞門が大勢の遊女達に取卷かれながら忠兵衞が自分の爲替金を費消した一件を披露し、暗に己が俠氣を吹聽する。偶然これを立ち聞きした忠兵衞は一時に赫となつた結果、出入の屋敷へ屆ける筈の爲替金三百兩の封印を切り、五十兩を八右衞門に叩きつける。二階で始終を窺つてゐた梅川が驚き降りて來て制しようとすると、忠兵衞は養子の時の持參金であると稱して、殘りの金で梅川を身請してしまふ。〔下之卷〕二人は相携へて廓を出で（道行「忠兵衞梅川相合羽籠」）、奈良の旅籠屋三輪の茶屋と二十日餘り諸方をうろついて、遂に親里なる新口村に入り込み、舊知の百姓忠三郎の家に忍び入り、こゝで實父孫右衞門と餘所ながらの對面をする。やがて二人は忠三郎の情で裏道から御所街道へと落ちのびようとしたが、程なく途中で代官の手に捕へられる。

【構想】筋は敍事的に見て單純であり、又趣向も他の近松の世話物に於けると同型のものが多いが、抒情味豐かな一篇の戀愛悲劇をなしてゐる。文章も洗練し盡されて居り、近松の傑作中に指を屈すべきであらう。【影響】正德三年十月十二日から曾根崎新地芝居興行の紀海音作「傾城三度笠」は本作の改作で、更にこの改作と原作とを攪き合せたのが、安永二年十二月二十三日から豐竹此吉座上場の菅專助・若竹笛躬作「けいせい戀飛脚」である。而してこの作が歌舞伎に入り、「戀飛脚大和往來」と改題され、寬政八年正月大阪の角座で上演され、更にそれが操に逆輸入され、天保元年閏三月、北堀江市の側の操芝居に於て「戀飛脚大和往來」の外題で新口村の段が語られ、その後操でも前の「けいせい戀飛脚」の外題と並び行はれるに至つた。その他、一中・豐後・正傳・宮薗・富本・常磐津・清元等の淨瑠璃諸流派にも本作の流が汲んでゐる。

【參考】近松之研究 坪内・綱島 ○大近松全集第二卷解題水谷不倒 ○近松傑作全集第二卷解題 藤井乙男 ○近松名作集下解題 黑木勘藏 ○近松全集第九卷解題 高野（正）

伽羅先代萩 めいぼくせんだいはぎ

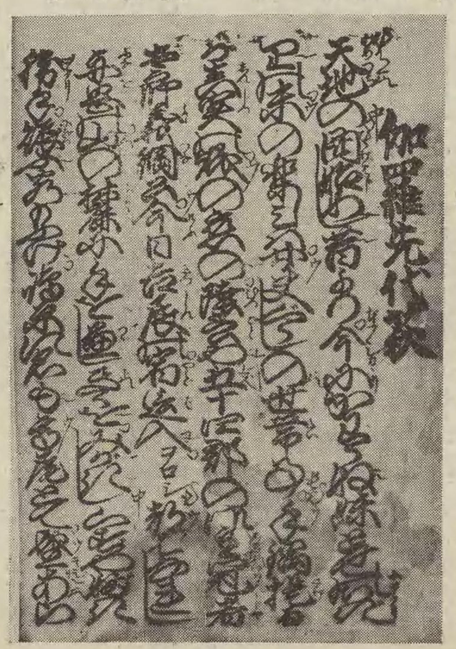
【作者】奈河龜輔 【名稱】伊達騷動に現はれる伽羅の下駄等によつたものであらうが、この香木の異稱「めいぼく」を用ひて先代萩につづけたもので、兼ねて仙臺と萩大臣とを響かせて内容を暗示してゐる。角書に「奥州秀衡遺目爭論」とある。【諸本】書卸臺帳は東京帝國大學國語研究室に傳はつてゐたが、大震災のために燒失した。但し演劇叢書第四編に所收。併し五幕目が缺けてゐる。同名題の臺帳が世に數種あるが皆書卸しではない。興行當時刊行された同名題の根本が傳はつてゐる。

【興行】安永六年四月二十日初日、大阪中の芝居で六月まで續けた當り作。

【役割】梶原景時（中村歌右衞門）、泉小次郎・松枝節之助・秩父重忠・馬方六藏（中山文七）、常陸之介濱尊・山伏眼通坊・菅沼幸助（淺尾爲十郎）、冠者太郎・母小俊（嵐七三郎）、錦戸刑部・榮御前・鳴神岸右衞門・錦戸酒造頭（中村次郎三）、浮世渡平・醒井兵太・佐藤兵衞・大場道還・八汐・竹原養仙（桐山紋治）、志太十三郎（三代澤村宗十郎）、荒浪梶之助・唐木和助・志加武右衞門・小卷（松本次郎三）、伊達次郎・政岡局（中山來助）、信夫の庄司・志形外記（嵐三十郎）、傾城高尾・おしげ（尾上粂助）、沖の井（花柳豐松）、千松（阪東名嘉六）等。

【題材】伊達騷動。但し實錄を本とし、從來の伊達狂言を集成したもので、特に「けいせい睦玉川」（別項）との關係が深い。

【梗概】〔序幕〕（鎌倉殿中の段）八月下旬、政子の方の懷姙に際して、四十二歳の賴朝のために二つ子の俗説により厄除の祈禱を要する事となり、奥州鎭守府の冠者太郎經陸に家寶雌雄の二幅を獻上せよと命じた。經陸所勞につき、家老庄司爲村がこれを御受けしたが、梶原の家臣は、經陸が遊興のための不參であると辯じた。又雄鳥の一軸は緣家志田家に讓られてあつた。（大磯曲輪の段）九月上旬、志田十三郎は傾城高尾に迷ふうち、重寶の一軸を奪はれたので、身をやつして廓の夜番傳助となつてこれを尋ねてゐる。經陸の家來鳴神は味方と見せて、高尾が假に一旦殿に身請されん事を勸める。志田の舊臣秋篠平八も田樂屋にやつして十三郎を諫め、國許の騷ぎを傳へて我が家に連れ歸る。（揚屋大廣間）經陸は暴れ狂つたが、高尾の身請が決つて治まる。高尾は大秤で量られた上、三千五百兩が渡される。海尊の腹心たる鳴神は高尾を我が手に入れる豫算を荒浪に告げる。（相模川の段）平八の家から十三郎がゐなくなつて、夫婦は葭原の中を尋ね廻る。引道具。（川岸）男藝者の浮世渡平に遭つた十三郎は、高尾が相模川の船中で吊し斬りになつた事を聞かされた。折から流れ寄つた下半身の死骸を引上げて歎きに沈む。渡平は經陸を暗討に走る。（日本堤の段）經陸は荒波鳴神等によつて危くも渡平の刃から逃れたが、田樂屋に匿まはれた禮として平八に己がはく下駄を與へた。平八は却つて怒り、これを火鉢にくべる。名香の薰がした。（定倉門を守るの段）經陸が廓から送られて歸ると、恰も本國から上つて來た家老泉の小次郎定倉は、殿の名を僞る者として扉を締



伽羅先代萩（正本）

俠氣を吹聽する。偶然これを立ち聞きした忠兵衞は一時に赫となつた結果、出入の屋敷へ屆ける筈の爲替金三百兩の封印を切り、五十兩を八右衞門に叩きつける。二階で始終を窺つてゐた梅川が驚き降りて來て制しようとすると、忠兵衞は養子の時の持參金であると稱して、殘りの金で梅川を身請してしまふ。〔下之卷〕二人は相携へて廓を出で（道行「忠兵衞梅川相合羽籠」）、奈良の旅籠屋三輪の茶屋と二十日餘り諸方をうろついて、遂に親里なる新口村に入り込み、舊知の百姓忠三郎の家に忍び入り、こゝで實父孫右衞門と餘所ながらの對面をする。やがて二人は忠三郎の情で裏道から御所街道へと落ちのびようとしたが、程なく

め切つてしまふ。（經陸館の段）經陸は海尊の手によつて擔ぎ込まれたが、館の中には梶原景時が上使に立つて雄鳥の軸を受取りに來てゐた。經陸の伯父錦戸刑部は野望成就のために、一軸を手に入れんとしたが、定倉によつて裏をかゝれる。定倉は雄鳥の軸と揃ふまで延引を乞ひ、且つ故意に經陸の隱居と幼君鶴喜代の相續とを願ひ出ると、刑部と諜してあつた景時は、卽座にこれを許して刑部を番代に据ゑんとした。この時、諸士の末席から熊井源五が裁斷の非を鳴らしたので、改めて刑部と庄司爲村を後見、表館の執權を海尊、國元の守護職を定倉に命じた。（裏門）無禮の罪科を以て牢輿で國に送られる源五は、海尊一味のために圍まれたが、却つて輿を破つて追ひ拂つた。〔二幕〕（滑川花見）刑部・海尊の兩人は定倉と伊達顯衡との間に同士討の策を廻らす。そこへ、鶴喜代毒殺の陰謀が、乳母政岡と松枝節之助とのために露顯したといふ報知が來た。（刑部館）刑部が一味の近習三人を召捕り、拷問と見せかけたが、驅け付けた爲村に見破られんとしたので、海尊が出て忽ち三人を手討にする。毒藥配劑の大場道遠も海尊に謀り討たれる。（奥御殿の段）政岡は幼君を病氣と披露して自ら炊いで養ふ。近習頭渡會銀兵衞の妻八汐が見舞に事寄せて政岡を罪に陷れようと、忍びの男を使つて策を廻らしたが、鶴喜代の一言で失敗する。そこへ梶原の奥方榮御前が見舞に來て、賴朝公からとて毒菓子を鶴喜代の前に据ゑた。豫ての教へによつて、政岡の伜千松は走り出てこれを口にし、忽ち毒に中つた。八汐はそれと見て直に千松を刺す。政岡の取亂さぬ態度に、榮御前は千松と鶴喜代が取替子であると判斷し、將

來我が聟に奥州を押領させたい慾から、政岡を腹心にする考で、その成功を喜んで歸る。折から鎭守府の旗を鼠が銜へ去つたとの知らせ。（下家）舞臺はせり上る。節之助は忍びの大勢を拂つて、怪しい大鼠に斬りつけた。と、その姿は消えて旗を銜へた菅沼幸助が現はれた。政岡の手裏劍は八汐の胸へ。〔三幕〕（領分檢使の段）鎌倉から役人が下つて、定倉と顯衡との領地檢分に託して、故意に兩家の確執を計つた爲めに、定倉の奥方宮城野と顯衡とが反目する。併し宮城野は娘白石の胸を察して、許嫁なる顯衡の伜兵庫之助を匿まひ歸る。（泉小次郎屋舖の段）二月中旬なるに萩の盛り。定倉から守護職を讓りたい旨の進達によつて下向した酒造頭は、顯衡兄妹が爲村と共に反逆の意ありと告げる。且つ、政岡・節之助に不義ありとして、定倉・顯衡にお家横領の嫌疑がある由の經陸の書面を見せ、よつて兩家許嫁の緣を切らせて白石を我が手に入れんと計る。兩家は寶殿の繪馬を射た方で勘當する事となつたが、兵庫之助が射當てて卽ち勘當となる。兩家の確執は終に定倉をして顯衡の留守に乘じ、馳せてその高館の城を乘つ取らしめた。それと聞くや、顯衡はこれを攻へんと追ふ。これは兩人の祕策であつた。射術で運を定めたので、顯衡は江戸に訴へ出で、定倉が留まつたのである。經陸は雌鳥の一軸を持つてこの館に匿まはれてゐた。却つて捕はれの身となつた酒造頭は、刑部一黨の惡事を認めさせられた。滿開の萩が散つた。酒造頭等の埋めた地雷火が水に漬つたからである。〔四幕〕（鶴ヶ岡の段）お倉は茶店に出ながら義兄眼通坊の占店の留守を預る中、立ち寄つた志田十三郎を見染めて契を交す。お倉の父

田樂屋の秋篠平八は眼通坊と僞り、銀兵衞から雄鳥の一軸を奪つた。志形外記は秩父重忠に駕籠訴訟を決行した。（眼通坊内の段）三月下旬、平八は眼通坊が忍術で掛乞を威したのに目をつけた。醫者養仙が仲人で眼通坊に嫁が來、馬士の世話でお倉に聟が來る。聟は十三郎だつたのでお倉は喜んだが、嫁が高尾なので十三郎と互の奇遇に驚く。平八は斬られた高尾が彼の女房だつたと明かし、眼通坊が小助なる事と、その忍術を消す手段とを告げた。歸つた眼通坊は、母を害し平八を斬つたが、高尾に色を以て計られ、鎭守府の旗を奪はれる。伽羅の下駄の平八・お倉の血に、不審が起り、忍術の力が消えた所に、先の馬士は節之助と名乘つて遂に討取る。〔五幕〕（海尊・顯衡對決の段）鎌倉館の大廣間で、梶原と重忠と立會の下に、顯衡・海尊對決に當り、顯衡方の神南左衞門の出した連判狀も梶原が懷中したが、海尊は重忠に問ひ詰められてしまふ。（次の間）海尊は、顯衡に言ひ殘したい儀ありとて謀つて一刀に斬り倒す。（奥座敷）梶原も反逆の件で圍まれたが、賴朝の面前に言ひ開くこととなる。（廣間）海尊は手負ひのまゝ荒れ狂つたが、外記等のために止めをさゝれる。

【構想】伊達騷動（先代萩參照）は早くから種々の狂言に書かれたが、本作を以て代表作と認める事ができる。襲に「けいせい睦玉川」（別項）の名作が出て一集成をなしたが、本作に至つて更に大成したのである。「睦玉川」は世話の要素をも含めた點に成功したが、史實にも代表的な御家狂言としては、そこに迫力の弱さが見えた。併し本作が殆ど「睦玉川」の書き替へ程にも見られる所から、それと比較して構想上から成功の所以を知る事も出來る。本作は時代を鎌倉にして梶原と畠山を据ゑ、梶原をして直接事件に關せしめた爲め、まゝ時代物特有の重さを添へた。政岡も淺香の書き替へと見られるが、凡ての行動を節婦として徹底させた所に新面容を添へた。妖鼠の術も本作に至つて惡方に利用されて凄味をまし、眼通坊がやゝ世話にくだけ過ぎた嫌ひもあり、色慾の權化とさへ見えたものの、菅野小助は甚だ强惡に描かれてゐる。彼の勘解由が本作の海尊となつては、やはり右の點で成功してゐる。兩作とも、吊し斬りの高尾が代物であつたが、本作では四幕目で眼通坊の嫁として初めて姿を見せ、十三郎とも互の奇遇に驚くが、この趣向は遙かに效果的であると思ふ。全的にお家物としての莊重味と緊張味の整つた作といへる。後世に最も生命のある御殿の場は、政岡を中心とした人情味と節義の涙とが織り込まれた所に價値があるが、人物としては榮御前が傀儡とされてゐる點に意外な興味が湧くのである。併し又この場面としては舞臺裝置による援助が尠からぬものがある。御殿をせり上げて下座を露はし、花道を使つて鼠を消し、小助を出す。當時としては如何に評判の高かつたものかと思ふ。尤も各部分に引道具や割道具を盛んに活用してゐて、これ等は本作の成功に大に役立つたであらう。定倉と顯衡との僞りの反目は院本に往々見る趣向で、宮城野の白石、定倉の兵庫之助の關係は「妹背山婦女庭訓」（別項）を想起させる。眼通坊は歌舞伎の法界坊の影響もあらう。全場面の進行に淨瑠璃を用ひて、そのチヨボとしての遣ひ方には、如何にも巧妙なものが發見せられる。かくて「睦玉川」とはまた變つた價値を認められるので、龜輔傑作の一たるに

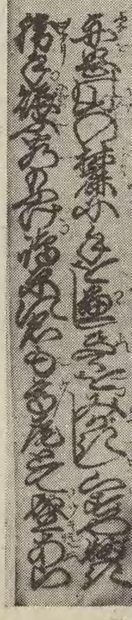
【參考】近松之研究 坪内・綱島 ○大近松全集第二卷解題水谷不倒 ○近松傑作全集下解題黑木勘藏 ○近松全集第九卷解題 藤井乙男 【高野（正）】

伽羅先代萩 めいぼくせんだいはぎ

【時代物】【作者】【名稱】伊達騷動に現はれる伽羅の下駄等によつたものであらうが、この香木の異稱「めいぼく」を用ひて先代萩につづけたもので、兼ねて仙臺と萩大臣とを響かせて内容を暗示してゐる。角書に「奥州秀衡遺目爭論」とある。【諸本】書卸臺帳は東京帝國大學國語研究室に傳はつてゐたが、大震災のために燒失した。但し演劇叢書第四編に所收。併し五幕目が缺けてゐる。同名題の臺帳

言を集成したもので、特に「けいせい睦玉川」（別項）との關係が深い。

【梗概】〔序幕〕（鎌倉殿中の段）八月下旬、政子の方の懷姙に際して、四十二歳の頼朝のために二つ子の俗説により厄除の祈禱を要する事となり、奥州鎭守府の冠者太郎經陸に家寶雌雄の二幅を獻上せよと命じた。經陸所勞につき、家老庄司爲村がこれを御受けしたが、梶原の家臣は、經陸が遊興のための不參であると辯じた。又雄鳥の一軸は緣家志田家に讓られてあつた。（大磯曲輪の段）九月上旬、志田十三郎は傾城高尾に迷ふうち、重寶の一軸を奪はれたので、身をやつして廓の夜番傳助



浮世渡平に遭つた十三郎は、高尾が相模川の船中で吊し斬りになつた事を聞かされた。折から流れ寄つた下半身の死骸を引上げて歎きに沈む。渡平は經陸を暗討に走る。（日本堤の段）經陸は荒波鳴神等によつて危くも渡平の双から逃れたが、田樂屋に匿まはれた禮として平八に已がはく下駄を與へた。平八は却つて怒り、これを火鉢にくべる。名香の薫がした。（定倉門を守るの段）經陸が廓から送られて歸ると、恰も本國から上つて來た家老泉の小次郎定倉は、殿の名を僞る者として扉を締

恥ぢぬ作品である。御殿の段までを淨瑠璃に整へたものが翌安永七年京都の竹本春太夫座に上演されたと云ふ。後又「伊達競阿國戲場」（別項）を參酌した淨瑠璃「伽羅先代萩」が、松貫四・高橋武平・吉田角丸によつて綴られ、天明五年正月江戸結城座に上演された。双傷まで初め九段に綴られ、この作によつて「先代萩」は後世に傳はつた。別系統のものに、「伊達競阿國歌舞妓」がある。（先代萩參照）

【參考】歌舞妓雙紙 ○伽羅先代萩 ○傳奇作書殘篇中 西澤一鳳 ○伽羅千代萩解說 南荻園（演劇叢書）　〔守隨〕

明倫雜誌（めいりんざっし）　俳誌　【本名】俳諧明倫雜誌【刊行】明治十三年十二月二十五日創刊。十五日・二十五日の月二回發行。【解說】當時の舊派一方の棟梁たる春秋庵幹雄の組織した俳團明倫講社の機關雜誌で、その第一編（號と云はず編と稱した）に揭載された社說に「俳諧の道は、萬物の情を識り交際を厚うして天理に背かざるを要し、諸子をして不知不識敬神の意を起さしむるの大道なり。（中略）我社長三森幹雄同志三四名と謀り、官準を經て明治七年八月初て明倫講社を設立す。而して專ら人倫の道を明かにせんと欲す云々」とある。これによつてほぼ察せられる通り、その見解極めて幼稚且つ見當違ひなもので、天保以來の俗俳をそのまゝ繼承して、その中に低徊してゐるに過ぎない。從つて明治の俳文學に寄與する所も極めて薄かつた。　〔伊藤〕

明倫堂（めいりんだう）　「漢學」を見よ。

明六雜誌（めいろくざっし）　雜誌　【刊行】明治七年三月創刊、八年十一月第四十三號にて廢刊。【由來】明六社の機關雜誌である。明六社とは、明治六年森有禮が主唱し西村茂樹・津田眞道・西周・中村正直・加藤弘之・箕作秋坪・福澤諭吉・杉亨二・箕作麟祥等が贊同して團結した啓蒙的學術團體で、實際の成立は明治七年二月であるが、發議が六年なので「明六」と名づけた。社員は定時會合して、「或ハ事理ヲ論シ或ハ異聞ヲ談シ一ハ以テ學業ヲ研磨シ一ハ以テ精神ヲ爽快ニ」した。さうしてその談論筆記するところが積んで册を成すに及んで、版行して同好の士に頒つた。それが「明六雜誌」である。【內容】「文學技術物理事理等凡ソ人ノ才能ヲ富マシ品行ヲ進ムルニ要用ナル」事柄が多く、政談はしても、時局・時政に關するものはない。啓蒙的原理論である。學者職分論、文明開化論、政治論、經濟論、社會問題、宗教論、法律論、教育論、科學知識、思想問題、風俗問題、女子問題、外人問題、國語國字問題等、論者は可なり多趣多岐に亙り、比較的忌憚なく蘊蓄を傾けて論じてゐる。論說中には特に直接文學に關係あるものは殆どないが、「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」（西周）、「平假名ノ說」（清水卯三郎）、「西學一斑」（中村正直）、「知說」（西周）、「國學ヲ振興スベキノ說」（神田孝平）等は注目すべきものがある。「西學一斑」は、西洋學術略史といふべきものであるが、多少文學上の消息も傳へてゐる（第三十九號）。「知說」の第五（第二十五號）には西洋文學の體系が極く簡明に紹介され、詩詞の分類に及んでゐる。但しこれを以て西洋文學乃至詩學の知識を紹介した最初とする說は採るべきではない。【影響】明六社の社員は、當時の學界・思想界・教育界の最高權威を網羅してゐただけに、その言說は文字通り「愚蒙ノ眠ヲ覺シ天下ノ模範ヲ立ツ」べき「千古不磨ノ說」と認められ、廟堂の爲政者も、民間有志も、青年學徒も、その新知識の源泉をこゝに求めるといふ有樣で、文化普及・士民啓蒙の功績は實に著大なものがあつた。これはこの雜誌が明治七年二月から同八年二月までの一年間に二十五號刊行され、各號が平均三千二百餘册、合して八萬餘册も賣れた（社長の報告）といふ點に照しても窺知される。　〔柳田（泉）〕

明六社（めいろくしゃ）　「明六雜誌」を見よ。

明和狂歌合（めいわきやうかあはせ）　狂歌集　上・下二卷　寫　【編者】唐衣橘洲　【成立】明和七年　【解說】歌合の體に倣ひ、萬歲・扇賣・猿曳・鳥追・齋賣の五題に就いて坡柳・東作・秀安・嵩松・赤良・橘洲が詠んだ狂歌を左右にわかち、上卷は內山椿軒、下卷は萩原宗固の評語を加へたもので、且つ一題ごとに三輪花信齋の戲畫があり、後に天明調と稱へられた吾妻ぶり狂歌の一册に纏まつた最初の歌集で、久しく稿本のまゝ書肆青山堂の家に傳はつてゐたのを、文化八年に至つて反故の中より發見し、更に蜀山人・山東京傳・四方歌垣・眞顏等の序跋を加へ、寫本として狂歌師間に傳へた珍書である。　〔野崎〕

女敵高麗茶碗（めがたきかうらいぢやわん）　浮世草子　三卷　【作者】孟蘭盆十七夜待　【刊行】享保二年　【諸本】德川文藝類聚第一所收。　【梗概】出雲松江藩士增井宗茂は、同家中古林小左衞門の息女まつゑを娶り、三子を儲けて平和に暮してゐた。正德六年五月宗茂は太守江戶表參覲のお供を仰付かつたので、留守中を慮り娘ため（十二歲）の聟養子として當年二十三歲の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。かくて宗茂はあとを源次に賴んで江戶に發足する。下女おさよは源次を見染め、文を遣つて逢瀨を契る。まつゑはおさよの落した文を拾ひ、間違ひのないやうにと、おさよに無理に夜伽を命じて自分の部屋に戻れないやうにする。おさよは焦慮しながらも看護の疲れで寢入つてしまふ。まつゑはおさよの居眠る樣子を見て、これ幸とおさよの部屋へ檢べに行く。まつゑは相手が源次であるとは知らないのである。源次はまつゑをおさよと思つて濡れかゝる。まつゑは始めて源次と知つてその場をぬけて歸る。源次はあとになつて姑であつたことを知つて大に慚愧し、以後かやうの不身持はせぬといふ誓紙を書いてまつゑに預ける。まつゑもその事を宗茂にも親達にも話すまいと言ふ誓紙を書いて源次に與へる。下女のおさよはその有樣を隙見し、嫉妬から二人の仲に不義があると邪推する。滿一年は過ぎ、翌年の五月十八日宗茂は太守の供をして江戶より歸る。おさよは宗茂にまつゑ源次が不義したと密告する。宗茂は源次に行水を勸め、その後で守袋の中からまつゑの與へた起請を取出し、一間に入つて讀む。が不義の證據も見えず、源次を呼んで仔細を尋ねようとすると、源次は既に歸り、源次の歸つた跡にまつゑも外出したといふので、愈々兩人に不義の事があつたと思ひ、こゝかしこにばつと言ひ立てる。一方まつゑは源次の出奔を知り、引き戻さうとして後より一人追ひかけ、段々說諭して歸路につく。ふと見ると向うより我が家の定紋の附いた提灯をつけて來る人がある。片かげに立ち寄つて樣子をきくと、家來ども五人が二人の不義の噂をし、宗茂は明朝敵討ちに立つよしを語つてゆく。二人は胸を轟かし、さうした騷ぎの中にうかと歸つたならば、何の詮議もなく殺さるゝは必定、人をものである。

【參考】河竹默阿彌 ○尾上菊五郎自傳 ○續々歌舞伎年代記　〔河竹〕

盲兵助（めくらひやうすけ）　「極彩色娘扇」を見よ。

驪山比翼塚（めぐろひよくづか）　淨瑠璃　時代物三段　【作者】源平藤橘（森羅萬象改）・海一沫・吉田鬼眼・達田辨二　【角書】白井權八幡隨長兵衞　【名稱】江戶目黑東昌寺にある權八と小紫の比翼塚を

介して申譯をしようとその夜は野宿する。一夜過ごして見ると愈々歸れぬ首尾となり、一先づ上方に逃れようと、岡山に出で便船して大阪へ上る。宗茂は六月二十三日未明國許を立ち出で、後から追ひついたまつゑの弟古林佐市郎と共に大阪に來り、二人の婆を高麗橋の上に見かけて討ち取る。

【構想】「享保二年七月十七日大阪高麗橋にて

よ。

盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめのかがとび）　脚本　七幕　世話物　【作者】二代河竹新七（默阿彌）　【通稱】加賀鳶　【初演】明治十九年三月、東京千歲座。

【役割】加賀鳶梅吉・按摩熊藏道玄・死神の亡靈（尾上菊五郎）、加賀鳶松藏・關口藤左衞門（市川九藏）、伊勢屋與兵衞（坂東家橘）、加賀鳶尾の吉・子守女お

と一緒に蚊帳に逃げこんだ。そこへ梅吉等が歸つてきたので、言譯もたゝず、その上、胸に一物のある五郎次がたきつけるので、里がはりの松藏の家へ預けられる。〔三幕〕按摩道玄の女房おせつの姪おあさは、伯母の難儀を見かねて伊勢屋の主人から五兩の金子をもらつて歸つて來たので、道玄は主人與兵衞とわけがあるに違ひないと伊勢屋へゆすりにでか

神の意を起さしむるの大道なり。（中略）我社長三森幹雄同志三四名と謀り、官準を經て明治七年八月初て明倫講社を設立す。而して專ら人倫の道を明かにせんと欲す云々」とある。これによつてほぼ察せられる通り、その見解極めて幼稚且つ見當違ひなもので、天保以來の俗俳をそのまゝ繼承して、その中に徂徠してゐるに過ぎない。從つて明治の俳文學に寄與する所も極めて薄かつた。〔伊藤〕

明倫堂（めいりんだう）「漢學」を見よ。

明六雜誌（めいろくざつし）雜誌 【刊行】明治七年三月創刊、八年十一月第四十三號にて廢刊。【由來】明六社の機關雜誌である。明六社とは、明治六年森有禮が主唱し西村茂樹・津田

介して申譯をしようとその夜は野宿する。一夜過ごして見ると愈々歸れぬ首尾となり、一先づ上方に逃れようと、岡山に出で便船して大阪へ上る。宗茂は六月二十三日未明國許を立ち出で、後から追ひついたまつゑの弟古林佐市郎と共に大阪に來り、二人の袂を高麗橋の上に見かけて討ち取る。

【構想】「享保二年七月十七日大阪高麗橋にて女敵討これあり双方とも雲州松江出羽守御家中實夫茶道役正井宗味、女とよ、女敵近習中小姓池田文次云々」（月堂見聞集）とある事實に依つて綴つたもので、事件後直ちに筆を執つたものであることは、序文の日附の七月二十一日とあるのでわかる。併し序文に、

難波の芝居に八つの櫓先をあらそひ、盆替りの間もなく場所の働き目を驚かし、實や好色橋辨慶とは近松門左が思ひつき、浮世は夢の浮橋と吾妻三八が趣向の外題なり、是ぞ因果は廻り燈籠の嵐になびき、唄傳へたる女敵討、名高き橋の咄を其儘取つくろはず立かけて高麗茶碗と此書をいふのみ。

とあるから、事件後、直ちに近松は「好色橋辨慶」の看板を竹本座に揭げ、吾妻三八は、狂言に「浮世は夢の浮橋」の外題で、本事件を脚色したものであらう。但し近松の「橋辨慶」は中止になつて、「鑓權三重帷子」（別項）が作られて、八月二十一日より興行されることになつたのであらう。本篇との關係は不明。なほ同事件を材としたものに、「亂脛三本鑓」（別項ノ中の一篇。「雲州松江の鱶」（別項、「邯鄲諸國物語」（別項）中の播磨の卷がある。

【參考】雜誌「趣味」（二ノ二）○新小說（一〇ノ一二）〔小泉〕

和布刈（めかり）「龍神物の謠曲」を見よ。

め組の喧嘩（めぐみのけんくわ）「神明惠和合取組」を見よ。

盲長屋梅加賀鳶（めくらながやうめのかがとび） 脚本

七幕 世話物 【作者】二代河竹新七（默阿彌） 【通稱】加賀鳶 【初演】明治十九年三月、東京千歲座。

〔役割〕加賀鳶梅吉・按摩熊鷹道玄・死神の亡靈（尾上菊五郎）、加賀鳶松藏・關口藤左衞門（市川九藏）、伊勢屋與兵衞（坂東家橘）、加賀鳶尾の吉・子守女お民（尾上菊之助）、櫻木のお花・梅吉女房おすが（岩井松之助）、加賀鳶五郎次・おさすりお兼・洗濯婆おのり（尾上松助）、百姓太次右衞門・加賀鳶兼五郎・道玄女房おせつ（市川壽美藏）、加賀鳶石松・番頭佐五兵衞・關口妻おたえ（中村傳五郎）等。

【諸本】默阿彌全集第十九卷所收。【題材】加賀侯お抱への加賀鳶と町火消八番組とは、縄ばり爭ひから、文化頃二度までも血の雨を降らせた。これと盲長屋に僞盲人の惡者がゐた話とをつきまぜて脚色せられたもの。

【梗概】〔序幕〕加賀鳶の頭株梅吉の女房おすがが湯島天神の茶店で休んでゐると、無禮をしたとて火消人足の紋次と金太がおすがの娘お梅をおぶつた子守女を捕へて責めるので、詫びをいれたがきかないで難題をふきかけてゐるところへ、子分の巳之助がかけつけて二人を追つ拂ふ。御茶の水土手際で百姓太次右衞門が癪をおこして惱んでゐるのを、通りかかつた按摩道玄が介抱をするが、手に胴卷が觸れたので、太次右衞門を殺してしまふ。〔二幕〕湯島のことを遺恨に持つて火消人足がおしかけてくると云ふので、梅吉は掛合ひに出かけた。その歸りがおそいので加賀鳶の連中は本鄕通の木戸までおしかけてくるが、梅吉になだめられて引返へす。女房おすがは井戸端で水をかけられたので帶をといてゐる時、大嫌ひな雷がなつたので何の氣もなく巳之助と一緒に蚊帳に逃げこんだ。そこへ梅吉等が歸つてきたので、言譯もたゝず、その上、胸に一物のある五郎次がたきつけるので、里がはりの松藏の家へ預けられる。〔三幕〕按摩道玄の女房おせつの姪おあさは、伯母の難儀を見かねて伊勢屋の主人から五兩の金子をもらつて歸つて來たので、道玄は主人與兵衞とわけがあるに違ひないと伊勢屋へゆすりにでかけたが、加賀鳶の松藏に見あらはされ、追ひかへされる。〔四幕〕女房おすがの兩親は、物堅い武家であるため、今度のしくじりをも許さないので、おすがも覺悟をきめ、梅吉のところまでお梅を送りがてら別れに來る。〔五幕〕後悔をした五郎次が水道橋までくると、死神が出て川の中へ引つぱつてゆく。おすがも身投げしようとするが、子守女のおたみと松藏とに引きとめられる。日影町松藏の內へ頭をまるめて五郎次が詫びにきたので、おすがの疑ひは晴れ、めでたくさまる。〔六幕〕血のついた布子を犬が引きだしたので足がつき、百姓太次右衞門を殺したことが現はれて、道玄は捕へられる。

【脚色】五代目尾上菊五郎は、同じく默阿彌の作なる「村井長庵」を演じたい希望を持つてゐたが、彼の藝風には適さないので作者は贊成せず、長庵に代る道玄、篤實で正直な久八の代りにいなせな加賀鳶の梅吉を書き、主演俳優の柄と藝風とを巧みに生かせたる上、なほ五代菊五郎の祖父にあたる三代菊五郎（梅壽）の演じたと傳へられる死神（ヒにがみ）の趣向をも攝取して脚色したものであつた。【價値】脚色の上から言ふと二重脚色（ダブルプロット）であるが、作者晚年の代表作であり、明治期に生れて今日に至るまで舞臺上の生命ある世話狂言として注目すべきものである。

【參考】河竹默阿彌○尾上菊五郎自傳○續々歌舞伎年代記 〔河竹〕

盲兵助（めくらへいすけ）「極彩色娘扇」を見よ。

驢山比翼塚（めぐろひよくづか） 淨瑠璃 時代物

三段 【作者】源平藤橋（森羅萬象改）・海一沫・吉田鬼眼・達田辨二 【角書】白井權八幡隨長兵衞 【名稱】江戶目黑東昌寺にある權八と小紫の比翼塚を取入れたもの。尤も曲中では、巷說に反して戀の相手は、明石屋榮三郎になつてゐる。【初演】安永八年七月七日初目、肥前座。名代結城孫三郎。座本豐竹東治。【諸本】七行百六丁本。校訂風來山人傑作集（舊帝國文庫）所收。【題材】有名な俠客幡隨長兵衞と平井權八・小紫の巷說を脚色したもの。

【梗概】〔上之卷〕（人丸社）播磨の國主の奧方は人丸大明神に參籠の折、家老本庄典膳の娘八重梅を美男の白井權八へ婚約の媒をする。八重梅に惚れてゐる澁川玄蕃の憤慨。折柄何者かに千壽院の寶刀が盜まれたと知らせがある。（龍野屋敷）八重梅は婚禮の日を待ち佗びてゐる。併し父典膳は惡事に與（くみ）すると見せ、事の探索に苦心してゐる。權八は所用あつて訪れたが、圖らずも典膳と玄蕃が毒藥の密議をしてゐるのを立ち聞き、典膳を殺して出奔する。が權八の兄助市は典膳の養子となつてゐるので、わざと千壽院の寶刀を持ち去り、己が惡人となつて典膳の罪を庇ふ。八重梅は悲しみの餘り自害する。助市は養父の仇を討つべく奴袖平を連れて旅立つ。〔中之卷〕（川崎）犬垣頭平太と云ふ侍が三浦屋の傾城小紫に現をぬかしてゐる。併し小紫は明石屋榮三郎と深く言ひ交してゐるので應じない。かくと知つた頭平太は、榮三郎の家の番頭甚九郎と計

「平假名ノ說」（淸水卯三郎）、「西學一斑」（中村正直）、「知說」（西周）、「國學ヲ振興スベキノ說」（神田孝平）等は注目すべきものがある。「西學一斑」は、西洋學術略史といふべきものであるが、多少文學上の消息も傳へてゐる（第三十九號）。「知說」の第五（第二十五號）には西洋文學の體系が極く簡明に紹介され、詩詞の分類に及んでゐる。但しこれを以て西洋文學乃至詩學の知識を紹介した最初とする說は採るべきではない。【影響】明六社の社員は、當時の學界・思想界・敎育界の最高權威を網羅してゐただけに、その言說は文字通り「愚蒙ノ眠ヲ覺シ天下ノ模範ヲ立ツ」べき「千古不磨ノ說」と認められ、廟堂の爲政者も、民間有志も、靑年

更に蜚山人・山東京傳・四方歌垣・眞顏等の序跋を加へ、寫本として狂歌師間に傳へた珍書である。〔野崎〕

女敵高麗茶碗（めがたきかうらいぢやわん） 浮世草子

三卷 【作者】未詳 【別名】盂蘭盆十七夜待 【刊行】享保二年 【諸本】德川文藝類聚第一所收。

【梗概】出雲松江藩士增井宗茂は、同家中古林小左衞門の息女まつゑを娶り、三子を儲けて平和に暮してゐた。正德六年五月宗茂は太守江戶表參覲のお供を仰付かつたので、留守中を慮り娘ため（十二歲）の聲養子として當年二十三歲の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。かくて宗茂はあとを源次に賴んで江戶に發足する。下女おさよは源次を見染め、文を遣つ

め、その後で守袋の中からまつゑの與へた起請を取出し、一間に入つて讀む。が不義の證據も見えず、源次を呼んで仔細を尋ねようとすると、源次は既に歸り、源次の歸つた跡にまつゑも外出したといふので、愈々兩人に不義の事があつたと思ひ、こゝかしこにばつと言ひ立てる。一方まつゑは源次の出奔を知り、引き戻さうとして後より一人追ひかけ、段々說諭して歸路につく。ふと見ると向うより我が家の定紋の附いた提灯をつけて來る人がある。片かげに立ち寄つて樣子をきくと、家來ども五人が二人の不義の噂をし、宗茂は明朝敵討ちに立つよしを語つてゆく。二人は胸を轟かし、さうした騷ぎの中にうかと歸つたならば、何の詮議もなく殺さるゝは必定、人を

り、濱松の殿様へ納める事になつてゐる祕藏の目貫を詐欺して榮三郎を窮地に陷れる。一方權八は江戸に向ふ途中此處に差掛り、偶々長兵衞に逢つて、行摺れの言葉を交す。(鈴ケ森)若衆の一人旅と見て、胡麻の蠅共が取卷く。併し權八は難なく大勢を斬り伏せてしまふ。かくと聞いて驅け着けた長兵衞はその手並に感じ、此處に互に義兄弟の契を結び、長兵衞の家へと伴はれる。(米屋)藏前の米屋榮三郎の家では、祕藏の目貫が摺り換へられてゐるので大騒ぎとなつた。その時訪れた長兵衞は、番頭の甚九郎を怪しいと睨んで無事に取戻してやる。一人孤闘を守つてゐた榮三郎の許嫁のお關は、良人に小紫のある事を知つて、わざと甚九郎と不義をして家を出ようとするが、榮三郎もその眞心に打たれ、祝言の盃。甚九郎は追拂はれる。【下之卷】(揚屋)本庄家の奴袖平は幇間となり、その女房は藝者となつて權八を尋ねてゐる。一方頭平太が無理に小紫を請け出さうとするので、榮三郎が困惑する處へ、權八が千壽院の寶刀を質物にして一時を救つてやる。權八と見て袖平夫婦が立ち掛らうとするのを制して自分の居所を教へる。(土手)權八は小紫を請け出す金の欲しさに、遂に甚九郎を日本堤で殺してしまふ。(花川戸)袖平の知らせに依つて、助市は花川戸の長兵衞の宅へ權八を捕へに來る。男氣の長兵衞は權八を匿はぬと云ひ張る。權八はわざと長兵衞の女房に戯れて追ひ出されようとする。長兵衞は却つて妻や母親を追ひ出して權八を庇ふ。併し長兵衞の女房も夫の心を推して身を賣り、無事に千壽院の寶刀を戻してやる。折柄人殺しの下手人として權八に捕手が向ふ。「道行妹背の初雁」榮三郎は小紫を連れて廓を逃れ、目黒の親里へ走る。(大鳥村)榮三郎の實父山田右内は尺八の指南をして侘びしく暮してゐる。右内は白井家に大恩があるので、人知れず權八を匿まつて置く。所へ榮三郎・小紫が落ちて來る。右内は、我が子の放埒を責め、且つ小紫は彼の實妹であると欺いて自害させ、權八の身代りに立てようとする。この日助市は虚無僧に姿を變へて入り込み、權八と敵討の勝負に及ぶ。時に袖平は權八の赦免狀を持つて驅け着けた。玄蕃の自白に依つて事明白となり、又甚九郎も殺し德となつたのである。併し天下の法を立てるために權八と小紫とは死んだ態にして此處に比翼塚を作つた。かくて權八は潔白の身となり、お關と小紫とは共に榮三郎の妻妾となる。

【構想】長兵衞が歌舞伎に現はれた最初は、寛保四年春、江戸中村座上演の「櫻末廣源氏」(歌舞伎年代記)だと云はれる。權八の方は「江戸芝居年代記」「戯場年表」の安永八年五月、江戸森田座の所に「白井權八狂言の始り」とある。併しこの狂言は助六のやつしで、本曲の脚色には「櫻末廣源氏」の方がより多く影響してゐるやうである。本曲は權八と長兵衞が同時に脚色された事、後に歌舞伎で有名になつた鈴ケ森の場が演ぜられた事、共にこの曲が最初のやうである。本曲に依つて、權八・長兵衞劇は一先づ世界が定められたと云へる。併しこの曲だけの出來に就いて云へば決して良い作とは云へない。それはこの期の弊である歌舞伎式の書き方とか、或は江戸風の筋を輕んずる氣分本位の書き方に原因するのであらうが、齊に興味ある巷說を取入れたと云ふだけで、脚色は全く類型的であり御都合式である。元來長兵衞の男氣とか權八の美貌とかは、生きた俳優に依つて演ぜられ、初めて光彩を放つものである。淨瑠璃の方で山と云へば、下之卷の花川戸長兵衞内の場か大鳥村右内侘住居の場かであつて決して鈴ケ森ではない。從つて淨瑠璃では花川戸長兵衞内の段が最も多く語られてゐる。この場は男氣の扱ひ方に新味があつて面白い。【影響】題材は、素より歌舞伎から輸入されたものでもあり、長兵衞劇は殆ど歌舞伎の方に限られてゐる。代々の作者が皆一樣に筆を染めてゐるので、歌舞伎に於ける影響作は數限りなくある。主なものを擧げれば、「思花街容性」(五瓶作。天明四年七月、大阪、角座)、「契情吾妻鑑」(初代治助作。天明八年春、江戸、中村座)、「平井權八吉原雛」(五瓶作。寛政五年三月、大阪、中座)、「靈驗曾我籬」(南北作。文化六年四月、江戸、市村座)、「浮世柄比翼稻妻」(南北作。文政六年三月、江戸、市村座)、「極附幡隨長兵衞」(歌舞伎年代記)だと云はれる。權八の方は「江戸芝居年代記」「戯場年表」の安永八年五月、江戸森田座の所に「白井權八狂言の始り」とある。併しこの狂言は助六のやつしで、本曲の脚色には「櫻末廣源氏」の方がより多く影響してゐるやうである。本曲は權八と長兵衞が同時に脚色された事、後に歌舞伎で有名になつた鈴ケ森の場が演ぜられた事、共にこの曲が最初のやうである。本曲に依つて、權八・長兵衞劇は一先づ世界が定められたと云へる。併しこの曲だけの出來に就いて云へば決して良い作とは云へない。それはこの期の弊である歌舞伎式の書き方とか、或は江戸風の筋を輕んずる氣分本位の書き方に原因するのであらうが、齊に興味ある巷說を取入れたと云ふだけで、脚色は全く類型的であり御都合式である。元來長兵衞の男氣とか權八の美貌とかは、生き

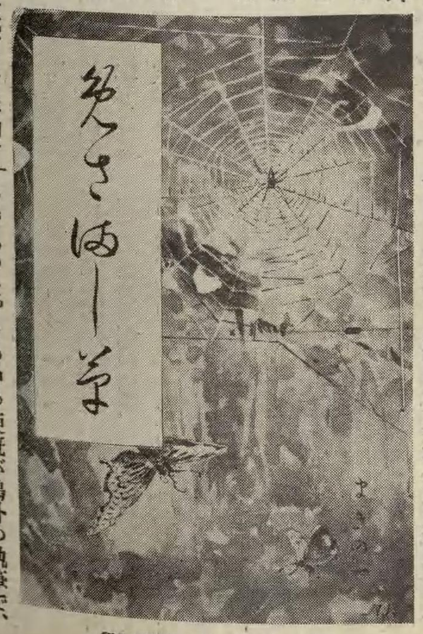
(文政六年三月、江戸、市村座)、「極附幡隨長兵衞」(獸阿彌作。明治十四年十月、東京、春木座)。なほ清元節に、現在も盛んに歌はれてゐる「其小唄夢廓」(文化十三年正月、江戸、河原崎座)、「逢見愛井宇」(弘化三年正月、江戸、中村座)がある。

【參考】近世邦樂年表 ○歌舞伎細見 飯塚友一郎 ○芝居と史實 三田村鳶魚 【鶴見】

目ざまし草 めざましぐさ 隨筆 一卷 【著者】未詳。或は山田常典などの筆ずさみか。

【解說】卷頭第一に、目ざまし草の條を置いたので題號とした。却睡之草(目ざまし草)、九番鳥、姓名書やう、定家卿歌、古辭、漢文、貫、句讀點、僧徒偏執、巧言、陳釜、賴政、尊氏、白石浮動、均輸、泰山府君、通人、都邑昌逸、志士補國、唐門、神君御文、公方御感狀、西戎、遠嫁情、落書狂歌、薄へり、おもとの申文、東海林等數十條を收め、概ね考證的の記事である。序跋はない。 【和田】

めざまし草 めざましぐさ 雜誌 【刊行】明治二十九年一月創刊、同三十四年二月第五十三號を以て終刊。【解說】森鷗外は獨逸から歸朝後、「しがらみ草紙」(別項)に據つてめざましい活躍を續けてゐたが、二十七年日清戰役出征によつて廢刊した。「めざまし草」は凱旋後、それに引續いて創刊したものである。前誌同樣、鷗外中心の評論雜誌で、弟の三木竹二、妹の小金井きみ子をはじめ、幸田露伴・齋藤緑雨・落合直文・依田百川(學海)・森田思軒等が、これを助けて執筆した。その外執筆者の中には、高濱虚子・佐佐木信綱・井上通泰・鰺庭篁村・尾崎紅葉などの名も見えてゐる。この雜誌で最も評判であつたものは、鷗外・露伴等が匿名で創作の批評をした「雲中語」(鷗外全集所收)であつた。合評の形式も目新しかつたし、大家の月評といふので甚だ權威のあるものであつた。その中の梗概が鷗外の執筆で、名梗概であるといふことも注意すべきであらう。その他では、新進の詩歌俳句の紹介など注目すべきものであつた。鷗外自身のものでは、「即興詩人」(別項)の續きと「審美新說」とが本誌に掲載された中で、最も主要なものである。なほ「審美新說」の發表によつて、當時未開拓の美學の領域に、組織的で清新な美學の新聲を與へた啓蒙的業績は特記すべきものであらう。(森鷗外參照)



めざまし草(創刊號)

めりかりと云ふ、その語を取つて下り易しと云ふ意味で名づけた(遯遊笑覽)。布のめりやす地の着物が伸び縮み自在である如く、端唄の歌ひ方が圓轉滑脫で、曲節の伸縮自在なる所より來た名(皇都午睡)、又俳優の動作に合せ、伸縮自在に歌はれる所より名づく(三養雜記)。上方のぬめり(別項)の變化したもので、三下り調の歌曲を云ひ、その語より由來してゐるとも云ふ。

には、未だめりやすの名稱を見ない。この名稱は、坂田兵四郎の弟子坂田仙四郎が寶曆三年に中村座で歌つた「花の宴」が最初であると云ふ。その頃から、この名稱が行はれ始めたのであらう。江戸の歌舞伎で創始せられためりやすは、その後上方に逆輸入せられて、歌舞伎で用ひられた。又長唄に對する端唄として、長唄師のこれを歌ふもの多く、一般に流

し、「これは物まね呼出しのめりやす也」と註し、又「めりやす世帶」と云ふ歌を收めてゐるのでも明かである。

【名人】長唄の富士田楓江と荻江露友の二人が名高い。楓江は吉治と稱し、楓江はその號、もと佐野川千藏と云ひ、上方下りの女形である。豐後節にも達し、一中節の名人で二代都和中とも云つた。明和八年に五十八歲で歿し

小紫を請け出さうとするので、榮三郎が困惑する處へ、權八が千壽院の寶刀を質物にして一時を救つてやる。權八と見て袖平夫婦が立ち掛らうとするのを制して自分の居所を教へる。(土手)權八は小紫を請け出す金の欲しさに、遂に甚九郎を日本堤で殺してしまふ。(花川戸)袖平の知らせに依つて、助市は花川戸の長兵衞の宅へ權八を捕へに來る。男氣の長兵衞は權八を匿はぬと云ひ張る。權八はわざと長兵衞の女房に戯れて追ひ出されようとする。長兵衞は却つて妻や母親を追ひ出して權八を庇ふ。併し長兵衞の女房も夫の心を推して身を賣り、無事に千壽院の寶刀を戻してやる。折柄人殺しの下手人として權八に捕手が向ふ。「道行妹背の初雁」榮三郎は小紫を連れ

田座の所に「白井權八狂言の始り」とある。併しこの狂言は助六のやつしで、本曲の脚色には「磊末廣源氏」の方がより多く影響してゐるやうである。本曲は權八と長兵衞が同時に脚色された事、後に歌舞伎で有名になつた鈴ケ森の場が演ぜられた事、共にこの曲が最初のやうである。本曲に依つて、權八・長兵衞劇は一先づ世界が定められたと云へる。併しこの曲だけの出來に就いて云へば決して良い作とは云へない。それはこの期の弊である歌舞伎式の書き方とか、或は江戸風の筋を輕んずる氣分本位の書き方に原因するのであらうが、實に興味ある恭說を取入れたと云ふだけで、脚色は全く類型的であり御都合式である。元來長兵衞の男氣とか權八の美貌とかは、生き

【參考】近世邦樂年表 ○歌舞伎細見 飯塚友一郎 ○芝居と史實 三田村鳶魚 【鶴見】

目ざまし草 めざましぐさ 隨筆 一卷 【著者】未詳。或は山田常典などの筆ずさみか。

【解說】卷頭第一に、目ざまし草の條を置いたので題號とした。却睡之草(目ざまし草)、九番鳥、姓名書やう、定家卿歌、古辭、漢文、貫、句讀點、僧徒偏執、巧言、陳釜、賴政、尊氏、白石浮動、均輸、泰山府君、通人、都邑昌逸、志士補國、

めざましぐさ (創刊號)

のであつた。その中の梗概が畧外の執筆で、名梗概であるといふことも注意すべきであらし、大家の月評といふので甚だ權威のあるもの集所收)であつた。合評の形式も目新しかつた夢廓(文化十三年正月、江戸中村座)、一蓮見愛井宇(弘化三年正月、江戸、河原崎座)がある。

う。その他では、新進の詩歌俳句の紹介など注目すべきものであつた。鷗外自身のものでは、「即興詩人」(別項)の續きと「審美新說」とが本誌に掲載された中で、最も主要なものである。なほ「審美新說」の發表によつて、當時未開拓の美學の領域に、組織的で清新な美學の新聲を與へた啓蒙的業績は特記すべきものであらう。(森鷗外參照)

【附記】本誌は、鷗外の小倉赴任によつて一時休刊したが、明治三十五年、彼の東京歸任と同時に「藝苑」と合併して「萬年草」(別項)と改題した。 【齋藤(昌)】

召文 めしぶみ 古文書 【解說】召狀とも召符ともいふ。鎌倉室町兩幕府に於て、諸人召喚の文書。鎌倉時代には、一般に御家人などを召す時にも用ひたが、また訴訟の場合に被告人を召喚するのに用ひた。これに召文御教書(執權或は管領などの奉じて出すもの)と召文奉書(奉行頭人などの奉じて出すもの)とがある。問狀(別項)兩度に及ぶも參決せざれば、召文を發し、召文に違背すれば罪がある。

伊豫國三島大祝安俊代安胤申、鴨部庄住人祐賢濫妨同御料田等由事、重申狀如此、來月廿日以前可催上狀如件、

正安二年三月十八日　　右近將監(花押)

前上野介(花押)

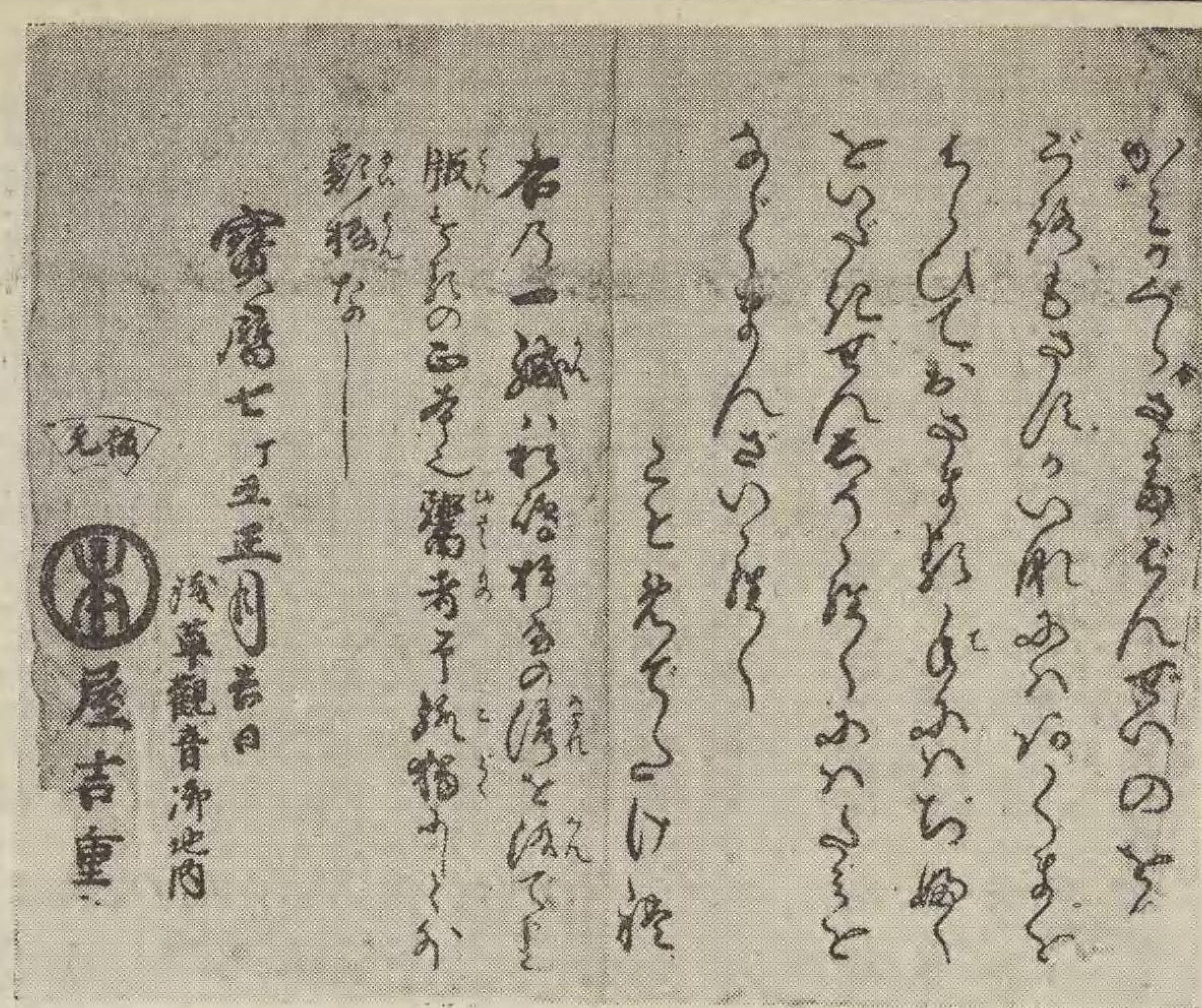
地頭代 【伊木】

めりやす 歌曲 【名稱】その名の起原については數說ある。京都の侍目利安二が歌ひ始めたからと言ひ(長唄の由來)、樂屋で鳴らす三味線の事をめりやすきと云ひ、それを略してめりやすと云ふ(歌舞伎事始)、吉原の遊女がこれを聞いて、氣が滅入りやすと云つたから出た名(近世事物考)、聲の甲乙と云ふ意味にめりかりと云ふ、その語を取つて下り易しと云ふ意味で名づけた(嬉遊笑覽)、布のめりやす地の着物が伸び縮み自在である如く、端唄の歌ひ方が圓轉滑脫で、曲節の伸縮自在なる所より來た名(皇都午睡)、又俳優の動作に合せ、伸縮自在に歌はれる所より名づく(三養雜記)、上方のぬめり(別項)の變化したもので、三下り調の歌曲を云ひ、その語より由來してゐると說く說(江戸時代音樂通解)等あるが、最後の二三說が當つてゐるであらう。【解說】元來、歌舞伎の合方として、樂屋でひかれる三味線の名稱であつた。それが、元祿以前に巷間で行はれてゐたぬめりを取り入れたものであるかどうか、明かにしない。上方では、この歌舞伎の地に、上方唄を用ひてゐた。上方唄には歌舞伎唄が多い。この上方唄の歌舞伎唄が卽ちめりやすの原形である。これが江戸に輸入せられ、江戸で從來用ひられてゐた歌舞伎の地の江戸長唄や江戸端唄と共に、この上方唄より取り用ひられたものが、今までの江戸唄に對し、特殊の曲調を保有するとともに、又本場の上方唄とも違つて江戸唄化した一種特別の曲調を發達せしめるに至り、江戸唄と上方唄との混合融和せる合の子が生じた。それが江戸でめりやすと云ふ名稱を負ふに至つた。語原說が示す如く、それは閑寂でしんみりした低い沈んだ調子のものであり、その點上方唄の特徴に相通ずるものがあつた。大抵三味線二三人、唄一人の獨吟である。歌ひ手の喉を示す事が出來る點で、鼓唄などとも共通してゐる。江戸に於けるめりやすの最初は、享保十六年に、中村座で坂田兵四郎の歌つた「無間の鐘」(別項)である。「女里彌壽豐年藏」(別項)でも、これを卷頭に掲げてゐるが、その正本には、未だめりやすの名稱を見ない。この名稱は、坂田兵四郎の弟子坂田仙四郎が寶曆三年に中村座で歌つた「花の宴」が最初であると云ふ。その頃から、この名稱が行はれ始めたのであらう。江戸の歌舞伎で創始せられたためりやすは、その後上方に逆輸入せられて、歌舞伎で用ひられた。又長唄に對する端唄として、長唄師のこれを歌ふもの多く、一般に流傳して廓などで歌はれた。從つて新作めりやすが續々出て、歌舞伎で歌はれるものの外、座敷で歌はれ、一般に稽古せられる曲が多かつた。洒落本や黄表紙にも、その流行めりやすの曲が見え、又流行の樣が描かれてゐる。就中、黄表紙の「江戸生艶氣樺燒」(別項)には、その曲の名が最も多く出てゐる。天明時代が、めりやすの最盛時で、寛政時代に入つては、七年正月、都座で芳村伊三郎が歌つた「五大力」が名高かつた。以上の曲は、いづれも上方唄より出てゐるものである。文化文政時代以後次第に衰へ、天保以後は一般に行はれることが殪れて、ただ僅かに歌舞伎で、これが存續せられ、新作も出たが、長唄の一部として今日まで殘存するのみである。また人情本にも、めりやすは殆ど出て來ない。但し合卷物の「流行歌川船合奏」(文政八年刊)には、卷頭に新作のめりやす四首を載せて、これをはやり唄と稱し、卷中にも一首を掲げてゐる。天保以後、めりやすは完全に一般の流行歌としての存在を失つたが、しかも古いめりやすで、この幕末の端唄に傳へられたものもある。名高い「春雨」の如きは、めりやすにも、幕末の端唄や歌澤にも存在してゐる。上方でも、めりやすが天明頃に行はれたことは、絃曲「粹辨當」(別項)二編に「二日あはねば」と云ふ歌を出し、「これは物まね呼出しのめりやす也」と註し、又「めりやす世帶」と云ふ歌を收めてゐるのでも明かである。

【名人】長唄の富士田楓江と荻江露友の二人が名高い。楓江は吉治と稱し、楓江はその號、もと佐野川千藏と云ひ、上方下りの女形である。豐後節にも達し、一中節の名人で二代都和中とも云つた。明和八年に五十八歳で歿した。た露友はもと津輕藩士、又江戸の豪商であつたと云ふ。七代杵屋六左衞門の弟子、或は坂田兵四郎の弟子と云ひ、又楓江露友とも松島庄五郎の弟子とも云ふ。露友の如きは荻江節の一流を開いたが、これ卽ちめりやすの一流で、專ら廓で行はれた。荻江は三代目で斷絶し、明治八年に四代目が再興した。この二人の生存した明和頃が、めりやすの最盛時であつた。

【歌集】「めりやす豐年藏」(別項)がその嚆矢、その續編なる「哥撰集」(別項)や「常盤友」(別項)等の長唄本を始め、「荻江節正本」(明和二年刊)と題する書には、四十八曲を收め、續いて出た「歌曲花川渡」(明和三年刊)、その續編の「歌曲花屋臺」(明和六年刊)にも四十八曲を收め、何れも「めりやす豐年藏」と同型の、節付つき、稽古本の寄本の體裁である。懷中横本には、「兎里彌壽□□」(「めりやす豐年藏」參照)を始め、「懷中長うた揃」(二册、明和元年刊)には約三十編を收め、跋文に、これ以前「めりやす袖見臺」なる書を出して好評を博したことを述べてゐる。以上は節付本で、下つて寛政版の長唄めりやす集(書名不詳)や「唄のしらべ」(二册、享和三年刊)等の無節付本が出てゐる(「常盤友」參照)。何れも長唄集の一として、めりやすが長唄と共存してゐる。(江戸長唄參照) 【藤田】

女里彌壽豐年藏（めりやすはうねんぐら）　歌謠書一册【書名】收載曲目の豐富なる意を寓し、且つめりやすの繁榮するを意味したものであらう。【刊行】寶曆七年、伊勢屋吉重郎刊。但し寶曆九年頃にも增補刊行せられたらしい。【解說】現存本は甚だ稀覯書で、七十四篇・七十五篇・七十六篇を收載する三種があり、七十



女里彌壽豐年藏正本（藤田德太郎氏藏）

四篇本（金澤文庫所藏、江戶歌派研究第三編別册第一・二册所收）が初版で、七十五篇本（筆者所藏、日本歌謠集成卷九所收）は再版、七十六篇本（日比谷圖書館所藏）は三版である。內容目錄（七十六篇）次の如くである。

四季三番三　今樣三番三　男道成寺　京鹿子道成寺　娘道成寺　相生獅子石橋　富十郎石橋　石橋　難波の春駒　新はるごま　京人形　粂太郎名殘　門太郎名殘　羽衣の曲　都鳥　枕丹前　山崎與次兵衞　新松風　吉原丹前　無間の鐘　新無間　帶無間　長五郎髮すき　花の宴　沖の石　いもせ川　思ひ川　戀衣　亂れ髮　ひとり心中　明の鐘　別れ坂　萩の露　梅のかげ　明の怨　鳥の音（ね）　忍ぶ車　男帶　戀話　さき酒　里の松　三つの鳥　白妙　夏衣　二つ紋　浮草　江口　せわ五郎　井筒　指切り　雪　朧夜　移り香　わかさ　花の香　里の錦　袖頭巾　かく袖　松に櫻　華の里　相の山　萬年草　入れぼくろ　盃　鳥の聲　女三の宮　十三鐘　秋の夜　ゆかりの月　里の華　花野　里の春　螢火　小夜嵐　華がたみ　高砂

右の中、七十五篇本には「華がたみ」なく、七十四篇本には、これと「小夜嵐」（寶曆八年作）の二篇がない。目錄は「枕丹前」までの十六編と「山崎與次兵衞」以下とが別に記されてゐる。即ち前者が長唄、後者がめりやすである。跋には、「右の一緘は松島杵屋の流を汲で是版するの正本也鬻者予孤獨にして外類板なし」とあり、「寶曆七丁丑正月吉日　淺草觀音御地內　版元(本)屋吉重郎」と刊記があり、半紙版・節付本、個々の稽古本の寄本で、長歌めりやす集の最初のものとして甚だ名高い。【備考】同じ淺草觀音の伊勢屋吉重郎の附近に、丸本屋吉州と云ふ書店あり、伊勢屋吉重郎第五版書の好評を得たるものを僞版して出した。「女里彌壽豐年藏」の僞版も亦出てゐる。現存本は稀本で、その中、表紙の完全に殘れるものには、振袖形の貼外題あり、「兎里彌壽□□」と題し、下二三字不明であつたが、近時の研究で、その書名は、「兎里彌壽袖鏡」又は「兎里彌壽袖見臺」と云ふのであらうと推定せられる。橫本、新に版を起したもの、寶曆九年刊。初めに黑本黃表紙の作者として知られる丈阿の序文あり、次に曲名を俳諧に詠み込んだ目錄があり、次に遊女の姿繪（彩色摺）と文章、その次に口上があつて本文に移る。本文は「女里彌壽豐年藏」の五十四篇の中、長唄物十四篇を除く六十篇を收め、順序もそれと大差はない（但し「玉章」を「一人心中」と名を改めて收めてゐる）。これも後に序文を除き、目錄を收めて增補本が出た。七篇を增補した六十七篇本は、前記「女里彌壽豐年藏」でも、後に增補せられた「小夜嵐」「花がたみ」の二篇と、

姿の花　四季の春駒　大黑舞　狩枕　きゞすの雨

の五篇、都合七篇を增した。增補曲目によつて、寶曆十一年頃の刊行と考へられる。ついで七十三篇本が出てゐる。六十七篇本に、

葱賣　よしの草　松蟲　夜の鶴　卯の花　相の山　秋の七草

の六篇を增加した。これも增補曲目によつて寶曆十三年頃の刊行と考へられる。かくて、「女里彌壽豐年藏」「兎里彌壽□□」ともに、少くとも三版までは出してゐるわけで、その世に行はれたことが分る。「豐年藏」の名はその後も種々襲用せられた。「長哥めり安豐年藏」は半紙版寄本式の本で、五十八篇を收め、安永六七年頃の刊行と思はれる。義太夫節の節事景事を集めた書に「竹本豐竹豐年藏」と云ふのが出てゐる。故に「虛實馬鹿話」（明和八年版）にも、「豐曲常盤の衍とて景事を集めたる本なかりけるまゝ、久しく尋ぬと云へども、昔の物なれば今はもてはやす者もなきゆへにや、尋あたらで過しに（中略）物體こんなものは、豐年藏の類で一册ものでござり升」と見えてゐる。【參考】日本歌謠史高野辰之○日本歌謠集成卷九解說○「女里彌壽豐年藏」に就いて波多野賢一（東京市立圖書館と其事業第五十二號）○浮世繪雜考島田筑波（浮世繪新誌十二）○めりやす本二種藤田德太郎（岩波講座「日本文學」附錄「文學」八）〔藤田〕

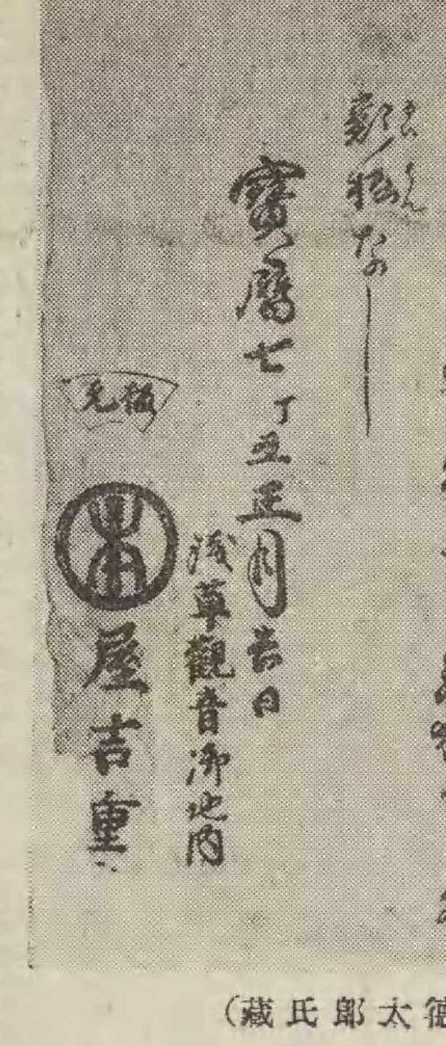
面向不背玉（めんかうふはいのたま）　脚本　三幕五場【作者】白石彥兵衞【名稱】題材による。並書に「入鹿大臣戀慕の卷、鎌足大臣愛着の卷」とあり、段書に「第一八重櫻附り唐土よりもにほひくる人、第二九重ノ花附り志度の浦より連れてくる人、第三十重ノ藤附り奈良の京より舞ひにくる人」とある。【興行】元祿十年三の替りか。京、早雲長太夫芝居、山下半左衞門座上演。

〔役割〕萬戶將軍（小野川宇源次）、李將賢（竹島幸十郎）、鎌足の大臣（竹島幸左衞門）、滿潮の前（芳澤あやめ）、志度の浦與五郎（山田甚八）、同女房（小かん太郎次）、初瀨の前（松本玉の井）、橫神の王子（荒井半右衞門）、紫の前（山下才三郎）、入鹿の大臣（山下半左衞門）等。

【諸本】繪入狂言本として、京、八文字屋八左衞門から出版されたものが傳はつてゐる。この狂言本は挿繪の上欄に主な役者の評判を記してあり、上本に屬する。元祿歌舞伎傑作集下卷所收。【題材】謠曲の「海士（あま）」や幸若の「大職冠」（別項）その他古淨瑠璃の「大しよくわん」等によつて流布された玉取の說話を主體として、反逆物に書き做したものである。序幕は幸若に據つた部分が多い。

【梗概】〔序幕。入鹿大臣戀慕の卷〕（讃州志度の浦）日本に佛法流布の目的を以て、萬戶將軍は唐の太宗の使者として華原馨・泗濱石・面向不背玉の三つの寶を朝廷に捧げんと志度の浦に着いた。折から流れ寄つた空船を破つて救ひ出した上﨟は、橫神の王子の戀を容れぬため罪せられた生駒中將の姬紫の前であつた。萬戶も若衆の身とて、互に想ひ合ふ仲となつた。萬戶は寄手を拂つて奈良の都へ急

つて賜はつた御酒には毒があつたが、滿潮の解毒藥で一命を取りとめ、代りに失明した。危くも王子方を斬り拂つて鎌足は落ち延びたが、滿潮は王子を防いだ爲めに刺殺される。（飛火野）滿潮の親與五郎夫婦は、孫藤若を笈に入れて、鎌足を尋ねて奈良へと急ぐ途中、滿潮の靈が現はれて、橫神の王子に慘殺された始終を語り、早く藤若を父鎌足公に渡すやう



（…德太郎氏藏）

四篇本（金澤文庫所藏、江戸歌派研究第三編別册第一・二册所收）が初版で、七十五篇本（筆者所藏、日本歌謠集成卷九所收）は再版、七十六篇本（日比谷圖書館所藏）は三版である。内容目錄（七十六篇）次の如くである。

四季三番三　今樣三番三　男道成寺　京鹿子道成寺　娘道成寺　相生獅子石橋　富十郎石橋　石橋　難波の春駒　新はるごま　京人形　粂太郎名殘

別に記されてゐる。即ち前者が長唄、後者がめりやすである。跋には、「右の一緘は松島杵屋の流を汲で是版するの正本也鬻者予孤獨にして外類板なし」とあり、「寶曆七丁丑正月吉日　淺草觀音御地内　版元㊍屋吉重郎」と刊記があり、半紙版・節付本、個々の稽古本の寄本で、長歌めりやす集の最初のものとして甚だ名高い。

【備考】同じ淺草觀音の伊勢屋吉重郎の附近に、丸本屋吉州と云ふ書店あり、伊勢屋吉重郎第五版書の好評を得たるものを僞版して出した。「女里彌壽豐年藏」の僞版も亦出てゐる。現存本は稀本で、その中、表紙の完全に殘れ

で七十三篇本が出てゐる。六十七篇本に、

葱賣　よしの草　松蟲　夜の鶴　卯の花相の山　秋の七草

の六篇を增加した。これも增補曲目によつて寶曆十三年頃の刊行と考へられる。かくて、「女里彌壽豐年藏」「兎里彌壽□□」ともに、少くとも三版までは出してゐるわけで、その世に行はれたことが分る。「豐年藏」の名はその後も種々襲用せられた。「長哥めり安豐年藏」は半紙版寄本式の本で、五十八篇を收め、安永六七年頃の刊行と思はれる。義太夫節の節事景事を集めた書に「竹本豐竹豐年藏」と云ふのが出てゐる。故に「虛實馬鹿話」（明和八年版）にも、「豐曲常盤の裀とて景事を集めたる本なかりけるまゝ、久しく尋ぬと云へども、昔の物なれば

十郎）、鎌足の大臣（竹島幸左衞門）、滿潮の前（芳澤あやめ）、志度の浦與五郎（山田甚八）、同女房（小かん太郎次）、初瀬の前（松本玉の井）、横神の王子（荒井半右衞門）、紫の前（山下才三郎）、入鹿の大臣（山下半左衞門）等。

【諸本】繪入狂言本として、京、八文字屋八左衞門から出版されたものが傳はつてゐる。この狂言本は挿繪の上欄に主な役者の評判を記してあり、上本に屬する。元祿歌舞伎傑作集下卷所收。【題材】謠曲の「海士」や幸若の「大職冠」（別項）その他古淨瑠璃の「大しよくわん」等によつて流布された玉取の說話を主體として、反逆物に書き做したものである。序幕は幸若に據つた部分が多い。

【梗概】〔序幕。入鹿大臣戀慕の卷〕（讚州志

度の浦）日本に佛法流布の目的を以て、萬戸將軍は唐の太宗の使者として華原磬・泗濱石・面向不背玉の三つの寶を朝廷に捧げんとて志度の浦に着いた。折から流れ寄つた空船を破つて救ひ出した上﨟は、横神の王子の戀を容れぬため罪せられた生駒中將の姫紫の前であつた。萬戸も若衆の身とて、互に想ひ合ふ仲となつた。萬戸は寄手を拂つて奈良の都へ急ぐ。（三笠の前下屋敷邊）入鹿は三笠の前の館へ忍び通ふ途すがら、圖らず下屋敷の邊に來かゝり、梅の歌を交した緣で、三笠の前の心も許りた。所へ生駒中將の亡靈が現はれて、面向不背の玉を拜んで成佛したいと希ふので、入鹿は早速、萬戸の許に玉を求めたが、帝叡覽以前は許さぬ旨の返答があり、重ねて萬戸自身に現はれたので、入鹿は直ちにこれを捕へて首を刎ねようとすると、また萬戸が現はれた。前のは紫の前が萬戸の一命に代らんとしたのであつた。三笠の前とも姉妹の名乘りを交はす。萬戸も親のためと聞き、許して玉を取寄せると、かの亡靈はこれを奪つて池に飛び入つた。驚いた入鹿も續いて飛び込み、その男をくゝし上げて臺を取れば、王子の手下の若者だつた。王子も寄せて來たが、入鹿等が逐ひ散らす。〔二幕。鎌足大臣愛着の卷〕（内裏）面向不背玉は朝廷に納まつて後、又龍神の奪ふ所となつたが、鎌足が五年の時日を費し、海士おみつの働きによつて、取戻す事ができた。功により、鎌足は大職冠に任ぜられ、姫初瀬の前を頂く。海士は滿潮と改められて中宮附の女房となる。横神の王子は佛敎を排せんと論じ、鎌足は兩部神道を說いたが、鎌足と海士は勅命により、舞に合はせて玉取の模樣を語る。帝入御の後で、初瀬の前によつて賜はつた御酒には毒があつたが、滿潮の解毒藥で一命を取りとめ、代りに失明した。危くも王子方を斬り拂つて鎌足は落ち延びたが、滿潮は王子を防いだ爲めに刺殺される。（飛火野）滿潮の親與五郎夫婦は、孫藤若を畚に入れて、鎌足を尋ねて奈良へと急ぐ途中、滿潮の靈が現はれて、横神の王子に慘殺された始終を語り、早く藤若を父鎌足公に渡すやう言ひ殘して消え去る。入鹿は王子の僞筆によつて鎌足の心を疑つてゐたが、こゝで鎌足と出會つて王子の逆心を覺り、偶々來かゝつた王子を踏みにじり、打連れて參内の上、再び兩人並んで政道に與る事となつた。〔三幕。海士人出現成佛の事。水からくり〕（法會）海士成佛のために法會が營まれる。萬戸は日本に留まり、紫の前と共に朝廷に仕へる事となり、藤若は鎌足の跡目を繼ぎ、與五郎は讚岐守に任ぜられた。法會に祕法が行はれる時、海面俄かに波立ち、空から五色の雲が水中に下ると見えたが、雲晴れ渡つた水上にかの海士が天人の姿を示した。これ志度寺の觀音が面向不背の玉を龍宮から取り戻して和朝の寶となさんために、假に海士と化したものであつた。天人は宙に現じた馬に飛び乘るや觀音となつて虛空を翔けつた。

【解說】評判の見せ場は、最後の水からくりと宙からくりにあつたのであらうが、これを立者の太夫芳澤あやめに配役した所に作者の苦心があつたと思ふ。あやめは當時上方の所作師といはれた水木辰之助が、江戸に下つた留守に於ては、なほ替へ手のない所作師であつたが、幕切に馬上の所作を見せるなど、大に興行上の苦心も察せられる作である。辰之助が有馬の藤で（水木辰之助餞振舞參照）殺された態の評判が喧しかつたに比して、この作であやめの同じ態の方が自然であるとの比較をすら獲た。構想から見て、本作の特殊な點は、入鹿を忠臣にして鎌足と並び立つ大臣に書いた所である。入鹿が戀を語り、或は多少滑稽化された人物になつてゐるのも、史上の逆臣を轉化させようと試みた手段かと思はれる。入鹿を忠臣にした爲めに横神の王子を据ゑたのではなからうか。序幕と二幕とが殆ど分離して書かれたが、これは兩幕に於て、入鹿と鎌足を對せしめ、即ち山下半左衞門と竹島幸左衞門とを並ばせた策であらう。玉取の條は「海士」による舞を見せて效果を得た。【影響】部分的に本作の影響が後世の淨瑠璃にも發見されるが、近松の「大職冠」は明かに本作から暗示されたものがある。市川團十郎作「傾城王昭君」（元祿十四年正月、江戸中村座興行）は本作の後日の形式を以て、鎌足歿後の藤原家のお家騷動と入鹿の反逆とを題材にした當り作であつた。（大職冠參照）〔守隨〕

も

望一（まういち）　俳人【姓】杉木氏（杉田とするは誤）【名】望一は座頭名で、望都とも書かれ、「もいち」と約めても云はれてゐる（「もいつ」と讀んだものがあるが誤であらう）。【生歿】天正十三年生れ、寛文七年（二三二七）六月五日歿す。享年八十三【閱歷】伊勢の人で山田に住し、盲人で勾當になつた。同地の先覺荒木田守武（別項）を慕つて隔世の師と仰ぎ、「守武千句」（別項）にならつて「望一千句」を賦したりした（望一千句序）。季吟は望一が貞德に添削合點を乞うたと云つてゐるが（紅梅千句跋）、これは貞德を師としたといふ關係ではないらしい。望一は當時の伊勢俳人と共に貞德派に同じてゐた事は事實で、それは貞門の集を見ても明かな事ではあるが、伊勢俳壇の興隆は貞德一派の俳諧中興よりも先んじてゐたらしい事は、貞門最初の撰集の「犬子集」（別項）を見ても推測されることであり、且つ伊勢俳壇の興隆が守武の餘風に據るものであることは、望一が「望一後千句」の序に於て、「守武千句」の事を述べた後に、「それよりして此みち神慮にも叶ひたりと、代々の神主すゑ〴〵のわらはべまでもてはやし、俳諧ことにさかむ也」と云つてゐるのでも明かである。又この事は、事實に於て證明されるものもあるので、伊藤正雄氏によると、「伊勢正直集」追加の山田常明寺に於ける法樂俳諧萬句は、慶長十五年に催されたもので、その作者の顏觸は、兩太神宮の神官僧侶から庶民にまで及んでゐて、望一の云ふ所を正しく裏書するものなのである。伊勢俳壇はこの狀勢の延長に過ぎぬと共に、望一はその中心人物であつたのである。同じく山田住の俳人で「伊勢長帳」の撰者杉木正友は望一の弟らしく、夫婦共に俳人である杉木光貞の妻（美津といつたと傳へられるが明かでない）は望一の門人であつたと傳へられる。併し岡西惟中を望一の門人とし、園女を美津女の門人とする傳へは共に誤である。「俳家奇人談」には、望一が十二律の調子を聽いて物の善惡を占ふ術を得たといふと云つてゐるが、この種の事は、西鶴の「二代男」にいふ伊勢の右望都（假作人物か）なる座頭にも語られ、盲人について能く語られてゐる事でもあり、恐らくは

附會說であらう。南畝の「假名世說」には、望一臨終の遺書といつて山田の中村忠太夫の家に藏されてゐたが、筆の運びが盲人の書とは見えなかつたとある。【著作】望一千句（慶安二年刊）○望一後千句（寛文七年刊）○山田誹諧（望一・利清・孝晴共編。慶安三年刊）。

【參考】誹諧作者名寄朝江種寛○歷代滑稽傳森川許六○滑稽太平記北藤浮生○綾錦菊岡沾涼○誹諧家譜早川丈石○誹諧家譜拾遺集青木十口○俳家奇人談竹内玄々一○誹家大系圖生川春明○望一から園女まで志田義秀（俳文學の考察）○望一と伊勢のよも一同上（同上）○荒木田守武の文學伊藤正雄（國語と國文學昭和八ノ三）

〔志田〕

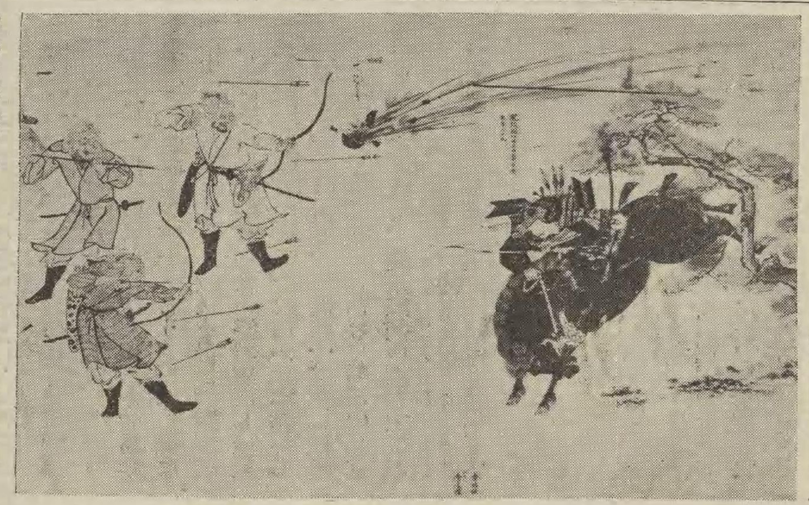
蒙求（もうぎう）　子書類書類　三卷　【著者】李瀚（傳未詳。唐玄宗朝の人といふ）【內容】經史の中から古人の行迹を選び、事實の相類するものを採つて兩々相比し、四字句の韻語としたもので、凡て五百九十六句あり。もと童蒙の教科に充てんとしたもので、一種の歷史唱歌の類である。而して蒙求の名は、周易蒙卦の「童蒙求我」に取つたものと云ふ。初め句下に自註を施して相敷衍し、載する所は萬餘事に上り、李華の序を冠し、李良の推薦を得ると共に弘く天下に行はれ、陳振孫の「書錄解題」には「擧世之を誦して以て小學發蒙の首と爲す」（子部類書類）と見えてゐる。その後、徐子光なる者が瀚の不備を補ひ、原註を改訂して併せて他事をも記し、その體裁大に備はるに至つた。爾來瀚の本文は春秋經の如く、子光の註は三傳の如く、相關聯して益々世に行はれ、これを現行の「蒙求」とする。子光の註は「四庫提要」に「稍々冗漫を嫌ふと雖も、而も頗る精該」と云ひ、又「初學の津筏」と評してゐる。その傳記は亦明かにし難く、宋秉係の序に據つて、宋の理宗・度宗の兩朝に亙つて生存したことを知り得るのみである。【傳來・影響】本書が唐宋の間大に世に行はれたがために、爾後これに倣ふものが甚だ多い。宋代には、劉班の「兩漢蒙求」、王令の「十七史蒙求」、范鎭の「宋朝蒙求」、無名氏の「左氏蒙求」「南北史蒙求」、余應符の「趙氏家塾蒙求」、徐伯益の「訓女蒙求」、元代には、胡炳文の「純正蒙求」、明代には、柳希春の「續蒙求」、李廷機の「新蒙求」等があり、狡賈輩が竊にこれを作つて、名を村學究に藉りて利を貪るものも亦少くなかつた。而も十七史・純正二書の他は見るべきものが少い。本書の我が國に將來せられたのは、何時の頃か明かでないが、「扶桑集」に都良香の「始受蒙求」と題する七絕一首を載せてゐるのを見れば、その王朝時代にあることは云ふまでもない。その後足利時代には緇流の間に多く行はれ、慶長元年（文祿五年）に至つて小瀨甫菴が初めてこれを飜刻し、爾後江戸時代に入つては愈々弘く流布し、隨處の村塾に於てこれを幼童に科するに至り、豐臣公定の「桑華蒙求」、岸鳳質の「扶桑蒙求」、伊藤有鄰の「國字蒙求」、菅謙由の「本朝蒙求」、山賀新の「東西蒙求」、山下直溫の「皇朝蒙求」、松田迂仙の「藝林蒙求」等これに倣ふものも相繼いで世に現はれた。

【註釋書】補注蒙求三卷（或は八卷）宋徐子光○蒙求補注六卷清金三俊○蒙求詳說十六卷宇都宮由的○箋注蒙求三卷岡白駒

〔宇野・本多〕

蒙古語（もうこご）「ウラル・アルタイ語族」を見よ。

蒙古襲來繪詞（もうこしふらいゑことば）　繪卷　【解說】帝室御物三卷。元の大軍が筑紫に來寇した實狀を畫いたもので、奧書によれば當時を去る十餘年後の永仁元年の頃に作製されたものらしい。文永の役に際し、肥後國の武人竹崎五郎兵衞季長は、蒙古襲來すと聞き、郎黨を引具して急ぎ博多にかけつけ、遂に敵船に乘り移つて戰功を立てたが、事の行違ひから幕府の勸賞を得なかつたので、わざ〳〵鎌倉まで下向してこの旨を申し開いた。蓋しこの繪卷は季長がかゝるおのが戰功を子孫に傳へんために畫かせたものらしく、從つて各場面とも季長の參與した戰が主となつてをり、鎌倉下向の段の如きも縷々叙してゐる。これを以て蒙古襲來當時の全體の戰況とは言ひ難いが、局部的ながら却つて實戰の精しい狀況も窺はれ、當時の武士がこの戰に對していかなる意氣込みでいかに活動したか、その面目も躍如として出てゐる。詞は或は季長自ら作つたものか當代の武士言葉もそのまゝ聞くべき心地がする。繪は土佐長隆の筆と傳へられてゐるが、素より明かでない。その描寫は戰鬪の活動的場面多きに拘はらず、人物の表現が概して靜かで動相に乏しいが、いづれも人物を大きく描いて、甲冑・裝束等の細部まで精緻を極めてゐる點は、風俗資料として却つて面白い。鎌倉時代は戰記繪卷の製作が尠くないが、これは實に史上の大事件を取扱つて史的價値高きのみならず、製作年代の明かな點でも、貴重な遺作と云はねばならぬ。この繪卷は竹崎氏の後早く天草城主大矢野氏の有となり、その後細川家に移り、明治に至つてまた大矢野氏に還つたが、同二十三年同氏より御府に納めたものである。〔田中（一）〕



蒙古襲來繪詞（御物）

毛詩（もうし）　經書　二十卷　【名義】漢代の詩學、齊・魯・韓・毛四家の中、現存するのは毛氏の傳であるから、その名を冠して呼ぶ。主として宋學派では詩經と云ふ。【編者】不明。「史記」が「古詩三千餘篇、及孔子、去其重、取可施於禮儀」……三百五篇「（孔子世家）と稱して以後、この說は一時學界の定說であつたが、孔穎達（毛詩正義卷四十）・鄭樵（六經奧論）・崔述（讀風偶識卷三）等、唐代以後の學者にはこれを疑ふ者も少くない。「論語」に「詩三百」（爲政・子路）とある外、「墨子」の書にも亦「誦詩三百」（公孟）の語があり、又經傳諸子に引用せられた逸詩が僅に十の一に過ぎず、且つ風教を重んじた孔子が鄭衞の淫詩を刪らなかつたとも思はれず、當時大體三百餘篇の詩の定本が

教科に充てんとしたもので、一種の歴史唱歌の類である。而して蒙求の名は、周易蒙卦の「童蒙求レ我」に取つたものと云ふ。初め句下に自註を施して相敷衍し、載する所は萬餘事に上り、李華の序を冠し、李良の推薦を得ると共に弘く天下に行はれ、陳振孫の「書錄解題」には「擧世之を誦して以て小學發蒙の首と爲す」（子部類書類）と見えてゐる。その後、徐子光なる者が瀚の不備を補ひ、原註を改訂して併せて他事をも記し、その體裁大に備はるに至つた。爾來瀚の本文は春秋經の如く、子光の註は三傳の如く、相關聯して益々世に行はれ、これを現行の「蒙求」とする。子光の註は「四庫提要」に「稍々冗漫を嫌ふと雖も、而も頗る精該」と云ひ、又「初學の津筏」と評してゐる。その傳

めてこれを飜刻し、爾後江戸時代に入つては愈々弘く流布し、隨處の村塾に於てこれを幼童に科するに至り、豐臣公定の「桑華蒙求」、岸鳳質の「扶桑蒙求」、伊藤有鄰の「國字蒙求」、菅謙由の「本朝蒙求」、山賀新の「東西蒙求」、山下直溫の「皇朝蒙求」、松田迂仙の「藝林蒙求」等これに倣ふものも相繼いで世に現はれた。

【註釋書】補注蒙求三卷（或は八卷）宋徐子光○蒙求補注六卷清金三俊○蒙求詳說十六卷宇都宮由的○箋注蒙求三卷 岡白駒 〔宇野・本多〕

蒙古語襲來繪詞（もうこしふらいえことば） 繪卷。【解說】帝室御物三卷。元の大軍が筑紫に來寇した實狀を畫いたもので、奥書によれば當時を去る十餘年後の永仁元年の頃に作製されたも

繪卷は季長がかゝるおのが戰功を子孫に傳へんために畫かせたものらしく、從つて各場面とも季長の參與した戰が主となつてをり、鎌倉下向の段の如きも縷々叙してゐる。これを以て蒙古襲來當時の全體の戰況とは言ひ難いが、局部的ながら却つて實戰の精しい狀況も窺はれ、當時の武士がこの戰に對していかな

行はれてゐたらしく、「史記」の說の如く、孔子が大刪減を行つたとは考へられない。【傳來】堯舜以前既に葛天氏の樂八闋があつたと云ひ（呂氏春秋古樂）、「禮記」に伊耆氏の蜡辭を載せ、その他諸書に太古の歌辭を載せてゐるものも少くない（尙書・尙書大傳・史記・吳越春秋・帝王世紀・列子・淮南子・孔子家語等）。勿論これ等をその傳へる儘に信ずることは不可能であるが、歌謠の古く存在したことは察するに難くない。現存する三百餘篇の詩は、周の初めから春秋時代に至る迄の約五百年間に行はれた詩の選集で、或は古說の如くその數は許多に上つてゐたとしても、それが個人の手に依つて選擇せられたものではなく、年月の經過と共に、自然に淘汰せられたものが傳へられたのであらう。樂及び詩が、周代初期の爲政者に依つて、人民敎科の具として用ひられたことは、「周禮」及び「禮記」等の記事を通じて推測せられる。「禮記」王制及び「漢書」藝文志に依れば、周代には采詩の官があり、王者が民風の善惡を察する資料として、政敎に應用する目的から各地の民謠を採集し、孔子がそれに就いて選刪を加へたと云つてゐるが、果して如何なる程度に實施せられたかは明かでない。孔子はただ當時に傳來流行したこれ等の詩を取つてその敎學の具としたので、その後に於ても、必ずしも儒家の徒の專有する所でなかつた事は云ふ迄もない。然るに秦漢の際儒家の發展すると共に、その徒の依據する根本典籍の一としてこの詩を數へ、やがてその權威を增さんがために、孔子刪詩の說が附加せられたものと考へられる。秦政の燔書には、勿論他の經典と共に難に遭つたが、元來諷誦に依つて傳へられるものだけに、その厄を蒙る事も比

較的に少かつたであらう。漢代文運の復興と共に、魯の申培公、齊の轅固生、燕の韓嬰を祖とする魯・齊・韓三家の詩學が勃興し、相次いで何れも學官に立てられ、「漢書」藝文志にはその訓詁の書を載せてゐる。この三家は何れも今文學派に屬するが、又別に河間獻王の府中に敎授せられた古文學派に屬する毛公の詩學があり、獨り後れて平帝の時學官に列せられた。これは今文の三家詩とは頗る說を異にし、合せて四家詩と云ふ。その中齊詩は魏に、魯詩は西晉に、韓詩は北宋に亡び（今本、韓詩外傳は舊態ではない）、毛詩のみが後に傳へられたが、これは必ずしも短者が自ら廢せられたのではない。三家詩の長短は今日明かでないが、毛氏の傳は、詩人の本意よりも、寧ろ主として采者編者の意を原ねるに在る。鄭玄の「箋」は毛詩を主に、三家詩を參考して必ずしも毛傳に從はない。魏の王肅はこれに對して毛氏の學を申べ、陳統は更にこれに反對し、爾來彼此の論爭を繰返したが、唐の孔穎達が「毛詩正義」を撰ぶに鄭の「箋」を取るに及んで群議を一決した觀がある。然るに宋代以後、經書の自由研究の風潮が起り、歐陽脩・蘇轍・程大昌・鄭樵等は必ずしも毛・鄭に從はず、或は別に一家の言を立て、或は詩序を斥けて直ちに詩人の本旨を探らんとし、朱熹に至つて新學風が大成せられた。清朝に入つて漢代以後の諸家の說を綜合折衷する著述が現はれ、更に三家の詩を檢索せんとすると共に、進んで儒家の傳統的解釋を排除して、全く自由なる立場からこれを觀る者も現はれた。我が國に於ては、王朝時代學官に立てられ、當時は正義本を用ひたが、南北朝の末、朱子の新註が傳來し、僧岐陽が初めてこれを讀んだと云ふ

（中村惕齋稿頭大學）。爾後二書共に行はれた。【內容】現存の詩三百五篇は、風（一六〇）・雅（小雅七四・大雅三一）・頌（四〇）の三類に大別され、これに篇名のみ傳はれる小雅の南陔・白華・華黍・由庚・崇丘・由儀六篇を合すれば三百十一篇となる。風雅頌の別は、或はその內容に依り（大序）、作者に依り（鄭樵詩辨妄）、或は音調に依つて說を爲すが（憲周惕詩說）、通說としては何れも難點を含んでゐる。各詩の首には序を冠してゐるが、そのうち周南關雎の序は詩全體の總論に亙るので、これを大序と云ひ、各篇のそれを小序と云ふ。詩序の作者は或は孔子と云ひ、子夏と云ひ、毛公と云ひ、或は詩人の自作とも云ひ、歸一する所を知らぬが、少くも漢代以前のものではなく、儒家の徒の偏解も少くない。朱子の如きは全くこれを削つたが、要はこれを過信しなければ足る。作者からこれを見れば、大體國風は民間の歌謠が多く、雅頌は貴族の樂歌で、詩人の創作に成るものも亦含まれてゐる。

【註釋書】毛詩二十卷舊題漢毛亨傳漢鄭玄箋○毛詩正義唐孔穎達等○詩集傳三十卷宋朱熹○詩毛氏傳疏三十卷清陳奐○毛詩傳箋通釋三十二卷馬瑞辰○毛詩後箋胡承珙

【參考書】文學大綱（民國鄭振鐸）○詩經研究諸橋轍次

孟子（もうし） 經書 十四卷 【著者】「史記」（卷七十四）の孟子列傳には、「孟軻業を子思の門人に受け、道既に通じ、……如（ゆ）く所の者合はず、退いて萬章の徒と詩書を序し仲尼の意を述べて孟子七篇を作る」と云ひ、趙岐・朱子等も亦孟軻の自著とした。然るに唐の林愼思が「續孟子」二卷を作つて、「孟子」七篇を軻の自著ではなくして、弟子達が共にその言を記し

たものとし、後、韓愈も亦軻の歿後、その徒萬章公孫丑等が師言を輯錄したものと云ひ、晁說之及び「文獻通考」（卷百四十八）等にも亦同樣の說があり、また我が伊藤仁齋の如く、自著の部分と門人の手記とが相混ずとする者もある。併し仔細に本文の體裁を檢討すれば、林・韓等の說の從ふべきことは、自ら明かである。【篇數】孟子の書が凡て七篇であることは、「史記」の云ふ如くであるが、「漢書」藝文志には「孟子十一篇」とあり（風俗通亦同じ）、趙岐の「孟子題辭」には、「七篇……又外書四篇、性善辨、文說、孝經、爲政（或は性善辨文說孝經、爲政）なり。其の文宏深なる能はず、內篇と相似ず、孟子の本眞に非ずして、後世の假託なるべし」と云ふ。「漢書」の十一篇とは恐らく七篇と外書四篇とを合せたものであらう。趙岐が獨り七篇のみに註して外書を取らなかつた爲めに、遂に佚して傳はらず、現存するものは後人の僞作に過ぎぬ。【傳來】孟子は初め諸子の中に列してゐた爲めに、幸ひに秦火の難を免れた。漢の景帝の時、「論語」「孝經」「爾雅」と共に學官に立て博士を置かれたが、武帝の時、董仲舒の奏に從つて傳記博士を罷め、獨り五經博士のみを立てるに及んで、孟子博士も亦廢せられ、爾後永く朝廷に用ひられなかつたのみならず、學者の間にも、さのみ尊崇を受けず、東晉成帝の時、袁環・馮懷等が朝廷に用ひんことを上疏して聽されず、唐の肅宗の時、楊綰が兼經となさんことを請ひ、懿宗の時、皮日休が學科となさんことを請うたが、皆用ひられなかつた。かくの如く漢唐の間は頗る重んぜられず、中に司馬遷がこれを尊んで「孟荀列傳」を作り、揚雄が「古者楊墨路を塞ぎ、孟子辭して之を闢いて廓如たり」（法言

巻二と推稱し、又韓愈が「其の功禹の下に在らず」（韓文巻十八）と云ひ、或は趙岐が註解を著はした如く、二三の尊崇した者もないではないが、これに反して「孟子」を非議する者頗る多く、戰國の末、荀子の「非十二子篇」を初めとし、王充の「論衡」の刺孟篇、司馬光の「疑孟」、李覯の「非孟」、晁說之の「詆孟」、黃次伋の「評孟」、馮休の「刪孟」、鄭公常の「纂圖折衷」、蘇軾の「論語說」等は何れも「孟子」を駁難したものである。宋に及んで眞宗の世、孫奭に命じて「孟子」を校せしめ、新たに「孟子音義」を刊行して朝廷の大臣に各々一部を賜はつた。玆に至つて陳振孫の「直齋書錄解題」が、先に劉歆の「七略」に子類に列し、陸德明の「經典釋文」が採らなかつた「孟子」を、始めて經部に列し、更に二程子が「大學」「中庸」「論語」に配して四書と云ひ、朱子がこれに集註を加へて以來、永く經書として尊敬せられるに至り、又王陽明の如きは、特にこれを尊重した。

【我が國に於ける傳來】「日本國見在書目錄」に趙岐及び陸善經の註本を載せてあるのを見れば、その傳來の早かつたことは容易に推知せられる。併しその湯武の放伐を是認するが如き論が、我が國體と相容れざる嫌ひがあるために、深くは用ひらるゝに至らず、孟子の書を船載する船は必ず覆滅すると言ひ傳へられた程であつたが、北條氏の末年、朱子學の傳來と共に漸く推重せられ、虎關の如きは、孔道を學ぶもの孟軻に若くはなしと云ひ、義堂は將軍義滿のためにこれを進講した。江戸時代に至つて水戸の光圀は我が國體に背反するものとして痛くこれを排撃し、荻生徂徠も亦これを重んぜず、太宰春臺はこれを承けて頻りに排斥した。然るに戴孤山は「崇孟」を作つて春臺の說を駁し、同時の伊藤仁齋は「大學」「中庸」を疑ふにも拘はらず、「孟子」は「論語」の義疏なりとして、諸生に教へるに「論語」「孟子」を讀んで然る後六經に及ぶべきを以てした。爾後幕府の保護と相俟つて朱子學が普及すると共に、「孟子」も次第にその流布を弘めるに至つた。

【內容】〔倫理說〕孟子は性善論を以てその學說の根本思想として、子思の誠が天道であり、又人の本性であるとする說に更に一歩を進めてゐる。性の何物であるかは、彼はこれを自明のものとして、嘗て定義を下さなかつた。善とは、彼は「欲すべき之を善と謂ふ」（盡心下）と云ひ、善惡の標準は甚だ明瞭を缺くが、彼が四端の心を論じ、本心の善を說くのを見れば、彼の思想は結果論ではなくして、寧ろ動機論的である。彼は性善を說くに、演繹的・歸納的の二法を以てこれを論證した。演繹的には詩書の說及び子思の教に基づいて、これを演繹して性善を云ひ、歸納的には心理的根據を以て例證を擧げて性善を說く。例へば人には凡て「人に忍びざるの心」があり、事に臨み折に觸れては、その中心から天眞の美を流露する。今赤子が將に井戸に落ちかゝるのを見れば、怵惕惻隱の心が油然として胸中に湧いてこれを救ふであらう。而してその動機は純粹なる愛他的同情の發露で、或は名利を求め、人の批評を顧みるが如き利己的な劣情を混ずるものではない。かくの如く人には皆惻隱の心、羞惡の心、辭讓の心、是非の心を具へて、仁義禮智の端をなす。人に皆この四端があるのを見れば、性の善なることは疑ひない（公孫丑上）と云ふ。而してこの性は天に附與せられたもので、聖凡を超越して萬人同性であると云ふのみで、性に就いて多くを云はなかつた孔子の後を承けて、子思の性命の說に心理的基礎を與へてこれを發展せしめたことは、彼をして孔子の歿後その正統的後繼者としての地歩を獲得せしめた。彼がかくの如く性善論を强調したのは「孟子」に引かれた告子の性無善無不善說のみならず、宓子賤・漆雕開・公孫尼子等の性有善有惡說等が起つて、性論が人の五官が各々その嗜む所を同じくするが如く、心も亦同じく然りとする所があるべき筈で、理義が卽ちこれである。聖人とは先づ人心の同じく然りとする所を得たものの謂ひである（告子上）と云ふ。而して戰國の當時亂臣賊子が輩出し、倫理綱常の頽廢した事實に就いて、彼は人の性は本來善なるものであるが、物欲がその心を陷溺し、草茅がその心を塞ぐがためである（盡心下）と云ふ。併しながら、本と純粹不雜なる人の性が、何故に物欲に陷溺するか。こゝに於て彼の說は窮地に陷つて、人性の一方面である利他的同情を以てその性善說の根據としながらも、他の一面である利己的欲望の存在を肯定しなければならなかつた。ただ彼はこれに對して、君子の性とは云はないもの（盡心下）と辯解してゐる。性善論を說く必然的結果として、彼は先天的良心論を主張する。これは修爲を假らない自己固有なもので、彼はこれを本心、又は赤子の心（離婁下）と稱する。從つて又その活動は良知・良能（盡心上）であるとして、直覺的知識論を主張した。その義務論は、子思の五倫說を承けてこれを發展せしめたものであるが、特に注意すべきものは、その君臣關係に於ける所論である。彼が君臣義有り（滕文公上）と云ひ、楊朱墨翟の言を評して、「父を無し君を無す、是れ禽獸なり」と云ひ（滕文公下）、又孔子が春秋を著はして大義名分を明かにしたことを推稱（同上）してゐるのを見れば、彼が君臣の義を重んじたことは想見するに難くない。然るに齊の宣王に告げて、「君の臣を視ること手足の如くなれば、則ち臣の君を視ること腹心の如くし……君の臣を視ること土芥の如くなれば、則ち臣の君を視ること寇讎の如くす」（離婁下）と云ひ、湯武の放伐を論じて、「仁を賊ふ者、之を賊と謂ひ、義を賊ふ者、之を殘と謂ふ。殘賊の人、之を一夫と謂ふ。一夫の紂を誅するを聞くも、未だ君を弑するを聞かず」（梁惠王下）と云ひ、貴戚の卿を論じて、「君に大過有れば則ち諫め、之を反覆して聽かれざるときは、則ち位を易ふ」（萬章下）と云ひ、又「民を貴しと爲す、社稷之に次ぎ、君を輕しと爲す。是の故に丘民に得て天子と爲る」（盡心下）と云ふが如き言辭は、周室の勢力が全く萎靡して天下の宗主たる實權のなかつた時勢が彼をして云はしめたものではあらうが、一統を大にして周室を尊崇した孔子の思想との間には頗る逕庭がある。これは一つには彼が古來の支那民族の天人に關する思想を繼承して、民本主義を懷抱したことに由るものである。

德論としては彼は仁義禮智の四德を擧げ、孔子及び子思の智仁勇と、董仲舒以下の五常說との中間的段階に立つ。特に楊朱の爲我主義と墨翟の兼愛主義とを排撃せんがために、仁義の二德を高唱してゐる。彼の性善論の立場から觀れば、この四德は明かに天賦固有のものとなる。故に彼は惻隱・羞惡・辭讓・是非の心を以て、直ちにこれを仁義禮智であるとし（告子上）、或はこれを四端と云ふ（公孫丑上）が、彼の眞意は寧ろ後者に在る。端とは端緒の意で、その發する所に從つてこれを擴充すれば、本心の善に復ることが出來る。これを或は放心を求める（告子上）とも云ふ。故に彼の修養法は、物欲のために失はれた放心を求めて、これを存養することに歸着するが、その工夫としては、消極的には、（一）慾を寡くし、（二）夜氣を存し、（三）思考し、積極的には、（一）四端を擴充し、（二）氣を養ふの五條に盡きる。氣とは至大至剛、以て直ちに天地の間に塞がる浩然の氣（公孫丑上）で、集義の結果始めて生ずるものである。要するに彼の修養法は、尊德性・道問學の二大綱を掲げた子思のそれを繼いで、更にこれを內省的に進めたものである。

〔政治論〕暴君亂主が相繼いで出でて、生民が流離顚沛する戰國爭亂の世に遭つた彼は、思辨的哲學者と云ふよりは、自ら寧ろ在野の一

に趙岐及び陸善經の註本を載せてあるのを見れば、その傳來の早かつたことは容易に推知せられる。併しその湯武の放伐を是認するが如き論が、我が國體と相容れざる嫌ひがあるために、深くは用ひらるゝに至らず、孟子の書を船載する船は必ず覆滅すると言ひ傳へられた程であつたが、北條氏の末年、朱子學の傳來と共に漸く推重せられ、虎關の如きは、孔道を學ぶもの孟軻に若くはなしと云ひ、義堂は將軍義滿のためにこれを進講した。江戸時代に至つて水戸の光圀は我が國體に背反するものとして痛くこれを排撃し、荻生徂徠も亦これを重んぜず、太宰春臺はこれを承けて頻りに排斥した。然るに藪孤山は「崇孟」を作つて

演繹して性善を云ひ、歸納的には心理的根據を以て例證を擧げて性善を說く。例へば人には凡て「人に忍びざるの心」があり、事に臨み折に觸れては、その中心から天眞の美を流露する。今赤子が將に井戸に落ちかゝるのを見れば、怵惕惻隱の心が油然として胸中に湧いてこれを救ふであらう。而してその動機は純粹なる愛他的同情の發露で、或は名利を求め、人の批評を顧みるが如き利己的な劣情を混ずるものではない。かくの如く人には皆惻隱の心、羞惡の心、辭讓の心、是非の心を具へて、仁義禮智の端をなす。人に皆この四端があるのを見れば、性の善なることは疑ひない(公孫丑上)と云ふ。而してこの性は天に附與せられたもので、聖凡を超越して萬人同性であると

の心(離婁下)と稱する。從つて又その活動は良知・良能(盡心上)であるとして、直覺的知識論を主張した。その義務論は、子思の五倫說を承けてこれを發展せしめたものであるが、特に注意すべきものは、その君臣關係に於ける所論である。彼が君臣義有り(滕文公上)と云ひ、楊朱墨翟の言を評して、「父を無し君を無す、是れ禽獸なり」と云ひ(滕文公下)、又孔子が春秋を著はして大義名分を明かにしたことを推稱(同上)してゐるのを見れば、彼が君臣の義を重んじたことは想見するに難くない。然るに齊の宣王に告げて、「君の臣を視ること手足の如くなれば、則ち臣の君を視ること腹心の如くし……君の臣を視ること土芥の如くなれば、則ち臣の君を視ること寇讎の如くす」

と墨翟の兼愛主義とを排撃せんがために、仁義の二德を高唱してゐる。彼の性善論の立場から觀れば、この四德は明かに天賦固有のものとなる。故に彼は惻隱・羞惡・辭讓・是非の心を以て、直ちにこれを仁義禮智であるとし(告子上)、或はこれを四端と云ふ(公孫丑上)が、彼の眞意は寧ろ後者に在る。端とは端緒の意で、その發する所に從つてこれを擴充すれば、本心の善に復ることが出來る。これを或は放心を求める(告子上)とも云ふ。故に彼の修養法は、物欲のために失はれた放心を求めて、これを存養することに歸着するが、その工夫としては、消極的には、(一)慾を寡くし、(二)夜氣を存し、(三)思考し、積極的には、(一)四端を擴充し、(二)氣を養ふの五條に盡きる。氣

とは至大至剛、以て直ちに天地の間に塞がる浩然の氣(公孫丑上)で、集義の結果始めて生ずるものである。要するに彼の修養法は、尊德性・道問學の二大綱を掲げた子思のそれを繼いで、更にこれを內省的に進めたものである。

〔政治論〕暴君亂主が相繼いで出でて、生民が流離顚沛する戰國爭亂の世に遭つた彼は、思辨的哲學者と云ふよりは、自ら寧ろ在野の一政論家となつて、この點に於て最も彼の特色を發揮した。彼の政治論は亦性善論に出發するもので、卽ち人には至誠惻怛、人に忍びざる心があり、これが發しては人に忍びざるの政治となる。これが仁政であり、王道であつて、それを實現するためには先づ人民の經濟的基礎を確立して、然る後に道德的生活にまで高揚せしめなければならぬと主張するが、その底には彼の特色たる民を重しとし、君を輕しとする民本主義が一貫して流れてゐる。而してその實際的經綸としては、(一)井田法を實施し、(二)租稅を輕減して雜稅を附加せず、(三)民の稼穡の時を奪はず、(四)殖產興業の方法を講じ、(五)山林川澤の法を設け、(六)庠序學校を設けて孝弟忠信の道を敎へる等の諸政策を標榜してゐる。

【史的地位】「孟子」の所論は、總て先天的良心論を根據とする性善を基礎として築き上げられたものである。支那に於ける性善の思想は彼に始まるものではなく、「毛詩」に「爾の性を彌へしむ」(大雅卷阿)「天の烝民を生ずるや、物有り、則有り、民の彝を秉る、是の懿德を好む」(大雅烝民、孟子告子上も亦これを引く)と云ふ如く上古以來、已に有る所であるが、これを以て學說の中心思想としたのは、孟子を以て初めとする。而して「性相近し、習相遠し」(論語陽貨)と云ふのみで、性に就いて多くを云はなかつた孔子の後を承けて、子思の性命の說に心理的基礎を與へてこれを發展せしめたことは、彼をして孔子の歿後その正統的後繼者としての地步を獲得せしめた。彼がかくの如く性善論を强調したのは「孟子」に引かれた告子の性無善無不善說のみならず、宓子賤・漆雕開・公孫尼子等の性有善有惡說等が起つて、性論が當時の學界の中心問題であつたがために、儒敎としての立場から正しい性論を確立する必要があつたからであると思はれる。又仁を以て一貫する孔子の道を承け、口を開けば仁義を併稱したのは、自ら孔子を學び(公孫丑上)、孔子に私淑(離婁下)すると稱した彼の破邪顯正のためで、その異端論には頗る傾聽すべきものがある。

【註釋書】孟子注十四卷後漢趙岐 ○孟子音義二卷宋孫奭(通志堂本) ○孟子正義十四卷 趙岐注・疏題孫奭撰○孟子集註七卷宋朱熹○孟子精義十四卷同上○孟子或問十四卷同上○孟子趙注補正六卷清宋翔鳳 ○孟子正義三十卷 清焦循(全集本、四書古注十種本、經解本)○孟子四考四卷清周廣業○孟子古義七卷伊藤維楨 ○孟子釋解十四卷 皆川愿 ○孟子欄外書一卷佐藤坦 ○孟子論文七卷竹添進一郎○孟子定本十四卷安井衡(漢文大系本)○重改孟子集註俚諺鈔二十卷毛利瑚珀(貞齋)○孟子示蒙句解七册 中村之欽(惕齋)(漢籍國字解全書本)○孟子講義四谷峰・內田周平 (四書參照)

【參考】孟子雜記明陳士元(湖海樓本)○孟子編年清狄子奇○孟子生卒年月攷閻若璩○孟子時事略任兆麟(心齋十種本)

〔宇野・本多〕

申狀 まうしじやう　古文書【解說】下より上に訴訟する文書。古くは解(別項)の形式を用ひ、解狀とも云つたが(室町時代まであり)、また申文とも稱した。就中、愁歎して願ふものを愁狀、誠款を吐露して願ふものを款狀といふ。普通の申狀の例は、

觀心寺々僧等謹言上、
欲早被經御　奏聞、任先度　綸旨幷國宣施行旨、重急速被申成　綸旨於守護方、全管領大庭關務間事、
副進
一通　綸旨案
一通　寺務御施行案
二通　國宣施行案
右當關者、爲當寺修造常燈以下御興隆料足、就被寄置當寺、被成下國宣施行畢、而被准自餘之關、被止當所之條、難堪之次第也、早任先度　綸旨幷國宣施行之旨、可建置當關之旨、被成下　綸旨於守護方、全管領、爲專興隆、粗言上如件、
正平十七年四月　日

然るに武家時代以後、爭論の場合の訴訟文書で、訴人(原告)の申文を訴狀と稱し、これに對して、論人(被告)の答辯書を陳狀或は支狀と云ふ。訴人より幕府へ訴狀を提出すれば、幕府は論人に向つて問狀(別項)或は召文(別項)を發して陳辯を促し、論人卽ち陳狀を出す。これを初問初答と云ひ、普通は三問三答まで許される。この風は亦公家や社寺にも存してゐた。訴狀の形式は前掲申狀の例の如きものであるが、陳狀の樣式は、

興福寺僧祐實陳申、
欲早本領主大中臣助盛寄進狀幷宣旨以下證文分明上者、被停止金剛寺濫訴、且歸神威、且任康元元年十二月廿日御敎書、相傳領知、無相違可爲不朽社領由、成賜重　長者宣、春日御社領和泉國和田上中條間事、
副進
一通　本領主助盛寄進狀案貞永元年四月日
一通　同領主讓宗春狀案同年月
一通　同領主申狀案延應二年卯月十四日寄進春日之由緒見此狀
一通　宣旨案延應二年二月廿二日
一通　勸學院政所御下文案嘉禎四年六月四日
一通　國司廳宣案同年二月日
一通　御敎書案康元元年十二月廿日
一通　寺家請文案同廿一日于時旻盛僧正寺務
右當庄者、春日社領其寄不輕、寺僧祐實相傳所帶也、不可有他妨之條、所進證文等明白之處、今金剛寺捧度々弃置之文書、企條々奸謀之濫訴之條、非御沙汰之限歟、(下略)
一訴狀云、大中臣助綱、以重代相傳之私領、令寄進當寺畢、貞應元年因准建久之例、被下綸旨於國衙、令立劵庄號之事、證文明鏡也云云取詮、就之謂之、本領主助綱爲仝子孫之相傳、寄附金剛寺之間、雖被下國役奉免之綸旨、不經幾程、庄號顚倒之上、助綱逝去之後、彼寺忘助綱之素意幷忠功、忽令弃置子息助盛之間、取返件本公驗等、所令寄進春日御社領也、子細具于所進證文、(下略)
一同訴狀云、助綱之子息助盛、依少緣、令備進上分米五果於春日社家、其分不可有相違云々、就之謂之、(下略)
一同訴狀云、春王女之先祖宗春、伺境節、廻謀略云々、就之謂之、(下略)
一同訴狀云、仁治之比、任先規、重知行之處、宗春猶奸謀之餘、假衆徒之威、又令押妨、歎而送年之處、適奉逢御寺務、欲遂本懷云々取詮、就之謂之、(下略)
一同訴狀云、如元可爲當寺傳法會以下佛事用途之由、可被申下宣旨等云々、就之謂之、(下略)
以前條々就訴狀、披陳言上如件、
弘安三年十一月　日

訴陳狀に對しての判決文書は、鎌倉時代には多く下知狀であるが、後には裁許狀である。

武州越生龍穏寺祖天與上野松井田補陀寺威雲

本末異論裁斷之條々
一龍穩寺祖天訴旨、(下略)
一補陀寺感雲答旨、(下略)
一右双方召出、摠寧寺大中寺令出席、反復衆議之處、(下略)
(中略四箇條)
右、以双方所論遂裁斷之處、補陀寺者無極初開之道場而、最乘寺末寺之系譜歴然也、向後彌以屬最乘寺之末寺也、祖天不勘辨之妄訴之說、(中略)令追放者也、自今已後、右國々處々不可徘徊也、仍爲後證、書裁判之旨而授之條、全不可違反之者也、

元祿九丙子年十月廿五日　戸能登(黒印)
永伊賀(黒印)
松志摩(黒印)
井大和(黒印)

上州松井田
補陀寺

若し訴論人が訴訟を止めて、仲直りをするならば、和與狀を交換する。江戸時代には濟狀とも云つた。【伊木】

和與
額安寺領備前國金岡東庄内地頭庶子道性分領事
右、准惣領地頭藤肥前左衞門入道覺知和與之旨、五分貳參令分別、下地以貳分爲領家方、一圓可令進止之、以參分爲地頭方、一圓可令進止之、將又於道性分領有分漏之地者、爲領家分可令管領之也、且守此狀之趣、且任分文之旨、兩方申賜御下知、五以不可異議、若有令違約事者、可申行罪科、仍和與之狀如件、

元亨三年二月五日　地頭代紀政綱(花押)
預所藤原義幸(花押)

(裏書)
爲後證、奉行人所封裏候也、

元亨四年八月七日　左衞門尉利行(花押)
左兵衞尉貞雄(花押)

孟津抄 もうしんせう

註釋書　二十卷　【著者】

九條稙道【名稱】卷頭の自叙に、「抑此物語の玄々のたとへをとらば、黄河九曲は崐山よりいづれば、水上を見むとて張騫は槎に乘りて、三とせ餘の秋のはじめに銀河にいたりて、二星に逢ひて問ふに、こゝをなん孟津と答ふるに驚きて歸ると云々。爰に予亦同卦也。此作者賢才の測りがたき事は、仙術も及ばざる者歟。此一部錄し畢る事月も日もこそあれ、七夕なれば、則孟津抄と名づくるところしかなり」とある。一名「九禪抄」(崐江入楚中に標出す)とも稱せられる。【成立】著者若き日、入道前右大臣三條西公條の講筵に侍り、後「河海抄」「花鳥餘情」等の諸說を考へ、「弄花抄」の說を取捨し、其上不審の事を再問して確め、自說を加へ、前後數十年の歲月を費して全部二十卷の撰述を完了した。時に天正三年(稙通六十九歲)七月七日。稙通が、はじめて公條の講義を聞いたのは何時であるか明かでないが、大永三年閏三月から五年六月まで、公條が禁裡と伏見宮家と兩所で、「源氏」の講義をしたことは「實隆公記」に見えてゐるから、恐らくこの時、稙通は十八九歲の若年で、講義を聞いたものと想像される。【卷册數】卷册數ははつきりきまつてゐない。漢文の跋の中には、二十卷と記してゐるが、現存諸本には卷數の明記なく、「群書一覽」には二十一卷とあり、「國朝書目」には五十四卷とある。現存諸本は或は二十册(宮内省圖書寮藏本)、或は五十四册(内閣文庫藏本)、或は十五册(神宮文庫藏本)、或は十册(東京帝國大學國語研究室藏本)等に分けてゐる。【諸本】「湖月抄」に「但愚本轉寫のあやまり不レ少して不審の事ども多し、よりて其御說を用ゐるもの十に三四にたらず。可レ惜乎」とあり、東京帝國大學國語學研究室藏本(寶永三・四年の書寫)の奥に「源氏物語諸鈔ノ中、孟津鈔ハ稀ニシテ見ル人少シ」とあつて、古來所傳の少い本であつたらしい。現存する諸本は、大別して二種となし得るかと思はれる。第一は草稿本の系統で、第二は淸書本の系統である。第一類の本は、九條家舊藏の零本で、古註を引用する際に、河・花・弄等の略號を附し(第二類の本にはおほむねこれを示さず)、「細流抄」の說及び自說を頭部又は行間に增補記入し、朱點を加へたもので、奥に「右一册之内爲御意書入處々付紙大小九枚御講尺之聞書御了簡大事之口切祕說之淸濁未書加。又此抄之内誤等未有御改悉皆有口授云々。後之諸卷皆如此」とある。内容には諸本に比して多少の異同があるが、文字は正確で、流布本の誤寫を正すことが出來る。卷頭一葉に、「光源氏物語は寬弘のはじめに云々」の序文があり、次の丁に「右九條殿の御筆也」とあるから、著者の序文は、もと草稿本に附せられたのかも知れない。第二類の本では、宮内省圖書寮藏の古寫本が最も古く、第一册の奥に、「此抄九條禪閤御聞書也、以御自筆書寫之校合矣、御本從桐壺至夕顔紙數百十七丁爲一册被聞之者也。天正廿壬辰十二月二日」とあり、天正二十年十二月から文祿二年九月に至る約十ケ月の間に、稙通の許可を得てその自筆の原本(淸書本なるべし)を書寫したものである。この本は、原本を忠實に轉寫したものであるにかゝはらず、卷頭の自叙と卷尾の自跋がない。或は淸書本にはこれ等がなかつたのかも知れない。本文はこれを二十册に分け、書寫は他本に比して精確で、前記舊九條家藏本と共に、貴重なる傳本である。次に内閣文庫所藏の本及び神宮文庫所藏の本は、序文及び跋文を有し、内容は圖書寮本とほぼ同一であるが、書寫の誤が少くない。東京帝國大學國語研究室藏の本は、卷末に長い奥書があつて、書寫の事情ならびに態度について詳記してあるが、これによると、この本は寶永三年七月から同四年三月までの間に、古寫本によつて書寫されたもので、誤寫の部分は比較的訂正されてゐる。

【解說】本書は、著者が稱名院(公條)に再問をきはめ、三光院(實澄)に穿鑿し(甍恩記)、「河海抄」「花鳥餘情」「宗祇註」「弄花抄」等を參考し、不足の所に自說を加へた(湖月抄)ものである。先づ卷頭に前記の自叙があり、物語の時代、人物の準據說、物語の證本等に關し、「河海抄」の說をあげ、物語の卷名の由來に關して「花鳥餘情」の說を紹介し、「毛詩正義」の名篇の例を示して、これは三條亞相(實澄卿)の語る所、愚意に同じと註記してゐる。註の書き方は、舊註の形式と殆ど同一で、「河」「花」「弄」の諸抄の說をそのまゝ抄記してゐるところが少くない。現存の諸本には、この舊註引抄の部分に原本の略號が附してないから、著者の自說と舊說との區別が不分明である。また草稿本には、所々「細流同之」と註記したところもあり、「細云」とて、頭又は傍に「細流抄」を抄出してゐる所もあり、また「祇」と略號を附して宗祇の說をあげてゐるところも多い。本書は舊註を集成し、批判したものとして「細流抄」(別項)についであらはれ、「源氏物語」研究史上注目すべき著述であるが、後世に與へた影響は比較的少く、傳本も稀れで、誤脫の少くないのは、まことに遺憾である。

【末書】孟津抄執要一卷(寫。阿波文庫藏)。これは「孟津抄」中より、寬延四年春、抄出したものである。

【參考】國文學研究史　野村八良　【池田】

もえくひ

假名草子　一卷　【作者】不詳　【刊行】延寶五年　【諸本】江戸時代文藝資料第四所收。【解說】「たきつけ」「けしすみ」(各別項)と共に三部作とも稱すべきものである。「たきつけ草」を綴つてから四年を過ぎた或る五月雨の晴れ間なきころ、若人の問に答へて「たきつけ草」の筆者が稚の道を語る體に擬し從をこれに當ててゐる。大槪說といづれが正しいか不明である。

【梗概】德川將軍の後見櫻川侍從の臣に、伊丹右京といふ十六歲の美少年があつた。その同輩に舟川采女といふ十八歲のこれも美しい少年であつたが、いつか右京に思をかけて戀の病になつた。この采女と淺からぬ仲であつた志賀左馬之助がそれと察して、自ら退いて寬

初め吟波　【生歿】明治三十年四月十四日、東京市向島小梅町に生る。大正十二年九月一日大震災で隅田河畔に焚死した。向島三圍社境内に句碑がある。【閱歷】幼少の頃、病のため不具者となり、纔に膝行に堪へるのみであつた。假名文字をいろは歌留多によつて學び、俳句を知るに及んで漸く文章に熟し、能く論文・美文を草するに至つた。俳句は、初め長谷

和與

額安寺領備前國金岡東庄内地頭麻子道性分領事
右、准惣領地頭藤肥前左衞門入道覺知和與之旨、
五分貳參令分別、下地以貳分爲領家方、一圓可令
進止之、以參分爲地頭方、一圓可令進止之、將又
於道性分領有分漏之地者、爲領家分可令管領之也、
且守此狀之趣、且任分文之旨、兩方申賜御下知、
互以不可異議、若有令違約事者、可申行罪科、仍
和與之狀如件、

元亨三年二月五日　　地頭代紀政綱(花押)
　　預所藤原義幸(花押)

(裏書)

爲後證、奉行人所封裏候也、

元亨四年八月七日　　左衞門尉利行(花押)
　　左兵衞尉貞雄(花押)

孟津抄(まうしんせう)　註釋書　二十卷　【著者】

と伏見宮家と兩所で、「源氏」の講義をしたことは「實隆公記」に見えてゐるから、恐らくこの時、稙通は十八九歳の若年で、講義を聞いたものと想像される。【卷册數】卷册數ははつきりきまつてゐない。漢文の跋の中には、二十卷と記してゐるが、現存諸本には卷數の明記なく、「群書一覽」には二十一卷とあり、「國朝書目」には五十四卷とある。現存諸本は或は二十册(宮内省圖書寮藏本)、或は五十四册(内閣文庫藏本)、或は十五册(神宮文庫藏本)、或は十册(東京帝國大學國語研究室藏本)等に分けてゐる。【諸本】「湖月抄」に「但愚本轉寫のあやまり不レ少して不審の事ども多し、よりて其御說を用ゐるもの十に三四にたらず。可レ惜乎」とあり、東京帝國大學國語學研究室藏本(寶永二類の本では、宮内省圖書寮藏の古寫本が最も古く、第一册の奥に、「此抄九條禪閤御聞書也、以御自筆書寫之校合矣、御本從桐壺至夕顏紙數百十七丁爲一册被聞之者也。天正廿壬辰十二月二日」とあり、天正二十年十二月から文祿二年九月に至る約十ケ月の間に、稙通の許可を得てその自筆の原本(清書本なるべし)を書寫したものである。この本は、原本を忠實に轉寫したものであるにかゝはらず、卷頭の自叙と卷尾の自跋がない。或は清書本にはこれ等がなかつたのかも知れない。本文はこれを二十册に分け、書寫は他本に比して精確で、前記舊九條家藏本と共に、貴重なる傳本である。次に内閣文庫所藏の本及び神宮文庫所藏の本は、序文及び跋文を有し、内容は圖

【參考】國文學研究史　野村八良　【池田】

もえくひ　假名草子　一卷【作者】不詳　【刊行】延寶五年　【諸本】江戸時代文藝資料第四所收。【解說】「たきつけ」「けしすみ」(各別項)と共に三部作とも稱すべきものである。「たきつけ草」を綴つてから四年を過ぎた或る五月雨の晴れ間なきころ、若人の問に答へて「たきつけ草」の筆者が粹の道を語る體に擬したもので、人情の機微に對する深い理解と典雅な表現とは、作者の才分の凡ならざるを示してゐる。　【小泉】

默阿彌(もくあみ)　「古河默阿彌」を見よ。

藻屑物語(もくづものがたり)　物語　一卷【作者】不詳【成立】大槻如電に依れば、櫻川侍從は會津氏で、寛永十一年四位の侍從に任じ、慶安四年德川三代の公方かくれ給ひ、御世嗣幼ければ、叔父君として政務の事に與(あづか)つた。故に慶安以後の作であることは明かであり、又「男色大鑑」(別項)にこの物語が採られてゐるから貞享以前である。又序に天明五年沾洋が記す所では、「此寺往古は今の淺草御藏の邊にありし頃此册の趣意ありしとぞ。其の頃より傳りし由にて此物語を見るに星霜遙に歷しと見え悉く虫喰み見るに煩しく」とある。平出氏は「近古小說解題」で餘り古くはないと云つてゐる。【諸本】明治二十八年慶養寺より出版したものがある。【題材】實記と見えて、「紫一本」「江戸砂子」「武江年表」等に見えてゐる。慶養寺から出版した本には、日牌回向簿に「花章院劍功利空居士伊丹右京行年十六才斷證院智光靈劍居士舟川采女行年十八才」とあると云ひ、又數慶の移轉により墓が解らない事を記してゐる。平出氏は寛永十七年四月上浣將軍御成は堀田正盛の別邸だけである事から、櫻川侍從をこれに當ててゐる。大槻說といづれが正しいか不明である。

【梗概】德川將軍の後見櫻川侍從の臣に、伊丹右京といふ十六歳の美少年があつた。その同輩に舟川采女といふ十八歳のこれも美しい少年であつたが、いつか右京に思をかけて戀の病になつた。この采女と淺からぬ仲であつた志賀左馬之助がそれと察して、自ら媒して寛永十七年四月上旬、將軍御成の日に二人は深く契つた。然るに新參で細野主膳と云ふ武骨者があつて橫暴の振舞が多かつたので、皆に嫌はれてゐた。この者も右京を戀して語らひ寄つたが、はねつけられたので、茶道の節木松齋に賴む。松齋は右京の斷る氣色から他に契る人がある事を察し、かくと告げる。主膳は怒つて右京を討ち果さうと企てる。これを知つた右京は、四月十七日遂に主膳を邸内に斬り、御預となる。主膳の父は小笠原家の細野民部と云ふ者で、子の討たれたのを悲しみ、且つ櫻川家の片手落な仕方を怒つて、侍從の家に斬り込まうとする。こゝに已むを得ず右京は淺草慶養寺で切腹する事に定まる。采女は品川の母の許にあつてこれを知らず、左馬之助の使によつて仔細を知り、母には主君の供して明朝日光山に參る事になつたと僞り、夜品川を出て淺草に到り、明けるのを待つてゐた。かくて左右の人々の止めるのをきかず二人は並んで切腹した。契つてから僅かに旬日を出でぬ出來事である。家中皆感動した中に、左馬之助はおめ〳〵として生きてゐた爲め、非難されて居たゝまらず逃げ出さうとした所を捕へられて斬られた。後、松齋も事露はれて斬罪に處せられた。　【小木】

木歩(もくぼ)　俳人　【姓名】富田一　【雅號】初め吟波　【生歿】明治三十年四月十四日、東京市向島小梅町に生る。大正十二年九月一日大震災で隅田河畔に焚死した。向島三圍社境内に句碑がある。【閱歷】幼少の頃、病のため不具者となり、纔に膝行に堪へるのみであつた。假名文字をいろは歌留多によつて學び、俳句を知るに及んで漸く文章に熟し、能く論文・美文を草するに至つた。俳句は、初め長谷川零餘子・原石鼎等に學んだが、「石楠」(別項)創刊以前から亞浪に師事して晩年に及んだ。【作風】木歩と改めた大正六年頃から句作に一進展を示し、境涯の作家と謳はれるに至つたが、肺を病むと共にその作が時として境涯に淫する嫌があつたが、句々の深刻にして凄慘なる、他に幾んど比すべき者がなかつた。それが更に自然愛に目覺めて境涯を樂しむやうになつて、其處に自ら本然の姿が現はれて全く一家の作風を成すに至つた。「夢に見れば死もなつかしや冬木風」「わが肩に蜘蛛の糸張る秋の暮」などに據つても、その一端が窺はれよう。　【臼田】

目錄(もくろく)　書誌學　【解說】目錄とは見易きやうに名目を並錄したる書付を云ふ。昔の記錄文書等にはまた目六とも見えてゐる。古來目錄と稱せられるものには色々の種類があり、例へば(一)書名・品目等を列記したもの、(二)書中の題目を揭出したもの、(三)進物などの品目を列記したもの、(四)所領の石高等を列擧したもの、(五)藝術の相傳免許の項目を列記したものなど、その主なものである。(一)の中、書名を輯錄したものは書籍目錄(別項)で、清原業忠の「本朝書籍目錄」(日本書籍總目錄とも云ふ)は古來最も著名である。名高い尾崎雅嘉の「群書一覽」(別項)も國書の解題書ではあるが、また一種の書籍目錄とも見られるであらう。なほこの類には書目ばかりでなく、諸種の品目を擧げたカタログ(Catalogue)を初め、プログラム(Program)や、メニュー(Menu)等までもはひつてゐる。(二)は見出し或は目次とも云ひ、普通書物の卷首に揭げられてある。以上の二種は一般に知られてゐるものであるから、これ以上詳說する迄もないであらう。(三)目錄のことは「字津保物語」に、「おとど家の券奉りたる、もくろくそへて奉り給ふ」と見えてゐるのがそれであるが、かかる場合に用ひられた書付には、目錄の外に註文と折紙とがあつた。何れも品目を列記したものであるが、大體に於て、目錄は太刀・馬を書いたもの、註文は美物即ち鳥・魚・樽(酒のこと)などを一つ書きに書いたもの、折紙は用脚(錢のこと)を書いたものとの區別がある。併し實際に於ては、必ずしも品目等の嚴重なる區別はなかつたやうである。註文・折紙は姑く措き、目錄に就いて記せば、これは伊勢・小笠原・大館・曾我等、禮式家の流儀に依つて多少の異同はあるが、今その主なものだけを擧げて置くこととする。普通の進物目錄(進上目錄)は太刀・馬の外に若し幾つかの進物があるならば、端に太刀を書き、奥に馬を書き、その他の品目は多くは中間に書く。太刀目錄は太刀・馬を主として書くもの、樽目錄は美物の目錄で、最初に鳥、次に魚、最後に樽(樽ことも書く)を書くのである。この樽と云ふのは酒のことで、柳酒ならば柳と書き、天野酒ならば天野と書く。俗に家内喜多留など書くのは柳樽の緣起を擔いだものである。何れも端に進上と書けば、奥に差出書を書くのが通例であるが、宛書は何時も書かぬのである。而して

い。現存の諸本には、この舊註引抄の部分に原本の略號が附してないから、著者の自說と舊說との區別が不分明である。また草稿本には、所々「細流同之」と註記したところもあり、「細云」とて、頭又は傍に「細流抄」を抄出してゐる所もあり、また「祇」と略號を附して宗祇の說をあげてゐるところも多い。本書は舊註を集成し、批判したものとして「細流抄」(別項)についであらはれ、「源氏物語」研究史上注目すべき著述であるが、後世に與へた影響は比較的少く、傳本も稀れで、誤脫の少くないのは、まことに遺憾である。

【末書】孟津抄執要一卷(寫。阿波文庫藏)。これは「孟津抄」中より、寛延四年春、抄出したものである。

料紙は檀紙・引合・奉書・杉原など、その人に依り色々であるが、普通横に半折した折紙を用ひ、時に竪文のこともある。左に進上目錄の數例を示す。

御太刀　一腰
御馬　一疋
以上

(折目)

進上
御太刀
御弓 幷征矢千筋　一張 重籐
御鎧　一領 白絲 同毛甲
御馬　一疋 栗毛 雀目結 置御鞍
青銅　五千疋
以上
吉見宮內大輔
長盛

この最後のものは、女に遣す樽目錄である。なほ婚姻の時の結納目錄は、舅・姑・緣女等への分、それぞれ品目等の區別があるが、今、幕末の頃一般武家の間に行はれた結納目錄の例だけを擧げて置くこととする。

しん上
白てう
たい
たら
ふな
御たる
已上
みやうし官途
名乘

鹽鯛　一かけ
壽留女　貳れん
こん婦　貳れん
帶代　金何百疋
家內喜多留　壹荷
以上
何氏　誰

おひ代　金何百ひき
以上
何之　誰

右の進上目錄の類に、寄進目錄と云ふのもある。例へば、

奉獻上
八幡宮
雄劒　一振
御鎧　一領
御馬　一疋
以上

次に所領充行の場合にその石高などを記した領知目錄(知行目錄とも)は、所領の新知・安堵等の證狀として上より出す領知判物、或は領知朱黑印狀に並んで出されるものである。形は竪文もあり、また帳簿のこともある。幕府・諸侯共にこれあり、樣式も大體同樣である。

江州蒲生郡之內御知行所之事
一高五百六拾九石七斗三升ハ　西こぼし塚村
一高三百卅三石八升ハ　東こぼし塚村
一高百八拾四石六斗四升ハ　金屋村
一高四百卅貳石五升ハ　へひみそ村
一高四百四拾八石ハ　友定村
一高五百卅七石九斗九升ハ　內野村
一高貳百九拾石九斗四升ハ　中野村
一高九拾六石壹斗九升ハ　小今在家村
一高貳百拾三石六斗ハ　今在家村
一高貳百壹石五斗四升ハ　今堀村之內
一高千六百九拾貳石貳斗ハ　上羽田村
高合五千石者
右、可被成御所務候、御朱印者、重而申請、可進候、以上
慶長六年
丑　三月五日
大久保十兵衞
長安(花押)
加藤喜左衞門
正次
彥坂小刑部
元正(花押)
伊達殿御知行所
片倉小十郎殿

次に藝術相傳免許の場合の免許目錄は、武藝百般を始め、茶道・華道・琴曲その他諸道に於て、その道の造詣の淺深に從ひ、師匠より弟子に對して祕傳を爲す場合に、證據として授くるものである。印可・切紙と云ふも同じやうな類である。現今では初步を初段、次を目錄、次をゆるし、又免許、或は傳授、最後を皆傳即ち奧ゆるしなどと云つてゐる。以上の外、目錄と名付けられたものに、檢非違使の評定目錄や武家の奏事目錄など色々あるが、今總て省略に從ふこととする。〔伊木〕

文字 もじ

【名稱】〔英〕writing.〔獨〕die Schrift.〔佛〕l'écriture.【解說】通例、文字と稱するものは、線や點の約束的組合せであつて言語音聲を代表し、これによつて言語の意義を眼に訴へ示すものである。この意味で符號と區別する。符號とは句讀點、數學・化學の符號等の如きものをいひ、線や點の約束的組合せであるといふことは、文字と同じであるが、直接に意義を代表する點で違ふ。漢字の如きは音聲を表はすものであるが、その音聲が表はす一定の意義までも字形に結び附いてゐる。例へば「加」といふ字形は、kaの音を表はすと共に「加へる」といふ意義をも表はす。同じka音でも「蚊」の如き別の意義の語には、「加」の字を使はない。假名の「か」「カ」は、いかなる意義でもka音ならば皆この字を使ふことが出來る。この點で漢字は符號の性質を帶びてゐるが、例へば「十」は「加へる」の意義のみを表はし、kaの音は表はさないから、純粹の符號であつてこの點で漢字「加」と異なる。

【文字の本質及び要素】文字には、(一)視覺的要素、(二)音聲代表の習慣、この二つの方面がある(盲人の點字は、觸覺に訴へるものであるが、音聲を代表するものであるから、こゝに視覺的文字に準じて考へる)。視覺的要素には多く(イ)字形、線や點の組合せ、(ロ)大きさ、(ハ)位置の三箇條が社會的慣習として定まつてゐる。字形の慣習よりして一箇の文字(文字の單位)が定まる。一箇の文字は二箇以上の部分の合成によるものもある。例、漢字の偏旁(へんつくり)等、假名のﾄｷ ﾄﾓ、ドイツ文字のß、梵字のक्त(kt)=क(k)+त(t)。また實地に書く場合の運筆の順序の慣習的に定まつてゐることがある。大きさは二箇以上の文字を連結する時の比較的大小の區別が慣習となつたもの。例、ローマ字の頭字Sと小字s、又は數字の「二」と片假名の「ニ」等。文字の位置も二箇以上連結する時の事實であつて縱書と橫書とあり、更に縱書には各行を排列する時、右から左へ進むもの(日本・支那等)と左から右へ進むもの(蒙古文字等)とあり、橫書には左から右へ進むもの(英・獨・佛等)と右から左へ進むもの(ヘブライ文字及び日本の文字を橫書する場合)と各行交互に、左より右よりと一々變へるもの(所謂 boustrophedon 耕作形、例、古代ギリシャ文字)がある。又文字の位置により、例へば、英語'This is my house'の如く、一つの「單語」の文字を密接させ、他の單語との間に隙を置くものと然らざるもの(日本文字)とある。又連結の際、單に各文字を幷列するもの(ローマ字・漢字・假名の活字體)と線を連續させるもの(ローマ字、筆記體、漢字・平假名の草書體・筆記體等)の區別もある。

次に音聲代表の慣習を考へるに、代表とは文字表象が音聲表象と連合する事實をいふ。音聲表象は音聲が意義を表はすために、慣習的に定まつた抽象的性質を帶びてゐる。各國語

たい
たら
ふな
御たる
已上
みやうし官途
名乘

結納目錄は、舅・姑・緣女等への分、それぞれ品目等の區別があるが、今、幕末の頃一般武家の間に行はれた結納目錄の例だけを擧げて置くこととする。

鹽鯛　一かけ
壽留女　貳れん
こん婦　貳れん
帶代　金何百疋
家内喜多留　壹荷
以上
何氏　誰

おひ代　金何百ひき
以上
何之　誰

一高貳百九拾石九斗四升ハ　中野村
一高九拾六石壹斗九升ハ　小今在家村
一高貳百拾三石六斗ハ　今在家村
一高貳百壹石五斗四升ハ　今堀村之内
一高千六百九拾貳石貳斗ハ　上羽田村
高合五千石者
右、可被成御所務候、御朱印者、重而申請、可進候、以上
慶長六年　大久保十兵衞
丑　三月五日　長安（花押）
加藤喜左衞門
正次
彥坂小刑部
元正（花押）
伊達殿御知行所
片倉小十郎殿

が、直接に意義を代表する點で違ふ。漢字の如きは音聲を表はすものであるが、その音聲が表はす一定の意義までも字形に結び附いてゐる。例へば「加」といふ字形は、kaの音を表はすと共に「加へる」といふ意義をも表はす。同じka音でも「蚊」の如き別の意義の語には、「加」の字を使はない。假名の「か」「カ」は、いかなる意義でもka音ならば皆この字を使ふことが出來る。この點で漢字は符號の性質を帶びてゐるが、例へば「十」は「加へる」の意義のみを表はし、kaの音は表はさないから、純粹の符號であつてこの點で漢字「加」と異なる。

【文字の本質及び要素】文字には、（一）視覺的要素、（二）音聲代表の習慣、この二つの方面がある（盲人の點字は、觸覺に訴へるものであ

（ヘブライ文字及び日本の文字を横書する場合）と各行交互に、左より右よりと一々變へるもの（所謂 boustrophecon 耕作形、例、古代ギリシャ文字）がある。又文字の位置により、例へば、英語 This is my house の如く、一つの「單語」の文字を密接させ、他の單語との間に隙を置くものと然らざるもの（日本文字）とある。又連結の際、單に各文字を并列するもの（ローマ字・漢字・假名の活字體）と線を連續させるもの（ローマ字、筆記體、漢字・平假名の草書體・筆記體等）の區別もある。

次に音聲代表の習慣を考へるに、代表とは文字表象が音聲表象と連合する事實をいふ。音聲表象は音聲が意義を表はすために、慣習的に定まつた抽象的性質を帶びてゐる。各國語の文字慣習を調査するに、音聲の表意的慣習と文字の視覺的慣習との比較が重要な問題となる。我が假名にng音を表はす字形がないこと、英語の record の如くアクセントを表はす形のないことのやうな不足性、又一字多音、多音一字の如き不規則性の發見せられる例が多い。その不規則性は言語の歷史上、音聲の變化に伴つて字形の慣習が變化しないため、或は外國の文字を採用する結果、外國の慣習と違ふものを表はすために生ずる。又音聲としては區別あるものも文字として區別しないこと、例へば m n ng 等の音を同じ「ン」字で表はし、「一杯」「一斗」「一箇」「一册」「一尺」の如く、所謂促音は異なる音であるが、これを同一文字で表はすのも不規則性の一種である。又視覺的形態としては別々のものであるが、同一音聲を代表するがため「同じ文字」と認められる例もある。例、「と」「ど」「ゞ」「ト」等。文字が實地に發音された具體的音聲の要素全部を代表し得ないことは言ふまでもない。視覺的形態が音聲又は意義を代表する習慣により、表意文字・單語文字・音節文字・單音文字等の名で呼ばれる區別が生ずる。表意文字はエジプトの象形文字、支那古代の象形文字等の如きをいふ。併しこれは、形態が直接に意義を表はし、音聲とは直接に結び附いてゐない點に於て符號の類に屬する。但し從來はこれを「象形文字」と稱して來た。單語文字は漢字の如く或る一定の意義を伴つた音聲を表はすものをいふ。音節文字は母音子音の連結した音節（時には母音だけの音節）を表はす。假名・諺文・漢字を音字として使つた場合（例、亞米利加）等の如きをいふ。單音文字は西洋の a b c 等の如く、一つの母音、子音を別々に表はす。勿論一つの母音・子音とは、常識的にいふのである。音聲學上嚴格に考へれば、一つの單音とは何であるかといふことは甚だ困難な問題となる。音節文字と單音文字とを總稱して表音文字といふことがある。（音聲學で使ふ音聲符號のことは同項參照）

【文字の具體性】上に記したのは、すべて文字の抽象的方面（心理的に言へば文字表象の方面）である。これと區別したる文字の具體性も重要な事實である。具體文字は必ず或る物質として存在する。紙・布・皮・木板・金屬・岩石・泥板（瓦・煉瓦）等。これに他の繪具・墨・インキの類を塗るか、物質を彫刻するかして文字形態を作る。特殊な場合には光をも用ひ、又手旗信號の如く運動によつて字形を示す。これを造る器具として、毛筆・羽毛（鵞ペン）・金屬ペン、尖つた棒・刀等があり、方法としては手を以て一々書き記すこと、器械を以て印刷することがある。又文字は、（一）これを書く人とその書く作用（發表）、（二）讀む人と讀む作用（解釋）との二面がある。（一）の方は人の心にある思想・感情を發表するのが目的で、先づ言語表象を回想し、その中に含まれたる音聲表象及びこれに連合する文字表象に基づいて、手の筋肉を有意的に動かし具體文字を作る。（二）の方は先づ具體文字の視覺的形態を知覺し、これに連合する音聲表象を想起し、更に音聲表象に連合する意義表象を想起して解釋に達する。この途中に於て音聲表象を想起した時、これに基づいて音聲器官を動かして發音することを通例、音讀（又は朗讀）と稱する。また書記作用の際は、或る思想・感情を發表するため、音聲言語を單に想起し、これに伴ふ文字を書く場合と、他人が實地に使つた音聲言語を聽きつつ、これを文字によつて「筆記」する場合とある。何れも思想の動きが速いため、及び音聲の發せられるのが速いため、書記運動の速度といふことが問題になる。所謂速記文字は前記後者（音聲言語を筆記）のため案出されたものである。書記作用と讀字作用と共に屢々繰返すことによつて熟練を生じ、書記に於ては思想・感情の起ると共に、「直ちに」手が動いて文字を書き、讀字に於ては具體文字が目に映ずれば「直ちに」意義が浮び、中間の段階は意識の中心から遠ざかる。隨つて連合の習慣に多少の變化を生じ、例へば英語の單語の如く、若干字母の連結した一單語が一塊の形態となつて、この視覺的形態に意義連合が行はれる。漢字の如きも然り。かくなれば結果に於て文字は符號と同性質に歸する。更に文字形態の具體性は文字の藝術性の問題と接觸する。書記運動の熟練より巧みな字、美しい字といふ評價を生じ、巧拙に拘らず、その文字はその人の性格までも現はすといはれる。巧みなる美なる文字を書くに習熟した人は、その人の人格と相俟つて能書家と稱せられ、延いては書道（別項）と名づくる藝術の一部門を作る。

【記述的研究】世界の各國語各方言に就き、及びその各時代につき、別々に前記の「文字の本質と要素」とに擧げた各事項に關する慣習を記述する。かくして得るものは、世界の文字誌（die Schriftkunde）である。

【史的研究】世界各國語各方言に於ける文字慣習の歷史的變遷を明かにする。（イ）文字の起原。今迄なかつたところへ新たに文字の發生する事。今日迄の研究では、エジプト、バビロニア、支那、メキシコ等世界の文字の起原は少數に局限されてゐる。（ロ）輸入採用。上記少數の起原以外、世界の文字は他國に既に行はれてゐる慣習を輸入採用したものである。この場合今まで全く文字のなかつた所へ新たに輸入する（日本古代の漢字）と、既に有る所へ更に加はる（近代日本のローマ字、古代英國に於けるルーン文字 Runes とローマ字）と二種に分れる。また他國の慣習を無變化のまゝ採用するものと、多少の變化修正の加はるものとある。但し文字の輸入採用は、殆ど總て視覺的形態（字形）の採用を意味する。音聲言語の慣習が各國語各方言によつて異なる以上、文字の音聲代表性は、他國の慣習を無變化のまゝ採用することが殆ど出來ない（無變化採用は稀に或る二三の單音・連音が二國間に一致してゐる時に限る）。（ハ）文字の消失。今迄有つた慣習が全く行はれなくなる場合をいふ。例へば中世英語以後に於けるルーン文字の廢せられた如き即ちこれである。以上歷史的研究の結果、世界文字（主として形態）の系統を知ることが出來る。從來文字の研究と稱する著書の多くは（Taylor Alphabet の如き）、形態の歷史的系統的敍述に止まつてゐる。前記「文字の本質及び要素」の條に擧げた各項目に亙る研究は、なほ將來に殘されてゐる。

【附説】視覺的表出について。（一）無意的表出。例、血管の伸縮（赤面・蒼顏）、胸の鼓動、呼吸の遲速、顏面筋肉の表情、手足の運動、戰慄、腰が拔ける、氣絕する。（二）有意的行動。（甲）意味の發表を目的としないもの。例、日常行住坐臥。以上は他人から觀察して當人の心を推測し得るものである（「表出運動」參照）。（乙）意味の發表を目的とするもの。（イ）身體を使ふもの。身振・手眞似（附、象徵的に意味を伴ふもの、舞踊等）。（ロ）他の物體を使ふもの。

信號・看板(色・光・形・運動等)。附、象徵的に意味を伴ふもの。徽章・服制・紋章・宗教又は信仰上の十字架、鳥居・お札・お守り・トーテム等。(八)所謂符號の類。句讀點、數學・物理學・化學・天文學・動植物學・音樂等の數字符號記號、圖解・挿畫、音聲學用の音聲符號(別項)、暗號符牒、繪曆の類。

【參考】J. Taylor: *Alphabet.* ‖ C. Faulmann: *Das Buch der Schrift.* 1880. ‖ H. Delitsch: *Geschichte der abendländischen Schreibschriftformen.* 1928. ‖ H. Jensen. *Geschichte der Schrift.* 1925. ‖ P. Kéraval: *Le langage écrit* 1927. 〔神保〕

綟手摺昔木偶　もぢてずりむかしにんぎやう　讀本　五册　【作者】柳亭種彥　【畫工】柳川重信　【名義】近松門左衞門の作意に據つたので、人形遣の姿を見せぬための、綟の衣で張つた手摺の名を用ひたと作者の題言に見える。【刊行】文化十年　【諸本】種彥傑作集(帝國文庫)・柳亭種彥集(近代日本文學大系)所收。

【梗概】出羽國月山の女仙赤魚(あかな)は、承安の頃姿を現はして東國武士の娘小櫻といふ者の將來とその娘の禍福を豫言したが、やがて小櫻は都に出て、源三位賴政の重臣渡邊競の妻六浦の方となつて一女を生み、治承四年平等院の戰に夫と共に戰死し、赤魚の豫言の通りになつた。時に六浦の方は娘千鳥を郎黨黑丸に託し、競の同族渡邊授の子染丸との婚約を遂げさせようとしたが、黑丸は平家方の千壽太郎の子水雄丸と名乘る少年に父の仇と狙はれ、後日を約し、遁れて相模六浦の海邊に漁夫となり、佐吾七・菖蒲の兄弟と稱して十餘年を經た。一方染丸も郎黨坂門部破門に伴はれて落ち、破門は與次衞門と改名、染丸を吉三と改め連子として鎌倉琵琶小路の豪商富度屋の後家吹雪の許に入聟し、後吉三に家を讓り、隱居して閑樂と稱した。然るに今は知る由もない吉三と菖蒲は、不圖逢うて戀仲となつたので、閑樂夫婦は菖蒲を兄と共に迎へて養女に、佐吾七を手代としたが、吉三は幼時の婚約を想つて菖蒲との結婚を拒んだ。爰に水雄丸は長じて水泡信夫之助と名乘り、鎌倉に來て仇討を志すうち、化粧坂の名妓薰に戀し、一夜これと契つたが、後、節を守つて隱棲し、遂に貧のために自殺した。薰は信夫之助の子信夫を生み、養育の傍ら亡き人の紙衣を形見とし、永く戀慕の心を斷たなかつた。然るに富度屋では菖蒲に懸想した吹雪の甥田子松が手代段八と語らひ、水苔といふ乞食女を謀に使つて佐吾七兄妹を追放した上、吉三を誘うて化粧坂に遊んだ。かくて吉三と薰は相知り、又信夫之助の靈はこの二人を結んで深い仲とした。吹雪は已むなく菖蒲を迎へ薰を妾としようと、薰を訪ねて事情を明かした。その夜菖蒲と佐吾七は吉三の歸途を擁して苦衷を述べたが容れられず、剩へ佐吾七は吹雪を段八と誤つて刺して了つた。吉三はこれがため勘當され、吹雪に身請けされてゐた薰と共に佗住ひの身となつたが、貧窮のため薰は信夫を連れ、大磯に二度の勤めをして吉三に貢いだ。その頃この薰改め於香の許へ通ひ續けた鬼惣太といふ客があつたが、一夜於香の手を藉りて自殺を企て、その佐吾七なるを明かした。折から吉三と菖蒲は駈けつけ、佐吾七の物語と證據の胡蝶の香筥に依つて、彼等が染丸・千鳥の許婚であつたことを知つた。時に吉三等の身を案じた閑樂は、無事にかくまつてゐた吹雪と共に來つて一切を明かし、更に再三佐吾七等を苦しめた水苔も來て、吉三の實母なりしことを告げた。かくて佐吾七の黑丸は信夫の刄に伏し、於香は尼となり、水苔は自害し、吉三・菖蒲の夫婦は信夫を養子とし、後、源賴朝の恩命に浴した。

【解說】題言に、目次を編笠の名寄で立てたとや、富度の吉三の人名等の典據を示してゐるのでも窺はれるやうに、「用捨箱」や「還魂紙料」の著者の好尙が、讀本の形式を取つて、その全體の筋立・手法となつたものである。特に近松の「淀鯉出世瀧德」(別項)に基いてゐるが、各處に彼の二三の作から藉りたものが見え、又既に西鶴の影響を受けた手法が、これにはよく練れて來てゐる。ものを偏して見る癖のある馬琴も、これを「をこのすさみ」に稱揚してゐる。

【參考】をこのすさみ(曲亭遺稿)○種彥傑作集解說○柳亭種彥集解說 〔笹野〕

捩り　もぢり　雜俳　【解說】古く享保の頃に流行した冠附の變態で、「字もぢり」と「氣もぢり」の二種がある。「字もぢり」とは中七の句に二つの義を持たせて上と下とに連結し、全く別の意義をなすやうにするもの、例へば

親に孝―するが(爲るが／駿河)第一―竹細工
馬のとし―は(齒／葉)で目利する―烟草の値
衣がへ―なつき(夏來／懷き)にけらし―飼鼠

「氣もぢり」とは、五七五の句の第一・二の句の連結と第二・三の句の接續とに由つて、二つの違つた意味の句を成すもの、例へば、

輕業師―あんどんへ立つ―木綿針
迷子の―見つけて嬉し―下手の鞠
下駄足駄―かた〳〵足に―やすむ鷺 〔西原〕

茂睡　もすゐ　國學者・歌人　【姓名】初め渡邊氏、後戸田。通稱は茂右衞門。名は馮、後、恭光と改む。茂睡は茂安とも書く。【號】露寒軒・梨本・隱家・不求橋・最忍法師・馮雲寺・遺佚軒等。【生歿】寬永六年五月十九日駿河府中に生れ、寶永三年(二三六六)四月十四日歿す。享年七十八。【墓所】江戸淺草高原町金龍寺。

渡邊信―茂―忠
大澤基宿―淸芳院
　├茂睡―覺伊右衞門
　　　　―某
　　　　―元周
　　　　―女子

【學統】山名玉山に、つゝ留の傳授を受けたことなど見えるが、その師承は明瞭でない。獨學で到つたとも見られる。【閱歷】茂睡は渡邊監物忠の子である。忠は戸田忠勝の次男で渡邊山城守茂の養子となり、駿河大納言忠長の附人に命ぜられ、大番頭となり、六千石を領した。忠長が幽囚せられた時、忠は大關家に預けられたが、長男の善は祖父茂の許にゐたので、二男重以下の子を伴ひ、下野國那須郡黑羽に蟄居した。茂睡は五歲であつたがこれに伴つた。黑羽で幼年時代から成年期まで過ごしたが、後、江戸に出て伯父戸田政次に養はれ、戸田姓に改めた。戸田家も代々德川家に仕へて功のあつた家である。慶安元年(二十歲)に實父、同三年に養父が相續いで歿した。茂睡は明曆元年(二十七歲)頃、本多侯に仕へ、萬治三年(三十二歲)妻お兵を娶る。寬文五年には三百石を賜はつて本鄕森川宿邸內に住し、早くも制禁の詞に對する非難の文章を書いてゐる。寬文十一年(四十四歲)頃、本多家の國政改革の際に致仕し、世を脫れて淺草金龍山の邊に住んだ。後、丸山本明寺谷にもゐた。妻お兵との仲に伊右衞門覺といふ子もあつたが早世したので、歎きの餘り天和二年高野山に

登つた。歸途住吉に詣で、又三月二十五日大磯の鴫立澤に行つて碑を建てた。元祿五年頃から多くの著述を發表したが、その間その奇行は江戸中の評判となつてゐた。歿したのは寶永三年であるから、元祿の先驅的學者の中では長命であつたと言へる。

【著作】戸田茂睡全集十八卷がある(國書刊行 … 多くの歌人の歌の撰集である)○茂睡眞跡三十首並七首(天保十四年安西雲烟刊)。【雜筆】武藏の國の名所(貞享三年成)○古今集三木三鳥大事(元祿十二年成)○名所不審相承歌(元祿十二年成)○末學初見集(元祿十六年成)○歌學密受抄(貞享四年)。

【人物】茂睡は武士の家に生れて、而も志を得 … 必ずしも世に隱れるためではなく、隱逸たることに於て世に知られようとする所が無いでもない。

【業績】茂睡は業績から言へば、多方面にわたつてゐる。が、その最も著しきは歌論家としての茂睡である。歌論家としては寬文の文詞や「百人一首雜談」「僻言調」「梨本集」に見られ … 一種の復古主義者のやうに見えるが、恐らく單なる復古主義者ではなかつたであらう。當時は堂上歌學が極端に狹義のものとなつて、和歌が抒情のものであるといふ本義が忘れられてゐたのである。この時弊を矯めるには、もう一度昔の姿に歸り、抒情詩の第一歩から踏み出さねばならぬと感じた。和歌に對する

文化十年【諸本】種彦傑作集(帝國文庫)・柳亭種彦集(近代日本文學大系)所收。

【梗概】出羽國月山の女仙赤魚(あかお)は、承安の頃委を現はして東國武士の娘小櫻といふ者の將來とその娘の禍福を豫言したが、やがて小櫻は都に出て、源三位賴政の重臣渡邊競の妻六浦の方となつて一女を生み、治承四年平等院の戰に夫と共に戰死し、赤魚の豫言の通りになつた。時に六浦の方は娘千鳥を郎黨黑丸に託し、競の同族渡邊授の子染丸との婚約を遂げさせようとしたが、黑丸は平家方の千壽太郎の子水雄丸と名乘る少年に父の仇と狙はれ、後日を約し、遁れて相模六浦の海邊に漁夫となり、佐吾七・菖蒲の兄弟と稱して十餘年を經た。一方染丸も郎黨坂門部破門に伴はれて落

雪は已むなく菖蒲を迎へ薫を妾としようと、薫を訪ねて事情を明かした。その夜菖蒲と佐吾七は吉三の歸途を擁して苦衷を述べたが容れられず、剩へ佐吾七は吹雪を段八と誤つて刺して了つた。吉三はこれがため勘當され、吹雪に身請けされてゐた薫と共に佗住ひの身となつたが、貧窮のため薫は信夫を連れ、大磯に二度の勤めをして吉三に貢いだ。その頃この薫改め於香の許へ通ひ續けた鬼物太といふ客があつたが、一夜於香の手を藉りて自殺を企て、その佐吾七なるを明かした。折から吉三と菖蒲は駈けつけ、佐吾七の物語と證據の胡蝶の香筥に依つて、彼等が染丸・千鳥の許婚であつたことを知つた。時に吉三等の身を案じた閑樂は、無事にかくまつてゐた吹雪と

振り(もぢり) 雜俳 【解說】古く享保の頃に流行した冠附の變態で、「字もぢり」と「氣もぢり」の二種がある。「字もぢり」とは中七の句に二つの義を持たせて上と下とに連結し、全く別の意義をなすやうにするもの、例へば

親に孝―するが(駿河)第一―竹細工
馬のさし―は(齒)で目利する―烟草の値
衣がへ―なつき(夏來)にけらし―飼鼠

「氣もぢり」とは、五七五の句の第一・二の句の連結と第二・三の句の接續とに由つて、二つの違つた意味の句を成すもの、例へば、

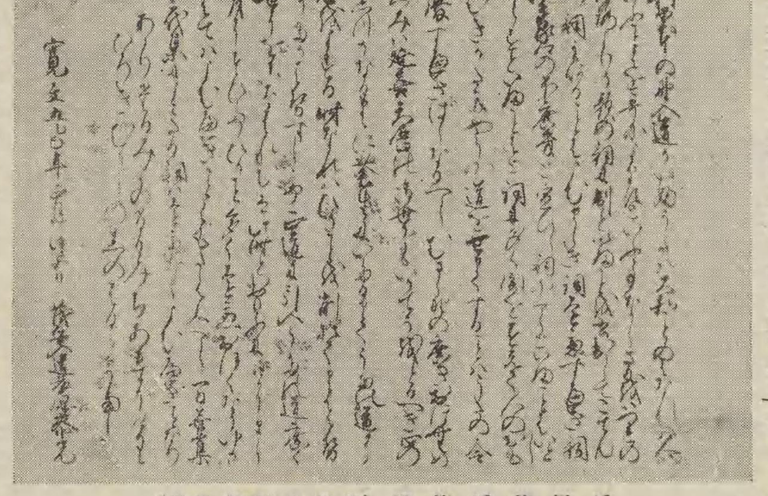
輕業師―あんどん へ立つ―木綿針
迷子の―見つけて嬉し―下手の鞠
下駄足駄―かた/\足に―やすむ鷺

茂睡(もすゐる) 國學者・歌人 【姓名】初め渡

もすい

登つた。歸途住吉に詣で、又三月二十五日大磯の鴫立澤に行つて碑を建てた。元祿五年頃から多くの著述を發表したが、その間その奇行は江戸中の評判となつてゐた。歿したのは寶永三年であるから、元祿の先驅的學者の中では長命であつたと言へる。

【著作】戸田茂睡全集十八卷がある(國書刊行會本一册)。【歌學書】百人一首雜談(元祿五年成。戸田茂睡全集所收。百人一首を註釋したもの)○僻言調(元祿十年五月。全集所收。中世歌學に對する非難の論で、種々の方面から論難を試みてゐる。初めに袖中抄流布本を擧げて難じ、第二に細川幽齋の聞書の僻言多きをいひ、第三に古今傳授を難じ、第四に玉代一覽等を引いて神佛の立場から歌をとくを難じ、次に歌合の判を擧げ、その他「秀歌大略」「色葉集」等を論じてゐる。全體必ずしも統一しないが、中世歌學破壞の鋭い論調が見える)○梨本集(元祿十三年刊)(別項)○萬葉集口傳大事寫一册(「萬葉集」に關する斷片的な語學說並びに訓法・語釋を記したものである)。【雜著】紫の一本二卷(全集所收。江戸名所記であつて、遺佚・陶々齋の二人が江戸巡りをしながら說明する態になつてゐる。天和以前に成り、以後屢々改補せられたものと言はれてゐる)○梨本書(元祿七年成る。全集所收。道話物語であつて、茂法師・醜法師・茂右衞門の三人が、互に神儒佛及び武士道を語り論ずる中に作者の人生觀が吐露せられてゐる)○御當代記(刊。全集所收。延寶八年五月から、元祿十五年四月に至る二十三年間の治世の記錄)。【歌集】不求橋梨本隱家勸進百首(元祿七年九月刊。全集所收。百首の歌を茂睡・直賢・暢春・了慶・信章・一水、その他から集めてある。追加として二十九首を添へてある。隱家百首ともいふ)○鳥の迹六卷(元祿十五年刊。全集所收。茂睡が撰したもので、その序跋がある。茂睡・山名玉山を初め、多くの歌人の歌の撰集である)○茂睡眞跡三十首並七首(天保十四年安西雲烟刊)。【雜筆】武藏の國の名所(貞享三年成)○古今集三木三鳥大事(元祿十二年成)○名所不審相承歌(元祿十二年成)○末學初見集(元祿十六年成)○歌學密受抄(貞享四年)。



【人物】茂睡は武士の家に生れて、而も志を得ず、世を脫れて隱者の境涯にあつた。彼の境遇から見ても、相當世に志を有しながら遂げられないために不平を抱いてゐたことが知れる。性格としては自負心の強い、周圍に順應してゆけないところに世を白眼視する所があつた。彼が堂上歌學を攻擊したのも、この性格の然らしめた所もあらう。彼の隱逸生活も必ずしも世に隱れるためではなく、隱逸たることに於て世に知られようとする所が無いでもない。

【業績】茂睡は業績から言へば、多方面にわたつてゐる。が、その最も著しきは歌論家としての茂睡である。歌論家としては寬文の文詞や「百人一首雜談」「僻言調」「梨本集」に見られる如く、中世以來の制禁の詞に對する破壞と古今傳授に對する破壞とがその主なるものである。制禁の詞は病の詞のやうな修辭學的缺陷があると認められた語よりは、ぬしのあるとされた語を制禁したのであつて、詞の自由といふ點から見て不都合であるとするのである。この見解は今日より見れば、平凡な見解であるが、制禁の詞のなほ重んじられた時代に、この言說を主張したところに意義があるのである。【以上久松】

【歌風】家集として纏まつたものを持たなかつた彼であるから、その歌を見ようとするには、先づ數多い著書や撰集に依らなければならない。元祿十五年に刊行された「鳥の迹」、同十六年刊行の「さざれ石」などを初めとし、その他では、「紫の一本」「隱家百首」「渚の松」「わか紫」などに散見してゐるが、その抱負を裏書するに足るものは、幾許もないやうである。「古にあらすきかへせ言の葉の道は狹くもなりにけるかな(山名玉山入道のもとにて道といふことを)」。これは歌道に對する心を詠んだものであることは一見明瞭である。この歌から推すと、茂睡は一種の復古主義者のやうに見えるが、恐らく單なる復古主義者ではなかつたであらう。當時は堂上歌學が極端に狹義のものとなつて、和歌が抒情のものであるといふ本義が忘れられてゐたのである。この時弊を矯めるには、もう一度昔の姿に歸り、抒情詩の第一步から踏み出さねばならぬと感じた。和歌に對する革新の意氣に燃えてゐたことは、その歌論と合せ見て興味の深いものがある。併し彼の歌の長所は、かういふ作よりも、隱逸を樂しむ方面に僞はらざる面目が表はれてゐる。「のがれかね世にふり果てし老の身は隱れすむべき山梨のもと(庵の前に山梨の木ありしかば)」、「み空ゆく光は更にかはらぬにいつの月日の老となしけむ(述懷の歌の中に)」、「人知れぬ身にまかすればおのづから求むともなきかくれ家にして(住む庵を世の人のかくれ家といふをきゝて)」などは、平凡で新しい所も見えぬが、何かしみじみした氣分が漂つてゐる。【以上窪田】

【史的地位】茂睡は、その絕對的價値に於てよりも、史的に注意される人物である。契沖のやうな純學究的と違つて、時代に生れ時代の中に生きた人物である。その歌論の痛烈な叫びも、また戲作者的な彼の方面も、時代の中に生きた彼の現はれと見るべきである。時代が過ぎる時、彼の姿はうすれ、彼の位置は低くなる。併し元祿時代は彼の如き先驅者の力によつて、潑剌たる力を備へてきたのである。その意味に於て彼の史的地位は大きいと言ふべきである。【以上久松】

【參考】茂睡考山東京山 ○戸田茂睡傳高田與清(松屋筆記)○戸田茂睡翁異傳安西於菟(近世名家書畫談)○戸田茂睡翁傳菅政友(菅政友全集)○歌學論叢佐佐木信綱○戸田茂睡論同上

物集高見（もずめたかみ）　國學者　【幼名】素太郎。後、善五郎【號】鶯谷・董園・埋書居士【生歿】弘化四年五月二十八日豐後國速見郡杵築北新町に生れ、昭和三年六月二十三日大分縣杵築町に歿す。享年八十二【墓所】大分縣杵築町字寺町【閲歷】高見は國學者物集高世の長男でその子に高量がある。少年の頃は鄕里に於て漢學及び國學を學んだ。慶應元年（十九歲）の頃には、長崎へ行つて蘭學を學んだ。同二年京都へ出で、有名な勤王家玉松操につき、爾後約三年間國學を學んだ。明治二年（二十三歲）東京へ上り、翌年平田鐵胤の門に入つて國學を學び、傍ら東條琴臺に漢學を學んだ。又翌四年には洋學をも學び、同八年には近藤眞琴に英語を學んだ。これより先、明治三年神祇官の宣教史生に任ぜられ、五年には教部省へ出仕した。同九年、教部省中錄に任ぜられ、同十二年には月形神社宮司兼出羽湯殿山神社宮司に任ぜられた。彼は教部省へ出仕してからも國學の研究を續けてゐたので、同九年には「本邦語源考」「事物名義考」等の論文を「學藝志林」に發表し、同十一年には國語の辭書「ことばのはやし」を脫稿し、「初學日本文典」を刊行した。同十六年、東京大學（帝大）から文學部准講師を命ぜられ、翌十七年には東京師範學校御用掛を申し付けられ、同十九年に東京大學文科大學教授に任ぜられた。爾來明治三十二年（五十三歲）まで十四年間、東京帝大教授の職にあつた。この間、文部省の編修局・記錄課等に勤務し、學習院教授を兼任した。帝大教授を辭する直前、三十二年三月、推薦に依つて文學博士の學位を授けられた。爾後「廣文庫」及び「群書索引」（各別項）の編纂に全力を注ぎ、これを完成した。大正十四年鄕里大分縣杵築町字寺町の自宅へ歸り、鄕里に起臥してゐた。

【著書】〔國語學書〕初學日本文典一册（明治十一年刊）○日本小文典一册（明治十六年十一月刊）○かなのしをり一册（明治十七年九月刊）○てにをは教科書一册（明治十八年三月刊）○かなづかひ教科書一册（明治十八年十二月刊）○言文一致一册（明治十九年刊）○「日本大辭書 ことばのはやし」一册（明治二十一年七月刊）○日本大辭林一册（明治二十七年六月刊）○詞の本末二册○新撰日本文典一册○新撰日本大文典五册○日本修辭通一册○字音假字遣教科書一册。〔其他〕道の莠一册（明治初年刊）○日本文明史略五册（明治十八年刊）○よのあと一册（明治十八年刊）○標注よつぎの歌一册（明治二十九年刊）○日本の人一册（明治三十二年刊）○修訂日本文明史一册（明治三十五年刊）○詠史抄一册（大正十一年刊）○勅語逢源一册（明治四十四年刊）○勅語逢源演義一册（同上）○國體新論一册（大正八年刊）○濟時危言一册（大正十一年刊）○源氏物語提要一册（大正十二年刊）○和歌抄一册（同上）○百人一首山彥抄一册（大正十四年刊）○忠孝譜一册（同上）○行脚奇蹟ものがたり一册（大正十一年刊）○怪奇物語（同上）○標註世繼千字文一册（寫）○假字日本史六册（寫）。〔編纂書〕廣文庫二十册（自大正五年十月至大正七年五月刊）（別項）○群書索引三册（大正五年十一月刊）（別項）○皇學叢書五册（昭和二年二月刊）○新撰國文中學讀本十册（明治三十年刊）。その他に多くの論文がある。

【業績】最も力を注いだのは「廣文庫」及び「群書索引」の編纂で、前後三十年を費したものである。この外、明治二十年前後に刊行した日本文法・假名遣・手爾波等に關するものは、その當時に於ては頗る行はれたものである。又その頃言文一致を主張したことは、注意すべきことである。

【參考】物集高見博士系圖年譜及著作目錄 覓五百里（國語と國文學五ノ一〇）〔龜田〕

物集高世（もずめたかよ）　國學者　【通稱】丈右衛門【號】葎生【生歿】文政六年豐後杵築に生る。明治十六年二月歿す。享年六十一。【閲歷】高世は杵築の商人の子であるが、早く學に志し、藩の儒臣元田百平について漢學を學び、又豐前企救郡の定村直好に神道及び歌學を學んだ。慶應四年豐前國宇佐學館へ招かれて神典の講義をなし、次いで杵築藩から命ぜられて神官教授方並に國學教授となつた。明治二年神祇官宣教使を拜命、翌年宣教權少博士になつた。これより先、功に依つて士族に列した。高世は初め赤貧洗ふが如くであつたが、何等意に介せず、刻苦勉學したのであつた。その最も力を注いだのは神道に關するものであり、次いでは歌學に關するものである。而して後者に於ては、特に「辭格」を研究した。所謂「辭格」とは、手爾波のとゝのへではなく、「何々にも」「何々をぞ」などいふ語の「に」が「も」にかゝり、「ぞ」が「を」を受けるのに一定の格があるを云ふ。その說は未だ整備したものではなく、不備誤謬もあるが、從來の手爾波の呼應の研究から一歩を進めたものであつて、注意すべき點が少くない。【著書】辭格考二卷○辭格考抄本二卷二册（安政五年刊）○歌學新論一卷○熟語彙一卷○口辭格考二卷○消息文梯一卷○說教話柄一卷○十七問題辨說一卷○教義之說一卷○宣教講本一卷○祈禱文章二卷○邪教拔萃一卷○神道本論五卷○說教本稿一卷○耶蘇叢書一卷○外教祕書一卷○神道餘論一卷○妖魅論一卷○葎屋家集一卷○葎家文集一卷。

【參考】日本教育史資料（卷五）〔龜田〕

餅酒（もちさけ）　能狂言　【格式】三番叟相傳濟の部（和泉流）【題材】百姓の年貢上納を題材としてゐるが、これに越前の圓餅、加賀の菊酒、いづれもめでたい物を取つてゐる。【梗概】越前の百姓は圓餅を、加賀の百姓は菊酒を御年貢とし、大晦日さかひに持參すべきを大雪のため遮られ、遲れながらも同道持參する。やがて兩人同じ御館に着き上納する。奏者は兩國の百姓に去年持參すべき御年貢を今年になつて持參したのは曲事に思召す。併し上堂はいつもお正月と祝つたのは、殊の外御機嫌である。處で上納物に添へ、去年今年を折り入れて歌を一首づつ仕れとの御意だと傳へ、二人は祝酒を戴き、各々苦心して歌を詠む。あまり酒の上で騷いだので又々歌を課せられるが、御褒美にやがて洛中舞下りを許されて舞納める。【構想】これは年貢上納を主とした百姓物で、「昆布」「柿」「三人百姓」「松楪」などと同じ型の狂言である。詠歌と盃事とでおめでた盡しであるだけ、筋は單純で喜劇的要素は乏しい。單に古歌のもぢりの如きに滑稽氣分が漂つてゐる。〔野村〕

望月（もちづき）　「仇討物の謠曲」を見よ。

餅と白石（もちとしろいし）　昔話　【解說】妖怪退治を說く民間說話の中に、一つの著名なる型は、白い丸石を火に燒いて餅と見せかけ、欺いて食はせた一條である。怪物は、山男・天狗又は鬼といふことになつてゐる。膽力のある者が山小屋に獨り住んでゐる處へ、每夜のやうに遣つて來て火にあたり、又餅を所望す

年には「本邦語源考」「事物名義考」等の論文を「學藝志林」に發表し、同十一年には國語の辭書「ことばのはやし」を脱稿し、「初學日本文典」を刊行した。同十六年、東京大學（帝大）から文學部准講師を命ぜられ、翌十七年には東京師範學校御用掛を申し付けられ、同十九年に東京大學文科大學教授に任ぜられた。爾來明治三十二年（五十三歳）まで十四年間、東京帝大教授の職にあつた。この間、文部省の編修局・記錄課等に勤務し、學習院教授を兼任した。帝大教授を辭する直前、三十二年三月、推薦に依つて文學博士の學位を授けられた。爾後「廣文庫」及び「群書索引」（各別項）の編纂に全力を注ぎ、これを完成した。大正十四年

十一年刊）○源氏物語提要一册（大正十二年刊）○和歌抄一册（同上）○百人一首山彦抄一册（大正十四年刊）○忠孝譜一册（同上）○（一行脚）らべ奇蹟ものがたり一册（大正十一年刊）○怪奇物語（同上）○註世繼千字文一册（寫）○假字日本史六册（寫）。〔編纂書〕廣文庫二十册（自大正五年十月至大正七年五月刊）（別項）○群書索引三册（大正五年十一月刊）（別項）○皇學叢書五册（昭和二年二月刊）○新撰國文中學讀本十册（明治三十年刊）。その他に多くの論文がある。

【業績】最も力を注いだのは「廣文庫」及び「群書索引」の編纂で、前後三十年を費したものである。この外、明治二十年前後に刊行した日本文法・假名遣・手爾波等に關するものは、そ

而して後者に於ては、特に「辭格」を研究した。所謂「辭格」とは、手爾波のとゝのへではなく、「何々にも」「何々をぞ」などいふ語の「に」が「も」にかゝり、「ぞ」が「を」を受けるのに一定の格があるを云ふ。その説は未だ整備したものではなく、不備誤謬もあるが、從來の手爾波の呼應の研究から一歩を進めたものであつて、注意すべき點が少くない。【著書】辭格考二卷○辭格考抄本二卷二册（安政五年刊）○歌學新論一卷○熟語彙一卷○口辭格考二卷○消息文梯一卷○說敎話柄一卷○十七問題辨說一卷○敎義之說一卷○宣敎講本一卷○祈禱文章二卷○邪敎拔萃一卷○神道本論五卷○說敎本稿一卷○耶蘇叢書一卷○外敎祕書一卷○神道

のであり、次いでは歌學に關するものである。

れて製紙める。

【構想】これは年貢上納を主とした百姓物で、「昆布」「柿」「三人百姓」「松樑（ゆづりは）」などと同じ型の狂言である。詠歌と盃事とでおめでた盡しであるだけ、筋は單純で喜劇的要素は乏しい。單に古歌のもぢりの如きに滑稽氣分が漂つてゐる。

望月（もちづき）「仇討物（あだうちもの）の謠曲」を見よ。

餅と白石（もちとしろいし）　昔話　【解說】妖怪退治を說く民間說話の中に、一つの著名なる型は、白い丸石を火に燒いて餅と見せかけ、欺いて食はせた一條である。怪物は、山男・天狗又は鬼といふことになつてゐる。膽力のある者が山小屋に獨り住んでゐる處へ、毎夜のやうに遣つて來て火にあたり、又餅を所望す

る。或る夜その白石を燒いて置くと、例の通り山男が來てそれを取つて食ひ、あつと言つて飛び出した。翌朝見たら山中に死んでゐたとか、又はそれきり姿を見せなかつたとかいふ類の話が、僅かづつの變化を以て府縣に數多く行はれてゐるのである。敵を恐れぬ修養の資料として、普通かういふ勝利の記錄は、到る處に歡迎せられるものであるが、さりとてこれだけの「話の種」（別項）が、單にその目的のために創作せられたとは考へられぬ。山に住む異類が穀物の香を悦ぶといふ俗信は、御幣餅又はたんぽ燒の調製に伴うても語り傳へられ、天狗を誘致する危險があるから、これを里中では燒かぬといふ土地が多い。もとは多分これを供へて祭を營んでゐたのが、その信仰漸く弛んで後、奇謀を以て彼等と絶緣したといふ話になつたのであらう。即ち昔話の根源の、存外に眞面目な慣習から導かれてゐるらしい一つの例である。この白石の話と系統を同じうするものに、竹を切つて煮て鬼に俵（たわ）め、自分は筍をむしや〳〵と食つて見せて、人間は齒の丈夫なものだと感心させたといふ話もある。これなどは現在既に「笑ひ話」（別項）の方に轉用せられ、たとへば、豐後の吉右衞門には虎の油の話がある。竹は煮て食ふとうまいものだ。その料理方を教へて遣ると欺いて禮を前取りしてから、まづ虎の油を一合ほど鍋に入れよといふ。そんな物はどこを捜してもあらう筈がない。さうかそれでは殘念ながら、竹を柔かく煮て御目に掛けることが出來ぬと言つた話、これも以前はやはり相手が鬼であつて、人間が筍を食ふのを見て驚歎して遁げ歸つたといふことになつて、諸國に語り傳へられてゐたのである。ところが、同じ

九州でも、豐前の犀川・清瀨川等の岸の村々では、近い頃まで毎年夏のなかばに、子供たちが川原に出て水神祭といふことをしたが、その折には何れも盛んに竹の子を煮て食ひ、一方には、竹を丸切りにしたものを折敷に盛つて、これを水の邊に供へてゐたさうである。水神は水の中から少年が竹の煮物を食ふのを見て、自分も出て食つて見ると、固くて到底食へない。それで人間の齒の力の强いのに驚いて、もはや害意を抱かなくなるやうに、かうするのだと説明せられてゐたといふ。近世は勿論半分以上遊戲化してゐたことと思ふが、單なる昔話に基いて、これだけの行事は發生する譯がない。即ち儀式の方が先づあつて、それを説明する昔話が、嘗ては神話の如く信ぜられてゐた時代があつたのである。伊豫の宇和郡の海岸などでは、毎年非常に大きな草鞋の片足を作つて、海に流す儀式が行はれてゐる。これを説明する昔話の有無はまだ確かでないが、これがちやうど昔話だけ殘つて儀式はもう絶えた白い石の話と、豐前の水神祭の竹の子の例とを中に置いて相對立するもののやうに考へられる。【柳田（國）】

尤の雙紙（もつとものさうし）　御伽草子　二卷　【作者】未詳。烏丸光廣との説もある。【成立】江戸時代初期。慶長以後、寛永九年六月以前である事は、はしがきに、「慶び長き年」の「犬枕」に倣つた由が見えるのと、「寛永九年林鐘上旬大宮通三條二町上恩阿齋開板」の奥書ある板本があるのとに因つても知られる（犬枕は、元祿十五年刊の好色本「滑少納言犬枕」一名「ふでかくし」とは別のもので、今傳はらないが慶長の小瀨甫庵作「童蒙先習」の一名を古くはさう呼んだのではないかと、柳亭種彦の「好色本目錄」滑少納言犬枕の條に言うてある）。【諸本】古板本は上記寛永九年板（林鐘上旬大宮通三條二町上恩阿齋開板）、同十一年板（書舍中野氏道伴刊行）、慶安二年板（藤井吉兵衞尉刊）。以上三版には插繪はないが、寛文十三年松會版には繪が入つてゐる。續群書類從卷九八八・新編御伽草子下卷等に所收。【解說】隨筆系統のもので、特に「枕草子」の「何々なるもの」の形式を襲うたもの。古今序の文句を捩つたやうな短いはしがきがあつて、昔の清少納言の「枕草子」と、それに擬して作つた慶長頃の「犬枕」と云ふ書との兩書を範とし、それに洩れた品々を書き集め、「枕」の扁を除いて「尤」の雙紙と名付けたとある。上卷は「長きもののしな〴〵」以下、短きもの、高きもの、低きもの等「歸るものの品々」まで四十項、下卷は「引くものの品々」以下、さすもの、物のかしら等「名所誹諧の發句品々・目出度きものの品々」に至るまで四十項より成る。その各題下に適當の品目を類聚し、和歌や狂歌が引用してある。

一、くもまひ、しゝまひ、神子の舞、幸若、猿樂、白拍子、てくだつ、でこのほ、猿廻、すみにかゞむは鼠舞、雲ゐにまふは鶴、すだか、又千年の鶴も舞、畠にまふはなすびの木、かきはにまふはかたつぶり、花前の蝶まふふん〳〵たり、出家の舞は大衆舞、孝行にまふは老萊子、酒盛にまふはじゆんのまひ、ひだるきときは目もまひぬ。

ひだるさにかしらづゝみのうちぬれば人もはやさぬめこそまひけれ

「枕草子」（別項）のやうな觀察の奇警、表現の卓拔さはなく、やはり御伽草子式の文詞であるが、風俗の資料としては參考になるものが多い。【島津】

本居豐穎（もとをりとよかひ）　國文學者・歌人　【通稱】初め稻楠と稱し、後、中衞、また平造と改

めた。【生歿】天保五年紀州和歌山に生れ、大正二年二月十五日東京に歿す。享年八十。【墓所】青山墓地【閱歷】父は本居內遠、母は藤子、豐穎はその長子である。安政二年父が江戸藩邸に歿した後は、彼は若冠を以てその職を繼ぎ、遂に一家を成すことを得た。明治二年權中宣敎師となり、尋いで宣敎權中博士となり、大祀御用掛を命ぜられ、更に神祇大錄、宮內省六等出仕、平野神社大宮司、神田神社々司等に歷任し、遂に大敎正に進んだ。後東京女子高等師範學校敎授となり、二十九年東宮侍講、三十年御歌所寄人、三十二年東京帝國大學講師等に歷任し、三十九年學士院會員、四十二年文學博士となつた。和歌と共に書にも優れ、圍碁・謠曲を好み、性溫厚、容貌端正であつた。門人には萩野由之・松本愛重・關根正直・丸山正彥・平田盛胤・坂正臣等がある。【著書】秋屋集○本居雜考○古今集講義○諄辭集○進講錄等。【相原】

元眞（もとさね）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】藤原【閱歷】父は清國（尊卑分脈には清邦。一說清雅）。天德五年從五位下に敍し、康保三年丹波介に任じた。天德三年九月、中宮の女房の歌合、同四年三月、內裏歌合の作者である。【作品】勅撰集に入る歌は「後拾遺」七、その他凡そ二十、合計凡そ二十七。家集に「藤原元眞集」がある。家集は群書類從二四八所載本と歌仙歌集本とは大略等しいが、數首の出入があり、歌の數は類從本三二八首、歌仙本三三六首である。屛風・障子の歌が多い。【參考】歌仙傳　【西下】

基佐（もとすけ）　連歌師　【姓名】櫻井基佐。元輔、元佐、元祐とも書く。通稱彌三郎、又中務丞。【法號】永仙【生歿】不詳。【閱歷】下

總船橋の人とも（慶長見聞集）、越中櫻井城主齋藤某の末ともいへど（武家名鑑）、明かでない。中年の頃には、京都にゐて仕官してゐたらしく、後入道して永仙といひ、晩年には山城大原にゐた。連歌の外、歌にも巧みで歌集もあり、集外歌仙にも入つてゐる。文明十四年には、大原の十如院で宗祇・宗長と三吟百韻を卷き、延德三年にも同じ三人で何舟百韻を卷いてゐる。然るに、宗祇が「新撰菟玖波集」（別項）を撰した時、一句も入らなかつたので、基佐が「遙見二筑波一錢便入、不レ論二上手與二下手一」「足なくてのぼりかねぬ（イた）る筑波山和歌の道には達者なれども」の落首を詠んで謗つたといひ（和語抄）、又宗祇が基佐の句を「新撰菟玖波集」に入れなかつた原因としては、基佐が宗祇の名聲の高いのを忌み、山名邸で連歌會のあつた時、前句に河といふ語のあつたのに基佐は蓮を附けた。宗祇がこれを非難して、河の蓮といふは如何と糺すと、基佐は冷笑して言下に、「極樂の前に流るゝ阿彌陀川蓮ならではこと草もなし」の證歌があると云つた。宗祇は「萬葉」以降にさういふ歌は見えぬ、恐らくは足下の速吟ではないかと問ひ寄つた。基佐は言葉がなく終に降參して了つた。宗祇はその人を非とし、「新撰菟玖波集」に入れなかつたのであると云ふ（野史）。併し「極樂の前に」の證歌のことは、「慶長見聞集」には、品川九品寺に於ての心敬（別項）の事としてゐるから、いづれが據るべきものであるかが問題である。又「新撰菟玖波集」の事で兩人が仲惡くなつた後、美濃の土岐氏が笠着千句を興行した時、基佐が隱れて來てゐて、「いつの時にか流れ出づべき」といふ前句の出たのに、「雨を待つ木の葉の下のたまり水」と附け、宗祇が合點の時この句を特に感じて、これは櫻井が句であらう、どこに隱れ住むかと云つて殘念がつたと云ふ（鹽尻）。又基佐が窮迫した時、露の字を質に入れて金を借り、生涯連歌に露を詠まなかつたとの說があるが（翁草）、露の字の質の事は古くから云ふ事であるけれども、基佐であるとの確證はないやうである。宗祇が加點評釋を加へた「七連師附句」には肖柏・宗長に次いで基佐の作が點が多く、基佐は作者としては技倆が優れてゐたのであるが、その割合には名聲がなく、人物に缺點があつたもののやうである。【著作】櫻井基佐集二卷（歌集）〇永仙付句發句集（假題、寫本）（四季及び戀・雜六部の付句と四季の發句とを輯めたもので、大永三年の持澄の奥書がある）。

【附記】續群書類從連歌部目次に、「永仙句集」が見えてゐるが、本文には闕けてゐる。「永仙付句發句集」と同物ではないかと思ふが、明かでない。

【參考】兼載雜談　猪苗代兼載〇和語抄　僧日重〇慶長見聞集　三浦淨心〇鹽尻　天野信景〇翁草　神澤杜口〇假名世說　大田南畝〇嬉遊笑覽　喜多村信節〇野史　飯田忠彥〇連歌の史的研究　福井久藏　〔志田〕

元輔（もとすけ）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】清原氏【生歿】延喜八年に生れ、永祚二年（一六五〇）六月歿す。享年八十三。【家系】深養父（別項）の孫、顯忠の子、又一說に春光の子ともいふ。淸少納言（別項）の父である。【閱歷】梨壺の五人の中の一人である。天曆三年（四十二歲）、實賴五十賀の歌をよんだ。翌々五年、河內權少掾に任ぜられ、又梨壺の五人と共に「後撰和歌集」（別項）を撰した。天德元年には師輔五十賀の歌をよんだ。この頃、源高明・藤原師尹等に隨つて白河院に行つたり、八幡に詣でたりしてゐる。應和元年少監物、同二年中監物となる。康保三年大藏少丞に任ぜられ、翌四年民部少丞、次いで大丞に進む。安和二年、從五位下河內權守となる。同年師尹の五十賀、實賴七十賀の宴に列して歌をよんだ。天祿四年七月、一品宮扇合に列す。天延二年周防守、又鑄錢長官となる。天元三年從五位上に進み、寬和二年肥後守となつた。彼は當時の權門に出入し、殊に藤原在衡・源高明等に親しかつた。同輩では大貳國章と最も親しかつたらしい。兼盛・順・時文・能宣との贈答歌もある。【作品】元輔集（別項）〇勅撰集に入る歌は、拾遺四十九首、後拾遺二十五首、詞花六首、新古今六首、その他凡そ十九首、合計凡そ百五首。「後撰集」には一首もない。【批評】よみ口は流暢で才氣が溢れてゐる。兼盛が、沈思して歌をよむのを非難したのは（袋草紙）、彼の態度が「輕快洒脫であつた」（今昔物語卷二）ためであらう。一面には暴露的な所があり、題材・用語共に自由である。この二つの傾向はそのまゝ淸少納言に遺傳してゐると考へてよい。

【參考】歌仙傳〇袋草紙〇大日本史（卷二一九）〇國文學全史平安朝篇　藤岡作太郎　〔西下〕

元輔集（もとすけしふ）　歌集　一卷【著者】清原元輔【諸本】（イ）群書類從卷二五〇所載本、（ロ）歌仙歌集本がある。歌數は（イ）百五十六首、（ロ）は二百六十二首、共通する歌百五十二首であるから、（イ）の大部分は（ロ）に含まれてゐる。歌の順序は大略一致し、（ロ）は卷末に（イ）にない歌がある。日本歌學全書・續國歌大觀・國歌大系等所收。【內容】部類はない。年代を明瞭に記した詞書が多い。また輿味ある露骨な歌が多い。例へば、

男なくなりて侍る女の程もなくこと人にあひぬと聞きてつかはしける
年へにし人の形身の藤衣すてやしにけんまだやかけたる

男の人の國にまかるほどにこをおろしてける女の
たらちをの歸る程をもしらずしていかですてゝしかりのかひこぞ

頭の辨實資が子むませ侍りし七夜
日の本を心やすくぞ思ひぬる國のちぶさのけしきみつれば

盗人の入りて侍りしに又の日人のかいねりのきぬをおこせて侍りしに
淺からず思ひ染めてし衣なかゝる時こそ袖もひぢけれ

など、語彙に於ても「命ながくて」「よみがへる」「死なん命」「死にて」「死にけり」の如きものがある。かゝる傾向は、同時代の好忠（別項）にもあり、後には俊賴（別項）にも著しく現はれてゐるが、兼盛・能宣にはなく、まして實賴・師輔には絶無である。（元輔參照）　〔西下〕

基俊（もととし）　歌人・歌學者・詩人【姓】藤原【法號】覺舜【生歿】天承元年三月二十二日權大納言藤原宗忠が、白河の山莊に催した尙齒會の時に七十六歲であつた（古今著聞集卷四）といふから、それによつて逆算すれば、生年は後冷泉帝の天喜四年である。又「長明無名抄」に、保延四年、俊成が二十五歲にて八十五歲の基俊に師事したとあるに據れば、天喜二年の生れとなる。但し今は「古今著聞集」の記載に從ふ。歿年は「台記」によると、康治元年（一八〇二）正月十六日である。享年八十七。【學統】明記せられたものはないが、學問の系統としては、歌學は公任の系統を引いてゐる。

て言下に、「極樂の前に流るゝ阿彌陀川蓮ならではこと草もなし」の證歌があると云つた。宗祇は「萬葉」以降にさういふ歌は見えぬ、恐らくは足下の速吟ではないかと問ひ寄つた。基佐は言葉がなく終に降參して了つた。宗祇はその人を非とし、「新撰菟玖波集」に入れなかつたのであると云ふ(野史)。併し「極樂の前に」の證歌のことは、「慶長見聞集」には、品川九品寺に於ての心敬(別項)の事としてゐるから、いづれが據るべきものであるかが問題である。又「新撰菟玖波集」の事で兩人が仲惡くなつた後、美濃の土岐氏が笠着千句を興行した時、基佐が隱れて來てゐて、「いつの時にか流れ出づべき」といふ前句の出たのに、「雨を待つ木の葉の下のたまり水」と附け、宗祇が合

【參考】兼載雜談 猪苗代兼載○和語抄 僧日重○慶長見聞集 三浦淨心○鹽尻 天野信景○翁草 神澤杜口○假名世説 大田南畝○嬉遊笑覽 喜多村信節○野史 飯田忠彥○連歌の史的研究 福井久藏 〔志田〕

元輔(もとすけ) 歌人(三十六歌仙の一)【姓】清原氏【生歿】延喜八年に生れ、永祚二年(一六五〇)六月歿す。享年八十三。【家系】深養父(別項)の孫、顯忠の子、又一說に春光の子ともいふ。清少納言(別項)の父である。【閲歴】梨壺の五人の中の一人である。天曆三年(四十二歲)、實頼五十賀の歌をよんだ。翌々五年、河內權少掾に任ぜられ、又梨壺の五人と共に「後撰和歌集」(別項)を撰した。天德元年には師輔五十賀の歌をよんだ。この頃、源高明・藤原師

語卷二)ためであらう。一面には暴露的な所があり、題材・用語共に自由である。この二つの傾向はそのまゝ清少納言に遺傳してゐると考へてよい。

【參考】歌仙傳○袋草紙○大日本史(卷二一九)○國文學全史平安朝篇 藤岡作太郎 〔西下〕

元輔集(もとすけしふ) 歌集 一卷【著者】清原元輔【諸本】(イ)群書類從卷二五〇所載本、(ロ)歌仙歌集本がある。歌數は(イ)百五十六首、(ロ)は二百六十二首、共通する歌百五十二首であるから、(イ)の大部分は(ロ)に含まれてゐる。歌の順序は大略一致し、(ロ)は卷末に(イ)にない歌がある。日本歌學全書・續國歌大觀・國歌大系等所收。【內容】部類はない。年代を明瞭に記した詞書が多い。また與

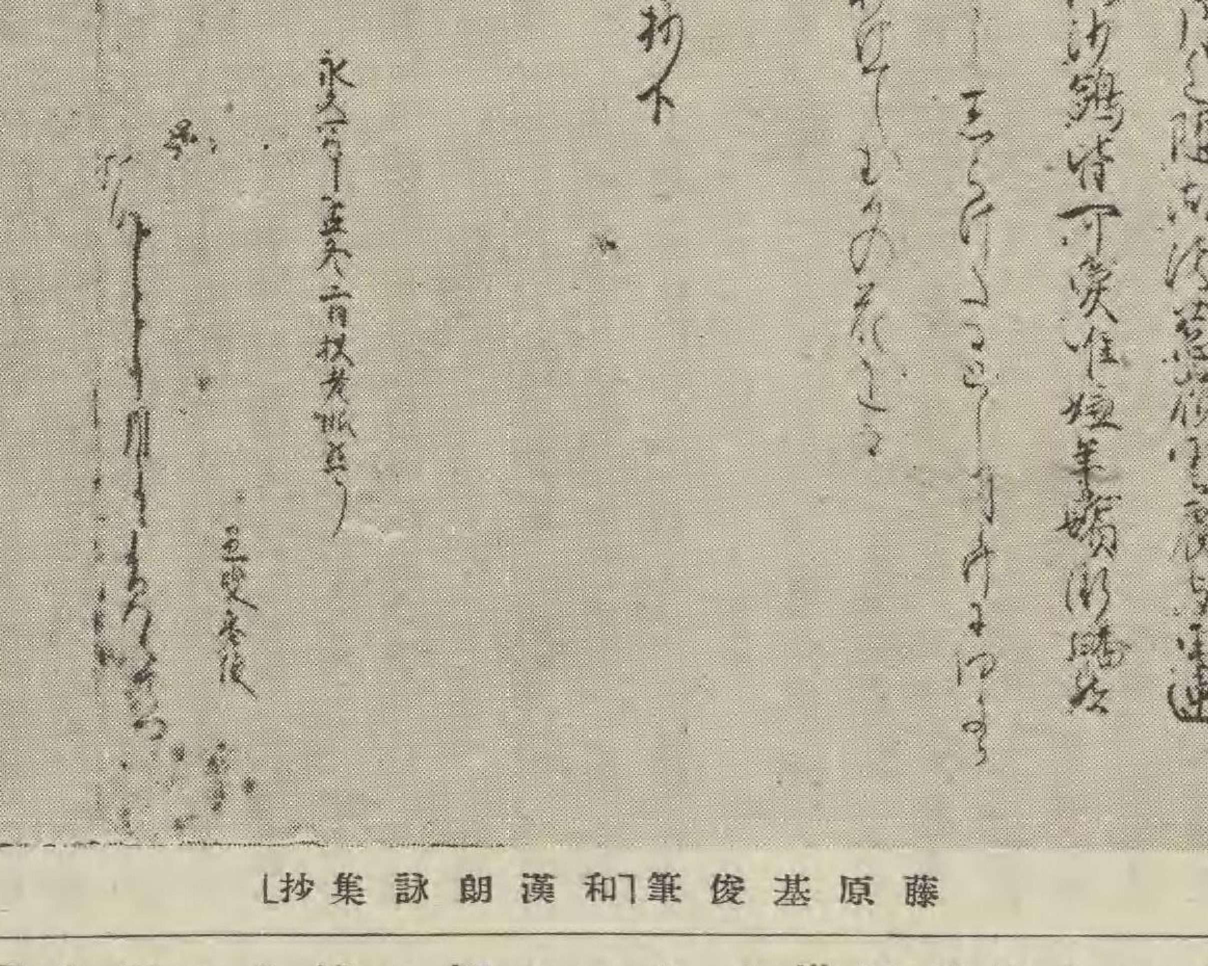
てゐるが、兼盛・能宣にはなく、まして實頼・師輔には絕無である。(元輔參照) 〔西下〕

基俊(もととし) 歌人・歌學者・詩人【姓】藤原【法號】覺舜【生歿】天承元年三月二十二日權大納言藤原宗忠が、白河の山莊に催した尙齒會の時に七十六歲であつた(古今著聞集卷四)といふから、それによつて逆算すれば、生年は後冷泉帝の天喜四年である。又「長明無名抄」に、保延四年、俊成が二十五歲にて八十五歲の基俊に師事したとあるに據れば、天喜二年の生れとなる。但し今は「古今著聞集」の記載に從ふ。歿年は「台記」によると、康治元年(一八〇二)正月十六日である。享年八十七。【學統】明記せられたものはないが、學問の系統としては、歌學は公任の系統を引いてゐる。

詩文に關しては不明。ただ大江朝綱等に私淑してゐたことが知られるのみである。

道長─頼宗─俊家─┬宗忠
　　　　　　　　├基俊─┬能仲─孝能
　　　　　　　　　　　└光覺

【閲歴】名門の出身で、兄弟は何れも昇進してゐるが、基俊は從五位下左衞門佐を以て終つた。性質が驕慢であつて才學を恃んだ爲めか、或は何等かの失敗があつた爲めか明かでない。「悦目抄」に「一度の咎あればとて重き罪を行ふ事よく慮あるべし。麒麟といふ賢き獸も、自ら一躓の誤なきに非ず」と言つてゐる。これ等が彼の官位の低い事に關係ある不平とも見られる。主に歌人及び歌學者として終始したが、保延四年十月二十日、薙髮して覺舜と稱した(尊卑分脈・皇代曆)。「家集」によれば、小法師と稱する子を永緣の弟子とした爲めに、永緣との交際が深かつた。また娘のために面白い歌を書き集めて與へたことや、病んだ時、攝津に潮湯浴びに下つたことなども知られる。また匡房・俊頼・顯季・國基・仲實等との贈答もある。就中、雲居寺の瞻西や三條大納言とは親しかつたやうに見える。【著作】藤原基俊家集○新撰朗詠集(別項)○悦目抄(別項)○和歌無底抄十卷(一子傳とも)(卷四までは四季の題、卷七までは流布本の「悦目抄」と同じもの、卷八は和歌の灌頂、卷十までは「伊勢物語」と「古今」序の問答を揭げてある。但しこれは、基俊の歌を惡く言つてゐる點もあり、後人の作であらうと言はれる)。この外、勅撰集には、金葉・詞華・千載・新古今・新勅撰等凡そ百餘首が見え、又私撰集には、後葉集・續詞華集・月詣集等を合せて二十數首見える。また歌合の判詞には「內大臣家歌合」(元永元年、俊頼と合判)、「關白內大臣家歌合」(保安二年、俊頼と合判)、「西宮歌合」(大治三年)、「相撲立詩歌判」(長承二年)、「顯輔家歌合」(長承三年)等。

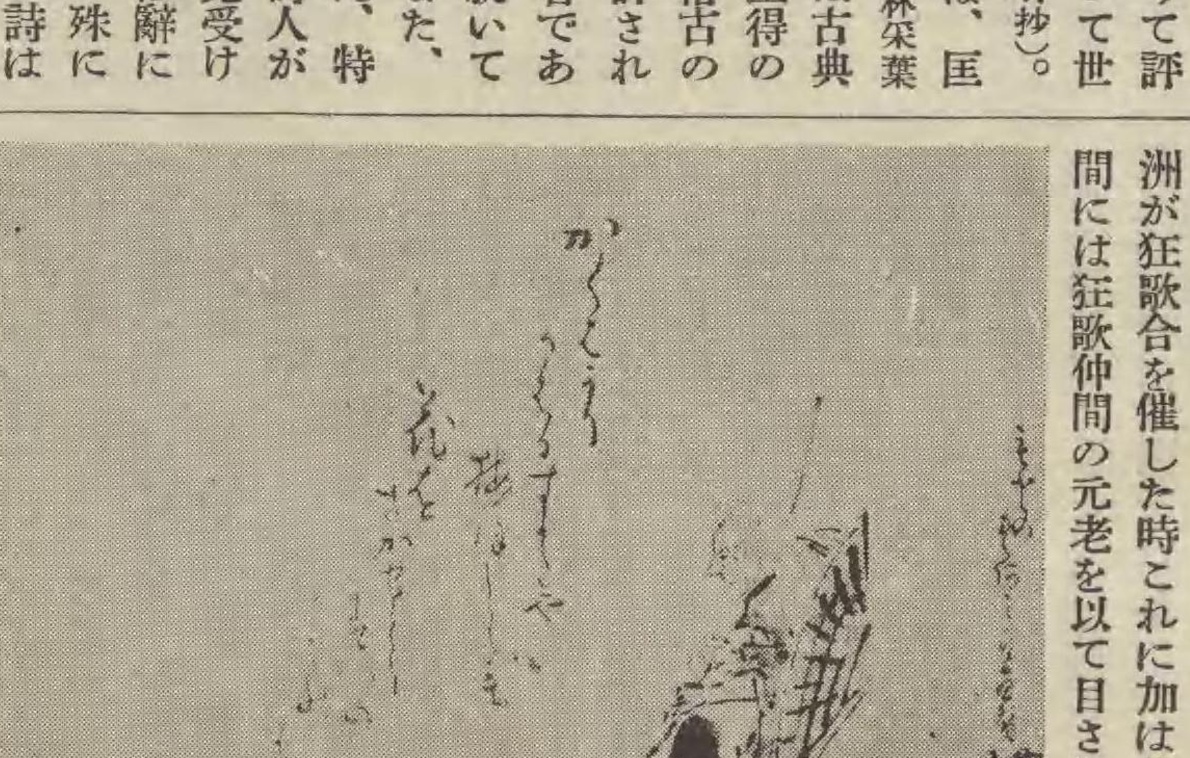


藤原基俊筆「和漢朗詠集抄」

【業績】歌人としては、俊頼(別項)の新しい傾向と反對に、傳統的の傾向を取つてゐた。俊頼は曾根好忠以來流れてゐた經信等の流を汲んで、傳統的の範疇に束縛せられなかつた。然るに基俊は、才學を衒ひ、藝術の本質に觸れる事よりも、言葉の技巧に拘泥して潑剌たる生命を吹き込むに吝なるものがあつた。基俊の判詞にも、この傾向が顯著である。なほその歌論が詩論から出てゐることも注意すべく、感情の微細なリズムを表現する事の如きは、彼の歌に望み得ないのである。即ち詩に於ける既成概念を、和歌に當てはめたるに過ぎない。俊頼等の比較的自由奔放な傾向と異なつた原因はその點にある。琳賢が「後撰集」の和歌二十首を選んで、自作の如く裝うて評を乞ひ、基俊がこれを存分に評して却つて世の嘲笑を招いたといふ話もある(長明無名抄)。しかし「萬葉集」の次點者の一人としては、匡房等と共に忘るべからざる人である(詞林采葉抄跋文)。これを要するに、歌人としては古典派歌人で、「愚祕抄」にも「俊頼朝臣は生得の堪能とおぼえ侍り。基俊・淸輔などは、稽古の人にてあやまりなかりし人なりき」と評されたやうに、歌人といふよりは寧ろ歌學者であつた。この點は漢詩人としての基俊に就いても同樣に言へるのであつて、その詩もまた、智的に、詩話や髓腦に沒頭した跡が見え、特に注目すべき作品もない。當時一般の詩人が持つてゐた缺點を、彼の作にも濃厚に見受けられる。即ち生氣なく、部分的辭句の修辭にのみ苦心するといつたやうな風がある。殊に「白氏文集」の流行に影響せられて、彼の詩は全く白氏を粉本としたと見られる。

【參考】台記○尊卑分脈○今鏡○中右記○尊卑分脈○八雲御抄○十訓抄○續古事談○愚祕抄○桐火桶○長明無名抄○東野州聞書○百人一首一夕話○勅撰作者部類○本朝無題詩○本朝一人一首 〔山岸・西下〕

元の木網(もとのもくあみ) 狂歌師【本名】渡邊正雄。通稱喜三郎、家號大野屋【別號】落栗庵・珠阿彌。晝號嵩松【生歿】享保九年生れ、文化八年(二四七一)六月二十八日歿す。享年八十八【法名】心性院琢譽珠阿彌陀佛【墓所】東京深川萬年町正覺寺【閲歴】武州松山の人。中年江戸に出で、京橋北紺屋町にて湯屋を營み、後、西久保神谷町に移轉した。獨學にて國文・俳書を研究し、又高嵩谷に畫を學び嵩松と號した。夙に蜀山・橘洲等と交り、明和年間橘洲が狂歌合を催した時これに加はり、天明年間には狂歌仲間の元老を以て目されてゐた。



元の木網自畫贊(蜀山人判取帳)

蜀山人の「奴凧」に、「其後大根太木きり金を受取りに市令の腰掛にありし時、傍に湖月抄を讀むえせ者ありしを尋ぬれば、大野屋喜三郎といへる者にて京橋北紺屋町の湯屋なり。是元木網の事なり。その妻も亦狂歌を嗜みて智惠內子といへり。夫れより赤良を訪ね來り、又云ふ、「木網はよき男にてすみを拔きたる痕さだかに、常に居士衣の如きものを着て、紫

の服紗に包みし物を背負ひて歩きけり云々」。後、寛政三年發心し、藤澤遊行上人の法弟となつて殊阿彌と改め、それより京攝の間に遊歷し、大和吉野に僑居して一とせの春を過ごした事もあつたが、江戸に歸つた後は、剃髪して向島水神の森に閑居し、念佛三昧に耽つてゐたが、終に同所で病歿した。流布の傳記にはその享年を皆八十一歳としてあるが、「明和狂歌合」を文化八年に補綴した序文中に、絕筆の狂歌一首を載せ、元木阿彌八十八歳と自署した傍らに、關東平々山人が「渡邊氏嵩松氏は元木網大人といひて、江戸夷曲歌の元祖のその一人なりしが、年老て死出の門出に筆を染め、置土產となりけるも冬の始めなりければ云々」と附記してゐるから、こゝには享年を八十八歳と正すこととした。辭世「八十餘り見はてぬ夢の覺るかと思ふもうつゝ曉の空」

【著書】俳諧に關しては、「俳諧饒舌錄」二册があり、狂歌に關しては次の諸書がある。○落栗庵月並集一册 天明三年刊○濱のきさご一册（同年刊）○落栗草庵集二册（同年間刊）○新古今狂歌集四册（寛政六年刊）○狂歌立春抄一册（同八年刊）○言葉の本末一册（同十年刊）○新古今狂歌集續編二册（文化七年刊）〔野崎〕

求子歌 もとめこのうた 「東遊歌」を見よ。

求塚 もとめづか 「戀慕物の謠曲」を見よ。

本吉欠伸 もとよしけつしん 小說家【本名】乙槌【別號】あくび居士【生歿】慶應元年豐前國小倉に生れ、明治三十年夏東京芝區高輪大木戸にて病歿した。享年三十三【閱歷】父は小倉藩士堺得司正隆。母琴子は志津野氏。弟に堺枯川（別項）がある。豐津の裁錦小學校・豐津中學校を卒業後、英語修業のため福岡・長崎に遊學し、明治十八年上京して慶應義塾に入る。翌年養家の都合で歸鄕したが、坪内逍遙の「小說神髓」（別項）の洗禮を受けて小說を書き始めた。二十一年大阪に出で、新聞雜誌の編輯に從事して創作に努めてゐるうち、西村天囚（別項）の推挽によつて大阪朝日新聞に入社し、漸く頭角を現はして來た。二十五年、天囚を中心に浪華文學會が起り、小說雜誌「なにはがた」が發行されると共に、欠伸の名は關西文壇の第一流に伍するに至つた。併し名聲の揚がるにつれて一部の文士間に通有する放縱辯も增し、多大の負債と家庭の不和とから、二十七年朝日新聞を退社し、單身東京に來り、暫時放浪の後、都新聞記者となつたが、年來の放縱生活と過度の飮酒から肺病を患ひ、不遇の裡に弟枯川の家で歿した。【作品】むら雲○幼なじみ○涙の淵○鬼百合○南蠻鐵○腕の疵○重ね妻○刀痕浪人（以上單行本）。外に「百千鳥」「なにはがた」「浪華文學」等の雜誌や新聞に載つてゐる數十篇の小說がある。【批評】欠伸の全盛時代には、紅露を打つて一丸としたものとまで才華を歌はれたが、それは評者の過褒であるにせよ、確かに詩情の豐かなところがあつた。そして彼の小說は短篇に佳作があつた。長篇は概して單調で不自然で、勸懲主義が露骨に見え、折角の詩情を損つてゐる。根柢に深い修養がなく、その才筆を存分に伸びさせなかつたのは惜しい。なほその文章は晚年になるにつれて一家の風格を示してゐる。

【參考】堺利彥傳（改造社）〔柳田（泉）〕

戻駕 もどりかご 所作事【解說】元祿十一年正月、京都布袋屋座所演「けいせい淺間嶽」（別項）の第一番目の駕籠舁の場がその原據で、この趣向は、八文字屋自笑の「傾城禁短氣」（別項）の中にも取入れられてゐる。この「淺間嶽」は、江戸に於ても原作を增補又は改作して元祿以降屢々行はれたが、「淺間」以外にこの趣向を脚色したものでは、享保十年正月中村座「𦀌伊豆日記」が古く、駕籠舁は二代市川團十郎と初代澤村宗十郎とで演じた。なほ女戻駕の趣向では、正德四年十一月森田座の「女龍虎二頭」に取入れられたのが古い。その後「殿造源氏十二段」（延享元年十一月市村座）、「飾鰕鎧曾我」（寛延元年正月中村座）、「蕓市顔鏡祭」（寶曆九年十一月同座）等にも取入れて演じたが、殊に「鎧曾我」に駕籠舁實は景淸（海老藏、二代團十郎）と同實は重忠（澤村長十郎、初代宗十郎）で人丸姬（澤村小傳次）を駕籠に乘せ、兩人對の衣裳に對の袖無羽織、淺黃頭巾といふ扮裝で、戻駕の趣向を演じたのが名高く大當りであつた。この趣向を豐後節で演じたのは、寶曆十三年十一月森田座所演の富本節「夫雪千引石」が最初かに思はれる。この時既に中村仲藏が演じてをり、又仲藏と四代松本幸四郎との兩人では、天明三年三月市村座「壽萬歲曾我」でも、前出の宗十郎・團十郎所演のを補作して演じてゐるのである。その他「戻駕」の生れる以前に、種々の役者によつて演じられてゐるので、本作は即ちこれ等を藍本として仲藏の大阪歸りを當て込み、更に江戸と大阪の廓話を持ち込んだに過ぎないのである。が、曲と振の優秀なために、常磐津では「關の扉」「双面」（各別項）と共に三名作と呼ばれ、また我が所作事中の傑作の一にも數へらるゝに至つたのである。

戻籠色相肩（天保九年河原崎座所演）

【種目】本作以後、增補や改作物としては「花菖蒲思簪」（寛政六年五月、桐座）、「相肩添商人」（文化四年十一月、市村座）、「仇略積睦言」（同十四年十一月、中村座）、「細工物籃轎評判」（文政二年八月、玉川座）等種々生れたが、今日に傳はらない。併し、これを女に書き替へた所謂「女戻駕」は、最古の「姿花鳥居が色彩」（後出）と「月友俄花道」（文政五年八月、中村座）や「燕子花色初音屋」（文久元年四月、同座）等によつて改作した「奴戻駕」（明治四十五年十二月、帝國劇場）や「梅薰春花駕」（昭和三年一月、歌舞伎座）等が行はれてゐる。「女戻駕」も、これ等の外に「合逢駕暫時鳥杖」（文化八年十月、森田座）、「若葉の花中宵月」（同十三年四月、河原崎座）、「色の樂屋寫姿見」

栗庵月並集一册(天明三年刊)○濱のきさご一册(同年刊)○落栗草庵集二册(同年間刊)○新古今狂歌集四册(寛政六年刊)○狂歌立春抄一册(同八年刊)○言葉の本末一册(同十年刊)○新古今狂歌集續編二册(文化七年刊)　〔野崎〕

求子歌　「東遊歌」を見よ。

求塚　「戀慕物の謠曲」を見よ。

本吉欠伸　小説家【本名】乙槌【別號】あくび居士【生歿】慶應元年豐前國小倉に生れ、明治三十年夏東京芝區高輪大木戸にて病歿した。享年三十三【閲歴】父は小倉藩士堺得司正隆。母琴子は志津野氏。弟に堺枯川(別項)がある。豐津の裁錦小學校・豐津中學校を卒業後、英語修業のため福岡・長崎に遊學し、明治十八年上京して慶應義塾に

【批評】欠伸の全盛時代には、紅露を打つて一丸としたものとまで才華を歌はれたが、それは評者の過褒であるにせよ、確かに詩情の豊かなところがあつた。そして彼の小説は短篇に佳作があつた。長篇は概して單調で不自然で、勸懲主義が露骨に見え、折角の詩情を損つてゐる。根柢に深い修養がなく、その才筆を存分に伸びさせなかつたのは惜しい。なほその文章は晩年になるにつれて一家の風格を示してゐる。【參考】堺利彦傳(改造社)　〔柳田(泉)〕

戻駕　所作事【解説】元祿十一年正月、京都布袋屋座所演「けいせい淺間嶽」(別項)の第一番目の駕籠舁の場がその原據で、この趣向は、八文字屋自笑の「傾城禁短氣」(別項)

河原崎座所演)

代澤村宗十郎とで演じた。なほ女戻駕の趣向では、正德四年十一月森田座の「女龍虎二頭」に取入れられたのが古い。その後「殿造源氏十二段」(延享元年十一月市村座)、「飾鰕鎧曾我」(寛延元年正月中村座)、「蕓市顔鏡祭」(寶暦九年十

作の一にも數へらるゝに至つたのである。【種目】本作以後、增補や改作物としては「花菖蒲思笄」(寛政六年五月、桐座)、「相肩添商人」(文化四年十一月、市村座)、「仇略積睦言」(同十四年十一月、中村座)、「細工物籃輪評判」(文政二年八月、玉川座)等種々生れたが、今日に傳はらない。併し、これを女に書き替へた所謂「女戻駕」は、最古の「姿花鳥居が色彩」(後出)と「月友俄花道」(文政五年八月、中村座)や「燕子花色初音屋」(文久元年四月、同座)等によつて改作した「奴戻駕」(明治四十五年十二月、帝國劇場)や「梅薰春花駕」(昭和三年一月、歌舞伎座)等が行はれてゐる。「女戻駕」も、これ等の外に「合逢駕暫時鳥杖」(文化八年十月、森田座)、「若葉の花中宵月」(同十三年四月、河原崎座)、「色の樂屋寫姿見」

(天保十二年十一月、同座)、「菊競艶相肩」(安政二年九月、市村座)等十數種生れたが、上演毎に殆ど改作され、普通の禿の役が奴・姫・女藺・武士等に代へられる外に、又「關の扉」や「曾我物」などと組合されたのもあつたが、いづれも廢滅に歸した。

【戻駕色相肩】〔角書〕此風情狂言にせよ蔦の道〔別名題〕「戻駕籠法志賀山」「菖蒲色相肩」「花野露色相駕籠」等。〔初演〕天明八年十一月一日初日、江戸中村座「唐相撲花江戸方」第一番目四立目〔作詞〕櫻田治助〔曲節〕常磐津節〔太夫〕二代常磐津文字太夫〔作曲〕鳥羽屋里長〔振附〕二代西川扇藏〔傳來〕曲・振ともに傳存。〔諸本〕常磐津節正本・日本歌謠集成卷十・舞踊劇集(日本戯曲全集)等所收〔內容〕駕籠舁の浪花の次郎作(中村仲藏)と吾妻の與四郎(四代松本幸四郎)とが、禿たより(松本米三郎)を乘せて舁いて來る。紫野のほとりで四ッ手駕籠を卸して一休みしながら、浪花と江戸とのお國自慢話になり、禿を呼び出して次郎作は新町の傾城買の身振話で丹前の振事。禿は島原の廓話のあどけない踊。與四郎は吉原の地廻り話の踊があつて、互に落す千鳥の香爐に連判狀、その奪合ひから禿と三人立の惣踊。遂に次郎作は石川五右衞門、與四郎は眞柴久吉と見顯はしになる。

【姿花鳥居が色彩】〔角書〕戻駕の俤うつす俄のにしき繪〔通稱〕「新戻駕」「女戻駕」〔初演〕文化二年五月十六日初日、江戸中村座「邌供養妹脊緣日」第二番目大切曾我祭の段〔作詞〕櫻田治助〔曲節〕常磐津節〔太夫〕常磐津伊勢太夫〔作曲〕三代岸澤古式部〔振附〕藤間勘十郎〔傳來〕曲・振とも傳存。〔諸本〕常磐津節正本。舞踊劇集(日本戯曲全集)等所收。〔內容〕曾我祭に俄の趣向で、藝者お菊(四代瀨川路考)と同おやま(五代岩井半四郎)とは、四ッ手駕籠を舁いて現はれる。駕籠の中からは禿たより(九代森田勘彌)が出て、廓の諸譯の踊があり、藝者二人は曾我祭の由來の言立てから、草摺曳やつしの振事があつて納まる。

【參考】「戻駕」の生れるまで　秋葉芳美(人間と舞臺三ノ二)○「戻駕」の其後と年表　同上(同上三ノ四)○戻駕の話　三木竹二(歌舞伎舊一四)○女戻駕の所作事について　若狹萬次郎(歌舞伎新四ノ一)○戻駕淨瑠璃　三升屋二三治(作者年中行事)　〔秋葉〕

戻橋　所作事　淨瑠璃物(新古演劇十種の一)【本名題】「戻橋戀の角文字」、但し再演から新古演劇十種の一に加へられ、單に「戻橋」となつた。【初演】明治二十三年十月二十八日初日、東京歌舞伎座〔作詞〕古河默阿彌〔曲節〕常磐津節〔太夫〕八代常磐津小文字太夫〔作曲〕六代岸澤式佐(後の五代古式部)〔振附〕花柳壽輔〔傳來〕曲・振とも傳存。【諸本】常磐津節正本。歌謠音曲集(日本名著全集)・默阿彌全集第二十卷所收。【題材】最初、默阿彌が岸澤式佐の依囑によつて、「太平記」や「平家物語」にある「劔卷」に見える所謂戻橋傳説を「戻橋蘆の角文字」と題し、素淨瑠璃として書いたものを、五代菊五郎の懇望によつて、やゝ活歷式の舞踊劇に增補されて上場を見たものである。因みにこの後篇ともいふべきものに、同じく新古演劇十種の一である「茨木」(別項)がある。【沿革】戻橋傳説やこれと同じ系統に屬する羅生門傳説、宇治の橋姫傳說等を劇化したものでは、謠曲に「羅生門」や「姫切」等があり、古淨瑠璃に「酒呑童子」などがある。歌舞伎では元祿・寶永頃から、主に「前太平記」の世界に多種多様に脚色されてゐるが、就中「嫗酒顛童兒」(享保八年十一月、市村座)、「陸奧𩋙源氏」(同十八年十一月、同座)、「降積花二代源氏」(明和二年十一月、同座)、「四天王楓江戸粧」(文化元年十一月、河原崎座)等著名であり、殊に櫻田治助と勝俵藏(後の鶴屋南北)との合作になる「戻橋綱顏鏡」(寛政十二年十一月、河原崎座)が有名である。【內容】洛中警衞の任に當る源賴光の四天王の一人渡邊源次綱(四代市川左團次)は主君の命をうけて、維仲卿の姫君の許へ使に立つた歸り途、郎黨左源太(市川新藏)と右源太(尾上幸藏)を伴ひ、一條の戻橋にさしかゝると、扇折り小百合(五代尾上菊五郎)と名乘る美女が現はれ、綱に媚を送つて道連れになる。綱は油斷なく、やがて戻橋を渡る時、ふと水鏡にうつる物凄い鬼女の形相を見たが、何氣なく美女に舞を所望する。女は舞うて綱の心を蕩かさうとしたが、綱は美女を惡鬼と見やぶる。遂に美女は愛宕山の惡鬼の正體を顯はし、綱を拉して虛空へ飛び去るが、綱は鬼の右の腕を斬つたので北野神社の屋根に落ちる。惡鬼は雲間へ飛行する。【價値】樣式は活歷で、新歌舞伎十八番の一である「紅葉狩」(別項)と好い對照をなし、明治中期所産の舞踊劇の一代表作であるが名作とはいへない。【參考】尾上菊五郎自傳　伊坂梅雪○羅生門の鬼　島津久基　〔秋葉〕

物賣　所作事【性質】江戸時代に於ける市井の物賣の呼び聲や風俗姿態を所作事化した一類。昔時の物賣は、今日のそれと異なつて風流味に富み、派手な衣類を着け、趣のある呼び聲で流して歩いた。それを所作化したもので、物乞や大道藝人などと共に、所作事中の浮世風俗物とも稱すべきものである。

【沿革】物賣の曲は、既に江戸淨瑠璃中、殊に土佐節・半太夫節(各別項)等の中に、「花賣」「扇賣」「團扇賣」「破魔弓賣」「繪草紙賣」「暦賣」「黑木賣」「小間物賣」「三官飴賣」等が見え、上方淨瑠璃中にもいろ〳〵なものが見えてゐる。歌舞伎では元祿期から行はれたが、純粹な曲節所作本位の物賣よりも、二代市川團十郎等によつて演じられた辯舌や、身振・物眞似本位の「外郎賣」(別項)「艾賣」「扇賣」「破魔弓賣」等の類が歡迎せられた。然るに長唄や豐後節の劇場音樂の發達と共に、純粹な曲節所作本位のものが寶暦期から流行し、やがて道行物(別項)の中へも挿入されたが、所作事の爛熟期ともいふべき化政期に至つて、その頂點に達し、殊に變化物(別項)の彩取りとして行はれた。以後漸次衰退の傾向を辿り、明治に至つて殆ど新作は絶えたといつていゝ。

【分類】職業別に、又は曲節上から或は演出の上からも分類し得るが、長唄の「紋日艪拍子」(白酒賣と鹿の子餅賣。寶暦十一年春市村座)、「籬の垣衣草」(葱賣。同十二年春同座)、「所緣の茶杓」(茶杓。團扇賣。同十三年七月同座)、常磐津の「垣衣草千鳥紋日」(通稱葱賣。双面參照)、富本の「花珍哉東小原女」(黑木賣。同六年春同座)等の如き非變化物と變化物とに大別することが出來る。【種類】〔外郎賣〕(別項)但し變化物として寄三津再十二支(文化十一年三月中村座)の中に、常磐津節で演じられたものがある。〔白酒賣〕杜若緣丹前(丹前參照)○春昔由緣英(長唄。天明五年春桐座。五變化の一)○江戸紫手向七字(常磐津。文化十三年三月河原崎座。七變化の一)。〔葱賣〕(「双面」參照)。〔團扇賣〕「葉櫻閨の團」(長唄。明和五年五月中村座)。〔二八そば賣〕「昔昔楓信樂」(長唄。明和八年七月市村座)。〔花火賣〕

「花楓穗出戀」(長唄。明和六年八月中村座)。〔黑木賣〕(「小原女」參照)。〔茶筅賣〕樹花戀浮船(通稱茶せん賣。常磐津。安永四年十一月森田座)〇詠梅松淸元(通稱茶筅賣。淸元。文政三年十一月河原崎座)等。〔針賣〕戀懸針(長唄。安永元年十一月市村座)。〔焙烙賣〕色附初玉章(常磐津。通稱焙烙賣。安永八年九月中村座)。〔蟲賣〕ひらり連理橋(通稱蟲賣。富本。天明元年七月市村座)〔扇賣〕茂儀悔睦言(通稱扇賣高尾。富本。享和元年四月市村座)。〔餅賣〕道行榮花月(通稱餅賣お花。常磐津。享和二年九月市村座)〇相肩添商人(常磐津。文化四年十一月市村座)等。〔團子賣〕千種の花色世盛(通稱大和團子。常磐津。文化七年八月市村座)。〔鰕賣〕四季詠寄三大字(通稱鰕賣。富本。文化十年三月中村座。十二ヶ月の一—四月初鰕勇み商人)。〔水賣〕閏茲姿八景(通稱冷水賣。常磐津。文化十年六月森田座。八景の一—水賣の夕照に冷水賣)〔納豆賣〕月雪花蒔繪の巵(通稱納豆賣。淸元。文政十年三月市村座。月雪花の一—雪の巻)〔しやぼん玉賣〕おどけ俄煮珠取(通稱玉屋。淸元。天保三年七月中村座。四變化の一)。〔鰺賣〕名橘花枝振(通稱あぢ賣。淸元。天保五年五月市村座。三變化の一)。〔飴賣〕花翫曆色所八景(通稱お萬が飴。常磐津。天保十年三月中村座。八景の一—兩國に飴賣の夕照)〔朝顏賣〕彩桔梗花帷(通稱朝顏賣。長唄・常磐津掛合。天保十三年六月河原崎座。五變化の一)。〔蝶々賣〕月雪花歌再夕市(通稱蝶々賣。常磐津。天保十三年九月市村座。月雪花の一—隅田の花朝)。〔文賣〕七重咲浪花土産(通稱梅枝の文賣。長唄。弘化三年三月中村座。七變化の一)。この外「吉原雀」(別項)「月雪花名殘文臺」(通稱玉兎。淸元。文政三年九月中村座)、「契戀春粟餅」(通稱粟餅。常磐津。文久元年二月市村座)等もこの類に入るべきものである。

【參考】劇代集(二代櫻田左交)〇近世邦樂年表(長唄・豐後節)〇日本歌謠集成(卷九・一〇・一一)〇歌舞伎細見(飯塚友一郎)〇江戸近世舞踊史(九重左近)　〔秋葉〕

物語 ものがたり

【名義】物語とは、「もの」を「かたる」意味であらう。もとは口唱的なもの即ち「昔々桃太郎」といふやうな口述の形式をとつたのであらう。文學史上で、物語といふのは、主として平安朝から鎌倉時代に出た傳奇的な内容をもつた小說、和歌の詞書を敷衍したやうな和歌的小話、寫實的な内容をもつた戀愛小說、歷史上の事實を述べた歷史小說等をさすのである。【性質】その性質を大別すると、Romance と Novel とに區別することが出來、その過渡期のものとしては和歌的小話をあげることが出來る。又その形態を大別すると、長篇と短篇とに分けることが出來る。これ等のいづれにも共通する特性としては、(一)特定の主人公があつて、その主人公によつてなされる事件が物語られること。(二)題材は神話・傳說の如き、全然空想的な事件の場合は勿論のこと、現實の事件を取扱つても、多くの場合、事實そのものではなくて架空の事柄を取扱ふこと(但し歷史物語・說話文學等は例外)。(三)口唱的なものであつても、又記載的なものであつても、常に敍述的形式—かたるといふ形式をとり、劇のやうに表現的な形式はとらないこと。(四)以上の如き性質から、必ず一つの筋として内容が發展して行き、單一な又は複雜な效果を生み出すものであること等の特質が考へられる。【種類】(一)「伊勢物語」(別項)によつて代表される歌物語。(二)「竹取物語」(別項)によつて代表される傳奇的物語、(三)「源氏物語」(別項)によつて代表される寫實的物語。(四)「大鏡」(別項)によつて代表される歷史物語。(五)「平家物語」(別項)によつて代表される軍記物語—敍事詩的物語。(六)「大和物語」(別項)によつて代表される說話物語等が認められる。【沿革】「古事記」や「日本書紀」や「風土記」(各別項)の說話は、口唱的なものであつて、口から口へと傳承されて行つたものであるが、物語の原始的形態はそこにあると思はれる。口誦的な神話・傳說・童話は、すべてこれを物語と見ることが出來ると思ふ。これ等の說話は「文字」が發達するに從つて、文章として書き綴られ、こゝに記載されたる物語が生れる。記載されたる物語は、初期に於ては(一)漢文的形式か、(二)漢文又は準漢文で書いたものを和文として訓讀するか、(三)漢字の一音一字式の表現形式によるかの三の場合がある。「日本書紀」は第一の場合であり、「古事記」は第二の場合であり、記・紀の歌、佛足石歌(別項)等は、第三の場合である。これ等の表現形式から、第三のものが發達して草假名が生れるやうになり、和歌から詞書へ、消息へ、物語文へと應用されて、こゝに假名文による物語が發達するに至るのである。歌物語はその橋梁として最も注意すべき存在である。和歌は或る事件とその事件を圍繞する感情との頂點を詠嘆的に表現したものであるから、歌を中心として詞書を前後にひろげ、これにやゝ詳細な敍實的形式を與へると、直ちに物語の原始的樣式たる小說となる。この小話が即ち歌物語である。歌物語は和歌を中心とするからまれに神怪な内容を物語ることがあつても、多くの場合、現實の人格の日常生活を表現する。これに對して遠く「記紀」「風土記」「萬葉」等の神話・傳說、「日本靈異記」の說話等の系統を引くものは、この世にありとも思はれない不可思議な事件を取扱ひ、現實ならぬ人間の變化あり波瀾ある生活を表現する。これ等の古物語は、歌物語のやうな一音一字式の表現形式によらず、漢文又は準漢文で書かれて、これを訓む時に和語として讀み下してゐたのであらう。それ故に物語の祖と云はれる「竹取物語」は、假名文で書かれる前に漢文又は準漢文で書かれてゐたのではないかと思はれる。かく平安時代の物語は、一は歌物語として形式的に、一は傳奇物語として内容的に、前者は單純なる日常生活の事實を、後者は複雜なる空想的な筋を眼目として發達し、假名文流行の後、漸次接近して同一に向つたやうである。「宇津保物語」や「落窪物語」等は後者の方面から、「大和物語」「平中物語」「篁物語」「和泉式部物語」「多武峰少將物語」等は前者の方面から進んだものであつて、「源氏物語」はこれ等の二傾向をあはせて大成したものと見ることが出來る。歌物語は、かく和歌を中心として發達したものであるから、私家集・日記と密接な關係があつて、その名前も往々混同される。「平中日記」が「平中物語」とも呼ばれ、「篁物語」が「篁日記」とも「篁集」とも呼ばれるが如きはこの例である。ただ物語にあつては、日記や家集のもたない性質として、物語的プロットを持つのである。平安時代には「源氏物語」に引き續いて幾多の物語が生れた。「狹衣」「夜半のねざめ」「濱松中納言物語」「堤中納言物語」「とりかへばや物語」(各別項)等が即ちこれである。また鎌倉時代にかけて「住吉物語」「唐物語」「松浦宮物語」を初め、「石淸水物語」「風につれなき」(以上各別項)等があり、室町時

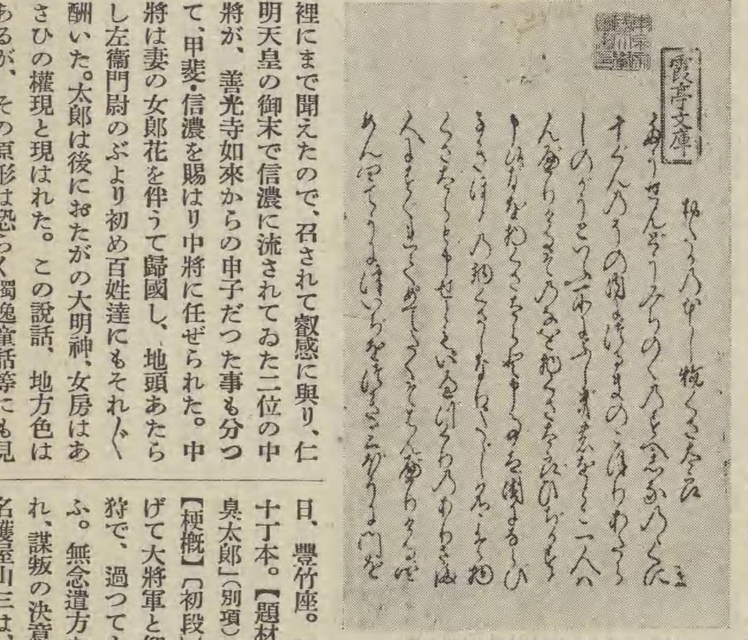
玉賣】おどけ俄煮珠坂（通稱玉屋。清元。天保三年七月中村座。四變化の一）。【鰺賣】名橘花枝振（通稱あぢ賣。清元。天保五年五月市村座。三變化の一）。【飴賣】花飯曆色所八景（通稱お萬が飴。常磐津。天保十年三月中村座。八景の一―兩國に飴賣の夕照）。【朝顏賣】彩桔梗花帷（通稱朝顏賣。長唄・常磐津掛合。天保十三年六月河原崎座。五變化の一）。【蝶々賣】月雪花歌再夕市（通稱蝶々賣。常磐津。天保十三年九月市村座。月雪花の一―隅田の花朝）。【文賣】七重咲浪花土産（通稱梅枝の文賣。長唄。弘化三年三月中村座。七變化の一）。この外「吉原雀」（別項）「月雪花名殘文臺」（通稱玉兎。清元。文政三年九月中村座）、「契綿春粟餅」（通稱粟餅。常磐津。文久元年二月市村座）等もこの類に入るべきものである。

よつてなされる事件が物語られること。（二）題材は神話・傳說の如き、全然空想的な事件の場合は勿論のこと、現實の事件を取扱つても、多くの場合、事實そのものではなくて架空の事柄を取扱ふこと（但し歷史物語・說話文學等は例外）。（三）口唱的なものであつても、又記載的なものであつても、常に叙述的形式―かたるといふ形式をとり、劇のやうに表現的な形式はとらないこと。（四）以上の如き性質から、必ず一つの筋として内容が發展して行き、單一な又は複雜な效果を生み出すものであること等の特質が考へられる。【種類】（一）「伊勢物語」（別項）によつて代表される歌物語。（二）「竹取物語」（別項）によつて代表される傳奇的物語、（三）「源氏物語」（別項）によつて代表さ

項等は、第三の場合である。これ等の表現形式から、第三のものが發達して草假名が生れるやうになり、和歌から詞書へ、消息へ、物語文へと應用されて、こゝに假名文による物語が發達するに至るのである。歌物語はその橋梁として最も注意すべき存在である。和歌は或る事件とその事件を圍繞する感情との頂點を咏嘆的に表現したものであるから、歌を中心として詞書を前後にひろげ、これにやゝ詳細な叙實的形式を與へると、直ちに物語の原始的樣式たる小說となる。この小話が即ち歌物語である。歌物語は和歌を中心とするからまれに神怪な内容を物語ることがあつても、多くの場合、現實の人格の日常生活を表現する。これに對して遠く「記紀」「風土記」「萬葉」

代のお伽草子（別項）に連る。また一方には「日本靈異記」「三寶繪詞」（各別項）の系統に立つ文學作品として、「今昔物語」「寶物集」（各別項）等があり、この系統の下に鎌倉時代の「宇治拾遺物語」「古事談」「續古事談」「今物語」「十訓抄」「古今著聞集」「蒙求和歌」「唐物語」「唐鏡」「撰集抄」「發心集」「沙石集」「雜談集」（各別項）等の說話文學（別項）が出てゐる。又歷史物語（別項）として「榮華物語」「大鏡」「今鏡」「水鏡」「增鏡」「吉野拾遺物語」（各別項）等があり、戰記物語（別項）として、「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」（各別項）等がある。かく口唱的な性質をもつて發生した物語文學は、一度記載的物語として定着したが、更に文字を讀み得ざる大衆に聞かせるために、（一）は說經の方面から、（二）は語り物の方面から、再び口唱的なものに復歸する傾向を示すやうになつた。戰記物語やお伽草子はこの事實を示すものである。（小說・文學參照）【池田】

物臭太郎（ものぐさたらう）　御伽草子（二十三篇の一）二卷【作者】不明【別名】「おたがの本地」又「をたぎ（愛宕）の本地」。本文に「おたがの大明神」とあるから「御多賀」なのであらうし、内題に「おたがの本し物くさ太郎」とある本もあり、隨つて「おたがの本地」が正しいのであるが、類音から「をたぎ」と誤られたものであらう。【成立】室町期か【諸本】古板本は御伽草子本、寛文五年板（松會開板）。又「寛延巳年晩秋初三寫之、文錦堂富梅」の奥書あるものを、細野忠陳が嘉永三年に「善光寺道名所圖會」を以て校合添朱した上・下二卷の寫本（題簽に「繼太郎物語」とあるが新しい）もある。御伽草子前編（今泉嘉山校）・御伽草紙（有朋堂文庫）・日本文學大系第十九卷・御伽草子（名著文庫）



物ぐさ太郎（東京帝大圖書館藏）

物ぐさ太郎（ものぐさたらう）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】淺田一鳥・安田蛙柱・豐文助・豐正助・難波三藏。【角書】十帖源氏【名稱】作中に出づる人物の名を取る。角書は利休から同じく風流男の光源氏を聯想し、その名稱を當時行はれた「源氏物語」を平易に直した書、「十帖源氏」（雛屋立圃著）に得たものであらう。【初演】寛延二年十一月四日、豐竹座。【諸本】七行百三丁本。十行七十丁本。【題材】物ぐさ太郎はお伽草子の「物臭太郎」（別項）に材を得たものと思はれる。【梗概】〔初段〕（小栗栖）高富久吉は天下を平げて大將軍と仰がれ、その臣佐々木義賢は卷狩で、過つて主の祕藏の鷹を射て辱しめに會ふ。無念遣方なく、浪人不破伴左衞門に唆され、謀叛の決意をする。（山三館）義賢の執權名護屋山三は、江州高島の留守を預つてゐたが、ふと三筋町で伴左衞門と傾城葛城を爭つた昔の夢を見る。時に千利休から義賢と伴左衞門との謀叛の報が來るので、馬に跨り都へ走る。（義賢館）義賢の家では、伯父彈正が長谷部雲谷と計つてお家を横領せんとし、また伯父の身で義賢の妹蘆屋姬をもつけ廻してゐる。それとも知らず義賢は、急ぎ駈け着けて諫言する山三を却つて勘當してしまふ。折柄館は大騷動となり、系圖や御旗は盜まれ、義賢は賊手に殪れる。〔二段〕（天神境内）日毎に見窄らしい姿をして境内に立ち盡す一人の老人がゐた。人呼んで物臭太郎と云ふ。惡人長谷部雲谷と何かの役にもと召連れて行く。この日參詣に來た千利休の娘早枝は、偶々茶屋で席を同うした狩野歌之介を見染める。（金魚屋金八宅）母親の死後孝行者の金八は、親として養へるやうな老母を求めて居た。名護屋山三の母は、これ幸と母親になつて入り込み、先づ差迫つた借錢を濟ましてやつた後で、金八の命が貰ひたいと申出る。義賢を殺した科人に彼を仕立てお家の斷絶を救はうとするのである。かくて金八は悲しみの妻子を殘して捕はれて行く。後に老母は形見の一腰から、金八は良人の下借腹の子と知つて義理を立てて死ぬ。〔三段〕（彈正館）物臭太郎はおどけまじりに、山三の妻葛城に蘆屋姬の在家を問ひ、又紛失の寶を奪ひ返さうと思ひ込んだ山三の奴岡平の詮議をする。とど太郎の智慧で姬は坂本の千利休方に隱してある事が解り、太郎は早速姬の首受取りに向ふ。（利休隱家）利休の妻柵は娘の早枝を身代りに立てようとしてゐる時、相の山姿で狩野歌之介と妹撫子が來掛り、撫子を身代りにと差出す。歌之介こそは以前早枝が見染めた男であるばかりでなく、死んだと思つてゐた許婚であつた。今更に早枝は心が亂れ、同情して撫子と姬とは

互に死を爭ふ。母栅は遂に娘を斬る。歌之介も殺氣立つて大事を聞き知つた長谷部雲谷を殺し、早枝の首を以て姫の首と云へと物臭太郎に迫る。併し意外にも變裝を除けば物臭太郎は實は千利休であつた。彼はかくして惡人の樣子を探り舊主義賢に報いようとしてゐたのである。利休は娘の首を持ち、再び物臭太郎になつて彈正の許へ、歌之介は蘆屋姫を預り元の相の山となつて出て行く。〔四段〕(道行袂の往合)歌之介に連れられて姫と撫子は山三を尋ねて都へ向ふ。(追分)金八の妻宮城野は娘こみつを連れて捕はれ行く良人を追うて來たが、非道にも同じく罪人として娘諸共廓へ賣られて了ふ。(伴左衞門屋敷)金八は白洲に引出されて水責めに逢ふ。隣には廓に賣られた娘こみつが、歌を覺えぬとて叩かれてゐる。この悲慘な樣を見て義賢の御臺お國御前は密かに決心する。(奧座敷)御臺は伴左衞門が忠義の故に心を惹かれたと見せ、色仕掛けで首尾よく系圖と御旗とを取返す。山三は俄に現はれて伴左衞門を武智の殘黨と見破つて大捕物となる。觀念した伴左衞門は主君光秀の最後の樣を語つて後、若君の手に掛つて死ぬ。一方御臺は身の穢を恥ぢて自害した。〔五段〕(彈正の城內)一味に死なれて彈正一人立て籠つてゐる所へ、物臭太郎は阿呆顏をして丈高・小男・不死身等の怪しげな人數を澤山連れ込む。結局、物臭太郎を初め、誰も彼も廻し者だと知れて、彈正も今は手の出しやうもない。かくて物臭太郎の利休は彈正の髻を斷つて風雅の儕となし、連歌の友として連れ立つ。

【解說】背景には、久吉に對する光秀殘黨の謀叛が脚色されてゐるが、本筋は久吉の臣佐々木義賢一家のお家騷動に盡きる。全曲の山は三段目利休隱家の場であつて此處のみが優れてゐる。ただ四段目伴左衞門屋敷の場で茶屋と白洲とが交互に謠はれてゐるのは演出上注意すべき場面と思はれる。本曲に於て最も異色のあるのは物臭太郎と云ふ人物である。これは初めてその本身である利休の姿を現はす場面卽ち利休隱家の場で驚くべき效果を齎した。併しそれ以外の場ではただにおどけの材となつたのみである。而もそのおどけが餘りにも取つて着けたやうであり、餘りにも長々しく、又繰返し演ぜられるので全篇をだれさせた恨みがある。蓋し操劇の性質上おどけの勝つ事は失敗の因である。本作は他の淨瑠璃の諸名作と共に、淨瑠璃摸倣期の歌舞伎劇に取入れられ、淨瑠璃よりも寧ろ歌舞伎の方面に重きをなし、上方の劇場に屢々上演されてゐる。なほ黃表紙等にも影響作を見られる。

【參考】近世邦樂年表(義太夫節之部)　(鶴見)

物盡し物揃へ　ものづくし ものぞろへ

【名義】「國づくし」「引物づくし」、或は「源氏ぞろへ」「美人ぞろへ」等の如く、わが歌謠史に於て特に著しい事物の蒐集列擧に興味を見出す特殊な表現形式である。品目類聚の前者を「物は盡し」「何々盡し」、後者を「何々揃へ」とも云ひ、揃は汰の字を當てるものもある。【沿革・性質】物盡し發生の心理的基礎を示すものとして、「萬葉集」卷十六の詠込みの歌に於ける智的遊戲、蒐集的興味の存在が注意され、數へ歌(別項)も、その原始的な姿をこの中に現はす。催馬樂の「大芹(おほぜり)」には双六博奕、「陰名(くぼのな)」には陰名が蒐集され、それが既に十分な意識を以て行はれ、後者には物はの冠(かむり)形式の萌芽さへ見られる。その物盡しが今樣(別項)に至つて急激に成長を遂げ、その興味が壓倒的な地位に立ち、道行(別項)も、實は物盡しを通して成立した。これが一面、平安貴族の教養に見る列擧法と並行する。平安貴族の社交人としての教養が、記誦とその賢明なる活用を生命とするために、列擧法が學習の一手段となつてゐる。「和名類聚鈔」(別項)の成立から、それに興味的な分子を加へる往來物發生の主因は、蒐集列擧の必要にある(「新猿樂記」にも、この事が見られる)。教科的なものを離れて隨筆的な感興から蒐集を試みる時は、機智の興味が喚起され、この立場になつたものが「清少納言枕草子」(別項)の物は盡しである。物はとは一つの範疇を立てて統一を求める心であつて、選擇された一群を待つ興味を持つ。清少納言はその感覺の鋭さと、スケッチ的な描寫力の豐富さとを以て列擧法を縱橫に利用することが出來た。一つの範疇を立て、全體的な渾沌の中から一流の觀察を以て取捨選擇を加へて抽出して來るところに、「とほくてちかきもの　ごくらく、舟の路、男女の中」の如き形式が生れた。而してその鋭い感覺は、「すさまじきもの」「めでたきもの」等の系列までも生み出した。この「物・事」の題目的な部立は、「和泉式部集」にも見られる。消息・往來物(別項)は、無味乾燥になり易い教科書が、この興味を取入れたものである。この好尙は遙かに「堤中納言物語」(別項)の「よしなしごと」に具體化されてゐる。今樣歌謠に廣く物盡しが見られる中にも、その四句神歌に於て壓倒的である。「梁塵祕抄」(別項)では(一)「物は」が定立されてゐるもの六十一首、(二)副次的地位にあるもの十七首、併せて七十八首の多數を占め、その間に更に類型が生ずるに至つた。例、

小鳥の樣かるは、四十雀鶸鳥つばくらめ、三十二相足らうたる啄木、鴛鴨魚狗鳰鳥川に遊ぶ。(梁塵祕抄・四句神歌)

明確な「物は」の定立がある故に「物は盡し」であり、やがて警拔な穿ちを必要な價値條件とする所に、「上下も分かぬは戀の道、頭白かる翁どもの若女好み、姑の君の物妬み」の機智(ウイット)の文學となる。又數値に關するものや同音の繰返しを喜ぶものがある。これ等に貴族的のものも庶民的のものもあつて兩階級の興味の合流が見られる。社寺參詣熱が高潮に達し、地理的關心を高めた當時に、これに地理的歌枕的蒐集が加はるのは當然で、地名に關する物盡しが多く、「何れか……へ參る道」を冠する道行(別項)への中間に立つてゐる。延年歌曲(別項)にも見えるが、宴曲(別項)が完全にこの興味を繼承して頂點に達し、その例は極めて豐富で、今樣から宴曲への展開の過程を示す「水ノ白拍子」は「水のすぐれておぼゆるは」と云ふ水盡しになつてゐる。宴曲「雙六」は博奕雙六の品々を擧げる催馬樂・今樣、「新猿樂記」に次ぎ、繼承が考へられる一例である。この列擧趣味が武士的趣味と合流して「平家物語」「源平盛衰記」の物揃へを生ずる。物揃へは本質的には物盡しであるが、「物は」の定立の意識、從つて選擇蒐集の意識が稀薄で、列擧に重點があり、人物を主とする。「平家物語」覺一本に於ては、「公卿揃、源氏揃、大衆揃、朝敵揃、一門都落、三草勢揃」その他がある(「平家正節」では汰を道行と共にまとめて一部としてゐる)。物揃へは間狂言(別項)にもあり、淨瑠璃(別項)に比較的音樂部分の構成にとられるが(「十二段草子」に「花ぞろへ、美人ぞろへ」等)、歌謠にはあまり優勢でない。物盡しは、狂言小歌・田樂歌

けで首尾よく系圖と御旗とを取返す。山三は俄に現はれて伴左衞門を武智の殘黨と見破つて大捕物となる。觀念した伴左衞門は主君光秀の最後の樣を語つて後、若君の手に掛つて死ぬ。一方御臺は身の穢を恥ぢて自害した。

〔五段〕（彈正の城内）一味に死なれて彈正一人立て籠つてゐる所へ、物臭太郎は阿呆顏をして丈高・小男・不死身等の怪しげな人數を澤山連れ込む。結局、物臭太郎を初め、誰も彼も碌し者だと知れて、彈正も今は手の出しやうもない。かくて物臭太郎の利休は彈正の髻を斷つて風雅の僧となし、連歌の友として連れ立つ。

【解說】背景には、久吉に對する光秀殘黨の謀叛が脚色されてゐるが、本筋は久吉の臣佐々

物盡し物揃へ　ものづくしものぞろへ

【名義】「國づくし」「引物づくし」、或は「源氏ぞろへ」「美人ぞろへ」等の如く、わが歌謠史に於て特に著しい事物の蒐集列擧に興味を見出す特殊な表現形式である。品目類聚の前者を「物は盡し」「何々盡し」、後者を「何々揃へ」とも云ひ、揃は汰の字を當てるものもある。【沿革・性質】物盡し發生の心理的基礎を示すものとして、「萬葉集」卷十六の詠込みの歌に於ける智的遊戲、蒐集的興味の存在が注意され、數へ歌（別項）も、その原始的な姿をこの中に現はす。催馬樂の「大芹（おほせり）」には陰名（くばかな）が蒐集され、それが既に十分な意識を以て行はれ、後者には物はの冠形（かうり）式の萌芽さへ見られる。その物盡しが今樣（別項）に至つて急激

諸・曲舞歌謠・幸若舞歌謠・音頭口說踊歌・淨瑠璃・三味線歌謠・放下（はうか）・千秋萬歲・鳥追・祭文・阿房陀羅經等の遊藝人歌謠詞章などに見られ、「二條河原落書」は「此頃都に流行るもの」に始まり、一休「はやるものなに〳〵」があり、「尤之雙紙」（別項）は、「枕草子」に學んだ「物（もの）」の蒐集で、「しゆらく城の時分京はらはの小うた」なる「まうそ〳〵赤事申そ」の童謠を載せてゐる。歌謠はその形式に制限があるところから單純な適合し易い種々の表現形式を求めて類型化する。歌謠に要求されるほぎ詞・いはひ詞（……がため、……ほめ等にその類型化を見る）や美辭を、多分に而も容易に盛るために物盡しが第一に取上げられる。その他歌謠に於ける數へ唄・起請・四方眺め等の物盡し物揃へとの握手が見られる。特殊な物盡しとして注意すべきは、或る事柄を述べる詞を、別の物盡しで構成して興味を與へるものである。狂言にも魚說教（別項）の如きが見られ、歌舞伎の臺詞・淨瑠璃・祭文等にも發見される。物盡し物揃へが近世歌謠に普遍化すると、諸種の題名に用ひられると共に、啓蒙的手段として採られ來り、「世界國盡」（別項）等が明治に入つてなほ必要であつた。物は盡しと意識的類似を有つものに、「名寄」及び前句附から來た「物は附」（別項）がある。

【志田（延）】

【參考】日本歌謠集成（卷五以下）○古歌謠の本質（藤田德太郎（國語と國文學昭和二ノ四））○梁塵祕抄（志田延義（岩波講座日本文學））○道行の展開（志田延義（月刊日本文學昭和七ノ八・一〇））

寄物陳思歌　ものによせておもひをのぶるうた

和歌【名義】「萬葉集」の分類法の一。正述心緒（ニブル）歌と譬喩歌（各別項）の中間に在る表現方法である。即ち或る物にすがつて自己の思ひを述べた歌である。而してこの名目は、「正陳心緒（ココロヲ）」と相對して名づけたものである。【性質】「物にたよつて表現する」とは、實際には所謂序詞、或は序歌の形で現はれてゐることが多い。即ち「夕べ置きて朝（あさ）は消ゆる白露の消（け）ぬべき戀を吾はするかも」（卷十二）の歌の場合、「消えさうに思はれる苦しい戀」と云ふ本意を現はすのに、「白露」に依頼して心を現はし、直接に表現しようとしない。これが「寄物陳思歌」の本質であつて普通序詞と呼ばれてゐる。

【用例】「萬葉集」卷十一の「處女（をとめ）等を袖振る山のみづ垣の」の歌から「敷細布（にきたへ）の枕に人は言問（ことど）へや」の歌まで百二首（柿本朝臣人麿之歌集から採錄）。次に同卷「朝影に吾が身はなりぬ」の歌から「明けぬべく千鳥しば鳴く」の歌まで百九十首。次に卷十一「人見れば表（うら）を結びて」の歌から「淺葉野に神小菅」の歌まで十三首（人麿歌集から採錄）。次に同卷「かくしのみありける君を衣（きぬ）ならば」の歌から「思はぬを思ふと言はば眞鳥住む」の歌まで百三十七首。以上四ケ所、四百四十二首の歌を含む部類の名稱である。なほ實際から言ふと、卷十一・十二以外の卷の「譬喩部」及び「相聞部」には、この「寄物陳思」の部目を立てて他と區別立てすべき作が多數ある。殊に卷十に於ける如く「寄ニ――ニ」と題のある部分は、例外なく「寄物陳思歌」と見てよい。しかし普通區別を立てず「譬喩部」「相聞部」中に混入されてゐる。故に「寄物陳思歌」と云ふ時は、專ら卷十一・十二の人麿歌集所出のもの及び同卷の人麿歌集以外のものを指して言ふのである。なほこの標目は、人麿歌集のが源で、卷十一・十二の人麿歌集以外のは、前者にこの名目のあつたのを、卷十一・十二の編者がそのまゝ借用したものでないかと思はれる。卷十一・十二で人麿歌集の「寄物陳思部」の方が前にあつて、次に卷十一・十二の編者の「寄物陳思部」があるのは、前者が源で後者がその眞似とすべく、反對だつたら順序が逆さまになつてゐる筈である。又この四ケ所以外にないのだから、兩者とも無關係に第三者から借りて來たとも考へられない。故に人麿歌集の編者が用ひた分類法で、卷十一・十二の編者がそのまゝそれを借用したのだと見るが穩當であらう。

【他の分類法との關係】正述心緒ニ歌と寄レ物陳レ思歌と譬喩歌との三つの分類法は、「萬葉集」の相聞歌（別項）を三つに分つ大きな區分法である。第一が本意だけで物を全然現はさない。第二のが本意と物とが、一首のうちに併存してゐる。最後のが物だけで本意を全く現はさない。この三つの關係は、「毛詩」の諷・興・比の三つの詩の區分法と全然一致してゐる。ただ支那のはあらゆる詩の表現法の三區分だが、「萬葉集」のは相聞歌だけの範圍である點が違ふ。武田祐吉氏は「萬葉集」が「毛詩」の區分を眞似たものと述べてゐる（上代國文學の研究）。この兩者の關係は、なほ考究してみる必要がある。なほ右の三分類が「相聞」の範圍内だけの分類法だと云ふことは、この三分類の完全に現はれてゐる卷十一・十二は、その卷頭に「古今相聞往來歌類」と題してあることによつて明瞭である。古や今の相聞歌の類を集めた卷と言ふ意である。この場合の譬喩歌と他卷の譬喩歌とはその意味が違ふ。（譬喩歌參照）

【影響】「古今集」以下に於ては、「萬葉集」の相聞部に相當する「戀部」では、その部内を更に細かく分けると云ふことは行はれてゐない。併し實際に於ては、この寄物陳思及び譬喩の云ふ水盡しになつてゐる。宴曲「雙六」は博奕雙六の品々を擧げる催馬樂・今樣・「新猿樂記」に次ぎ、繼承が考へられる一例である。この列擧趣味が武士的趣味と合流して「平家物語」「源平盛衰記」の物揃へを生ずる。物揃へは本質的には物盡しであるが、「物は」の定立の意識、從つて選擇蒐集の意識が稀薄で、列擧に重點があり、人物を主とする。「平家物語」覺一本に於ては、「公卿揃、源氏揃、大衆揃、朝敵揃、一門都落、三草勢揃」その他がある（「平家正節」では汰を道行と共にまとめて一部としてゐる）。物揃へは間狂言（別項）にもあり、淨瑠璃（別項）に比較的音樂部分の構成にとられるが（「十二段草子」に「花ぞろへ、美人ぞろへ」等）、歌謠にはあまり優勢でない。物盡しは、狂言小歌・田樂歌

ものの　あはれ　文學論

【意義】「もののあはれ」は平安時代の人生理想であり、文學理想であるが、同時にそれ以後の日本文學を貫いて流れる重要なる一の精神であり理念である。「もののあはれ」の語義は本居宣長が「源氏物語玉の小櫛」で言つた如く、「あはれ」を主なる要素とする。「あはれ」は本來感動であつて、すべての感動をさすのであるが、「あはれ」が美の領域として意識されるに從つて、すべての感動から感動の調和された狀態を重んずるやうになり、この點から情趣的性質を有してくる。かつ「あはれ」とともに平安文學に常に用ひられる「をかし」とを比較すると、「をかし」が同じ情趣的性質であり、調和的感情であつても、明るい朗かな性質を有するに對して、「あはれ」の方がしみ〴〵とした情趣となつてゐる。「源氏物語」に「あはれ」の語が多く、「枕草子」に「をかし」の語が多いのも、その點から說明される。かくの如き「あはれ」の性質は明瞭であるが、「もののあはれ」の性質に就いては、種々の見解が見られる。「もののあは

れ」が「もののあはれ」と構成に於て異なることは明かであるが、「もののの」の他語に接續する場合は「もののけ」「もののふ」等多いのである。「ものの」を對象と見て對象としての「もの」によつて起る「あはれ」と見る立場と「もの」をより一般的な普遍的な「もの」と見る立場とがある。和辻哲郎氏が「日本精神史研究」の中に、「意味と物とのすべてを含んだ一般的な限定せられざるもの」とされるのは後者の見解である。「ものの」が「あはれ」を生ずる對象といふ點から進んで、「あはれ」そのものの一般的な形象といふ點を現はしてゐると見ることも出來る。かくて「もの」と「あはれ」とが相互に限定されつつ、情趣の形象といふべき境地を構成し、更にそれをより高次な段階に進展せしめる。かくの如き構成を有する「もののあはれ」はその内容に於て理性と感情との調和を求むる精神であり、調和的である故に、優美な性質を有すると見られる。この調和的な優美な性質を主とする所から、「あはれ」を生ずる對象も限定され、植物にしても梅・櫻・卯の花・山吹といふ如きものを主とし、動物にしても鶯や時鳥等に限定され、季節にしても春と秋とが主となり、夏にしても青葉の夏、冬にしても花とみまがふ雪のふる冬に美を見出して、炎熱の夏や嚴寒の冬は「もののあはれ」的な美の領域ではないのである。感情にしても調和的でない激情の如きは、「もののあはれ」的ではないのである。「もののあはれ」を知るといふことは、凡てのものの調和的な性質であり、それを求める精神となるのである。「めやすし」「つきづきし」といふのも、「もののあはれ」を他の方面から表した語である。

【成立と展開】「もののあはれ」が文學や生活の理想として自覺されたのは平安時代に於てであつて、平安文學は「もののあはれ」が發生し、成立し、完成し、爛熟してゆく過程であるとも見られる。その最も完成したのが「源氏物語」（平安文學參照）であり、「源氏物語」以前の文學は、その發生し成立してゆく過程であり、「源氏物語」以後は、その爛熟してゆく過程である。さうして「源氏物語」の基調を「もののあはれ」であるといふ點を明確に論じたのは本居宣長であつて、宣長は「源氏物語」の中から「もののあはれ」といふ語を十數ケ所集めるとともに（詠歌疑條）、「源氏物語」の本文の解釋から歸納的に明かにしたのである。それは中世に於ける「源氏物語」の宗教的解釋、近世に於ける儒教的解釋に對して、正しい「源氏物語」の解釋といふべきであり、平安時代の生活や文學の眞實なるものを闡明したといふべきである。さうしてこの「もののあはれ」が人生理想・文學理想となつたのは、大和時代の生活や文學からの必然的展開であるが、また平安時代の都であつた京都の美しい自然や、この時代の文學が假名によつて表現されたこと、作者が多く宮廷に仕へた女性であつたことも「もののあはれ」の内容を定めるのに力あつたであらう。そこに「もののあはれ」は平安時代の生活や文學の特殊性を多く含んでゐるのであるが、この「もののあはれ」的なるものは、その根柢に普遍的な「まこと」（別項）を有するのであり、この普遍的なるものと特殊的なるものとの融合の上に成立してゐる「もののあはれ」も各時代の文學の中に貫いてゐることは軍記物語や擬古物語を見ても、又「徒然草」や「花月草紙」を見ても明かである。（久松）

【參考】源註拾遺　契沖　○源氏物語玉の小櫛　本居宣長　○日本精神史研究　和辻哲郎　○本居宣長　村岡典嗣　○上代日本文學の研究　久松潜一

物具裝束抄（もののぐしやうぞくせう）　有職　一卷

【著者】花山院忠定　【諸本】群書類從卷一一八裝束部第七所收。【解說】劍・平緒・帶・平胡籙・束帶・直衣・禮服・布衣・唐鞍具・移具・和鞍具・鞦・切付・手綱・鞍覆・差繩・車・榻・下簾・雨皮・小忌・青摺・挿頭花・隨身袴色・纐纈文・劍幷平胡籙裝束、馬副・手振・小舍人童・雜色・車副・御厩舍人・居飼・馬部・飼丁等の裝束に就いて記したもので、奥書に「應永十九年八月廿一日書寫之、本者花山院亞相忠定卿自筆也、仍文字悉不違寫之訖」とある。（石村）

物の節（ものの ふし）　「東遊歌」を見よ。

物之本江戸作者部類（もののほんえどさくしやぶるゐ）　「近世物之本江戸作者部類」を見よ。

物云舞（ものいふまひ）　「虯曲」を見よ。

物は盡し（ものづくし）　「物盡し物揃へ」を見よ。

物者附（ものづけ）　雜俳　【解說】寛保代より江戸に起り、點者が課せる「○○する物は」といふ題に應じて答句を附けるもので、字數に制限はないが、出來るだけ簡潔で適切而も奇想天外、意味深長なるを可とするのである。

（甲）呆れた物は―尼寺の木魚
（乙）白い物は―火の衣
（丙）さがる物は―野馬臺の蚰
（丁）尋ねる物は―すゞめの宿

の如きは、その附口の例である。甲は尼寺に圖抜けて大きな木魚があるといふのは表の義で、裏には尼僧の身でありながら木魚講の仲間入をして、肩で呼吸をしてゐるのに呆れたとの意で、二義を籠めた面白い句である。乙は火を緋に利かせて表面全く反對の語を用ひた奇拔な趣向、丙は野馬臺の詩に當惑してゐる吉備大臣を導いた下り蜘、丁はお宿は何處（いづこ）の舌切雀であるが、二つ共に單純で意味深長なる點に於ては甲に、奇想天外の點に於ては乙に及ばざる句案である。【西原】

摸倣藝術（もはうげいじゆつ）　美學　【獨】Nachahmungskunst.　【解說】繪畫彫刻或は或る種の文學について、外界の事物の何物かが描寫され摸倣されてゐると觀る場合、それ等を摸倣藝術と謂ひ、非寫實的な藝術と區別され、そして「表出」（別項）といふ語と摸倣といふ語は對立的に考へられて來る。ギリシヤ時代には彫刻が主要な形象藝術であつたがために、その摸倣的寫實の點から摸倣する藝術といふ考が生じたことは明かではあるが、事物の本質的特徴が摸倣活動にのみ據るとは、心理學的に不合理で、記憶・想像・感情等の働きが加はることは無論であるから、藝術製作の基調が假に摸倣本能的活動であるとしても、嚴格に摸倣藝術（別項）なるものは存在しない。ヴントは記憶藝術（別項）と區別して摸倣藝術を擧げた。主觀的に摸倣本能の活動による藝術であり、客觀的に考へれば、對象との形而的類似を目的とする藝術をかく呼んでゐるのである。（藝術の分類參照）　【村田】

摸倣說（もはうせつ）　「摸倣本能」を見よ。

摸倣的（もはうてき）　美學　【英】Imitative.　【解說】普通、獨創的（別項）或は表出的と對立する意味に用ふる言葉であるが、藝術論上摸倣といふことが論ぜられる場合を區別すれば、（一）プラトンの美學思想に發する所謂藝術摸寫說でいふ意味で、藝術の本質は實在乃至理念の摸倣であるといふ場合、（二）藝術活動の起原は生理的にか心理的にか摸倣活動にあるとする場合、殊に藝術の起原及びその發

の調和的な優美な性質を主とする所から、「あはれ」を生ずる對象も限定され、植物にしても梅・櫻・卯の花・山吹といふ如きものを主とし、動物にしても鶯や時鳥等に限定され、季節にしても春と秋とが主となり、夏にしても青葉の夏、冬にしても花とみまがふ雪のふる冬に美を見出して、炎熱の夏や嚴寒の冬は「もののあはれ」的な美の領域ではないのである。感情にしても調和的でない激情の如きは、「もののあはれ」的ではないのである。「もののあはれ」を知るといふことは、凡てのものの調和的な性質であり、それを求める精神となるのである。「めやすし」「つきづきし」といふのも、「もののあはれ」を他の方面から表した語である。
【成立と展開】「もののあはれ」が文學や生活や文學からの必然的展開であるが、また平安時代の都であつた京都の美しい自然や、この時代の文學が假名によつて表現されたこと、作者が多く宮廷に仕へた女性であつたことも「もののあはれ」の內容を定めるのに力あつたであらう。そこに「もののあはれ」は平安時代の生活や文學の特殊性を多く含んでゐるのであるが、この「もののあはれ」的なるものは、その根柢に普遍的な「まこと」(別項)を有するのであり、この普遍的なるものと特殊的なるものとの融合の上に成立してゐる「もののあはれ」も各時代の文學の中に貫いてゐることは軍記物語や擬古物語を見ても、又「徒然草」や「花月草紙」を見ても明かである。〔久松〕
【參考】源註拾遺 契沖○源氏物語玉の小櫛本

江戸に起り、點者が課せる「○○する物は」といふ題に應じて答句を附けるもので、字數に制限はないが、出來るだけ簡潔で適切而も奇想天外、意味深長なるを可とするのである。
(甲)呆れた物は—尼寺の木魚
(乙)白い物は—火の衣
(丙)さがる物は—野馬臺の蜘
(丁)尋ねる物は—すゞめの宿
の如きは、その附口の例である。甲は尼寺に圖抜けて大きな木魚があるといふのは表の義で、裏には尼僧の身でありながら木魚講の仲間入をして、肩で呼吸をしてゐるのに呆れたとの意で、二義を籠めた面白い句である。乙は火を緋に利かせて表面全く反對の語を用ひた奇拔な趣向、丙は野馬臺の詩に當惑してゐ

トは記憶藝術(別項)と區別して摸倣藝術を擧げた。主觀的に摸倣本能の活動による藝術であり、客觀的に考へれば、對象との形而的類似を目的とする藝術をかく呼んでゐるのである。(藝術の分類參照)〔村田〕

摸倣說(もはうせつ) 「摸倣本能」を見よ。

摸倣的(もはうてき) 美學〔英〕Imitative.
【解說】普通、獨創的(別項)或は表出的と對立する意味に用ふる言葉であるが、藝術論上摸倣といふことが論ぜられる場合を區別すれば、(一)プラトンの美學思想に發する所謂藝術摸寫說でいふ意味で、藝術の本質は實在乃至理念の摸倣であるといふ場合、(二)藝術活動の起原は生理的にか心理的にか摸倣活動にあるとする場合、殊に藝術の起原及びその發展に關して摸倣本能から說明する場合、(三)藝術の或るものについて觀れば、外界現實に存在するものが表現の形式の上に見出されるといふところから、作家主觀を表出する藝術といふに對して摸倣の藝術といひ繪畫彫刻乃至或る種の文學など擧げる場合の四つに分けられる。藝術の本質が摸倣であるといふことについては種々の點から否定され得る。(イ)藝術制作の獨創性卽ち天才といふ視點から、(ロ)藝術に功利的乃至道德的意義を認めるところから、(ハ)凡ての藝術は摸倣的でないといふ點から。勿論藝術の發生といふ點から見れば、舞踊や或は原始的なパントマイムの如きは摸倣と關係があるが、大部分の藝術及び進步した社會の藝術に關しては摸倣と全く關係はない。又造形美術のあるものが、偶々自然物の摸倣であるかのやうに見えるのも、實は現實の有する或るものの再現であるにすぎないと考ふべきである。最後に、藝術の生產が作家の天才にありとする考へからすれば、凡ての藝術は全く摸倣的でない。摸倣を論じたものにタルドの「摸倣の法則」(G. Tarde: Les lois de l'imitation 1890)があるが、彼は社會は反復・反對・順應といふ三つの心理相互作用から成り、反復卽ち摸倣・順應は發明であるとし、發明は摸倣され、反對され、而して又發明によつて順應調和の段階があらはれるといふ循環作用を以て社會の本質を說いた。同じく藝術の世界でも發明者と摸倣者があり、天才者は前者であつて藝術はこれ等によつて興るが、又一般的には社會の摸倣者によつて藝術は發展すると說く。併し摸倣といふ本來の意味から云へば、藝術美の生產性、作家の心的作業の點から見て摸倣的であるといふことは藝術上重要な意義を持たない。藝術を分類する上について表現藝術に對して摸倣藝術といふ場合があつても、それは比較、說明する便宜上の意味で用ふるにすぎない。藝術享受の方面に於て、摸倣的活動を擧ぐる場合がある。グローセの內的摸倣說(別項)の如きである。(天才・藝術の起原・摸倣本能・獨創性・藝術の分類參照)〔村田〕

摸倣本能(もはうほんのう) 美學〔獨〕Nachahmungsinstinkt (—trieb)【解說】美學上摸倣の概念は、ギリシヤに現はれて以來多樣に用ひられ、且つ又、數世紀藝術論を支配した。(一)プラトーに於ては、現實の世界はイデア又は理想の寫しであり、そして又摸寫される對象であるとされた。故に現實を摸寫する藝術はイデアの摸寫の又摸寫である。手本はイデアであるから摸寫されるものは現實的實在のものに限らない。卽ちこの意味の摸倣はイデアに對立する點で藝術の本質に關して言はれてゐる。(二)藝術の中には現實自然を再現してゐるものがある。形而に於て手本卽ち對象は現實である。かくして藝術は表現ではなく客觀事物の眞實の摸寫である。この意味の摸倣は寫實主義(別項)理論に於ける場合で、佛蘭西のタルドは彫刻・繪畫・詩(自然から發見したものの摸倣)も、或は又建築・音樂(先人の發明したものの摸倣)等すべて摸倣であると說く。(三)藝術の起原が生理的に或は心理的に摸倣活動にあるといふ場合。アリストテレスはその「詩學」の中で云ふ、「詩は一般に二つの原因から現はれるかのやうである。摸倣の衝動と調和及リズムへの衝動と」。而して摸倣衝動は小兒の時から人間にあるもので、人間は摸倣を通して最初の教課を學び知るのである。又「藝術は多少に拘らず、ある自然物に似る。何故なら作家が表現しようと試みるところの感情は、それを客觀化してゐる自然物を彼が靜觀することから得られる」と。併し、藝術活動を摸倣活動或はそれを本能として唯一の原因動力であるとして說くのは誤りが多い。(一)摸倣するといふことが、すでに自己的內面的でなく外部的意味を有する。例へば、表情に對して表情を摸倣するといふ一義的意味にしか通用しない。(二)俳優の身振の如き場合には適合するやうに見えるが、彼の身振・動作・表情はやはり想像による改變がある。(三)要するに藝術活動の自由性、創造的必然が說明されない。かくして摸倣本能說は表出說(別項)に對立してゐる。なほ藝術鑑賞の場合については「內的摸倣說」を參照せよ。(美的動因參照)
【參考】フィドラア「藝術論」金田廉譯○深田康算全集(一・三卷)、○アリストテレス「詩學」松浦嘉一譯〔村田〕

紅葉合(もみぢあはせ) 御伽草子「玉水物語」を見よ。

紅葉狩(もみぢがり) 「鬼女物の謠曲」を見よ。

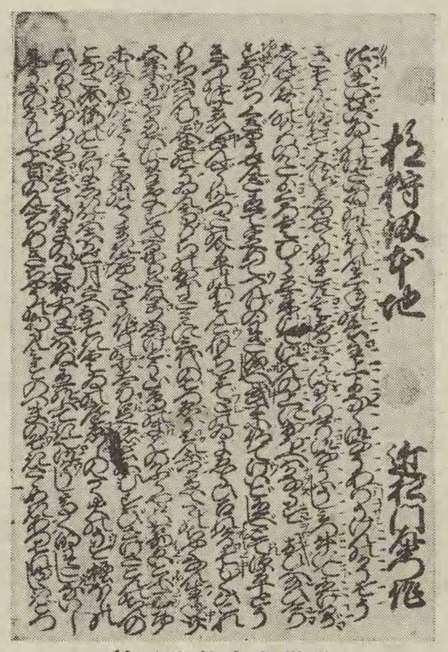
紅葉狩(もみぢがり) 所作事 淨瑠璃物(新歌舞伎十八番の一)【本名題】新曲紅葉狩【通稱】紅葉狩【初演】明治二十年十月二十日初日、東京新富座「三府五港寫幻燈」中幕〔作詞〕古河默阿彌〔曲節〕義太夫節と常磐津節と長唄との三方掛合〔太夫〕義太夫節は竹本菖蒲太夫、常磐津節は常磐津太夫文中〔立唄〕五代芳村伊十郎〔作曲〕義太夫節は鶴澤安太郎、常磐津節は六代岸澤式佐(後の五代古式部)長唄は三代杵屋正次郎〔振附〕九代市川團十郎、【傳來】曲・振ともに傳存。【由來】戸隱山の鬼女の傳說は、まづ「今昔物語」などに傳へられ、これが戲曲に脚色されて謠曲の「紅葉狩」となり、古淨瑠璃「平維茂紅葉狩」(天下一大和少掾正本明曆四初秋日刊)や「新撰紅葉狩」(土佐少掾橘正勝正本)等ともなり、更に近松の「栬狩劒本地」(別項)や竹田出雲の「平維茂凱陣紅葉」などともなつた。歌舞伎にも既に元祿期に見え、正德三年七月、江戸山村座「善光難波池」第四番目に、二代市川團十郎の本田善光役と山中平九郎のとう平役とで、薩摩外記の淨瑠璃で演じた紅葉狩などが古い。その後、所作事としては「紅葉狩猩々丹前」(富本、明和八年十一月市村座)、「陸花紅葉狩」(長唄、安永二年十一月中村座)、「色見草月盃」(通稱、古紅葉狩。長唄、安永五年七月森田座)、「奉掛色浮世圖畫」(通稱、額拔け紅葉狩。長唄、文化七年八月中村座)、「重陽紅葉狩」(長唄、常磐津、竹本三流三方掛合、嘉永二年九月市村座)、「廿三回篋繪草紙」(楓狩。長唄と岸澤との掛合、明治七年三月守田座)等が現はれたが現存するのは、長唄の「古紅葉狩」(別名、物思ふの紅葉狩)のみで、それも曲だけである。【題材】本曲は前記の「今昔物語」や謠曲の「紅葉狩」、又は「重陽紅葉狩」等を參酌して書かれたものであるが、主として謠曲に據つたものである。地の長唄・常磐津・竹本の三方掛合は、無論「重陽紅葉狩」の例に倣つたのである。【諸本】默阿彌全集第二十卷・舞踊劇集(日本戲曲全集)等所收。【內容】平維茂(四代市川左團次)は、從者運平(中村鶴藏)・八內(市川升藏)の二人を伴ひ、戸隱山の奥深く紅葉狩に來ると、幔幕の內から更科姬(九代市川團十郎)が侍女望月(澤村源之助)と田每(市川升若)とを從へて現はれ、姬は維茂に酒を勸め、自ら舞を舞ふうち、維茂はしばしその場にまどろむ。姬は侍女と共に幕內へ入ると、戸隱山の山神(四代中村芝翫)が現はれて、姬が鬼女なることを告げ、土拍子踏ん

でも維茂が眠りより醒めぬので呆れて去る。やがて維茂が目覺むれば姫の影はなく、鬼女の相を顯はした姫となつて躍りかゝるので、これと立ち廻り、遂に小鳥丸の威徳で退治する。【價値】その骨子を能に採りながら、全く能の臭味を脫してよく歌舞伎化された明治期の舞踊の一代表作で、曲・振とも申分のない出來ばえといへる。〔秋葉〕

【參考】續々歌舞伎年代記○團洲百話松居松葉

椛狩劍本地（もみぢがりつるぎのほんぢ）　淨瑠璃　五段　時代物【作者】近松門左衞門【興行】寶永六年九月九日より竹本座（明和板「外題年鑑」）【諸本】七行九十四丁本、山本九兵衞・鱗形屋孫兵衞・天滿屋源治郎板。十二行三十一丁本、山本九兵衞板。近松時代淨瑠璃（帝國文庫）・近松名作集（日本名著全集）・諸種の近松全集所收。【題材】謠曲「紅葉狩」から着想したもの。同題材のものに、大和少掾藤原貞則の正本「紅葉狩」及び土佐少掾橘正勝の正本「新撰紅葉狩」があるが、何れも本作との交涉はない。

【梗概】〔第一〕（大序、左近の陣庭前）平惟茂は禁中の妖怪退治の功によつて將軍に任ぜられ、戸隱山の惡鬼退治の命を蒙り、當座の恩賞として宮中の上臈世繼御前を妻に、又引出物として平國の寶劍を賜はる。橘諸任はこれを妬んで異議を申し立てるが、帶刀太郎に言ひ籠められる。（中、冬通館）豫て惟茂と契つてゐた中納言冬通の姫君玲瓏（たまゆら）は雜掌金剛兵衞に諮り、世繼の先を越して輿入する事となる。（切、加茂川堤）その夜、諸任は途に要して世繼と思ひ違へ玲瓏の輿を奪ふ。金剛兵衞は玲瓏と思つて世繼の輿を奪ひ還した所へ、諸任の郎等達が引返し來つて世繼と交換しようと言つたので、兵衞は怒つて郎等達を懲らし、二人の上臈を取返して自分の館に歸る。この騷動に平國の寶劍を持つて世繼の供をした帶刀太郎が行方不明となる。〔第二〕（口、惟茂館）金剛兵衞の妹梅の井が使者として來り、二人の上臈を早く迎へ取つてくれと談判するので、惟茂は今直ちに寶劍搜索の途に上る旨の同文二通の手紙を二人に宛てて認め、追付け迎へ取らんとの文であると稱して梅の井に渡す。（切、金剛兵衞館）世繼・玲瓏は、それ〴〵梅の井から受取つた惟茂の手紙の中を祕し合つて、互に嫉妬する。〔第三〕（口、帶刀太郎



椛狩劍本地（正本）

き入れずに却つて女房を慘殺する。するとその首が寶劍を咥へて虛空に飛び去り、久作は暴れ狂つた末、房若親子に討たれる。〔第四〕（口、信濃下り）世繼・玲瓏は惟茂を慕ひ、金剛兵衞を供として信濃へ下る途中、房若親子に逢つて同行するといふ道行。（切、戸隱山）惟茂が戸隱山に到り、惡鬼に襲はれ（謠曲「紅葉狩」の流用）、危くなるや、雲間より落ち來つた寶劍の威力によつて救はれる。そこへ久作の女房の靈が現はれて「劍の本地」を語り、主家の再興を賴んで消える。その跡に、世繼・玲瓏の一行が尋ねて來る。惟茂は彼等が物語る一伍一什を聞いて房若を召抱へ、所領は安堵、小太郎廣文と名告らしめる。〔第五〕（大切、戸隱山）惟茂等は、折から攻め來つた諸任一味を滅し、更に寶劍の威力によつて鬼神を退治する。

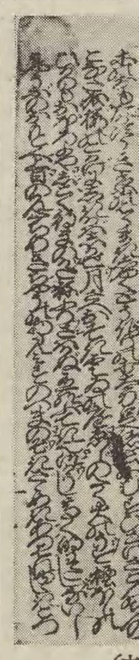
【解說】三段目久作宿の段が最も技巧的であつて、「脚色餘錄」二編上の卷に、文化の初め近松德叟がこの段を增補して歌舞伎狂言に仕組み、更に天保六年五月に西澤一鳳が中村歸子のために「義經千本櫻」（別項）鮓屋の段の增補に混じて用ひた事が記されてゐる。宇治加賀掾の正本「戸隱山太平御劍」は本作を少しく書き替へたものであり、又寶曆六年十月十五日より竹本座上場の「平惟茂凱陣紅葉」は本作の續編とも見るべき作である。

【參考】大近松全集第九卷解說木谷蓬吟○近松名作集上解題　黑木勘藏○近松全集第八卷解題藤井乙男○繪入淨瑠璃史　水谷不倒○日本傳說研究第六卷　藤澤衞彥　【高野、正〻】

紅葉山文庫（もみぢやまぶんこ）　文庫【解說】江戸城內に設けられた德川家の文庫で、普通、御文庫と稱せられてゐた。【沿革】德川家では、慶長七年六月、江戸城內の南の方富士見の矢倉に文庫を設け、金澤文庫の藏本、その他を收藏し、これを富士見御寶藏、或は御册子（雙子・草子）藏と呼んだ。慶長十九年七月、家康の駿府文庫から漢籍三十部が贈られ（所謂慶長御讓本）、元和二年、林道春は家康の遺命を奉じて、駿府文庫所藏の「先代舊事記」「古事記」「釋日本紀」等の我が國の舊記と、希世の古本とをこの文庫に納めた（その他のものは主として尾張・紀伊・水戸の三家に分けて駿府文庫は廢せられた）。寬永十六年に至つて、同じく城內の紅葉山に書庫を新築してこれに書籍を移した。謂はゆる紅葉山文庫の名はこゝより起る。寶永七年六月、紅葉山御藏が改造せられ（東御文庫と云ふ）、更に正德元年には、新に一庫を設けられた（西御文庫といふ）。同三年五月、又新に一庫を建て（新御庫といふ）、櫻田御文庫の典籍をこれに移した。天保元年十二月、一ノ御庫が新に成つたので、翌年の四月には東庫・西庫・新庫に加ふるに一ノ御庫を以てし、以上四庫の稱を改めて一・二・三・四と呼ぶやうになつた。同十四年二月、文庫に重複してゐる書籍を昌平坂及び甲府の兩學問所に移管し、また同年八月には重複してゐる醫書類を醫學館・昌平坂學問所・和學講談所に移した。更に安政三年四月には、所藏の兼書類を擧げて開成所に移し、また林大學頭の請により、同五年五月、重複の書十八部を駿府學校に移した。維新の後、一度は紅葉山文庫のすべてを擧げて大學に附せられたが、明治三年三月、大史局の管

かあるが、何れも本作との交渉はない。

【梗概】〔第一〕(大序、左近の陣庭前)平惟茂は禁中の妖怪退治の功によつて將軍に任ぜられ、戸隱山の惡鬼退治の命を蒙り、當座の恩賞として宮中の上臈世繼御前を妻に、又引出物として平國の寶劍を賜はる。橘諸任はこれを妬んで異議を申し立てるが、帶刀太郎に言ひ籠められる。(中、冬通館)豫て惟茂と契つてゐた中納言冬通の姫君玲瓏は雜掌金剛兵衞に諮り、世繼の先を越して輿入する事となる。(切、加茂川堤)その夜、諸任は途に要して世繼と思ひ違へ玲瓏の輿を奪ふ。金剛兵衞は玲瓏と思つて世繼の輿を奪ひ還した所へ、諸任の郎等達が引返し來つて世繼と交換しようと言つたので、兵衞は怒つて郎等達を懲らし、



屋敷)帶刀太郎が夜中密かに都の我が家に歸つて見ると、嚴しく門戸を締め堅めて閉門の有樣に、已むなく壁を切り破つて忍び入り、盜賊と見誤られて妻子の手にかゝる。彼は死に臨んで、寶劍が伊吹山の麓で艾屋となつてゐる昔の家來久作夫婦の許に預けられてある事を告げる。(切、久作宿)帶刀太郎の北の方並に子房若が寶劍を取り戻すため遙々訪ね來ると、久作は親子を殺し、寶劍を諸任に獻げて恩賞に預らうとする。これを知つた女房は一人子の萬虎を殺してまで苦諫するが、久作は聽

(本)を退治する。

【解說】三段目久作宿の段が最も技巧的であつて、「脚色餘錄」二編上の卷に、文化の初め近松德叟がこの段を增補して歌舞伎狂言に仕組み、更に天保六年五月に西澤一鳳が中村慶子のために「義經千本櫻」(別項)鮓屋の段の增補に混じて用ひた事が記されてゐる。宇治加賀掾の正本「戸隱山太平御劍」は本作を少しく書き替へたものであり、又寶曆六年十月十五日より竹本座上場の「平惟茂凱陣紅葉」は本作の續編とも見るべき作である。

【參考】大近松全集第九卷解說木谷蓬吟○近松名作集上解題黑木勘藏○近松全集第八卷解題藤井乙男○繪入淨瑠璃史水谷不倒○日本傳

た(西御文庫といふ)。同三年五月、又新に一庫を建て(新御庫といふ)、櫻田御文庫の典籍をこれに移した。天保元年十二月、一ノ御庫が新に成つたので、翌年の四月には東庫・西庫・新庫に加ふるに一ノ御庫を以てし、以上四庫の稱を改めて一・二・三・四と呼ぶやうになつた。同十四年二月、文庫に重複してゐる書籍を昌平坂及び甲府の兩學問所に移管し、また同年八月には重複してゐる醫書類を醫學館・昌平坂學問所・和學講談所に移した。更に安政三年四月には、所藏の兼書類を擧げて開成所に移し、また林大學頭の請により、同五年五月、重複の書十八部を駿府學校に移した。維新の後、一度は紅葉山文庫のすべてを擧げて大學に附せられたが、明治三年三月、大史局の管

るところとなり、翌年大史局が廢せらるゝに及んで式部寮の手で管理せられ、五年十月には歷史課に移り、更に修史局・修史官等を轉々して明治十七年一月、太政官文庫となつた。內閣文庫はその後身である(內閣文庫參照)。紅葉山文庫は最初は奥向の小姓・御小納戸・御醫者坊主等が管理してゐたやうであるが、寬永十年御書物奉行がおかれて以來、この役の管理するところとなつた。又元祿六年には御書物同心がおかれた。御書物奉行は初め四人であつたが、後には七人にまで增員され、同心も十五人から二十一人にまで增された。

【藏書】德川家は圖書の採訪及び抄寫に意を用ひ、且つ獻上するものも多く、文庫の藏書は夥しかつた。その中、記錄類又は治政に關するものの多いのは勿論であるが、金澤文庫舊藏本、慶長・元和の古活字本等貴重なものも亦少くない。これ等の藏書は內閣文庫に引きつがれてゐるわけであるが、その中、圖書寮に移されたものもある。

【參考】右文故事近藤正齋(近藤正齋全集所收)○紅葉山文庫物語樋口龍太郎(圖書館雜誌七八・七九・八一)　【植松】

桃李(ももすもも)　俳諧集　一册　【編者】與謝蕪村　【名稱】題簽には「俳諧もゝすもゝ」とある。　【刊行】安永九庚子冬霜月、橘仙堂　【諸本】蕪村曉臺全集(俳諧文庫)・新編蕪村几董附合集(伊藤松宇編)・蕪村全集(潁原退藏編)・蕪村新十一部集(河東碧梧桐編)所收。　【解說】蕪村と几董との兩吟歌仙二卷を收めたものである。蕪村の序文に「いつの程にか有りけむ、四時四まきの歌仙あり。春秋はうせぬ、夏冬は殘りぬ云々」と言つてゐるのに依れば、その刊行より數年前に成つたもののやうであるが、几董が當時兩吟した折の草稿に添へて下村春坡に與へた書(天明七年六月几董自筆のものによる)に依れば、やはり安永九年の作で、且つ僅か二卷の歌仙ではあるが、蕪村の作品中最も心血を注いだものである事が知られる。因つて今几董の書の一部を抄出して置かう。

我(蕪村)俳諧に遊ぶ事凡五十有餘年、今齡七旬になん〳〵とす。いまだ自得の俳諧をせず、此頃思ふに汝(几董)が俳諧既に熟せり。試に予と兩吟をすべしと、こゝにおいて夏冬の二句をたてゝ、師と予と句を吐く事百有餘章、或は連綿を正し、或は一卷の變化をかうがへ、或は一句を琢磨し、日を積み月を亘りて二歌仙成ぬ。梓行するに及て表題をもゝすもゝと號し、師が序詞を添ふ。印刻の册子は世にしる所也。此稿や其原本にして師が墨痕と余が愚筆と混じ雜へる所也。されば句々先師の粉骨を盡し肝腸をしぼられし一字一涙の記念とひめ置けるを、云々。

又實際その草稿を見ても、推敲琢磨のあと歷然たるものがあり、蕪村の連句中最も代表的のものとすべきである。几董が後に自ら「附合てびき蔓」(別項)の作例として、特にこの中の句を示してゐるのも、まことに故ないではない。

百田宗治(ももたそうぢ)　詩人　【閱歷】明治二十六年一月二十五日大阪市に生る。一定の學歷はない。大正四年大阪で雜誌「表現」を發行し、ホイットマンの影響をうけた詩を發表した。詩壇に民主主義思想を流布せしめた一人である。

【作品・作風】處女詩集は「最初の一人」(大正四年)で、ついで「一人と全體」(大正五年)及び「ぬかるみの街道」(大正七年)が出た。この詩集に於て彼の詩は、初め思想的思辨に傾き、抽象的であつた初期の詩から、やゝ具象的な描寫をも加へ、抒情詩としての信實性も多く加はるやうになつた。その後、「青い翼」(大正十一年)に於て、彼の思想的詩風も一つの典型をもつたが、後「靜かなる時」(大正十四年)以來、著しく內省的な靜かさをもつて全く純粹の抒情詩にかへり、更に「何もない庭」(昭和二年)に至つて、愈々俳諧的な簡素と暗示とに富んで來た。　【川路】

桃太郎(ももたらう)　昔話　【解說】越前の氣比神宮の內陣の彫物に、桃の實に乘つた童子の姿を刻したのがある。もしこれが慶長年間の再建の際に成つたものとすれば、桃太郎思想の發生は、自分等が想像してゐたよりは又大分前になる。併しそれにしたところで、桃太郎といふ名は新しい。我々の間に固有であつたものが、說話のこの部分でないことはほぼ明かである。これは英雄の異常誕生、殊に太平洋のこの方面に於て、最も熱心に語り傳へられてゐた漂着譚即ち瓠だの瓜だのといふ中空虛なる物の實に入つて、水上に浮んで來たと云ふ大昔の奇瑞が、既に信仰の支持を離れ、ただの小說の興味と化して後、なほ久しい間飽くばかりもて囃されて新しい意匠をこの間に求めた結果としか見えないのである。童話の形としてはこれなどは巧妙な改造、又印象強き話し方といつてよい。單に文化の中心地に於て起つたといふだけでなく、力ある素朴さと鮮かな色彩が、能く全國の兒童の好尙を統一させるに足りたのである。この說話の起原を尋ねんとする者には、これは寧ろ不幸なる革命であつた。そのために、今では「燕石雜志」一流の、記錄攪入說とも名づくべきものを成立せしめる餘地さへ生じたからである。併し最近新たに始まつた鄕土採集によつて、なほ若干の比較資料のこの說話の成長過程を指示するものが出現して來た。爺が山へ行つてゐる間に婆が川へ往つて、拾ひ上げて來たものは桃だけではなかつた。瓜子姫は全く同じ手順を踏んで小さな瓜の中から生れてゐる。これは女であつて鬼ケ島へは行かず、親を富貴にしたことも傳へられて居らぬが、さういふ側に於ては、灰蒔爺、又は花咲爺の話の犬の子があり、これは奥州の傳承に於ては川を流れ下る木片の中にあつて、割つて見ると可愛い犬の子であつたといふ。しかも人間以上に怜悧で、拾ひ主を忽ち長者にした。それから雀が籠の中に入つて水上から下つて、婆のとなへ言のまゝに手元に近よつて來たといふ話もあれば、同じ桃太郎でも桃は香箱の中に隱れてゐて、箱を開いて見たら中に桃があつたと說く例も多く、それから又柿の實が流れて來て、中に赤子がゐたといふ柿太郎とも名づくべき異例さへある。これを要するに桃から生れたといふのは一つの形で、もうその以前散々に色々の物に入つて、異常の赤子が流れて來たことを話にしてゐた餘勢であるとしか思はれぬ。これだけが獨立して古くからあつた筈はないのである。童話が保存する前代分子、即ち神話の元の形まで溯原し得る資料は、却つて無意識なる樣式化の部面にあるやうである。たとへば鬼ケ島は有名な御曹司島渡りの外に、鬼の子小綱と稱する女性奪還譚中にもあつて、日本は海の國だけに、これを英雄捷利の舞臺に取り易かつたのである。犬猿雉の三疋を家來に連れた點なども、その動物の種類や擧動こそ區々であるが、殆ど全世界の遠征說話に附いてまはつてゐる挿話といつてよい。それを近世の桃太郎童話が、特に

花々しく働かせたといふ迄で、これと對立する瓜子姫に於ても、やはり形をかへて動物の援助は説かれてゐる。今日の説話研究家なる者は、言はば見當ちがひの方向に眼を遣つて、一つの御伽話の起りを知らうとしてゐたのである。「桃太郎の誕生」(柳田著)に詳しく論じてあるから爰ではそれを援用するに止めるが、他の多くの異常童兒の立身譚を比べて、桃太郎の中に缺けてゐるものは、幸福なる婚姻の一條であつた。これは幼ない聽衆の興味を抱き得ない部分として、わざと計畫をして省いたと思はれるから、かういふ消極的の方面からも、なほこの作品の近代人の意識による改造なることが察せられる。而もなほ他の重要ならざる點に於て、古來の話し方の幾つかを存置してゐることが、民間文藝の成立に聽衆の力の參與した跡であり、同時に又謂はゆる童話文學との岐れ目であつたとも言ひ得ると思ふ。

〔柳田(國)〕

桃太郎後日噺(ももたらうごじつばなし)「黄表紙名作二十三部」を見よ。

百千鳥娘道成寺(ももちどりむすめだうじやうじ)「道成寺」を見よ

桃の首途(もものかどで)　俳諧集　二册　【編者】黄鸝園里紅(盧元坊)【刊行】享保戊申(十三年)孟夏吉日、京、橘屋治兵衞【諸本】支考全集(俳諧文庫)所收。【解説】里紅がその師支考に勸められて、享保十二年の春、北越地方の行脚を思ひ立ち、その年末歸郷するに至るまでの間、各地の俳人と唱和した連句及び各地俳人の發句を集めたものである。撰んだのは里紅であるが、その刊行されるに當つては、勿論支考の後援に負ふところが多かつたに違ひない。卷頭には支考が蓮二房の名で師弟の情濃かな餞別の序詞を與へてゐる。内容は支考の句「餅食はぬ旅人はなし桃の花」を發句とした美濃連中の長歌行一卷に始まり、越前敦賀から福井・小松・金澤等を經て越後糸魚川に至るまで、二十餘ヶ所で撰者が各地の俳人と一座した連句及び名餘發句を載せ、なほ諸國文通の發句を加へ、最後は童平・里紅・白狂(支考)三吟の歸郷賀三ツ物で終つてゐる。當時北越地方に於ける獅子門の勢力圈が、どこまで及んでゐたかを知るには、最も恰好の資料といはねばならぬ。

〔穎原〕

桃の實(もものみ)　俳諧集　一册　【撰者】櫻井兀峯(備前池田侯の藩士、通稱を夫右衞門といひ、享保六年六十一歳を以て歿した)。【名義】「帥庵に桃櫻あり、門人にキ角・嵐雪有」と前書した「兩の手に桃とさくらや草の餅」といふ芭蕉の發句を卷頭に据ゑ、其・嵐二子の桃の發句をこれに並べて、次に「かゝる翁の句にあへるは人々のほまれならずや云々」の前書のある自句を載せてゐるので、芭蕉及び二子の句の桃に因んでの題號と思はれる。【刊行】元祿六年【諸本】俳諧七部拾遺に安永四年關更再刻のものが收められてゐる。舊門俳諧前集(俳書大系)に所收。【内容】芥舟の跋によると、本集は兀峯が元祿五年三月から江戸詰となり、仕官の暇を利して集めたものである。その内容は初めに夏題十五と題して其角と兀峯自身との夏季の同題十五の句合を掲げ、次に雜玉と題して四季の發句百十六句、第三迄と題して兀峯が諸家と卷いた連句の第三までの三句物八章、次に著名な句について語つた小話三則、最後に歌仙三卷(嵐雪・兀峯兩吟半歌仙、兀峯・芭蕉・洒堂・里東・其角五吟歌仙)。卷尾に芥舟の跋がある。集中の作者は、才麿・鬼貫・露沾・沾德・好春・貞直など、他派の人もないではないが、大部分は芭蕉その他蕉門の人である。【價値】本集は芭蕉の其・嵐二子を讃した句及び二子の句を以て始まり、それと相對して其角の作が最も多く、嵐雪との兩吟が二卷も收められてゐるなど、兀峯が其・嵐二子に傾倒した樣子が窺はれるのであるが、集中、句に對して自見を附したものが五條あり、別に小話三則を掲げてゐて、これ等によつて兀峯の批評眼・俳諧觀の窺はれるなど、本集は兀峯が自己を紹介してゐる性質のものといふべきで、俳人兀峯を知るに屈竟のものと言ひ得る。小話三則には郭公と富士に好句の得難き説を述べ、信德の「不二に添ふて三月七日八日かな」の句の「たゞにいひ出せる」をよしとし、其角・路通・好春の句を擧げて、「心とすがたと句とはひとつなる物」といひ、荷兮が「木がらしに二日の月の吹ちるか」の句によつて、世に「凩の荷兮」といはるゝは「二日の月のぬし」になれるにやといひ、その他、句について述べてゐる自見等によつて、兀峯は一見識ある俳人なる事を思はせる。なほ集中の進歩といふのは、赤穂義士として後に萱野三平と同じく復讐前年に自刄した橋本平左衞門であらうが、第三迄の三句物の中に兀峯の餞別の卷の一人ともなつてゐることは、進歩を知る資料として注意して置くべきものであらう。

〔志田〕

貰聟(もらひむこ)　能狂言【別名】「乞聟」「泣聟」【格式】本神文濟相傳の部(大藏流)。【解説】酒好きの聟が、いつものやうに、したゝか酒に醉つて家に歸り、女房に當り散らし、遂に追ひ出してしまふ。女房は父親にこの由を語る。父親は落ち着いたもので、あの醉狂者の言ふことを本氣にして戻つて來ることがあるものかと叱り宥めるが、娘はこん度は眞實暇をくれた印に一腰を貰つたと、その堅い決心を言ふので、父親も是非なく内へ入れる。一方、聟は酒が醒めて親里を訪れ、酒は斷つたから歸らせて呉れと詫びるが、父親も今度は決心したことなので、ゐないと言つて聞き入れぬ。聟は、あれがゐないと金法師が泣いて困ると言ふ。女房は堪へ切れず出て來て、一緒に歸ると言ひ出すので、父親は怒つて、今になつての泣言は何だと承知せぬのを、聟と女房とは父親を打倒して逃げ歸つてしまふ。父親は後で、來年から祭には呼ばぬぞよと罵るといふ筋。寛正の糺河原勸進能番組に「見る聟」と見えてゐる狂言は、「乞聟」を「見聟」に誤つたものである。異本に「なき聟」とも記されてゐるから問題はない。

〔瀧田〕

森鷗外(もりおうぐわい)　小説家・戯曲家・評論家・飜譯家【本名】林太郎【別號】牽舟生・双木生・舍生・紺珠・妄人・鐘禮舍・隱流・腰辨當・ゆめみるひと・歸休兵・芙蓉等。【生歿】文久二年一月十九日、石見國鹿足郡津和野町横堀に生れ、大正十一年七月九日、東京本郷區千駄木町二十一番地の自邸にて病歿す。享年六十一。【閲歴】累世藩主亀井家の典醫たる家に生れた。父、靜男。母、峰子。五歳にして藩儒米原綱嘉に就いて四書五經の素讀を受け、七歳藩の學校養老館に入つて漢學を修めた。藩籍奉還に依つて間もなく藩醫の廢せらるゝに及び、父に就いて蘭學を、又藩醫宅良悦に蘭文典を學んだ。明治五年、十一歳にして父に伴はれて東京へ出で、神田小川町西周の邸に寓し、本郷壹岐殿坂の進文學舍に通學して獨逸語を學ぶ。二年後下谷の藤堂邸跡の東京醫學校豫科に入學したが、後、校舍が本郷元富士

町に移つて東京大學豫備門と改稱された時、その寄宿舍に入つた。更に東京大學醫學部と改稱されると共に本科に進み、明治十四年二十歳にして卒業した。この學生時代の生活は「キタ・セクスアリス」(別項)に詳しく描かれてある。この年、讀賣新聞に「河津金線君に質す」と題する一

軍醫總監に任じ、陸軍省醫務局長となつた。四十一年には臨時脚氣豫防調査會長を命ぜられた。大正三年從三位に敍せられ、四年勳一等瑞寶章を授けられた。大正五年五十五歳にして醫務局長を免ぜられ、願に依り豫備役仰せ付けられた。飜つてその藝術方面に於ける足跡を辿れば、「しがらみ草紙」に據つて文壇に歸朝、同日陸軍軍醫學校教官に補せられ、また陸軍大學の教官を兼任して衞生學の講座を受持つた。「非日本食論將失其根據」なるパンフレットを自費出版したのは、この歸朝直後のことだつた。翌年兵食試驗委員たると共に、東京美術學校專修科の美術解剖學講師を囑託された。七月「國民之友」

かけ四年で東京へ歸り、二十五年以來、九星霜を費して完結した飜譯「即興詩人」(別項)を出版した。また脚本の處女作「玉篋兩浦嶼」(別項)を「歌舞伎」の號外として出した。六月上田敏等の「藝苑」と合同して「萬年草」(別項)を「藝文」を創刊したが、二號にして改めて「萬年草」(別項)を創刊し、日露の役に出征するに當つて廢刊した。

部」を見よ。

百千鳥娘道成寺（ももちどりむすめだうじやうじ） 「道成寺」を見よ。

桃の首途（もものかどで） 俳諧集 二册 【編者】黃鸝園里紅（盧元坊）【刊行】享保戊申（十三年）孟夏吉日、京、橘屋治兵衞【諸本】支考全集（俳諧文庫）所收。【解說】里紅がその師支考に勸められて、享保十二年の春、北越地方の行脚を思ひ立ち、その年末歸鄕するに至るまでの間、各地の俳人と唱和した連句及び各地俳人の發句を集めたものである。撰んだのは里紅であるが、その刊行されるに當つては、勿論支考の後援に負ふところが多かつたに違ひない。卷頭には支考が蓮二房の名で師弟の情濃かな餞別の序詞を與へてゐる。內容は支考の

んでの題號と思はれる。【刊行】元祿六年【諸本】俳諧七部拾遺に安永四年闌更再刻のものが收められてゐる。蕉門俳諧前集（俳書大系）に所收。【內容】芥舟の跋によると、本集は兀峯が元祿五年三月から江戸詰となり、仕官の暇を利して集めたものである。その內容は初めに夏題十五と題して其角と兀峯自身との夏季の同題十五の句合を揭げ、次に雜玉と題して四季の發句百十六句、第三迄と題して兀峯が諸家と卷いた連句の第三までの三句物八章、次に著名な句について語つた小話三則、最後に歌仙三卷（嵐雪・兀峯兩吟半歌仙、兀峯・嵐雪兩吟半歌仙、兀峯・芭蕉・洒堂・里東・其角五吟歌仙）、卷尾に芥舟の跋がある。集中の作者は、才麿・鬼貫・露沾・沾德・好春・貞直など、他派の人もな

なる事を思はせる。なほ集中の進歩といふのは、赤穗義士として後に萱野三平と同じく復讐前年に自刃した橋本平左衞門であらうが、第三迄の三句物の中に兀峯の餞別の卷の一人ともなつてゐることは、進歩を知る資料として注意して置くべきものであらう。【志田】

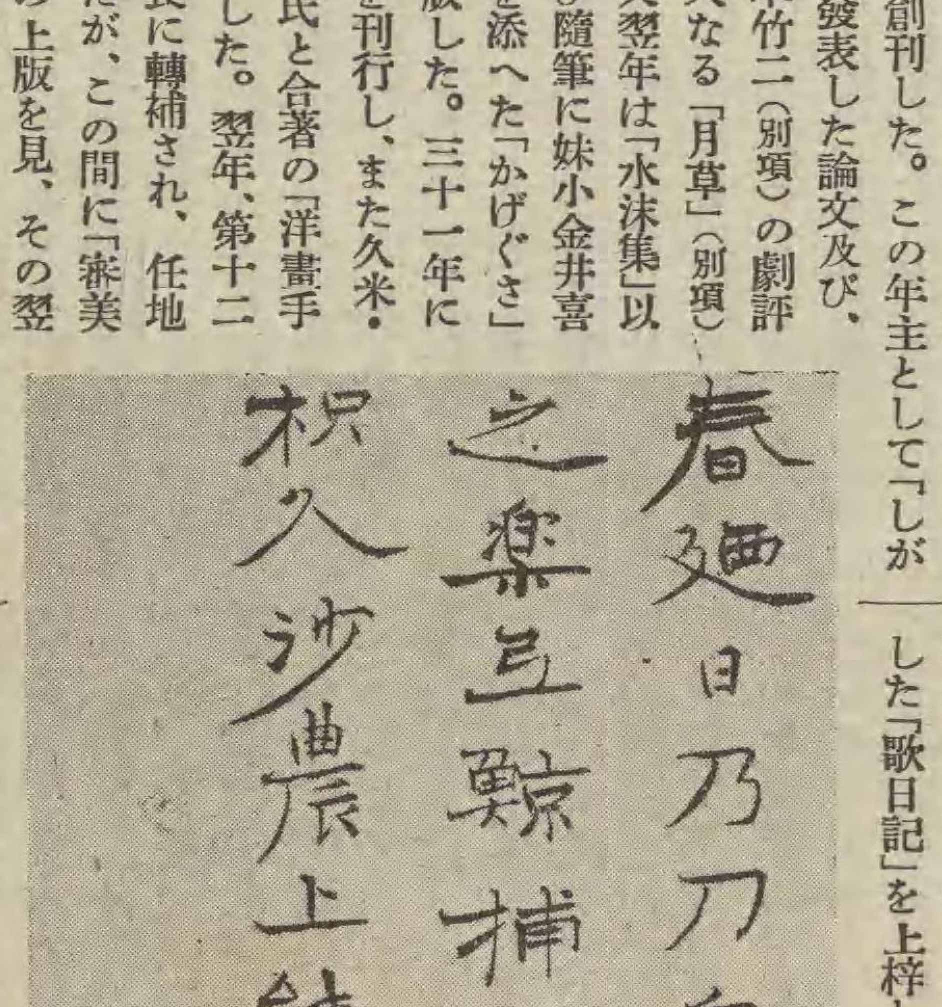
貰聟（もらひむこ） 能狂言 【別名】「乞聟」（こひむこ）「泣聟」（なきむこ）【格式】本神文濟相傳の部（大藏流）。【解說】酒好きの聟が、いつものやうに、したゝか酒に醉つて家に歸り、女房に當り散らし、遂に追ひ出してしまふ。女房は父親にこの由を語る。父親は落ち着いたもので、あの醉狂者の言ふことを本氣にして戻つて來ることがあるものかと叱り宥めるが、娘はこん度は眞實暇をく

號を千朶山房・觀潮樓と稱した。【生歿】文久二年一月十九日、石見國鹿足郡津和野町横堀に生れ、大正十一年七月九日、東京本鄕區千駄木町二十一番地の自邸にて病歿す。享年六十一。【閲歷】累世藩主龜井家の典醫たる家に生れた。父、靜男。母、峰子。五歲にして藩儒米原綱善に就いて四書五經の素讀を受け、七歲藩の學校養老館に入つて漢學を修めた。藩籍奉還に依つて間もなく藩黌の廢せらるゝに及び、父に就いて蘭學を、又藩醫室良悅に蘭文典を學んだ。明治五年、十一歲にして父に伴はれて東京へ出で、神田小川町西周の邸に寓し、本鄕壹岐殿坂の進文學舍に通學して獨逸語を學ぶ。二年後下谷の藤堂邸跡の東京醫學校豫科に入學したが、後、校舍が本鄕元富士

町に移つて東京大學豫備門と改稱された時、その寄宿舍に入つた。更に東京大學醫學部と改稱されると共に本科に進み、明治十四年二十歲にして卒業した。この學生時代の生活は「ヰタ・セクスアリス」（別項）に詳しく描かれてある。この年、讀賣新聞に「河津金線君に質す」と題する一文を寄せたが、文章を公にしたのは、これが最初であつた。又陸軍軍醫副（中尉相當官）に任ぜられ、東京陸軍病院（今の第一衞戍病院）に職を奉じた。翌十五年從七位に敍せられ、又東京軍醫本部（今の陸軍省醫務局）課僚を命ぜられ、主としてプロシヤの陸軍衞生制度の取調に從事した。プラアゲルの「陸軍衞生制度書」を基礎として「醫政全書稿本」十二卷を編み、明治十七年二十三歲の三月これを官に納めたが、間もなく獨逸留學を命ぜられ、直ちにライプチヒ大學に入學してホフマンを師とした。翌年一等軍醫（大尉相當官）に進んだ。この年十月軍醫講習會に參加のためドレスデンに赴き、ロオトに師事し、翌十九年ミユンヘン大學に入り、ペツテンコオフェルに就いて學んだが、一年にしてベルリン大學に轉じ、コツホの研究室に籠つた。この間に於ける醫學上の論文は、鷗外全集第十七・十八の二卷に收められてゐる。またザクセン地學會に請はれて日本家屋論を講述したが、これは日本人の獨逸に於ける最初の公開演說だつたといふ。明治二十一年二十七歲の七月三日ベルリンを去つて英・佛を遊歷し、九月八日

森鷗外

に歸朝、同日陸軍軍醫舍（今の陸軍軍醫學校）教官に補せられ、また陸軍大學の教官を兼任して衞生學の講座を受持つた。「非日本食論將失其根據」なるパンフレツトを自費出版したのは、この歸朝直後のことだつた。翌年兵食試驗委員たると共に、東京美術學校專修科の美術解剖學講師を囑託された。七月「國民之友」の夏季附錄に譯詩集「於母影」（別項）を發表し、また十月雜誌「しがらみ草紙」（別項）を創刊して旺んに文學上の活動をはじめた。二十三年一月「國民之友」に處女作の小說「舞姬」（別項）を發表し、續いて「うたかたの記」「文づかひ」（各別項）を出して、一躍して文壇の巨擘と仰がるゝに至つた。一方軍醫としては、この年陸軍二等軍醫正に任ぜられ、陸軍衞生會議員に補せられ、翌年は陸軍兵衣試驗委員を命ぜられ、又醫學博士を授けられた（三十歲）。二十六年陸軍一等軍醫正に任じ、軍醫學校長に補せられた。翌年日清戰役起りて出征。中路兵站軍醫部長より第二軍兵站軍醫部長となり、勳六等瑞寶章を授けられた。二十八年陸軍々醫監に任ぜられ、滿洲より臺灣に轉征し、臺灣總督府陸軍軍醫部長に任ぜられた。九月東京に凱旋、功四級金鵄勳章及び單光旭日章を授けられ、再び軍醫學校長に補せられた。翌年父を失つた。三十一年近衞師團軍醫部長兼陸軍軍醫學校長に補せられたが、三十二年第十二師團軍醫部長に轉じ、小倉に赴任した。在任約三年、三十五年第一師團軍醫部長に補せられて東京へ歸つた。翌年クラウゼギツツ著「大戰學理」卷一・二を譯出上梓した。三十七年日露戰爭始まり、第二軍軍醫部長として出征。三十九年一月東京に凱旋し、功三級金鵄勳章及び勳二等旭日重光章を受け、翌年陸軍軍醫總監に任じ、陸軍省醫務局長となつた。四十一年には臨時脚氣豫防調査會長を命ぜられた。大正三年從三位に敍せられ、四年勳一等瑞寶章を授けられた。大正五年五十五歲にして醫務局長を免ぜられ、願に依り豫備役仰せ付けられた。飜つてその藝術方面に於ける足跡を辿れば、「しがらみ草紙」に據つて文壇に見えて以來、飜譯に評論に殆ど超人的な精力を以て活動を續けた。明治二十五年に出版した「水沫集」（別項）は、その業績の一斑を語るものである。又この年より二箇年餘、慶應義塾の文科に審美學を講じた。二十七年日清の役に出征したので「しがらみ草紙」を廢刊したが、凱旋後、二十九年一月から新に「めざまし草」（別項）を創刊した。この年主として「しがらみ草紙」に發表した論文及び、雜錄に弟三木竹二（別項）の劇評を附した尨大なる「月草」（別項）を上梓し、又翌年は「水沫集」（別項）以後の飜譯及び隨筆に妹小金井喜美子の作品を添へた「かげぐさ」（別項）を出版した。三十一年には「西周傳」を刊行し、また久米・岩村・大村三氏と合著の「洋畫手引草」を出版した。翌年、第十二師團軍醫部長に轉補され、任地小倉に赴いたが、この間に「審美綱領」（別項）の上版を見、その翌年には「審美新說」を上梓した。又この年三木竹二が「歌舞伎」（別項）を創刊したので、爾來每號のやうにこれを助けて稿を寄せ、その歿後にまでも及んだ。三十五年には「審美極致論」を刊行したが、「めざまし草」は二月號を以て廢刊した。三月第一師團軍醫部長となり、足かけ四年で東京へ歸り、二十五年以來、九星霜を費して完結した飜譯「卽興詩人」（別項）を出版した。また脚本の處女作「玉篋兩浦嶼」（たまくしげふたりうらしま）（別項）を「歌舞伎」の號外として出した。六月上田敏等の「藝苑」と合同して「藝文」を創刊したが、二號にして改めて「萬年草」（別項）を創刊し、日露の役に出征するに當つて廢刊した。三十六年には、いづれも講演の筆記「ゴビノオの人種哲學梗概」「黃禍論梗概」を公にして、「梗概博士」の戲稱を送られた。これより四十二年に至るまでは、殆ど藝術的文壇的活動を休止した狀態であつた。強ひて擧ぐれば、出征の首途に脚本「日蓮上人辻說法」（別項）を執筆したのと、四十年に戰塵の裡に情懷を賦した「歌日記」を上梓し、竹柏園大會での講演を基にした「ゲルハルト・ハウプトマン」を出版した位のものである。また明治四十年文部省美術展覽會が創設されるや、その審査員に擧げられ、その後、帝國美術院長を仰せ付けられるまで、毎年その選に當つた。こゝに忘るべからざるは翌四十一年文部省の臨時假名



森鷗外筆蹟

遣調査委員會に委員として出席し、陸軍を代表して意見を述べ、發音に依る便宜主義の改訂案を駁して正統な假名遣を主張し、わが國語の運命を左右すべき最も重大な任務を完全に遂行した功績である。棠陰會の委囑に依る「北白川宮能久親王事蹟」を脫稿して出版したのも、教科用圖書調査委員となつたのも、同年である。明治四十二年、四十八歳の時、再び文壇にその勇姿を現はした。卽ち一月「スバル」(別項)創刊號に、脚本「プルムウラ」(別項)を投じて以來、逐號筆を執つて旺盛な活動を續けたのである。中でも發賣禁止に遭つた「キタ・セクスアリス」(別項)は、作者の自叙傳的小説として注目すべきものである。又「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」の飜譯を國民新聞に連載の後で出版した外、飜譯戲曲集「一幕物」「阿育王事蹟」、自ら創案した地圖「東京方眼圖」を刊行した。文學博士の學位を授けられたのもこの年である。翌四十三年四月、「三田文學」(別項)の創刊されたことは、更に一層の活躍を促す機緣となり、これにも每號寄稿を續けた。當時自然主義全盛の文壇にあつて、彼が時流を抽んでて獨自の藝術境を濶歩したのは實に偉觀たるを失はない。その心境は「杯」及び「あそび」(別項)等に依つて知ることが出來る。飜譯集「黄金杯」「現代小品」「續一幕物」、創作集「烟塵」、飜譯劇「人の一生」「寂しき人々」「幽靈」を刊行、又文藝委員會の官制が布かれてその委員となつた。翌四十五年(大正元年)には大村西崖と合著「希臘羅馬諸神傳」、創作劇集「我一幕物」、飜譯「みれん」を出版した。「スバル」「三田文學」を主として諸雜誌に筆を揮つたのは云ふを俟たないが、この年「中央公論」に「興津彌五右衞門の遺書」(別項)を出して後、史實に立脚せる小説が漸く數を加ふるに至つた。大正二年、文藝委員會の一員として活動した外に「ファウスト」第一部及び第二部の飜譯を完成出版し、「ファウスト考」「ギョオテ傳」、創作「青年」(別項)「意地」「分身」「走馬燈」、更に飜譯「戀愛三昧」「新一幕物」「十人十話」「マクベス」「ノラ」を上梓した。翌年「天保物語」「かのやうに」「堺事件」の三つの創作集と、飜譯「謎」を出版し、大正四年には飜譯「諸國物語」「稻妻」、詩歌集「沙羅の木」(別項)、評論隨筆集「妄人妄語」、創作「雁」(別項)「塵泥(ちりひぢ)」を刊行。この年聖上より詩作を徴されて五言律を謹書して乙夜の覽に供した。また卽位の大禮に參列後「盛儀私記」を草し、私版として知人に配布した。大正五年、陸軍省醫務局長の劇職を退いて後は史籍を博渉して成る史傳を次ぎ次ぎと書き、「椙原品」を初めとして「澁江抽齋」(別項)以下「伊澤蘭軒」「北條霞亭」等の數篇を東京日日・大阪每日兩新聞に連載して二年に亙つた。この間に出版した「還魂錄」は前著「涓滴」を改題したものである。大正六年末、帝室博物館長兼圖書頭に任ぜられたので、新聞と關係を絶つた。翌年には九代目團十郎の銅像銘を作り、創作集「高瀬船」(別項)を刊行した。又正倉院の曝涼に際して奈良に赴く事がこの年より例となつた。大正八年帝國美術院長に任命せられた。創作集「山房札記」及び「三田文選」の別册として飜譯集「蛙」を出版した。大正十年「明星」(別項)が復活刊行され、「古い手帳より」を連載、又圖書寮にての撰述「帝諡考」が成つて刊行し、次いで「元號考」の著述に從事した。臨時國語調査會長に任ぜられた。飜譯「ペリカン」及び「森林太郎譯文集」中の「獨逸新劇篇」を出版した。大正十一年、前年來その徴を現はした腎臟病が六月に至つて大に進んだので蓐に就く。特旨を以て從二位に敍せらる。七月九日午前七時歿した。彼は曩に男爵赤松則良の長女登志子と結婚したが、長男が生れて後幾ばくもなくして去り、小倉に赴任中荒木博臣の長女茂子と再婚し、二男二女を得た。長男於菟は醫學博士となり、現に東京帝國大學醫學部に職を奉じてゐる。なほ著作は鷗外全集十八卷・明治大正文學全集(森鷗外集)・現代日本文學全集(森鷗外集)等所收。

【業績・作風】官途に於ける事業も、尋常人のよく爲し能はざるものであつたに拘らず、更に文人としてこの大なる業績を殘すに至つては、まづ量的に見てその精力に驚嘆せずには居られない。而して鷗外を驅つてその絶大なる精力を傾注せしめたものは、實に先驅者たるの精神に外ならなかつた。初め「しがらみ草紙」に據つて、文壇に見えた當時の鷗外の活動は、明治文壇始まつて以來の壯觀だつたと云はれるが、その記念として「水沫集」「月草」が殘されてゐる。僅か三年間に於てこの尨大なる二卷を成したことが、既に量的に驚嘆に値するが、その質を檢するに及んでは、すべて先驅者としての尊き業績であることに何人も畏敬の念を禁じ得ないであらう。創作の三篇が西洋流の短篇小説の範を垂れたものであり、飜譯の諸篇がわが文壇に進むべき指針を與へ、批評に於ては規準を審美學の上に置くべきを敎へ、且つこれを運用して示す等、一として先覺者たり指導者たる意圖の現はれでないものはない。而も生涯を通じてあらゆる作品はこの使命の下に書かれ、晩年の史傳小説に至るまで後人のために新境地を拓いてゐないものはない。殊にその最も明かなものは、文壇よりも一步遲れてゐた劇壇に對する鷗外の貢獻であらう。明治末より大正初頭にかけての所謂第一期新劇運動の演目が、大半以上鷗外の飜譯に係る戲曲を以て編まれ、新劇の草創期にあつても彼の無言の指導に俟つてよく代表的な名作を演じ得たのである。また鷗外は劇壇に多くの創作脚本を與へはしなかつたが、處女作「兩浦嶼」で白を主とする劇を試み、「甘蓮上人辻說法」では簡素な西洋古典劇の手法を示し、更に「靜」「生田川」(別項)に於ては時代物を初めて現代語で書き、何れも後進に新しき指標を示してゐる。かくの如く鷗外は飜譯に紹介に評論に創作に、我が文壇、否弘く我が文化の開發に努めた。これは或る點では過渡時代にある我が文化の現況が、特に博識明鑑の先達を指導者として要求して已まなかつた故でもあつた。かくて鷗外をして飜譯紹介に多くの力を割かしめることになり、ために創作の光彩が覆はれ勝ちのことさへあつたが、勿論その正しき價値が減ぜらるべくもない。科學的な心理解剖と彫刻的描法を以てした創作「普請中」「カズイスチカ」「妄想」「雁」「高瀬舟」「山椒太夫」「魚玄機」「佐橋甚五郎」等は後世に記憶せらるべき名作であり、史傳に一新體を開いた「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」「北條霞亭」等も大正文壇の誇りとして殘るべきものである。泰西の文學を博涉し、國文學の雅俗に通じ、殊に支那文學に於ける蘊蓄の深かつた彼の文章は、措辭用語の正しきのみならず、つねに蒼古にして而も清新の趣を失はない。運宏簡勁、粉飾なく晦澁なく、極度の緊張と暢達とを藏するその文格は、寔に獨自の名品であつて、古今に比肩すべきものあるを知らない。併し色彩に乏しく、理解・鑑賞に少からぬ智的敎養を要し、よく多數者の味得するところとならなかつた。この事は單にその創作に於てのみではなく、その全業績に就いても云はれ得ることであらう。丁度自ら舞臺に關與しなかつたとは云へ、よく新劇運動を指導したと同じやうに、時を隔て或は人を通じて我が一般文化の育成に益して來た功績は測

守貞漫稿(もりさだまんかう) 隨筆 【著者】喜田川守貞(傳未詳) 【諸本】久しく寫本のまゝ世に知られなかつたが、明治末に近く發見せられ、明治四十一年に至り「類聚近世風俗史」と題し、室松・古內・保持三氏の校訂で、國學院出版部から二册に分ちて出版された。【內容】每卷の初めに「喜田川季荘尾張部守貞誌」と署す。卷首に概略と題して例言樣のものがあり、そ

ニ製セント欲セシガ、又流石數日ヲ費シヌルコトナレバ、百年遺笑ヲ思ヒナガラ再藏蓄ス。慶應三年卯五月」とある。本書は、著者が大阪に三十年、江戸に十四年居住の間に實見した市井の行事・風俗を基として古今を對照し、江戸・大阪を區別して書き集めたもので、多く圖畫を加へて說明に便してゐる。例言の終りに「嘉永六年癸丑冬喜田川舍山述」とある。天保

を促す機縁となり、これにも毎號寄稿を續けた。當時自然主義全盛の文壇にあつて、彼が時流を抽んでて獨自の藝術境を濶歩したのは實に偉觀たるを失はない。その心境は「杯」及び「あそび」(別項)等に依つて知ることが出來る。飜譯集「黄金杯」「現代小品」「續一幕物」、創作集「涓滴」を出版した。四十四年には創作集「烟塵」、飜譯劇「人の一生」「寂しき人々」「幽靈」を刊行、又文藝委員會の官制が布かれてその委員となつた。翌四十五年(大正元年)には大村西崖と合著「希臘羅馬諸神傳」、創作劇集「我一幕物」、飜譯「みれん」を出版した。「スバル」「三田文學」を主として諸雜誌に筆を揮つたのは云ふを俟たないが、この年「中央公論」に「興

この間に出版した「還魂錄」は前著「涓滴」を改題したものである。大正六年末、帝室博物館長兼圖書頭に任ぜられたので、新聞と關係を絶つた。翌年には九代目團十郎の銅像銘を作り、創作集「高瀨船」(別項)を刊行した。又正倉院の曝涼に際して奈良に赴く事がこの年より例となつた。大正八年帝國美術院長に任命せられた。創作集「山房札記」及び「三田文選」の別册として飜譯集「蛙」を出版した。大正十年「明星」(別項)が復活刊行され、「古い手帳より」を連載、又圖書寮にての撰述「帝諡考」が成つて刊行し、次いで「元號考」の著述に從事した。臨時國語調査會長に任ぜられた。飜譯「ペリカン」及び「森林太郎譯文集」中の「獨逸新劇

云はれるが、その記念として「水沫集」「月草」が殘されてゐる。僅か三年間に於てこの尨大なる二卷を成したことが、既に量的に驚嘆に値するが、その質を檢するに及んでは、すべて先驅者としての尊き業績であることに何人も畏敬の念を禁じ得ないであらう。創作の三篇が西洋流の短篇小說の範を垂れたものであり、飜譯の諸篇がわが文壇に進むべき指針を與へ、批評に於ては規準を審美學の上に置くべきを敎へ、且つこれを運用して示す等、一として先覺者たり指導者たる意圖の現はれでないものはない。而も生涯を通じてあらゆる作品はこの使命の下に書かれ、晩年の史傳小說に至るまで後人のために新境地を拓いてゐな

ない。科學的な心理解剖と彫刻的描法を以てした創作「普請中」「カズイスチカ」「妄想」「雁」「高瀨舟」「山椒太夫」「魚玄機」「佐橋甚五郎」等は後世に記憶せらるべき名作であり、史傳に一新體を開いた「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」「北條霞亭」等も大正文壇の誇りとして殘るべきものである。泰西の文學を博涉し、國文學の雅俗に通じ、殊に支那文學に於ける蘊蓄の深かつた彼の文章は、措辭用語の正しきのみならず、つねに蒼古にして而も清新の趣を失はない。渾宏簡勁、粉飾なく晦澁なく、極度の緊張と暢達とを藏するその文格は、寔に獨自の名品であつて、古今に比肩すべきものあるを知

らない。併し色彩に乏しく、理解・鑑賞に少からぬ智的教養を要し、よく多數者の味得するところとならなかつた。この事は單にその創作に於てのみではなく、その全業績に就いても云はれ得ることであらう。丁度自ら舞臺に關與しなかつたとは云へ、よく新劇運動を指導したと同じやうに、時を隔て或は人を通じて我が一般文化の育成に益して來た功績は測るべからざるものであり、選ばれたる少數者に與へた影響の深甚なるに至つては、こゝに云ふを要しない。

【參考】森鷗外研究 小島政二郞(日本文學講座)○森鷗外 成瀨正勝(國語と國文學昭和七ノ四特別號)○明星・新小說・心の花・三田文學各鷗外號(大正十一年秋)　〔小島〕

森川葵村 詩人【本名】勝治

【閱歷】明治二十二年、東京下谷區入谷町に生る。京北中學・東京高等商業學校卒業、後、三井物產會社社員たりしことがある。詩壇への出發は雜誌「文庫」(別項)を最初とし、後、河井醉茗の詩草社を起すに及び、入つて同人となり、雜誌「詩人」にその詩作を發表し、明治四十五年詩集「夜の葉」を出し、後、三木露風・川路柳虹・服部嘉香・山宮允・西條八十・柳澤健・增野三良等と共に「未來」にも關係したことがある。併し處女詩集出版後詩集を出さず、大正三年以後、殆ど詩筆を絕つてゐる。

【作風】その詩風は、明晰にして純正な情緖に富み、近代的哀感をもつ。その表現上に於て象徵主義の影響をうけてゐるが、フランスのそれでなく、英吉利のシモンズ、愛蘭のエーツ等の影響で、殊にその短き抒情詩にはシモンズの影響が深い。エーツの「善惡の觀念」の斷片的飜譯もある。　〔川路〕

守貞漫稿 隨筆【著者】喜田川守貞(傳未詳)【諸本】久しく寫本のまゝ世に知られなかつたが、明治末に近く發見せられ、明治四十一年に至り「類聚近世風俗史」と題し、室松・古内・保持三氏の校訂で、國學院出版部から二册に分ちて出版された。【內容】每卷の初めに「喜田川季壯尾張部守貞誌」と署す。卷首に概略と題して例言樣のものがあり、その初めに、自己の生年・略歷及び本書編輯の動機を述べ、次に「此册子天保八年以來見聞ニ隨ヒ是ヲ散紙ニ筆シ、後ニ大略諸類ヲ分チテ數册トス。故ニ甚ダ畾紙多ク、又往々白紙ヲ交ヘ綴ルモノハ、誌サント欲スル事有テ未ダ其正ヲ得ザルモノ、追書ノ料ニ備フ」とある。今原稿本と思はれる帝國圖書館本を見るに、果して餘白多く、なほ未定稿に終つたもののやうである。且つ目錄の所定と現本と卷數の附け方に不一致のところがある。目錄に依ると、卷一時勢、卷二地理、卷三家宅、卷四人事、卷五生業、卷六生業、卷七雜業、卷八貨幣、卷九男扮、卷十女扮、卷十一女扮、卷十二女扮、卷十三男服、卷十四男服、卷十五男服、卷十六女服、卷十七女服、卷十八雜服、卷十九織染、卷二十妓扮、卷二十一娼家京坂、卷二十二娼家江戸、卷二十三音曲、卷二十四雜劇京坂江戸、卷二十五沐浴、卷二十六春時、卷二十七夏冬、卷二十八遊戲、卷二十九笠、卷三十傘履(前集通計三十册既成)、後編卷一食類(既成)、卷二遊戲(追補)、卷三駕車(既成)、卷四雜器(嚢)となつてゐるが、現本には後編卷一・三と無卷號の一卷とを前集に加へて三十一卷三十册に作つてある。さて目錄の次に「先年閑居ノ日徒然ヲ患ヘ此書ヲ編シ、今適々閱レ之スルニ其拙キコト後悔スレドモ及バズ。廢レ之テ澁帋ニ製セント欲セシガ、又流石數日ヲ費シヌルコトナレバ、百年遺笑ヲ思ヒナガラ再藏蓄ス。慶應三年卯五月」とある。本書は、著者が大阪に三十年、江戸に十四年居住の間に實見した市井の行事・風俗を基として古今を對照し、江戸・大阪を區別して書き集めたもので、多く圖畫を加へて說明に便してゐる。例言の終りに「嘉永六年癸丑冬喜田川舍山述」とある。天保八年起筆よりこゝに至る迄十七年に及ぶ。著者の勞想ふべきである。而も嘉永中、米艦再來の風聞があつて開戰の虞から「衆心石上ニ坐スルガ如ク、依レ之遂ニ訂正セズ。諸財トトモニ櫃ニ納メテ、今日川越ノ親族ニ托ス。庶幾子孫訂レ之云爾」といつて匇忙の裡に例言を終つてゐるくらゐであるから、未定稿に終つたのも無理ではない。【批評】單なる隨筆と稱すべく、考證も大方その要を得てゐる。本書は「嬉遊笑覽」(別項)に似たところがあるが、廣博の點では彼に劣るとも、精細の點では優るとの評がある。　〔和田〕

守重 書誌學者【姓名】近藤氏。通稱重藏。幼名圓次郎【號】正齋。晚年の別號昇天眞人【生歿】明和八年江戸駒込鷄聲ケ窪に生れ、安政十二年(二五二五)六月十六日近江で病歿す。享年五十九【法名】自休院俊峯玄逸禪定門【墓所】江戸駒込西善寺【閱歷】父は守智(通稱は右膳、知新庵と號す)、母は備後福山藩士藤田隆本の女。幼少から極めて穎悟で、六七歲の時、「孝經」を諳誦講述し、暇あれば武を講じた。體軀肥大で、壯年になつては身長殆ど六尺に及んだといふ。寛政元年(十九歲)、はじめて御先手與力見習に出仕し、翌年、家督を繼いで與力を拜命したが、寛政六年二月、昌平坂學問所の試に應じ、最優等で及第して褒詞を賜はつた。寛政七年六月には長崎奉行出役として長崎に出張した。寛政九年十二月支配勘定に轉任し、蝦夷地取締について建言したが、翌年四月命によつて江戸を發し、七月最上常矩(德內)と共に國後擇捉の事情を探り、翌十一年、又命によつて一旦江戸に歸つたところ、蝦夷地取締御用を命ぜられ、三月十五日勘定役に榮轉した。同月二十日再び江戸を發して松前から國後に航し、高田屋嘉兵衞を督して擇捉島への航路を開かしめ、自ら擇捉に渡つて十二月江戸に歸つた。享和元年、又擇捉に赴き、歸途東海岸を巡回して歸府した。これから蝦夷地御用掛專任になつた。翌享和二年も蝦夷地に赴き、年內に歸つたが、翌年正月、小普請方に任ぜられた。文化四年六月、また蝦夷に渡り、西海岸を經て宗谷海峽に到り、天鹽から石狩の內部を巡察して十二月に歸府し、その地の狀況を將軍家齊に報告した。文化四年十二月、松前奉行附出役を命ぜられたが、同五年二月晦日書物奉行に轉任し、文政二年まで十二年の間、その職に在つた。文政二年二月、大坂御弓奉行に轉任したが、同四年譴を蒙り、小普請入差控となつた。文政九年、澁谷村別莊で長男富藏が村民を殺傷した爲め、家改易を申渡され、長男は八丈島へ配流せられ、守重も江州大溝藩分部家へ預けの身となり、此處に在ること三年、文政十二年、五十九歲で病歿した。分部若狹守は、痛くこれを悼み、菩提所瑞雪院に葬つたが、遺族等相謀つて近藤氏代々の菩提所、江戸駒込西善寺に墓を作つた。守重に四男三女があつたが、四男熊藏(守信)が家を繼ぎ、萬延元年に改易を赦された。

【著書】千五百册を下らないといはれてゐるが、現存するものは大抵、近藤正齋全集に收められてゐる。○清俗紀聞八册○安南紀略三册○天川紀略一册○外國通書略十二卷○憲教類典凡三百册○邊要分界圖考十五卷○いぎりす紀略一册○紅毛書五册○金銀圖錄七册○寶貨通考三十册○右文故事三十卷○外蕃通書(前篇)十卷○外蕃通考三十卷○正齋書籍考三册○同經史部及歷史部五册○同後集三册○金澤文庫考一册○江州本草凡三十卷○蝦夷奏議一册○富士の烟二册○近藤巡夷錄一册○續蝦夷草紙三册。

【業績】山本北山の門に入つて漢學を修め、十七歲の時、同學の士と白山義塾を起して自ら教授した。初めて出仕した時から憲政類典の編纂、日本分圖及び地誌の編集に從事したが、當時は外國船が日本近海に出沒し、外交上多事多端の時であり、外國の知識を必要とした時であつたから、守重は外國地誌の類を編して幕府に上り、又從來の外交關係を調査した「外蕃通書」その他をも作つた。又蝦夷地の取締についても建言し、遂に幕命を受けて蝦夷地に入ること五回、北邊の事情を探り、土民を馴致して露人の南下に備へた。その時の蝦夷地の旅行見聞記をも遺してゐる。文化五年書物奉行に轉じてからは、幕府の祕府の書を自由に見ることを得、「金銀圖錄」のやうなものをも作つたが、「正齋書籍考」「右文故事」「金澤文庫考」のやうな書史學上價値多いものを著はし、又種々の異本に接するにつれて、校勘の方面にも目をつけたと見えて、文化十三年十一月には、五經定本取立意見書を上つてゐる。かやうにして守重は、外國の事情及び對外關係の研究者として書上の研究のみならず、實地踏査をも行つたが、一方、古文獻の研究者として、殊に書史學に於て立派な業績を殘したのである。

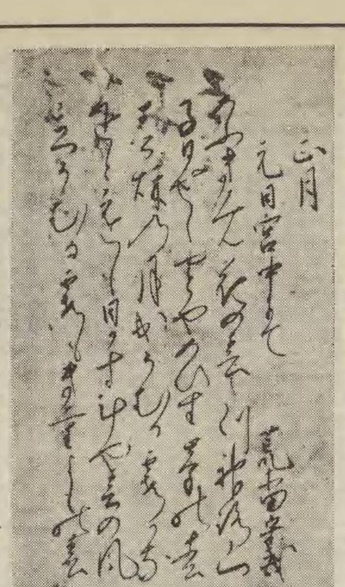
【參考】近藤守重事蹟考村尾元長編(近藤正齋全集第一)

守武 もりたけ 俳人 【姓】荒木田氏 【生歿】文明五年に生れ、天文十八年(一五四九)八月八日歿す。享年七十七。【辭世】和歌に「遂にゆく道を心にことへば答へやらぬぞ教へなるらん」「神路山こし方ゆくへ詠むれば峰の松風の松風」「こぞまでは見つると花にいつの世かもし忘れずば人の言の葉」。發句に「朝顏に今日は見ゆらん我が世かな」【墓所】宇治今北山麓荒木田氏の墓地(但しもと西行谷にあり、後北中村に移り、又今の地に移つたのであるといふ)【宅址】墓の東南約一町の所に現存し、守武松と稱する老松があつて當時のものと言ひ傳へられる。【閱歷】伊勢內宮禰宜荒木田(荒木田氏七家の中、薗田)守秀の男として生れ(九男と傳へる)、母は時の內宮長官荒木田(藤波)氏經の女であつた。文明六年二歲の時從五位下に叙せられた。同十年父守秀が歿したので、守武の兄守晨(當時經晨、守秀の五男と傳へる)が禰宜となり、同十九年氏經が歿したので守武が禰宜となつた。明應四年守武二十三歲の時に成つた宗祇の「新撰菟玖波集」(別項)に兄の守晨と共に一句づつ入集してゐるので、當時既に連歌に入つてゐたことが知られる。かくて永正五年三十六歲の時「守武發句集」を作り、同十三年には岩井田尙織亭に於て宗長等と一座し、「何人百韻」を作つてゐる。同年兄守晨歿し、同十七年に母が歿した。大永二年五十歲の時「法樂千首」を詠じ、同五年世に名だたる「世中百首」を詠じた。かくて享祿三年五十八歲の時「俳諧獨吟百韻」を作つたのであるが、これが彼の俳諧の作として知られる最初のものである。同五年風交の最も深かつた宗長が歿し、守武は「宗長追善千句」を作つた。また三年後の天文三年には、實隆の句を立句として「連歌獨吟百韻」を作つてゐる。なほこれまで數次陞位されてゐたが、同五年正四位上に叙せられ、位階はこれを以て終つてゐる。翌年實隆が薨じたので、守武は獨吟の追善連歌を作つた。同九年に「合點句集」を作つたが、この年の冬、彼の俳諧の代表作たる「俳諧獨吟千句」(守武千句)を作つた。翌十年に長官守兼が歿して守武が長官となつた。薗田長官と呼ばれるのはこの故である。同十一年に宗牧等と「賦何路百韻」の連歌を作り、同十五年には內宮百日參籠の際「法樂千句」を獨吟したが、これが彼の連歌の最晚年の作である。かくて同十八年、長官たること九年にして歿した。

【著作】守武發句集一册(自筆。永正五年正月から詠んだ、連歌の發句の日々の句帖で、十月の所でちぎれてゐるが、十二月までのものであつたらうといふ)○法樂千首一册(自筆。大永二年七月下旬から九月十日までに詠んだ和歌である)○世中百首一册(大永五年九月庚申の日、童幼の敎訓のため一夜に詠んだ百首(外に番外一首で、一首毎に「世の中」といふ言葉を詠み込んだ平易な道歌である。自筆本の外、後世の板本も註解もあり、活字翻刻もある)○俳諧獨吟百韻一卷(享祿三年正月九日の夜に試みたもので、如之撰「伊勢正直集」及び重德編「俳諧獨吟集」に收められてゐる)○宗長追善千句一册(寫。徵古館藏以外)(享祿五年三月四日宗長が歿したので、同月二十五日に作つた追善連歌である。第一丁表に守武自筆で、「宗牧點」とある)○連歌獨吟百韻(天文三年六月、實隆の發句を立句として作つた百韻で、その一部が後述の「合點句集」に見えてゐるといふ)○合點句集一册(自筆。守武が生涯多くの先輩から合點を得た連歌の付句及び發句を自ら集錄したもので、天文九年十二月二十五日に成稿されてゐる。付句六百八十八句、發句百七十四句ある。合點者は宗祇・兼載・夢庵(肖柏)・宗長・宗碩・尙純・基佐・紹永・印孝・玄清・宗警・周桂・宗牧・聽雪(實隆)で、宗長點のものが最も多く、次いで宗碩・夢庵で、これによつて守武の風交關係が窺はれる)○俳諧獨吟千句(守武千句參照)○法樂千句一册(自筆。天文十五年八月二十五日、齋館百日參籠の際、五日間で成就した連歌千句で、追加二十句ある)。

【業績】守武は俳諧作者として知られ、宗鑑と共に俳諧の鼻祖の如く考へられて來たが、正しくは俳諧に獨立の機運を與へたといふべきであつて、兎に角文學史上に於ける功績はその俳諧の方面にあつたと云へる。併し作家としての守武は、元來連歌の作者で、今日遺存する作も連歌の方に多いのであるが、連歌の方は、時代的關係から云つて價値が乏しく、且つ俳諧の方が時代的意義及び價値が大きいのである。その享祿三年の「俳諧百韻」は單なる試作といふべきであるが、天文九年の「俳諧千句」は、守武自身の熱意も自信も見えるもので、文學史上眞に意義を持つものは該千句であり、その千句に試みた式目の運用は、後世から俳諧式目に規範を與へたものとされてゐる。又守武は神官としての身分上世敎の方面にも意を用ひ、「世中百首」を詠じて鄕黨に敎へる所があり、鄕黨がこれを尊奉していつしか「伊勢論語」と稱するに至り、その餘德が永く後世に續いた。かくて守武は俳諧の方に於ては、伊勢俳壇の素地を作り、江戶期の初め望(もう)一(別項)が守武を隔世の師と仰いで起り、同時に伊勢俳壇の興隆が見られるに至り、俳諧の中興者貞德の一派も伊勢俳壇と密接の關係も守武は俳諧を連歌と同價値のものと認めた抱負が窺はれるので、こゝに重要な意義がある。歷史的に見ると、室町期に入つて早くから長篇の俳諧の作のあつたことが知られるので、宗祇の獨吟俳諧百韻の斷片も殘つてをり、文明十八年の「和漢狂句」の百韻も殘つてゐるのである。かくて守武自身も既に享祿三年に獨吟俳諧百韻を試みてゐるのであるが、この

を保つに至つた。かく守武の世教・俳諧の兩面に於ける餘德が現はれ來つた結果、守武三世の孫守任は、正保年中邸の傍に小祠を設けて守武の神靈を祀り、五世の孫守相によつて加飾され、更に七世の孫守糺に至つて岩井田山麓に新に神祠を造營して守武靈社とするに至つた。(「綾錦」など以來、守武について語られる著名な逸話に、宗祇興行の席へ守武が出座して見ると、いづれも法體の人であつたので、守武が「お座敷を見ればいづれもかみな月」と出すと宗祇が「ひとりしぐれのふり烏帽子きて」と附けたといふことであるが、ほぼ同じ事が慶長十八年の「寒川入道筆記」に元理と長慶との事として既に語られてゐるので、寧ろこの方に確からしさがある)。(本稿は勝峰晋風氏・各務虎雄氏、殊に伊藤正雄氏の研究に負ふところが多い)。〔志田〕

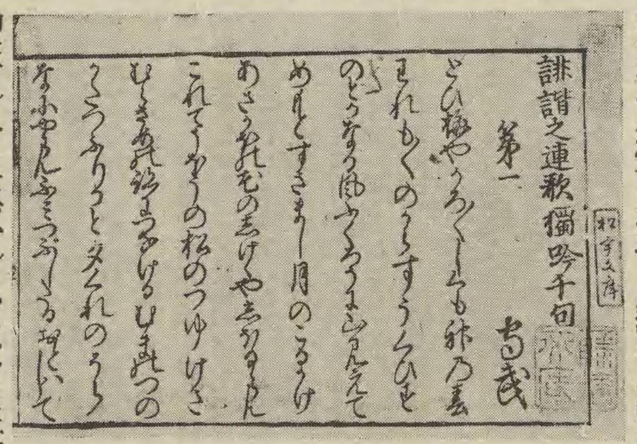


守武筆蹟(松字文庫藏)

【參考】犬子集序松江重頼○貞德永代記中島隨流○歷代滑稽傳森川許六○滑稽太平記北藤浮生○誹諧家譜早川丈石○俳家奇人談竹内玄々一○讀老庵日札老樗軒○誹家大系圖生川春明○俳諧人物便覽三浦若海○荒木田守武の研究勝峰晋風(にひはり大正一二ノ一―一二)○荒木田神主守武各務虎雄(國語と國文學昭和七ノ三)○連歌から俳諧へ志田義秀(俳文學の考察)○宗鑑と守武との俳句同上(同上)○荒木田守武の生涯伊藤正雄(國語と國文學昭和七ノ一○)○荒木田守武の文學同上(同上昭和八ノ三)

守武千句(もりたけせんく)　連句　一册【作者】

荒木田守武【本稱】誹諧之連歌獨吟千句【異稱】第一の發句、「飛梅やかろ〳〵しくも神の春」の句によつて、「飛梅(とびうめ)千句」ともいふ。また單に「獨吟千句」と云つて、この千句を意味する事もある。【成立】天文九年十月【刊行】慶安五年四月【傳本】神宮徵古館に自筆本が藏されてゐる。【諸本】續群書類從に荒木田守武句集と題して收めてゐるものは、實はこの千句である。なほ、芭蕉以前俳諧集(俳諧文庫)・貞門俳諧集(俳書大系)に所收。【解說】守武の俳諧の獨吟千句で追加五十韻がある。自跋があつて、それによつて成立の事情、俳諧に對する意見等を知り得る。即ち守武が豫て千句を獨吟すべき事を太神宮に立願しながら遲れてゐたのを、御圖を引いて、一ならば本連歌、二ならば俳諧と定め、二おりよと念じて引くと二がおりたので、俳諧の千句を作つたのであるが、千句は三日間で作り上げるのが定法であるのを、五日を費して作り上げた。さてこの千句制作に當り、京の周桂へ俳諧に用ふべき式目を尋ねてやると、周桂から「かゝる式目は予(われ)こそ定むべけれ。定めよ。それを用べき」といふ戲れた返事が來たので、「さらばこの度ばかり心にまかせん」と、自己の意見によつて式目の運用を試み、指合(さしあひ)用語などもすべて自己の意見によつた。兼載や宗碩や宗牧が本連歌の餘興に二句云ひ捨ての俳諧を作つたり、宗鑑から度々俳諧の發句を送つて來たりしたので、「それらをたよりにて思ひよる事しかなり」と云つてをり、又追加五十韻多いのは、宗祇が三島社頭で千句を作つた時二折だけ多く作つたのであると云つてゐる。以上によつて該千句の成立の事情が知られる。又「はいかいとて、みだりにし笑はせんとばかりはいかん。花實をそなへ、風流にして而も一句たゞしく、さておかしくあらんやうに世々の好士のをしへなり」と云ひ、「はいかい何にてもなきあとなし事と好まざる方のことぐさなれど、何か又世の中其ならんや。本連歌に露かはるべからず。大事ならんか」と云つてゐるので、俳諧に對する意見抱負が窺はれる。



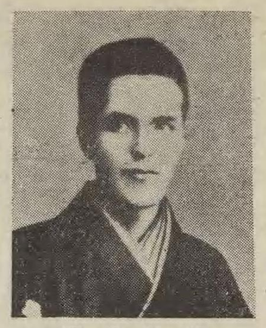
守武千句(松字文庫藏)

【史的地位】上述によつて、該千句は太神宮の法樂としたものであつた事が推定され、又知友の刺戟によつたことが知られると共に、而も守武は俳諧を連歌と同價値のものと認めた抱負が窺はれるので、こゝに重要な意義がある。歷史的に見ると、室町期に入つて早くから長篇の俳諧の作のあつたことが知られるので、宗祇の獨吟俳諧百韻の斷片も殘つてをり、文明十八年の「和漢狂句」の百韻も殘つてゐるのである。かくて守武自身も既に享祿三年に獨吟俳諧百韻を試みてゐるのであるが、この時はまだ試作といふ意味のものに過ぎなかつたやうであるが、該千句に至つて自覺した抱負を以て作つてゐるので、これが宗鑑の「犬筑波」(別項)の編纂と相對して、俳諧に獨立の機運を與へたものとして大なる意義を持つのである。從つて該千句が後世にも反響を呼び、該千句に試みられた式目の運用が、後世から俳諧の式目の模範の如くにも見做され、又守武を俳諧式目の創定者の如くにも見做され、守武を以て俳諧式目の創定者の如く考へるにも至つたのである。

【參考】連歌から俳諧へ志田義秀(俳文學の考察)○荒木田守武の文學伊藤正雄(國語と國文學昭和八ノ三)〔志田〕

森田思軒(もりたしけん)　飜譯家・新聞記者【本名】文藏【別號】白蓮庵主人【生歿】文久元年七月二十一日、備中國笠岡に生れ、明治三十年十一月十四日、東京上根岸にてチブスで歿す。享年三十七【家系】父、名は佐平、三逕と號す。土地の德望家。母森田氏【閱歷】夙に聰慧、神童の稱があり、八九歲の頃「水滸傳」「三國志」「西遊記」等の物語を好んで聞いた。明治四年頃、五十川左武郎の啓蒙社(小學校)に入つて學び、同六年十三歲で大阪に出で、慶應義塾の支塾に入つて英語を學んだ。後支塾と共に阿波に移り、次いで又支塾と共に東京

に移つた。十一年十八歳で郷に歸り、阪田警軒の館長をしてゐた興讓館に入つて經史を學んだ。學業拔群、詩文の才華衆に優れ、ために度々同輩の嫉妬を買つたといふ。數年にして館を退き、十五六年の交、再び東京に遊んだ。この時また慶應義塾に入つたともいふが詳かでない。間もなく、矢野龍渓〔別項〕の知るところとなり、聘されて報知新聞社員となつた。翌十七年二月刊行の龍渓の「經國美談」〔別項〕後編に、漢文の跋と欄外評語があるが、これは當時の讀書界が彼の存在を認めた最初であつた。だが當時思軒は文學で名を成すことを欲せず、却つて政海狂瀾の中に立つて大に爲すあらんことを期してゐた。十八年春天津條約の締結されんとするや、通信員として淸國に赴き、次いで同年秋歐洲に漫遊し、英京に留まること殆ど一年、十九年夏米國を經て歸朝、依然報知新聞にあつた。思軒が文學者として活動したのはこの後のことで、その初舞臺は報知紙上の「新嘉坡通信」といふ叢談欄であつた。英京滯在中、彼地の政治家達と交際して政界の內情を洞察するにつれ、何れ劣らぬ名利の奴隷なのに愛想が盡きて飜然文藝に專心するに至つたのだといふ。その後の思軒は、主として飜譯家・批評家として活動し、文名大に揚つて文壇一方の牛耳を執つた。二十年「國民之友」〔別項〕が出るや客員となり、二十二年同好會發起者の一人として第一期「新小說」〔別項〕の編輯を監督し、又文學會を創めて同志と共に後進を誘掖し、更に演藝矯風會の事に斡旋するなど華々しい活動振であつた。而も一方、又好んで饗庭篁村・高橋太華・幸田露伴・中西梅花等と詩酒徵逐の遊をなしたことは、當年文壇の佳話として傳へられてゐる。二十四年秋、龍渓が報知新聞を退くや、主筆の思軒も共に退いた。それより間もなく、新聞「國會」から招聘され、又京都の同志社からも禮を厚くして招かれたが、當時彼には東京を去り難い事情があつたので、遂に「國會」に入つた。二十八年「國會」が廢刊されたので、翌年秋から萬朝報に筆をとつたが、この前後から文學界の新地盤開拓について、祕かに志すところがあつたらしいが、翌年歿したので果さなかつた。【譯著】〔飜譯〕鐵世界○彆使者〔別項〕○隨見錄○探偵ユーベル○クラウド○死刑前の六時間○大叛魁○破茶碗○大東號航海日記○懷舊○隔簾影○入雲異譚○十五少年〔別項〕○列國變局志○無名氏等。〔史傳〕賴山陽　○寬政中の世界環航者。〔隨筆〕社會の罪○消夏漫筆○尤憶記。〔紀行〕探花日曆等。以上が主要なもので、その他、隨時草した文藝・演劇・社會時評の類に至つては枚擧に遑がない。



森田思軒

【批評】思軒の文學的活動は、主として飜譯に終始したが、併し單に一飜譯者として目されずに、文壇の一巨豪を以て推され、いはゆる思軒調の周密文體と西洋文學通とで一方に雄視した。だが、彼の死後その反動として彼の名は不當に貶下され、殆ど忘れられるに至つた。併し今日平靜に思軒の業績を考へると、それまで政治家の餘技であつた飜譯を文藝家の手にとり返した點、從來亂雜を極めた譯語・譯法を一新して周密文體を完成し、よく明治飜譯文學の正調を定めるに貢獻した點、ユーゴーの諸作を初めて紹介した點等で、彼の名が明治文壇に永久の意義をもつべきは疑ひを容れない。且つその飜譯の態度が二葉亭四迷〔別項〕に影響してゐることは、明白に看取することが出來る。

〔柳田(泉)〕

森田草平（もりたさうへい）　小說家【本名】米松【閱歷】明治十四年三月十九日、岐阜縣稻葉郡鷺山村の農家に生る。二十八年四月上京、攻玉社海軍豫備校に入學、途中志を轉じて所々の學校を轉々した擧句、三十一年三月、日本中學校第五年に編入、翌年七月、第四高等學校に入學したが、十一月、親戚の一女が後を追つて來たことが發覺、諭旨退學を命ぜられ、翌年の春まで名古屋市に放浪す。その間森鷗外の「水沫集」により初めて純正文學の洗禮を享けた。三十三年、再び上京、七月第一高等學校の入學試驗に合格したが、當時勃發せる南阿戰爭に參加しようとして、容易に入學の手續を履まなかつたのを、同宿の河井酔茗の諫止に會ひ、九月漸く手續を了へた。第一高等學校の同級生田長江・栗原古城・川下江村の文學志望者と回覽雜誌「夕づゝ」を作り、翌年與謝野寬夫妻の知遇を得、その翌年、馬場孤蝶の指導で、旺んに大陸文學を涉獵した。三十七年、上田敏・馬場孤蝶の「藝苑」同人に加はり、翌年夏目漱石の木曜會に出席し、文壇に知己を得る一方、飜譯に創作に活躍した。三十九年七月、東大英文學科卒業。一時天台宗中學林の英語敎師を勤めたが、四十年與謝野晶子の「閨秀大學講座」の講師となり、翌年二月、學生平塚雷鳥〔別項〕と戀愛事件を起し、危く社會的に葬り去られようとしたが、夏目漱石に救はれ、その體驗を執筆、朝日新聞に「煤煙」〔別項〕と題して發表し、これを出世作として華々しく文壇に出現した。同十一月、夏目漱石が朝日新聞に文藝欄を創設したので、その編輯を擔當した。四十四年四月「煤煙」の續篇とも稱すべき「自敍傳」を朝日新聞に連載、同十二月「初戀」〔中央公論〕等の力作を發表、四十五年六月讀賣新聞に「十字街」を連載する頃より、作家生活に行詰りを感じて飜譯に着手し、大正八年頃までは、主として短篇の作多く、大正二年四月、戲曲「袈裟御前」〔中央公論〕の如き佳作を發表した。大正九年三月、法政大學に文學部新設せらるゝや、入つてその敎授となり今日に至つてゐる。大正十四年十一月、久し振りに創作「輪廻」を「女性」に發表、約二箇年に亙り連載したが、構想・內容渾然として彼の最大傑作の名に値した。昭和四年四月、朝日新聞に「吉良家の人々」を連載、同十月「四十八人目」を「改造」に發表して歷史物に一境地を拓いた。

【著作】〔創作〕煤煙〔別項〕○トビラ〔明治四十四年五月、左久良書房〕○初戀〔岡崎日記・女の一生・女の良人と合收。新興文藝叢書六篇、大正七年三月春陽堂〕○自敍傳〔明治四十四年十二月、春陽堂〕○十字街〔大正元年十二月、春陽堂〕○輪廻〔大正十五年一月、新潮社〕○吉良家の人々〔昭和五年五月、四十八人目と合收、改造社〕○現代日本文學全集四十二卷〔鈴木三重吉と合收〕○明治大正文學全集第二十九卷等。〔飜譯〕アラビヤ夜話○ドン・キホーテ○タイス○ウイルヘルム・マイステル○快樂兒○犧牲○惡靈○死せる魂○鴨○椿姫○デカメロン○サツホー○大戰と女○「人及び藝術家としてのトルストイ並びにドストエフスキ」〔安倍能成共譯、大正三年二月玄黃社〕等。最近數人の少壯飜譯家と岩波文庫に「ユリシ

ーズ」を飜譯中である。その他評論・隨筆が多數發表されてゐる。

【作風】彼の制作態度は、內容によつて形式を決定してゐる點に於て、自傳作家としての本領を具有してゐる。鈍重な、土臭い、しかもエネルギッシュな筆致は、造詣深い大陸文學の良い影響を享け、本格的に大作を構成させるのに手傳つてゐる。が短篇作家としては密度が本に「主馬判官盛久」がある。これは近松門左衞門の筆であつて、宇治加賀掾の正本「盛久」を改作したものであるが、本篇はこれを草子化したものである。平家の侍大將主馬判官盛久、平家滅亡後、惡七兵衞景淸と共に怨敵賴朝を刺さんと志し、賴朝の南都東大寺落慶供養に上洛するのを、濱松の長の家に待ちうけてゐたが、その戀人あけぼのゝために阻止され、とを發表して、化政度以後の我が古典學界に刺戟を與へるところが多かつた。【以上森】

【著作】橘守部全集〔國純一編、首卷共十三冊圖書刊行會刊〕がある。【註釋書】稜威言別十卷〔別項〕○萬葉集檜嬬手別記共七卷〔別項〕○萬葉集墨繩八卷○神樂歌入文三卷〔別項〕○催馬樂入文三卷〔別項〕○伊勢物語箋二卷○土佐日記舟の直路二卷○湖月抄別記二卷○舊事記直日六

說いたものであるが、屢々宣長の說を駁して居り、又不備を補つてゐるが、その中には肯綮に中つたものが少くない。「助辭本義一覽」も「紐鏡」や「玉緒」の說を土臺にして、これを反駁的に批評しながら、助辭即ち手爾乎波の語義用法を說いたもので、所說頗る詳細で、宣長の不備誤謬を訂正した點も少くない。併しその說明の過半は、謂はゆる音義說に依つ

員として清國に赴き、次いで同年秋歐洲に漫遊し、英京に留まること殆ど一年、十九年夏米國を經て歸朝、依然報知新聞にあつた。思軒が文學者として活動したのはこの後のことで、その初舞臺は報知紙上の「新嘉坡通信」といふ叢談欄であつた。英京滯在中、彼地の政治家達と交際して政界の内情を洞察するにつれ、何れ劣らぬ名利の奴隷なのに愛想が盡きて飜然文藝に專心するに至つたのだといふ。その後の思軒は、主として飜譯家・批評家として活動し、文名大に揚つて文壇一方の牛耳を執つた。二十年「國民之友」(別項)が出るや客員となり、二十二年同好會發起者の一人として第一期「新小説」(別項)の編輯を監督し、又文

筆〕社會の罪○消夏漫筆○尤憶記。〔紀行〕探花日曆等。以上が主要なもので、その他、隨時草した文藝・演劇・社會時評の類に至つては枚擧に遑がない。

【批評】思軒の文學的活動は、主として飜譯に終始したが、併し單に一飜譯者として目されずに、文壇の一巨豪を以て推され、いはゆる思軒調の周密文體と西洋文學通とで一方に雄視した。だが、彼の死後その反動として彼の名は不當に貶下され、殆ど忘れられるに至つた。併し今日平靜に思軒の業績を考へると、それまで政治家の餘技であつた飜譯を文藝家の手にとり返した點、從來亂雜を極めた譯語・譯法を一新して周密文體を完成し、よく明治

諫止に會ひ、九月漸く手續を了へた。第一高等學校の同級生田長江・栗原古城・川下江村の文學志望者と回覽雜誌「夕づゝ」を作り、翌年與謝野寛夫妻の知遇を得、その翌年、馬場孤蝶の指導で、旺んに大陸文學を渉獵した。三十七年、上田敏・馬場孤蝶の「藝苑」同人に加はり、翌年夏目漱石の木曜會に出席し、文壇に知己を得る一方、飜譯に創作に活躍した。三十九年七月、東大英文學科卒業。一時天台宗中學林の英語教師を勤めたが、四十年與謝野晶子の「閨秀大學講座」の講師となり、翌年二月、學生平塚雷鳥(別項)と戀愛事件を起し、危く社會的に葬り去られようとしたが、夏目漱石に救はれ、その體驗を執筆、朝日新聞に「煤

【著作】〔創作〕煤煙(別項)○トビラ(明治四十四年五月、左久良書房)○初戀(岡崎日記・女の一生・女の良人と合收。新興文藝叢書六篇、大正七年三月春陽堂)○自敍傳(明治四十四年十二月、春陽堂)○十字街(大正元年十二月、春陽堂)○輪廻(大正十五年一月、新潮社)○吉良家の人々(昭和五年五月、四十八人目と合收、改造社)○現代日本文學全集四十二卷(鈴木三重吉と合收)○明治大正文學全集第二十九卷等。〔飜譯〕アラビヤ夜話○ドン・キホーテ○タイス○ウイルヘルム・マイステル○快樂兒○犧牲○惡靈○死せる魂○鴨○椿姫○デカメロン○サッホー○大戰と女○人及び藝術家としてのトルストイ並びにドストエフスキ」(安倍能成共譯、大正三年二月玄黄社)等。最近數人の少壯飜譯家と岩波文庫に「ユリシ

ーズ」を飜譯中である。その他評論・隨筆が多數發表されてゐる。

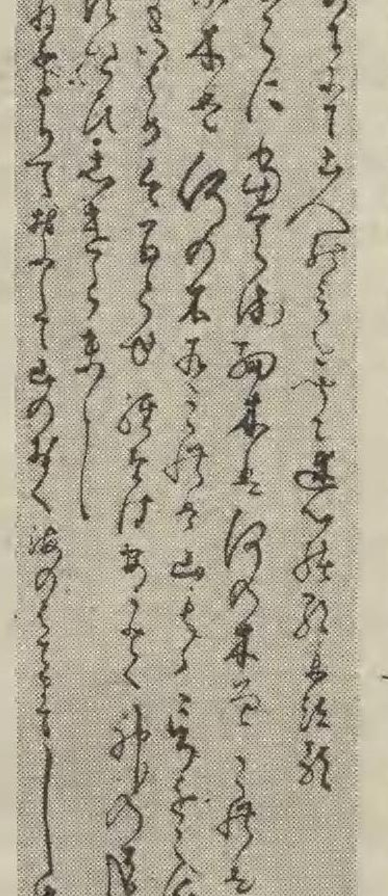
【作風】彼の制作態度は、内容によつて形式を決定してゐる點に於て、自傳作家としての本領を具有してゐる。鈍重な、土臭い、しかもエネルギッシュな筆致は、造詣深い大陸文學の良い影響を享け、本格的に大作を構成させるのに手傳つてゐる。が短篇作家としては密度が甚だ稀薄である。鈴木三重吉(別項)の情緒的・都會的なのに對し、彼は意志的であり、田園的である。彼は現實的な作家ではあるが、自然主義作家と云ふには、餘りにも主觀が露出してゐる。現實の限界を知りながらも、なほそれを超えようとする情熱が、脈々として彼の作品の各所から閃いてゐる。漱石門下であるが、作品に現はれた影響は認め難い。遲筆と戰ひながら、自然主義作家一派の埒外にあつて、惑星として現在に至つた彼の經歷は、職業作家としてよりも、むしろ飜譯家としての價値を自認した結果に據るのであらう。彼の思想傾向は、必然的に、彼を取り卷いた社會條件に制約され、自由主義的正義觀を一歩も出でない。從つて新興階級に對する認識は、單なる傍觀者に止まり、その評論は個人主義的正義感に墮してゐる。何れにしても彼が身をもつて大陸文學を紹介した功績は、文學史上輝かしい存在ではあるが、同時に我が國の生んだ自傳作家として、最高峯を占める作家の一人であらう。〔江口〕

盛久 「平家物の謠曲」を見よ。

盛久側柏葉 浮世草子 大本五册【作者】八文字屋其笑・同瑞笑【角書】新板繪入【刊行】延享五年正月吉日、八文字屋八左衞門板【解説】竹本義太夫興行年代不詳の正本に「主馬判官盛久」がある。これは近松門左衞門の筆であつて、宇治加賀掾の正本「盛久」を改作したものであるが、本篇はこれを草子化したものである。平家の侍大將主馬判官盛久、平家滅亡後、惡七兵衞景淸と共に怨敵賴朝を刺さんと志し、賴朝の南都東大寺落慶供養に上洛するのを、濱松の長の家に待ちうけてゐたが、その戀人あけぼののために阻止され、あけぼのは却つて盛久の身代りとして自害する。景淸も南都で失敗して捕へられるが、賴朝は盛久・景淸を赦し、恩賞を與へるといふのである。この一篇はその構成上、内容上、八文字屋に於て、從來數多出板されたる時代物の一つとして取扱ふべきものである。〔吉田〕

守部 國學者【姓名】橘氏。本姓は飯田。名は初め庭麿、後、守部と改めた。幼名旭敬、また吉彌、通稱元輔【號】蓬壺・池庵・生藥園・椎本【生歿】天明元年四月八日、伊勢國朝明郡小向村に生れ、嘉永二年(二五〇九)五月二十四日、江戸本所の家に歿す。享年六十九。【墓所】牛島長命寺【閲歷】守部は飯田長十郎元親の子、十二歳從兄に伴はれて大阪に赴き、十七歳江戸に出でて居を定む。二十歳を越してより學問に志し、二十五歳の頃葛西因是に就いて經書の講義を聽いた。二十九歳より約二十年武州幸手に住み、四十八歳の頃江戸に戻り、しばらく深川に居り、後、居を轉じて淺草辨天山、同藏前桐畠に移し、晩年は本所法恩寺に住んだ。守部は殆ど獨學を以て一家を成し、著述六十餘部、大部分は全集の中に收載されてゐる。その著述中「稜威道別」(別項)は、弘化二年、荒木田久守を經て朝廷に奉つた。守部は古典の解釋に於て本居宣長とは反對の位置に立ち、大膽なる學説と批評とを發表して、化政度以後の我が古典學界に刺戟を與へるところが多かつた。〔以上森〕

【著作】橘守部全集(橘純一編、首卷共十三册圖書刊行會刊)がある。〔註釋書〕稜威言別十卷(別項)○萬葉集檜嬬手別記共七卷(別項)○萬葉集墨繩八卷○神樂歌入文三卷(別項)○催馬樂入文三卷(別項)○伊勢物語箋二卷○土佐日記舟の直路二卷○湖月抄別記二卷○舊事記直日六卷(別項)。〔文學論書〕長歌撰格二卷○短歌撰格二卷(各別項)○文章撰格二卷○萬葉集緊要二卷○心の種三卷。〔語學論書〕俗語考(卷數不定)○助辭本義一覽(別項)○てにをは童訓○五十音小説(別項)○山彦册子一名難語考三卷(別項)。〔古道論書〕稜威道別十二卷(日本書紀神代卷の註)(別項)○難古事記傳五卷○神代直語三卷(別項)○神道辨一卷○神風問答○歷朝神異例七卷○蒙古諸軍記辨疑五卷○稜威雄誥五卷〔雜著〕佐喜草○待問雜記後篇共三卷○箱根日記稿三卷○橘の昔語一卷○啻香物語(總卷大意)二十卷。



橘守部筆蹟

【業績】〔國語學者として〕守部には、「山彦册子」「鐘の響」(各別項)等、古典中の難語を解釋したものがあり、中には國語學上注意すべき説が少くない。專ら國語學に關するものとしては「てにをは童訓」「助辭本義一覽」(別項)「五十音小説」(別項)等がある。「てにをは童訓」二卷は、宣長の「てにをは紐鏡」及び「詞の玉緒」(各別項)の説に基いて、手爾波の呼應の關係を説いたものであるが、屢々宣長の説を駁して居り、又不備を補つてゐるが、その中には肯綮に中つたものが少くない。「助辭本義一覽」も「紐鏡」や「玉緒」の説を土臺にして、これを反駁的に批評しながら、助辭即ち手爾乎波の語義用法を説いたもので、所説頗る詳細で、宣長の不備誤謬を訂正した點も少くない。併しその説明の過半は、謂はゆる音義説に依つたものであつて、直ちに信用し難いものである。「五十音小説」は音義説に依つて、五十音圖の組織及び内容、國語の延約活用等を説いたもので、守部の音義説の精髓とも云ふべきものであるが、その説くところは今日では殆ど用ひ難いものである。一體音義説は守部以前にも幾分行はれてゐたのであるが、專らこれに依つて國語の語義を説かうとしたのは守部に始まる。守部は初め簡單な助辭の類を説くに際して、多くの用例から一つの原義を抽象し、やがてこれを複雜な語にも應用し、以て音義説を組織したのであつて、それは語原研究の一種であるが、今日から見れば研究の過程に獨斷的なものがあり、その結果は牽強附會に陷り、容易に信じ難いものであるが、守部以後には、一部の學者(富樫廣蔭・堀秀成等)に用ひられたものである。守部には、この外「さき草」一卷がある。「さへ」「だに」「すら」の別を説いたものである。又「類語品彙」五十六卷(寫本)、「俗語考」二十二卷、「雅言考」十二

巻、「千世の古徑」九巻（寫本）等の辭書類の未定稿のものがある。これを要するに、守部は一面頗る几帳面な學者であつて、用語例等を統計的に研究し、歸納的に結論を出してゐるが、また一面言語に對して鋭い直覺力を持つてゐた。この二方面が守部の學問を組織したのであつた。しかし惜しむらくは、國語の方面に於ては、直覺力の方がより多く働いた爲めに、獨斷的な音義説に傾いてしまつたことである。

〔以上龜田〕

〔歌人として〕守部は「萬葉集」を初め記・紀にまで溯つて、古學の特質を究めたにも拘はらず、その作品は古歌の摸寫以上に出なかつた。而もその古歌は「新古今」を中心とした平安朝中期の歌風で、極めて生ぬるいものであつたことは意外である。彼の古學上の意見は、一面では彼の自我を擅にした所があり、それが獨斷に陷つても、なほ且つ興味深く感じられたにも拘はらず、この臆病さは何に起因するのであらうか。思ふに彼も歌は優雅でなくてはならぬといふ概念に囚はれて、古歌の作風を唯一の手本としたがために外ならぬ。偶々萬葉語を使つたり、又その句調を眞似たりしたが、「すみれさく紫野ゆきしめ野ゆき遊べどあかぬ春の色かな」（野遊）、「さつ人のゆづきが嶽の木の間よりともしのほかげ見えかくれせり」（嶺照射）の如き、その外形を似せるにとどまつて、遂にその眞髓に達することが出來なかつたのは、歌の本質をよく理解しなかつたことに依らう。また一方纖巧な技巧を喜び、自己の歌も傾向としてはそれを追ふやうな形があつて、率直と剛健性の甚だ少いものとなつた。「霰うつあられ松原おぼろ夜の月おもしろしあられ松原」（海邊春月）、「有明の月はかたぶく高嶺よりいろあらはるゝ山櫻ばな」（曙山花）。これ等は幾分單純過ぎて、もの足らぬところがあるが、彼の作としてはよいものの一部である。長歌も幾つかあるが、平面的な調子の低いもので、一二を除く外、鑑賞に値ひするものはない。

〔以上窪田〕

【參考】橘守部全集首卷　橘守部翁小傳（橘純一）、同略年譜（同上）（加藤玄智・佐佐木信綱・保科孝一三氏の評論その他）○橘守部傳記資料　橘純一

森有禮（もりありのり）

戯曲　五幕九場　【作者】小山内薫　【發表】大正十五年七月「中央公論」　【刊行】小山内薫全集第三巻・日本戯曲全集第四十巻・戯曲集「森有禮」等所收。　【初演】大正十五年十二月、歌舞伎座。作者自身演出。

【役割】森有禮（市川左團次）、西野文太郎・横山正太郎（市川猿之助）、吉田清成（市川壽美藏）、黒田清隆（中村鶴藏）等。

但しこの際第三幕及び第四幕のカットと暗殺の場面の改竄が行はれた。

【梗概】〔一幕〕（第一場）明治二年五月、公議所議場。舞臺一ぱいに竝んだ公議人を前に、議長森有禮は帶刀廢止の建議を提出する。討論に移ると反對の聲が諸方から起る。森が刀劍を殺伐野蠻な兇器だと説くや、滿場憤激して騒亂に陷る。（第二場）同年六月森の邸。輿論の壓迫で職を免ぜられ、位記返上を仰せつけられた森と、當路の政略的な征韓論を非とする兄の横山とが對座して國事を談ずる。横山は死を以ても諫止する覺悟を語る。〔二幕〕明治五年四月、亞米利加華盛頓日本辨務館の一室。中辨務使森が故國で切腹した兄に默禱を捧げてゐる。移住民の龜山が訪ねて來て、さきに森の言論に憤慨して暗殺を謀つたことを懺悔し謝罪して歸る。そこへ外債募集のために派遣された吉田が、森が外字新聞に反對論を書いたのを責めに來て腕力に及ぶ。森は兄の位牌を目前にし、手向はずに默つて鐵拳を浴びる。〔三幕〕明治九年一月、清國保定府の一室。特命全權公使森が老獪な李鴻章と朝鮮事件に就いて外交談判をしてゐる。後、雜談となつて、森は進歩的な意見を述べる。〔四幕〕（第一場）明治十九年十二月、高崎正風邸の客間。主人は文部大臣森有禮に對して、歐化萬能を難じて各國の教育が國粹第一主義たることを説く。森承服す。（第二場）明治二十二年一月、文部省の會議室。直轄學校長會議。森は學政の目的を專ら國家の上に置くべきこと、また萬世一系の國體を教育上の基礎とすべきことを演説する。〔五幕〕（第一場）明治二十二年二月、内務省屬兒玉の寓居。同郷の青年達の集つてゐるところへ西野文太郎が來て、森が伊勢神宮で不敬罪を犯した事を語り、許すべからざる非國民だと、しきりに悲憤する。（第二場）同月十一日、憲法發布の朝。森文部大臣官邸の應接間。西野は參内せんとする森を要して出刄庖丁で刺し、從者に仕込杖で斬り下げられる。（第三場）同官邸の二階居室。森は病床で譫言のやうに兇器を呪ひながら、祝砲の響と市民歡呼の聲の裡に瞑目する。

【解説】この作は、我が國の戯曲に一新體を拓いたものである。森有禮個人の性格を描くのを目的とせず、彼を材として、その二十三歳・二十六歳・三十歳・四十歳・四十三歳だつた各時代の文化を檢討解剖せんと企てた作者は、從來の多幕物の筋を追ふ重層式構成を捨てて場面の並列に依る映畫劇的手法を採用した。そしてスケエルの大きい野心的な試みに見事に成功し得たのである。而も單に便宜上、中心人物としたといふ森有禮の、先覺者としての面影が同時によく寫されてゐる。これは中心が國家主義者でありながら、常に世に誤まられて兇刄に斃れるに至つた彼の生涯が、國劇樹立に資するための飜譯劇上場に依つて非難された作者にとり、特に感銘深きものがあつた故ではなからうか。そして舞臺に於ける公議場の巧妙なる演出と戯曲の新形式とは、當時の劇壇にセンセーションを惹き起した。また文化史劇を描かんとする意圖はともかくとして、清新な映畫的手法は、これに倣ふものの輩出して、正に一の流行まで將來したほどである。

〔水木〕

師氏（もろうじ）「海人手古良集（あまのてこらしふ）」

諸九（もろく）　俳人　【本名】有地ふみ（或は云ふ、なみ）　【別號】湖白庵二世　【生歿】正徳四年に生れ、天明元年（一七八一）九月十日歿す。享年六十八　【墓所】筑前國鞍手郡直方町附近山邊村隨專寺　【俳系】志多野坡門　【閲歴】諸九尼は、湖白庵有地浮風（八木氏、有井氏ともすれど、有地氏が正しいといふ）の妻である。浮風夫婦は郷里直方に在つて、行脚して來た野坡（別項）に入門し、九州に於ける野坡門の一頭目となつた。野坡歿後大阪に出でて、その師の舊居なる高津野の無名庵を守つたのは、諸九尼が三十歳の頃であつた。寶暦十一年には、浮風は大阪荒陵の西、椎寺の後に芭蕉・野坡の二句碑を建てて追慕の志を表はし、その記錄として「朱白集」を刊行した。京の額田文下の招きにより、その九十九庵に假寓したのは、この間の事であらう。浮風が寶暦十二年五月十七日歿した後の諸九尼は、京にも居り、故郷へも歸り、又心の赴く儘に各地を周遊したが、

六十を越えてからは鄉里の直方へ歸つて湖白庵二世を稱した。その明和八年奥羽に遊んだ時の紀行を「秋風記（あきかぜのき）」（天明三年刊）と稱する。この旅行中病に罹り、大阪の大江丸（別項）の世話を受けた。剃髪したのはいつ頃か判然しないが、無論浮風歿後であらう。晩年は至極平和であつたらしく、直方に於て終つたのである。

【著作】秋風記（前出）○諸九尼句集二册（浮風門異名はこの時に得たのである。安元の初めに志があつた時、村上天皇は勅使を以て東宮輔導のため出家を思ひ止まるやう御諭しがあつた。大納言の時、正月元日に用ふる魚袋（ぎょたい）が破損してゐたので、父忠平に借用し、返しの歌は自ら貫之の家に赴いて賴んだといふ（大鏡）。

【著作】九條殿年中行事　○除目鈔　○九暦　○九條殿遺誡（別項）○師輔集一卷（丹鶴叢書所收。短歌八十七首の外勅撰集に見えるもの十四首、合計百

内大臣となり、治承元年に太政大臣となり、從一位に敍せられた。然るに治承三年に平清盛が廷臣の己を謀ることを怒つて、その數十人を流罪にしたが、師長もこれに坐して尾張の井戸田に流されたので、薙髪して名を理覺と改めた。翌四年に赦されて都に還り、建久三年に薨じた。その子師妙（右近衞少將）と師良（從

たが、師長のみただ獨り御心に叶ひ給うたと稱せられる。師長が樂琵琶に堪能であつたことに就いての逸話傳説が、「十訓抄」「源平盛衰記」「保元物語」「今鏡」「古事談」等の諸書に多く記されてゐる。これ等によつて師長の音律に精通してゐたことを知るべきである。【著書】三五要錄○三五要略○仁智要錄○仁智要略○白馬節會鈔。

【田邊】

のであらうか。思ふに彼も歌は優雅でなくてはならぬといふ概念に囚はれて、古歌の作風を唯一の手本としたがために外ならぬ。偶々萬葉語を使つたり、又その句調を眞似たりしたが、「すみれさく紫野ゆきしめ野ゆき遊べどあかぬ春の色かな」(野遊)、「さつ人のゆづきが嶽の木の間よりともしのほかげ見えかくれせり」(嶺照射)の如き、その外形を似せるにとどまつて、遂にその眞髄に達することが出來なかつたのは、歌の本質をよく理解しなかつたことに依らう。また一方纖巧な技巧を喜び、自己の歌も傾向としてはそれを追ふやうな形があつて、率直と剛健性の甚だ少いものとなつた。「霰うつあられ松原おぼろ夜の月おもしろしあられ松原」(海邊春月)、「有明の月はかた

【梗概】〔一幕〕(第一場)明治二年五月、公議所議場。舞臺一ぱいに竝んだ公議人を前に、議長森有禮は帶刀廢止の建議を提出する。討論に移ると反對の聲が諸方から起る。森が刀劍を殺伐野蠻な兇器だと説くや、滿場憤激して騒亂に陷る。(第二場)同年六月森の邸。輿論の壓迫で職を免ぜられ、位記返上を仰せつけられた森と、當路の政略的な征韓論を非とする兄の横山とが對座して國事を談ずる。横山は死を以ても諫止する覺悟を語る。〔二幕〕明治五年四月、亞米利加華盛頓日本辨務館の一室。中辨務使森が故國で切腹した兄に默禱を捧げてゐる。移住民の龜山が訪ねて來て、さきに森の言論に憤慨して暗殺を謀つたことを懺悔し謝罪して歸る。そこへ外債募集のた

悲憤する。(第二場)同月十一日、憲法發布の朝。森文部大臣官邸の應接間。西野は參內せんとする森を要して出双庖丁で刺し、從者に仕込杖で斬り下げられる。(第三場)同官邸の二階居室。森は病床で譫言のやうに兇器を呪ひながら、祝砲の響と市民歡呼の聲の裡に瞑目する。

【解説】この作は、我が國の戲曲に一新體を拓いたものである。森有禮個人の性格を描くのを目的とせず、彼を材として、その二十三歳・二十六歳・三十歳・四十歳・四十三歳だつた各時代の文化を檢討解剖せんと企てた作者は、從來の多幕物の筋を追ふ重層式構成を捨てて場面の並列に依る映畫劇的手法を採用した。そしてスケエルの大きい野心的な試みに見事

山邊村隨專寺【俳系】志多野坡門【閲歷】諸九尼は、湖白庵有地浮風(八木氏・有井氏ともすれど、有地氏が正しいといふ)の妻である。浮風夫婦は鄉里直方に在つて、行脚して來た野坡(別項)に入門し、九州に於ける野坡門の一頭目となつた。野坡歿後大阪に出でて、その師の舊居なる高津野の無名庵を守つたのは、諸九尼が三十歳の頃であつた。寶曆十一年には、浮風は大阪荒陵の西、椎寺の後に芭蕉・野坡の二句碑を建てて追慕の志を表はし、その記錄として「朱白集」を刊行した。京の額田文下の招きにより、その九十九庵に假寢したのは、この間の事であらう。浮風が寶曆十二年五月十七日歿した後の諸九尼は、京にも居り、故鄉へも歸り、又心の赴く儘に各地を周遊したが、

六十を越えてからは鄉里の直方へ歸つて湖白庵二世を稱した。その明和八年臭羽に遊んだ時の紀行を「秋風記」(天明三年刊)と稱する。この旅行中病に罹り、大阪の大江丸(別項)の世話を受けた。剃髪したのはいつ頃か判然しないが、無論浮風歿後であらう。晩年は至極平和であつたらしく、直方に於て終つたのである。

【著作】秋風記(前出)〇諸九尼句集二册(浮風門の筑前飯塚の小林竹雨、同直方の長野文沙、同植木の香月湖柱の三人共編で、天明六年の刊行)〇諸九尼續句集一册(浮風門の筑前篠栗の壺長人其雨が、諸九尼の七回忌に前の句集に漏れた句を集めて上梓したもの)。以上三書、併せて古俳書文庫第二十編として刊行(大正十五年五月)された。外に明和四年に「湖白庵集」の編があり、浮風の追善集「その行脚」の編があるといふ。〔贄川〕

師輔(もろすけ)　歌人【姓】藤原【通稱】九條殿・九條右大臣・九條右丞相・坊城【生歿】延喜八年に生れ、天德四年(一六二〇)五月歿す。享年五十三。【家系】父は忠平、母は源能有の女。實賴の弟、伊尹・兼道・兼家等の父。【閲歷】朱雀・村上兩帝に仕へ、官位は正二位右大臣に陞つた。將門の亂に際し、藤原忠文は征夷大將軍として出征したが、將門は貞盛・秀鄉の誅するところとなつたので、忠文は少しも戰はなかつた。隨つて朝廷は忠文の功を論ずるに當り、實賴の如きは賞する必要がないと主張したが、師輔は罪の疑はしい場合は輕くし、賞の疑はしい場合は重くすべきであると主張して朝議を動かした。天德四年病んで剃髪の志があつた時、村上天皇は勅使を以て東宮輔導のため出家を思ひ止まるやう御諭しがあつた。大納言の時、正月元日に用ふる魚袋(ぎょたい)が破損してゐたので、父忠平に借用し、返しの歌は自ら貫之の家に赴いて賴んだといふ(大鏡)。

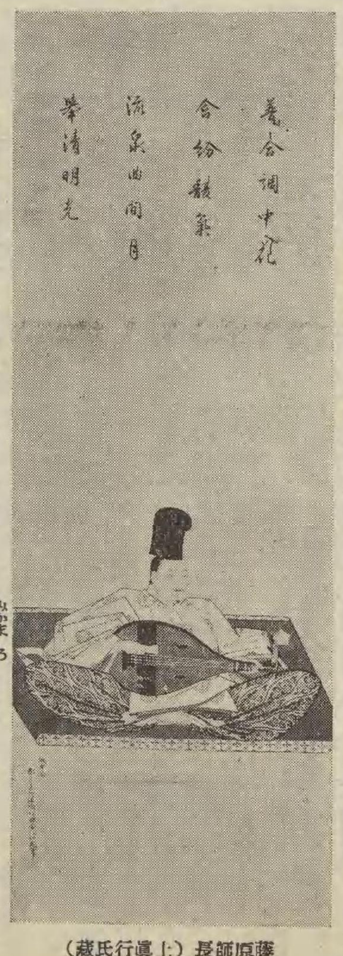
【著作】九條殿年中行事〇除目鈔〇九曆〇九條殿遺誡(別項)〇師輔集一卷(丹鶴叢書所收。短歌八十七首の外勅撰集に見えるもの十四首、合計百一首を收む。內閣文庫・圖書寮等所藏の寫本は「九條右丞相集」とあり、共に脫落した歌がある)〇勅撰集に入る歌は後撰集十三首、拾遺集以下凡そ二十一首。

【批評】「後撰集」に於ては、當時の歌人中最も多く入集してゐる。恐らくは權門のためであらうが、豐かな情緒をよんでゐる點に特色があり、兄實賴の歌が單純であつて詩味の乏しいのに比較すれば遙かに勝り、相當の歌人であつたことがわかる。生活的情緒歌人であるといふ點に「後撰集」の傾向を決定する有力なる一人であつたと考へられる。

【參考】大鏡〇大日本史百三十五〇公卿補任〇尊卑分脈　〔西下〕

師長(もろなが)　雅樂家・聲明家【姓】藤原氏【異名】妙音院・雨大臣・土佐大將【法號】理覺【生歿】保延三年生れ、建久三年(一八五二)歿す。享年五十六。【閲歷】左大將藤原賴長の子。幼名を萬壽麻呂といふ。仁平年間に右近衞權中將參議となり、累進して從二位となる。久壽年中に權中納言となる。保元の初めに父賴長が保元亂の首謀者であつたことによつて、師長も亦その罪に坐して土佐畑に流されたが、長寬二年赦されて京に還り、この年に本位に復し、正二位に進む。仁安年中に大納言となり、左近衞大將を兼ねた。土佐大將の異名はこの時に得たのである。安元の初めに內大臣となり、治承元年に太政大臣となり、從一位に敍せられた。然るに治承三年に平淸盛が廷臣の己を謀ることを怒つて、その數十人を流罪にしたが、師長もこれに坐して尾張の井戸田に流されたので、薙髪して名を理覺と改めた。翌四年に赦されて都に還り、建久三年に薨じた。その子師妙(右近衞少將)と師良(從五位下)とがあつた。

【人物・業績】幼にして穎悟、殊に音樂を好み、琵琶及び箏を最も善くし、世に妙音院と稱せられた。又佛敎の聲明に於ては天台聲明(別項)の一派を受けて、妙音院流と稱する流派の祖とされる。「聲明源流記」には、「時に妙音院大相國は九流の麟鳳三玄の鏡玉なり。詩歌・管絃幽を窮め旨を盡す。音律・聲曲微に洞にし理を明にす。內典・聲明これを衆英に聽く。或は家寬に稟け、或は玄澄に聞く。或は叡泉に習ひ、或は俊玄に訪ひ、普く習つて儻せず、取捨意に隨つて遂に一流を立つ。內典を攝し盡し佛法の聲曲周備して玆に在り。爾しより已來燈々相傳へ遍く諸方に通じ貫亂せざるなし」と記してある。當時諸種の聲樂の奥妙を極められたところの後白河法皇は、常に聲樂の極秘訣奥義を極むる者のないのを歎かせられたが、師長のみただ獨り御心に叶ひ給うたと稱せられる。師長が樂琵琶に堪能であつたことに就いての逸話傳說が、「十訓抄」「源平盛衰記」「保元物語」「今鏡」「古事談」等の諸書に多く記されてゐる。これ等によつて師長の音律に精通してゐたことを知るべきである。【著書】三五要錄〇三五要略〇仁智要錄〇仁智要略〇白馬節會鈔。　〔田邊〕


藤原師長（土眞行氏藏）

諸平(もろひら)　國學者【姓名】加納氏。本姓夏目氏。通稱兵部【號】柿園【生歿】文化三年遠江國濱名郡白須賀に生れ、安政四年(一八五七)六月二十四日和歌山に歿す。享年五十二【墓所】和歌山海善寺【閲歷】諸平は本居宣長門の夏目甕麻呂(みかまろ)の長子、幼にして吉田の中山美石(うまし)に學び、また父の敎を受けた。十八の歳和歌山の醫加納伊竹の嗣子となり、醫を學ぶの傍ら、本居大平に就いて學んだ。天保二年藩命を以て「紀伊續風土記」新撰の事に與り、尋いでまた「紀伊國名所圖會」後編の編纂に從事した。安政三年、諸平の建議採用され、藩の國學所が設けられて、諸平はその敎授となつた。門人中、世に知られた人々には飯田年平・岩崎美隆・伴林光平・伊達千尋その他がある。【著書】古今集眞字序解〇曾丹集摘草〇安米都知〇柿園詠草二册(別項)〇柿園詠草拾遺一

寬平五年	參議(二十八歳)	
天慶元年	權中納言從三位	
同　五年	大納言	
同　九年	正三位、從二位	
天曆元年	右大臣	
同　九年	正二位(四十八歳)	

冊（明治十八年刊）○類題和歌鰒玉集（一編より七編まで刊行）。

【業績】諸平は特に歌人としてすぐれ、歌集「柿園詠草」は注目すべき歌集である。

姫島の松の夕日に雁鳴きてわが子こひしきあき風ぞふく

天草や天よりをちのかぐ山も雲になびきて日は暮れにけり

の如き、その歌風を見ることが出來る。

【參考】南紀徳川史卷五十八○和歌山縣誌下卷　【森】

門（もん）　小説　【作者】夏目漱石　【發表】明治四十三年三月一日から同六月十二日まで朝日新聞に連載。【刊行】翌四十四年一月、春陽堂。漱石全集第四卷・同普及版第六卷所收。

【梗概】宗助とお米は崖下のさゝやかな家に、つましく仲よく淋しく暮らしてゐる。彼等は結婚して六年ほどになるが、半日も氣まづく暮したことはなかつた。それは彼等が世間の義理に背いて、高い犧牲を拂つて結婚を敢てしたことの思ひ出につながる當然の睦まじがりであつた。彼等は京都で、廣島で、福岡で、到る處で生活に苦しんで、また東京へ戻つて來て腰辨生活をしてゐるのである。吏員淘汰に脅かされた末、危ふく首がつながつて却つて月給が五圓增した時、お米は赤飯を焚いて喜んだ。霜が去つて、陽炎が燃えて、鶯が啼き出した。漸くのこと春になつたと云つて、彼女は晴れ晴れしい眉を張つた。併しまたぢき冬になるよと、彼は爪を剪りながら云つた。

【批評】これは、まことに地味な物わびしい作品である。これが「三四郎」「それから」（各別項）と共に三部作と呼ばれるのは、「三四郎」に於ては早春の如き青年の淡い性的生活を描き、「それから」では、熱烈な壯年の性的生活を描き、最後にこの「門」では、既にその熱烈を通り過ぎた中年者のやゝ疲れた淋しい性的生活を描いてゐるからである。主人公の名前は三四郎・代助・宗助と作ごとにちがつて居り、女主人公の名前も、生活條件も皆違つてはゐるけれども、上記の主題とするところの連絡に依つて一つの三部作と見ることが出來る。作者は初めの「三四郎」を書く時には、恐らく終りの「門」までを豫想してはゐなかつたであらうが、「それから」を書き、「門」を書く時には、前の作品への連絡を考へてゐたに相違ないと思はれる。　【野上】

文覺（もんがく）　幸若舞曲（三十六番の一）二卷　【作者】不詳　【成立】室町期　【諸本】古板本は寛永十二年板（十行本）。舞の本（上田萬年校訂）・舞の本（名著文庫）・新群書類從第八舞曲部等所收。節附本は全曲ではないが越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。【題材】平曲物。「平家物語」（卷五）、「源平盛衰記」（卷十八・十九）と同材、特に「盛衰記」に近い。また龍女成佛の佛教說話をも變形して採り入れてゐる。

【梗概】津國渡邊源氏の大將遠藤武者遠房の子瀧口盛遠は出家して文覺と名乘り、眞言を修し、大峰・葛城・熊野等に勤行を積んで權者と呼ばれてゐた。高雄の神護寺に住むこととなり、堂宇建立の大願を立てて洛の內外を勸進して廻つたが、東山の院の御所法住寺殿に到ると、折柄殿中に遊興してゐた上臈達は、憚らず勸進帳を讀み上げた文覺の非禮を叱つてこれを追ひ、青侍は勸進帳を破つたので、文覺は怒つて懷劍を拔き忽ち七八人を殺して荒れ廻つたが、遂に捕へられた。上臈達はその死刑を望んだけれど、院宣により刀を用ひ得ないので、七條西洞院に二丈五尺の穴を作り、百日を期して埋めると、叡山中堂の藥師これを救ひ、諸卿重ねて奏聞して流罪と決したが、途次天龍灘で龍宮のおと姫の侍女こひさい女、聖德に感じて成佛した。配所伊豆大島觀音堂には弟子かくもん來り仕へ、蛭ケ小島の賴朝は藤九郎盛長を伴ひ謁した。文覺は携へてゐた義朝の髑髏に對面させ、平家を調伏すべく十二ケ條の卷物を書いて修法を行つた。この驗で平家は亡びたのであつた。

【影響】素材の上で「平家」「盛衰記」から、或は本曲と併せて、操・歌舞伎等に影響を與へてゐる。なほ新歌舞伎十八番「文覺勸進帳」、杏花十種の內「文覺」（松居松翁作）等がある。　【島津】

文書（もんじょ）　「古文書」を見よ。

問狀（もんじょう）　古文書　【解說】鎌倉室町兩幕府に於て、訴訟等の場合に、被告人或は證人などを訊問する文書。これに問狀御敎書（執權或は管領などの奉じて出すもの）と問狀奉書（奉行頭人などの奉じて出すもの）とがある。　【伊木】

豐後國御家人石田四郎守國申、當國野上村地頭職事、書狀別ニ書遣之、子細具狀、早可令弁申之狀、依仰執達如件、

正嘉元年閏三月廿四日　　武藏守

陸奥守

金伽羅殿

文章博士（もんじょうはかせ）　「大學」を見よ。

文字論（もんじろん）　言語學　【名稱】〔獨〕die Schriftlehre, die Schriftkunde.　【解說】或る特殊な言語團體又は民族が用ひてゐる文字の記述をいふ。人類が用ひてゐる各種の文字全體を對象とする一般的研究は、一箇獨立の科學として文字學といふ名稱を與へ、言語の音聲方面を對象とする音聲學と對立するわけであるが、今日なほ未だかゝる文字學は成立してゐないと言つてよい。

【參考】文字の項の參考書目を見よ。　【神保】

文選（もんぜん）　詩文總集　六十卷　【編者】蕭統　【成立】南北朝梁代　【由來】編者は本書を作るに當つて、樂賢堂を建て、文選樓を築き、劉孝威・庾肩吾・徐防等の所謂高齋十學士の徒と共に討議選擇して、蕪雜なものを捨て、淸爽なものを選んで、終に三十卷とした。　【傳來】本書は隋代に著はれ、同族蕭該の「文選音義」十卷が早くも世に現はれ、次いで曹憲が諸生數百人を集めて「文選」を授け、その著「文選音義」が學者の間に重んぜられるに及んで、「文選」の學が次第に興つた。唐代に及んでは、南方江淮の間に大に行はれ、李善の註が出づるに及んで、益々その流傳を弘め、子邕が父の業を繼いで汴鄭の間に諸生に講授して、その學を四方に傳へた。文選學の名はこれから起つてゐる。殊に唐朝の士を取るには、專ら詞賦を以てしたので、一層「文選」の學が盛んとなり、これを尊重するの極、六經に比するに至つた。宋代に入つても、その國初は唐と同じく「文選」を尚び、士大夫は專らこの書を以て科擧に應ぜんとし、當時「文選爛、秀才半」の諺が行はれた。然るに慶曆以後は、歐陽脩・三蘇等が出て古文の復興を唱へ、且つ王安石が新義を以て士を試みるに及んで「文選」の學は漸く衰へた。後、元明二代を經て淸朝に至つて「文選」の研究は再び盛んになり、これに關する著述も亦少くない。

【我が國に於ける傳來】その傳來は極めて古く、聖德太子の憲法十七條の「財ある者の訟は石を水に投ずる如く、乏しき者の訴は水を石に投ずるに似たり」とあるのは、李蕭遠の運命論に取らせられたものであるのを見れば、推古朝の頃既に傳へられてゐたことが明かである。次いで奈良朝に入つては、進士の試に「文選」を試みられ、平安朝に及んでは、愈々盛んに行はれ、大學生の十六歲以下の者は先づ史學者に就いて爾雅文選の音を習得すべきことが定められ、本書の朝廷に進講せられることが最も盛んに行はれたからで、四言の詩は纔に餘喘を保つに過ぎない。【史的地位】本書は後世の選本の祖であると同時に、また六朝文學を代表するものと云ふことが出來る。古來支那の學者の文章觀は凡そ二派に分れる。一は文章の目的を、道義を明かにし、世用に供するに在りとするもの、他は辭を修め、句を飾り、文章そのものを善くするに在りとするもので、梁に至る迄の作家の詩賦文章を集めたものである。これを時代に從つて觀れば、周四、秦一、漢十七、後漢十六、蜀一、魏十六、吳一、晉四十六、宋十三、齊六、梁九、前後通じて一百三十人、他に古詩・古詞・古樂府の無名氏のものもある。最も多數を占めてゐるのは晉の四十六人で、全數の約三分の一を占め、前漢の十七人がこれに次いでゐる。この中に閻秀作

に投ずるに似たり」とあるのは、李蕭遠の運命論に取らせられたものであるのを見れば、推古朝の頃既に傳へられてゐたことが明かである。次いで奈良朝に入つては、進士の試に「文選」を試みられ、平安朝に及んでは、愈々盛んに行はれ、大學生の十六歳以下の者は先づ史學者に就いて爾雅文選の音を習得すべきことが定められ、本書の朝廷に進講せられることは常に絶えず、朝紳の中に本書を諳誦した者もあり、「本朝文粹」「續文粹」(各別項)に收められた當時の詩賦文章は、殆ど本書愛讀の賜である。淸少納言の「枕草紙」に「文は文集、文選、はかせの申文」とあるのを見れば、我が王朝時代に於ける本書の盛行の狀を想見することが出來る。降つて鎌倉・室町時代には、本書の流行は漸く衰退したけれども、なほ朝紳縉流の間に於て閲讀せられ、殊に北朝の應安四年、京都嵯峨に於て、前後四年の歳月を費して、宋の淳熙の時刊行した六臣註本に基づき、李善註本六十卷を上梓したことは注意さるべきことである。江戸時代の初期は、室町の餘風を承けて、「三體詩」「古文眞寶」(各別項)を讀み、「文選」を習ふ者は少く、獨り林羅山・鵞峰の父子が、これを修めたのみであつたが、文學の復興と共に本書の講讀も漸く盛んとなり、慶長十二年に上杉景勝の臣直江兼續が銅版活字を以て「六臣註文選」を印行した。これを直江版と云ふ。次いで寛永年中には直江版によつて活字本を重刊し、後又慶安五年・寛文二年にも六臣註本が刊行せられ、貞享四年・嘉永五年には、正文のみのものが刊行せられ、又享保十九年には、「文選」講讀にのみ用ひる文選字引が出版せられた。

【內容】上は三代の周に始まり、下は南北朝の梁に至る迄の作家の詩賦文章を集めたものである。これを時代に從つて觀れば、周四、秦一、漢十七、後漢十六、魏十六、呉一、晉四十六、宋十三、齊六、梁九、前後通じて一百三十人、他に古詩・古詞・古樂府の無名氏のものもある。最も多數を占めてゐるのは晉の四十六人で、全數の約三分の一を占め、前漢の十七人がこれに次いでゐる。この中に閨秀作者としてその選に入つたのは、前漢の班婕妤と後漢の曹昭の二人に過ぎない。次に本書の編纂の體制は文體別に從つたものであるが、その分類に就いてはなほ論議を容れる餘地がないではないけれども、姑くその諸體の名目と、各々それに屬する作品の數を擧げれば、

賦五十六、詩四百四十三、騷十七、七子二十四、詔二、册一、令一、敎二、策十三、表十九、上書七、啓三、彈事三、牋九、奏記一、書二十一、移二、檄四、難一、對問一、設論三、辭二、序九、頌五、贊二、符命三、史論九、史述贊四、論十四、連珠五十、箴一、銘五、誄八、哀三、碑文五、墓誌一、行狀一、弔文二、祭文三。

即ち本書の中に分類せられてゐる文體は、凡て三十九種、その中詩は四百四十三首を採り、賦騷から祭文に至る諸體の作品は三百十七篇を收めてゐるが、賦が最も多數を占めてゐるのは、前漢以來魏晉に迄るまでの文人學士の最も好んで作つた所であるからで、本書の編者も亦これを重んじて卷首に列冠したのである。詩は四百四十三首の中、四言三十八、五言三百九十六、七言八、雜言七、五言の詩が最も多く、その大部分を占めてゐるのは、先秦以前の詩形は四言を本體として居つたのが、前漢以來語音の變化と楚國文學の影響とによつて新體五言の詩形が起り、漢魏六朝を通じて最も盛んに行はれたからで、四言の詩は纔に餘喘を保つに過ぎない。【史的地位】本書は後世の選本の祖であると同時に、また六朝文學を代表するものと云ふことが出來る。古來支那の學者の文章觀は凡そ二派に分れる。一は文章の目的を、道義を明かにし、世用に供するに在りとするもの、他は辭を修め、句を飾り、文章そのものを善くするに在りとするものがこれである。前者は實用的の文章を、後者は美的の文章を以てその本領とする。而して蕭統の文章觀は後者に在り、從つて本書の撰次も亦この趣旨に基づいてなされたもので、彼の文章觀と編次の方針とは本書の自序に詳しく述べられてゐるが、要するに沈思翰藻の四字に歸する。沈思とは深沈の意匠を凝らすを云ひ、翰藻とは文辭の華麗なるを云ふ。これは本書の編者の文章觀であるが、同時にまた六朝時代の文章に對する信條を代表したものである。

【註釋書】李善註六十卷唐李善(古來文選の註の中、最も精該なものと稱せられてゐる。高宗の顯慶三年成る)○五臣註(李善の後に、衢州常山縣尉の呂延濟、都水使者劉承祖の子良、處士の張銑・呂向・李周翰の五人は各々文選を註し、工部侍郎の呂延祚が五人の註を集めて一書とし、開元六年にこれを上つた。五臣註と云ふ)○六臣註(北宋の頃から前の兩註を合刊して、これを六臣註文選と名づけた)○文選理學權輿八卷淸汪師韓○文選理學權輿補一卷淸孫志祖○文選李注補正四卷同上○文選攷異四卷同上○文選擧正六卷淸陳景雲○文選音義八卷淸余蕭客○文選集釋二十四卷淸朱珔○文選旁證四十六卷梁章鉅

【編者小傳】通常、昭明太子と稱する。南朝梁の武帝の長子、幼名を維摩、字を德施と云ひ、昭明はその諡である。齊の和帝の中興元年(皇紀一一六一)に生れ、翌年武帝が齊に代つて國を建て、帝位に即くに及んで太子に立てられ、同じく中大通三年(皇紀一一九一)に薨じた。時に年僅かに三十一であつた。編著に「文集」二十卷、「文選」三十卷、「古今詩苑英華」二十卷、「正序」十卷等がある。「正序」は古今の典誥文言の優れたものを選び、「古今詩苑英華」は五言詩の佳なるものを選んだものであるが、今は「文選」一部を除くの外は、凡て亡佚して傳はらぬ。彼は天性聰睿、三歳の時已に「孝經」「論語」を受け、五歳に及んでは遍く五經を諷誦したといふ。惜むらくは中途に歿して、その天成の美材を大成せしめることが出來なかつたことである。その平常は親に事へては孝順、下に對しては仁慈、好んで才學の士を引見して、暇があれば文章著作に從事した。その藏書は三萬に及び、一世の名才は竝び集まり、文學の盛んであつたことは、晉宋以來その匹がないと稱せられてゐる。〔宇野・本多〕

問題藝術 もんだいげいじゅつ

藝術論〔英〕Problem-Art.【解說】社會或は人生上の諸現象に對する作家の批判反省が動因となり、問題の摘出描寫が試みられるものを一般に問題藝術といふ。描寫の形式は多くは劇又は小說等である。イプセンの「人形の家」の如きその一例である。作家の批判或は主張が主動因である點で傾向的(傾向藝術參照)であるが、積極的に作家自身の主張や問題暴露が試みられるならば、藝術的に鑑賞が困難になるため、作家は普通暗示的に問題提示の程度に止める。そのために劇の主要人物以外の人物の行動や言葉を借りて表白するか、或は道化役をして云はしめるといふやうな手段がある。これはシェ

クスピアなどの古い戯曲にも覗はれてゐる。併し近代文化の進展に伴つて、階級意識等が尖鋭になれば、積極的に問題摘出の意圖が强烈になり、そこに社會上諸般の事實暴露のための暴露文學が生ずる。社會人生上の事實的問題暴露を目的とする限り、所謂徹底寫實の形式をとり、主觀の空想、架空な叙述を排して記錄的・報告的となる。かくして報告文學・記錄文學等の名稱も生ずるに至る。（傾向藝術參照）〔村田〕

文德實錄（もんとくじつろく）　歷史書　十卷　【編者】藤原基經・菅原是善・都良香・島田良臣等。【名稱】正しくは「日本文德天皇實錄」といふ。【成立・由來】淸和天皇貞觀十三年藤原基經以下をして撰修を始めしめられたが、事業の進まない中に御讓位となつた。次いで陽成天皇は元慶二年改めて基經に勅して、菅原是善等と共に撰修の事に從はしめ、その三年十一月成つてこれを奉つた。【諸本】寫本としては白雲文庫本、細井貞雄・丹鶴書院・朝田弓槻・尾張德川家等の藏本が古くより知られ、流布本の校訂に使用せられた。刊本には、寬文九年・寶永六年・寬政八年等の本があり、明治以後では、伴信友校訂本・國史大系本・朝日新聞社本等がある。【內容】嘉祥三年三月文德天皇の踐祚に始まり、天安二年九月その崩御後に至る九年間の國史である。編纂の體は大體に前代の國史と異なる所がない。平安朝の盛りと言はれる仁明天皇の御代に次ぐ時代の國史として、錄せられた事件は特に世を震駭せしめる程のものもなく、「專ら天下昇平の化を思ひ、巡幸遊覽の事を好まず」といはれた天皇にふさはしき國史を成してゐる。【價値】六國史の一であり、平安朝初期の史料として最も重要なるものである。【參考】文德實錄私記（寫）　矢野玄道　〔坂本〕

文武天皇（もんむてんわう）　詩人　【御幼名】珂瑠　【御生歿】天武帝の十一年に御生誕、慶雲四年（一三六七）六月十五日崩御。寶算二十五。【御陵】檜隈ノ安古ノ山陵。今の高市郡阪合村大字栗原

持統一一 文武元	一三五七	一五	二月十六日皇太子に立つ。八月一日藤原宮に卽位。
同　二	一三五八	一六	十月藥師寺成る。
同　四	一三六〇	一八	忍壁親王、藤原不比等に律令を撰はしむ。
大寶　元	一三六一	一九	八月大寶律令成る
同　二	一三六二	二〇	二月、新律を天下に頒布し、三月度量を公布す。十二月二十二日太上天皇（持統帝）崩ず。同月木曾の山道を開く。
慶雲　二	一三六五	二三	五月忍壁親王薨ず
同　四	一三六七	二五	二月群臣に遷都を議せしむ。六月十五日崩御。遺詔して哀をあぐる事三日、凶服は一月せよ。

【閲歷】天武天皇の御孫に坐しまし、草壁皇子を御父、元明天皇を御母として御降誕。元正天皇は御兄、吉備內親王は妹にいらせられ、聖武天皇の御父。從來は實力を重んじて長じ給うた君を立てるを例とし、多くは四十歲以後の御卽位であつたが、弘文帝の二十五歲での御卽位は異數と申すべきであるのに、今十五歲にて登極し給ふことは、皇位繼承の順序に重きを置かれたものと見える。閲歷等は年譜に揭げた外にも極めて多いが、大寶元年正月元日大極殿に御して朝賀を受けさせ給うた際は、儀容堂々として禮文も備はつた。古來編年史家はこの朝賀を重大視してゐる。「神皇正統記」はこれを年號の初めと言つてゐる。【作品】詩は「懷風藻」に三首、歌は「萬葉集」卷一に、御製と傳へる「み吉野の山の下風（あらし）の寒けくにはたや今夜（こよひ）も我がひとり寢む」が收められてゐる。【業績】大和の藥師寺は天武帝の八年皇后（後の持統帝）の御惱平癒のために建立せられたものであるが、この帝の二年十月工を竣（を）つた。この外、大宮大寺に九重の塔を建て、又は筈法を制し、木曾に山道を開き給うた（美濃より木曾に至る山道）。併し最も顯著なものは大寶の律令である。文武・百官、凡百の制度何れも完備した。敎育制度の如きもこの時から整備したのである。現今に傳はるものは、この後十餘年、元正帝の養老年中に修正せられた養老刪修の律令である。又帝王としての詩は文武天皇が嚆矢におはします。〔山岸〕

や

八重霞賤機帶（やへがすみしづはたおび）　「賤機帶」を見よ。

八重霞浪花濱荻（やへがすみなにはのはまをぎ）　淨瑠璃　七段　世話物　【作者】豐丈助・安田蛙桂・豐正助・淺田一鳥　【興行】寬延二年三月二十六日初日、豐竹座切狂言。同年七月十五日前狂言のみ替りて返り初日。【諸本】七行八十五丁本・十行五十丁本　【題材】當年三月十八日、道頓堀新屋敷油屋の抱へ（ト）本名八重が兄殺しの科によつて死罪となつた件と、翌十九日朝、內町大工の弟子六三郎が新屋敷の女郎おそのと助右衞門橋東詰の濱で情死した件と、同日、城代阿部伊勢守御手廻り宅平といふ者が中山寺無緣經修行中代參の節、神崎邊で馬士大勢と喧嘩の上手傷を負はせた事件（以上、諸書に異同あり。「攝陽年鑑」に據る）。この三件を一夜漬に取組みて三月二十日に看板を出したので、古今稀なる早業との評判を得たものである（淨瑠璃譜）。【梗概】（借座敷（かし）の段）以前の遊女かしく今は侍林右衞門に落籍され、母親や妹おまつと共に夫の留守を守つてゐる。かしくの昔の馴染客六三郎が同國泉州の百姓太次兵衞の娘おそのと駈落して來るので、かしくは女だけを戸棚に匿まふ事になる。かしくの兄市兵衞の債權者七郎助は、貸金を言ひ立て、且つおその隱匿の弱みにつけ込んで、かしくを意に從へようと迫る。已むなく承諾したかしくは、酒を呷つて暗中に男を刺したが、それは兄であつた。おその六三郎は死なうとするが止められる。（北野若林屋の段）おその六三郎は、惡肝煎の梶の長兵衞に匿まはれ、男は大工の飯持ちになり、女も近く奉公に出る事になつてゐる。北野不動の茶屋でおその親百姓太次兵衞が二人に逢つて情ある異見をなし、おそのの姙娠を聞いて中山觀音で請けて來てゐた鉦の緒を安產の呪の腹帶に與へる。梶の長兵衞が七郎助と連れ立つて來て、おそのに七郎助の妾になれと强制して六三郎をさいなみ、その上六三との緣を切る證據にと墮胎藥をつきつけるので、男の身をかばつておそのはそれを飮む。七郎助は聟舅のしるしにとて小判を太次兵衞に與へるが、親爺はそれを投げ返す。以前おそのと婚約のあつた舟越重右衞門が、一間の障子を明けて小判をあらためながら現はれ、極印によつて盜んだ金である事を指摘し、七郎助を捕縛、おそのを離緣して自

由の身とする。梶の長兵衞が六三郎に食費をゆすると、道頓堀の色茶屋福島屋淸兵衞の女房お梶が出て埒を明け、おそのを連れて歸る。重右衞門は長兵衞を懲らして代官所へ曳き行く。（詮議の段）代官堀彌藤治は、かしくの母と妹を召出し、かしくの死罪の已むなきを言ひ渡す。二女は各々身代りに立たんとて愁訴するが許されない。かしくはおその六三郎の後事を母に託し、代官の情で妹おまつに髮を上げさせる。七郎助・長兵衞も引出され、一は打首、一は所拂ひを言ひ渡される。「道行兩手綱」かしくと七郎助の引廻し。（新屋敷の段）福島屋に抱へられて養生してゐるおそのを、かしくの母と妹が訪れ、形見の布子を屆けて行く。おそのに座敷がかゝるので、亭主淸兵衞は晴れの衣裳を着せ、盃をして送り出す。おその餘命のない事を知り、命ある内に男と添はせ度く、それとなく駈落を暗示して出してやつたのである。門口に忍んで來てゐた六三郎と共に、おそのは淸兵衞夫婦の情に泣く。「道行妹脊鳥」千日寺をさして二人の道行。（墓所の段）かしくの首の曝されてゐる千日寺に辿りついて、おそのは形見の布子に着替へ、男は細引、女は中山寺の鈕の緒でくびれようとするが、番人に見つけられて果さず、闇に紛れて逃れる。（船渡喧嘩の段）所拂ひになつた惡肝煎の梶の長兵衞は馬士となつてゐるが、仲間の山姥權九郎等を語らつて舟越重右衞門に喧嘩を賣る。重右衞門は病める主家の息女のために、中山寺に命乞ひの代參をして下向の途中なので堪忍するが、遂に馬士達の亂暴に堪へ兼ねて長兵衞初め大勢を斬る。助右衞門橋の東濱で堀彌藤治が相對死をしたおその六三郎の死骸を檢視する所へ、重右衞門が自首して出るが、堀はその武勇を稱して伴ひ歸る。

【脚色】各別個に生じた三事件の一夜漬としては、極めてよく纏まつた好ましい世話物である。情義深い舟越重右衞門を十分働かせた「北野の段」と、近松の筆觸を忍ばせる情趣的な「新屋敷の段」とが就中佳作である。

【傳統】かしくの兄殺しを脚色したものには、これより前に、「戀淵昤絞染」（寛延元年十二月十五日、中芝居、坂東豐三郎座。並木正三・笛十作）があり、更に翌二年正月、北の新地芝居に引越して大當りを取つてゐる（大歌舞伎外題年鑑・並木正三一代咄・京阪歌舞伎年代記等）。本曲「新屋敷の段」に「さつきに門をうたふていた國太夫ぶしを聞てか。アイありや角の芝居の道行じやござんせぬか。ヲイノあだなとゝのちらし書、それも誰ゆゑ秋鹿のと語つたは佐野八がとゝの出端、二のかはりが大きに當つてそれからとゝ／＼と町中に評判したが、けさはほんのとゝが墓へかゝつた」とあるのは前者を指してゐる。また京都でも「けいせい誓文墳」（寛延二年正月十三日、布袋屋座、座本嵐三右衞門。中村富十郎のとゝが、藤川平九郎の兄山伏鋼脈院を殺す脚色）、「けいせい歌仙櫻」（同年正月十五日、早雲座。座本中村松兵衞）が上演されてをり、何れもかしくの刑死前の作である。これ等の諸作と本曲との脚色上の關係は不明であるが、本曲は寧ろおその六三郎の件を中心とする構想であるから、重大な影響は恐らく受けてゐまいと思はれる。本曲は操でも屢々繰返されたが上方歌舞伎にも亦直ちに移されて行はれた。江戸歌舞伎では傳統上、絢交・書替狂言が多く（短夜仇散書參照）、かしくの狂言とお園六三の狂言とは、離合しつつ展開し、最近作「心中浪華春雨」（岡本綺堂作、大正四年一月、本郷座。左團次の赤格子九郎右衞門、又五郎の六三郎、松蔦のおその）、「散書紅のかしく」（岡鬼太郎作、大正十一年六月、新富座。歌右衞門のかしく、吉右衞門の市兵衞、時藏の六三郎、福助のおその）、「今樣かしく」（瀨戸英一作、昭和四年五月、浪花座。河合のかしくのお勝、我童の六三郎）等に及んでゐる。

【參考】情死錄闘根只誠○甲子夜話續編卷九十九○晴翁漫筆卷五（並木丈助の條）〔近藤〕

八乙女の舞（やをとめのまひ）「巫女舞」を見よ。

八百屋お七（やほやおしち）　淨瑠璃・歌舞伎

【解說】この事件の内容は、年少な八百屋の娘の放火犯にすぎぬが、純情の强さと、少女の火刑に纏はる凄慘美とが綜合せられて、文藝作品に弘く取入れられた。はやく浮世草子の「好色五人女」（別項）の中に描かれ、下つて黑本の「八百屋お七戀廢巴」（安永元年刊）、黃表紙の「法の封じ文」（安永十年刊）等も出た。後者はお七百回忌の出版で、お七吉三・釜屋武兵衞等の前生は天竺に因緣があつたとしてゐる。又歌謠の方面では「八百屋お七追善」、くどき節（寶永年中か）、國太夫節の「宮古路祇園囃子」（享保年中か）があり、一中節・道具屋節等にも見え、覗からくりうた（享和二年十一月）は、その悉くが八百屋お七の歌となつたと傳へる。寬政以後には、これが江戸の六地藏の由來と結び、種々作品が現はれた。【實說】天和二年十二月二十八日、江戸本郷駒込大圓寺から出火して、翌日に亙つて靈岸島まで延燒した大火（歷代炎上鑑など）があつたが、本鄕追分で類燒した八百屋市左衞門の一家は、駒込の正泉院（仙とも書く）に避難する間に、その獨り娘お七が、寺にゐた美少年と通じ、後、普請が落成して別れてから、戀慕の餘り、放火を企てて罪に問はれ、翌天和三年三月二十九日、十六歲を一期として火刑に處せられた。墓は小石川指ケ谷圓乘寺に建てられた。美少年は、後、自害の決心を飜し、出家してお七の菩提を弔ひ、元文二年往生をとげたともいふ。（「好色五人女」の題材參照）

【作品】〔脚本及び歌舞伎淨瑠璃〕お七歌さいもん（寶永三年春、大阪、嵐三右衞門座。「女大臣職人鑑」の切狂言。作者東三八。歌舞伎の初作。但し元祿十一年に、嵐喜世三郎が十七回忌追善として演じたとの說もあるが、明確を缺く）○中將姬京雛（別項）○七種福壽曾我（享保三年春、江戸市村座。嵐喜世三郎追善狂言であつたが、爾來三條勘太郎はお七役中興の祖といはれた）○松竹梅根元曾我（享保十七年春、同座。八百屋お七の五十年忌追善興行）○寶曾我女護島臺（元文三年春、江戸中村座。女護島へお七を入れた作。混雜しながら筋の通つた作として、作者津打治兵衞の名作といはれる）○七草若曾我（延享元年春、江戸市村座。二番目にお七（瀨川菊次郎）・吉三郎（菊五郎）で、「天人お七」の初め。宮古路數馬太夫「八百屋お七旭笄」）○通神衞曾我（寬延三年春、同座。一中節「誰袖相の山」。太夫として佐野川千藏・芳澤藏之助）○伊豆小袖商賣鑑（寶曆元年春、江戸中村座。二番目、四代江戸太夫。河東「戀櫻返魂香」）○江戸紫根元曾我（作者、金井三笑。寶曆十一年春、江戸市村座。長唄「髮梳閨卯花」）○八百屋お七戀江戸染（作者、壕越菜陽。明和三年七月、江戸中村座。淨瑠璃「文月笹の一夜」。「戀江戸染」名題の最初）○潤色八百屋お七（寬政五年五月、江戸河原崎座。爾後、お七が岩井家の狂言となる）○其昔戀江戸染（作者、櫻田治助。文化六年春、江戸森田座。お七百二十七年忌追善興行。お七（五代半四郎）・淺黃麻の葉鹿の子の着附の型を殘す）○敵討櫓太鼓（作者、鶴屋南北。文政四年五月、江戸河原崎座。「未刻太鼓」と綯交ぜ。當り作）○松竹梅雪曙（安政三年十一月、江戸市村座。お七（市川小團次）が

白雲文庫本・細井貞雄・丹鶴書院・朝田弓槻・尾張德川家等の藏本が古くより知られ、流布本の校訂に使用せられた。刊本には、寬文九年・寶永六年・寬政八年等の本があり、明治以後では、伴信友校訂本・國史大系本・朝日新聞社本等がある。【內容】嘉祥三年三月文德天皇の踐祚に始まり、天安二年九月その崩御後に至る九年間の國史である。編纂の體は大體に前代の國史と異なる所がない。平安朝の盛りと言はれる仁明天皇の御代に次ぐ時代の國史として、錄せられた事件は特に世を震駭せしめる程のものもなく、「專ら天下昇平の化を思ひ、巡幸遊覽の事を好まず」といはれた天皇にふさはしき國史を成してゐる。【價値】六國史の一であり、平安朝初期の史料として最も重

栗原【閱歷】天武天皇の御孫に坐しまし、草壁皇子を御父、元明天皇を御母として御降誕。元正天皇は御兄、吉備內親王は妹にいらせられ、聖武天皇の御父。從來は實力を重んじて長じ給うた君を立てるを例とし、多くは四十歲以後の御卽位であつたが、弘文帝の二十五歲での御卽位は異數と申すべきであるのに、今十五歲にて登極し給ふことは、皇位繼承の順序に重きを置かれたものと見える。閱歷等は年譜に揭げた外にも極めて多いが、大寶元年正月元日大極殿に御して朝賀を受けさせ給うた際は、儀容堂々として禮文も備はつた。古來編年史家はこの朝賀を重大視してゐる。

て宴をあくる事三日。凶服は一月せよと。

八重霞賤機帶（やへがすみしづはたおび）「賤機帶」を見よ。

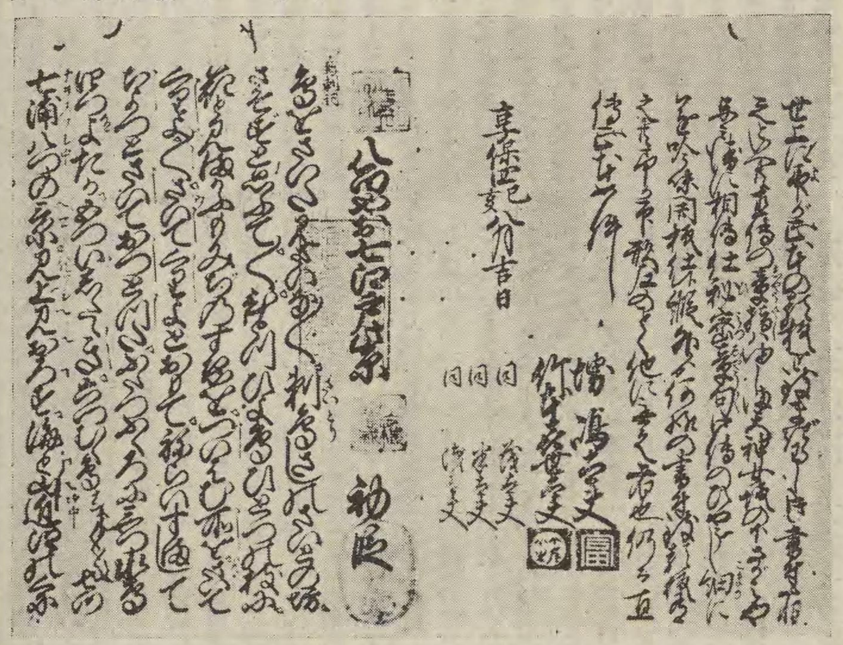
八重霞浪花濱荻（やへがすみなにはのはまをぎ）　淨瑠璃　七段　世話物【作者】豐丈助・安田蛙桂・豐正助・淺田一鳥【興行】寬延二年三月二十六日初日、豐竹座切狂言。同年七月十五日前狂言のみ替りて返り初日。【諸本】七行八十五丁本・十行五十丁本【題材】當年三月十八日、道頓堀新屋敷油屋の抱へとゝ本名八重が兄殺しの科によつて死罪となつた件と、翌十九日朝、內町大工の弟子六三郎が新屋敷の女郎おそのと助右衞門橋東詰の濱で情死した件と、同日、城代阿部伊勢守御手廻り宅平といふ者

持ちになり、女も近く奉公に出る事になつてゐる。北野不動の茶屋でおそのの親百姓太次兵衞が二人に逢つて情ある異見をなし、おそのの姙娠を聞いて中山觀音で請けて來てゐた鈕の緒を安產の呪の腹帶に與へる。梶の長兵衞が七郎助と連れ立つて來て、おそのに七郎助の妾になれと强制して六三郎をさいなみ、その上六三との緣を切る證據にと墮胎藥をつきつけるので、男の身をかばつておそのはそれを飮む。七郎助は聟舅のしるしにとて小判を太次兵衞に與へるが、親爺はそれを投げ返す。以前おそのと婚約のあつた舟越重右衞門が、一間の障子を明けて小判をあらためながら現はれ、極印によつて盜んだ金である事を指摘し、七郎助を捕縛、おそのを離緣して自

人形振りで、樽太鼓を打つ）〇三人吉三廓初買（別項）（書替へ狂言としての代表作）〇吉様参由縁音信（作者、默阿彌。明治二年七月、中村座。書替の名作の一。乾坤坊良齋の講談によつて小堀騒動に書き込む）〇お七吉三（別項）（舞踊劇）。

【淨瑠璃】八百屋お七　三段、作者、紀海音）。八・九行本等がある。日本名著全集淨瑠璃名作集上所收。正德年中豐竹座興行か。「外題年鑑」元祿十七年二月十五日の條豐竹座興行外題に「八百屋お七歌祭文」とあるが、正本も傳はらぬらしい。下卷の道行の出は、替り歌祭文のかゝりで、その影響をうけてゐる。海音の作意には、「五人女」と相當交渉がある事を想はせる。

【梗概】（上卷）吉祥寺。八百屋娘お七は、以前類燒して寺に避難中、契つた小姓吉三郎を忘れ兼ね、仲居お杉の數へるまゝに吉三郎と起請を交したが、吉三郎の起請は十二歳の辨長に拾はれ更に萬屋武兵衞の手に渡つた。吉三郎の父源次兵衞は、若殿の罪を着る覺悟から、倅を豫め勸當したのであるが、今日も家來十內が、源次兵衞の遺言として吉三郎に出家を勸めに來た。吉三郎は家名復興を口實に、切に還俗を主張する時、武兵衞が現はれて起請を出し、吉三郎の本心を指摘して破戒の罪を暴くが、師の坊はこれを庇ひ、玉子酒まで飲まされようとし、果は人々の行爲を怒つた武兵衞は、



八百屋お七江戸紫（大阪圖書館）

十內のために打ちのめされる。（中卷）八百屋久兵衞宅餅搗。お七を慰めて使に出たお杉は、雪の軒下に蓑笠に隱れる吉三郎を發見してお七の居間を敎へた。久兵衞は武兵衞から親切づくに貸された二百兩の普請代が、娘に目的があつたのを知つて不愉快に思つてゐたが、祝によばれた町年寄の彌左衞門が仲に立たうとして、武兵衞を連れて來た。歎くお七の耳に、母親は世の義理のために、一應武兵衞を帰せよと言ひ聽かす。これを緣下で盜み聞いた吉三郎は諦めて立ち去つた。お杉から聞いたお七は、吉三郎の殘した蓑笠を見て狂亂し、二度の火難を顧つて炬燵の火を二階に上げた。（下卷）

獄屋、刑場。今日が處刑の日と聞いて歎き狂ふ兩親を抑へて、彌左衞門は家へ戻す。（八百屋お七江戸櫻）刻限が來て、お七は各見付で嘆された上に、日本橋から鈴ヶ森につく。白裝束に覺悟を決めた吉三郎が飛んで來て、女に代つて處刑を願つたが、聽かれず、お七に先立つて割腹して果てる。時にお七は十六、吉三郎は十八であつた。

〇八百屋お七戀緋櫻（作者、紀海音。傳本が數種ある。（一）三段。享保二年十月江戸伊賀屋版。大坂太夫竹本喜世太夫正本。「八百屋お七」と同文。卽ち前作の外題替と思はれる。三味線鶴澤牛七、人形竹田二郎五郎。（二）五段。右に繼がれたもの。伊賀屋版。繪入本。四段は「八百やお七六地藏めぐり」、お七の五七日に久兵衞お七伯母、お杉の三人が菩提のために六地藏を廻り、龜井戸で口寄せによつてお七に會ふ悲しみ。五段は「八百やお七うつゝのおほろかご」。吉三郎出家してそうけんと改め、庵室にゐる時、夢の中にお七が羅刹で尋ねて來て現世の物語があり、武兵衞が賊となつて忍ぶ中、戶倉十內に殺される。（三）三段。享保十七年正月、豐竹座興行の正本。「八百屋お七」の外題替。七行本・九行本などあるといふ）

〇八百屋お七江戸紫　三段（作者、紀海音・辰松幸助。江戸辰松八郎兵衞座興行。堺島太夫・竹本喜世太夫正本。享保四年八月江戸さがみや版。「八百屋お七」の前編と見られる筋で、吉三郎はお家騒動に捲込まれた父親の罪を遁れるため、江戸に落さされる事となる。本作を海音が早く書いたが、上方で上演されず、江戸に持越されたらうとの說がある）〇潤色江戸紫　五段（作者、爲永太郎兵衞等作。延享元年四月五日初日、豐竹座上演。延享中、江戸外記でも上演。「戀緋櫻」の增補。當り作。歌舞伎に影響した）

〇伊達娘戀緋鹿子　八段（作者、菅專助・若竹笛躬。安永二年四月六日初日、北堀江座上演。右作の書替。お七が半鐘を打つ事になつてゐる）〇八百屋お七物語　二段道行（作者未詳。正德年中か。都太夫一中繪入正本。歌舞伎芝居で語られたものではないらしい。お七は菩提寺妙圓寺の梅垣吉三郎を忘れ兼ね、小袖に火を包むところをお七に橫戀慕の妙圓寺の鼈山坊に發見され、情を迫られた爲めに一時は逃れたが、最期を覺悟して一人駈落ちする筋）。

【參考】天和笑委集〇江戸著聞集馬文耕〇曲亭遺稿瀧澤馬琴〇八百屋於七墳墓記〇歌舞伎細見飯塚友一郎〇歌舞伎圖說守隨・秋葉〇淨瑠璃名作集上解說黑木勘藏〇八百屋お七江戸紫（國文學研究創刊號）石割松太郎　【守隨】

矢數俳諧（やかずはいかい）　俳諧【名義】弓術の大矢數に做つて、俳諧に於て一人が一日の中に出來る限り多くの句數を連ねて、その迅速さを誇る事をいふのである。精しくは大矢數俳諧といふべきなのであるが、簡に從つて矢數俳諧といふ。【由來】弓術に於ける大矢數は、慶長十一年淺岡平兵衞といふ士に始まり、以來競うて行はれたのである。寬文二年尾張の士星野勘左衞門が京の三十三間堂に於て徹矢六千六百本を射た。後寬文八年葛西園右衞門が徹矢七千餘本を出した。勘左がこれを聞いて憤り、同九年五月朔日の日沒より翌日の亭午に至り、徹矢八千を射て、なほ餘力を示した。西鶴の「大句數」（別項）の序に「天下の大矢數は、星野勘左衞門其名萬天にかくれなし」とあるのは、この人の事である。然るに貞享三年四月六日、紀伊の士和佐大八郎なる者、總矢一萬三千の內徹矢八千三十三に達し、大矢數の最後の名譽を擔うたのである。矢數俳諧の最初の興行は、西鶴が延寶五年五月大阪東成郡生玉本覺寺に於て、一日の中、夕陽傾かざる前に一千六百句を吐いた事に始まつてゐる。勿論これは星野勘左衞門等の大矢數の例に做つて、天下の耳目を驚かせようとの下心でやつたものである。これが「大句數」と題して出版されてゐる。その後多武峯の紀子が一

千八百句を作つて、西鶴の句數を凌駕したのであるが、西鶴は三千風の「仙臺大矢數」の跋に、その虛僞の作なる事を痛論してゐる。大淀三千風（別項）が、延寶七年三月仙臺に於て一日二千八百句を吐き、これを「仙臺大矢數」として公にしたのであるが、西鶴はこれに跋を寄せて稱揚してゐる。西鶴はこれ等に刺戟されて發憤し、延寶八年五月大阪生玉本覺寺

〇仙臺大矢數跋西鶴〇野史飯田忠彥　【荻原】

宅嗣　漢學者【姓】石上ノ朝臣【號】芸亭居士【法號】梵行【生歿】天平元年に生れ、天應元年（一四四一）六月に薨ず。享年五十三【家系】石上朝臣は、饒速日命の後である。饒速日命の子、宇麻志麻遲命十七世の孫物部連公麻侶に物部朝臣の姓を賜ひ、改めて又石上朝臣の姓を賜はつた（舊事記）。【閱歷】勝寶をなし、寶字年中以後、三船（別項）と共に文人の首と仰がれた。著はした詩賦は數十首あつて辭々金玉の聲をなし、世に傳誦せられたと言ふ。但し今に存するものは「經國集」に載せた詩二首のみである。又書に巧妙で、就中草隷に最も長じた。後にその舊宅を捨てて阿閦寺となし、寺內の一隅に一院を造營して芸亭院（別項）と稱し、儒書を置いて好學の徒の閱覽

持」とある。これは天平十年の作と見るべきもの故、家持は天平十年の頃、始めて官吏としての生活を踏み出したと見てよからう。この頃彼は結婚してゐた。「萬葉」卷三挽歌部には、天平十一年亡妾を哀傷する長歌短歌があつて、その一つに「逝にし吾妹か。若き子をおきて」とある故、二人の仲に子供がゐたことが分る。よつて彼が相當の青年になつてゐた事

千八百句を作って、西鶴の句數を凌駕したのであるが、西鶴は三千風の「仙臺大矢數」の跋に、その虚僞の作なる事を痛論してゐる。大淀三千風(別項)が、延寶七年三月仙臺に於て一日二千八百句を吐き、これを「仙臺大矢數」として公にしたのであるが、西鶴はこれに跋を寄せて稱揚してゐる。西鶴はこれ等に刺戟されて發憤し、延寶八年五月大阪生玉本覺寺の堂前に大幕打たせ、第二回の矢數俳諧一日四千句の獨吟を通したのであるが、これが「大矢數」(別項)と題して出版されてゐる。なほ西鶴は貞享元年六月住吉の社前に於て第三回を興行し、一晝夜二萬三千五百句を吟じて天下を驚倒せしめ、遂に矢數俳諧の名譽を自己に收め、自ら二萬翁と號するに至つたのであるが、この時のものは遂に出版されなかつた。西鶴以後稀にこの種の試みがないではなかつたが、漸次衰滅に歸したのである。【式法】弓術の大矢數に嚴重な作法があつたやうに、矢數俳諧もこれに擬して物々しい式法によつたのである。西鶴の第二回の大矢數の場合の外は詳かでないが、西鶴の第二回の場合には多數の役人を設け、指合見五人、脇座十二人、執筆八人、白幣(初千句)・紅幣(二千句)・銀幣(三千句)・金幣(四千句)、係り各々一人、懐紙番繰二人、日附木二人、線香見二人、割帳附二人、懐紙臺二人、懐紙掛役二人、御影支配二人、代參三人、醫者二人、後座五人、すべて五十五人の大一座であつた。なほ西鶴の口を借りて云へば、數千人の聽衆が庫裏・方丈・客殿・廊下を轟かし、三日かけて以前より、花筵・毛氈、高雄をこゝに移すといふ雜沓を極めたといふ。

【參考】大句數序西鶴○大矢數序元々子跋西鶴○仙臺大矢數跋西鶴○野史翁田忠蕃　〔穎原〕

宅嗣 やかつぐ　漢學者【姓】石上朝臣【號】芸亭居士【法號】梵行【生歿】天平元年に生れ、天應元年(一四四一)六月に薨ず。享年五十三。【家系】石上朝臣は、饒速日命の後である。饒速日命の子、宇麻志麻遲命十七世の孫物部連公麻侶に物部朝臣の姓を賜ひ、改めて又石上朝臣の姓を賜はつた(舊事記)。【閲歴】勝寶三年(二十三歲)正六位上より從五位下となり、治部少輔に任ぜらる。同五年正月四日、家に宴して和歌がある(萬葉集十九)。寶字元年(二十九歲)五月從五位上、六月相模守となる。同三年五月、三河守。同五年正月、上總守となり、十月遣唐副使となる。同六年三月一日遣唐副使を罷められた。蓋し藤原良繼・佐伯今毛人・大伴家持等と謀り、太師藤原仲麿(惠美押勝)を除かんと企てた爲めであらう。同七年(三十五歲)九月一日文部大輔となる。當時侍從をも兼ねてゐた。翌年正月太宰少貳となり、正五位上を授けられ常陸守となる。神護元年(三十七歲)正月從四位下、二月中衞中將となる。常陸守もとの如し。翌年參議となり、正四位下を授けらる。神護景雲二年(四十歲)正月從三位、十月新羅の交關物を買ふために太宰の綿四千屯を賜はつた。寶龜元年(四十二歲)九月太宰の帥となる。二年三月式部卿、十一月中納言となる。同六年十二月請うて姓を物部朝臣と改めた。同八年十月中務卿を兼ね皇太子の傅となる。同十年十一月再び石上朝臣に復した。同十一年二月大納言となる。翌天應元年四月正三位、六月薨ず。正二位を賜ふ。【人物・業績】性格は快明、辭容は閑雅を以て知られた。學を好んで博く經史に通じ、文を能くした。山水等にあへば時に筆を把つて篇をなし、寶字年中以後、三船(別項)と共に文人の首と仰がれた。著はした詩賦は數十首あつて辭々金玉の聲をなし、世に傳誦せられたと言ふ。但し今に存するものは「經國集」に載せた詩二首のみである。又書に巧妙で、就中草隷に最も長じた。後にその舊宅を捨てて阿閦寺となし、寺内の一隅に一院を造營して芸亭院(別項)と稱し、儒書を置いて好學の徒の閲覽を許した。

【參考】經國集(卷一・十)○唐大和上東征傳○萬葉集(卷十九)○續日本紀(卷三十六)○類聚國史(卷百八十)○續日本紀考證(卷十一)○高僧傳要文抄(卷三)○石上宅嗣補傳(栗里先生雜著の中)○石上宅嗣の芸亭につきて新村出(典籍叢談)　〔山岸〕

家持 やかもち　歌人【氏姓】氏は大伴。姓は宿禰。【家系】大伴旅人と大伴郎女との長子。從妹坂上大孃の外多くの妻があつた。【生歿】生年不明。桓武天皇の延曆四年(一四四五)八月寅日に薨ず(公卿補任・續日本紀)。【閲歴】家持の作のうち、年代の判明せるものの最も早い作は、「萬葉集」卷六の天平五年の部の「大伴家持初月歌一首」である。次は、卷八秋雜歌部の「秋歌四首」と云ふ題詞と、「右四首天平八年丙子秋九月作」と云ふ左註との間に介在する四首の短歌である。この兩所には彼の官職を記さないから、彼はその頃無位無官の少青年であつたであらう。天平五年は、聖武帝治世の中頃で、父旅人の薨じた翌々年、憶良がこの年歿したと推察さるゝ年で、家持の薨年に先だつこと五十三年に當る。次に同じく卷八秋雜部に、「橘朝臣奈良麻呂結集宴歌十一首」と題詞のある短歌の最後の歌「もみぢ葉の云云」の歌の左註に、「右一首、内舍人大伴宿禰家持」とある。これは天平十年の作と見るべきもの故、家持は天平十年の頃、始めて官吏としての生活を踏み出したと見てよからう。この頃彼は結婚してゐた。「萬葉」卷三挽歌部には、天平十一年亡妾を哀傷する長歌短歌があつて、その一つに「逝にし吾妹か。若き子をおきて」とある故、二人の仲に子供がゐたことが分る。よつて彼が相當の青年になつてゐた事も知れる。次に「續日本紀」の天平十七年の條に、家持を六位から五位に敍する記事(これが「續日本紀」にその名の見ゆる最初である)が見えるが、官職の事は何等記さない。翌十七年三月に宮内少輔となると「續日本紀」にある故、内舍人がそれまで續いたと見るべきであらう。これ迄が彼の公人及び歌人としての生涯の第一期と云ふべきで約十三年間である。この期間に彼が多くの女性と贈答した作が、卷三・四に見える故、華かな戀愛生活に明し暮した若い日が續いたものと思はれる。聖武天皇の天平十八年六月越中守となつてから、孝謙帝の天平勝寶三年七月十七日少納言に遷任して都に歸るまで、足掛六年滿五年間の越中守時代が彼の第二期である。この間に彼は奈良に殘した弟を亡ひ、重病に冒されて死に臨み、田舍の佗しい生活に倦怠したりして、滿たされない日を送つたことが「萬葉」卷十七・十八・十九の作品から知れる。次は第三期で彼の第二の奈良生活である。勝寶三年奈良へ歸つた。孝謙帝の天平勝寶六年四月に兵部少輔となつた。繼いで兵部大輔・右中辨を經て孝謙帝の天平寶字二年六月因幡守となる。第三期は丁度滿七ケ年、以後彼の死までの二十六年間を假に第四期と見る。「萬葉集」は、翌寶字三年正月一日因幡國廳に於ける彼の作を以て斷

絕してゐる。彼の實生活はなほ續き、寶字六年には中務大輔となつて中央に復活したが、寶字八年には惠美押勝の陰謀に關係あるかと疑はれて、薩摩守に左遷せられ、以後相模・上總・伊勢の國守を歷任し、寶龜十一年參議兼右中辨となつて辛うじて中央に復活した。以後天應六年東宮大夫となり、正四位上から從三位と順調に進んだが、桓武天皇の延曆元年氷上川繼の事に坐して官を奪はれた。後東宮職に復官し、陸奧按察師鎭守府將軍を兼ね、延曆二年中納言に進み、三年持節征東將軍となり、父の榮官には及ばないが、やゝ多幸な二三年をすごして、桓武帝の延曆四年八月に薨じた。然るに偶々一族大伴繼人等の謀叛に關係ありと認められ、死後二十日に及んでも、その遺骸を葬るを得ざる悲運に逢つた。延曆二十五年に至つて始めて疑ひが晴れて位官を復せられた。享年は明かでないが、前記の、最初に歌の見ゆる年から五十三年目に薨じてゐる故、六十八乃至七十歲を越した高齡であつたらう。【人物】多感な感傷家だつたと云ふ推察は、今日定說と認められてゐる。「吾がやどのいささ群竹吹く風の音の幽けきこの夕べかも」(卷十九)一首を見ても、當時としては異常に銳敏な感覺の持主であつた事が分る。この纖細な神經を持つて政治家であり、武人の主將である大伴家の良き當主たり得る事は殆ど不可能である。彼が實父旅人ほどの政治家に到り得ず、衰へかけた大伴家が彼の代に急激な沒落を辿り、その死後忽ち政界から葬り去られた原因も、全く彼の性格が武の家に似合はぬ情感的な女々しいものであつた事に由來すると思はれる。彼に祖先の武勳を叙述して一族を勵ます「喩族歌」(卷二十)はあるけれど、彼自らはそれを實行するだけの實力を缺いてゐた。彼の性格と生活とは、多くの妻妾との優しい交涉や自然美の世界へ、より一層惹かれる種類のものであつた。

【著作・作品】彼の作物の最大なるものは、「萬葉集」(別項)である。「萬葉集」の一部(或は大部分)の編纂は、不朽の事業と言へる。彼自身の個々の作品は、「萬葉集」卷三に長歌三首、短歌十八首。卷四に短歌六十四首。卷六に短歌九首。卷八に長歌二首、短歌四十八首。卷十六に短歌二首。卷十七に長歌九首、短歌七十二首、旋頭歌一首。卷十八に長歌十首、短歌六十首。卷十九に長歌十七首、短歌八十六首。卷二十に長歌五首、短歌七十三首。總計長歌四十六首、旋頭歌一首、短歌四百三十二首である。他に卷十七に漢詩一首と卷八秋相聞部に尼(名不明)と取りかはした連歌がある。その作品の多數なる事は「萬葉集」中に類がないのは勿論、これを後世に比較しても、家持の作つたやうな長形の長歌は、短歌の幾十倍の精力を要するを思へば、類の餘りない多作家と言へるかも知れぬ。彼の生涯の第二期越中守時代(「萬葉集」の十七・十八・十九の三卷の時代)が最もその創作慾の旺盛に働いた時と云へる。殊に長歌の多い事や旋頭歌まで作つてゐる事は彼が作歌に意識的に勉强努力してゐた事を語るものである。第一期は年數が第二期の二倍半以上であるに拘らず歌數は却つて少い。第三期に至つて漸く衰頹を示し、第四期以後は、天平寶字三年より死ぬまで滿二十六ケ年間の間一作も殘してゐない。その理由は今日まだ不明である。或は彼の身邊が多事になつた爲め、詩歌に親しむ餘裕や興味を失つたのだとも見得るし、實際には作歌してゐたけれど、何等かの理由で、その作品が失はれたのだとも見られて決し難い。

期	期間	長歌	短歌	旋頭歌
第一期	天平十八年五月越中守赴任以前約十三ケ年間	總計五首 ○卷三—3 ○卷八—2	總計百五十七首 ○卷三—18 ○卷四—63 ○卷六—15 ○卷八—42 ○卷十六—2 ○卷十七—17	
第二期	越中守赴任より天平勝寶三年八月五日入京まで滿五ケ年間	總計三十五首 ○卷十七—9 ○卷十八—10 ○卷十九—16	總計百八十九首 ○卷十七—56 ○卷十八—60 ○卷十九—73	總計一首 ○卷十七—1
第三期	天平寶字二年因幡守となり二年七月五日奈良の知友と別離する歌(卷廿)迄滿七ケ年間	總計六首 ○卷十九—1 ○卷二十—5	總計八十五首 ○卷十九—13 ○卷二十—72	
第四期	因幡守赴任以後(以下約半年間歌無し)	無し	總計一首 ○卷二十—1	

【批評】歌人としての家持は、餘り高く評價出來ない。長歌は言葉の末を磨き細部の叙述にだけつとめて全體の構成を忘れてゐる。内容のみ多くて讀む者に迫つて來る力——一首全體としての感動を持つてゐない。短歌はその大部分を占むる相聞歌は眞實感を失つてゐる。徒らに相手に媚びる姿が目につく。表現だけでなく、内容にも麗しい花鳥風月をのみ好んで歌材や歌の境地やが狹いと云ふ缺點がある。この表現・内容兩方の缺點は、時代の罪でもあるが、時代をかゝる方向に導いた家持等有力歌人の罪でもあるのである。次に作歌の動機が不純である。或は「も」「の」「は」三つの助詞を故意に入れない歌、「も」「の」「は」「て」「に」「を」の六つをわざと入れない歌(二つゝも卷十九)を作つてみたり、詔に應へる豫作(その場合に間に合ふやうに前から豫め作つておく歌)を作つたり、妻大孃のための代作を試みたり、さうでなくとも、歌作の動機や目的が自分の已むに已まれぬ心情を吐露するのでなくて、他人の意を迎へたり、宴會の興を添へたりするために作つてゐることが多い。これ等は當時の歌人の通弊ではあるが、當時の歌人中、特に家持に於て最も多くこの弊を見出すのである。卷八にある無名の尼との連歌の如きも一種の遊戲心から發してゐる。併しながら家持が上述のやうな作歌態度を作品の上に持つてゐるとしても、彼が歌作を勉强したことは認めてやらねばならぬ。藤原京の人麿の頃から、既に歌は表現や言葉の修飾推敲を加へられることとなつて、古の「心の聲」そのまゝではなくなつてゐる。家持の頃には純然たる藝術品として、專門的な作歌道の修業が行はれた事は推察に難くない。事實家持は大伴池主に與ふる書翰の中に、「幼年未逕山柿之門」(卷十七)と記してゐる。赤人・人麿(或は山上憶良と人麿)を私かに師として修業したことが知られる。彼の作に人麿や憶良の句法や表現やをそのまゝ借用してゐる所さへ少くない程である。よく考ふれば彼の作品の劣れるはその天性と境遇の罪である。彼の勉强努力に拘らず自ら知らずしてこゝに到つた點は、同情を以て評價さるべきである。なほ家持が他の歌人、殊に前代の歌人に見出し難い獨特の歌風を、僅かではあるが開いてゐた事實も、多く看過されてゐるやうである。即ち前に述べた「いささ群竹」の歌や、「春の野に霞たなびきうらがなし此の夕影に鶯鳴くも」(卷十九)、「うらうらに照れる春日に雲雀あがり心悲しもひと

故、六十八乃至七十歳を越した高齢であつたらう。【人物】多感な感傷家だつたと云ふ推察は、今日定說と認められてゐる。「吾がやどのいささ群竹吹く風の音の幽けきこの夕べかも」(卷十九)一首を見ても、當時としては異常に鋭敏な感覺の持主であつた事が分る。この纖細な神經を持つて政治家であり、武人の主將である大伴家の良き當主たり得る事は殆ど不可能である。彼が實父旅人ほどの政治家に到り得ず、衰へかけた大伴家が彼の代に急激な沒落を辿り、その死後忽ち政界から葬り去られた原因も、全く彼の性格が武の家に似合はぬ情感的な女々しいものであつた事に由來すると思はれる。彼に祖先の武勳を叙述して一族を勵ます「喩族歌」(卷二十)はあるけれ

に短歌二首。卷十七に長歌九首、短歌七十二首、旋頭歌一首。卷十八に長歌十首、短歌六十首。卷十九に長歌十七首、短歌八十六首。卷二十に長歌五首、短歌七十三首。總計長歌四十六首、旋頭歌一首、短歌四百三十二首である。他に卷十七に漢詩一首と卷八秋相聞部に尼(名不明)と取りかはした連歌がある。その作品の多數なる事は「萬葉集」中に類がないのは勿論、これを後世に比較しても、家持の作つたやうな長形の長歌は、短歌の幾十倍の精力を要するを思へば、類の餘りない多作家と言

は言葉の末を磨き細部の叙述にだけつとめて全體の構成を忘れてゐる。內容のみ多くて讀む者に迫つて來る力――一首全體としての感動を持つてゐない。短歌はその大部分を占むる相聞歌は眞實感を失つてゐる。徒らに相手に媚びる姿が目につく。表現だけでなく、內容にも麗しい花鳥風月をのみ好んで歌材や歌の境地やが狹いと云ふ缺點がある。この表現・內容兩方の缺點は、時代の罪でもあるが、時代をかゝる方向に導いた家持等有力歌人の罪でもあるのである。次に作歌の動機が不純である。或は「も」「の」「は」三つの助詞を故意に入れない歌、「も」「の」「は」「て」「に」「を」の六つをわざと入れない歌(二

に與ふる書翰の中に、「幼年未逕山柿之門」(卷十七)と記してゐる。赤人・人麿(或は山上憶良と人麿)を私かに師として修業したことが知られる。彼の作に人麿や憶良の句法や表現やをそのまゝ借用してゐる所さへ少くない程である。よく考ふれば彼の作品の劣れるはその天性と境遇の罪である。彼の勉強努力に拘らず自ら知らずしてこゝに到つた點は、同情を以て評價さるべきである。なほ家持が他の歌人、殊に前代の歌人に見出し難い獨特の歌風を、僅かではあるが開いてゐた事實も、多く看過されてゐるやうである。即ち前に述べた「いささ群竹」の歌や、「春の野に霞たなびきうらがなし此の夕影に鶯鳴くも」(卷十九)、「うらうらに照れる春日に雲雀あがり心悲しもひと

り し思へば」(卷十九)の如きには、當時の何人も描き得なかつた優麗艷美な狀景と心持とがある。彼が若しこの境地を自ら氣づいておし深め切り開いて行つたら、そこに奈良の眞盛りなる天平末期にふさはしい新歌風を樹立し得た事であらう。それは同時に平安時代の和歌の展開に接續するものである。〔森本〕

【參考】上代國文學の研究武田祐吉(萬葉集講座)

宅守 やかもり 歌人 【氏姓】氏は中臣。姓は朝臣 【閲歷】生歿や系圖も明かでない。彼に關する記錄は三つにすぎない。年代の順に揭げると、(1)「萬葉集」卷十五の目錄――「中臣朝臣宅守、娶藏部女嫂狹野茅上娘子之時、勅斷流罪配越前國也。是於夫婦相嘆易別難會、各陳慟情贈答歌六十三首」。これは宅守流罪の原因を知る唯一の資料である。卷十五の本文の題詞に「中臣朝臣與狹野茅上娘子贈答歌」とあるのは、この目錄の文の同意簡形のものである。(2)「續日本紀」に「天平十二年六月庚午、宜大赦天下。自天平十二年六月十五日戌時以前大辟以下咸赦除之。(中略)中臣宅守不在赦限」とある。これは聖武天皇時代に大赦のあつた事と、宅守だけはその大赦に洩れた(その理由は不明)ことを記した記事である。(3)同じく「續日本紀」に、「天平寶字七年正月壬子、從六位上、中臣朝臣宅守授從五位下」とある。これは淳仁帝の天平寶字七年に宅守を從五位下に叙した記錄である。この三個を聯絡させると、(1)によつて彼の流罪と流罪の理由とがほぼわかり、(2)によつて天平十二年六月にはなほ流罪地にゐたことが分り、(3)によつて寶字七年には既にゆるされて歸京してゐたことがわかる。(1)の資料によれば、初め藏部女(傳記不明)と結婚してゐながら茅上娘子(別項)と通じたことが原因のやうに解されるが、男子が多數の女子と通ずるのは、一夫多妻の當時にあつては常態であるのに、何故宅守のみが流罪にまで處せられたか不明である。或は茅上娘子が通ずべからざる位置の女であつた爲めか。尤もこの目錄の文を、佐佐木博士の「新訓萬葉集」には、「嫂」字を西本願寺本に「嬬」とあるによつて、「中臣朝臣宅守、藏部女嬬狹野茅上娘子を娶りし時」とよんである。この「藏部女嬬」が人名でなく、官名の如きものだとすれば重婚でないことになつて、上の疑念は氷解する。卽ち「藏部女嬬」の官に在る女と通じた故に、その罪で流されたと云ふことになる。併し「藏部女嬬」を調べて見たが如何なる官名か遂に知り得なかつた。兎に角、宅守流罪の眞の原因は、まだ不明といふの外はない。【作品】すべて「萬葉集」の卷十五に出てゐる。卷十五の後半は、宅守と茅上娘子との贈答歌のみから出來てゐる。歌の排列の方法は、上に記した如き題詞が最初にあつて、それから二人の作品がほぼ交互に並べられて、流罪直後の歌・道中の歌・流罪地到着後の歌と並べられてゐる(茅上娘子參照)。そのうち宅守の作は四十首。すべて短歌である。最後の七首を除いては全部戀歌である。【作風】その心情の純眞一途なるその表現が、必要以外の裝飾を一も含まずして、率直に已の心情を訴へてゐる點、何れも天平期の男性作家に珍らしい現象である。何時の時代でも戀には女は眞劍になるわりに、男は全身的に打ちこんで行かないのが常で、「萬葉」にもこの傾向は明かに見える。そのうち宅守の作の如きは、心情の熱烈にして純潔なる「萬葉」の男性の戀歌中比類を見出し難い。特に天平期に於ては、既に宴飮や應詔などの外部的原因のため、眞の創作欲が湧かないのに作歌する惡風が盛行してゐた中に、これだけの已むに已まれぬ眞の欲求から作り上げた數十首を見出すことは、萬葉末期の歌界の價値を高からしむるものとさへ言へるであらう。〔森本〕

約言 やくげん 國語學 【名稱】「つづめこと」「約音」、又は「反語」「反音」ともいふ。【解說】「さしあぐ」(差上)を「ささぐ」(捧)、「てあらひ」(手洗)を「たらひ」(盥)、「わがいも」(我妹)を「わぎも」、「あはうみ」(淡海)を「あふみ」、「はたおり」(機織)を「はとり」(服部)、「あめにあるや」(在天)を「あめなるや」といふ如く、語中の相連る二音節がつづまつて一音節になるもの。かやうな現象は、上代日本語の複合語に於て下の語が母音で初まる場合に屢々起つた現象であり、上の語の最後の音節の母音が弱まり除かれて、殘つた子音が下の語の最初の母音と合して新たなる音節を構成するものである。かやうに二音節が合して一音節となるのは、漢字音の反切(別項)と趣を同じくする故に、古く仙覺もこれを反切(「かへし」)に關係させて考へ(仙覺抄)、契沖もこれを假名反と說明した。但し契沖は古代語に於ける實例に基づいて、母音が下にあつて上より續く時に起るものであるとしたのであるが(「和字正濫鈔卷五」)、貝原益軒は、「日本釋名」(別項)に於て語源解釋の原則の一として反語(卽ち「かながへし」)を擧げ、無制限にこれを應用して語源を釋いてゐる(「ひら」が「は」(葉)となり、「やすくきゆる」が「ゆき」(雪)となつたとする如き)。賀茂眞淵に至つては、つゞめると共に一方延べるものがあるとし、前者を約言、後者を延言(別項)と名づけ、古代日本語に於ける法則として語源の說明や語釋に適用した。その末流に至つては、この方法を濫用して附會の說を出すもの多く、その弊にたへなかつたので、鹿持雅澄や大國隆正の如き、約言の行はれる範圍や場合を考へて、その法則に限度あることを力說するものも出て來た。今日に於ては約言說を無條件に信ずるものはない。

【參考】語意考賀茂眞淵○和字大觀鈔文雄○日本釋名貝原益軒○東雅新井白石○五十音辨誤村田春海○通略延約辨大國隆正○雅言成法鹿持雅澄○古典註釋に現れた語學的方法時枝誠記(日本文化叢考)〔橋本〕

役者必讀後の正夢 やくしやひつどくのちのまさゆめ 「役者妙々痴談後の正夢」を見よ。

役者必讀妙々痴談 やくしやひつどくめうめうちだん 「妙々痴談」を見よ。

役者必讀妙々痴談返註錄 やくしやひつどくめうめうちだんへんちゆうろく 「妙々痴談返註錄」を見よ。

役者評判記 やくしやひやうばんき 演劇 【名稱】役者の技藝の評書の義である。普通、野郎評判記を含めて呼び、俳優評判記と記す場合もある。一部の評書に對する稱呼でもあるが、一般には類書の總稱として用ひられてゐる。【發生】官能本位の歌舞伎劇の特性が、容色中心に役者を注目させて、歌舞伎劇の批評精神が發生し、その整頓が早い遊女細見に類して書冊の形式をとる事となり、所謂野郎評判記となつたのであるが、演劇の發達に應じて、內容も容色より技藝を對象とするに及んで、役者評判記が成立したと見られる。書物としての形式からは遊女細見の摸倣に起きたのであるが、役者繪にその役者の藝の短評を加へたりした半切摺のものが、元祿年代に見える

ので、かうした性質がそこに加はつたとも見られる。【性質】整頓された評判記の形式は京・大阪・江戸の三都別に三册に分けられ、これを一部として、年二回一月と三月（一月は顔見世興行について、三月は二の替り興行について）に刊行したものである。

【内容】（一）役者目錄、（二）開口、（三）評判の三部から成つてゐる。（一）は役柄の上から總役者を分けて、立役之部・敵役之部・道外之部・親方之部・若女方之部・若衆方之部・華車方之部の如き（口三味線）品目を立て、それ〴〵に位附を記した役者の名と出演劇場名が排列してある。これは又本文の目次ともなるものである。（二）は序文の形式であるが、一趣向を凝らして短篇小說とも見られ、評判の引としての落ちを以て結ぶので、恰も八文字屋本の小說に接するの感がある。（三）は目錄の順によつて一人宛の藝評が行はれて行くので、その進行は大盡と太鼓（口三味線）等の人物を點出して對話の形式をとるのを普通とする。そこに或は論爭を釀す事もあり、藝評以外に小說的感興をも添へる。藝評の內容は顔見世とか二の替りとかの演技に關する批判ではあるが、同時に演出記錄として注意すべき事も多く、これは又、時にその役者の演技を遡らせて記す場合もあるので、評判の文が演出史の一要素ともなり得るのである。版式は横本と縱本とあるが、横本が普通で、（一）縱三寸四五分前後を普通とし、（二）縱四寸三四分迄の枕本も往々見うけられる（略請狀・三世相の類）。縱本は野郎評判記時代に多く、後にも時々出たので、（三）小半紙二つ折の豆本（假題「天和役者評判記」の類）、（四）美濃二つ折の中本（野郎蟲・野郎大佛師の類）、（五）半紙本（新野郎花垣・難波立聞昔語の類）、（六）美濃判の大本（男色大鑑等を評判記と見ると、こゝに入る）などに分類する事ができる。併し右の如く整頓された後に於ても、特殊樣式のものが種々あつた。內容に細見を摸したもの（役者細見記の如き）、和文・漢文を交へた評語の形式（役者花見開の如き）、漢文のみの評語の形式（梨園顆話の如き）などあり、劇場組織や建築の案內を含めた「役者時習講」の類も見られる。その他に、子供芝居のやうな特殊な興行に關するものとか、某役者個人に關するものなども現はれ、評判記が單に客觀的な觀察のみに止まらず、常に親和的な精神の中に育てられて流行してゐたものであることが知られる。

【沿革】書物の形式をとつたものとしては、今日では明曆二年版「役者の噂」二册を最初とする。本書が役者の紋所と行狀を記したものであるといふ傳だけで、原本は遺存せぬらしい。「野郎蟲」（萬治三年か）「剝野老」（寛文二年）以下天和年代までが大體に於て野郎評判記時代と見られ、野郎の容色座配を主とし、時には色道の對象として專ら觀察を下してゐたが、作者は通人粹士であつた。貞享から元祿に及んで漸次に技藝に觀察點を置き、西鶴等も筆を執つたらしく、書肆としては和泉屋の活躍が注目された。但し和泉屋は逐年大鑑と稱して、舊版に新評を加へる手段をとつてゐた。そこに當時の藝評であると共に、史的の興を添へるのであつた。この間は純藝評への轉向時代とも見るべきで、種々な新傾向の發見があつた。元祿五年「役者みゝかき」に位附が現はれ、同十一年「役者椶櫚箒」は三都の藝評を一部に收めた。然るに、一轉機が到來して、江島屋其磧が新案を以て、元祿十二年「役者口三味線」を八文字屋八左衞門方から出すに及んで、社會の歡迎はこれを以て役者評判記の型となさしめた。以後、評判記出版所としての八文字屋の名は幕末に及び、その間多少の盛衰もあり、類似の出版も多く現はれたが、要するに口三味線の示した型から遠く隔たるものは生れなかつた。また「口三味線」の好評によつて、評判記作者の地位が認められる事となつた。其磧が作者自笑の名に隱れて、その功を奪はれたとして憤慨したことも、その一現象と思はれる。其磧が自笑に對して、江島屋との合版を申込んで拒絶された爲めに、八文字屋を離れ、正德四年江島屋から「役者目利講」を出版し、從來の經緯（いきさつ）を暴露したが、狼狽した八文字屋は、直ちに「色景圖」によつて抗辯すると、翌年には其磧が「返魂香」により、自笑が「懷世帶」によつて盛んな論爭となり、以後江島屋は鶴屋正本屋と提携して八文字屋に當つた。併し互に不利を覺つて六年目の享保四年正月「金化粧」を以て和解發表となり、以後合版となつて再び舊體に復した。この抗爭狀態が、鶴屋正本屋に評判記作製の虛を與へもしたが、評判記としては、全盛期と見るべきである。享保十七年五月、「役者名古屋帶」によつて名古屋の評判記も生れた。其磧は元祿十二年、正本屋のためにも執筆して「一挺鼓」となつたが、八文字屋を專らとするため、正本屋の作者としては團水を勸めたと傳へられる。元文以後は八文字屋も漸く衰退の徵が現はれて、批評は便宜主義となり、事實を誤まる場合すらも生じ、舊敵手たる鶴屋正本屋と合版を求め、明和後に及ぶと、江戸の中山清七の活躍が目立つ。文化以後は大阪の河內屋の活躍時代となり、上方の評判記作者として二斗庵下物・酒屋隣馬・宿魚丸泊鶯等すべて大阪人によつて占められるやうになり、京都は全く勢ひを失つた。維新後も明治二十年代まで傳統の力が評判記出版を絶やさなかつたが、明治十一年から十九年に至る六二連の編輯した「俳優評判記」のみが連續してゐたものであつた。爾來新聞に劇評が掲載されてからは、この方に活力と眞實が籠つて、評判記は自滅の途を辿つた。

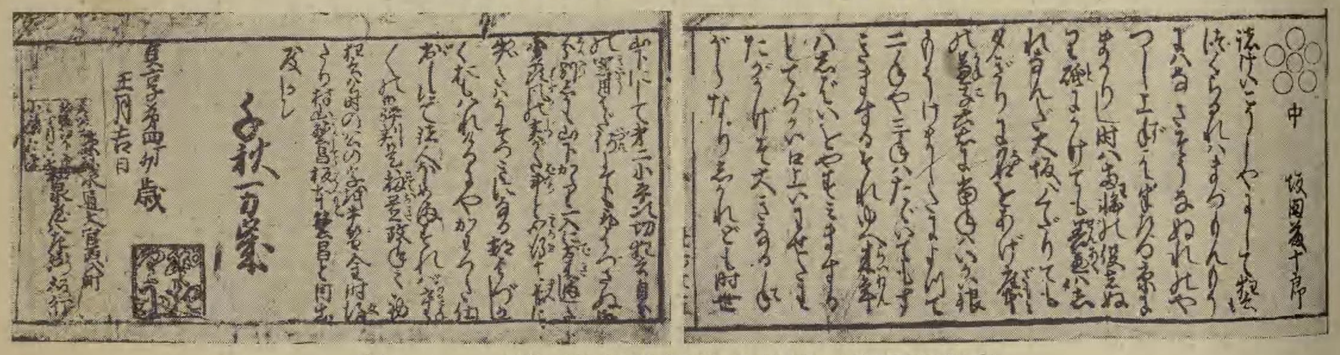
【位附】起原として漢書を引く說などがあるが附會說に過ぎぬ。歌舞伎劇の社會性から見て、何等かの意味で多くの役者に評價を附けるのは、當然な現象である。位附の形式も「口三味線」が標準となり、多少の變遷の後、享保年中に定まつたと見られる。「口三味線」には上位三字（即ち上上吉、上上・上）、中位二字中ノ上、中）とがあつたが、略請狀には中位が三字となり、景色圖に至つて白字が入つて、更に複雜化した。白字は黑く染まるに應じて昇級するのである。これ等は標準が高まる結果とも見られ、中字はやがて廢されて上字を最度下位として進むやうになつた。固定した位附は、（一）上位四字と（二）位上の六字と（三）特例と三種に分れる。（一）には第一、上上吉、上上吉、第二、上上士、上上士、第三、上上、上上、第四、上、上がある。（二）には第一、三ケ津物藝頭（技藝萬般に類ない場合、芳澤あやめに起る）、第二無類（一役柄中で並びない場合、澤村長十郎・市川海老藏に起る）、第三、極上上吉、第四極上上吉、眞上上吉、第五、木上上吉、大上上吉、第六、功上上吉がある。（三）は臨時に限り至上上吉と至極上上吉とあり、他に褒美と稱する模樣の型もある。元祿年代にはこれ等の位附を定めるに世に問うた事もあつ

て對話の形式をとるのを普通とする。そこに或は論爭を釀す事もあり、藝評以外に小說的感興をも添へる。藝評の內容は顏見世とか二の替りとかの演技に關する批判ではあるが、同時に演出記錄として注意すべき事も多く、これは又、時にその役者の演技を遡らせて記す場合もあるので、評判の文が演出史の一要素ともなり得るのである。版式は橫本と縱本とあるが、橫本が普通で、(一)縱三寸四五分前後を普通とし、(二)縱四寸三四分迄の枕本も往々見うけられる(略請狀・三世相の類)。縱本は野郎評判記時代に多く、後にも時々出たので、(三)小半紙二つ折の豆本(假題「天和役者評判記」の類)、(四)美濃二つ折の中本(野郎蟲・野郎大佛師の類)、(五)半紙本(新野郎花垣・難波立開昔語の

天和年代までが大體に於て野郎評判記時代と見られ、野郎の容色座配を主とし、時には色道の對象として專ら觀察を下してゐたが、作者は通人粹士であつた。貞享から元祿に及んで漸次に技藝に觀察點を置き、西鶴等も筆を執つたらしく、書肆としては和泉屋の活躍が注目された。但し和泉屋は逐年大鑑と稱して、舊版に新評を加へる手段をとつてゐた。そこに當時の藝評であると共に、史的の興を添へるのであつた。この間は純藝評への轉向時代とも見るべきで、種々な新傾向の發見があつた。元祿五年「役者みゝかき」に位附が現はれ、同十一年「役者樓櫚箒」は三都の藝評を一部に收めた。然るに、一轉機が到來して、江島屋其磧が新案を以て、元祿十二年「役者口三四年正月「金化粧」を以て和解發表となり、以後合版となつて再び舊體に復した。この抗爭狀態が、鶴屋正本屋に評判記作製の虛を與へもしたが、評判記としては、全盛期と見るべきである。享保十七年五月、「役者名古屋帶」によつて名古屋の評判記も生れた。其磧は元祿十二年、正本屋のためにも執筆して「一挺鼓」となつたが、八文字屋を專らとするため、正本屋の作者としては團水を勸めたと傳へられる。元文以後は八文字屋も漸く衰退の徵が現はれて、批評は便宜主義となり、事實を誤まる場合すらも生じ、舊敵手たる鶴屋正本屋と合版を求め、明和後に及ぶと、江戶の中山清七の活躍が目立つ。文化以後は大阪の河內屋の活躍時代となり、上方の評判記作者としするのである。これ等は標準が高まる結果とも見られ、中字はやがて廢されて上字を最度下位として進むやうになつた。固定した位附は、(一)上位四字と(二)位上の六字と(三)特例と三種に分れる。(一)には第一、上上吉、上上吉、第二、上上士、上上士、第三、上上、上上、第四、上、上がある。(二)には第一、三ケ津物藝頭(技藝萬般に類ない場合、芳澤あやめに起る)、第二無類(一役柄中で並びない場合、澤村長十郎・市川海老藏に起る)、第三、極上上吉、第四極上上吉、眞上上吉、第五、木上上吉、大上上吉、第六、功上上吉がある。(三)は臨時に限り至上上吉と至極上上吉とあり、他に褒美と稱する模樣の型もある。元祿年代にはこれ等の位附を定めるに世に問うた事もあつ

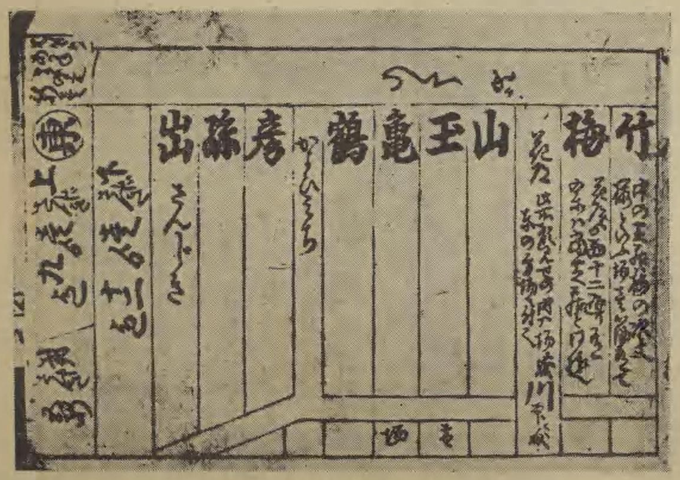
役者評判記

寛文七年刊　野郎大佛師（東京帝大圖書館藏）

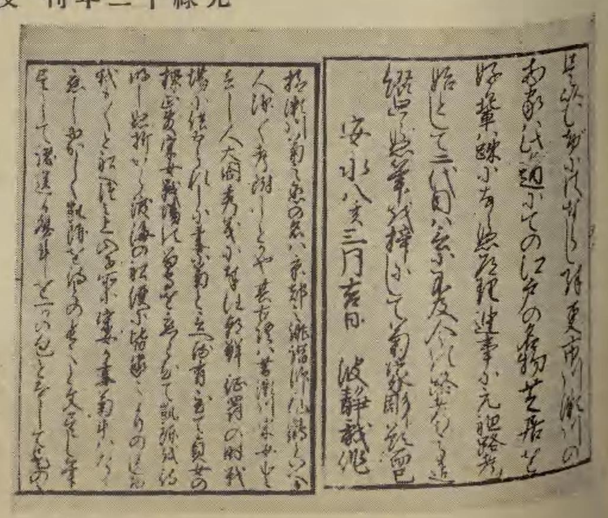


貞享四年刊　野郎立役舞臺大鏡（同　上）

元祿十二年刊　役者口三味線（笹野堅氏藏）



寛政七年刊　役者時習講



安永八年刊　菊家彫

たが、漸次作者獨自の見解によるやうになつた。併し相當客觀的な態度が保たれ、信用も維持され、ひいては役者の奬勵にもなつたのである。（評判記參照）

【參考】古今役者大全八文字屋編　○新刻役者全書同上　○南水漫遊濱松歌國　○劇場一覽顯微鏡默々漁隱　○浮世双紙水谷不倒（列傳體小說史）

す。坂東秀調は亡父三津五郎の遺訓を守り、座頭の器量も備はり、名聲もあがり、芝居道の故實或は金融方面にも暗くなく、かくして名門の跡を全うする。

【解說】「妙々痴談」は、前編のみに終つてゐるため、本書は後編として執筆したものかとも思はれるが、「妙々痴談」所載の後編の目次とれを嚆矢とすべく、焉馬の「花江都歌舞妓年代記」（別項）は、本書を粉本としてゐると思はれる點からも、注目すべき文獻と言へるであらう。なほ「續名聲戲場談話」（別項）は本書の年次を繼いだ著作である。

【增田】

役者名物袖日記

やくしやめいぶつそでにつき　演劇

書　五卷　【作者】萬里亭　【別名】古今役者名物大

厄拂ひ

やくばらひ　歌舞伎

【解說】元祿頃から用ひられた民俗の一つであつて、立春の前夜（後には大晦日の夜）、物乞が「厄拂ひ〳〵」と呼んで家々を訪なひ、これを乞ふ人のために祝詞を述べた（古くは、終りに鷄の鳴音をまねたといふ）。「やあらめでたや、鶴は千年龜は萬年東方朔は八千歲三浦の大介百六ツ……此の厄拂

たが、漸次作者獨自の見解によるやうになつた。併し相當客觀的な態度が保たれ、信用も維持され、ひいては役者の奬勵にもなつたのである。（評判記參照）

【參考】古今役者大全八文字屋編　○新刻役者全書同上　○南水漫遊濱松歌國　○劇場一覽顯微鏡默々漁隱○浮世双紙水谷不倒（列傳體小說史）　○日本演劇史伊原敏郎　○「役者評判記」について石割松太郎（古本屋第十號）　○梨園の落葉坪内逍遙○演劇大全關根默庵　○役者評判記年表稿本松廼屋主人　○歌舞伎劇の見方濱村米藏　○歌舞伎圖說守隨・秋葉　○近世戲曲研究守隨窓治　○役者評判記高野辰之（演劇史研究・國劇史概觀）　【守隨】

役者妙々後の正夢　やくしやめう〳〵のちのまさゆめ

滑稽本　二册　【作者】三芝居士（衣笠文京）。【名稱】「役者妙々」は角書。「妙々痴談」（別項）の後をうけ、且つ「妙々痴談」が夢の話になつてゐるのを、本書は現實のことにして書いてあるために、正夢と命じたのである。【刊行】天保四年【諸本】滑稽名作集下卷（帝國文庫）所收。

【梗概】向島の隱居白猿から詰られた市川海老藏が、芝居の風儀の變化したこと、幼年の伜に襲名せしめたこと、地方巡業のことについて辯明をする。松助が亡き祖父松綠に諭され、後、父梅幸（菊五郎）に幽靈の事を問ひ糺すと、父の姿に松綠の靈がうつつて種々教訓する。中村芝翫が彦三郎の教訓に感じて座頭の地位に立ち、粉骨碎身の結果、贔屓も加はり、終に中村歌右衞門から名跡相續を許される。岩井杜若が仙女の靈について極樂の仙宮に到ると、中村慶子がゐて、自分の名跡について娑婆の紛糾を語り、杜若の進み出る所をつき落す。坂東秀調は亡父三津五郎の遺訓を守り、座頭の器量も備はり、名聲もあがり、芝居道の故實或は金融方面にも暗くなく、かくして名門の跡を全うする。

【解說】「妙々痴談」は、前編のみに終つてゐるため、本書は後編として執筆したものかとも思はれるが、「妙々痴談」所載の後編の目次とは違つてゐるから、全く獨立したものであらうか。兩書は正續と關聯して見るべきものである。　【小柴】

役者名聲牒　やくしやいせいてふ

演劇書　一册　【編者】序文の末に阿那聒散人とあるが、門田候兵衞のことであらう。【刊行】明和七年九月【諸本】演劇學第二卷第三號所收。【內容】全體を洒落本形式に摸してゐるが、序に「今爰に書載するものは中古當世役者の勝狂言をあげて芝居淫人の娛とも旦つは故を溫て新を知るは幼役者出世の階梯とぞならんと思ひ出し語だし云々」とあるやうに、簡單ながら江戸歌舞伎を歷史的に叙して行かうとするものであつて、「發端」には中村・市村兩座の引幕方及び町家の若旦那の三人が會して、芝居の濫觴から正德までの極めて大體の變遷を語り合ふ趣向になつて居り、本文は享保元年から本書刊行の明和七年九月までの江戸三座に於ける興行、俳優の移動、劇場關係の諸項等を編年的に略述してゐる。卷末に、「芝居年中行事」「三芝居茶屋名目部類」「補闕」を附してゐる。なほ「古今役者名聲牒大全」の豫告があるが、恐らく刊行されたかつたのであらう。【價値】もとより小册子で記述は簡單であり、誤謬や遺漏もあるべく、また未調査と思はれて外題の個所が枠だけで空白になつてゐるのもあるが、やゝまとまつた江戸歌舞伎の歷史的記述はこれを嚆矢とすべく、焉馬の「花江都歌舞妓年代記」（別項）は、本書を粉本としてゐると思はれる點からも、注目すべき文獻と言へるであらう。なほ「續名聲戲場談話」（別項）は本書の年次を繼いだ著作である。　【增田】

役者名物袖日記　やくしやめいぶつそでにつき

演劇書　五卷　【作者】萬里亭【別名】「古今役者名物大全」。序によると、「三芝居名物袖日記」ともいふ。【刊行】明和八年【諸本】演劇文庫第四編所收。【解說】享保年代から當時までの歌舞伎愛好の著者が、江戸歌舞伎の故實等に關し、自身の經驗や古老の物語を基礎として記述したものである。劇場の歷史、舞臺裝置、扮裝等を初めとして、古來名優の演出の變遷にも及んでゐる。引用書として近年の役者評判記には僞說が多いとて排してゐるなど、傾聽に値する。江戸歌舞伎に關する各方面の著書も化政度以後に續出したが、早い頃の刊行書として、本書がそれ等に對する指導的立場を占めてゐる。　【守隨】

役者論語　やくしやろんご

演劇書　四卷四册　【編者】八文舍自笑【諸本】新群書類從卷三・隨筆文學選集卷四に所收。【解說】「此書や、むかしより上手名人と稱せし役者のはなしどもを、古人書留め置し卷々なり」として七部の書を收めてゐる。「舞臺百箇條」は杉九兵衞なる花車形の藝談であるが、七項のみにて後は蟲のために見えずとあり、「藝鑑」は富永平兵衞の遺著で、若衆歌舞伎時代の狂言の梗概を述べたものとして貴重なる資料である。その他「あやめぐさ」「耳塵集」「續耳塵集」「賢外集」「佐渡島日記」（各別項）等がある。　【增田】

矢口　やぐち　「神靈矢口渡」を見よ。

厄拂　やくばらひ　「門附歌」を見よ。

厄拂ひ　やくばらひ　歌舞伎【解說】元祿頃から用ひられた民俗の一つであつて、立春の前夜（後には大晦日の夜）、物乞が「厄拂ひ〳〵」と呼んで家々を訪なひ、これを乞ふ人のために祝詞を述べた（古くは、終りに鷄の鳴音をまねたといふ）。「やあらめでたや、鶴は千年龜は萬年東方朔は八千歲三浦の大介百六ツ……此の厄拂ひがひつとらへ西の海へさらり」の如き樣式を標準として、辭句は年々自由に綴られて流行した。これを厄拂ひといつたのであつたが、幕末に及んで歌舞伎劇に於ける臺詞中の、美文的な構成をもつ部分をも厄拂ひと稱したのである。併し感覺的な歌舞伎劇の臺詞としては、かゝる性質は、既に元祿時代以前からあつたのである。ただ早くは一場面の或る箇所に限られて要求された態度が、化政度以後になつて漸次に臺詞の一般形式の中に及ぶこととなつた。元祿時代の「ほめことば」（別項）の樣式が後には江戸に下つて傳はつた爲めに、厄拂ひも江戸にのみ行はれた。作者で厄拂ひの名手は、瀨川如皐から古河默阿彌（各別項）に至つて完璧を示した。歌舞伎作者の中で、臺詞の中に緣語や掛詞を巧みに利用し得たことは、默阿彌の右に出づる者なく、彼の厄拂ひが特に優れて見えるのも當然な結果である。

【參考】嬉遊笑覽卷八喜多村信節　○守貞漫稿　喜田川季荘　【守隨】

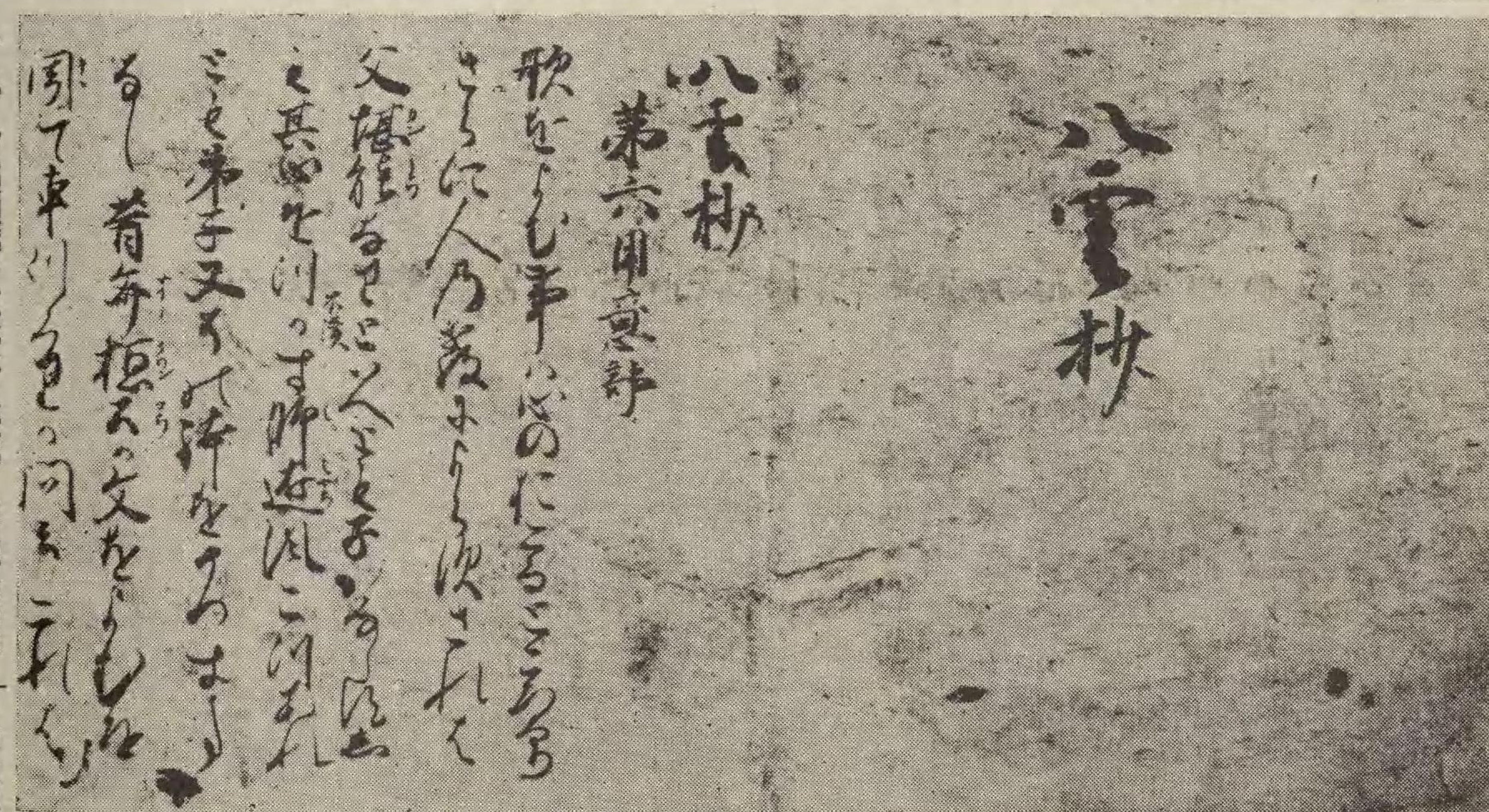
八雲琴譜　やくもきんぷ

音樂書　三卷　【撰者】中山琴主（二絃琴解說參照）【成立】安政五年から同六年十一月までの諸人の序や跋がある。【刊行】萬延元年頃か。【諸本】後刷本では、「八雲琴譜」を諸宮家等に獻上した次第等を記した後書を附し、それには明治十年十月まで

のことが記してある。又この後刷本では、葛原勾當の跋に「葛原勾當云、千家之正校」とあるのを削り、「中島檢校、平岡松琴校」と云ふ文字を埋木してゐる。その他内容にも若干の相違がある。【内容】〔上卷〕初めに八雲琴名所・壺名・爪袋・琴袋・衣袴・琴臺等の圖があり、次に彈奏の注意十二箇條、彈音六箇條、七六箇條、摺色六箇條、左打色六箇條、彈吟中の大事八箇條等を記す。琴歌は、葦牙組(三曲)、出雲組(六曲)、内日組(八曲)、萬葉組(八曲)、八代組(八曲)、壽詞組(三曲)、合計三十六曲。〔二卷〕これは「古事記」の文章、歌謠、「萬葉集」以下の歌集の和歌等を取つたもの。由來組(六曲)、功德組(六曲)、上節組(六曲)、堅石組(六曲)、常磐組(六曲)、上代組(六曲)。合計三十六曲。これは八雲琴主以下門弟達の作詞に成るものである。附錄今樣表組十六曲(百有餘曲ある)。〔三卷〕外曲種々組として、神樂振(三曲)・催馬樂振(六曲)、出雲舟歌振(八曲)、古人今樣(十二曲)・筑紫振(八曲)、若菜組(八曲)。この最後の若菜組には、三味線の組歌より取り入れたものがある。他に八雲琴二百吟と云ふ和歌集がついてゐる。【歌詞】古歌を取り入れたものがあり、新作も古雅を旨としてゐて時代色に乏しい。「きその山路をはる〴〵と、尾張の國に歸りつゝ、熱田の宮ゆ一の宮、つしまにまうで夜もすがら、此大宮の廣前に、八雲小琴を搔き明す」(津島詣、琴主作)【琴譜】八雲琴獨習の友三卷(土岐達編。これには、表組・裏組・中組・奥組と分けた歌がある)○新撰八雲琴譜二册(近藤儀琴編。この兩書は、樂譜を記したものである)〔藤田〕

八雲琴 やくもごと 「二絃琴」を見よ。

八雲御抄 やくもみせう 六卷 三册 【著者】順德天皇【成立】未詳【諸本】刊本としては六卷本(識語なし)があり、列聖全集の中にも收められてあるが、寫本としては種々傳はつてゐる。竹柏園藏の乾元本八雲抄・傳融覺筆本八雲抄・闕戸本八雲御抄(大震災にて燒失)・傳顯昭筆八雲御抄(燒失)等がある。【組織・内容】第一卷正義部。第二卷作法部。第三卷上・下・枝葉部。第四卷言語部。第五卷名所部。第六卷用意部に分れてゐる。正義部は六義・序代・短歌・反歌・旋頭・混本・廻文・無心所著・誹諧・折句・沓冠折句・沓冠・物名・贈答・異體・連歌・八病・四病・七病・學書等に就いて和歌四式(別項)以來、次第に生じて來た和歌の修辭的制規を集成して擧げ、且つそれまでの學書を分類して擧げてある。第二卷の作法部は、歌合・歌會・書樣・題・判者・序者・講師・讀師・番・作者・淸書・撰集等の項目に就いて、歌合や撰集の知識を集成してゐる。第三卷の上・下は、天象・時節・地儀・居所・草部・木・鳥・獸・蟲・魚・人倫・人事・衣食・雜物・異名・雜物等に分けて、それに關する語彙の解釋をなしてゐる。第四卷の言語部は世俗言・由緒言・斷簡言に分けて語彙の解釋をなし、第五卷の名所部は山・嶺・嵩・根、その他に分けて地名の出所を擧げて居り、卷六の用意部は著者の歌論を擧げてゐる。本書のうちで最も價値の多いのは、卷一と卷六とであるが、殊に卷六は順德院(別項)の歌論を見る上に注意すべき資料である。「八雲御抄」は全體として古代歌學の集成的著述であるだけに、歌論に於ても、それ以前の見解をひろく統一して穩健なる見解を唱へてゐる。歌をよむ根本は心の起るところにあるとしてゐるが、歌をよむ上の制すべき點として、第一、ちかき人の歌の詞をぬすみとる事、第二、あらぬやうなる秀句をこのむ事、第三、詞のいりほが、第四、風情のいりほが、第五、心えさせぬ事、第六、にくいけを好む事の六ケ條を擧げ、又歌の上に重んずべき點として、第一、風情をさきとすべき事、第二、心をさきとすべき事、第三、詞をさきとすべき事、第四、古歌をとる事、第五、てにをはといふ事、第六、よく〳〵思惟すべき事の六ケ條を擧げてゐる。これによつて全體としては定家のやうな巧緻の表現を風情や詞のいりほがとして非難し、俊成等の立場を重んぜられたと見ることが出來る。さうしててにをはを尊重し、思惟を重んぜられたのを見ても、表現のこまかさと共に沈潛的傾向を重んじた點が見られるのである。【價値】「八雲御抄」は、古代歌學の一大集成といふ點に於て中世初期の最もすぐれた歌學書であり、歌論書である。歌學知識の集成としては淸輔の「奥義抄」(別項)も注意すべきであるが、「八雲御抄」の第一・二卷はその「奥義抄」の集成に更に一歩を進めたものと見られよう。また第六卷の用意部は、從來の歌論を集成統一して組織的に説かれた意味で、他の如何なる歌論書にも見ない特徴をもつてゐる。創見の多い點では、定家の「毎月抄」(別項)の如きは「八雲御抄」より優れたものであらうが、集成統一の功は「八雲御抄」に及ばない。強ひて全體として「八雲御抄」の先驅となつたものを擧げれば、上覺の「和歌色葉集」(別項)であるが、その集成統一の點に於て「色葉集」よりも遙かにすぐれてゐる。〔久松〕



八雲御抄（佐佐木信綱氏藏）

譯文筌蹄 やくぶんせんてい 漢文作法書 六卷

【著者】荻生徂徠【解説】同訓異義の文字を列擧して、一々その差別・用法等を説明したもの。伊藤東涯の「操觚字訣」（別項）と共に同種の書中傑出したものである。巻首に題言十則があり、徂徠の文章についての見識を觀るに足る。【批評】山本北山の「作文率」に「譯文筌蹄は徂徠二十五六歳の時の著述の由云はるれども、巻首に載する題言十則は晩年の作に出づ。如何となればその題言の中に文辭を作ることを載せ、四家雋を編む主意を著す。これ近き證據なり。題言に云ふ所の誤は余文事正誤を著して論ぜることとなれば姑く置く云々」とある。

野傾旅葛籠（やけいたびつづら）　浮世草子　五巻

【作者】序の末尾に作者江島市笑とあるが、假の名であつて、其績と考へられる。【刊行】正徳二年初春、京都八幡町室町西入る江島屋市郎左衞門板。【諸本】寛保四年に、京都河勝より「傾城情の手枕」と題して出版せられたものは、本書の再版本である。本書の巻之三・四を再版本では巻之一・二に、本書の巻之一・二を再版本では巻之三・四・五に改め、本書の巻之五「田舎女郎の種の巻」を全然除いたものである。人名の如きも態々入木して更へてあり、その他文中多少の相違もある。かく原本の順序を更へ、或る巻は除き、文等を取捨したなどは、新版と見せんとする書肆の手段である。江戸時代文藝資料第五所收。【由來】この作は江島屋出版書の最初のものと見られる。其績が八文字屋より獨立して、その子に書肆を營ませ、自作を出版せしめたのは、正徳元年又は二年の交である。本書はその際の出版の一つである。

【梗概】〔巻之一〕前後屋八色右衞門と云ふ遊女野郎の大元締があつて、此處へ年季を定めて抱へに來る者、毎日幾人といふ數を知らなかつた。或る時西島のくつわの親仁が來り、太夫になるべき売種を求めるが、亭主八色右衞門はすべて売種は外見よりも内證のよきを主として求めなければならないと忠告する。また宮川町近くの役者の親方が舞臺子を求めに來たのに對しても同樣のことを説く。これは第一話であるが、以下第二・三・四話共に京大阪の舞臺子の内幕生活を描寫せる短篇である。〔巻之二〕嵐喜美三郎と云ふ飛子が、大和國木津に宿つた夜、そこの亭主は目代の吟味を恐れて急の立退を求める。喜美三郎は杢平と云ふ供の者とせん方なく立ち退くが、途中、とある河原で親切な庇護をうけた非人權七の眞情にほだされて、堅き契を結ぶと云ふ第一話以下第二・三・四話、すべて近江・美濃・大和邊の飛子の内幕を描けるもの。〔巻之三〕第一話は遊里の売種に就いて語り、第二・三・四話は、島原・吉原・新町の遊女の手管を語る。〔巻之四〕京大阪の白人のすたれ者が近國の開帳市立に旅稼ぎする狀を述ぶる第一話を初め、第二・三・四話には・北國筋・安藝宮島、長崎丸山の遊女の生活振が記されてゐる。〔巻之五〕奈良木辻の遊里に京の菊川大盡と云ふ者が太鼓末社を連れて遊んでゐる。そこへ奈良の刀屋德内の手代半九と云ふ亂暴者が大盡に恥をかゝせる。それを面憎く思つた小櫻吉兵衞と云ふ末社が、半九を欺いて夜更けに元興寺の門前まで誘ひ出し、主人德内をして散々に懲らさしめる第一話を初め、第二・三・四話には、大津柴屋町・伏見撞木町・京祇園町等の遊女と遊客の生活振が描かれてゐる。

【構想】五巻をもつて一部を成し、一巻は各々四短篇を包含してゐる。而して巻之一は、「三箇津舞臺子種の巻」、巻之二は「旅行の飛子種の巻」、巻之三は「松梅鹿の位種の巻」、巻之四は「鄙の遊女種の巻」、巻之五は「田舎女郎種の巻」であつて、その標題に添ふべき短篇が、全部で二十篇含まれてゐる。即ち巻之一・二は、京・大阪・江戸三都の舞臺子及び近畿旅稼ぎの飛子のはかなき生活に現はれた眞と僞と、心意氣と内幕とが描かれてゐる。又巻之三・四・五には、三都の太夫種、また諸國の遊女達の手管と客の遊び振りなどが描かれてゐる。これを要するに「野傾旅葛籠」一篇は、西鶴以來の好色本の傳系を辿つて、男色・女色の樣々を書いたものである。【史的地位】この作品は、其績の作であることには先づ疑ひがない。これより以前の其績の傾城物としては、八文字屋板の「傾城色三味線」「野白内證鑑」「傾城禁短氣」（各別項）を擧げなければならない。「傾城玉子酒」と云ふが、寶永六年に出板されたことになつてゐて、純粹の傾城小説らしく思はれるが、或は廣告のみに終つたものかとも思はれる。而して「野傾旅葛籠」は、其績が八文字屋より獨立して最初に出板した作品と思はれる點から見て、其績生涯の作品中相當注意すべき地位にある。〔吉田〕

野傾友三味線（やけいとも しゃみせん）　浮世草子　五册

【作者】西澤與志（一風）【名稱】野は野郎、傾は傾城、野郎と傾城の兩色に關する意。【刊行】寶永五年閏正月吉日【解説】巻一は一風流の序話に當つてゐる。新八といふ女色癖の男、正月に醉うて小八といふ男色癖の男の家に到り、男女兩色に關して論をなす所に、廣口天休といふ者が來て兩人を仲直りさせ、兩色は結局車の兩輪の如しと決まる。乃ち兩人機嫌のために好色の話をなすのを、傍から筆記して全部五巻としたといふのである。そして巻二以下は毎巻四話、男女兩色各二話づつを收めてゐる。これ等の説話の特徴は多く輕い可笑味を含むことである。〔藤村〕

夜行巡査（やかうじゅんさ）　小説　【作者】泉鏡花【發表】明治二十八年四月「文藝倶樂部」。【刊行】鏡花全集巻一所收。

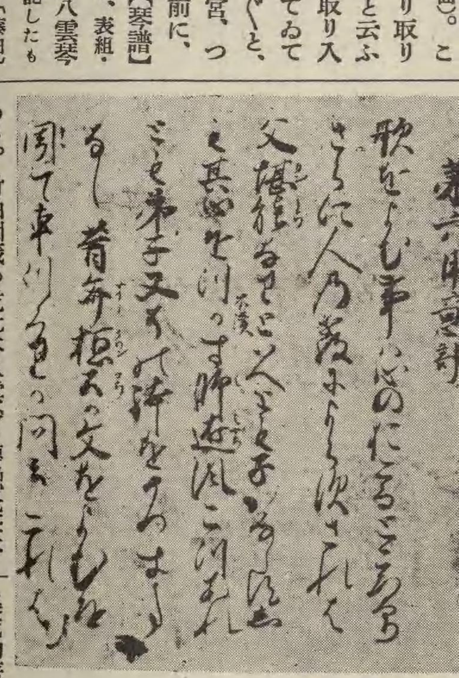
【梗概】八田巡査は、責任感と義務感の極めて強い人物で、職務の手前人情にほだされる事を潔しとしない。例へば、嚴冬の深夜巡回中老車夫の股引の破れを咎め、乳呑兒を抱く女乞食を人家の軒先から追拂ふ。たま〳〵戀仲のお香が、醉つばらつた伯父と連れ立つて來るのに會ふ。お香は兩親を失ひ、伯父の家に引取られてゐる身の上であるが、伯父は嘗てお香の母親を戀して遂げられなかつた怨みで二人の仲を飽くまでも妨げ、自分が死ぬ時にはお香を殺しても八田とは添はせぬと呪つてゐる。八田は數歩の距離でこれ等の言葉を殘らず聞いた。お香は堪へ兼ねて身投げをしようと堀端に駈け寄る。伯父は慌てて止めようとして却つて堀の中に顚落する。八田はこれを助けるため、續いて飛び込んだ。泳ぎを知らぬ彼は、職務のために人情も恨みも愛も命も犧牲にしてしまつた。

【解説】この作品は、「外科室」と共に作者の出世作である。「外科室」は醫科大學生が植物園内で高家の姫を見る。かくて九年、醫學士となり、既に病院の外科部長になつてゐたが遂に娶らず、偶々疾患を癒すべく雪の肌に刀をあてた美しい伯爵夫人は、彼が心に忘れ得ぬ植物園内の姫であつた。夫人も醫學士を想ふ心が深かつた。胸にあてられた刀に自ら手を

今樣（十二曲）、筑紫振（八曲）、若菜組（八曲）。この最後の若菜組には、三味線の組歌より取り入れたものがある。他に八雲琴二百吟と云ふ和歌集がついてゐる。【歌詞】古歌を取り入れたものがあり、新作も古雅を旨としてゐて時代色に乏しい。「きその山路をはるゝと、尾張の國に歸りつゝ、熱田の宮ゆ一の宮、つしまにまうで夜もすがら、此大宮の廣前に、八雲小琴（そこと）を掻き明す」（津島詣、琴主作）【琴譜】八雲琴獨習の友三巻（土岐達編。これには、表組・裏組・中組・奥組と分けた歌がある）○新撰八雲琴譜二册（近藤儀琴編。この兩書は、樂譜を記したものである）　〔藤田〕

八雲琴（やくもごと）　「二絃琴」を見よ。

八雲御抄（やくもみせう）　六巻　三册　【著者】



木信綱氏（藏）

【著者】順徳院（別項）【解説】歌學知識の集成としては清輔の「奥義抄」（別項）も注意すべきであるが、「八雲御抄」の第一・二巻はその「奥義抄」の集成に更に一歩を進めたものと見られよう。また第六巻の用意部は、從來の歌論を集成統一して組織的に説かれた意味で、他の如何なる歌論書にも見ない特徴をもつてゐる。創見の多い點では、定家の「毎月抄」（別項）の如きは「八雲御抄」より優れたものであらうが、集成統一の功は「八雲御抄」に及ばない。強ひて全體として「八雲御抄」の先驅となつたものを擧げれば、上覺の「和歌色葉集」（別項）であるが、その集成統一の點に於て「色葉集」よりも遙かにすぐれてゐる。　〔久松〕

譯文筌蹄（やくもんせんてい）　漢文作法書　六巻

【著者】荻生徂徠【解説】同訓異義の文字を列擧して、一々その差別・用法等を説明したもの。伊藤東涯の「操觚字訣」（別項）と共に同種の書中傑出したものである。巻首に題言十則があり、徂徠の文章についての見識を觀るに足る。【批評】山本北山の「作文率」に「譯文筌蹄は徂徠二十五六歳の時の著述の由云はるれども、巻首に載する題言十則は晩年の作に出づ。如何となればその題言の中に文辭を作ることを載せ、四家雋を編む主意を著す。これ近き證據なり。題言に云ふ所の誤は余文事正誤を著して論ぜることとなれば姑く置く云々」とある。　〔佐久〕

野傾旅葛籠（やけいたびつづら）　浮世草子　五巻

【作者】序の末尾に作者江島市笑とあるが、假の名であつて、其績と考へられる。【刊行】正徳二年初春、京都八幡町室町西入る江島屋市郎左衞門板。【諸本】寛保四年に、京都河勝より「傾城情の手枕」と題して出版せられたものは、本書の再版本である。本書の巻之三・四を再版本では巻之一・二に、本書の巻之一・二を再版本では巻之三・四・五に改め、本書の巻之五「田舎女郎の種の巻」を全然除いたものである。人名の如きも態々入木して更へてあり、その他文中多少の相違もある。かく原本の順序を更へ、或る巻は除き、文等を取捨したなどは、新版と見せんとする書肆の手段である。江戸時代文藝資料第五所收。【由來】この作は江島屋出版書の最初のものと見られる。其績が八文字屋より獨立して、その子に書肆を營ませ、自作を出版せしめたのは、正徳元年又は二年の交である。本書はその際の出版の一つである。

【梗概】〔巻之一〕前後屋八色右衞門と云ふ遊女野郎の大元締があつて、此處へ年季を定めて抱へに來る者、毎日幾人といふ數を知らなかつた。或る時西島のくつわの親仁が來り、太夫になるべき売種を求めるが、亭主八色右衞門はすべて売種は外見よりも内證のよきを主として求めなければならないと忠告する。また宮川町近くの役者の親方が舞臺子を求めに來たのに對しても同樣のことを説く。これは第一話であるが、以下第二・三・四話共に京大阪の舞臺子の内幕生活を描寫せる短篇である。〔巻之二〕嵐喜美三郎と云ふ飛子が、大和國木津に宿つた夜、そこの亭主は目代の吟味を恐れて急の立退を求める。喜美三郎は杢平と云ふ供の者とせん方なく立ち退くが、途中、とある河原で親切な庇護をうけた非人權七の眞情にほだされて、堅き契を結ぶと云ふ第一話以下第二・三・四話、すべて近江・美濃・大和邊の飛子の内幕を描けるもの。〔巻之三〕第一話は遊里の売種に就いて語り、第二・三・四話は、島原・吉原・新町の遊女の手管を語る。〔巻之四〕京大阪の白人のすたれ者が近國の開帳市立に旅稼ぎする狀を述ぶる第一話を初め、第二・三・四話には・北國筋・安藝宮島、長崎丸山の遊女の生活振が記されてゐる。〔巻之五〕奈良木辻の遊里に京の菊川大盡と云ふ者が太鼓末社を連れて遊んでゐる。そこへ奈良の刀屋德内の手代半九と云ふ亂暴者が大盡に恥をかゝせる。それを面憎く思つた小櫻吉兵衞と云ふ末社が、半九を欺いて夜更けに元興寺の門前まで誘ひ出し、主人德内をして散々に懲らさしめる第一話を初め、第二・三・四話には、大津柴屋町・伏見撞木町・京祇園町等の遊女と遊客の生活振が描かれてゐる。

【構想】五巻をもつて一部を成し、一巻は各々四短篇を包含してゐる。而して巻之一は、「三箇津舞臺子種の巻」、巻之二は「旅行の飛子種の巻」、巻之三は「松梅鹿の位種の巻」、巻之四は「鄙の遊女種の巻」、巻之五は「田舎女郎種の巻」であつて、その標題に添ふべき短篇が、全部で二十篇含まれてゐる。即ち巻之一・二は、京・大阪・江戸三都の舞臺子及び近畿旅稼ぎの飛子のはかなき生活に現はれた眞と僞と、心意氣と内幕とが描かれてゐる。又巻之三・四・五には、三都の太夫種、また諸國の遊女達の手管と客の遊び振りなどが描かれてゐる。これを要するに「野傾旅葛籠」一篇は、西鶴以來の好色本の傳系を辿つて、男色・女色の樣々を書いたものである。【史的地位】この作品は、其績の作であることには先づ疑ひがない。これより以前の其績の傾城物としては、八文字屋板の「傾城色三味線」「野白内證鑑」「傾城禁短氣」（各別項）を擧げなければならない。「傾城玉子酒」と云ふが、寶永六年に出板されたことになつてゐて、純粹の傾城小説らしく思はれるが、或は廣告のみに終つたものかとも思はれる。而して「野傾旅葛籠」は、其績が八文字屋より獨立して最初に出板した作品と思はれる點から見て、其績生涯の作品中相當注意すべき地位にある。　〔吉田〕

野傾友三味線（やけいとも しゃみせん）　浮世草子　五册

【作者】西澤與志（一風）【名稱】野は野郎、傾は傾城、野郎と傾城の兩色に關する意。【刊行】寶永五年閏正月吉日【解説】巻一は一風流の序話に當つてゐる。新八といふ女色癖の男、正月に醉うて小八といふ男色癖の男の家に到り、男女兩色に關して論をなす所に、廣口天休といふ者が來て兩人を仲直りさせ、兩色は結局車の兩輪の如しと決まる。乃ち兩人機嫌のために好色の話をなすのを、傍から筆記して全部五巻としたといふのである。そして巻二以下は毎巻四話、男女兩色各二話づつを收めてゐる。これ等の説話の特徴は多く輕い可笑味を含むことである。〔藤村〕

夜行巡査（やかうじゅんさ）　小説　【作者】泉鏡花【發表】明治二十八年四月「文藝倶樂部」。【刊行】鏡花全集巻一所收。

【梗概】八田巡査は、責任感と義務感の極めて強い人物で、職務の手前人情にほだされる事を潔しとしない。例へば、嚴冬の深夜巡回中老車夫の股引の破れを咎め、乳呑兒を抱く女乞食を人家の軒先から追拂ふ。たま〳〵戀仲のお香が、醉つばらつた伯父と連れ立つて來るのに會ふ。お香は兩親を失ひ、伯父の家に引取られてゐる身の上であるが、伯父は嘗てお香の母親を戀して遂げられなかつた怨みで二人の仲を飽くまでも妨げ、自分が死ぬ時にはお香を殺しても八田とは添はせぬと呪つてゐる。八田は數歩の距離でこれ等の言葉を殘らず聞いた。お香は堪へ兼ねて身投げをしようと堀端に駈け寄る。伯父は慌てて止めようとして却つて堀の中に顚落する。八田はこれを助けるため、續いて飛び込んだ。泳ぎを知らぬ彼は、職務のために人情も恨みも愛も命も犧牲にしてしまつた。

【解説】この作品は、「外科室」と共に作者の出世作である。「外科室」は醫科大學生が植物園内で高家の姫を見る。かくて九年、醫學士となり、既に病院の外科部長になつてゐたが遂に娶らず、偶々疾患を癒すべく雪の肌に刀をあてた美しい伯爵夫人は、彼が心に忘れ得ぬ植物園内の姫であつた。夫人も醫學士を想ふ心が深かつた。胸にあてられた刀に自ら手を

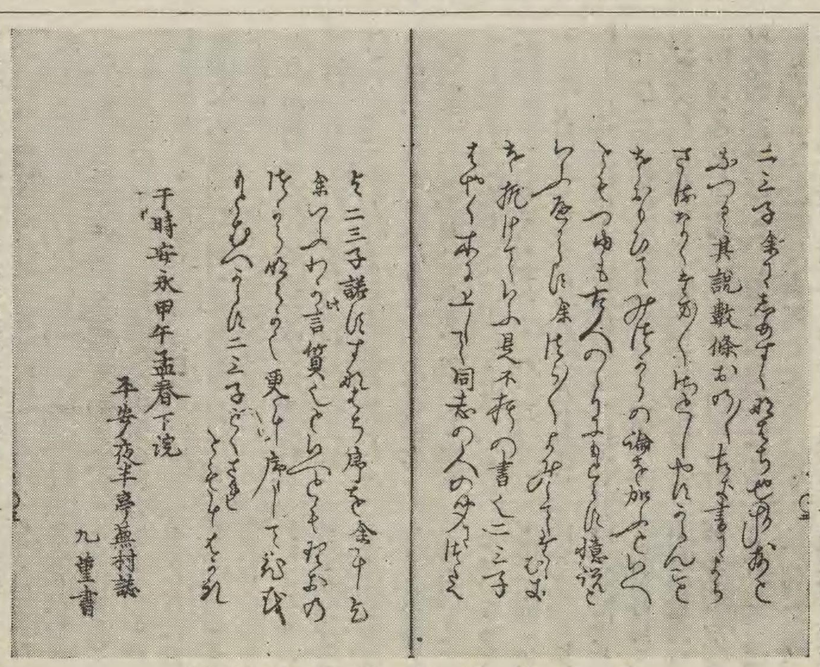
添へて乳の下深く掻き切つた。醫學士もその後を追つて自殺するといふ筋である。この戀愛至上主義の觀念や「夜行巡査」の人情と義務感の矛盾に對する抗議的な觀念を捉へ、熱情を以て世人に是非を問ふ挑戰的態度は、感傷的寫實主義時代の文壇に大なる驚異を齎し、時の評家は觀念小說（別項）の名を與へた。力強く主題を把握して、端的に人生の矛盾葛藤を描破したことは、在來の架空譚を文章の綾で讀ませてゐた小說と違つて、當時の知識階級に非常に清新な感動を與へたのであつた。又この時代の作者には、後年に見る讃美と反抗の極端な對立をなす心的活動の方向が、未だ判然とした形をとつて現はれずに、さうした一つの觀念の把握に止まつてゐることは、歷史的にこの作者を考察する時、特に注意すべき點であらう。【水上・平松】

夜航詩話（やかうしわ）　詩話　六卷　【著者】津阪東陽【成立・刊行】文化十三年の自序、天保三年の齋藤拙堂の序がある。天保七年刊。日本詩話叢書所收。【解說】我が邦人の手に成つた詩話中の最も傑出したもので、漢文で書いてある。その說くところ一ならず、典故・韻法より句法・字法に至るまで、詩學に必要なる事項は悉く網羅してある。【佐久】

夜航餘話（やかうよわ）　詩話　二卷　【著者】津阪東陽【刊行】天保七年【解說】著者の隨筆なる「蒼璘錄」「反古抄」の中から詩話に關するものを抄出し、假名交り文で書いてある。「夜航詩話」（別項）に對して餘話と名づけたのである。【佐久】

野宰相（やさいしやう）　「篁」を見よ。

也哉抄（やさいせう）　俳論　一册　【著者】上田無腸（秋成）【成立】安永三年正月　【刊行】天明七年季秋【由來】著者の說く所に依ると、當時國語學の方面で手爾波に關する研究も次第に公にせられつつあるのに、俳諧者流のみ時世に後れて新しい研究によらず、連歌者流の古い說明に囚はれてゐるのを慨いて、その蒙を啓くために稿を起したのである。蕪村及その季秋に發行したのである。【諸本】上田秋成全集・中興俳話文集（俳書大系）所收。【內容】俳諧の發句の切字即ち蕪村一派のいふ斷字（蕪村序）に關する著者の意見を要約したものである。著者の「統論」の項によると、五十音中四十餘音はすべて手爾波として言語の活用をするものであるのに、この中語意結絕の用をなすもの十八とか幾つとかを取出して特に切字と稱するのは、その目の定め方もなほ未熟のものであると斷ずるのである。かくて著者は俳諧に於ける切字を「や」及び「かな」に要約してこれが解說をなしたのである。その說明によると、從來「や」及び「かな」を切字としての働きの上から類別したのを排して意義を專らとして分類し、「や」は咏歎・願・疑を表はし、又物を指し、物を數へる辭であるとし、「かな」は疑怪・咏歎・願の辭で、疑の「か」が本義であるとし、各々意義を異にする「や」及び「かな」、又「か」を文例を以て解義し、古今の作句を擧げて俳諧上の用例を示したのである。なほ本書には續編近刻が豫告されてゐるが、實際には刊行されなかつたらしい。【批評】切字（別項）は連歌俳諧に於て重要な役目を持つのであるから、連歌以來注意され、十八の切字その他、種々の彙類說明が試みられ、連歌俳諧の式目書類には大抵記されてゐるのである。併し國語學がなほ十分開拓されなかつた爲めに、その說明が非學的たるを免れなかつたのであるが、江戸時代の中期に至つては、國語學的研究も餘程進み、又國語學者で俳諧の手爾波に注意を向ける人も起つて來た。かうした機運に乘じて書かれたのが本書である。本書の說も今日の發達した國語學の眼から見れば、首肯し難い點も勿論あるけれども、著者が學者としても識見を持つ人であつただけに、當時としては切字に對して本書ほど創見的な說の見られるものは他になかつたのである。【各務】



也哉抄　序文（松宇文庫藏）

矢崎嵯峨の屋（やざきさがのや）　小說家　【本名】鎭四郎　【別號】北邙散人・嵯峨の屋御室（おむろ）　【閱歷】文久三年一月十三日、江戸日本橋箱崎新堀の久世家邸內に生れた。父は下總關宿（せきやど）の城主久世大和守の家臣で、慶應四年上野の戰爭に際して卒字隊に加盟し、官軍に抗した廉によつて藩に囚はれ、後、許されたが、ために家運漸く逼迫し、彼は幼少より諸所に丁稚奉公をなすなど、具さに辛酸を嘗めた。明治九年、舊外國語學校露語科の給費生として入學、次第に文學書に親しむに至り、殊に馬琴・三馬及びツルゲーネフに傾倒し、密かに小說家たらんことを志すに至つた。同十四年春、新に入學した長谷川辰之助（二葉亭四迷）と相知る。同十六年七月、外國語學校卒業、十月、統計院に勤めた。同十八年、統計院廢止のため休職となるや、一時その歸趨に迷ひ、經濟學者たらんとしたが、二葉亭四迷の勸めに從つて再び小說に志し、十九年夏、坪內逍遙を訪ひ、一時その宅に寄寓した。その號嵯峨の屋おむろは、春の舍おぼろに擬したもので、逍遙の與へるところである。その年十一月、逍遙の

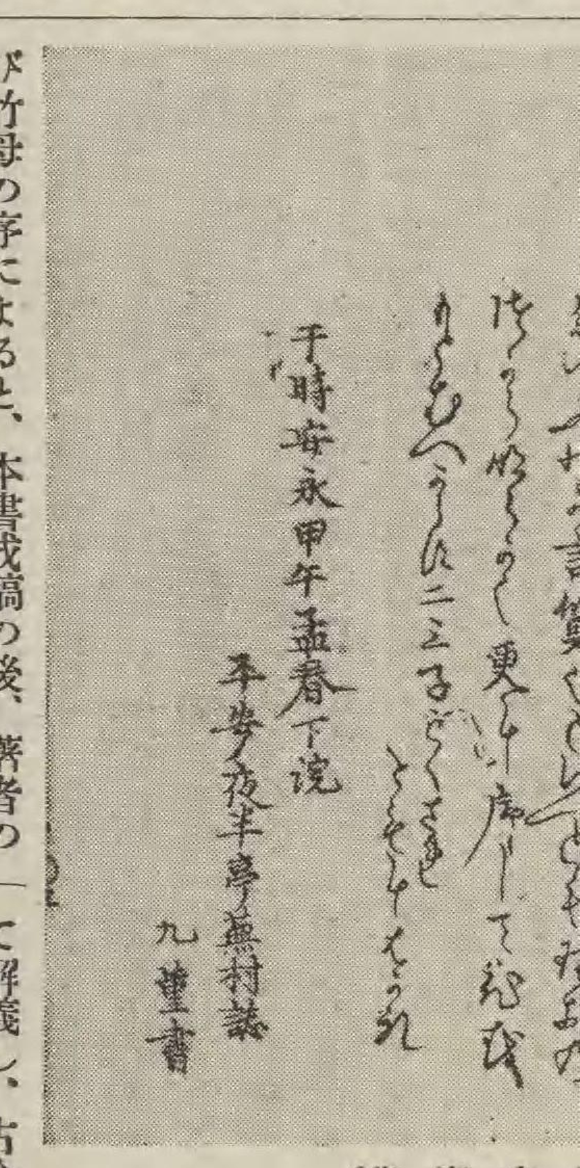
保三年の齋藤拙堂の序がある。天保七年刊。日本詩話叢書所收。【解説】我が邦人の手に成つた詩話中の最も傑出したもので、漢文で書いてある。その説くところ一ならず、典故・韻法より句法・字法に至るまで、詩學に必要なる事項は悉く網羅してある。〔佐久〕

夜航餘話 やかうよわ 詩話 二卷【著者】津阪東陽【刊行】天保七年【解説】著者の隨筆なる「蒼璘錄」「反古抄」の中から詩話に關するものを抄出し、假名交り文で書いてある。「夜航詩話」(別項)に對して餘話と名づけたのである。〔佐久〕

野宰相 やさいしやう 「篁」を見よ。

也哉抄 やさいせう 俳論 一册【著者】上田無腸(秋成)【成立】安永三年正月【刊行】天

び竹母の序によると、本書成稿の後、著者の門生二三子が蕪村にこれを示したので、蕪村はこれを推稱して梓行を勸め、安永三年正月下浣に序を記し、同年季春に刻が成つた。然るに著者はこれが發行を許さないので、空しく十數年を經、天明七年秋漸く著者の許諾を得、竹母が序を書き、蕪村の序と併せ載せて



(…文庫藏)

して意義を專らとして分類し、「や」は咏歎・願・疑を表はし、又物を指し、物を數へる辭であるとし、「かた」は疑怪・咏歎・願の辭で、疑の「か」が本義であるとし、各々意義を異にする「や」及び「かな」、又「か」を文例を以て解義し、古今の作句を擧げて俳諧上の用例を示したのである。なほ本書には續編近刻が豫告されてゐるが、實際には刊行されなかつたらしい。【批評】切字(別項)は連歌俳諧に於て重要な役目を持つのであるから、連歌以來注意され、十八の切字その他、種々の彙類説明が試みられ、連歌俳諧の式目書類には大抵記

家運漸く逼迫し、彼は幼少より諸所に丁稚奉公をなすなど、具さに辛酸を嘗めた。明治九年、舊外國語學校露語科の給費生として入學、次第に文學書に親しむに至り、殊に馬琴・三馬及びツルゲーネフに傾倒し、密かに小説家たらんことを志すに至つた。同十四年春、新に入學した長谷川辰之助(二葉亭四迷)と相知る。同十六年七月、外國語學校卒業、十月、統計院に勤めた。同十八年、統計院廢止のため休職となるや、一時その歸趨に迷ひ、經濟學者たらんとしたが、二葉亭四迷の勸めに從つて再び小説に志し、十九年夏、坪內逍遙を訪ひ、一時その宅に寄寓した。その號嵯峨の屋おむろは、春の舍おぼろに擬したもので、逍遙の與へるところである。その年十一月、逍遙の

推薦によつて處女作「守錢奴の肚」を發表し、二十年一月出版、十月「ひとよ切」を金港堂より出版、同時に逍遙のもとを辭し、神田の自宅に歸つた。二十一年四月、「無味氣」を上梓、十二月「薄命の鈴子」を「大和錦」に發表、翌二十二年一月、客員として金港堂に入社し、同時に出世作「初戀」(別項)を「都の花」に發表した。つづいて「くされたまご」「野末の菊」などの佳作を書き、且つ北邙散人の別號で、「國民之友」(八月號)に「流轉」を發表して好評を得た。この年十二月、「聟えらび」を發表、同時に金港堂を辭し、國民新聞社員となつた。同二十四年一月、「夢幻境」(別項)を發表して好評を博し、つづいて「空蟬」「姉の弟」「坂東武者」「翁の昔語」「朧夜の夢」「花に嵐」等を發表し、十月第一創作集「千草」を金港堂より上梓した。この年一時朝日新聞社に移つたこともある。かくて作家としての地位も定まり、その後年々數篇を發表したが、特記すべきものはない。同二十九年四月、某商會の漁業調査の通譯としてロシヤに赴き九月歸る。十月第二創作集「文庫」を刊行、十二月國民新聞社を辭し、純然たる作家生活に入つた。その後も「新小説」「文藝倶樂部」「太陽」などに小説を掲げた。三十二年、内村鑑三の書に刺戟されて熱烈なるキリスト敎信者となり、年來の佛敎的厭世思想を捨てた。三十七年一月夫人を迎へ、日露開戰と共に大本營幕僚事務取扱となつた。三十九年陸軍士官學校ロシヤ語敎官となる。この間なほ若干の小説を發表してゐたが、四十三年三月の「妻の親切」(新小説)を最後として創作の筆を絶つた。大正十二年九月、陸軍士官學校敎官を辭めて後は、東京代々木に十邑堂書店を經營して今日に及んでゐる。【著作】「千草」「文庫」の二創作集の外に、現代日本文學全集・明治大正文學全集に、若干の作品が收められてゐる。

矢崎嵯峨の屋

【批評】明治二十三年から五年へかけて發表した作品が、一番純粹で、彼の作風のよき方面を代表してゐる。それ等は一般にツルゲーネフの影響の少くないものである。なほ早く詩の方面にも手を染め、「文庫」「國民之友」等に作品を公けにした。「夢幻境」の如きも、小説といふよりは、散文詩乃至物語詩とも稱すべきものであつた。しかしその詩情には特色が少く、ただ口語使用に努めたことが注意される。〔高須〕

八島 やしま 幸若舞曲(三十六番の一)二卷【作者】不詳【別名】「八島にこう物語」(讀物の草子としての明暦板本の內題)「繼信忠信記」。【成立】室町期【諸本】古板本は寛永十二年板(十一行本)、明暦四年板(松會開板)。「近古小説解題」に「八島にこう物語」として別書の如く掲出してあるのがこの松會板で、本書と同一物。又題簽を「新板繪入やしま合戰」とした大阪新町橋東詰藤屋伊兵衞開板本。新群書類從第八舞曲部所收。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五に載せてある。「繼信忠信記」と題する古寫繪卷としても行はれた。【題材】判官物(義經傳説)。「義經記」(卷八)、謠曲「攝待」と同材。磐城國刈田郡高福寺甲冑堂の由來(「東遊記」「倭漢三才圖會」等所見)を素材とし、嗣信戰死の事は、「吾妻鏡」(卷四)、「源平盛衰記」(卷四十二)にも見える。辨慶の語る八島合戰の內容は、謠曲「八島」「熊手判官」などとも通ずる。この曲に於て老尼が獻じた形見の二領の鎧は、「高館」(別項)で鈴木重家と辨慶とに賜はる事に作られてゐる。

【梗概】奧州落の山伏姿の義經主從は、途に故佐藤莊司の妻の尼が館に宿を請うた。尼がその素性を察し、我が子嗣信・忠信の事を偲び、莊司が臨終の病褥に、二人の嫁がそれ等の鎧を着けて慰めたことなど言ひ出して哀しむので、辨慶は他人事にして嗣信の最期や義經が名馬大夫黑を與へたこと、また忠信も吉野で身替りに立つたことなどを語り、遂に判官も實を明かして名乘つた。老尼は感泣して嫁女達が着た小櫻縅と卯花縅の二領を義經に獻つた。尼からの使を得た秀衡は、その子國衡・泰衡等を以て急ぎ迎へ、平泉に柳御所を營んで据ゑ册いた。

【影響】本曲によつたと思はれるものに、奧淨瑠璃「尼公物語」、宇治加賀掾正本古淨瑠璃「津戸三郎」、近松の「門出八島」「凱陣八島」(各別項)、八文字屋本「義經風流鑑」(別項)五の卷、「風流東海硯」五の卷、新歌舞伎十八番の「山伏攝待」(默阿彌作)が等ある。「攝待」から出た謠曲「鶴若」も間接の聯繫はある。〔島津〕

八島 やしま 「勝修羅物の謠曲」を見よ。

八島にこう物語 やしまにこうものがたり 「八島」を見よ。

野獸派 やじうは 「後期印象派」を見よ。

野相公 やしやうこう 「篁」を見よ。

彌次郎口 やじろうぐち 噺本 一册【作者】十返舍一九【畫工】自畫。再版本は靜齋英一。【名稱】序に依れば「道中膝栗毛」(別項)の彌次郎兵衞の口吻を寫したとあるが、一面に於て三笑亭可樂の「東都眞衞」(一名江戸自慢)(文化元年)に、「うそつき彌次郎」の名稱があるに思ひ寄せたと思はれる。現代の落語に同題のものが存する。落咄と角書がある。【刊行】文化十三年。刊年不明の再版本がある。【諸本】近世文藝叢書第六笑話・一九全集(帝國文庫)所收。

【解説】十二の小咄より成る。「鯨」は當時の人氣役者尾上松緑に取材したもの、「曾我狂言」は言ふまでもなく、狂言「曾我の對面」に取材したもの、「法華宗」は水死人をさがすのに板に鷄をのせて流すと、死骸のある所で啼くと云ふ國民信仰に取材したものである。自序に「おもひつきなる新作ばかり仕入れして」とある如く、一九作の噺本は多いが、半分は剽竊で暢氣な彼の性格を現はしてゐるに拘らず、本篇は彼の新作らしい。併し餘り巧妙な作も見出せない。滑稽本に見えるやうな輕い飄逸味も乏しい。ただ何でも手を出す彼の小器用さを思はせるだけである。〔山崎〕

康資王母集 「伯母集」を見よ。

康資王母 「伯母集」を見よ。

安田蛙文 やすだあぶん 淨瑠璃作者・脚本作者【本名】未詳【生歿】未詳【閲歷】もとは有馬玄蕃頭の侍であつたと傳へ、その抱への色子なりともいはれる。主家を去つてから大阪島の內六軒町に住し、和學の嗜みある所から、享保年中、西澤一風を頼つて豐竹座の淨瑠璃作者となつた。享保十一年二月、豐竹座興行の「曾我錦几帳」に自作を發表したが、次の「北條時賴記」(別項)で、特に一風の後援によつて、一風・宗輔の下に執筆してから、享保十七年まで、常に宗輔と合作を續け、作者としての修行を積んだ。同十八年四月、單獨に「鎌倉比事青砥錢」(青砥左衞門尉時顯)を書いて淨瑠璃の

筆を絶つたので、單獨作としては前の「曾我錦几帳」と二回しか發表してゐない。宗輔の影響をうけて時代の世界を得意としたやうであるが、その二作は何れも脚色散漫であつた。彼は一般には淨瑠璃作者として名があるが、作者としての才は、寧ろ歌舞伎脚本の方に見出されるかと思ふ。享保の後は歌舞伎芝居に轉じて元文年中から延享の頃まで活躍した。安田蛙桂は彼の門下である。延享の頃、主として並木丈輔の下に豐竹座のために執筆した。【作品】〔淨瑠璃〕前記二作の外は並木宗輔の條參照。〔脚本〕傾城今様道成寺（合作者、中田萬助・並木永輔。元文五年十二月大阪大西芝居。瀨川菊之丞江戸みやげの道成寺）○八的勢曾我（合作者、中田萬助。寛保元年十二月、同座。市川海老藏の五郎十郎）○雷神不動北山櫻（合作者、中田萬助。寛保二年正月、同座。市川海老藏初演の鳴神。七月まで續いた作。今日歌舞伎十八番となる毛拔・鳴神・不動等の原據をなす）○星合榮景淸（合作者、同上。同年七月同座。海老藏の七ツ面）○雙娘山崎通（延享二年十二月、角の芝居。淀川仇討）。その他名作が少くない。但し合作者中田萬助の存在をも注目せねばならぬ。

【參考】戯財錄 並木五瓶○増補淨瑠璃大系圖 竹本長門太夫○攝陽奇觀卷之五 濱松歌國○歌舞伎圖說 守隨・秋葉　〔守隨〕

安崇 やすたか　神道家【姓名】伴部氏。通稱武右衞門【號】止安齋・八重垣翁【生歿】寛文七年に生れ、元文五年（二四〇〇）七月十四日歿す。享年七十四【閱歷】安崇は幕府旗下の士で、武藏國品川に生れた。深く垂加神道（別項）を好み、跡部光海と交り、これを研究したが、正親町公通の江戸下向に際し、就いて垂加神道の奥祕を究め、帷を下して子弟を教授した。【著書】日知の說○神代卷神社考○病後手習○神道野中の淸水○神道初傳口授等。【學說】安崇は「神道は修レ己治レ人の大道に侍る」と云ひ、その神道の修行は祓を行ふにありとし、「神道にての修行と云は、祓の事なり」と云ひ、祓を殊に重大に考へ、「いかほど神書に目をさらし、明暮歌道をすきたりとも、祓を修行し、正直を守らぬ人は、神慮に叶ふまじ」と說いてゐる。かくて進んで神道の大義を說き、「神道の大義の守りと云ふは君臣の道に在るなり」（以上病後手習）と云つてゐる。安崇・正英等に至つて垂加派の尊王論は、益々發展せるものと云ふべきである。〔田中（義）〕

保孝 やすたか　國學者・漢學者【姓名】岡本氏。本姓若林。通稱は縫殿助、後勘右衞門。【號】況齋（ましての屋とも訓む）・歲計草堂・拙誠堂・戒得居士【生歿】寛政九年に生れ、明治十一年四月五日、東京小石川柳町の居に歿す。享年八十二【墓所】東京市淺草區北松山町東國寺【閱歷】旗本若林某の二男に生れ、岡本氏を嗣いだ。岡本家も幕臣で、小普請支配の列にあり、俸米二百俵を賜はつてゐた。家は本鄉壹岐殿坂にあつた。衣食の費を節減し、數千金の宿債を返濟しつつ、貧苦の裡に在つて國學を淸水濱臣に、漢學を狩谷棭齋に學び、學問大に進んだ。明治維新の後、大學の中博士となり、その後編輯寮にあつて語彙編輯に從事した。門弟に木村正辭がある。【人物】況齋の篤學は殆ど天性であつた。矮屋のうち座敷とも居間ともつかぬ所に本箱を積み列べ、その中に粗末な素木の机を据ゑ、廡小紋の上下の破れ古びた下ばかりをはき、煙草入には猪口箱を用ひ、叩きつぶした眞鍮の煙管で煙草を吸ひながら書に對した。藏書を貸すのは好まなかつたが、來つて見んことを乞ふ者には喜んで示した。人より物を問はるゝ時は、及ぶ限り尋ね考へ、それ等を寫し留めて他日考證の用に供へ、これを名づけて諭擬符といつた。【著書】靜嘉堂文庫に「岡本況齋雜著」自筆本、その他二百二十六册を所藏する。帝國圖書館にも「況齋叢書」寫本百六十種八十册を藏し、その一部分は靜嘉堂文庫の雜著と重複してゐる。そのうち國文學關係のものを擧げる。○濱松中納言物語系譜○とりかへばや物語年立系譜○秋乃夜長物語釋文○大鏡系譜○増鏡考○鴨長明發心集攷○平家物語考附補遺○榮華物語抄附錄○後拾遺金葉詞花千載存疑（以上自筆、靜嘉堂文庫）○今昔物語出典攷○十訓抄典故攷○七部集打聞○枕草紙存疑○古事談攷證等がある。その著の刊行されてゐるものには、僅かに隨筆の「況齋雜話」（別項）（百家隨筆第二所收）と「難波江」（別項）（百家說林續編一下所收）とがあるくらゐに過ぎぬ。〔以上森〕

國語に關する著書は二十餘種あるが、過半は他人の著を補正したものである。が、保孝は頗る篤學な人であつて、その補正は注目すべきものが多い。○撥韻假字攷存疑（別名「男信存疑」）一卷（弘化二年十二月成る。「男信（なましな）」參照）○詞の玉緒攷一卷（明治三年六月成る）○詞八衢補正三卷○古言梯補遺一卷○靈語通砭鍼（へんしん）一卷（明治六年十二月成る。上田秋成の「靈語通」の數條を辯駁したものである）○用の假字（もちふ）一卷（岩崎美隆の「もちふ」といふ詞の用格に「用」は和行一段の活とし、これを批評した黑川春村の「用字活用攷」にも和行一段としてゐる。保孝はこの內說を批評して波行下二段であるとした）○三種攷一卷（音便と發語と濁語とに就いての研究）○五種加良一卷（「から」と云ふ語に、1、機關の意（からうす等）。2、乾の意（からけさ等）。3、韓・唐の意（からあゐ等）。4、一種異るもの（からかみ等）。5、美稱（からひつ等）の五種の別があると記してゐる）○語例一卷（語の上下に添へる言葉、「青侍」の「青」、「はるかに」の「かに」等の例を蒐集して出據を記したもの）○博士讀攷證一卷（「いはく」「あに」「あへて」等漢文の訓に用ひる語百六十餘について研究したもの）○言靈十九卷（國語の辭書で五十音順に語を擧げてゐる。但し未完成）。この他「轉音考存疑」一卷○倭字考一卷○和語省約例五卷○字音假字用格存疑一卷○磨光韻鏡考一卷○假字用法一卷○和名抄聲韻二卷等がある。〔以上龜田〕

【參考】況齋年譜（帝國圖書館・靜嘉堂文庫）○岡本保孝著述目錄（帝國圖書館藏）○況齋出典（帝國圖書館藏況齋隨筆の內）○岡本保孝翁略傳 岡田正美（帝國文學二ノ八）○相識人物志 岡本保孝（日本藝林叢書第五卷）

保胤 やすたね　漢學者【姓名】本姓は賀茂、後に慶滋（よししげ）と改めた。字は茂能。唐名を定潭と稱した。後年は內記入道とも呼ばれた（二中歷）。【法號】寂心【生歿】生年は明かでない。長德三年（一六五七）歿す（續本朝往生傳）。享年は、「池亭記」の文に據り、生年を承平四五年とすれば、六十四或は六十三である。【學統】菅原文時に師事した（續本朝往生傳）。文時は道眞の孫である。【閱歷】閱歷は詳かでないが、大內記に任ぜられ、近江掾を兼ねてゐた。寛和二年四月二十二日（五十二、又は三）に出家した時も僅に大內記從五位下であつた。出家の後は四方遊歷して修業し、東山の如意輪寺に歿した。文筆に秀で一世に師表と仰がれたが、早くより淨土欣求の志があり、終に出家したのである。又保胤は具平親王の詩文の師であつた。「十訓抄」「今鏡」「古今著聞集」等には文人

同年七月同座。海老藏の七ツ面)○雙娘山崎通(延享二年十二月、角の芝居。淀川仇討)。その他名作が少くない。但し合作者中田萬助の存在をも注目せねばならぬ。
【參考】戯財錄 並木五瓶○增補淨瑠璃大系圖 竹本長門太夫○攝陽奇觀卷之五 濱松歌國○歌舞伎圖說 守隨・秋葉　〔守隨〕

安崇(やすたか) 神道家 【姓名】伴部氏。通稱武右衞門【號】止安齋・八重垣翁【生歿】寛文七年に生れ、元文五年(二四〇〇)七月十四日歿す。享年七十四【閲歷】安崇は幕府旗下の士で、武藏國品川に生れた。深く垂加神道(別項)を好み、跡部光海と交り、これを研究したが、正親町公通の江戸下向に際し、就いて垂加神道の奧祕を究め、帷を下して子弟を教授した。

國寺【閲歷】旗本若林某の二男に生れ、岡本氏を嗣いだ。岡本家も幕臣で、小普請支配の列にあり、俸米二百俵を賜はつてゐた。家は本鄕壹岐殿坂にあつた。衣食の費を節減し、數千金の宿債を返濟しつつ、貧苦の裡に在つて國學を清水濱臣に、漢學を狩谷棭齋に學び、學問大に進んだ。明治維新の後、大學の中博士となり、その後編輯寮にあつて語彙編輯に從事した。門弟に木村正辭がある。【人物】況齋の篤學は殆ど天性であつた。矮屋のうち座敷とも居間ともつかぬ所に本箱を積み列べ、その中に粗末な素木の机を据ゑ、麻小紋の上下の破れ古びた下ばかりをはき、煙草入には猪口箱を用ひ、叩きつぶした眞鍮の煙管で煙草を吸ひながら書に對した。藏書を貸すのは

國語に關する著書は二十餘種あるが、過半は他人の著を補正したものである。が、保孝は頗る篤學な人であつて、その補正は注目すべきものが多い。○撥韻假字攷存疑(別名「男信(なましな)存疑」)一卷(弘化二年十二月成る。「男信」參照)○詞の玉緒攷一卷(明治三年六月成る)○詞八衢補正三卷○古言梯補遺一卷○靈語通砭鍼(へんしん)一卷(明治六年十二月成る。上田秋成の「靈語通」の數條を辯駁したものである)○用の假字一卷(岩崎美隆の「もちふ」といふ詞の用格に「用」は和行一段の活とし、これを批評した黒川春村の「用字活用攷」にも和行一段としてゐる。保孝はこの內說を批評して波行下二段であるとした)○三種攷一卷(音便と發語と濁語とに就いての研究)○五種加良一卷(「から」と云ふ語に、1、機關の意(からうす等)。2、乾の意(か

した。後年は內記入道とも呼ばれた(二中歷)。【法號】寂心【生歿】生年は明かでない。長德三年(一六五七)歿す(續本朝往生傳)。享年は、「池亭記」の文に據り、生年を承平四五年とすれば、六十四或は六十三である。【學統】菅原文時に師事した(續本朝往生傳)。文時は道眞の孫である。【閲歷】閲歷は詳かでないが、大內記に任ぜられ、近江掾を兼ねてゐた。寛和二年四月二十二日(五十二、又は三)に出家した時も僅に大內記從五位下であつた。出家の後は四方遊歷して修業し、東山の如意輪寺に歿した。文筆に秀で一世に師表と仰がれたが、早くより淨土欣求の志があり、終に出家したのである。又保胤は具平親王の詩文の師であつた。「十訓抄」「今鏡」「古今著聞集」等には文人

としての彼の逸話が傳へられてゐる。【著作】日本往生極樂記(往生傳參照)○池亭記(別項)○慶保胤集二卷(本朝書籍目錄詩家に、この名が見えるけれども現存しない)。

吉備麿—小黒麿—比賓
　　　　　　　—諸雄—人麿—江人—忠行—保憲—光榮
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—保胤
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—保章—爲政
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　—保遠

【人物】詩人であり信心家であつた。「日本往生極樂記」の序文に「少年の日から彌陀佛を念じ、四十歲以降その志が愈々盛んになつて、口には名號を唱へ、心には相好を觀じて行住坐臥暫くも忘れない」由を記してゐる。又或る時、横川に往つて增賀上人の止觀の講說を聞いて感激して泣いた。增賀は怒つて拳で打つたが更に請うて聞いた。かくすること三回に及んで、增賀もその誠心に感じたといふ話が傳へられてゐる(今鏡第九)。これ等は保胤の性情を知るに足るものであらう。
【參考】本朝文粹○朝野群載○善秀才宅詩合○類題古詩○作文大體○和漢朗詠集○新撰朗詠集江談抄(卷四・五)○拾遺集○續本朝往生傳○今昔物語(卷十九第三話)○今鏡(第九)○古今著聞集(卷四)○本朝麗藻(下)　〔山岸〕

保名(やすな) 所作事 變化物 【本名題】「怪談の俳優に七變化の容姿を略して深山櫻及兼樹振(みやまのはなとどかぬえだぶり)」【別名】保名狂亂【初演】文政元年三月七日初日、江戸都座「曾我梅菊念力弦」第二番目大切【作詞】篠田金治【曲節】清元節【太夫】初代清元延壽太夫【作曲】清澤萬吉(初代清元齋兵衞)【振附】藤間大助(二代勘十郎)【諸本】清元節正本。徳川文藝類聚(俗曲上卷)・清元全集(日本音曲全集)・日本歌謠集成卷十一・歌謠音曲集(日本名著全集)所收。【題材】義太夫の「蘆屋道滿大內鑑」(別項)の第二段「小袖物狂」の一齣を改作して獨立舞踊化したもの。【傳來】曲・振ともに傳存。【內容】安倍保名(三代尾上菊五郎)は、菜種花咲く春の野邊を、その戀人榊の前があへない最期を遂げたので、悲嘆のあまりに心が亂れ、今は形見となつた小袖を搔き抱きながら狂ひ歩く。小袖を裲襠にして廓の振から、死んだ戀人を慕ふ振、二上りで輕快な踊があつて、また小袖を抱いて伏し沈む。【價値】詞章は清元節中の佳作であるが、殊にその節附と振が巧妙な上、而も內容が簡明で短いところから、今も盛んに行はれてゐる名曲の一である。また初演當時、頗る好評を博し、世に清元節の出世淨瑠璃と稱へられてゐる。尾上菊五郎怪談物の四季七變化所作事のうち、春の部の一。　〔秋葉〕
【參考】清元研究 忍頂寺務

保名(四代中村歌右衞門所演)

恭仲(やすなか) 儒者 【姓】鳥海(とりのみ)【號】松亭【生歿】安永元年生れ、文政二年(二四七九)四月十八日歿す。享年四十八。【閲歷】恭仲は出羽の人であるが、江戸に出て勉學し、江戸で一生を終つた。その專門は漢學であるが、國語にも通じ、又所謂物產の學に造詣深く、書畫にも堪能であつた。恭仲は頗る時間を惜み、交際を謝絶して專ら學問に努めたが、病を得て未だ知命に至らずして歿した。【著書】音韻啓蒙一卷(文化十二年四月、龜田鵬齋の序あり。翌十三年夏刊行。國語の音韻について記したもので、五十音排列の事、未成普通のハヒフヘホ、成音のハヒフヘホ、半濁音のハヒフヘホ、淸音のパピプペポ、濁音のバビブベボ、拗音のファフィフゥフェホォ、音韻妙用の事、音韻の理は知らずはあるべからざる事等の十七項に分けて記してゐる。波行音に關する詳細な研究は注意すべきものである)○松亭小言(刊)。　〔龜田〕

康秀(やすひで) (六歌仙の一・中古三十六歌仙の一)【姓】文屋(ぶんや)。「古本古今集」には文室とある。【字】文琳(古今集眞名序)【家系】天武天皇の皇子長親王の裔、朝康はその子。【閲歷】貞觀二年、刑部中判事に任じ、元慶元年山城大掾、同三年縫殿介に任じた(古今集目錄)。「古今集」卷十八に、「文屋康秀が參河の掾になりて、縣見にはえいでたゝじやといひやれりける」とあつて、小野小町との贈答歌のあるのは、元慶元年以前であらう。「後撰集」卷十七には、「時にあはずして身を恨みてこもり侍りける時」とあり、「古今集」卷十六には、仁明天皇の御國忌(仁壽元年)によんだ歌がある。「古今集」卷一・卷十に「二條后の東宮御息所と聞えけるとき云々」とあるのは、貞觀十一年より、元慶元年までの間となる。「古今集」卷五に惟貞親王の家の歌合の歌がある。　〔西下〕
【參考】古今集目錄

安萬侶(やすまろ) 「古事記」を見よ。

陽春盧雜考(やすむろざつかう) 八卷八册(又一册)
【著者】小中村清矩【刊行】明治三十年【內容】明治年間の國學大家小中村清矩翁が、その後半生に、世間に發表された國史・律令・法制・財政・神道・言語・文學・風俗・習慣等に關する考證類を彙纂して一部としたもので、翁の學殖の豐かに識見の高きを見るに足る。制度故實に就いて殊に研究の精到にして人を敎ふるもの多きを覺ゆる。明治三十年小中村義象の序があり、又卷首に著者の「兒孫に遺す辭」一篇があつて、末に「明治二十六年一月のはじめに筆とりて、七十二の叟小中村清矩しるす」とある。この篇は翁が志學の初めより成業の後諸官に歷任し、帝國學士院會員、貴族院議員に擧げられた光榮などを述べて、一部の自傳に擬したものである。文中、東京學士會院・皇典講究所等の講演に係るものが多い。內容次の如くである。
〔卷一〕建國の聖詔・神國の稱・女帝論・武烈天皇崩年の聖算・安德天皇其他の舊跡・水天宮考・天皇を皇帝とも稱し奉るべき事・聖德皇太子・太極殿・朝賀圖說・御子代御名代考・紋所幷に國旗の日章考・拜禮考等の十三篇。〔卷二〕本朝法律起原沿革・古代法律と現行法律・法律史考究書目・國史法家書目錄・警察の沿革・妾を二等親とする說・武家の法制附庄園所領守護地頭起原概略。〔卷三〕官職の沿革古來政府考・國司郡司の始末・尾張國解文略說・租庸調略說・本朝度量衡略・上世の物價・古代錢幣出擧利子考。〔卷四〕位階の說・年官年爵幷成功重任考・中古以來世職世業・公家大名稱考・賜爵の盛典によりて思へること・名字を貴重すべき說・姓名沿革の概略・姓名通考・押字私印の沿革。〔卷五〕大寶令の中古來の習慣によりて製作せし所々・古代の風俗幷に歲時・門松幷節分の撒豆・三元幷觀燈踏歌・歌垣踏歌・曲水考・祓禊沿革・陰陽遣考・うらかた卜筮・中古病人を棄る弊風幷施藥院悲田院。〔卷

六〕神道・古代宗敎論・日本文學の起原・文章博士紀傳博士考。〔卷七〕文章論・上代の文章・歌道の沿革・唱歌拙識・古代の小説・古代の小歌幷後世の俚歌・敎と學との訓義・けしからぬけしかるのこと・俗歌の根據・謠曲の説・猿樂考・歌舞伎ばなし。〔卷八〕古典講習科開業演説槩・國學の前途・國文國語の説・殘る菊の香・閨の梅が香・學規私言・足利學校の古書・我國の古書を學習する説・日本紀を讀むには心すべき事・我國の辭書・有職故實の學。〔和田〕

安世（やすよ）　漢學者【姓】良岑朝臣（良岑は山城國乙訓郡の地名を取つてゐる）【生歿】延暦十四年に生れ、天長七年（一四九〇）七月六日薨ず。

- 桓武帝
  - 平城帝─阿保親王
    - 大江音人
    - 在原行平
    - 在原業平
  - 嵯峨帝
  - 淳和帝
  - 萬多親王
  - 伊豆内親王
  - 良岑安世
    - 宗貞─素性
    - 晨直─衆樹

享年四十六。【閲歴】桓武天皇の皇子、御母は女孀百濟宿禰永繼。冬嗣と同母弟である。延暦二十一年（十八歳）十二月二十七日、特に良岑朝臣の姓を賜ひ右京に貫す。大同四年（二十五歳）六月八日從五位下、同十二日右近權少將、次いで少將に轉じ、又雅樂頭となる。弘仁元年（二十六歳）正月丹後介を兼ね、八月權右中辨、九月但馬介を兼ぬ。同二年二月二十七日藏人頭、六月從五位上、翌年五月正五位下兼左衞門權佐、同五年正月從四位下、右馬頭、二月左馬頭に遷る。五月左兵衞督となる。同六年七月左京大夫、翌年正月右大辨兼美作守となる。左兵衞督は元の如し。十月左衞門督、十一月近江守に遷る。同九年「新修鷹經」を撰む。同十年勅を奉じて冬嗣・緒嗣等と「日本後紀」を監修した。同十一年二月從四位上、次いで正四位下となり、左大辨に轉じた。同十二年正月從三位、中納言となる。又冬嗣・三守等と「内裏式」を撰して奉る。二月按察使を兼ねた。同十三年三月更に東宮大夫を兼ね、翌十四年（三十九歳）四月正三位、五月右近衞大將となる。天長三年七月冬嗣が薨じたので、安世は異父兄の故に病と稱して參朝せず、淳和帝は屢々使を遣して漸く起たしめられた。翌四年五月、「經國集」の撰成る。同五年三月大納言となり、同七年七月六日薨去。翌七日贈正二位。嵯峨帝の挽歌が二首ある。【業績】幼時より鷹犬を好み、騎射を能くし、諸技藝に通じた。やゝ長じて「孝經」を讀み、感ずる所あつて志を學問に潛めた。書に妙を得、又音樂を解したので雅樂頭に任ぜられた。また詩文に長ぜられた嵯峨・淳和二帝の御連枝であつた關係から、詩に長じてゐたことは勿論であるが、又政治にも武技にも行くとして可ならざるはなかつた。從つて政治以外に國史・詩集等の撰修にも、大なる功績を殘してゐる。陸奧の按察使としての邊陬鎭撫の功も沒することが出來ない。要するに安世は文武の偉才であつた。

【參考】凌雲集○文華秀麗集○經國集〔山岸〕

夜須禮歌（やすらひうた）　歌謠【名義・名稱】ヤスラヒは安らふと云ふ語から出た言葉で、平安を祈る意、夜須禮祭の際に歌はれる歌謠であるからかく稱する。【夜須禮祭】京都紫野の今宮神社で三月十日に行はれた祭禮で、夜須禮花（やすらひばな）とも云ひ、略してただ夜須禮（やすらひ）とも稱した。また今宮祭とも云ひ、鎭花祭とも云つた。鎭花祭は「神祇令」に出て「ハナシヅメノマツリ」と訓じ、三月花散る時節に疫神を祀る祭である。正暦五年六月二十七日に、疫神を北野船岡山に祀り、御靈會を修した。その際仁王經の講説があり、音樂を奏して難波海に疫神を送つた。これは公儀でなく民間より起つたものである（日本紀略）。これが、夜須禮祭の起原であつて、夜須禮歌もその時に歌はれたものであらうか。後、長保三年五月九日に疫神を紫野に遷座して御靈會を行ひ、世に今宮祭と云つて、こゝに夜須禮祭が行はれる事となつた（諸神記）。かくて、夜須禮祭の日には、賀茂上野村の里人どもが種々の裝束を着して鼓を打ち、笛を吹いて踊り廻る（歌林拾葉）。一説に、これは高尾の神護寺の法華會に障があつたので、賀茂今宮に祈念して惡鬼を宥めるために踊を行つたのであると云ふ（山城四季物語）。「やすらひ花繪詞」は、この法華會に行はれる夜須禮花の踊の樣を描き、説明したものである（雍書漫筆）。平安朝時代、久壽元年四月の大夜須禮花は最も盛んであつたが、勅して禁止せられた（「百錬抄」「歴代編年集成」）。戰國時代以後中絶したのを、元祿七年に將軍綱吉の母桂昌院が社殿と共にこれを再興した。今は毎年四月十日に行はれる。【解説】夜須禮祭に社殿を踊り廻りながら歌ふ歌で、神事歌謠といふべきものであるが、傳寂蓮筆と云ふ古筆の歌詞が今宮社に傳はつてゐる。その歌詞は、初五句、急二十六句、返（句數不分明）の三部より成つてゐる。これは「美濃田歌」の後半と全く同歌であり、且つ美濃田歌は全部に亙つて、「やすらひばな」といふ囃子詞を持つてゐるから、大嘗會田歌は、恐らくかゝる俚謠を取入れたものと解すべきであらう。又もとは美濃田歌の全歌が夜須禮歌であつたらうと思はれる。「明月記」にも田植・ヤスライバナと併せ記し、西行法師もやすらひ花の和歌を高尾で詠じた（西行上人打聞集・夫木和歌抄）。一説に、やすらひ花と云ふ語は、夜須禮祭の祝詞に「紫野の根の國の神の社に花を奉るその日は安らに果てよ安らに果てよ」と云ふ句があるが、この「安らに果てよ」と云ふ句の轉訛したものであると云ふ。（田歌參照）

【參考】諸國圖會年中行事大成○萬葉緯（第六）今井似閑○中古雜唱集伴信友○結毦錄松岡玄達○雍書漫筆小山田與淸○夜須禮花考屋代弘賢（輪池叢書所收）○麓廼塵蜀山人○日本歌謠史高野辰之○廣文庫（第十九册）○日本宗敎風俗志加藤熊一郎○夜須良比祭に就いて志田文雄（風俗志林一ノ三）〔藤田〕

野藪談話（やそうだんわ）　隨筆　三十二卷二十八册　寫【著者】未詳【内容】江戸時代各地の武家に起つた異事・奇聞・怪談等を見聞の儘記し集め、最後に武士その他一般民衆の心得べき事を附錄して幼童のためにしたもので、實錄體の平俗を主とした文を以てしてゐる。卷一に大神君御仁德ノ談話以下二條、卷二に那須家興廢ノ談話幷代々來歷、卷三に加州ノ家長長氏ガ談話以下八條、卷四に大久保氣隨ノ談話以下三條、卷五に岡野氏廉潔附内福ノ談話以下六條、卷六に松下氏十四歳ニテ攝州芥川敵討ノ談話以下三條、卷七に悟未然僧ノ談話幷奸惡ノ農人ガ談話以下六條、卷八に備前岡山七勇士ノ談話、卷九に劍術士落合滓意が談、卷十に高木氏怪力附竹内劍術ノ談以下二條、卷十一に朋友ノ惣論以下四條、卷十二に猫鬼ノ怪ニ遇ノ談話以下三條、卷十三に近藤治部左衞門息零落幷武勇ノ談話、卷十四に戸田兵助劍術幷執行先ニテ取敗ノ談話以下三條、卷十五に高野山一件ニ付紀人御家人橋本へ詰

ルノ談以下十二條、卷十六に稻村氏横死幷同苗古橋不覺ニ付大坂ノ劍術師浪人鈴木右内信義ノ談話、卷十七に市森氏藝術ノ談話、卷十八に江戸淺草彈左衞門一件ノ談話以下三條、卷十九に元祿年中地震・大火ノ談話以下八條、卷二十に富永氏古狸ノ妖怪ニ遇ノ談話以下三條、卷二十一に攝州大坂ノ五人男ガ談話以下三條、卷二十二に蝦夷ガ島漂着ノ談話以下四

上梓されたものである。【著者小傳】新見正朝は幕府旗下の士、通稱傳左衞門、延寶中大御番頭を勤め、後、富士見御寶藏番頭となり、享保の初めに致仕したが、後、法入と稱した。慶安四年に生れ、寛保二年三月二十五日歿す。享年九十二。法名は一起院直心法入居士。墓所東京本郷駒込淺嘉町高林寺。〔和田〕

八千代流（やちよりう）「井上流」を見よ。

奴師勞之（やっこだこ）　隨筆　一卷【著者】大田覃【名稱】自序の末に、「老のねざめに思ひ出せるくさぐ〵を、そこはかとなく書さしぬるは、はじめにやつこだこのことあれば奴だこと名づけて、雲のはたてにかいやりすてぬ」とある。【成立】文化十年【諸本】「燕石

にも義憤を發し、金を奪つた男を殺して讐を報ふ。時の大阪城代松平伯耆守はその貞烈に感じ、刑を免れさせて奥向に召仕ふ。この時からおゆきをお萬と改める。お萬は大阪城の奥向に仕へること數年、伯耆守の近侍筧某に戀されたが、武家の掟と母の遺言を楯に從はぬ。某は思ひ餘つて失策し、切腹して相果て

ず。享年四十六。【閲歴】桓武天皇の皇子、御母は女孃百濟宿禰永繼。冬嗣と同母弟である。延暦二十一年（十八歳）十二月二十七日、特に良岑朝臣の姓を賜ひ右京に貫す。大同四年（二十五歳）六月八日從五位下、同十二日右近權少將、次いで少將に轉じ、又雅樂頭となる。弘仁元年（二十六歳）正月丹後介を兼ね、八月權右中辨、九月但馬介を兼ぬ。同二年二月二十七日藏人頭、六月從五位上、翌年五月正五位下兼左衞門權佐、同五年正月從四位下、右馬頭、二月左馬頭に遷る。五月左兵衞督となる。同六年七月左京大夫、翌年正月右大辨兼美作守となる。左兵衞督は元の如し。十月左衞門督、十一月近江守に遷る。同九年「新修應經」を撰む。同十年勅を奉じて冬嗣・緒嗣等と「日

ルノ談以下十二條、卷十六に稻村氏橫死并同苗古橋不覺ニ付大坂ノ劍術師浪人鈴木右內信義ノ談話、卷十七に市森氏藝術ノ談話、卷十八に江戶淺草彈左衞門一件ノ談話以下三條、卷十九に元祿年中地震・大火ノ談話以下八條、卷二十に富永氏古狸ノ妖怪ニ遇ノ談話以下三條、卷二十一に攝州大坂ノ五人男ガ談話以下三條、卷二十二に蝦夷ガ島漂着ノ談話以下四條、卷二十三に武州靈巖寺門前徘徊セシ桑門定西ガ談以下三條、卷二十四に尼ガ崎女りや敵討ノ談話以下五條、卷二十五・二十六に沼田記、卷二十七に藤堂家傳記ノ略戰功ノ談話以下二條、卷二十八に阿部家ノ士吉村氏ガ娘孝義忠ニテ身ヲ果スノ談話、卷二十九に六藝ノ略談以下四條、卷三十に常陸國常念寺靈劍ノ談話以下三條、卷三十一に江都ノ浪士山下廣內ガ獻書ノ談、卷三十二に童幼ノ人日夜記憶ノ談話以下四十四條を載せ、延享元年林中樵夫、無年紀江府散人の序がある。【和田】

八十翁曝昔話（やそのおさなむかしばなし）　隨筆　一卷二册　【著者】新見正朝　【刊行】天保八年【解說】享保の末年、八十餘歲の高齡になつた著者が、幼時に實見した事や、その頃人から聞いた江戶初期の武家町人の風儀・習俗等で、後世即ち著者の存在當時と著しく變つてゐた條々を列擧して、民風の次第に柔弱に流れて來た趣を慨き、以て青年の誡めとしようとしたものである。延寶以前の時令に筆を起し、元祿頃の緣組の話に終り、その間に武士上下の氣質、一般市民の行儀・服飾・接客・遊興・飮食等より、歌舞伎・遊廓の情況の古今の變遷を述べてゐる。菱川師宣筆の古圖數葉を摸して挿んであり、無年紀著者の自序がある。久しく寫本で行はれてゐたが、天保八年に至つて

矢田部良吉（やたべりょうきち）　詩人　【號】尙今　【生歿】嘉永五年伊豆田方郡に生れ、明治三十二年鎌倉に於て溺死した。【閲歷】明治三年渡米して同九年歸朝、同十四年東京大學教授に任ぜられ、翌年井上巽軒・外山丶山と共に「新體詩鈔」（別項）を著はし、同三十一年高等師範學校長となつた。　【批評】「新體詩鈔」中、創作詩三篇譯詩六篇を掲げてゐる。ハムレットの生死獨白の條と、シャアルドレアン、ロングフェイロオ、キャムブル、グレイ、テニスン等の譯詩で、中に於てグレイの「墳上感懷の詩」のエレジイ譯は最も巧妙なる措辭の譯詩として一般に愛誦せられた。作詩「勸學の歌」も「昔唐土の朱文公」で始まる江湖周知の唱歌であり、三人の中で詩法のやゝ見るべきはただ尙今だけである。なほ「春夏秋冬」の詩に於て句尾二字を以て二句づつ押韻を試みたことは、結果に於ては失敗であつたが、史的には價値がある。

【參考】明治文學史岩城準太郎　○明治大正詩史　卷上　日夏耿之介　【日夏】

上梓されたものである。

【著者小傳】新見正朝は幕府旗下の士、通稱傳左衞門、延寶中大御番頭を勤め、後、富士見御寶藏番頭となり、享保の初めに致仕したが、後、法入と稱した。慶安四年に生れ、寬保二年三月二十五日歿す。享年九十二。法名は一起院直心法入居士。墓所東京本鄕駒込淺嘉町高林寺。　【和田】

八千代流（やちよりゅう）**之**（の）**「井上流」**を見よ。

奴師勞之（やっこだこ）　隨筆　一卷　【著者】大田覃【名稱】自序の末に、「老のねざめに思ひ出せるくさ〴〵を、そこはかとなく書さしぬるは、はじめにやつこだこのことあれば奴だこと名づけて、雲のはたてにかいやりすてぬ」とある。【成立】文化十年　【諸本】「燕石十種」の一部であり、且つ寫本で行はれたが、明治になつて「溫知叢書」や「燕石十種」（國書刊行會本）によつて刊行された。【內容】著者七十歲の時の漫筆。やつこだこの項に始まり懷舊の狂歌の項に終る凡そ六十則より成る。俳句・狂歌・源東江及び平賀源內の戲作、植木屋伊兵衞・小松屋百龜が事、その他自家見聞の雜事を記してゐる。簡單ながら興味ある逸話が多い。　【和田】

奴道成寺（やっこどうじょうじ）**「道成寺」**を見よ。

奴の小萬（やっこのこまん）　小說　【作者】ちぬの浦浪六（村上信）　【刊行】明治二十五年六月、春陽堂。【內容】享保の頃を中心として、奴の小萬即ち木津屋のおゆき（雉髮して正慶尼）の生涯の挿話を綴り合せたもの。

【梗概】大阪長堀の巨商木津屋宗兵衞は、京都島原の薄雲太夫といふのに熱くなつてこれを落籍し、妻子を甚だしく虐遇する。宗兵衞の妻は家道の衰頽と惡女の跋扈と夫の暴虐に堪へかね、一女おゆきを乳母の在所に託して自殺する。木津屋は間もなく沒落するが、薄雲は家財整理の金を攫つて宗兵衞を捨て逃げる。おゆきは乳母の兄弟のために虐待され、幼い身が物賣りとまでなり下る。一日或る病婦と子供の身の上に同情の餘り、賣溜の金をやるが、それが却つて仇となり、その金を人に奪はれて病婦は自殺する。おゆきは子供心

て可ならざるはなかつた。從つて政治以外に國史・詩集等の撰修にも、大なる功績を殘してゐる。陸奥の按察使としての邊陬鎭撫の功も沒することが出來ない。要するに安世は文武の偉才であつた。

【參考】凌雲集○文華秀麗集○經國集　【山岸】

夜須禮歌（やすらいうた）　歌謠　【名義・名稱】ヤスラヒは安らふと云ふ語から出た言葉で、平安を祈る意、夜須禮祭の際に歌はれる歌謠であるからかく稱する。【夜須禮祭】京都紫野の今宮神社で三月十日に行はれた祭禮で、夜須禮花（やすらいばな）とも云ひ、略してただ夜須禮（やすらい）とも稱した。また今宮祭とも云ひ、鎭花祭とも云つた。鎭花祭は「神祇令」に出て「ハナシヅメノマツリ」と訓じ、三月花散る時節に疫神を祀る祭であ

れた（「百錬抄」「歷代編年集成」）。戰國時代以後中絕したのを、元祿七年に將軍綱吉の母桂昌院が社殿と共にこれを再興した。今は毎年四月十日に行はれる。【解說】夜須禮祭に社殿を踊り廻りながら歌ふ歌で、神事歌謠といふべきものであるが、傳寂蓮筆と云ふ古筆の歌詞が今宮社に傳はつてゐる。その歌詞は、初五句、急二十六句、返（句數不分明）の三部より成つてゐる。これは「美濃田歌」の後半と全く同歌であり、且つ美濃田歌は全部に亙つて「やすらひばな」といふ囃子詞を持つてゐるから、大嘗會田歌は、恐らくかゝる俚謠を取入れたものと解すべきであらう。又もとは美濃田歌の全歌が夜須禮歌であつたらうと思はれる。「明月記」にも田植・ヤスライバナと併せ記し、

錄體の平俗を主とした文を以てしてゐる。卷一に大神君御仁德ノ談話以下二條、卷二に那須家興廢ノ談話并代々來歷、卷三に加州ノ家長長氏ガ談話以下八條、卷四に大久保氣隨ノ談話以下三條、卷五に岡野氏廉潔附內福ノ談話以下六條、卷六に松下氏十四歲ニテ攝州芥川敵討ノ談話以下三條、卷七に悟未然僧ノ談話并奸惡ノ農人ガ談話以下六條、卷八に備前岡山七勇士ノ談話、卷九に劍術士落合淨意が談、卷十に高木氏怪力附竹內劍術ノ談以下二條、卷十一に朋友ノ物論以下四條、卷十二に猫鬼ノ怪ニ遇ノ談話以下三條、卷十三に近藤治部左衞門息零落并武勇ノ談話、卷十四に戶田兵助劍術并執行先ニテ取敗ノ談話以下三條、卷十五に高野山一件ニ付紀人御家人橋本へ詰

にも義憤を發し、金を奪つた男を殺して讐を報ふ。時の大阪城代松平伯耆守はその貞烈に感じ、刑を免れさせて奥向に召仕ふ。この時からおゆきをお萬と改める。お萬は大阪城の奥向に仕へること數年、伯耆守の近侍筧某に戀されたが、武家の掟と母の遺言を楯に從はぬ。某は思ひ餘つて失策し、切腹して相果てる。お萬はこれに衰れを覺え、某の靈を嫁がぬ夫と弔ふ。伯耆守が任滿ちて歸る時、お萬が古へのお穀・お百合の人と爲りを慕つてゐるのを聞き、小萬茶屋を建てて與へる。お萬は行方不明だつた父を探し、父子ともにこゝに隱れる。だが或はお萬の色香を慕ひ、或はその貞烈の志を聞いて訪ねて來る者が日々多くなる。中でも柳里恭との出會ひのところは好挿話である。お萬はそのまゝ風流な年月を送るつもりであつたが、惡女薄雲が、その夫の破落戶鷲の源太をそゝのかして宗兵衞を暗討にさせたので、お萬は即夜單身敵の家に乘り込んで數名を斬つて、たちどころに父の讐を報ふ。かうして心ならずも奴の小萬の俠名を百代に留めることになつた。

【批評】「三日月」（別項）以後の第三作であり、「三日月」と同樣に好評を得たものであるが、「三日月」に見られる缺點が、これにも矢張り見られる。例へば女主人公お萬の性格の前後一貫せぬこと、不自然さの多いこと、出る人物が概して何れも作者浪六の分身か傀儡めいてゐて、生動してゐないこと、その他誇張と衒氣と朦朧と補綴細工など、依然としてあるが、大體としての技巧描寫上、「三日月」ほど缺點が露骨でない。その代り、緊張味が幾分かけてゐるのは已むを得ない。柳里恭の點出は面白い。この性格の描寫は斷片的だが成功して

ゐる。だが、以上の缺點に拘らず、美貌年少の女俠、義のための仇討、氷雪に擬ふ貞烈、纖手虎穴を探る猛氣などといふ點が、よく當時の大衆の理想と要求に一致したので、あれ程の好評を博したものであらう。〔柳田(泉)〕

八橋流(やつはしりう)　箏曲【解説】慶安年間八橋檢校より始まる。八橋は磐城國平(たひら)の人、盲人で山住勾當といひ、三味線を學んだが、江戸に出て、法水に逢つて筑紫箏を學び、後自ら九州に行き、玄恕に就いて悉くその祕曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間に組歌を完成して一派を開き、八橋流といつた。「琴曲抄」序には「八橋氏思へらく、斯の筑紫樂は其聲最雅にして俗耳に遠しと。終に是に淫聲を加へて新に十三曲を出す。十三組といふ是也」とある。この淫聲といふことは、鄭聲といふ意味でなく、音階の中に半音を導入したことであつて、この時八橋の用ひた所の調絃法は平調子にあり、これは筑紫箏の水調に於て第四絃と第六絃（隨つて第九絃と斗絃）との音を、半音だけ下降せしめたことである。これ即ち俗樂音階と稱するものである（別項、箏の解説中、丙圖と戊圖とを比較せよ）。又その組歌は筑紫流の組歌の八拍子八行を一段としたのを十六拍子八行に改め、筑紫箏の拘け爪の外に小爪を多く用ひたに過ぎない。八橋檢校以後の傳統は次の如くなつてゐる。元祿時代

```
八橋─┬北島─┬倉橋─三橋─安村
     │     └生田
     ├住山─繼山
     └藤池
```

に、生田檢校は三味線の手法を箏に應用して新作曲を發表し、大に世に行はれ、これを生田流（別項）と稱された。繼山檢校も同じく繼山流を開き、生田は京都にて、繼山は大阪にて大に行はれ、三橋・安村の派も亦、生田流の中に同化されるに至つた。八橋流はこれに壓倒され、城追・豊一・住川・龜島・菊島・野村・玉橋・玉岡と傳統されて、玉岡檢校が明治の末年に歿してから遂に亡んでしまつた。今日では琉球に於て八橋流が主として行はれてゐるに過ぎない。安村檢校の門からは、圖に示すやうな人々が出た。八橋檢校から安村・久村檢

```
安村─┬久村─石塚……艷賞(二代津山)
     ├浦崎─八重崎─┬光崎─葛原(勾當)
     │             └松崎─松坂
     └長谷富─山田松黑─山田
```

校頃迄は作曲は組歌を主とし、これに手事・地唄物などを加へてゐたが、浦崎・八重崎・松崎檢校などの徳川末期に至つて、三味線と箏との合奏が盛んになり、後の三曲合奏の基を開いた。これに對して光崎檢校は箏樂の獨立を企て、有名なる「秋風の曲」の如きを作つた。山田檢校（斗養一(とよいち)）は山田松黑の門弟で、江戸の人である。文化年間の初めに、當時江戸で豐後節や河東節（各別項）などの淨瑠璃が全盛だつたので、これを箏の上に移して、語物式な歌を主とした所の箏曲を作つて一派を開いた。これを山田流といひ、遂に關東を風靡して關西の生田流と相對立するに至つた。その門弟に山勢・山木・山登の三名家があつて各々一派をなし、山勢は三代の山勢松韻が明治初年に於ける東京の名人で、文部省の音樂取調掛囑託となつて、その勢力を中流以上の家庭に擴め、大に箏曲樂を向上せしめた。その門から現代の萩岡松韻・今井慶松の二名家を出した。生田檢校の系統は、その後京都・大阪・名古屋・神戸等に於て相續いて名手を出してゐたが、明治の初年に神戸に名人中島檢校があり、その門弟から現今に於ける新箏曲の驍將宮城道雄氏が出た。今や宮城氏の新運動はその作曲の優秀と技巧の精妙とによつて全國を風靡しつつあり、舊來の生田流・繼山流・山田流の外に、宮城流とも稱すべき一新流派が勃興しつつある狀態である。〔田邊〕

宿無團七時雨傘(やどなしだんしちしぐれのからかさ)　脚本　二幕五場　世話物【作者】並木正三か。【初演】明和四年閏九月朔日、京、四條北側芝居、竹田芝居（役者驚紫選）といふ説があるが、通説では明和五年七月十八日、大阪竹田芝居に上演されたといふ。

〔役割〕（明和四年京都興行）團七茂兵衛（竹田傀四郎）、大治（竹田友九郎）、岩井風呂治助（竹田伊勢松）、女房お梶（山科猪五郎）、女郎お富（山科甚吉）。（明和五年大阪興行）團七の茂兵衛（竹田宇八）、藝子とみ（中村松代）、岩井風呂利助（竹田伊勢松）、平右衛門（中山龍藏）、嵐三五郎（竹田多藏）、澤村國太郎（中村吉松）、千方市兵衛（竹田時藏）、數右衛門（竹田次郎市）、おそよ（佐野川富松）、下人嘉兵衛（竹田萬六）等。

【諸本】繪入根本に「繪本戲場榮(えほんしばゐのさかえ)」（松好齋畫、享和二年刊）と、「繪本しばゐしをり」（文化十一年、河内屋に依る再版）とある。續帝國文庫「校訂脚本傑作集上卷」は根本の飜刻。文藝叢書「演劇脚本集」は根本系の臺帳の飜刻。假綴單行本で、著者を魁龍王とした阪田玉助氏發行のものもある。世話狂言傑作集第三・並木正三集（日本戲曲全集）所收。最後の三つは、根本より更に後期の臺帳に依る。【題材】團七九郎兵衛の巷説に名を取り（日本名著全集淨瑠璃名作集下解説參照）、その頃あつた岩井風呂の女郎富を掛り人の佐助が殺害した事件をお妻八郎兵衛の趣向に依つて脚色した。（傳奇作書續編中の卷・讀佛乘二編中の卷參照）

【梗概】（根本に依る）〔口明〕（堺の魚市）茂兵衛が魚の賣立をしてゐると、かねて戀仲の藝子とみが、侍高橋數右衛門に連れられて來る。數右衛門はとみに横戀慕をしてゐるのであるが勿論應じない。戀の意趣から茂兵衛と數右衛門は喧嘩を始める。茂兵衛の世話をしてゐる堺の大治はこれを見て、茂兵衛の身を修めるために、大阪なる岩井風呂の主人治助（利助）に預けようとする。茂兵衛は元歷々の侍の子で紛失の二字吉光の九寸五分を詮議するために身を落してゐるのである。茂兵衛は父の戒名を腕に刻んで、大治の前に堪忍を誓ふ。治助は圖らずも、自分の手にあつたその寶刀を示し、又寶刀と共に無くて叶はぬ折紙を詮議すべく、茂兵衛の後楯となることを約して彼を大阪へ伴ふ。〔芝居裏〕治助は茂兵衛を連れて大阪からこの堺へ來てゐた芝居に立ち寄つた。數右衛門は芝居で使ふ小判を盜み出し、茂兵衛の目の前で、この僞金でとみを請け出すのだと威張る。とみは眞と思つて茂兵衛に取附けば、茂兵衛までが大阪へ行つてしまふといふので、涙に沈む。併し間もなく數右衛門の詐欺が見現はされて事なきを得る。治助は芝居小屋から出て來た狂言作者並木正三から金を借りて、とみをも大阪へ連れて行く事にする。所が意外にも茂兵衛が尋ぬる折紙を持つてゐるのは數右衛門であつた。治助はこれを立ち聞きして、その折紙を取返すために心にもなく、とみを數右衛門に取持つ事を約して別れる。〔二幕〕（岩井風呂）治助はとみによく言ひ含めて、折紙を得るために、數右衛門のゐる前で茂兵衛に愛想づかし

に於て第四絃と第六絃（隨つて第九絃と斗絃）との音を、半音だけ下降せしめたことである。これ即ち俗樂音階と稱するものである（別項、箏の解說中、丙圖と戊圖とを比較せよ）。又その組歌は筑紫流の組歌の八拍子八行を一段としたのを十六拍子八行に改め、筑紫箏の掛け爪の外に小爪を多く用ひたに過ぎない。八橋檢校以後の傳統は次の如くなつてゐる。元祿時代

八橋―北島―生田
　　―生山―繼山
　　―藤池
　　―倉橋―三橋―安村

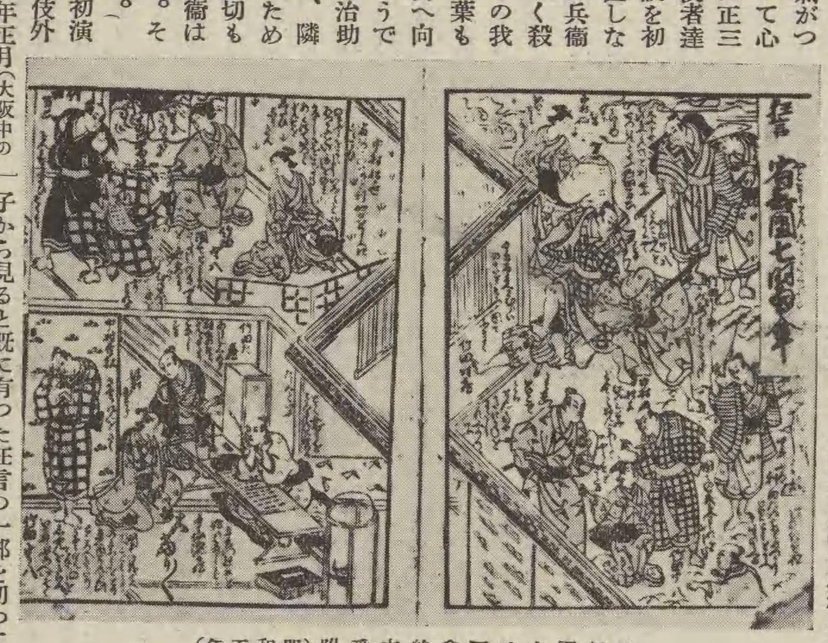
に、生田檢校は三味線の手法を箏に應用して新作曲を發表し、大に世に行はれ、これを生田流（別項）と稱された。繼山檢校も同じく繼

企て、有名なる「利風の曲」の如きを作つた。山田檢校（斗養一）は山田松黑の門弟で、江戸の人である。文化年間の初めに、當時江戸で豐後節や河東節（各別項）などの淨瑠璃が全盛だつたので、これを箏の上に移して、語物式な歌を主とした所の箏曲を作つて一派を開いた。これを山田流といひ、遂に關東を風靡して關西の生田流と相對立するに至つた。その門弟に山勢・山木・山登の三名家があつて各々一派をなし、山勢は三代の山勢松韻が明治初年に於ける東京の名人で、文部省の音樂取調掛囑託となつて、その勢力を中流以上の家庭に擴め、大に箏曲樂を向上せしめた。その門から現代の萩岡松韻・今井慶松の二名家を出した。生田檢校の系統は、その後京都・大阪・名古屋・神戸等に於て相續いて名手を出してゐたが、

太郎（中村吉松）、千カ市兵衞（竹田時藏）、數右衞門（竹田次郎市）、おそよ（佐野川富松）、下人嘉兵衞（竹田萬六）等。

【諸本】繪入根本に「繪本戲場粟」（松好齋畫、享和二年刊）と、「繪本しばゐしをり」（文化十一年、河內屋に依る再版）とある。續帝國文庫「校訂脚本傑作集上卷」は根本の飜刻。文藝叢書「演劇脚本集」は根本系の臺帳の飜刻。假綴單行本で、著者を魁龍玉とした阪田玉助氏發行のものもある。世話狂言傑作集第三・並木正三集（日本戲曲全集）所收。最後の三つは、根本より更に後期の臺帳に依る。【題材】圍七九郎兵衞の巷說に名を取り（日本名著全集淨瑠璃名作集下解說參照）、その頃あつた岩井風呂の女郎富を掛り人の佐助が殺害した事件をお妻八郎兵衞の

物・夏狂言であつたと思はれる興行が、通說の初演前、即ち明和四年閏九月朔日、京四條北側芝居で、大阪から上つた竹田芝居の一座に依つて行はれた（「役者黛紫選」及び日本戲曲全集並木正三集解說）。併しこれを初演とすると、この狂言が一夜漬に取入れたと傳へる岩井風呂事件の時日に先んずる。なほこの時の興行の樣



宿無圍七時雨傘繪本番附（明和五年）

を云へと敎へる。大阪へ來てから茂兵衞は床屋になつてゐる。何のかのと云つて治助がとみとの仲を隔てるので、茂兵衞は、もうたまりかねて今日も岩井風呂へ來て、無理にとみに逢はして呉れと頼む。併し意外にもとみから愛想づかしを言はれるが、憤りを抑へて歸る。（正三內）初めて寶刀の詮議をせねばならぬ大事の身であることに氣がついた茂兵衞は、京へでも上つて心氣を一轉すべく旅費を借りに正三（平右衞門）の許へ來る。時に役者達が訪れて、今度の狂言の相談を初める。茂兵衞は正三の髮を直しながら聞くと、それはお妻八郎兵衞の狂言で、裏切つた女をむごく殺す芝居であつた。茂兵衞は今の我が身に引較べて正三の諫す言葉も耳に入らず、急いで岩井風呂へ向ふ。（岩井風呂）茂兵衞は、どうでもとみに逢はせろとせがむ。治助（利助）は取りあはないのみか、隣室にゐる數右衞門に聞かせるために、茂兵衞に向つて、今迄の親切も實は騙したのだと云ふ。茂兵衞は遂にたまりかねて治助を刺す。そして茂兵衞も自害して果てた。

【解說】この狂言は、作者にも初演にも甚だ疑問が多い。「大歌舞伎外題年鑑」に依ると、早く元文五年正月（大阪中の芝居佐野川花妻座）に上演されたかに見える。併しその內容は、未だ詳かでない（「役者一會櫻」未見）。この上演が事實であつたとしても、これは正月狂言であるから現存のものとは甚しく相違してゐたと考へられる。現存の如き世話

子から見ると既に有つた狂言の一部を切つて上演したらしいから、初演は更に溯るであらう。而して作者も竹田芝居との關係から見ると正三らしくも思はれるが斷言出來ぬ。一般に初演と信じられてゐる明和五年七月の大阪興行に對して「傳奇作書」は、この時の作者は

正三ではなく濱芝居の作者であると云ひ、又作中に出る狂言作者もこの時は並木正三の名ではなく、さうなつたのは寬政二年五月の興行以來であると云つてゐる。成る程明和五年七月の時の繪本番附を見ると並木正三ではなく平右衞門となつてゐる。併しこれを以て直ちに「傳奇作書」の說を信じ、正三の作にあらずとするのはなほ早計であらう。兎に角現存の內容が、そのまゝ正三の作でないと云ふ事は斷言出來ると思ふ。正三にしてかゝる世話物があるとは考へられない。思ふに、それぞれの時代の作者の筆が次第に加へられて行つたものであらう。この狂言は女郎殺しの一夜漬であるばかりでなく、作中に役者や作者を出した所に大に新味があつた。而してその優れた構想は正三あたりの案であり、その心理的方面に於ては、五瓶などの力が加はつてゐるのではあるまいか。本作は淨瑠璃にも取り入れられ、文化二年八月、道頓堀大西芝居で演ぜられて以來、度々上演されてゐる（正本未見）。宿無圍七を脚色したものとしては、歌舞伎に早く元祿十一年片岡仁左衞門に依つて演ぜられた。本狂言は、圍七物として「夏祭浪花鑑」（別項）と列んで重要な二系列をなす。「且說浪花當寫本」（天保三年六月、河原崎座）「影演劇川家根船」（明治十四年七月、春木座）等も殆ど外題を變へただけで、現在に及んでゐる。

【參考】傳奇作書西澤一鳳　○歌舞伎圖說守隨憲治・秋葉芳美　○歌舞伎細見飯塚友一郎　○近世邦樂年表（義太夫節之部）【鶴見】

宿屋飯盛（やどやのめしもり）「雅望」（まさもち）を見よ。

寄生木（やどりぎ）　小說　【作者】德富健次郎（蘆花）【刊行】明治四十二年十二月、警醒社。蘆花全集第八卷所收。

【梗概】篠原良平は陸中宮古在、山口村に生れた。小學校の成績もよく、中村敬宇や福澤諭吉の著書を讀んでは文學博士を理想とし、教育家たらんと志したが、千島探險の郡司大尉の一行を歡迎した日から急に軍人を希望し、明治二十九年の秋、仙臺へ出奔して大木將軍邸を敲き、遂に同邸の書生となる事が出來た。時に滿十四年三ケ月であつた。當時良平の父良助は、村政の紛爭より公金費消の罪名を受け、控訴して仙臺の未決監にあつた。將軍は良平の家庭、良助の犯行などを聞き、篠原憲兵隊長の報告に基いて世話する事となつたのである。間もなく將軍は臺灣總督となつた。良平も隨行した。總督府官邸で、良平は父良助が六ケ年間に亙る未決監生活を脫し、無罪の言渡しを受けた通知を得た。小學校時代から罪人の伜として、あらゆる侮辱を受けてゐた良平は、初めて愁眉を開いた。のみならず上京して中央幼年學校に第三席の優良な成績で入學した。學資は大木將軍より篠原中佐を通じて支給された。當時中佐は東京憲兵隊に轉任してゐた爲め、良平は同中佐の一女夏子と知り、遂に許婚の間柄となつた。幸運と光明に圍繞された良平は、何故か幼年學校に於ける學業の成績は段々低下して來た。遂に最末席で幼年學校を卒業し、旭川聯隊に勤務したが、後再び士官學校に入學し、三十六年十一月中等の成績を以て卒業し、旭川聯隊に復歸した。良平と夏子とは絕えず文通はしてゐたが、最早結婚の望は絕えてゐた。折しも日露兩國の戰端は開かれ、良平の恩人大木將軍は難攻不落の旅順攻擊の大任を帶びて日夜苦戰してゐた。明治三十七年十一月二十九日、良平は大木將軍の部下として旅順へ出動する

立ち寄つた。數右衞門は芝居で使ふ小判を盜み出し、茂兵衞の目の前で、この僞金でとみを請け出すのだと威張る。とみは眞と思つて茂兵衞に取附けば、茂兵衞までが大阪へ行つてしまふといふので、涙に沈む。併し間もなく數右衞門の詐欺が見現はされて事なきを得る。治助は芝居小屋から出て來た狂言作者並木正三から金を借りて、とみをも大阪へ連れて行く事にする。所が意外にも茂兵衞が尋ぬる折紙を持つてゐるのは數右衞門であつた。治助はこれを立ち聞きして、その折紙を取返すために心にもなく、とみを數右衞門に取持つ事を約して別れる。（二幕）（岩井風呂）治助はとみによく言ひ含めて、折紙を得るために、數右衞門のゐる前で茂兵衞に愛想づかし

命令を受け、行いて爾靈山の守備を命ぜられ、山上に於て大木將軍に面謁した。やがて凱旋した良平は、夏子との結婚に努力したが、遂に成らなかつた。折柄全日本に渦巻ける宗教思想は、彼をして劍を捨てて平和運動に從事せしむべく餘儀なくした。少壯軍人として昇進の榮譽を捨て、燃ゆるが如き熱情の戀を捨てた彼は、明治四十一年九月二十日の正午過ぎ、山口村の自宅で家人の看護をも受けず、ただひとり淋しく死んで行つた。

【解說】篠原良平の實名は小笠原善平である。明治三十六年四月の或る日、士官學校生徒小笠原善平は一面識もなかつた著者を青山原宿の居に訪ね、小笠原一家の數奇なる來歷と乃木希典將軍と自分との關係を語つて、これを小說化せん事を請うた。その理由は乃木將軍にかくも高恩を受けながら、勉學中戀愛事件の破局より學業を怠り、最早立身出世して將軍の恩顧に酬ゆる望はなくなつた。然らば一旦緩急あらん時、將軍の馬前に屍を橫へて軍人らしき報恩をなさんには、將軍は最早一農夫として那須野ヶ原に荒蕪の地を耕しつつある。故に報恩の良策として著者の力を藉り、これを一篇の小說として世に發表せんといふのであつた。爾來小笠原善平は公務の餘暇、二十六册のノートブックに一家の來歷を詳細に書き綴つて著者に送つた。明治三十七年十一月二十九日、善平は步兵第二十七聯隊補充大隊附となり、乃木將軍の配下として旅順に向ふこととなつた。彼は愈々死期到れりとなし、最後の記錄二册を著者に送つて出征した。然るに彼は明治三十九年三月、無事旭川聯隊に歸着し中尉に昇進した。彼はこゝに更生の第一步を踏み出すべく陸軍大學入學を志したが、陸軍部內の情實はこれを許さなかつた。戀に破れ立身の途も梗塞された彼は、四十年二月粕谷の里に著者を訪ねて總ての事情を語つたので、著者は彼に屢く軍職を抛つて他に適所を求むる事を勸告した。ために彼は四十一年三月、東京外國語學校に入學して露語を學ぶ事となつたが、六月病を得て鄕里に歸り療養中、明治四十一年九月二十日午前十二時、妹善子の嫁せる保良家に於て自殺した。時に年二十八。山口村慈眼寺に葬つた。乃木將軍は遺族の請によつて、墓石に「故陸軍步兵中尉從七位勳六等功五級小笠原善平」の二十一字を大書したが「之墓」の二字は書かなかつた。遺言により父小笠原喜代助は、一旦著者より送り還しありたる記錄二十八册に、その後の記錄を加へ、合計四十册の記錄を再び著者に送附した。こゝに於て著者は始めて、小笠原善平に代つて小說化せんと決心し、自ら陸中山口村に行つて總てを調査し、歸來非常な苦心を以て十ヶ月間に書き上げたのが本書である。十ヶ月間に六十萬字の大作をなしたが、なほ記すべき事の多くを餘したので、その最後は遂に投げやりの形になつてゐる。著者は他人の材料によりて自著をなしたる事を深く悔い、大正三年七月十九日まで懊惱し續けたが、同日に至り遂に總ての解決をつけた。即ち「寄生木」によつて得たる印稅を「吾が金を遣ふやうな氣がしない」といふ苦痛から脫却すべく、善平の遺族に對して夫々處置をつけた。著者は明治三十九年十二月に「順禮紀行」を書いて以來、滿三ケ年創作に筆を斷ち、土に親しんでゐたが、この大著をなして再び小說家として復活したのであるが、これがため、著者の感謝生活に一抹の愁雲が投げられ、再び懊惱苦悶の時代に入つた。【以上沖野】

【附記】明治四十年三月、柳川春葉によつて、五幕八場に脚色され、東京本鄕座に上演された。もと〳〵芝居にならないものを座方の註文で無理に仕組んだのである。脚色者は人に知れない苦心をして原作にない黑川少尉といふ敵役を拵へたり、原作ではそれ程働いてゐないお新といふ主人公の姉を働かせたり、大詰に良平の失戀した當の相手の夏子、その父親の篠原大佐、戀の敵の黑川少尉、恩人の大木中將、彼の一生を支配したさうした人々の幻影を見せて彼に自殺の決心をさせたりした。がその甲斐なく、結局は散漫なものしか出來ずにしまつた。僅に四幕目の「旅順の寒月」だけは評判が好かつたが、これは大木中將實は乃木大將の日露の役に二〇三高地の城寨で子息達の戰死にあつた顚末を取入れた場面で、脚色者は鷗外の「うた日記」に材料を得たと言はれてゐる。【以上久保田】

柳宮（やないばこ）　川柳集　五篇五册　【刊行】初篇（天明三年）・第二篇（同四年）・第三篇（同五年）・第四篇（同六年）・第五篇（同七年）、續刊はないと推定される。【解說】「俳風柳多留」（別項）と同型の小本で麻布柳水連月次小集の川柳選勝句集である。每年八・九・十・十一・十二の大會月を避け、一月より七月（或は八月五日）までに開催された部分的小會であることは「川傍柳」（かはそばやなぎ）（別項）の蓬萊連と同轍であるが、これは每月五日と二十日との二度、卽ち一年に十四五回の開會である點に少異がある。初篇にはあんまはりや、第二篇には中橋のおやぢ多笑、第三・四篇には麻黃庵老人の序文がある。【西原】

谷中の月（やなかのつき）　人情本　二編四册

【作者】十字亭主人（十字亭三九・二世十返舍一九）【畫工】五湖亭【名稱】下谷谷中の岡場所を背景にした爲めの命名。【刊行】文政十一年

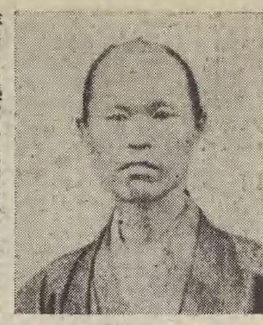
【題材】谷中の岡場所を題材としたものは比較的尠い。洒落本の「世說新語茶」（別項）中のいろは茶話の描寫以外には、人情本「谷初音」位のもので、その點に於て本書は珍らしい作と言はねばならぬ。篇中の客の名に賴光四天王の名をとつてゐるのは、洒落本に曾我の人物を採つてゐるのと同じ趣向である。遊客久と年增女郎の描寫は、人名と共に全く洒落本「寸南破良意」（すなはらい）（別項）を採つてある。

【梗概】淺草に、山崎屋德吉と云ふ通人でもなく野暮でもないどら息子がゐた。其處へ集つて來るのはやはり同じ連中で、髮結の下剃三吉、大工の頭五八など、いろ〳〵雜談の末、趣向を凝して谷中の岡場所へ出かける。德吉は武左（田舍武士）の扮裝、三吉は年季者の拵へ、大工五八は上方者で大店の番頭、野太鼓赤鬼は相當な番頭のつくり、さん〴〵遊女達をいやがらせ、廊下でばつたり行き合ひ、そこで一座になつて騷ぎ、赤鬼は茶屋へ着物をとりにやり、意氣な江戶子の衣裳に着換へ、そこで又喝采を博する趣向なのである。さて別れて谷中の遊廓に入り込む。德吉は床の內で謠をうたひ、武左の風を眞似て盛んに遊女をいやがらせる。同じく土地の洒落仲間、坂田屋の金兵衞、薄井屋の定七、浪人者の末次等も上る。初會も構はず女郎等、泥坊猫のやうによりたかつて客の馳走を食ふ。この所作は此所の習也と作者が說明してゐる。さて德吉等四人の者は計畫通り素性を現はした。この洒落大當りで遊女等も騰を潰し、急に大事にする。一同圖に乘り太平樂を極め込む。やがて夜も明けたので、打揃つて引上げた。德吉・三

吉は又の夜、本田髷を横へまげ、青梅縞の和考裏、巾廣のまがひ八丈の帶を横にかひの口に結び、赤い縮緬揉の提煙草入と云ふ服裝で、谷中へ出かける。三吉の相方お半の許へ判じ畫の艷書が來たのを二人で讀む。狐と碁盤と齒磨楊枝の畫を、「こんばん用事があつて」などと讀む可笑味がある。德吉の相方の遊女が惚れたのを見、連中相談して又何か一狂言書かうとするところ迄で終つてゐる。

【構想】過渡期の人情本の一つで、本の體裁は中本で人情本らしいが、内容は一貫した筋のない洒落本である。而も篇中の人物が下層社會であり、茶番氣分を多量にもつてゐる所は「花曆八笑人」「滑稽和合人」(各別項)等の影響を多大に受けてゐる。花柳界を背景とせる滑稽本とも稱し得る。

【山崎】



柳河春三

柳河春三（やながはしゅんさん）　洋學者　【姓名】初めの名は西村辰助、後に良三と稱し、安政の初めに柳河春三と改む。別名は春蔭、諱は朝陽。【號】楊大昕・喫霞・楊江・臥孟等。【生歿】天保三年二月二十五日名古屋に生れ、明治三年二月二十日東京に歿す。享年三十九。【法名】光撫院釋護念居士【墓所】淺草本願寺中願龍寺【閲歷】蘭學を伊藤圭介・上田帶刀に學び、後英佛の語に通ず。國學和歌は本居大平の流を汲み、書は丹羽盤桓子に學んだ。父は西村武兵衞、母は遊月。三歳の時藩侯の前に大字を書し、四歳尾張笠寺の額を書し、十一歳の時に一書を著はして洋砲の必要なるを說き、十三歳伊藤圭介著はすところの「洋字篇」の參訂をなし、十九歳上田帶刀の名で「西洋砲術便覽」を著はす。安政三年江戸へ出でて姓名を改む。同四年水野土佐守に知られ、同人のため著譯するところの書一百卷の多きに達した。同五年紀州藩に仕へ、元治元年幕府に召されて開成所教授職となり、明治元年開成學校飜譯校正掛、明治二年東京學校出仕、大學少博士、正七位。同年十月免官、同年十一月大學校出仕、飜譯督務、これがその官歷である。【著作】西洋雜誌(慶應三年第一號發行)○中外新聞(慶應四年)○中外新聞外篇(同上)○官准中外新聞(明治二年第一號發行)○洋算用法(安政四年出版)○洋學指針蘭學部(安政四年出板)○同英學部(慶應三年出版)○洋學便覽(初集慶應二年出版、第二集明治三年出版)○寫眞鏡圖說(慶應三年初篇出版、翌四年第二篇出版)○智環啓蒙國字解(慶應三年出版)○法朗西文典・同後篇・同字類(慶應三年出版)○英吉利日用通語(明治二年出版)○アベセ字樣(同上)○うひまなび(慶應三年出版)○柳園叢書(同上)○柳のしづく○泰藝の滴(安政三年書、大正二年名古屋發行「紙魚」誌上に掲載)○除痘約論(慶應三年出版)○鷲種說二册(明治二年出版)○格物入門和解(明治三年出版)○新篇砲家必携○西洋軍制二册(明治二年出版)○西洋王代一覽○萬國通商便覽○掌中萬國一覽(明治二年出版)○西洋時計便覽(同上)○外國錢譜○英國刑典(明治二年出版)○佛學階梯(同上)○十一國語箋(同上)○萬國新話四册(同上)○中外漫筆(同上)○算法珍書(同上)○西洋將棋指南(同上)○西洋開運物語(同上)○汐時早見(同上)○横濱繁昌記○にせ物語。その他なほ多くの著書がある。

【業績】春三の創刊した「西洋雜誌」は、我が國最初の雜誌で、中外新聞は日本人の手で出來た純日本新聞の最初のものである。又「洋算用法」は、洋算に關する最初の著書であり、その他寫眞に於ける「寫眞鏡圖說」、チエッスを記したる「西洋將棋指南」等また皆類書の嚆矢である。その他の書はいづれも新文化に貢獻せる書であり、慶應から明治の二年に至るまで僅かの年數で、而も澤述出版の極めて困難なる時代、且つは社會動亂の時期に於て、かく多數の出版のあつたのは眞に驚異すべきである。その他當時出版の新文化に關する他人の著書で、春三の題辭・序跋等のないもののなかつたのを見ても、如何にその當時に重んぜられたかを知るに足るのである。交友としては成島柳北・福地櫻痴・加藤弘之・箕作秋坪・福澤諭吉・宇都宮三郎等と親しく、いづれもその推すところとなり、なほ松平春嶽の知遇をも得た。天若し假すに數年を以てせば、その造詣測るべからざるものありしならんに、眞に惜しむべきである。

【尾佐竹】

【參考】新聞雜誌之創始者　柳河春三(名古屋史談會)

柳川春葉（やながはしゅんえふ）　小說家　【本名】專之【生歿】明治十年三月、東京下谷二長町に生れ、大正七年一月三日歿す。享年四十二。【閲歷】父は龍野藩士柳川至。長じて英學塾に通つて勉强したが、十八歳の時、尾崎紅葉の門に入り、小說家としての素養を作つた。二十二歳の時、紅葉の推薦で、讀賣新聞に「街頭」を、「國民之友」に「白すみれ」を公けにし、爾來數篇の小說を書いた。また春陽堂編輯局員となつて「新小說」の編輯に當つたこともある。その漸く特色を發揮し始めたのは明治三十四年で、「錦木」を「新小說」に出した頃からである。次いで短篇「秋給」「泊り客」「忘れ水」等を公けにし、三十六年最初の長篇小說「夢の夢」を出して愈々その特色を認められ、「鏡花・風葉に次いで秋聲と竝び、紅葉門中の四天王を以て稱せられた。三十七年紅葉の死に會ひて一時創作態度の動搖を來したが、次第に通俗小說に力を入れ、「女一代」「母」「五人姉妹」「世間」などと、いづれも好評を博し、大正元年發表の「なさぬ仲」(別項)は最も世の歡迎を受けた。また新派のために脚色したものも少くない。晚年は東京日日・大阪每日の兩新聞及び「婦女界」などに主として作品を寄せた。

【作風】以上擧げた外、彼の作品は短命な割に多かつた。「なさぬ仲」などは、一時、蘆花の「不如歸」(別項)に次ぐほど持て囃されたが、それ等の通俗小說は、讀者に迎へられんことに專心して、彼の特色を十分に出さぬ憾みがあつた。それよりも「泊り客」「忘れ水」などの短篇に、作者獨特とも云ふべき溫雅平淡の味があつて、しつくりとした情趣が流れてゐる。が、總じて家庭小說の趣を帶びたものが多く、少年少女を描く上に獨特の妙があつた。【高須】

柳龍裏（やなぎどり）　川柳集　【刊行】天明六年麴町平河天神前近江屋治助によつてその第三篇が發行されてゐる事だけは明白であるけれども、その前後は現物に接しないから確言する事は出來ぬ。蓋し初篇と第二篇とは、同三・四年の出版であるべく、且つ恐らくは第三篇以後は發行しなかつたものであらう。【解說】「俳風柳多留」(別項)に倣つて發行した高砂連の選句集である。高砂連の小會は第三篇には正月は十五日、二・三・四月は三日と十八日、五月は三日と二十八日開會とあつて、多少不規則であり、且つ蓬萊連や柳水連とは多少違つてゐるけれども、萬句合大會の繫として催はれてゐる。

【以上久保田】

柳宮（やなぎのみや）　川柳集　五篇五册　【刊行】初篇(天明三年)・第二篇(同四年)・第三篇(同五年)・第四篇(同六年)・第五篇(同七年)、續刊はないと推定される。【解說】「俳風柳多留」(別項)と同型の小本で麻布柳水連月次小集の川柳選勝句集である。每年八・九・十・十一・十二の大會月を避け、一月より七月(或は八月五日)までに開催された部分的小會であることは「川傍柳」(別項)の蓬萊連と同輩であるが、これは每月五日と二十日との二度、即ち一年に十四五回の開會である點に少異がある。初篇にはあんまはりや、第二篇には中橋のおやぢ多笑、第三・四篇には麻黄庵老人の序文がある。【西原】

谷中の月（やなかのつき）　人情本　二編四册　【作者】十字亭主人(十字亭三九・二世十返舍一九)山口村に行つて總てを調査し、歸來非常な苦心を以て十ケ月間に書き上げたのが本書である。十ケ月間に六十萬字の大作をなしたが、なほ記すべき事の多くを餘したので、その最後は遂に投げやりの形になつてゐる。著者は他人の材料によりて自著をなしたる事を深く悔い、大正三年七月十九日まで懊惱し續けたが、同日に至り遂に總ての解決をつけた。即ち「寄生木」によつて得たる印稅を「吾が金を遣ふやうな氣がしない」といふ苦痛から脫却すべく、善平の遺族に對して夫々處置をつけた。著者は明治三十九年十二月に「順禮紀行」を書いて以來、滿三ケ年創作に筆を斷ち、土に親しんでゐたが、この大著をなして再び小說家として復活したのであるが、これがため、著者の感謝生活に一抹の愁雲が投げられ、再はれてゐる。

【以上久保田】

柳宮（やなぎのみや）　川柳集　五篇五册　【刊行】初篇(天明三年)・第二篇(同四年)・第三篇(同五年)・第四篇(同六年)・第五篇(同七年)、續刊はないと推定される。【解說】「俳風柳多留」(別項)と同型の小本で麻布柳水連月次小集の川柳選勝句集である。每年八・九・十・十一・十二の大會月を避け、一月より七月(或は八月五日)までに開催された部分的小會であることは「川傍柳」(別項)の蓬萊連と同輩であるが、これは每月五日と二十日との二度、即ち一年に十四五回の開會である點に少異がある。初篇にはあんまはりや、第二篇には中橋のおやぢ多笑、第三・四篇には麻黄庵老人の序文がある。【西原】

谷中の月（やなかのつき）　人情本　二編四册　【作者】十字亭主人(十字亭三九・二世十返舍一九)赤鬼は相當な番頭のつくり、さんく遊女達をいやがらせ、廊下でばつたり行き合ひ、そこで一座になつて騷ぎ、赤鬼は茶屋へ着物をとりにやり、意氣な江戸子の衣裳に着換へ、そこで又喝采を博する趣向なのである。さて別れて谷中の遊廓に入り込む。德吉は床の内で謠をうたひ、武左の風を眞似て盛んに遊女をいやがらせる。同じく土地の洒落仲間、坂田屋の金兵衞、薄井屋の定七、浪人者の末次等も上る。初會も構はず女郎等、泥坊猫のやうによりたかつて客の馳走を食ふ。この所作は此所の習也と作者が說明してゐる。さて德吉等四人の者は計畫通り素性を現はした。この洒落大當りで遊女等も膽を潰し、急に大事にする。一同圖に乘り太平樂を極め込む。やがて夜も明けたので、打揃つて引上げた。德吉・三

された部分會たることは、疑ふの餘地がないやうである。〔西原〕

柳澤健（やなぎさはたけし）　詩人　【閲歴】明治二十二年十一月會津若松に生れた。會津中學、第一高等學校を經て、大正四年東京帝國大學法科大學を卒業。遞信省に入り、横濱郵便局外國課長に任ぜられ、又去つて大阪朝日新聞論説委員に轉じ、歐洲に遊び、歸朝後外務省亞細亞局に入つた。大正十三年在佛大使館書記官に任ぜられ、瑞典に轉じ、更にメキシコに轉じたが、昭和八年歸朝、外務省詰となつた。大正四年辟花・八十・山宮・日夏等と「詩人」を刊行し、同八年雜誌「詩王」を起した。【著作】「果樹園」（大正三年刊）を處女詩集とし、合著「海港」（大正七年）を著はし、次いで論集「現代の詩及詩人」（大正九年刊）、譯詩集「現代佛蘭西詩集」上卷（大正十年刊）、「柳澤健詩集」（大正十一年）の外、紀行「南歐遊記」「歡喜と微笑の旅」、評傳「ジャン・ジョレス」、雜集「巴里を談る」などの著がある。

【批評】三木露風に合流して「未來」同人として發足し、屢々北原白秋一派と對峙した。彼が雜誌「黒猫」で、白秋抹殺の一文を掲げたのに對し、白秋門下の萩原朔太郎が、雜誌「文章世界」で、「三木露風一派の詩を放逐せよ」を應酬した如きが、その例である。大正四年彼が「文章世界」に掲げた「輓近の詩壇を論ず」は、當時理解と公正とを示した詩壇評として、好評を博したものであつた。彼は詩家としてもより以上に詩魂ある鑑賞家・思想家・散文家としての明日を暗示してゐる。〔日夏〕

柳田國男（やなぎだくにを）　詩人・民族學研究家　【閲歴】明治八年七月、今の兵庫縣神崎郡田原村に生る。父は松岡操、兄弟八人あり、醫學博士井上通泰、海軍大佐松岡靜雄、畫家松岡映丘は、その同胞である。三十三年東京帝國大學法科大學政治科を出で、翌年柳田直平の養子となる。法制局參事官、宮内書記官、内閣書記官を經て大正三年貴族院書記官長に進んだが、八年辭して朝日新聞社に入り、後客員となつた。これより先、二十三年上京の後、森鷗外・田山花袋等と相知り、その作品を「抒情詩」誌上に發表したが、四十一年頃から特に土俗民族の研究に興味をもち、全國を巡遊して造詣が甚だ深い。【著書】遠野物語〇石神問答〇海南小記〇雪國の春〇山の人生〇日本昔話集〇日本傳説集等。

【批評】「抒情詩」（別項）によつて知られた青年詩人松岡は、靜謐なれど理智的に、哀調あれど悲しんで破らぬ溫藉の詩風であつた。これ等の特色を基點として將來を期待されたが、殉情は青春と共に去り、彼本來の學究的生活に入つたので大成されずに終つた。〔土岐・日夏〕

柳樽（やなぎだる）　狂言「口眞似」を見よ。

柳樽（やなぎだる）　「俳風柳多留」「繪本柳樽」を見よ。

柳のお柳（やなぎのおりう）　「祇園女御九重錦」を見よ。

柳之横櫛（やなぎのよこぐし）　人情本　五編十五册　【作者】梅亭金鵞【畫工】梅の本營齋（金鵞の實弟）【名稱】夜三廻月と角書がある。【刊行】未詳。金鵞の人情本はすべて無判記であるが、初編の序に、「未作徒馴（さとなれ）ぬ稗官（さくいや）の突出し」と玉屋文魚が述べてゐるから、彼の滑稽本の初作「七偏人」（安政四年）よりは早く、劇に上演された嘉永六年よりは後、卽ちその間の三年間の作かと思はれる。【諸本】人情本傑作集（帝國文庫）所收。【題材】天保頃、長唄の三味線彈伊三郎と木更津の博徒の妾お富との事件を時の講釋師で作家を兼ねた乾坤坊良齋（梅澤良助。はじめ三笑亭可樂門の落語家。享和の末年三十四五歲の時から講釋師となり、萬延元年九十二歲で歿す）が講談に演じて喝采を博したものを、瀨川如皐が「與話情浮名横櫛」（別項）に作つた。金鵞はこれを人情本に飜案したのである。篇中の人物は多く脚本から採つてあるが、恐らく同じ脚本から綴られた合卷本「與話情浮名横櫛」（嘉永六年初編刊。梅田舍好文作）を參考にしたであらう。題名の「夜三廻月」に與三郎を利かせ「柳の横櫛」に横櫛お富の異名を利かせたのである。續編を「春宵風見草」（別項）と稱する。【梗概】花水橋（永代橋）に程近い横濱町（横山町）の富豪近江屋與左衞門の後添お浪は、實子の次男與五郎に家督を相續させる下心で、長男與三郎の缺點を見出さうと苦心してゐた。或る正月、與三郎は俳諧の師匠茶醉の許で相弟子のお富と契を結んだ。その後與三郎は病臥して二月も經つ。聞けばお富の父は米相場で失敗し、行方知れずになつてゐた。與三郎は門附けに零落してゐるお富にやつと出逢つた。お富母子を救ふため家から七十兩餘を盜み出したが、途中で盜人のために奪はれた。而も繼母お浪は二百兩を自分で隱し、皆與三郎の所爲と言つて主人に讒言した。父は怒つて與三郎を押込め、外出を許さなくなつた。お富はその内に木更津の穀問屋と稱する赤間源左衞門に救はれたが、源左衞門はそれを恩に着せ、お富を無理に妾にして木更津へ伴つた。赤間は實は博徒の親分で、いつかお富も莫連風となり、横櫛と異名を取るに至つた。與三郎はその後、商用で常陸土浦へ行つたのを幸に木更津の俳友を訪問し、圖らずもお富に逢つた。その夜、與三郎はお富の家へ忍んで行つて、赤間源左衞門と子分に取押へられた。隙を窺つてお富は表の川に投身したが、丁度俳諧師茶醉が夜網打ちに來てゐたのに救はれ、番頭忠助が萬事呑み込み、與三郎の行方をさがす。一方、弟與五郎は、兄へ義理立てして病氣保養と稱し、母の實弟で、下野足利の富豪、持金屋吝右衞門の家へ來てゐて、いつかこの家の娘お古世（こよ）と契を結ぶ。母のお浪は與五郎に跡目相續をさせようと歸宅を勸める。與五郎はお古世への戀と、兄への義理とで遂に家出してしまふ。或る日お富の住居に二人の傳法が尋ねて來た。それは今は蝙蝠と呼ばるゝ安五郎（忠助の弟）と、切られ與三と呼ばるゝ與三郎とである。安五郎が歸つた後で、與三郎は僅かの金でお富故に斬られた傷を示して嬶味を並べる。そこへ現はれた茶醉と番頭の忠助は、お富の今までの樣子を説明し、且つ與五郎家出の次第まで物語る。そこへ又、父與左衞門と安五郎が來る。父はお浪の奸計を知つた由を物語り、安五郎も身の上を懺悔する。そこへ意外にも赤間源左衞門とお浪が現はれた。源左衞門はお富に戀ひし、僞證文で親子を苦しめ、恩を賣つてお富を手に入れんとした事、或る夜七十兩を盜んだ若旦那風の男は與三郎であつた事、お富を表面上妾にしたが男を絶つたと云ふ誓願に何とも出來なかつた事、やがて惡心の角も折れ、子分等には與三郎を斬つたと見せ、七十餘兩を返却して密かに逃がした事、大川端で投身せんとした女を救つたら、それが後悔してゐるお浪であつた事等を物語る。仔細を聞いて喜んだ忠助が、早速湯を持つて來て洗へば、與三郎の顔は往昔に變らぬ美しさとなつた。全く無賴漢となつて父に愛想をつかさうための計であつた。そこで赤間が親元となりお富

は與三郎に嫁し、父は隱居して跡目を與三郎が繼いだ。忠助も隱居し、番頭には改心した安五郎がなり、お勝は與左衞門の養女にして改めて安五郎の妻となり、皆々めでたく富み榮えた。

【解説】與三郎は男ぶりの好いのみでなく、萬事内端（うちは）に如才なく、讀書・算盤・絲竹の道さへ享保十四年正月、江戸中村座「扇恵方曾我」第一番目〔作詞〕村瀨源三郎、但し現行の基準のものは藤本斗文〔曲節〕大薩摩節〔太夫〕大薩摩主膳太夫〔作曲〕通説に五代杵屋喜三郎、杵屋七代）となつてゐるが、杵屋太十郎であらう。【振附】市川栢莚（二代團十郎）と市野谷三五七か。【傳來】曲・振とも傳存。現存曲の基準は男竹勢五郎（たけせごろう）」と題して、竹抜五郎・朝比奈・大根馬等鍬五郎と草稽引を一つにした趣向で、大薩摩の地で演じた。京阪の主なる俳優は初代山下金作、初代嵐雛助、四代市川團藏、三代中村歌右衞門等である。「鍬」は所作事として左程變りはないが、趣向はその時々によつて多樣に作られた。【諸本】大薩摩節正本。江

「ジャン・ジョレス」、雜集「巴里を談る」などの著がある。【批評】三木露風に合流して「未來」同人として發足し、屢々北原白秋一派と對峙した。彼が雜誌「黒猫」で、白秋抹殺の一文を掲げたのに對し、白秋門下の萩原朔太郎が、雜誌「文章世界」で、「三木露風一派の詩を放逐せよ」を應酬した如きが、その例である。大正四年彼が「文章世界」に掲げた「輓近の詩壇を論ず」は、當時理解と公正とを示した詩壇評として、好評を博したものであつた。彼は詩家としてもより以上に詩魂ある鑑賞家・思想家・散文家としての明日を暗示してゐる。〔日夏〕

柳田國男 やなぎだくにを　詩人・民族學研究家
【閲歴】明治八年七月、今の兵庫縣神崎郡田原村に生る。父は松岡操、兄弟八人あり、醫學博

入つたので大成されずに終つた。〔土岐・日夏〕

柳樽 やなぎだる　狂言「口眞似」を見よ。

柳樽 やなぎだる　「俳風柳多留」「繪本柳樽」を見よ。

柳のお柳 やなぎのおりう　「祇園女御九重錦」を見よ。

柳之横櫛 やなぎのよこぐし　人情本　五編十五册
【作者】梅亭金鵞【畫工】梅の本鶯齋（金鵞の實弟）【名稱】夜三廻月と角書がある。【刊行】未詳。金鵞の人情本はすべて無刊記であるが、初編の序に、「未作徒馴ぬ稗官の突出し」と玉屋文魚が述べてゐるから、彼の滑稽本の初作「七偏人」（安政四年）よりは早く、劇に上演された嘉永六年よりは後、即ちその間の三年間の作かと思はれる。【諸本】人情本傑作集（帝國文庫）所收。【題材】天保頃、長唄の三味線彈伊三郎と木更津の博徒の妾お富との事件を時の講釋師で作家を兼ねた乾坤坊良齋（梅澤良助）。

で失敗し、行方知れずになつてゐた。與三郎は門附けに零落してゐるお富にやつと出逢つた。お富母子を救ふため家から七十兩餘を盗み出したが、途中で盗人のために奪はれた。而も繼母お浪は二百兩を自分で隠し、皆與三郎の所爲と言つて主人に讒言した。父は怒つて與三郎を押込め、外出を許さなくなつた。お富はその内に木更津の穀問屋と稱する赤間源左衛門に救はれたが、源左衛門はそれを恩に着せ、お富を無理に妾にして木更津へ伴つた。赤間は實は博徒の親分で、いつかお富も莫連風となり、横櫛と異名を取るに至つた。與三郎はその後、商用で常陸土浦へ行つたのを幸に木更津の俳友を訪問し、圖らずもお富に逢つた。その夜、與三郎はお富の家へ忍んで行つて、赤間源左衛門と子分に取押へられ

の奸計を知つた由を物語り、安五郎も身の上を懺悔する。そこへ意外にも赤間源左衛門とお浪が現はれた。源左衛門はお富に戀ひし、僞證文で親子を苦しめ、恩を賣つてお富を手に入れんとした事、或る夜七十兩を盗んだ若旦那風の男は與三郎であつた事、お富を表面上妾にしたが男を絶つたと云ふ誓願に何とも出來なかつた事、やがて惡心の角も折れ、子分等には與三郎を斬つたと見せ、七十餘兩を返却して密かに逃がした事、大川端で投身せんとした女を救つたら、それが後悔してゐるお浪であつた事等を物語る。仔細を聞いて喜んだ忠助が、早速湯を持つて來て洗へば、與三郎の顔は往昔に變らぬ美しさとなつた。全く無頼漢となつて父に愛想をつかさうための計であつた。そこで赤間が親元となりお富

は與三郎に嫁し、父は隠居して跡目を與三郎が繼いだ。忠助も隠居し、番頭には改心した安五郎がなり、お勝は與左衛門の養女にして改めて安五郎の妻となり、皆々めでたく富み榮えた。
【解説】與三郎は男ぶりの好いのみでなく、萬事内端に如才なく、讀書・算盤・絲竹の道さへ拙からず、取分け風流を好むと云ふ人情本の典型的の主人公であり、お富は中流以上の良家の娘で、やがて零落して傳法肌の女性に變化し、どんな逆境にゐても一人の男を守るところ、これ亦、典型的な女主人公である。惡黨肌の赤間源左衛門・安五郎が、篇中を通じて惡を働き、巻末に近づいて飜然改心するところ、與三郎が繼母の義理で弟に家督を讓らうとするところ、好人物の父與左衛門、忠義な番頭忠助、皆類型的で新味に乏しい作品であるが、金鵞の作の特徴たる筋が比較的簡單で通り、諸所に江戸の下町氣分を描出してゐる。特に藥研堀は彼の生地であり、上野を中心として、下谷摩利支天・御橋・池の端等の夜景の寫生など、彼の師松亭金水の住所附近であつただけ、かなり佳く描かれてゐる。原據の脚本に束縛されてゐるとはいへ、脚色が比較的整ひ、肉のための肉の描寫と云ふ點が比較的尠く、江戸の下町情調の多量に出てゐる點に於て彼の傑作でもあり、人情本中の佳作と見る事が出來る。〔山崎〕

矢の根 やのね　所作事（歌舞伎十八番の一）【本名題】「鏃五郎」「矢の根五郎」【別名題】「大小矢の根五郎」（虎屋壽徳節）「念力矢の根五郎」「分身鏃五郎」「念刀荒人神」「英名鏃五郎」「神通矢の根五郎」（義太夫節）「別家鏃五郎」「鏊分身五郎」「壽根元矢根五郎」等。【初演】享保十四年正月、江戸中村座「扇恵方曾我」第一番目【作詞】村瀬源三郎、但し現行の基準のものは藤本斗文【曲節】大薩摩節【太夫】大薩摩主膳太夫【作曲】通説に五代杵屋喜三郎（杵屋七代）となつてゐるが、杵屋太十郎であらう。【振附】市川栢莚（二代團十郎）と市野谷三五七か。【傳來】曲・振とも傳存。現存曲の基準は元文五年十一月、江戸中村座、二代團十郎（當時海老藏）二度目所演の五代杵屋喜三郎改訂のもの。現行曲は文化四年五月、江戸中村座、市川男女藏所演に九代杵屋六左衛門と後年五代杵屋彌十郎とによつて改められたものである。演出は七代團十郎の所演に據る。【傳統】二代團十郎は四度勤めたが、最後の寶暦八年四月、江戸市村座所演の時「富士太鼓」の趣向で、市村龜藏（後の九代羽左衛門）に矢の根を讓る事にした。龜藏はこの以前にも勤めたが、寶暦十三年二月、市村座「帶曳小蝶昏」では、矢の根から帶引に變る趣向で常磐津節の地で演じた。この系統が後に傳はつた。これより先、初代荻野伊三郎も演じてゐる。九代團十郎は歌舞伎十八番の内として明治十五年十一月と同二十三年七月の新富座で演じた。女方では二代瀬川菊之丞が「女矢の根」の趣向で演じ、初代中村富十郎は「花希紅繪蝶」や「女竹男竹勢五郎」と題して、竹抜五郎・朝比奈・大根馬等鏃五郎と草摺引を一つにした趣向で、大薩摩の地で演じた。京阪の主なる俳優は初代山下金作、初代嵐雛助、四代市川團藏、三代中村歌右衛門等である。「鏃」は所作事として左程變りはないが、趣向はその時々によつて多様に作られた。【諸本】大薩摩節正本。江戸時代音樂通解・歌謡音曲集（日本名著全集）所收。【題材】團十郎贔屓の神田佐柄木町の研師佐柄木彌太郎の家で、先祖より毎年正月の吉例として行はれる矢の根研ぎの儀式の型から思ひ付いたもので、裸馬に乘つて鞭の代りに大根で打つことも、その家に傳へられた先祖の功名譚によつたと傳へる。が、形式は幸若舞曲「和田酒盛」（別項）、宇治加賀掾の「頼朝濱出」にも見えるが、直接原據と思はれるのは、土佐淨瑠璃「風流和田酒盛」で、これに俗説をも參酌し、當時歡迎された當込み・穿ち・駄洒落等をも加へて掛合ぜりふの様式に作り上げたのである。又市松格子の障子の屋體は、竹田人形のカラクリから採つた意匠らしく、これから端を發して後世の「對面」や「草摺引」等の如く曾我の狂言と市松格子の揚障子とは舞臺意匠として不離の約束となつた。疑問なのは正徳から享保初期までとおぼしき漆繪に既に「矢の根」の芝居繪のある事で、地は外記節か壽德節か不明であるが、本曲より以前に演じられた事は確かである。但し大薩摩節としてはこの時が初演であらう。

矢の根（二代市川團十郎所演）

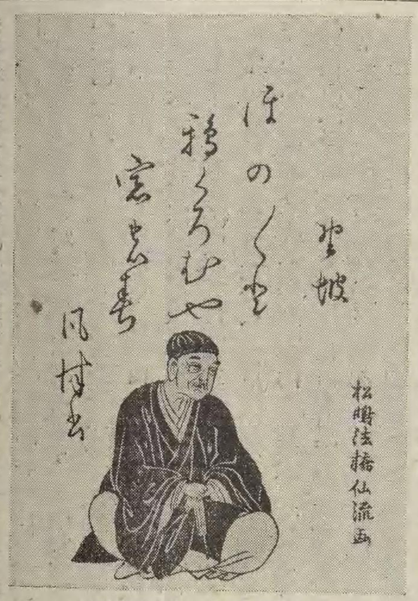
【内容】曾我の五郎（二代市川團十郎）は不倶戴天の父の仇を討たんと一心に矢の根を研いでゐる所へ、大薩摩主膳太夫が年始に來て、七福神や寶船などの問答がある。やがて五郎は春の日永につい睡氣を催して砥石を枕に轉寢をすると、兄十郎（澤村宗十郎）が現はれ、今、敵工藤の館へ虜となつてゐるから危難を救ひくれよと告げて消える。目ざめた五郎は通りかかる馬士から奪つた裸馬に跨り、大根を鞭にし、工藤が館へ一目散に駈けつける。【價値】夢幻的な舞踊劇といふよりも人形芝居化されて、筋よりも形式を見せるのが主眼で、而も勇壯で、御伽化された抒情的興味がある。又大薩摩の最古曲としても、傳存された原始的な荒事の一代表作としても玩味し得られる貴重な作品といふべきである。【備考】非常な大當りで五月迄興行を續け、座本はその利で兩國藥研堀へ衣裳藏を建てて、これを矢の根藏と呼んだ。現今の兩國矢の倉の地名はその名殘であるといふ。
【參考】壽十八番歌舞伎狂言考 石塚豐芥子（新燕石十種第三）○歌舞伎十八番考 山田春塘（演藝書報舊三ノ四）○矢の根瑣談 倒扇子（同上、五ノ一）○矢の根考 町田博三（同上一九ノ八）○矢の根五郎に就いて及び大薩摩としての曲節 町田博三（江戸時代音樂通解）○劇代集 二代櫻田左交 ○歌舞伎十八番大薩摩淨瑠璃矢の根興行年表（大薩摩の代々）宮内壽松○江戸近世舞踊史 九重左近○歌舞伎圖説 守隨憲治・秋葉芳美共編○矢の根の型 林烈浪（舞臺之面影）○歌舞伎十八番の内矢の根（型）金子伴雨（演藝書報五ノ一）〔秋葉〕

矢野龍溪 やのりゆうけい　新聞記者・政治家
【本名】文雄【生歿】嘉永三年十二月一日生れ、昭和六年六月十八日歿す。享年八十二【閲歴】豐後佐伯の藩士矢野光儀の長男。慶應義

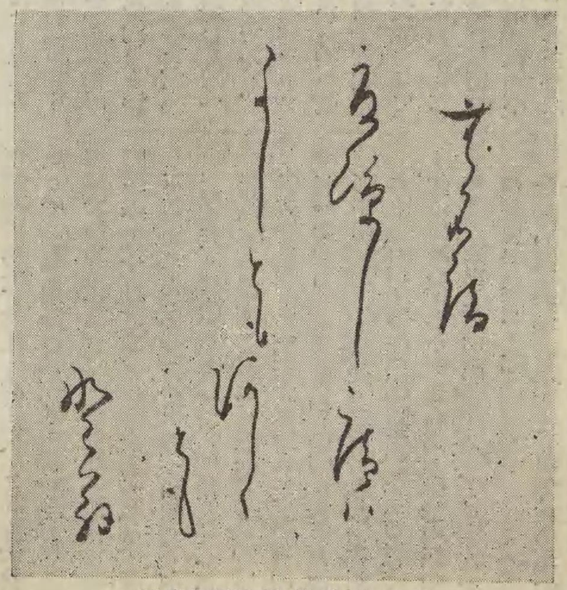
塾に學び、卒業後助教に採用された。次いで大阪慶應義塾の監督となり、更に福島英語學校教授に轉じ、明治十年上京して報知新聞に關係した。次いで福澤諭吉の推薦で、大隈重信の下に大藏省書記官に任用され、進んで太政官小書記官・大書記官兼二等檢査官から、明治十四年統計院幹事となつたが、大隈が野に下ると共に職を辭し、尋いで改進黨の組織に就いて參畫した。この間、報知新聞社に入り、新聞小說に一新生面を拓くべく、「經國美談」(別項)を掲載して盛んに迎へられ、龍溪の文名大に揚がつた。十八年渡歐して新聞事業を視察し、十九年歸朝、再び繪入冒險小說「浮城物語」(別項)を執筆して好評を得た。二十三年豫て待ち望んでゐた議會の開かるゝや、飄然政界を去り、讀書・銃獵などに日を送つてゐたが、彼の才識は永く閑地に居ることを許されず、伊藤博文の推擧により、式部官となつて宮內省に入つた。後二十九年、松方內閣が組織され、大隈重信その外相となるや、彼は拔擢されて駐支公使となつて北京に赴いたが、三十二年に辭してから全く政界を退いてしまつた。その頃から思ひを社會問題に潛めて種々研究するところあり、三十五年七月「新社會」(別項)を公けにし、時の評論家をして「今や彼は社會問題に於て復活したり」と言はしめた。翌三十六年九月「社會主義全集」を公けにした。次いで近事畫報社を起し、國木田獨步を編輯主幹たらしめ、日露戰爭起るや、改題「戰事畫報」を發行し、後には雜誌「新古文林」の外、諸種の出版をしたが、遂に成功を見るに至らなかつた。後、大阪每日新聞社に入つて副社長となり、傍らその紙上に隨筆を書いたこともあつたが、昭和二年十二月副社長の地位を去り、相談役となつた。【著作】前記の外に、「日本文體文字新論」(別項)「英米禮記」「西洋禮記」、その他隨筆集がある。博識と輕妙な文才とから成る彼の隨筆は、明治文學隨筆中の一流に置かれるのみでなく、新聞事業の先進者として、我が國の新聞界に多くの新知識を與へた。〔高須〕

矢野龍溪

野坡(やは) 俳人【姓名】志太氏。本姓竹田氏。通稱彌助。【別號】初號野馬。樗木社・樗子・淺茅生庵、略して淺生庵、無名庵、高津野々翁、略して無名庵野翁、紗方齋・紗帽子・秋草舍・半醉堂・三日庵・百花窓・蘇鐵庵・かゞし庵・當用庵・照笛居士(居士號)【生歿】寬文三年生れ、元文五年(二四〇〇)一月三日歿す。享年七十八【法名】壽元居士【墓所】大阪小橋寺町寶國寺【俳系】芭蕉門【閱歷】越前福井の人で、江戶に出て越後屋兩替店(三井銀行前身)の番頭となつたらしい。京都に屋敷や隱宅も持つてゐた。寶永二年頃越後屋を退いて大阪農人橋近くに移り、樗木社を結び、加賀金澤の用達岩永氏の女を娶り、一女政を擧げた。享保七年に類燒に逢ひ、翌八年高津に淺茅生庵(淺生庵)が成つた。然るに庵が新開地の杭にかゝつたので、五十步ばかり東へ移して元文四年に成り、木曾塚の無名庵の名を遷し、自ら無名庵高津野々翁と稱した。かくて翌年歿したのである。俳歷に於ては、貞享四年の「續虛栗」や「句餞別」に、野馬の號で見えるのが初めである。然るにこの後、業務上の關係からか、元祿六年まで作が見えぬのであるが、元祿七年に、同じ番頭同士の孤屋・利牛と共撰で「炭俵」(別項)を撰し、これが俳諧上の地步を築かしめてゐる。この後連年彼の作が見え、又後度々旅行もしてゐるので、關西九州に門人も多く出來、そのうち大阪の梅從、廣島の風律、筑前の浮風、豐後の馬貞は、野坡の四弟子と呼ばれる高弟である。數度の旅行には各地に芭蕉の碑を建てること十三個所に及び、そのうち、元文元年には天王寺境內に芭蕉の時雨塚(宿り塚)を築き、俳席六行會を開き、それ等の作を輯めた「六行會」(元文三年刊、梅從・風之共撰)も出版された。自身の撰著は少かつたが、後見して出版せしめた集は數多い。【著作】炭俵(別項)○誹諧萬句四之富士(正德五年刊)○放生會(芭蕉三十三回忌追善集、享保十一年刊)○野坡傳書(寫傳)○野坡吟艸前篇(額田風之遺編、息文下續修、寶曆九年刊)○野坡句集(柳帷編、俳諧文庫蕉門十哲集)○蕉門名家句集(野坡の部)安井小洒編。



志太野坡(芭蕉堂歌仙圖)

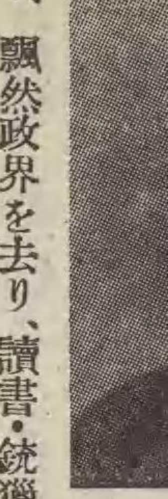


志太野坡筆蹟(松字文庫藏)

【作風】野坡は蕉門十哲(別項)の一人とされ、輕みを以て稱せられるが、併しその輕みは、芭蕉の枯淡な輕みとは似て非なるもので、輕俗ともいふべきものである。それ故、作は多かつたに拘らず、取るに足るべき發句は指を屈する程に過ぎない。作の境地が狹く、俗事俗情に限られた傾きがあり、又晩年になる程理智的になり、ねばりに墮ちて行つてゐる。許六が、「胸中せまくして、我得ざる方少も見えず」(誹諧問答)と評し、嘯山が晩年の作を評して、「蕉翁在世ノ比ノ句トハ遙ニ惡ク覺ユ」(雅文せうそこ)と云つてゐるのは、大體當つてゐると云へる。連句は「炭俵」頃のものは、低調ながらに見るに足るものがあり、附味もその俗才が働いてか巧なものがないではないが、當時は彼の輕俗が芭蕉の輕みに誘導されたのと芭蕉の指導とに依つて一時的の冴えを見せたものと見らるべく、芭蕉歿後は器用さはないではないが墮調となつてゐる。芭蕉が連句に於て「及び難し」(東曾我)と云つたなどいふのは、野坡側のいふことであり、「此叟ノ上ニ立モノ一人ナシ」(蕉門諸生全傳)など云ふのも、野坡側と題して錢占の功德及び方法を說いてゐる。「此卜占は野白兩道の來る來ぬを考へ見るばかりにあらず。一切色道の善惡女の心にいかやうに思ひゐるなと心の底迄をかんがへしる事、ふらすこの酒のかさを見るがごとし。占やうは錢五文兩方の手を合せ其內へ入。信を取て愛染明王の眞言を三返唱へ。暫ふりて左して最も注意すべきものである。

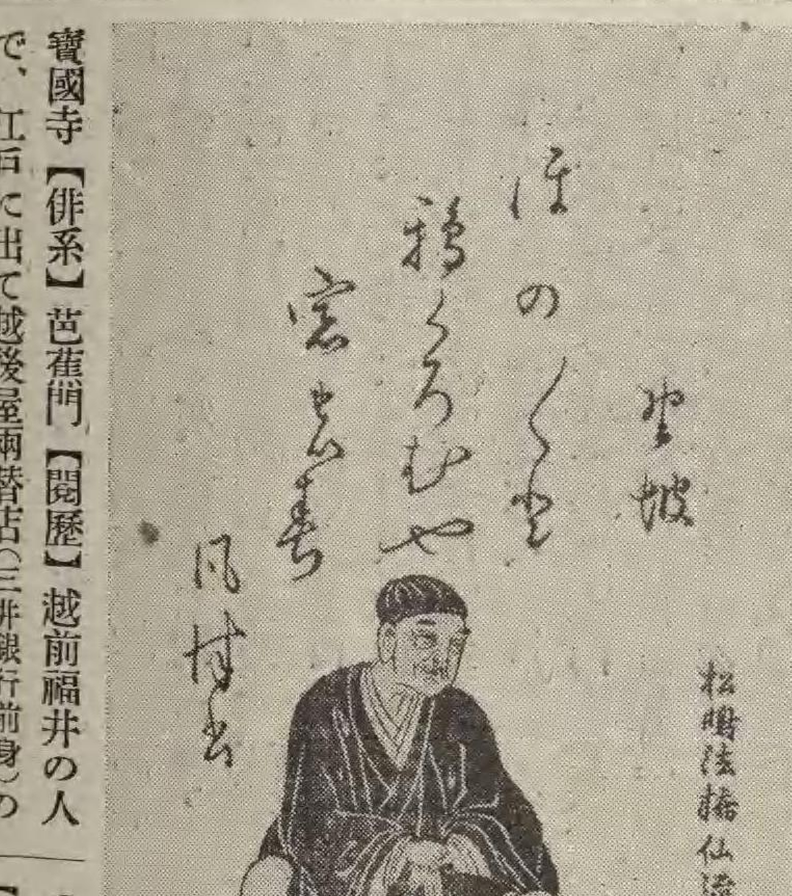
【參考】近代小說史 藤岡作太郎 ○八文字屋物研究 水谷不倒(日本文學講座)○列傳體小說史 同上

夜半亭發句帖(やはんていほつくてふ) 句集 大本二冊 〔吉田〕【編者】砂岡雁宕(いさをかがんたう)【名稱】內題には、「夜半亭句集」とある。【刊行】寶曆五年亥二追善の集を企てる者もなかつた。それは高足たる雁宕・蕪村の二人が、師の歿後間もなく江戶を去つて、地方に流寓してゐたからであらう。然るに寶曆四年六月、師の十三回忌に至り、始めて雁宕の主催で同門の阿誰・大濟と力を協せ、本書が撰ばれたのである。その自序によれば、新たに追悼句集を撰ぶのは困難な



でゐた議會の開かるゝや、飄然政界を去り、讀書・銃獵などに日を送つてゐたが、彼の才識は永く閑地に居ることを許されず、伊藤博文の推擧により、式部官となつて宮內省に入つた。後二十九年、松方內閣が組織され、大隈重信その外相となるや、彼は拔擢されて駐支公使となつて北京に赴いたが、三十二年に辭してから全く政界を退いてしまつた。その頃から思ひを社會問題に潛めて種々研究するところあり、三十五年七月「新社會」(別項)を公けにし、時の評論家をして「今や彼は社會問題に於て復活したり」と言はしめた。翌三十六年九月「社會主義全集」を公けにした。次いで近事書報社を起し、國木田獨歩を編輯主幹たらしめ、日露戰爭起るや、

れ、元文五年(二四〇〇)一月三日歿す。享年七十八【法名】壽元居士【墓所】大阪小橋寺町寶國寺【俳系】芭蕉門【閱歷】越前福井の人で、江戸に出て越後屋兩替店(三井銀行前身)の番頭となつたらしい。京都に屋敷や隱宅も持



志太野坡(芭蕉堂歌仙圖)

ゐる。この後連年彼の作が見え、又後度々旅行もしてゐるので、關西九州に門人も多く出來、そのうち大阪の梅從、廣島の風律、筑前の浮風、豐後の馬貞は、野坡の四弟子と呼ばれる高弟である。數度の旅行には各地に芭蕉の碑を建てること十三個所に及び、そのうち、元文元年には天王寺境內に芭蕉の時雨塚(宿り塚)を築き、俳席六行會を開き、それ等の作を輯めた「六行會」(元文三年刊、梅從・風之共撰)も出版された。自身の撰著は少かつたが、後見して出版せしめた集は數多い。【著作】炭俵(別項)○誹諧萬句四之富士(正德五年刊)○放生會(芭蕉三十三回忌追善集、享保十

の部)安井小酒編。

【作風】野坡は蕉門十哲(別項)の一人とされ、輕みを以て稱せられるが、併しその輕みは、芭蕉の枯淡な輕みとは似て非なるもので、輕俗ともいふべきものである。それ故、作は多かつたに拘らず、取るに足るべき發句は指を屈する程に過ぎない。作の境地が狹く、俗事俗情に限られた傾きがあり、又晩年になる程理智的になり、ねばりに墮ちて行つてゐる。許六が、「胸中せまくして、我得ざる方少も見えず」(誹諧問答)と評し、嘯山が晩年の作を許して、「蕉翁在世ノ比ノ句トハ遙ニ惡ク覺ユ」(雅文せうそこ)と云つてゐるのは、大體當つてゐると云へる。連句は「炭俵」頃のものは、低調ながらに見るに足るものがあり、附味もその俗才が働いてか巧なものがないではないが、當時

は彼の輕俗が芭蕉の輕みに誘導されたのと芭蕉の指導とに依つて一時的の冴えを見せたものと見らるべく、芭蕉歿後は器用さはないではないが墮調となつてゐる。芭蕉が連句に於て「及び難し」(東曾我)と云つたなどいふのは、野坡側のいふことであり、「此叟ノ上ニ立モノ一人ナシ」(蕉門諸生全傳)など云ふのも、野坡側の說に誤られたものであると共に、蕉風に無理解になつた時代の見である。野坡が人氣を得たのは、芭蕉歿後、蕉風の頹廢期に向つたのと、その輕俗調が大衆向・通俗向であつた故と考へられる。

【參考】野翁行狀記(百ヶ日追善集「三日の庵」)後藤梅從記○窓の春(十七回忌追薦集)杏雨編○風俗文選(作者列傳)森川許六○誹諧問答(同上)○誹諧耳底記(細田風之)○蕉門頭陀物語(建部凉袋)○雅文せうそこ(三宅嘯山)○俳家奇人談(竹內玄々一)○蕉門諸生全傳(遠藤日人)○俳林小傳(中村光久)○俳諧人物便覽(三浦若海)○名人忌辰錄(關根只誠)○俳人野坡の研究(鈴木重雅(國語教育昭和四ノ一二、同五ノ三・七・八))○蕉門十哲(志田義秀 岩波日本文學)　〔志田〕

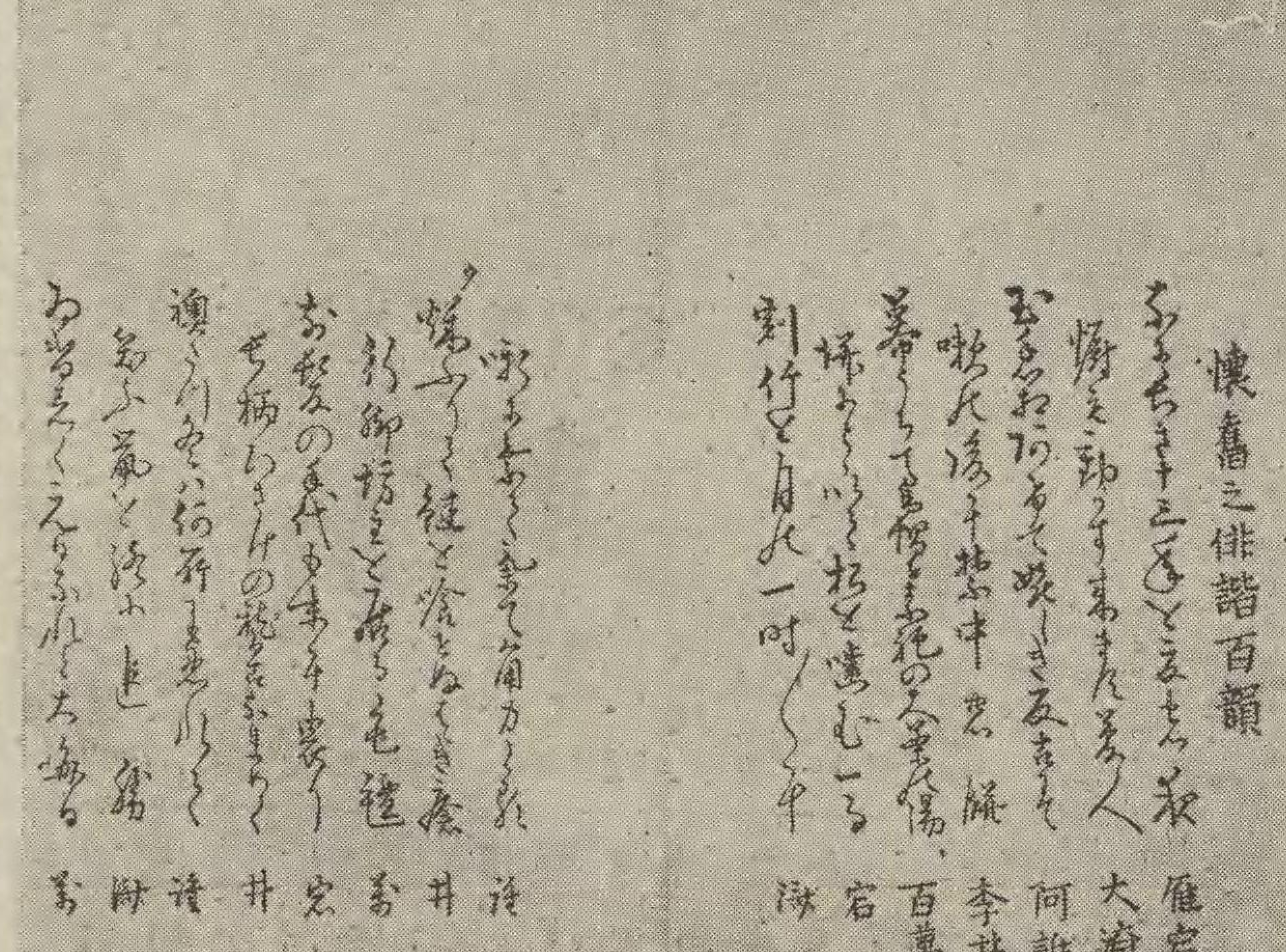
野白內證鑑(やはくないしようかがみ)

浮世草子 橫本五巻【作者】八文字自笑【角書】諸色見通【刊行】寶永七年秋、八文字屋八左衞門板【解說】本書は、「寬濶平家物語」「傾城傳授紙子」(各別項)とともに、寶永七年出板の八文字屋本である。野郎と白人とに關する好色生活を取扱つてゐるもので、純粹の好色物と稱すべきである。本書の構想をみるに、先づ三十二卦の錢占の說明をなし、それから各話を發展せしめてゐる點に著しき特色がある。これは役者評判記の體裁に暗示を得たものと思はれる。即ち一之巻の冒頭に、「一切色道占やうの次第」と題して錢占の功德及び方法を說いてゐる。「此卜占は野白兩道の來る來ぬを考へ見るばかりにあらず。一切色道の善惡女の心にいかやうに思ひゐるなと心の底迄をかんがへしる事、ふらすこの酒のかさを見るがごとし。占やうは錢五文兩方の手を合せ其內へ入。信を取て愛染明王の眞言を三返唱へ。暫ふりて左の手におさめ。右の手にて一錢づつ上より下へならべ。錢の表裏の並を此卦の並と見合、其所々に書顯す文段を見て、心に思ふ事を合せ見るべし」。大體に於てかくの如く云つてゐる。次いで陳私・隱膚・似男・金白・荒婬・喰術・妄夢・線惱・再勤・墮計・意違・筒持・要鬮・巧妨・廻來・案外・極情・變色・化女・二想・僧嫌・互略・鎭鬮・幼謀・譏笑・男撰・艷盜・影量・死靈・絕命・久粧・後榮の三十二卦を擧げ、且つ寬永通寶五枚を圖示して錢占の說明をなし、野郎・白人の遊興の種々相を記してゐる。而して一之巻七話、二之巻七話、三之巻六話、四之巻六話、五之巻六話は、これ等の錢占を出發點として發展せしめてゐる。即ち例として一之巻第一話を採ると、陳私卦に當る京の野郎大臣が密かに伏見撞木町に遊び、一人の太夫を中心にして中京の四二といふ大臣とあらそふ。怒りのまゝにその大臣の室に押入つてみたところ、それは自分の客であつたといふやうな皮肉な筋である。また最後の五之巻第六話の後榮卦に當る中京の二吉といふ大臣が遊興の餘り勘當され、愛人の遊女とともに落魄してゐたが、後その遊女の眞實に親も感心して、そのため勘當を許され、家產を讓られて榮えたといふ筋である。この一篇は構想に於て甚だ凡ならぬものがあり、表現も亦簡にして、よく好色生活の委曲を盡し、八文字屋出板の好色物として最も注意すべきものである。

【參考】近代小說史(藤岡作太郎)○八文字屋物研究(水谷不倒(日本文學講座))○列傳體小說史(同上)　〔吉田〕

夜半亭發句帖(やはんていほつくてふ)

句集 大本二冊【編者】砂岡雁宕(いさをかがんたう)【名稱】內題には、「夜半亭句集」とある。【刊行】寶曆五年亥二月、江府松葉軒萬屋淸兵衞刊。【諸本】中興俳諧名家集(俳書大系)所收。【由來】夜半亭巴人が歿するや、京都では遺弟望月宋屋が主となつて直ちに追悼集「西の奥」を撰び、次いで三回忌には「手向の墨」、七回忌には「結び水」、十三回忌には「明の蓮」を編して追福の志を致したのに、江戸の門人の間ではこれまで全く



夜半亭發句帖(松宇文庫藏)

追善の集を企てる者もなかつた。それは高足たる雁宕・蕪村の二人が、師の歿後間もなく江戸を去つて、地方に流寓してゐたからであらう。然るに寶曆四年六月、師の十三回忌に至り、始めて雁宕の主催で同門の阿誰・大濟と力を協せ、本書が撰ばれたのである。その自序によれば、新たに追悼句集を撰ぶのは困難なので、師の遺稿を出版した由を記してゐる。當時蕪村は京都にあつて遙に跋文を寄せた。これより先、蕪村も亦實は師の遺稿を探つて「一羽烏」を編む志があつたのだが、歷行十年、事成らずにゐた間に雁宕によつてその志は果された譯である。【內容】巴人の發句を四季に類別して收め、その句數は約三百に近い。なほ巻末に、雁宕・大濟・阿誰・李井・百萬の五人で興行した懷舊の百韻一巻と、巴人の門友等の懷舊追悼發句とが十五丁に亙つて載せてある。巴人の句はこの外に洩れたものも頗る多く、若しその拾遺を編んだなら、なほ百句近くを採收する事が出來よう。併し彼の句風は本書によつて十分知り得べく、識見は江戸座の俳人中特に俗を超えてゐたのではあるが句境は遂に時流を脫しなかつたさまが窺はれる。從つて蕪村への影響は全くその識見にあつたので、かの客觀的敍景、古典的趣味の如きは、未だ巴人の作中には見られない。併し

蕪村の句には求められない幽かな淋しい情趣を漂はせた作もないではない。畢竟彼の句は時流を脱する事が出來ない中に、なほ彼の人格から發する眞情味の發露が見られると評すべきであらう。（巴人參照）〔潁原〕

夜半樂（やはんらく）　河東節詞曲集　枕本二册

【刊行】享保十年四月刊。【解説】河東節の詞曲四十九種を集めたもので、沾洲の序に、「河東のぬし鳰鳥のゝち書まじへたるを夜半樂と也」とある。享保四年刊行の「鳰鳥萬葉集」（別項）についで撰ばれたからである。

〔上之卷目錄〕

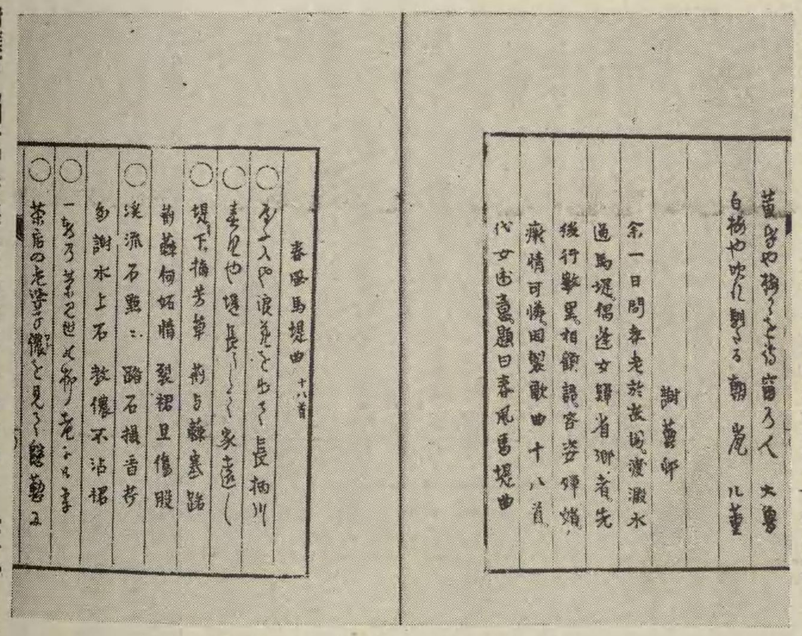
祝言てうし竹　式三獻神樂獅子
神樂じゝ忍びの段　有馬筆
鵲のかし小袖　水上蝶の羽番ひ
帶曳おとこ結び　唐うちわ
吉原八景　狂女草枕
隅田川わたし守上　ふねのうち下
貝づくし　里かぐら
袖わか葉　江の島
はつね聟　山かづら
待宵　ゆき間
袖かゞみ　七種
助六後日道行　天皇忍びの段
景清道行。

〔下之卷目錄〕

蟬丸三段目　同道行
同逢坂山　同笠の段
同さとりの段　同鐘の段
さめの段　竹馬の鞭
扇子八景　與作馬かたの段
傳教祈り　櫻がり
いけにゑ　主上みち行
開帳　日蓮山入
花軍　出産祈り
安宅道行　辨慶勸の段
くわん進帳　櫻姫ねやのつげ
ぜんじ坊せつ法　かぶろ萬歳

なほこの後に、板元の宣傳文を一枚添へてある。佐々醒雪の「俗曲評釋河東」に據れば、本書の外題を河東節と改めて安政二年に發行したものがあるといふ。因みに本書の續編と見るべきものに、「續撰夜はん樂」と題する書二册あり。内容は共通のものは少いが、蘭洲の跋語も刊記も全く同一で、ただ書肆の宣傳文のみを省いてゐる。〔藤井〕

夜半樂（やはんらく）　俳諧集　一册　【編者】與謝蕪村　【刊行】安永丁酉（六年）正月、京橘仙堂刊。【諸本】蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・俳聖



夜半樂（松宇文庫藏）

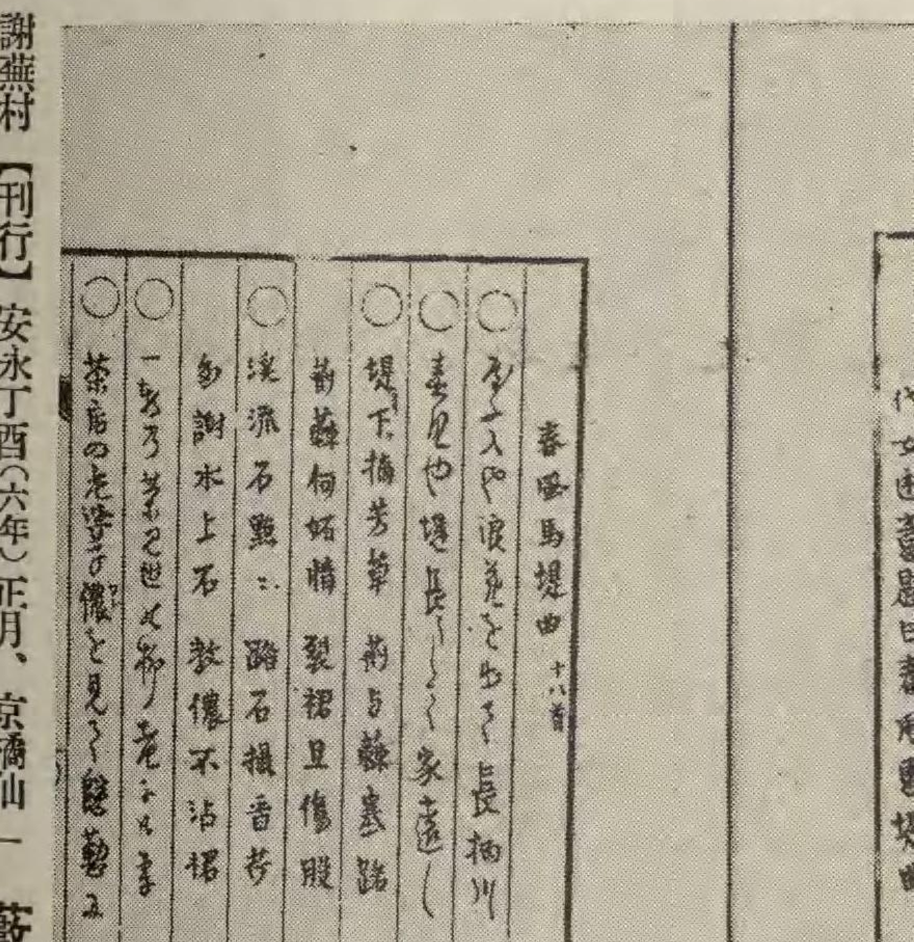
蕪村全集・蕪村全集・蕪村一代集（俳書大系）・蕪村新十一部集所收。【解説】蕪村が安永六年の歳旦帖として出したもので、正月初會の歌仙一卷、春興雜題四十三章、春風馬堤曲十八章、澱河歌三章、老鶯兒一章を收めてある。春風馬堤曲以下は凡て蕪村自身の作で、馬堤曲は彼が一日耆老を故園に訪うて毛馬（けま）の長堤を歩し、偶々數人の若い女に逢うて相語り、遂にその女に代つて意を述べたものである。それは「やぶ入や浪花を出でて長柄川」といふ句に始まり、或は五言の漢詩を交へ、或は「春草路三叉中に捷徑あり我を迎ふ」の如き長句を挿み、一種の新體詩ともいふべき特殊の形式をとつた作で、澱河歌も亦同樣の形式をとつてゐる。かうした作は、彼は既に延享二年結城の早見晋我が死んだ折に、「北壽老仙をいたむ」と題して試みてゐるが、この馬堤曲と澱河歌とは、その構想格調ともに遙に優れ、發句・漢文の長句、いづれも一曲の中に渾然たる融和を保つて蕪村の藝術趣味に統一されてゐる。「なほ蕪村翁文集」（別項）にはこの曲を採錄して、これに蕪村が添へて人に送つた手紙が掲げてある。その制作動機を見るに資すべき點が多い。〔潁原〕

藪かうじ（やぶかうじ）　小説　【作者】德田秋聲　【發表】明治二十九年八月、「文藝倶樂部」。

【解説】處女作といふ以外、取立てていふほどの作ではない。醫師赤木默齋は東京近邊の或る部落の出であつた。昨年妻を亡くしてから介抱人といふ名で雇ひ入れたお槇といふ女と書生の樫本、それに十六になる一人娘のお禮であつた。赤木はしまつやで可なりの金を蓄めてゐた。お禮は標致もよし、優しかつたが、血筋の關係で養子の口がない。で、お槇の考で裁縫の師匠に頼み込んだ。お槇は母のやうに親切だつた。その後、横井といふもう一人の書生が來た。兩親もなく、哀れな身の上の少年だつた。お禮は何時かこの横井と親しくなつてゐた。だが横井はお禮のことで樫本と爭ひ、家出してしまつた。或る夜、お禮は父の口から自分の緣談があることを聞かされた。お禮は承知するとは言はない。お槇が色々と説いても、すげなくはねつけた。その後は勝氣なお槇の態度が變つてお禮に辛く當つた。また緣談が再燃した。お禮は心ならずも謙吉といふ養子を迎へた。お槇はいよ〳〵主婦らしく振舞ふのだつた。一年あまりして赤木は死んだ。その後の消息はさだかでないが、お槇と謙吉の不義に、お禮は發狂して家出したとか。三年經つて若い秀麗な紳士がその家を訪ねた時には、すでに門札が變つてゐて赤木一家の行方は知れなかつた。〔加藤〕

流鏑馬次第（やぶさめしだい）　故實　一卷　【著者】小笠原持長　【成立】奥書に、「雖ニ如レ斯注置一、口傳等不レ可ニ勝計一、於ニ流鏑馬一者、爲ニ作者最初一之間、殊以祕レ之、仍輙不レ能ニ傳授一、然者撰ニ器用一、莫レ作ニ當道之聊爾一、先人堅所ニ誡置一也。能々可レ祕レ之、永享八年八月廿八日」とある。【諸本】群書類從卷四一五武家部所收。【解説】流鏑馬の概要を書いたもので、馬場の

はつね聟	山かづら
待宵	ゆき間
袖かゞみ	七種
助六後日道行	天皇忍びの段
景淸道行。	
【下之巻目錄】	
蟬丸三段目	同道行
同逢坂山	同笠の段
同さとりの段	同鐘の段
さめの段	竹馬の鞭
扇子八景	與作馬かたの段
傳敎祈り	纓がり
いけにゑ	主上みち行
開帳	日蓮山入
花軍	出產祈り
安宅道行	辨慶勸の段



樂（松宇文庫藏）

謝蕪村【刊行】安永丁酉（六年）正月、京橋仙堂刊。【諸本】蕪村曉臺全集（俳諧文庫）・俳聖

仙をいたむ」と題して試みてゐるが、この馬堤曲と澱河歌とは、その構想格調ともに遙に優れ、發句・漢文の長句、いづれも一曲の中に渾然たる融和を保つて蕪村の藝術趣味に統一されてゐる。「なほ蕪村翁文集」（別項）にはこの曲を採錄して、これに蕪村が添へて人に送つた手紙が掲げてある。その制作動機を見るに資すべき點が多い。〔穎原〕

藪かうじ やぶかうじ 小說【作者】德田秋聲【發表】明治二十九年八月、「文藝倶樂部」。

といふ養子を迎へた。お槇はいよ〳〵主婦らしく振舞ふのだつた。一年あまりして赤木は死んだ。その後の消息はさだかでないが、お槇と謙吉の不義に、お禮は發狂して家出したとか。三年經つて若い秀麗な紳士がその家を訪ねた時には、すでに門札が變つてゐて赤木一家の行方は知れなかつた。〔加藤〕

流鏑馬次第 やぶさめしだい 故實 一巻【著者】小笠原持長【成立】奥書に、「雖レ如レ斯注置口傳等不レ可レ勝計於流鏑馬者、爲作者最初之間、殊以祕之、仍輙不レ能傳授、然者撰器用莫作當道之聊爾先人堅所誡置也。能々可レ祕レ之、永享八年八月廿八日」とある。【諸本】群書類從卷四一五武家部所收。【解說】流鏑馬の概要を書いたもので、馬場の模樣、裝束の次第、供者の次第、射手裝束次第、流鏑馬の作法、賴朝時代の神事、射手次第等を記してある。〔石村〕

野暮之穴扒 やぼのあなさがし 黄表紙 三册 十七丁十一圖【作者】市場通笑【畫工】鳥居清長【刊行】安永九年奥村板。天明四年に、「惡癖莫言穴」と改題再摺。

【梗概】（一）將棊を差して喧嘩をする野暮。（二）蒔繪の羅宇の大煙管を通人ぶつて見せびらかす野暮。（三）芝居見物に行き衣裳を度々かへてゐて芝居を見ない野暮。（四）蕎麥を茶で喰ふ和尚の野暮。（五）下帶を見せびらかす女の野暮。（六）遊里で隣座敷と張合ふ野暮。（七）本田頭で白い飯を食ひたがる野暮。（八）喰ひくらで勝つ野暮。（九）寶引を見てゐる野暮。（一〇）金持を野暮と言はば野暮ほど良いものはない。少しづつたのしみもして壽命を長くするが肝要。

【解說】世間から敎訓の通笑と呼ばれてゐるが、彼は初めは敎訓を目的としなかつた。初めは通を目標とし、後年も通・遊里方面に屢々題材を求めてゐる。通笑の作品を通覽すると遊里の方面から題材を得たものが最も多い。本書は通笑が本來の態度の作品として注意すべきもので、「大通人穴扒」（通笑作、安永八年刊）の後をうけてゐる。「大通人穴扒」は彼の通の論として、乏しい修養の底をはたいて衒學的態度をとり、對象を全く大人としてゐるのであるが、本書はそれをやゝ子供に向けて移すが如く、抽象的の說明を避けて具體的に記述してゐる。序文の如きも、初め「古今集」の序に擬して大人に讀まれるものを記し、次に子供向の序文を添へてゐることも珍しい。內容の十說話は小噺風で、野暮の弱點を辛辣に刳り得たものとは言へず、寧ろ作者のかゝる態度が半可通で、この種の作品に努力するほど、不似合さを暴露する。通笑のかゝる通人めかした作品に限り、文章がぽつ〳〵と切れて意味が通らぬところがある。【史的地位】通笑には本書以前に小噺本として、「はなし雀」（安永四年奥村刊、吟雪畫）、「はなし龜」（安永二年奥村刊、吟雪畫）があり、本書以後には、「今年咄」（天明三年刊、政美畫）、「下司の智惠」（天明八年刊、政美畫）等がある。「野暮之穴扒」は、小噺を黄表紙に取込んだものとして、通笑の黄表紙創作以前を考察する上に、前記の小噺本と共に重要の作品である。〔小池〕

山嵐 やまあらし 洒落本 一册【作者】柳亭種彦【畫工】盈齋北岱【刊行】文化五年【名稱】內題は「やまあらし」、當時の見世物に出た動物に因み、內容のつまらぬためと序に斷つてゐる。【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本大系第十二卷所收。【題材】一部を芝居臺帳に擬し、後半は京傳作「古契三娼」（天明七年）（別項）を脫化したものである。

【梗概】淺草境內水茶屋に休む本町の息子株花兄屋梅太郎、町醫者春夕に逢ふ。彼の馴染春待屋室咲からの手紙が來てゐると聞き、春夕の新寺町の宅へ行つて受取つて讀んだ。室咲は情人梅太郎を店でせかれ、不滿でひそかに逃げ出す途中、淺草田圃の邊で梅太郎と遭ひ、心中せんとする折、俠客に救はれる。かくて兩人は叔父の世話で一緒になる事となり、一時山の宿邊の橫町に鬮つた。其處にはお耶輸と異名をとつた藝者、おなると云ふ魚屋の女房、安遊女あがりなどが居り、皆々集つて喋べり立て、茶わん屋を冷かす。茶わん屋誤つて倒れ、商賣物を皆こはして了つた。

【解說】本書は柳亭種彦唯一の洒落本、その點は歷史的に珍重すべき作品である。全體に筆致が京傳を學び、それ以上に輕佻な點が八文字屋本の弊を繼承してゐる。三章に分つて各結末に落語の下げに似た滑稽を弄してゐるのも、洒落本初期の作を眞似て非なるものである。芝居の臺帳めかしたのは、後に「正本製」（文化十二年）（別項）を出すべき彼の趣味の現はれである。彼の眞面目は合卷本より却つて本書に依り窺知することが出來る。〔山崎〕

山嵐（笹野堅氏藏）

山爭ひ やまあらそひ 傳說【解說】富士と淺間の煙くらべといふことは、近代の歌謠にも時に用ひられる言葉ながら、先づ何よりも解きがたい不審は、富士の御神が久しく淺間大明神として祭られたまふことである。さうして同じ名が信州の方の競爭者、その麓を通る旅人が、富士の噂をするのでさへ忌むといふ山に附與せられてゐるといふことである。古風土記以來對立して、天つ神の寵遇を爭うたといふ常陸の筑波山にも、頂上には淺間大神が祀られてあり、伊豆の雲見の御嶽は富士と仲が惡いと言ひ傳へるにも拘はらず、この山の神も亦淺間明神と稱へられる。或はアサマといふ語に、今は埋沒した特殊の意味があつたのではなからうか。富士はアイヌ語で火のことだといふ解說以上に、この疑問は實際に必要である。神書に大山津見神、二人の姬を、天孫に進らせ、その一方は姿醜きによつて返させたまふことは見えてゐるが（瓊々杵尊參照）、未だ御姉妹の間に嫉み憎みの爭ひがあつたとは傳へて居らぬのに、これを山々の神として拜み仰ぐ人々の中には、必ず御仲らひの永久に睦ましからざることが說かれるのも、これと關聯して何か今一つ前からのいはれがあつたものかと思はれる。伊豆の雲見嶽の淺間は磐長姬を祀ると言へば、富士の木花開耶姬の榮え給ふを、安からぬことに思はれるといふだけならば解るが、同じ半島でも下田富士といふ下田の町の北に在る小山などは、富士山の妹神で、それより更に美しかつた故に駿河の姉神がこれを妬み、顏を見るのを厭うて天城の山を屛風に立てられたとも言つてゐる。察するに山爭ひの傳說は古く、これを女性の神とする信仰も前からあつて、たま〳〵古史の大山祇の記錄と習合した結果が、却つて由なき解說を